

— 茨城県土浦市 —

常名台遺跡群確認調査 神明遺跡（第3次調査）

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集

2002

土 浦 市
常名台遺跡調査会
土浦市教育委員会

— 茨城県土浦市 —

常名台遺跡群確認調査 神明遺跡（第3次調査）

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集

2002

土 浦 市
常名台遺跡調査会
土浦市教育委員会



常名台遺跡群 遠景



神明遺跡 第9号住居跡出土土器



神明遺跡 第3号住居跡出土土器 (左：側面、右：上面)

序

土浦市は霞ヶ浦の西端に位置し、北東に延びる新治台地と筑波稲敷台地の間を縫って流れる桜川の下流に位置する水と緑の豊かな都市です。市内の各所には、この恵まれた風土によって育まれた長い歴史を彩る種々の文化財が、今なお数多く伝えられています。

このたび、市内北部の常名地区の台地上に市総合運動公園の建設が予定されたことから、当該地内に存在する埋蔵文化財の保存につきまして関係機関と協議を行い、遺跡の保存が図られない場所については記録保存のための発掘調査をすることになりました。

この調査によって明らかになりました成果については、専門の研究者のみならず、これからの土浦地域の歴史学習の資料として広く皆様に対してご利用いただけるよう心掛けて行きたいと思えます。併せまして、地域に残された貴重な文化財の保護につきましても、今後とも皆様の一層のご理解をいただきたいと考えております。

結びになりますが、今回の調査にご協力・ご指導いただきました関係各位に心から厚く感謝申し上げます。

土浦市教育委員会
教育長 尾見 彰一

例 言

1. 本書は常名台遺跡調査会が実施した土浦市大字常名に所在する常名台遺跡群の確認調査と同市大字常名字神明2760他に所在する神明遺跡の第3次発掘調査報告書である。
2. 調査は土浦市（担当：都市整備部公園緑地課）から委託を受け、常名台遺跡調査会が実施した。
3. 調査期間は、常名台遺跡群の確認調査が平成13（2001）年8月7日から10月2日まで、神明遺跡第3次調査が平成13（2001）年8月23日から10月19日まで実施した。出土品の整理作業および報告書の作成は、調査終了後、確認調査分を平成13（2001）年11月30日まで、神明遺跡分および全体の取りまとめを平成14（2002）年3月15日まで行った。
4. 常名台遺跡群の確認調査は小川 和博・大淵 淳志（有日考研茨城）が担当し、遺物の整理は小川が行った。神明遺跡の第3次調査は吉澤 悟（桐朋学園短期大学非常勤講師）が担当し、小野 寿美子（筑波大学大学院生）が補佐した。遺物の整理は吉澤が担当し、小野および福田 礼子（上高津貝塚ふるさと歴史の広場埋蔵文化財調査臨時職員）、窪田 恵一（常名台遺跡調査会調査員）、赤坂 亨（筑波大学大学院生）がこれを補佐した。写真撮影は、遺構・遺物ともに各調査担当者が行った。全体の総務・統括は石川 功（上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長）、報告書の編集は吉澤が行い、小野がこれを補佐した。

報告書の原稿執筆分担は以下の通りである。

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯 石川 功

第2節 調査日誌抄 吉澤 悟

第2章 周辺の環境 吉澤 悟

第3章 常名台遺跡群確認調査 小川 和博

第4章 神明遺跡第3次調査

第1節 調査の方法 吉澤 悟

第2節 遺跡の概要 吉澤 悟

第3節 基本層序と地質環境 窪田 恵一

第4節 遺構と遺物

石器にかかわる部分 窪田 恵一

縄文土器にかかわる部分 福田 礼子

上記以外の部分 吉澤 悟・小野 寿美子

遺物観察表 小野 寿美子

第5節 まとめ 吉澤 悟

第5章 総括 石川 功

付 編

1. 神明遺跡の地点貝塚と粘土採掘坑について 吉澤 悟

2. 神明遺跡出土遺物の考察 赤坂 亨

3. 常名台地における遺跡の消長 吉澤 悟

5. 遺跡の航空写真および全体図の作成は、(株)シン技術コンサルに依頼した。

6. 調査および報告書の作成にあたり、下記の諸氏または諸機関のご協力・ご教示を賜った。記して謝意を表したい。(50音順・敬称略)

伊丹 徹、茨城県教育委員会、茨城県県南教育事務所、川西 宏幸、小玉 秀成、(株)シン技術コンサル、清野 陽一、大栄測量(株)、(有)大勇建設、田尾 誠敏、立花 実、土浦市都市整備部公園緑地課、土浦市文化財保護審議会、

西川 修一、西相模考古学研究会、橋本 勝雄、土生田 純之、常陸・相模交流研究会、前田 潮、箕輪 健一、
桃崎 祐輔、諸星 政得

7. 本報告書に関わる出土品および記録図面・写真などは、一括して上高津貝塚ふるさと歴史の広場が保管している。
なお、記録や遺物の整理・保管に際しては、常名台遺跡群確認調査にU T、神明遺跡第3次調査にU S 3という略号を与えている。

常名台遺跡調査会組織

〔 役 員 〕

会 長	須 田 直 之 (土浦市文化財保護審議会長)
副 会 長	五 頭 英 明 (土浦市教育委員会教育次長)
理事 (事務局担当理事)	岩 沢 茂 (土浦市教育委員会文化課長)
理 事	飯 沼 正 勝 (土浦市都市整備部建築指導課長)
理 事	大 塚 博 (土浦市文化財保護審議会委員)
監 事	土 肥 敏 郎 (土浦市教育委員会教育総務課長)
監 事	山 本 順 一 (土浦市監査事務局長補佐)
事務局長	来 栖 稔 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場館長)
事務局次長	加 藤 寛 治 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場主査兼係長)
事務局員	北 山 敏 道 (土浦市教育委員会文化課課長補佐)
事務局員	黒 澤 春 彦 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場主幹)
事務局員	関 口 満 (上高津貝塚ふるさと歴史広場主幹)
事務局員	比 毛 君 男 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場主事)
事務局員兼出納員	石 川 功 (上高津貝塚ふるさと歴史の広場係長)

〔 調 査 職 員 〕

主任調査員 (確認調査担当) 小 川 和 博 (有)日考研茨城
主任調査員 (確認調査担当) 大 淵 淳 志 (有)日考研茨城
主任調査員 (発掘調査担当) 吉 澤 悟 桐朋学園短期大学非常勤講師

調査参加者 (50音順)

〔 現 地 調 査 〕

主任調査員 大淵淳志、小川和博、吉澤 悟
調 査 員 小野寿美子、窪田恵一
作 業 員 新 清、飯村二美、石黒 勇、石浜敏子、市川律子、海老原龍生、大久保敦子、大坪美知子、
小野三郎、菊田真代、木本雄一、小堀真二、小松崎廣子、酒井悦子、坂本 圭、佐藤美子、
島田修哉、竹村一夫、土屋数馬、露久保三郎、富島繁、友部政夫、永田賢吾、中嶋 實、
中野富美子、沼尻久子、長谷川はるみ、長谷部裕子、平江幸子、藤崎雅世、矢口なか、
吉島はなよ、吉田芳子
事 務 員 鈴木ひと美

〔 整 理 作 業 〕

主任調査員 大淵 淳志、小川和博、吉澤 悟
調 査 員 赤坂 亨、小野寿美子、窪田恵一、高野麻希、福田礼子
作 業 員 新井栄子、飯村二美、石山春美、遠藤啓子、大久保敦子、大坪美知子、大淵由紀子、小貫徹也、
小松崎廣子、酒井悦子、高野さち、中野富美子、長嶺道子、長谷川はるみ、長谷部裕子、
浜田久美子、吉成博治







凡 例

1. 「常名台遺跡群」という名称は、運動公園建設予定地内に分布する5つの遺跡の総称として、今回新たに設けたものである。これに含まれる遺跡は、西谷津遺跡、北西原遺跡、神明遺跡、山川古墳群、弁才天遺跡の5つである。
2. 常名台遺跡群の確認調査にあたっては、日本平面直角座標第IX系を基に、 $X=11,500\text{m}$ 、 $Y=31,800\text{m}$ の交点を基準点として、南北20m間隔でトレンチを設定している。第3章確認調査の挿図中のX/Y値は、この座標に準拠したものである。
3. 確認調査にあたり、トレンチの設定は現地形や土地利用状況などに応じて最低限の変更を行っている。当初計画では1から22番までと、いろは順のイからホまでの計27本のトレンチを予定していたが、開削に適さない現況を踏まえて4本を削り、また1本のトレンチを分断してa・b・cの枝番号を付したものもある。結果、トレンチ番号に欠番を生じているが、整理の便宜を考え当初計画の番号を踏襲することにした。

4. 遺構の略称に使用した記号は以下の通りである。

竪穴住居跡：S I 土坑：S K 溝：S D 掘立柱建物跡：S B その他の遺構：S X
攪乱：K ローム塊：L B 水系レベル：L

5. 遺構・遺物の実測図中の表示は以下の通りである。

トレンチ内の遺構  炉跡  焼土（炉跡以外） 
繊維混入土器  内面黒色処理  釉 

上記以外は注釈を付して任意の表示を行った。

6. 遺構・遺物の記述は以下を原則とした。

- 1) 水系レベルは海拔高度(m)を示す。
- 2) 遺物番号は本文、挿図、写真図版とも一致する。
- 3) 第3章 確認調査の縮尺は、トレンチ平面図が1/300、土層断面図が1/50、遺物は1/4で示し、発掘を行った14、17トレンチの遺構は1/40で表示した。
- 4) 第4章 神明遺跡の縮尺は、竪穴住居跡や土坑が1/60、溝が1/100と1/50、遺物は1/3を基本としたが、必要に応じてスケールを付して縮尺を変えている。
- 5) 遺構の「主軸方向」は、竪穴住居跡の場合は東西2つの支柱穴間を等分する軸線とし、それ以外の遺構は左右対称となる長軸をそれに充てている。表記は、その主軸が座標軸からみてどの方向に振れているかを角度で示した（例：N-39° -W）。
- 6) 遺物の観察表の法量は、() が現存値、[] が復元値を表す。胎土の表記は、肉眼観察の結果確認できた鉱物のみを記し、含有量は相対的な差を主観的に示したものである。
- 7) 土層や遺物の色調は、『新版標準土色帖』17版（小川正忠・竹原秀雄編著 1996 日本色研事業株式会社）を使用した。

7. 付図「常名台遺跡群全体図」は、土浦市常名地区地形平面図（平成3年3月作成）を原図にして、これまで実施してきた個々の発掘調査の全体図を合成して作成したものである。これには未報告の調査区も含まれているため、暫定的な性格をもつことを明記しておく。正式な報告書の発行に際しては変更箇所があり得ること、また本書の記述もその点に関して修正される可能性があることをあらかじめ理解されたい。

目 次

口絵 常名台遺跡群 遠景 (カラー)	
神明遺跡第9号住居出土 土器 (カラー) ・ 第3号住居出土 土器 (カラー)	
序	
例言	
凡例	
目次 (図版・写真・表目次を含む)	
第1章 調査の経緯	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査日誌抄	2
第2章 周辺の環境	4
第1節 地理	4
第2節 歴史	6
第3章 常名台遺跡群確認調査	11
第1節 調査の方法	11
第2節 確認された遺構について	11
第3節 確認トレンチの成果	13
第4節 遺構調査	45
第5節 まとめ	56
第4章 神明遺跡第3次調査	67
第1節 調査の方法	67
第2節 遺跡の概要	68
第3節 基本層序と地質環境	70
第4節 遺構と遺物	72
1. 竪穴住居跡	72
2. 土坑	107
3. 溝	127
4. その他の遺構	135
5. 中世ピット群	141
6. 拡張区	142
7. 埋没谷	144
8. 遺構外出土遺物	146
第5節 まとめ	161
第5章 総括	163
付 編	
1. 神明遺跡の地点貝塚と粘土採掘坑について—第6・7・8号土坑の性格をめぐって—	165
2. 神明遺跡出土遺物の検討—古墳時代前期の土器を中心に—	173
3. 常名台地における遺跡の消長	181

挿図目次

第1図	周辺地形と調査区設定図	3
第2図	周辺遺跡の位置	5
第3図	常名台遺跡群トレンチ配置状況	12
第4図	台地主要部トレンチ配置状況	14
第5図	1・4a・5bトレンチ実測図	15
第6図	1トレンチ第1・2・3号住居跡およびトレンチ内出土遺物 実測図	17
第7図	4トレンチ第1号住居跡出土遺物実測図	18
第8図	5bトレンチ出土遺物実測図	19
第9図	6トレンチ出土遺物実測図(1)	20
第10図	6・7・8a・8b・8cトレンチ実測図	21
第11図	6トレンチ出土遺物実測図(2)	23
第12図	7トレンチ出土遺物実測図	24
第13図	8aトレンチ出土遺物実測図	25
第14図	8b・cトレンチ出土遺物実測図	26
第15図	9a・9b・10a・10c・11aトレンチ実測図	27
第16図	9aトレンチ出土遺物実測図	29
第17図	9bトレンチ第1号住居跡および第1号土坑確認状況と出土 遺物実測図	30
第18図	9bトレンチ出土遺物実測図	31
第19図	12a・12b・13a・13bトレンチ実測図	32
第20図	14a・14b・15w・15aトレンチ実測図	34
第21図	15b-1・15b-2・16a・拡張1トレンチ実測図	35
第22図	10a・11a・12a・12b・13b・14b・15w・15b・15cトレンチ 出土遺物実測図	37
第23図	17w・17a・拡張2トレンチ実測図	38
第24図	18b・19a・19b・20a・20bトレンチ実測図	40
第25図	16a・拡張1・17w・17a・拡張2・20b・21aトレンチ出土遺物 実測図	42
第26図	21a・22・イ・ロ・ホa・ホbトレンチ実測図	43
第27図	14aトレンチ遺構配置図	45
第28図	14aトレンチ第1号住居跡実測図	46
第29図	14aトレンチ第1号住居跡遺物出土状況図	47
第30図	14aトレンチ第1号住居跡出土遺物実測図(1)	48
第31図	14aトレンチ第1号住居跡出土遺物実測図(2)	49
第32図	14aトレンチ第1号土坑および出土遺物実測図	50
第33図	17wトレンチ遺構配置図	51
第34図	17wトレンチ第1号土坑および出土遺物実測図	52
第35図	17wトレンチ第2号土坑実測図	53
第36図	17wトレンチ第2号土坑出土遺物実測図	54
第37図	17wトレンチ第3・4号土坑および出土遺物実測図	55
第38図	グリッド設定図	67
第39図	神明遺跡第3次調査区全体図	69
第40図	基本層序(観察地点C1 Grid)	71
第41図	第1号住居跡実測図	72
第42図	第1号住居跡出土遺物実測図(1)	73
第43図	第1号住居跡出土遺物実測図(2)	74
第44図	第2号住居跡実測図	74
第45図	第2号住居跡出土遺物実測図	76
第46図	第3号住居跡実測図	78
第47図	第3号住居跡遺物出土状況図	79
第48図	第3号住居跡出土遺物実測図(1)	80
第49図	第3号住居跡出土遺物実測図(2)	81
第50図	第4号住居跡実測図	84
第51図	第4号住居跡炉・貯蔵穴断面図	85

第52図	第4号住居跡出土遺物実測図	86
第53図	第5号住居跡実測図	88
第54図	第5号住居跡出土遺物実測図	88
第55図	第6号住居跡実測図	89
第56図	第6号住居跡出土遺物実測図	90
第57図	第7号住居跡実測図	91
第58図	第7号住居跡出土遺物実測図	92
第59図	第8号住居跡実測図	93
第60図	第8号住居跡出土遺物実測図	94
第61図	第9号住居跡実測図	97
第62図	第9号住居跡出土遺物実測図	98
第63図	第10号住居跡実測図	100
第64図	第10号住居跡炉断面図	101
第65図	第10号住居跡出土遺物実測図(1)	102
第66図	第10号住居跡出土遺物実測図(2)	103
第67図	第10号住居跡出土遺物実測図(3)	104
第68図	第1・2・3・4・5号土坑実測図	108
第69図	第2・4・5・6号土坑出土遺物実測図	109
第70図	第6・7・8号土坑実測図	112
第71図	第7・8号土坑土層断面図	113
第72図	第7号土坑出土遺物実測図	115
第73図	第8・9号土坑出土遺物実測図	118
第74図	第9・10・11・12・13・14・15号土坑実測図	120
第75図	第16・17・18号土坑実測図	123
第76図	第16号土坑出土遺物実測図	124
第77図	第19・20・21号土坑実測図	125
第78図	第1・2・3・4号溝実測図	128
第79図	第5・7・8号溝実測図	130
第80図	第7号溝出土遺物実測図	131
第81図	第6号溝実測図(1)	132
第82図	第6号溝実測図(2)	133
第83図	第6号溝出土遺物実測図	134
第84図	屋外炉および竪穴状遺構実測図	137
第85図	整地遺構および竪穴状遺構出土遺物実測図	138
第86図	中世ピット群・拡張区実測図	139
第87図	拡張区出土遺物実測図	143
第88図	埋没谷および整地遺構実測図	145
第89図	遺構外出土縄文土器実測図(1)	148
第90図	遺構外出土縄文土器実測図(2)	149
第91図	遺構外出土縄文土器実測図(3)	150
第92図	遺構外出土縄文土器実測図(4)	151
第93図	遺構外出土石器実測図(1)	152
第94図	遺構外出土石器実測図(2)	153
第95図	遺構外出土土器・陶器・他実測図	154

表目次

第1表	確認調査出土遺物観察表(縄文)	57
第2表	14a・17wトレンチ発掘調査出土遺物観察表	61
第3表	確認調査出土土製品観察表	63
第4表	確認調査出土石器観察表	63
第5表	確認調査出土遺物観察表(古墳時代以降)	64
第6表	遺構外出土縄文土器観察表	155
第7表	遺構外出土縄文土製品観察表	158
第8表	遺構外出土遺物観察表(古墳時代以降)	159

写真図版目次

- PL.1 試掘調査風景、1トレンチ北部遺構確認状況・同南部遺構確認状況、5トレンチ遺構確認状況、6トレンチ遺構確認状況、7トレンチ遺構確認状況、8トレンチ遺構確認状況
- PL.2 9bトレンチ第1号土坑・同第1号住居跡、10aトレンチ遺構確認状況、11aトレンチ遺構確認状況・同ピット9、13bトレンチ遺構確認状況・同埋没谷土層確認状況、17wトレンチ第1号土坑
- PL.3 17wトレンチ第2号土坑・同第3号土坑、19aトレンチ遺構確認状況、19bトレンチ遺構確認状況、20bトレンチ遺構確認状況、21aトレンチ遺構確認状況、イ-トレンチ遺構確認状況
- PL.4 14aトレンチ第1号住居跡完掘状況・同セクション・同遺物出土状況
- PL.5 5トレンチ出土土器、6トレンチ出土土器、7トレンチ出土土器
- PL.6 8aトレンチ出土土器、8b・cトレンチ出土土器
- PL.7 9cトレンチ出土土器、14aトレンチ第1号住居跡出土土器(1)(2)
- PL.8 14aトレンチ第1号住居跡出土土器(3)、17wトレンチ第2号土坑出土土器(1)(2)
- PL.9 神明遺跡第3次調査区全景とその周辺地
- PL.10 調査区内東部遺構確認状況(北より)、調査区内西部遺構確認状況(北より)、基本層序、埋没谷層序・同左拡大及びサンプリング地点
- PL.11 第1号住居跡完掘状況(北より)・同遺物出土状況(南より)・同南東隅遺物出土状況
- PL.12 第2号住居跡完掘状況(西より)、第3号住居跡遺物出土状況(北東より)・同炉跡付近
- PL.13 第3号住居跡貯蔵穴状況(北より)・同西隅付近(南東より)・同同上近影(南西より)
- PL.14 第4号住居跡完掘状況(北より)・同遺物出土状況・同貯蔵穴(北より)
- PL.15 第5号住居跡完掘状況(東より)、第6号住居跡完掘状況(南東より)(南西より)
- PL.16 第7号住居跡床面検出状況(東より)・同掘り方完掘状況・同炉跡断面(南より)・同ピット内遺物出土状況(東より)
- PL.17 第8号住居跡完掘状況(南より)・同遺物出土状況・同北部遺物出土状況(北より)
- PL.18 第9号住居跡床面検出状況(西より)・同遺物出土状況、第10号住居跡完掘状況(北より)
- PL.19 第10号住居跡床面検出状況(北より)・同土層断面(南より)・同炉跡断面(西より)
- PL.20 第1号土坑、第2・3号土坑、第2号土坑遺物出土状況、第4号土坑、第5号土坑、第6号土坑(東より)、第6・7号土坑土層断面(西より)、第7号土坑土層断面(西より)
- PL.21 第6・7・8号土坑(北西より)、第6・7号土坑(東より)、第8号土坑(南東より)・同土層断面、第9号土坑、第9・10・11号土坑、第12号土坑、第13・14・15号土坑
- PL.22 第16号土坑、第18号土坑、第19号土坑、第21号土坑(矢印は旧石器出土地点)、第4号住居跡東壁(矢印は旧石器出土地点)、第20号土坑、調査北東部土坑完掘状況
- PL.23 第1・2・3号溝(北より)、第4・5号溝(北西より)、第6号溝(西より)・同調査区西側土層断面(B-B')・同調査区東側土層断面(E-E')、整地遺構(SX-1)、屋外炉(SX-2)
- PL.24 堅穴状遺構(SX-3)、中世ピット群(西より)、拡張区 柱穴群確認状況(南より)・同左(西より)
- PL.25 第1号住居跡出土遺物
- PL.26 第2号住居跡出土遺物、第3号住居跡出土遺物(1)
- PL.27 第3号住居跡出土遺物(2)
- PL.28 第4号住居跡出土遺物、第5・6号住居跡出土遺物
- PL.29 第7号住居跡出土遺物、第8号住居跡出土遺物
- PL.30 第9号住居跡出土遺物、第10号住居跡出土遺物(1)
- PL.31 第10号住居跡出土遺物(2)
- PL.32 第2・4・5・6号土坑出土遺物、第7号土坑出土遺物、第8・9号土坑出土遺物
- PL.33 第16号土坑出土遺物、第6号溝出土遺物、第7号溝出土遺物、整地遺構(SX-1)・堅穴状遺構(SX-3)出土遺物
- PL.34 遺構外出土縄文土器(1)
- PL.35 遺構外出土縄文土器(2)
- PL.36 遺構外出土縄文土器(3)
- PL.37 遺構外出土縄文土器(4)、遺構外出土石器
- PL.38 遺構外・表土・グリッド出土遺物、拡張区出土遺物

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

現在市内川口町2丁目に設置されている「川口運動公園」は、市民のスポーツ活動の拠点として昭和29（1954）年に完成したものである。その後昭和47（1972）年頃に施設の改修がされているものの、次第に狭隘化及び老朽化等が見られるようになってきた。そこで土浦市では同運動公園の機能更新について検討を重ねてきたが、その結果市北部の常名地区が移転予定地として決定し、平成2（1990）年には『土浦市総合運動公園基本計画報告書』が作成されている。

ところで、本事業予定地内には昭和55～57（1980～82）年に実施された市内遺跡分布調査によって、「弁才天遺跡」「神明遺跡」「北西原遺跡」「山川古墳群」「西谷津遺跡」の5遺跡が存在することが知られていた。本事業の具体化に伴い、事業予定地内の遺跡の広がり等を確認する必要性が生じたために平成2（1990）年試掘調査を実施したところ、これらの遺跡は予定地内の台地上の大半に展開する可能性が高いことが想定された。そのため、工事着手前には大規模な記録保存のための発掘調査が必要であることが確認された。発掘調査については平成5（1993）年度より始められ、平成9（1997）年度までに弁才天遺跡の全体及び北西原遺跡の大半並びに神明遺跡・山川古墳群の一部約7万平方メートルの調査を終了したが、その後景気の退潮に伴う市予算状況の悪化や事業地内の土地所有者との交渉問題等から発掘調査は一時中断した。

平成13（2001）年度に入り、担当課である市都市整備部公園緑地課から事業地内の調査を再開したい旨が教育委員会に打診された。そのため同年4月より教育委員会文化課及び上高津貝塚ふるさと歴史の広場の両者において、今年度調査実施の可否及び調査方法等について検討協議を行った。その結果5月17日の会議において調査の実施が決定し、同22日の公園緑地課を交えた会議によって、今年度の調査は、①未発掘区における遺跡状況の詳細な把握、及び②未調査区の発掘調査の2本立てで行うことが合意された。

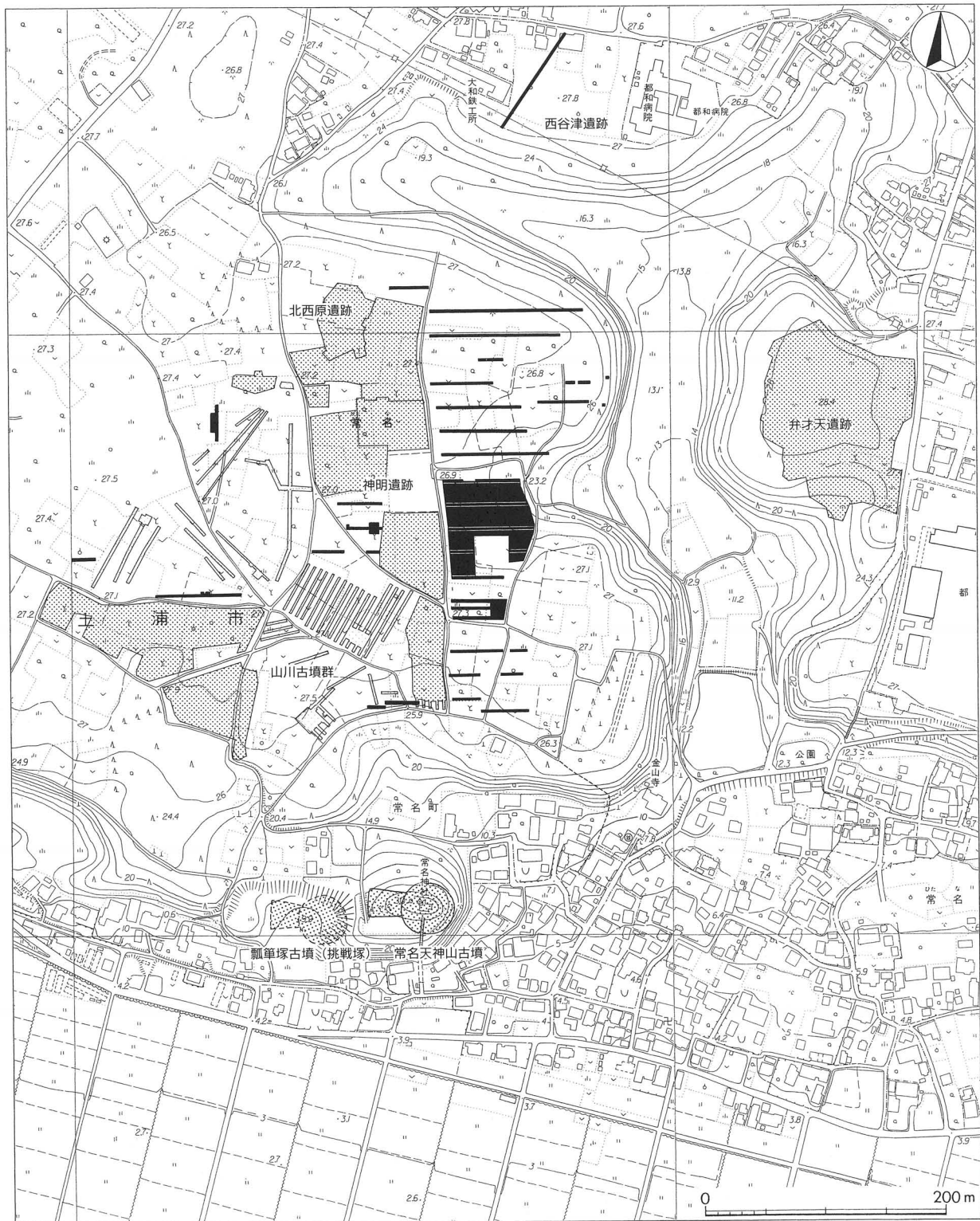
実際の調査については、5月23日付けで公園緑地課長より文化課長に提出された新運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査について（依頼）を受け、「常名台遺跡調査会」を組織して調査に当たることとし、吉澤悟〔発掘調査〕、(有)日考研茨城〔確認調査〕の両氏の快諾のもと調査主任を依頼することとなった。7月4日には調査会を設立し、8月7日より確認調査を開始した。この確認調査の内容を勘案した上で、今年度の発掘調査対象は神明遺跡の一部約4,400㎡とすることが決定したため、8月23日より同地の発掘調査を開始し、9月4日付け土教委発第720号によって文化財保護法第58条の2第1項による埋蔵文化財発掘調査の報告を茨城県教育委員会に報告した。

第2節 調査日誌抄

常名台遺跡群確認調査

神明遺跡第3次調査

8月7日(火)	確認調査開始。12トレンチより開始	
8月11日(土)	お盆休みと台風のため作業中止	
~22日(水)		
8月23日(木)	作業再開	発掘調査を開始
8月25日(土)	12~22トレンチまで終了	
8月30日(木)	7~11トレンチの調査開始	表土除去終了。人力による遺構確認を開始
9月1日(土)	拡張トレンチ1・2を新設	
9月5日(水)		第1・2号住居跡の調査開始
9月13日(木)	イ・ロ、4・5トレンチの調査	第6・7・8号土坑調査開始
9月18日(火)	1トレンチの調査開始	第4号住居跡の調査開始。埋没谷周辺の土坑調査
9月26日(水)	14aトレンチ第1号住居跡の調査開始	
9月27日(木)		第3号住居跡の調査開始
9月28日(金)		第4号住居跡完掘
9月29日(土)	15wトレンチの土坑の調査開始	第10号住居跡の調査開始
10月2日(火)	確認調査終了	
10月3日(水)		拡張区を設定し、柱穴の確認を行う
10月4日(木)		第3号住居跡の遺物取り上げ、完掘
10月6日(土)		中世ピット群の調査
10月12日(金)		第10号住居跡完掘
10月13日(土)		第8号住居跡完掘
10月16日(火)	—————	正午に空撮 ————— 第9号住居跡完掘
10月17日(水)		台風21号のため作業中止
~18日(木)		
10月19日(金)	—————	現場作業終了・機材撤収 —————



第1図 周辺地形と調査区設定図

(黒塗りは本年度調査区、古墳以外のアミカケは既調査区)

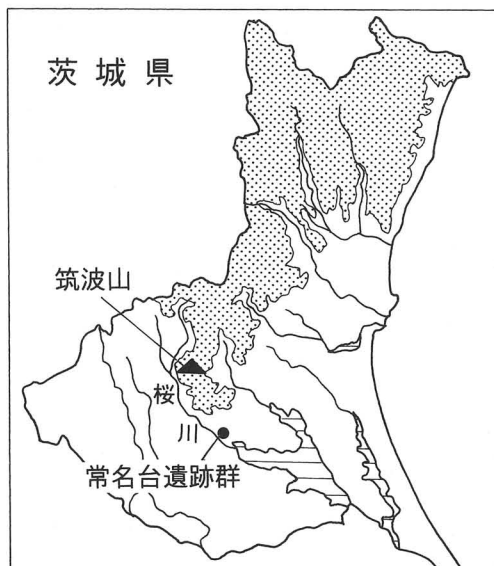
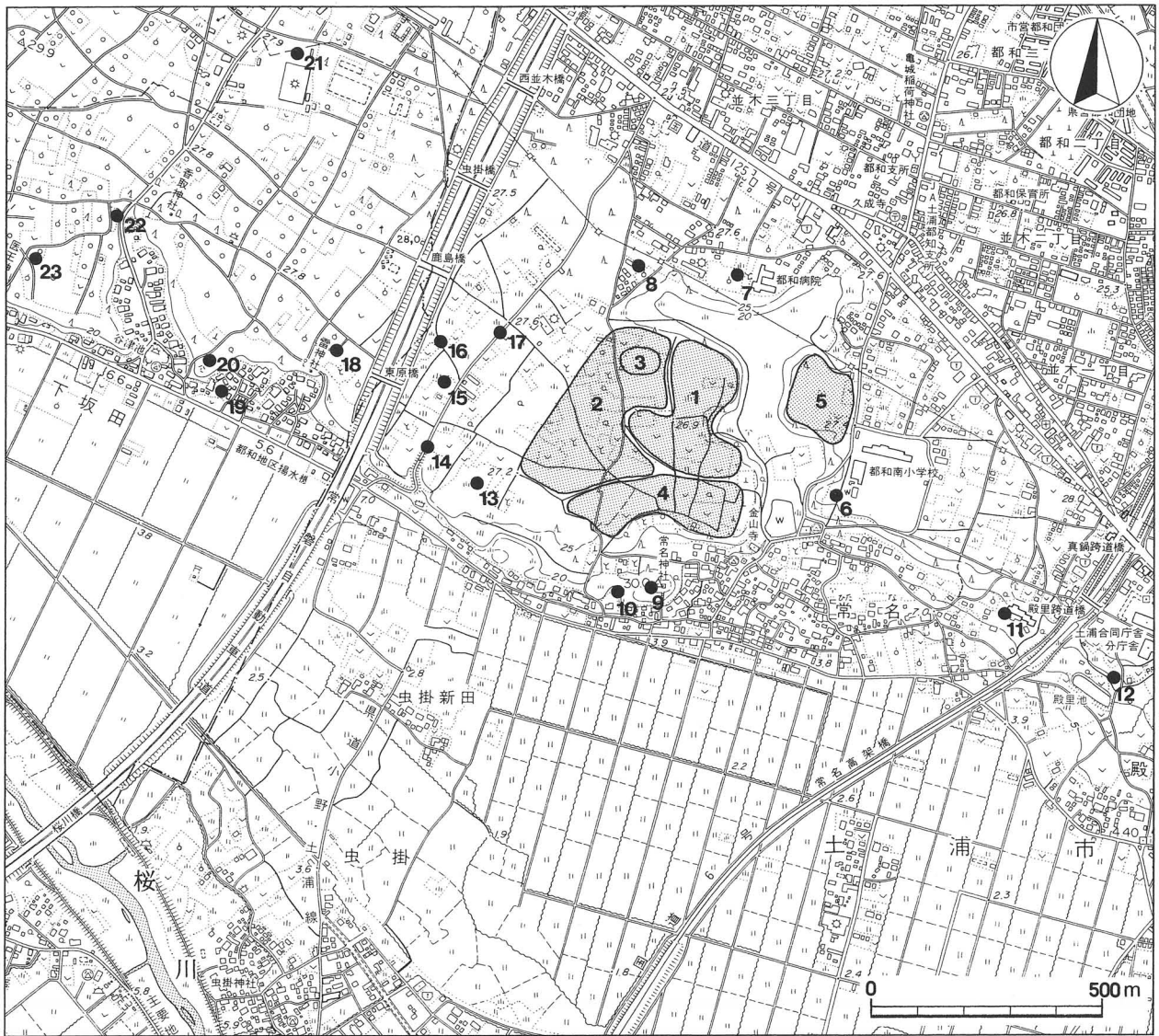
第2章 周辺環境

第1節 地理

土浦市は茨城県南部のほぼ中央、霞ヶ浦の北西岸に位置する。北方に遠く筑波山を仰ぎ、南東には霞ヶ浦の内湾「土浦入り」を見下ろす景観に恵まれている。市域の中央には、筑波・加波山塊の北端（岩瀬町）に源を発し「土浦入り」へと注ぐ桜川が流れており、現在の市街地はその河口付近に広がっている。運動公園建設の予定地となった常名の台地（「常名台」と通称される）は、市街地の北方2.5km、桜川の左岸に位置している。この常名台は、「新治台地」と呼ばれる洪積台地の一部で、筑波山系八溝山塊の南麓から派生し、南東方向に約20km、霞ヶ浦町の東端にまで延びる広大な台地の一角にあたる。地質学的には、南関東の段丘区分で成増面（M1面）に相当する台地である。眼下に流れる桜川の流域は、古鬼怒川が開析した沖積低地で、これを挟んで対岸には現在のつくば市や阿見町が所在する洪積台地「筑波・稲敷台地」が広がっている。

常名台は標高約28m、台地上面はほぼ平坦で、主に畑作地として利用されている。台地の北部は県道やバイパス道が横断しており、新興の住宅地としての賑わいをみせている。一方、台地の南縁は崖ないし急傾斜地となっており、桜川低地との比高差は約20mである。低地から入り込む小規模な谷津が500～800m間隔で並んでおり、その谷筋の傾斜地ごとに「下坂田」、「常名」、「殿里」など旧来の集落が形成されている。中でも地名の元である「常名」は、付近で最も大きな谷津の開口部に位置し、扇形に開かれた傾斜地には旧家が多く建ち並ぶ。この谷津は、集落の背後からさらに台地奥部に向かって延びており、その奥行きは集落域を含めて約700mに及ぶ。谷津の内部には小さな湧水があり、近年まで水田として利用されていたばかりでなく、集落の北部には溜め池も設けられている。

運動公園の建設計画は、こうした南側の旧来の集落と北側の新興住宅地との間に挟まれた台地上、南北600m、東西700mの範囲に予定され、そのほぼ全域が埋蔵文化財の包蔵地となっている。このエリア内の遺跡は、地形や字名から5つの遺跡に分割され、それぞれ神明遺跡、北西原遺跡、西谷津遺跡、山川古墳群、弁才天遺跡と呼んでいる。各遺跡の立地は、Y字状に貫入する谷津を中心にして、それを臨む3つの台地上に分散する態をなす。神明遺跡と北西原遺跡、山川古墳群の3遺跡は西側の台地上に入り組んで隣接し、エリア内の主要部分を占めている。一方、西谷津遺跡と弁才天遺跡は、それらと谷津を挟んで北と東に対峙するかたちで立地している。各々は個別の遺跡として登録され調査されてきたが、景観的には一つに収まるものであり、むしろ有機的な関係をもつ一塊の遺跡群として把握され得る。今般はその観点から「常名台遺跡群」という総称を与える事にした。



番号	遺跡跡	時代
1	神明遺跡 (常名台遺跡群)	縄文・古墳・中世
2	北西原遺跡 (常名台遺跡群)	旧石器・縄文・古墳
3	北西原古墳群 (常名台遺跡群)	古墳
4	山川古墳群 (常名台遺跡群)	古墳
5	弁才天遺跡 (常名台遺跡群)	縄文・古墳・奈良平安
6	天神脇遺跡	縄文・古墳・奈良平安
7	西谷津遺跡 (常名台遺跡群)	古墳
8	西谷津西遺跡	古墳
9	常名天神山古墳	古墳
10	瓢箪塚 (挑戦塚) 古墳	古墳 (湮滅)
11	八幡下遺跡	古墳・奈良平安
12	殿里古墳	古墳
13	羽黒後遺跡	縄文
14	坂の上遺跡	縄文
15	小坂の上遺跡	縄文・古墳
16	中畑遺跡	縄文
17	アラク遺跡	縄文・中世
18	石橋古墳	古墳
19	下坂田館跡	中世
20	釈迦久保古墳群	古墳
21	坂田稻荷山古墳群	古墳
22	下坂田貝塚	縄文・弥生
23	屋敷付古墳	古墳

第2図 周辺遺跡の位置

第2節 歴史

土浦市から霞ヶ浦町にかけて広がる「新治台地」の南縁は、県下でも遺跡密度が非常に高い場所として知られている。それは、ひとえに桜川や霞ヶ浦のもたらす水利や水産物、水運の便などの恩恵に帰するところが大きい。加えて適度な山林や谷津の存在も、バランス良く農林資源を供給し、安定した居住を可能にしていたことと考えられる。土浦市域に限ってみても、この台地南縁には旧石器時代から中近世に至るまで、各時代の遺跡・遺物が豊富に確認されており、特に首長墓級の大型古墳が帯状に分布する様子は、当地の豊かな環境と歴史的重要性を端的に象徴するものである。

常名台周辺における遺跡の有様は、昭和55～57（1980～82）年および平成11・12（1999・2000）年に行われた分布調査と、これまで実施された常名台遺跡群の発掘調査によって詳細が知られるようになった。以下、時代を追ってその概要を記すが、一部未報告の資料やこれまで錯誤されてきた情報も含めての整理であることを断わっておく。

旧石器時代

常名台における最古の遺物は、北西原遺跡（2）や弁才天遺跡（5）で発見されたナイフ形石器群で、約2万7千年前にまで遡る（窪田 2001）。神明遺跡（1）でも今回の第3次調査でナイフ形石器を含む3点の発見があり、常名台遺跡群全体で発見された旧石器の総数は、現時点で剥片類を含めて60点以上となる。未だに遺構の検出はなされていないが、遠からぬ地点で発見される可能性はきわめて高いと期待される。なお、北西原遺跡で発見された石器群の中には、国府型ナイフ形石器と呼ばれる西日本瀬戸内地方の製作技法が用いられた石器も含まれていた。

縄文時代

分布調査で確認された遺跡には、羽黒後遺跡（13）や坂の上遺跡（14）、小坂の上遺跡（15）、中畑遺跡（16）、アラク遺跡（17）などがあり、いずれも前期ないし中期の土器散布地である。発掘調査では、北西原遺跡に中期の住居跡が7軒検出された他、神明遺跡では今回の調査分を含めて中期の住居跡が計6軒、土坑が若干基発掘されている。また、同じく神明遺跡の確認調査によれば、台地の北側部分に中期を主体とする遺構群が確認されており、大規模な集落跡が存在する公算が大きい。なお、昭和50年発行の『土浦市史』によれば、常名地内の字「谷頭」に前期の土器片と貝殻が散布する「常名貝塚」が存在したと報告されている。現在その字名は失われており、正確な地点を特定できないが、およそ神明遺跡内に相当することと考えられる。今回の第3次調査では中期の「地点貝塚」2基を検出しており、付近に相応の貝塚が予想されるところである。他に貝塚としては、新治村域にあたる下坂田貝塚（22）や上坂田北部貝塚、上坂田寺裏貝塚などがある。下坂田貝塚は後期を主体とし、他は前期の貝塚と報告されている（前田 1982、前田ほか 1992）。

以上より、常名台周辺の縄文時代の遺跡は、前期から中期にかけての時期に大きく展開したもので、神明遺跡のあたりがその中核となっていたと推測することができる。後期以降、遺跡の数は激減しており、下坂田貝塚に後期から晩期までの土器が確認される他、神明遺跡や天神脇遺跡（6）などに後期の土器片が若干認められる程度となっている。

弥生時代

弥生時代の居住の痕跡は非常に希薄である。唯一、北西原遺跡で住居跡1軒が確認されている以外は、下坂田貝塚（22）に僅かな土器片が採集されているのみである。後続する古墳時代前期が爆発的に遺構数を増やしているのに対して、この希薄さは常名台における特徴の一つと受け取ることができよう。

古墳時代

古墳時代は、住居跡、墳墓を問わず比較的資料は豊富であるが、前・中・後期以降に分けてみたとき、中期の遺跡は影が薄い感がある。まず常名台遺跡群の中で、現在までに確認された遺構を整理しておくならば、以下のようなになる。

神明遺跡 住居跡9軒（前期）

北西原遺跡 住居跡100軒以上（前期）

北西原古墳群 方墳4基以上（終末期）

山川古墳群 方形周溝墓3基以上（前期）、円墳6基（中期1、他は不詳）、箱式石棺1ヶ所（後期以降）

弁才天遺跡 住居跡29軒（前期・後期・終末期）

確認調査によってさらに検出数の変動はあるが、およそ前期の大集落と後期以降の古墳群が主体であったことは疑いがない。ただし、山川古墳群の中には、前期と思われる方形周溝墓や後期とみられる円墳が少なからず存在している。また、周溝から滑石製模造品と須恵器が出土した円墳（円形周溝墓）が1基あり、唯一中期と判断できる古墳も存在している。よって数の違いこそあれ、古墳は前期から後期にかけて、場所を変えながら台地上に営まれ続けたということになる。

一方、上記の遺跡群に隣接する位置に、常名天神山古墳（9）と瓢箪塚（挑戦塚）古墳（10）が存在する。常名天神山古墳は、測量調査の結果、全長85～90mの前方後円墳で、5世紀前葉頃の築造と推定されている（茂木ほか 1991）。古代の筑波・河内郡域では第2位の規模であり、茨城県内でも前期・中期初頭頃の古墳では有数の規模を誇る。瓢箪塚古墳は、昭和41年の土取り作業によって湮滅してしまったが、『図説土浦市史』には往時の写真と全長74mの前方後円墳であったとの記録が載せられている（時期不詳。写真では比較的高い前方部を有すると見られる）。両古墳は桜川低地を見下ろす台地縁辺部に並んでおり、上記の古墳群や集落はその後背地に広がるかたちになる。常名天神山古墳・瓢箪塚古墳を首長墓とみるならば、常名台遺跡群はその首長を輩出した母集落か、もしくは深い関係をもった集団という見方ができるであろう。なお、両古墳との関連が注目されるものとして、東方4kmの位置にある王塚（前方後円墳：全長84m）と后塚（前方後円墳：全長65m）が挙げられる。常名台と同じ「新治台地」の南縁に並んでおり、典型的な前期古墳の立地が指摘されている（茂木ほか 1991）。古代筑波・河内郡域では最も古い大型墳であり、常名天神山古墳はそれに後続すると考えられている。これらを併せると、少なくとも古墳時代前期から中期初頭頃の当地周辺は、常陸南部の重要な政治的拠点であったと考えられる。

一方、古墳時代中期になると、周知の遺跡はごく僅かになってしまう。先掲の山川古墳群に、滑石製の勾玉模造品と須恵器坏が出土した円墳が1基みられる程度である（比毛 1999）。

後期に入ると、殿里古墳（12）や石橋古墳（18）、屋敷付古墳（旧塚山3号墳）（23）、釈迦久保古墳群（20）など多くの古墳が現われるようになる。屋敷付古墳は17基の円墳で構成される坂田古墳群の中の1墳で、箱式石棺から5体分の人骨と直刀4本、刀子2本、鉄鏃26本、鉄環2個が出土し、6世紀中ごろと報告されている（樋口ほか 1967、岩崎ほか 1986）。殿里古墳は未調査の円墳であるが、北東に約100m程離れた場所に石棺が発見され、2～3体の遺骨と直刀3本が出土したと報告されている（石川ほか 1973）。他にも大正15年の記録であるが、「殿里字這坂の古墳」（現在地不明）から2体分の人骨が掘り出されたという（長南 1928）。おそらく一連の古墳群をなすものであろう。また、殿里古墳の所在する真鍋町内には、「真鍋町台古墳」（現在地不明）と呼ばれる古墳が存在したらしく、昭和30年代に馬形や馬子、琴形（韃か？）埴輪などが出土している（藤田 1972）。さらに同町の土浦工業高校入口脇からは馬具一式を付けた馬形埴輪が出土し

たという（塩谷 1990）。これらから、常名台の東隣には、後期から終末期にかけての古墳群が複数存在していたことが推定できる。常名台遺跡群の中では、上掲の北西原古墳群と山川古墳群内の箱式石棺が調査されている。北西原古墳群は、前期の大集落である北西原遺跡に重なっており、住居跡を壊すかたちで終末期の方墳群が造られている。最大の方墳は一辺約30mの大型のもので、7世紀代の築造とされている（比毛 1999）。山川古墳群内の箱式石棺は、昭和48年に調査され、3体分の人骨と直刀片2片、鉄製細棒2本が出土している（石川ほか 1973）。土器の出土はなかったが、これも7世紀代の古墳であったと推測されよう。集落遺跡については、弁才天遺跡をはじめ、天神脇遺跡（6）や西谷津遺跡（7）、八幡下遺跡（11）などがあり、一部は平安時代まで継続している。

奈良・平安時代

『常陸国風土記』をはじめ、古代の文献に常名の地名は登場していない。現在の土浦市域は、『倭名類聚抄』記載の郡郷名に対照させると、茨城郡、筑波郡、河内郡、信太郡の4郡にまたがることになる。常名台の周辺は、筑波郡清水郷もしくは河内郡大村郷にあたると言われ、『新編常陸国誌』では河内郡内に位置付けている。古代の筑波郡衙は、桜川を約11km遡った現在のつくば市平沢に比定されており、常名台は郡の中心地とはかなり離れた辺縁地となる。むしろ対岸の河内郡衙、つくば市東岡の方が直線的には近い位置にある。いずれの郡にせよ、東に飛び出た不自然なかたちで併合されることになるが、これは桜川の河岸や東海道に接続する地点として当地が重要視されていたためであろう。

常陸国の古代東海道を検討した木下良によれば、曾禰駅から常陸国府に向かう経路は、現在の土浦市下高津から桜川を渡り、常名台の東約1kmにある殿里を抜け、中貫に至る直線路に比定できるという（木下 1996）。現在も殿里に「鎌倉街道」と呼ばれる坂道が残り、昭和36年撮影の米軍の航空写真には直線的な道が確認される。常名台はこの東海道に直接面してはいないものの、徒歩十数分の至便の場所あり、物資や新来文化を享受し易い環境であったと思われる。桜川の渡河や水運などへの関与も想定されるところであろう。

遺跡として知られているのは、弁才天遺跡に奈良から平安時代にかけての竪穴住居跡が58軒、掘立柱建物5棟以上が検出されており、特に6号住居跡からは「和同開珎」が出土している。他に平安時代の土器が出土する遺跡が若干存在するが、規模等は不明である。

中世

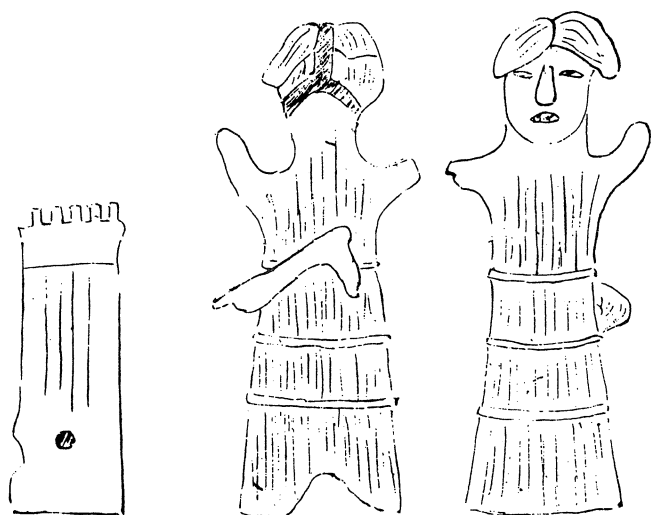
平安後期、当地一帯は南野牧に属し、鳥羽上皇御願寺である安楽寿院の荘園となっていた。平安末期には八条院領となり、常陸平氏本宗家の管掌するところとなる。弘安二（1279）年の田文では、南野牧の公田は千百九十一町余とされており、広大な面積と生産力をもっていたことが知られる。建久の政変（1193年）以降、当地周辺は八田知家を祖とする小田一族の支配下に置かれ、天正十一（1583）年に佐竹氏に敗れるまで、小田氏の勢力拠点の一つとなっていた。現在のつくば市内の小田城を核に、戦国期までには土浦城、木田余城、手野城、常名城などの築城によって桜川流域に防衛網が形成され、菅谷、信太氏ら小田氏旗下の武将たちが各地を支配した。

常名に存在したという常名城については、ほとんど実態が知られていない。城主は菅谷氏で、天正十八（1590）年、佐竹義宣が菅谷弾正治貞を破ったことで廃城化したと言われる（永山 1989）。城は常名台の南、桜川低地にある八幡小社の場所にあったと言われるが、舗場整備が進んだ今日、その郭跡を確認することはできない。また、その前身は台地上にあったとされ、常名台の西にある白幡、羽黒の字名のあたりと推定されているが（土浦市編さん委員会 1975）、これも痕跡をみることはできない。常名の集落の小高い位置にある金

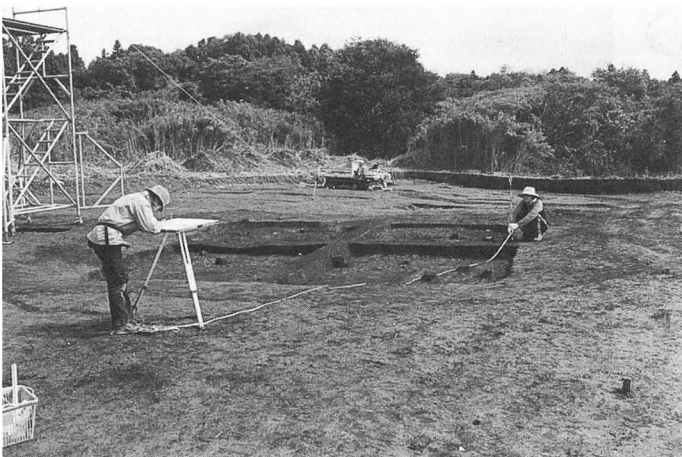
山寺は、元禄頃の「金山寺開基之覚」によれば、「菅谷弾正治貞先祖代々之菩提所」であったとされる（寺嶋 1960）。同寺は永享三（1431）年に元庵禅師によって開山され、当初は臨濟宗寺院であったものが、菅谷氏滅亡と共に零落し、文禄二（1593）年に元祐法印によって再興、真言宗に改まったという。境内には高さ2 m 5 cmの大型五輪塔があり、室町中期頃の作と推定されている。寺の開山よりも古い時期の所作となる。また、常名天神山古墳の前方部には、高さ1 m 37cmの宝篋印塔があり、安土桃山時代頃のものとしてされている。菅谷氏の墓塔とする説もあるが定かではない。いずれの石造物も市指定文化財である。なお、慶應元（1865）年に作られた常名の村絵図が残されているが、城跡らしきものは描かれておらず、常名台は畑地もしくは林地となっていたようである（土浦市史編さん委員会 1974）。

参考文献

石川 良雄ほか	1973年	『殿里台及び常名台遺跡調査報告書』 土浦市教育委員会
岩崎 卓也ほか	1986年 3月	『武者塚古墳』 新治村教育委員会
木下 良	1996年 4月	『古代を考える 古代道路』 吉川弘文館
窪田 恵一	2001年10月	『第7回企画展 土浦の旧石器』 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
塩谷 修	1990年 1月	『第3回特別展示図録 常陸のはにわー埴輪が語る古墳時代の常陸ー』 土浦市立博物館
土浦市史編さん委員会	1974年 3月	『土浦歴史地図』
土浦市史編さん委員会	1975年11月	『土浦市史』
寺嶋 誠斎	1960年	『土浦史備考 第一巻 総編・神社仏閣編』（1999年 3月 土浦市教育委員会）
長南 倉之助	1928年 4月	『常南地方の古墳』『進修』27号（『郷土史研究論集』1994筑波書林に再録）
永山 正	1989年 3月	『常名村の巻』『土浦町内誌』 土浦市教育委員会
樋口 清之ほか	1967年	『塚山古墳調査報告』『上代文化』37
比毛 君男	1999年10月	『第5回企画展 常名台の古代のむら』 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
藤田 安通志	1972年 6月	『故藤田清・中村盛吉遺稿集「常総古文化研究」』 藤田 実（発行者）
前田 潮	1982年 3月	『上坂田北部貝塚』『筑波古代地域史の研究』 筑波大学
前田 潮ほか	1992年 3月	『古霞ヶ浦湾』沿岸貝塚の研究』 筑波大学



「真鍋町台町古墳」出土の「鎌をさげた埴輪」と「琴形埴輪」『常総古文化研究』（藤田 1972）より
（馬子と靱の埴輪と思われる）



第3章 常名台遺跡群確認調査

第1節 調査の方法

今回の確認調査は、常名地区新運動公園建設造成計画に基づいて行われたものであり、一部未買収地もあるが、当初の計画とおり事業予定地内全域にわたって遺跡の有無および範囲、性格などを把握することができた。またこの調査において遺構等が検出され、その範囲が明確に限定できる場合、少なくとも拡張調査で十分対応できると判断した地区では、引き続き本調査に移行することとなった。

まず確認調査の方法は、トレンチ法により実施した。予め事業予定地内全域を網羅するように公共座標に準拠した20mごとのメッシュをかけ、地形あるいは未買収地等の状況に合わせて基本杭を設け、その基準点からさらに1m離してトレンチ設定のための基本杭を打った。基本的には地層断面図観察のために南側へ1m離しているが、地形等に制約されている地区では北側へ1m離して幅2mの確認トレンチを設けた場合もある。

第2節 確認された遺構について

トレンチ法による確認調査は、まず重機により表土層除去および遺構確認直上面まで掘削し、その後人力による遺構確認面までを削平し、本調査に対してなるべく遺構を傷めない程度の深度に照らし定めての調査方法で行った。今回の対象地域では、遺構検出面はローム層上面に相当するが、重機での掘削はその直上で止め、人力で遺構の状態を観察しながら、さらに確認できない場合のみ、ローム層まで掘り下げ遺構検出にあたった。しかし、谷部や斜面部において、基盤層であるローム層が検出できない地点もあり、各トレンチにおいてそれぞれの地形などの状況に合せた遺構検出面を確認しなければならなかった。

調査の結果、多くのトレンチから遺構が検出されており、たとえ遺構の確認はできなくとも、遺物の出土があるものもあり、確実に遺跡として、あるいはその遺跡範囲内として捉えておかねばならないものが大半を占めていた。なお、遺構に落ち込む覆土層は時代によって若干異なり、縄文時代の確認面での覆土上面では褐色土もしくは暗褐色土が基本で、黒色土(10YR1.7/1)の堆積は覆土中には堆積しているものの、確認面(覆土上層)ではほとんど検出されてはいない。また黒色土あるいは黒褐色系土層は明らかに弥生時代以降で、中世もしくは近世の遺構においても黒色土系の覆土を呈していることが確認されている。しかし、縄文遺構以外、覆土の土層の色調から明瞭な時期を判断することは不可能であった。

つぎに各トレンチの表土層の状況であるが、層位の厚薄差はあるものの、全体的に畑地であったため耕作による攪乱を受けており、明瞭な包含層としては残存していない。また一部で表土層の上面に盛土され、二次堆積している個所がいくつか確認されている。近年の盛土造築が多く、攪乱層として判断してしまい、とくに厚層の盛土層では下層の表土層を見落とす危険がある。これらの多くはさらに表土層以下の包含層あるいは遺構確認面の遺存状態が良好の場合が多く、十分注意する必要がある。

こうした確認調査によって旧石器時代、縄文時代、古墳時代、奈良・平安時代、中・近世の遺構および遺物の検出があり、とくに縄文時代中期後半の集落、古墳時代前期・後期および奈良・平安時代の集落は特筆される。また方墳を主体とする古墳群の拡がりも注目される。なお、14aトレンチで検出された縄文時代中期末葉・加曾利EⅣ式期の竪穴住居跡1軒と土坑1基、および17wトレンチで検出された縄文時代中期末葉・加曾利EⅣ式期の土坑4基については遺跡の拡がりを考慮しながら本調査を実施した。



第3図 常名台遺跡群トレンチ配置状況

第3節 確認トレンチの成果

確認トレンチの命名とくに、通称トレンチ番号については、すでに触れたとおりであるが、調査はその番号順に掘削したわけではなく、地形や重機の稼動状況あるいは調査工程に合せながら実施した。今回の調査では幅2mを基本に、長さにおいて長短はあるものの、計34本、総長延べ1,558.5mにおよび、面積にすると実質計3,117㎡の範囲を確認調査した結果となる。なお、イ-トレンチについては詳細な遺構の確認を行うため拡張して方形の調査区を設けた。以下トレンチ毎に調査面積および検出された遺構・遺物等について概観する。

1 トレンチ (第5・6図 PL.1)

大和鉄工所土浦工場裏に設定した南北方向のトレンチで、総長91.5m、調査面積183㎡を測る。南側に谷部をもち、トレンチの南端において緩傾斜しているが、大半はほぼ平坦面を呈する台地である。北側はかつて宅地となっていたため、表土層に大規模な攪乱を受け、一部遺構まで達しているが、全体的には遺跡としての遺存状態は良好である。ここから住居跡10軒、土坑3基、溝状遺構2条が検出された。とくに南側の傾斜面から台地縁辺部には古墳時代中期・後期、および奈良・平安時代の住居跡が集中しており、土坑、溝状遺構、焼土跡等も確認されている。また北側にも古墳時代の住居跡が検出されており、規模の大きな集落跡であることが判明した。

また遺物としては縄文時代の石器(時期を確定できない)1点と南側住居跡群から土師器・須恵器が纏まって出土している。第6図No1はチャート製のフリイクである。長さ3.51cm、幅4.10cm、厚さ1.31cm、重量14.76gを測る。横長剥片である。縄文時代に属する。No2～14は土師器、No15は須恵器である。いずれも住居跡確認面から出土したもので、覆土上層に位置する。まずNo2は第1号住居跡から出土したもので、高坏の脚部破片である。古墳時代中期に属する。No4～10・14は第2号住居跡から纏まって出土している。とくに坏No3・6・7・9は一括資料として得られたもので、他の坏や甕No10・14も本遺構から検出されている。古墳時代後期に属する。No11～13・15は第3号住居跡から出土したもので、No11は土師器・坏、No12は高台付坏の高台部破片。No13は叩き目の施された甕、No14は須恵器・甕の破片である。9世紀前半に属する。

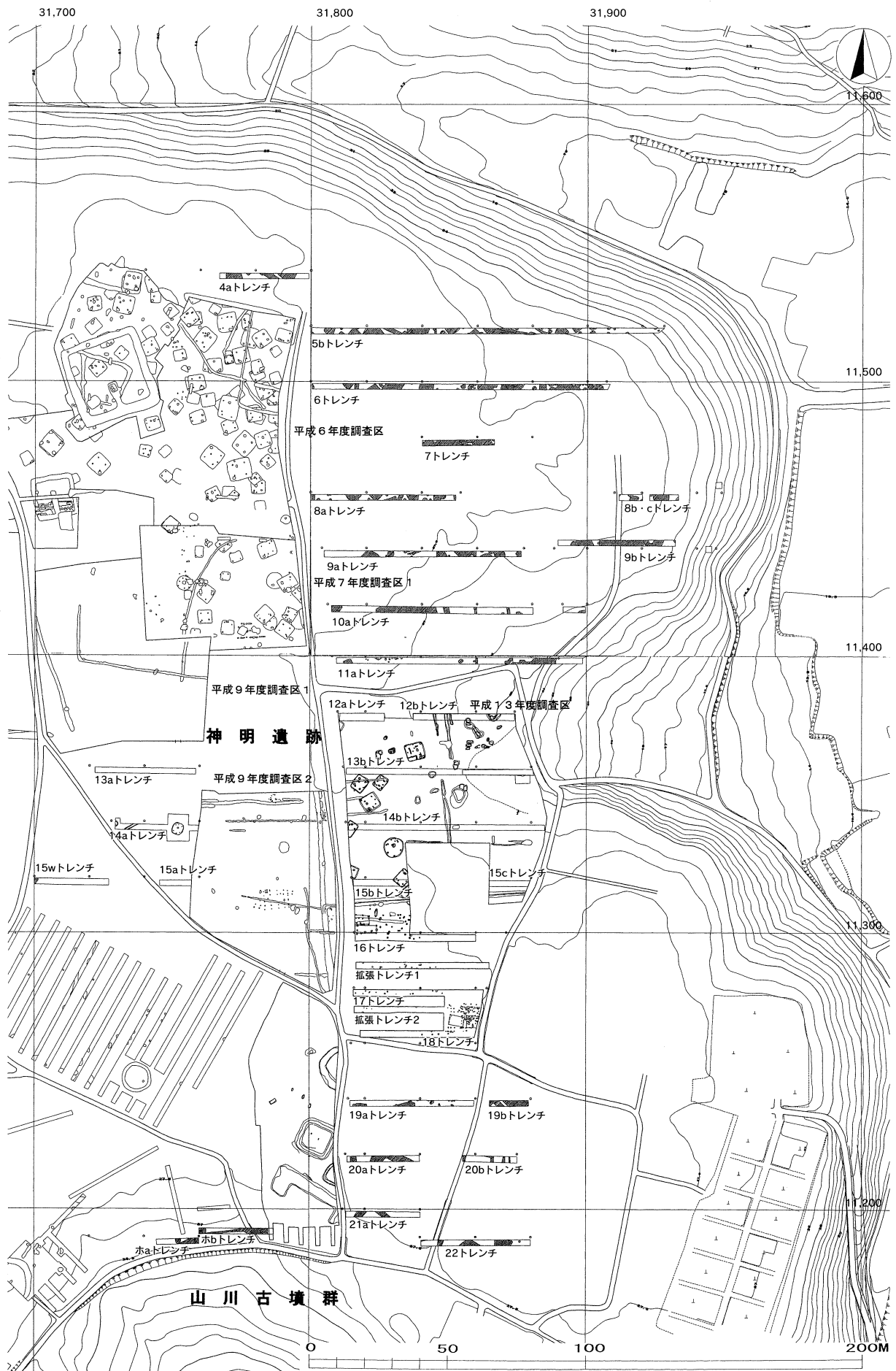
4 a トレンチ (第5・7図)

神明遺跡北端部の台地突出部に平行して設定した東西トレンチで、西側は既に本調査が終了している北西原遺跡である。総長36m、調査面積72㎡を測る。現状は山林で、表土層の状態は良好である。ここではほぼ全域で遺構が確認されている。住居跡4軒、古墳の周溝と思われる溝状遺構1条である。遺構の遺存状況や密集度からみて良好な集落跡と判断される。

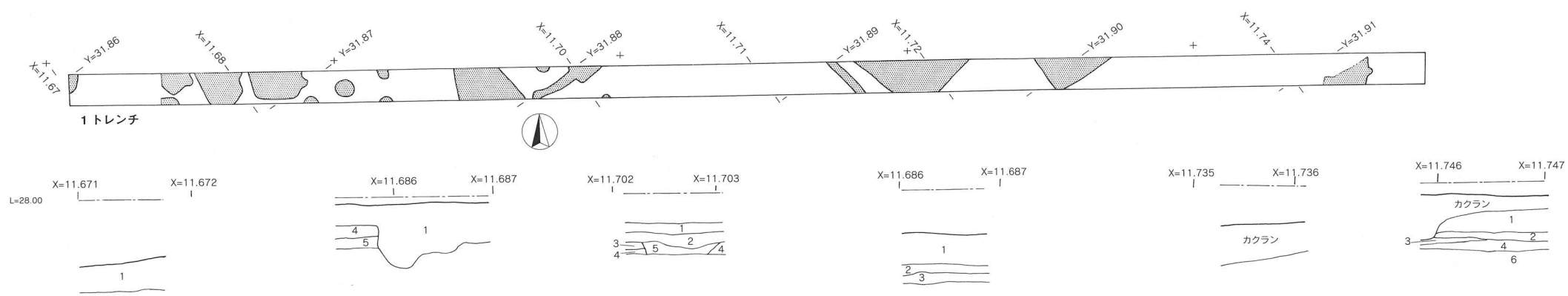
この西端で検出された第1号住居跡の確認面から土師器が纏まって出土した。高坏、小型鉢、台付甕である。第7図No1は高坏の坏部と脚部の接合部の破片。No2は小型の鉢底部破片である。No3とNo4は同一個体とみられる台付甕で、No3は口縁部、No4が台部である。いずれも古墳時代前期に属する。

5 b トレンチ (第5・8図 PL.1・5)

台地突出部に平行する東西トレンチで、西側は北西原遺跡と接する。また東端部は緩傾斜し、台地縁辺部にあたる。総長120.5m、調査面積241㎡を測る。現状は山林で、表土層の状態は良好である。ここでもほぼ全面で遺構が検出されている。住居跡15軒、土坑18基、溝状遺構4条である。遺構の遺存状態および遺構の密集度からみて良好な集落跡として判断される。なお、西側が古墳時代前期の住居跡が集中するのに対して、東側は縄文時代の住居跡と土坑群および奈良・平安時代の集落が展開するようである。

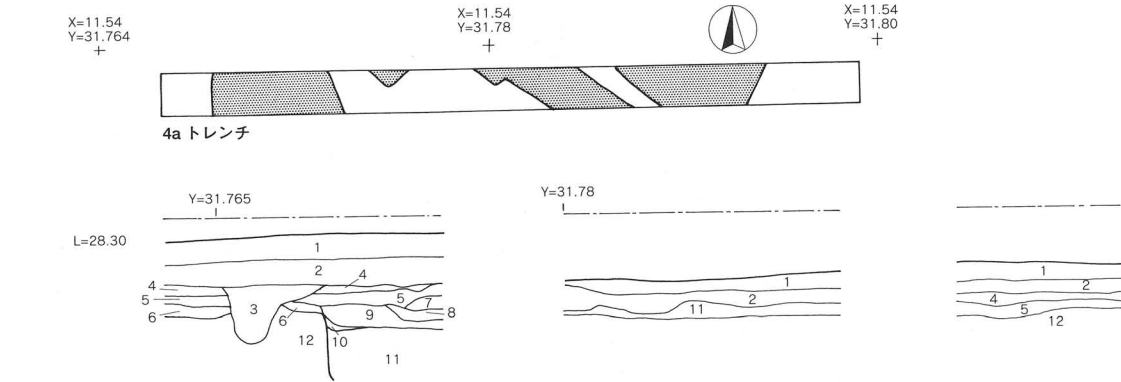


第4図 台地主要部トレンチ配置状況



1トレンチ

- 1 表土層 褐色土 (10YR4/4) 締まりに欠け、バサバサしている。
- 2 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 3 褐色土 (10YR4/4) ローム粒子をわずかに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 4 にぶい黄褐色土 (10YR7/4) 漸移層。ローム粒子をわずかに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 5 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒子をわずかに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 6 黄褐色土ローム (10YR8/8) ソフトローム層

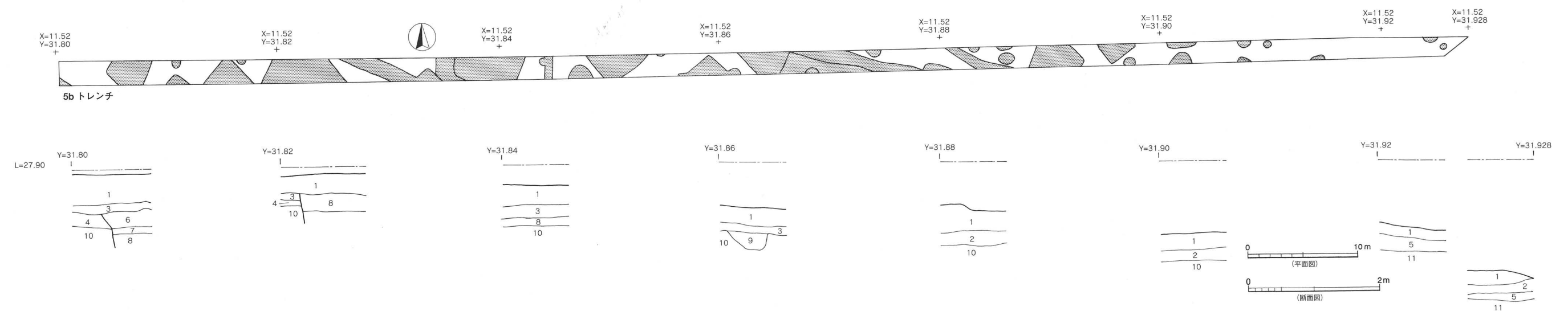


4 a トレンチ

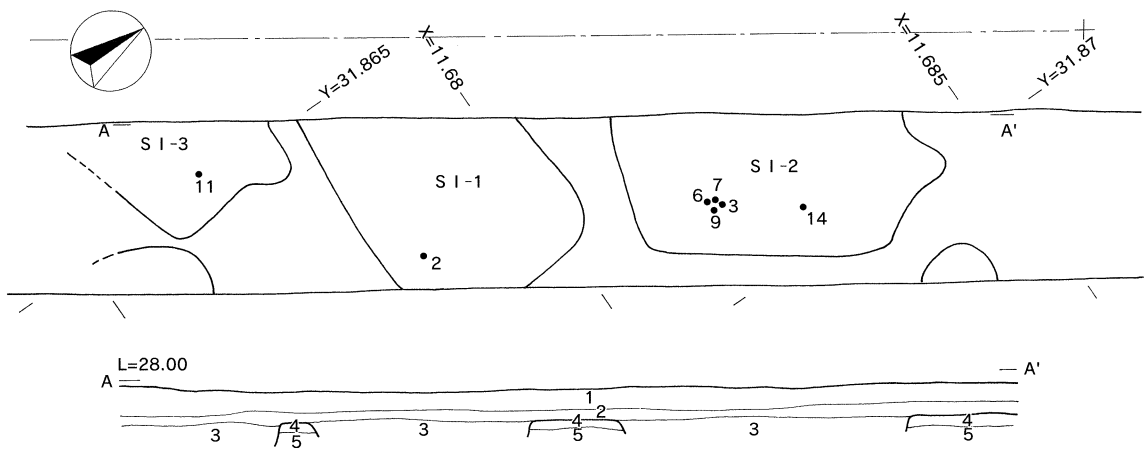
- 1 表土層 黒褐色土 (10YR3/2) 締まりに欠け、バサバサしている。
- 2 旧表土層 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒子をわずかに含む、締まりがあり、粘性にやや欠ける。
- 3 カクラン 黒褐色土 (10YR2/3) ロームブロックを含む、締まりに欠ける。
- 4 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子をわずかに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 5 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 6 褐色土 (10YR4/6) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 7 明黄褐色土 (10YR6/6) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にやや欠ける。
- 8 にぶい黄褐色土 (10YR6/4) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 9 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ローム粒子を多量に含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 10 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 11 黒色土 (10YR2/1) ローム粒子をわずかに含む、締まりがあり、粘性にとむ。遺構覆土。
- 12 黄褐色土ローム (10YR8/8) ソフトローム層。

5 b トレンチ

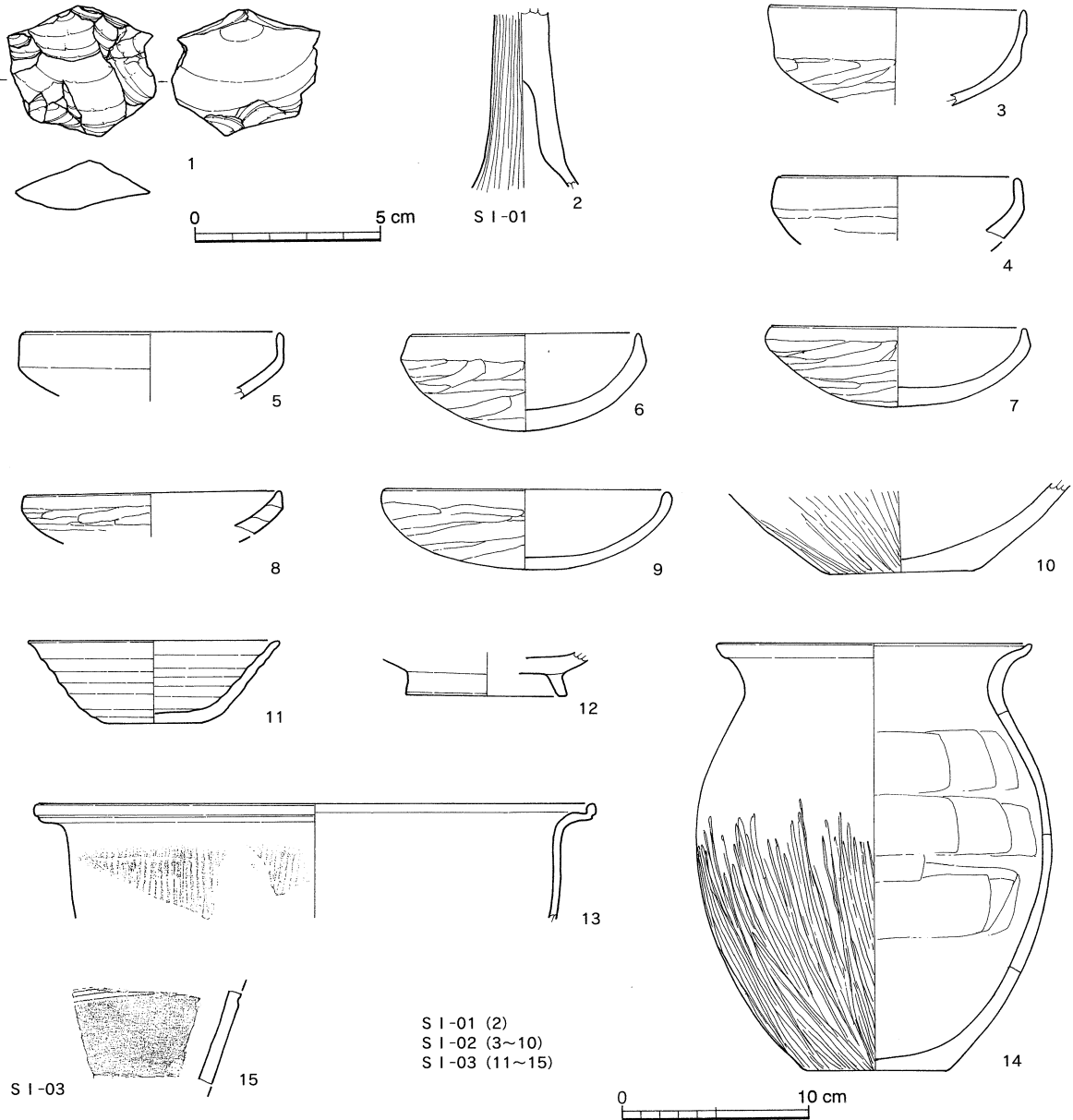
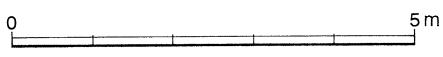
- 1 表土層 黒褐色土 (10YR2/2) 締まりに欠け、バサバサしている。
- 2 旧表土層 にぶい黄褐色土 (10YR2/3) ローム粒子を僅かに含む、締まりに欠け、粘性にやや欠ける。
- 3 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 4 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 5 褐色土 (10YR4/4) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にやや欠ける。
- 6 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 7 にぶい黄褐色土 (10YR6/3) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 8 黒色土 (10YR2/1) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。遺構覆土。
- 9 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
- 10 黄褐色土ローム (10YR8/8) ソフトローム層
- 11 黄色土ローム (2.5YR8/8) 締まりがあり、粘性が強い。



第5図 1・4 a・5 b トレンチ実測図

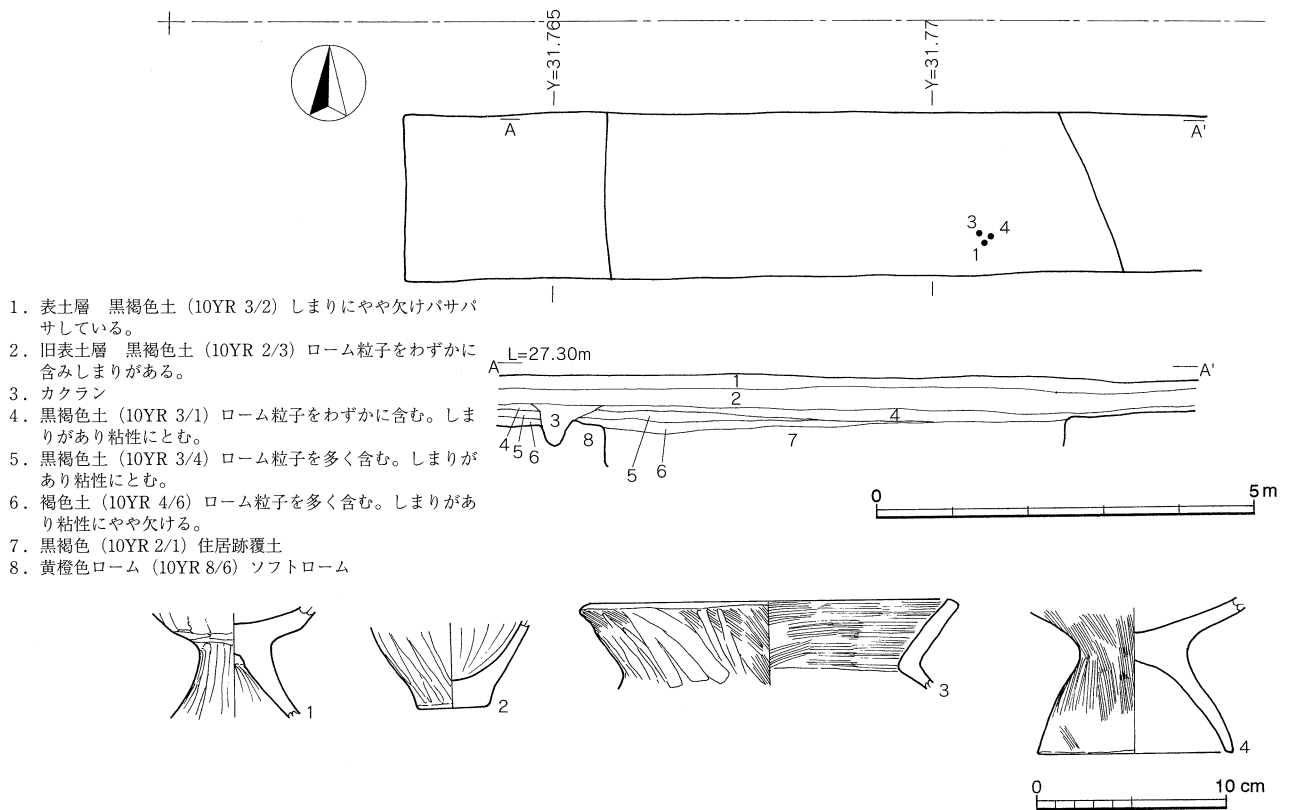


1. 表土層 暗褐色土 (10YR 3/3) ローム粒子をわずかに含む。しまりにやや欠ける。
2. 黒褐色土 (10YR 2/3) ローム粒子を多く含む。しまりが有り粘性にとむ。
3. 黒褐色土 (10YR 2/2) ローム粒子を多く含む。しまりが有り粘性にとむ。
4. 褐色土 (10YR 4/4) ローム粒子をわずかに含む。しまりが有り粘性にとむ。
5. 黄橙色ローム (10YR 8/8) ソフトローム



S I-01 (2)
 S I-02 (3~10)
 S I-03 (11~15)

第6図 1 トレンチ 第1・2・3号住居跡およびトレンチ内出土遺物実測図



1. 表土層 黒褐色土 (10YR 3/2) しまりにやや欠けバサバサしている。
2. 旧表土層 黒褐色土 (10YR 2/3) ローム粒子をわずかに含みしまりがある。
3. カクラン
4. 黒褐色土 (10YR 3/1) ローム粒子をわずかに含む。しまりがあり粘性にとむ。
5. 黒褐色土 (10YR 3/4) ローム粒子を多く含む。しまりがあり粘性にとむ。
6. 褐色土 (10YR 4/6) ローム粒子を多く含む。しまりがあり粘性にやや欠ける。
7. 黒褐色 (10YR 2/1) 住居跡覆土
8. 黄橙色ローム (10YR 8/6) ソフトローム

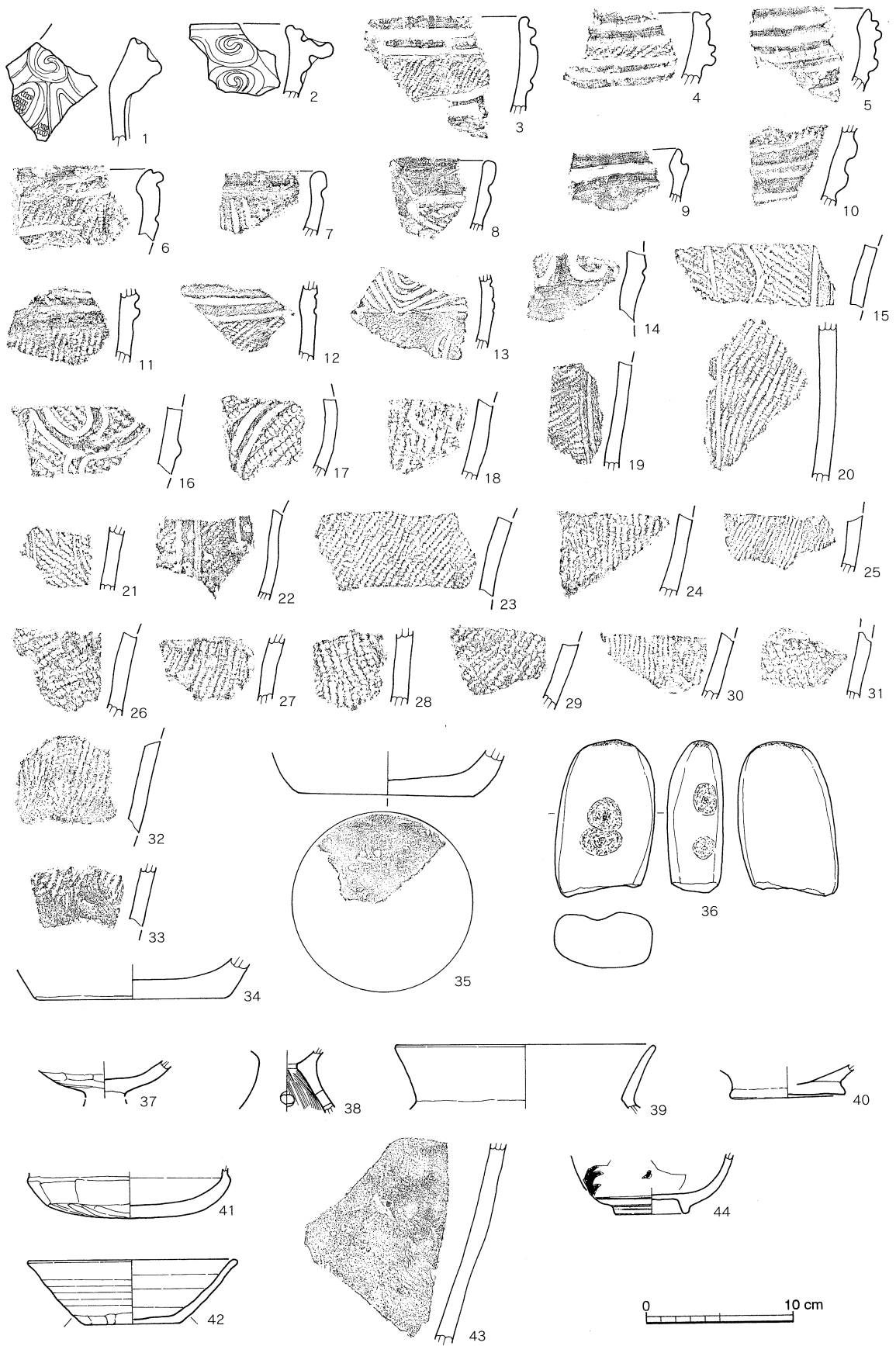
第7図 4トレンチ 第1号住居跡出土遺物実測図

遺物は全面から出土しており、とくに縄文土器が纏まっている。その他に縄文時代の石器、土師器、須恵器、磁器が検出されている。第8図No 1～35は縄文土器で、すべて中期後半・加曾利E I式土器である。キャリパー形の深鉢で、No 1は波状口縁、No2～9は平縁の口縁部を呈する深鉢である。No10～33は胴部破片。No35・36は底部破片である。No36は凹部状の被加撃痕をもつ磨石で、端部には叩打痕が残り、全体に研磨されている。No37～43は土師器である。No37は高坏の坏部破片。No38は器台の脚部破片、No39・No40は甕の口縁と底部破片である。いずれも古墳時代前期に属する。No41は坏底部破片。古墳時代後期に属する。No42はロクロ成形の坏である。底部は回転ヘラ切りで切り離されている。

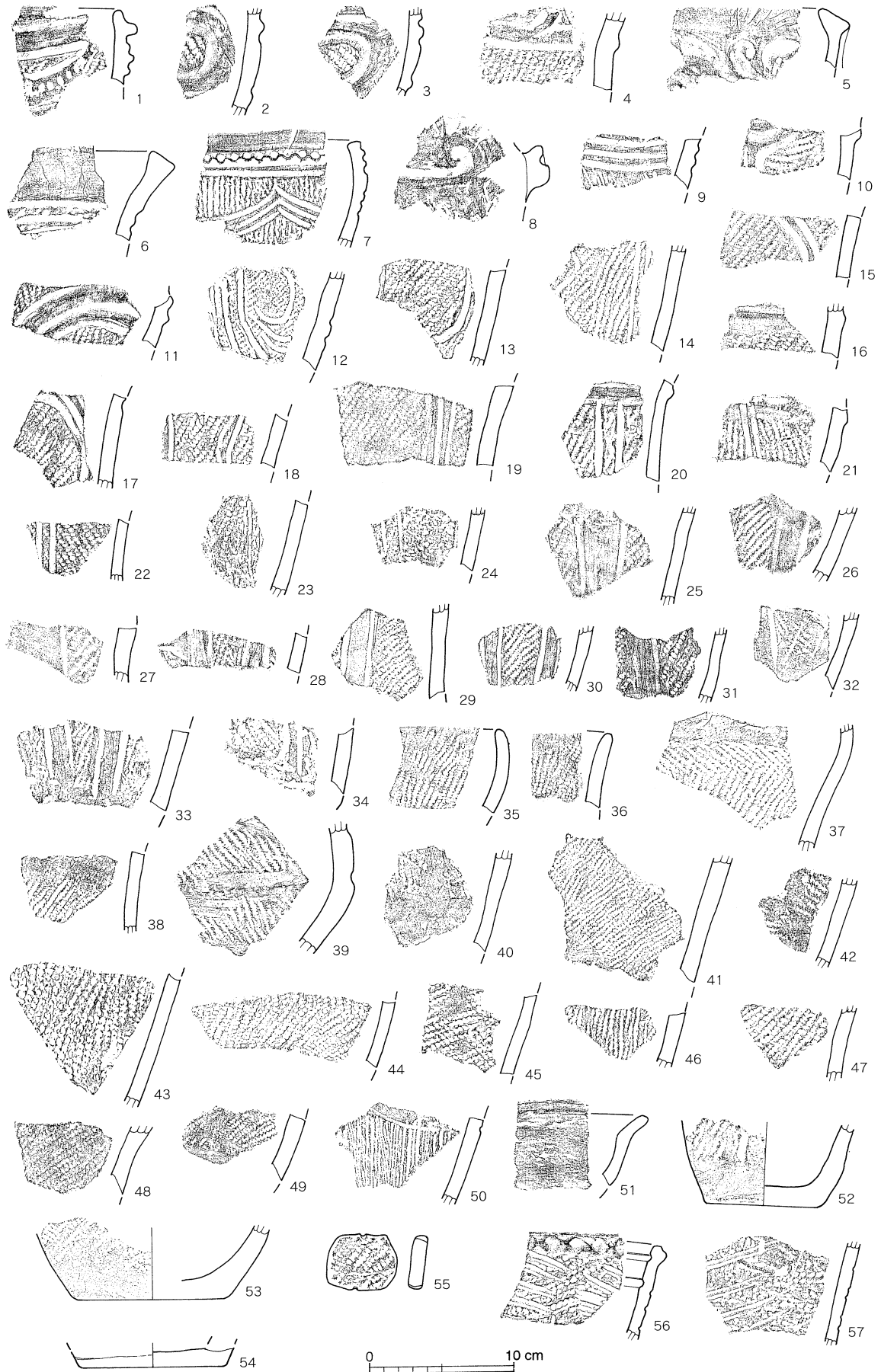
6トレンチ (第9～11図 PL.1・5)

台地突出部のほぼ中央東西に設定したトレンチで、東端部は緩傾斜する台地縁辺部にあたる。総長108.5m、調査面積217m²を測る。現状は山林で、表土層の状況は良好である。ここでもほぼ全面に遺構が検出されている。住居跡9軒、土坑32基以上、溝状遺構3条である。遺構の遺存状況も良好で、密集しており、やはり大規模な集落跡であることが判る。

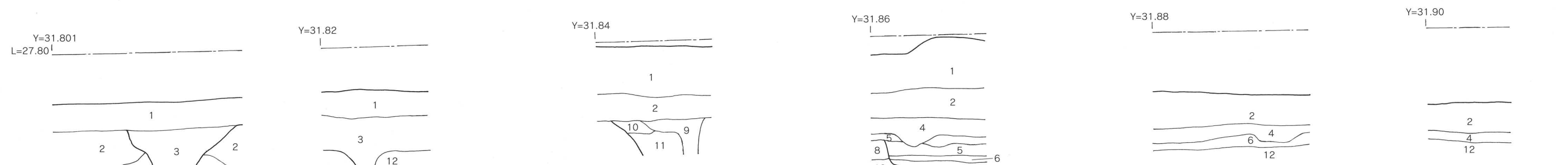
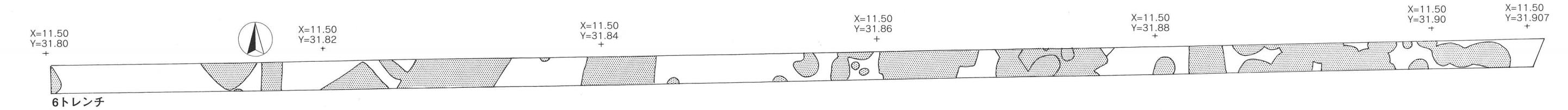
遺物は全面から検出されており、やはり縄文土器が纏まって出土している。その他土師器と須恵器がある。第10図No 1～54・56・57は縄文土器である。縄文中期後半期に比定される一群であるが、5トレンチで検出された加曾利E I式に加えて、加曾利E II式土器も多く見られるようになる。口縁部破片のNo 2・3・5・7は新しい様相を呈する土器群である。胴部破片においてもNo25～34やNo52も加曾利E II式である。またNo 56・57は後期中葉・加曾利B 1式期の粗製土器。No55は加曾利E式期の土器片錘である。第11図No58～62は古墳時代前期の土師器である。No58は壺、No59・60は高坏、No61は器台、No62は台付甕である。No63～65は奈良・平安時代の土師器と須恵器の甕破片である。



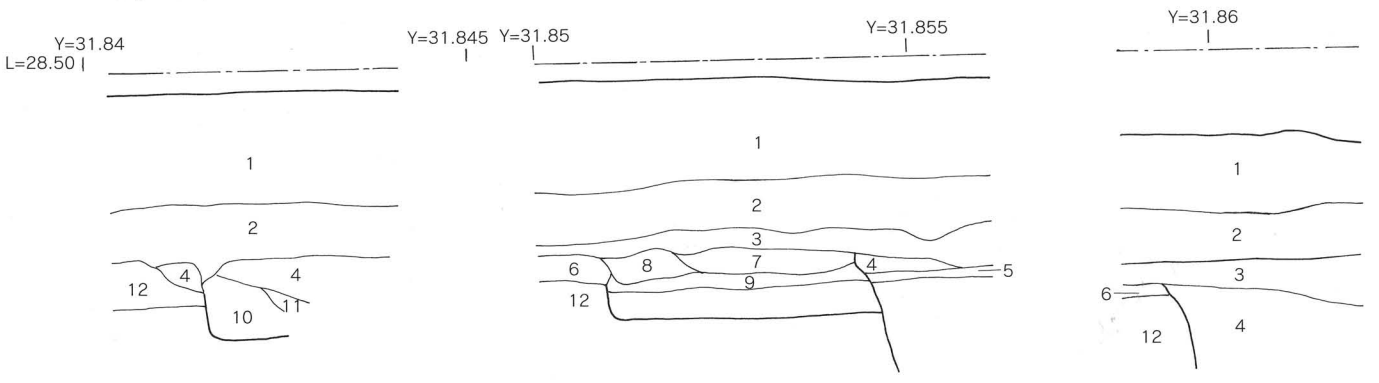
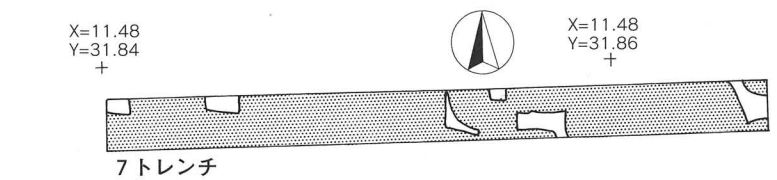
第8図 5bトレンチ出土遺物実測図



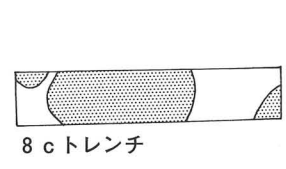
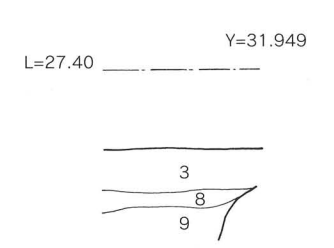
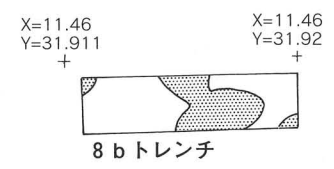
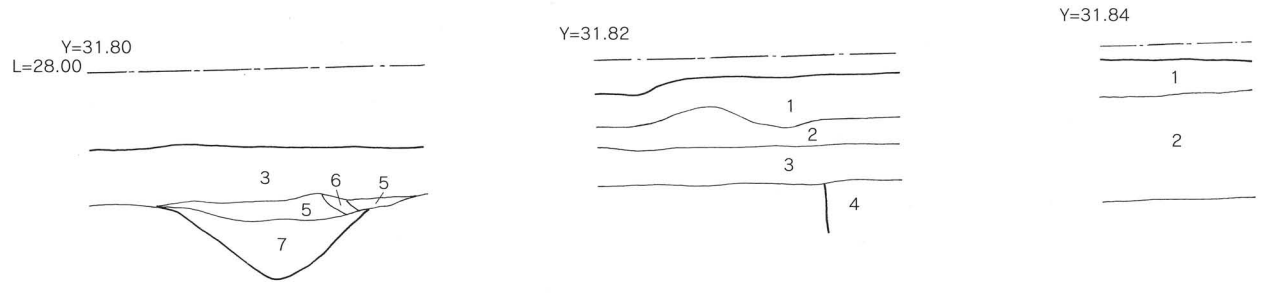
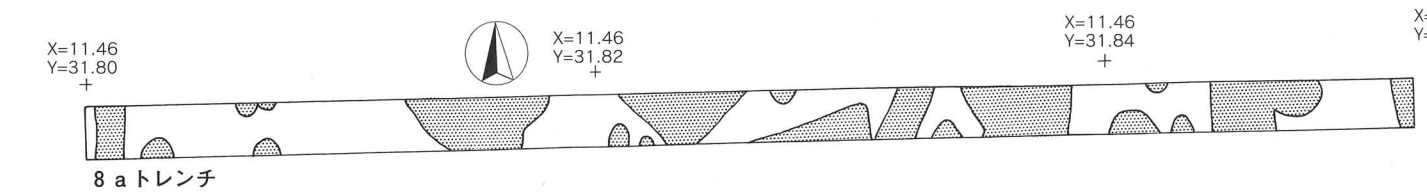
第9図 6 トレンチ出土遺物実測図(1)



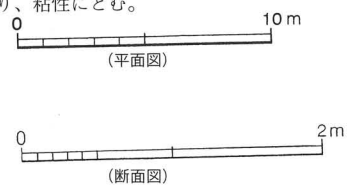
- 6 トレンチ
- 1 盛土層
 - 2 旧表土層 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒子を僅かに含む、締まりに欠け、粘性にやや欠ける。
 - 3 黒褐色土 (10YR3/1) 攪乱層 ローム粒子を多く含む、締まりに欠け、粘性に欠ける。
 - 4 黒色土 (10YR2/1) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 5 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 6 褐色土 (10YR4/4) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にやや欠ける。
 - 7 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子・焼土粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 8 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にやや欠ける。
 - 9 褐灰色土 (10YR4/1) ローム粒子を僅かに含む、締まりにやや欠け、粘性に欠ける。
 - 10 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 11 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 12 黄橙色土ローム (10YR8/8) ソフトローム層。



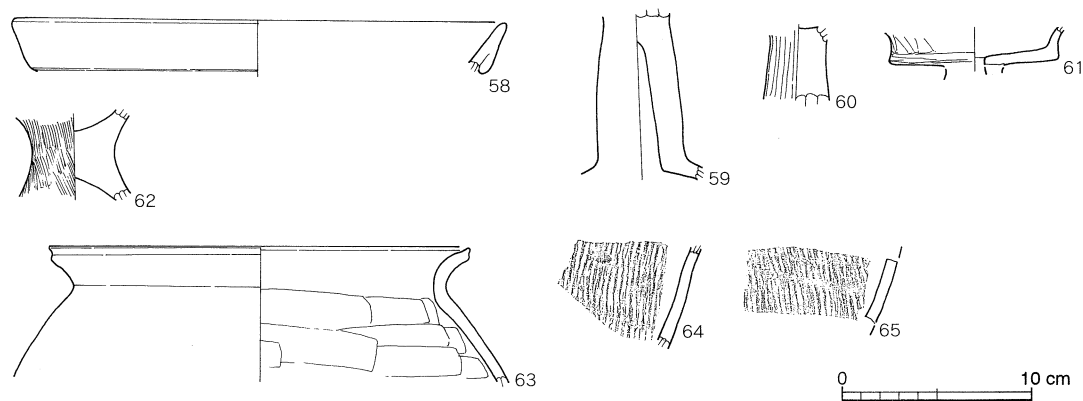
- 7 トレンチ
- 1 盛土層
 - 2 旧表土層 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒子を僅かに含む、締まりに欠け、粘性にやや欠ける。
 - 3 黒色土 (10YR2/1) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 4 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 5 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子・焼土粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 6 明黄褐色土 (10YR6/6) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 7 褐色土 (10YR4/6) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 8 にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にやや欠ける。
 - 9 黄褐色土 (10YR5/6) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 10 黒色土 (10YR2/1) ローム粒子・焼土粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 11 黄褐色土 (10YR5/6) ローム粒子を多量に含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 12 黄橙色土ローム (10YR8/8) ソフトローム層。



- 8 a・8 b・8 c トレンチ
- 1 盛土層
 - 2 盛土層
 - 3 旧表土層 灰黄褐色土 (10YR4/2) ローム粒子を僅かに含む、締まりに欠け、粘性にやや欠ける。
 - 4 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子・焼土粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 5 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 6 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性に欠ける。
 - 7 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
 - 8 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にやや欠ける。
 - 9 褐色土 (10YR4/6) ローム粒子・ロームブロックを多量に含む、締まりがあり、粘性に欠ける。



第10図 6・7・8 a・8 b・8 c トレンチ実測図



第11図 6 トレンチ出土遺物 (2)

7 トレンチ (第10・12図 PL.1・5)

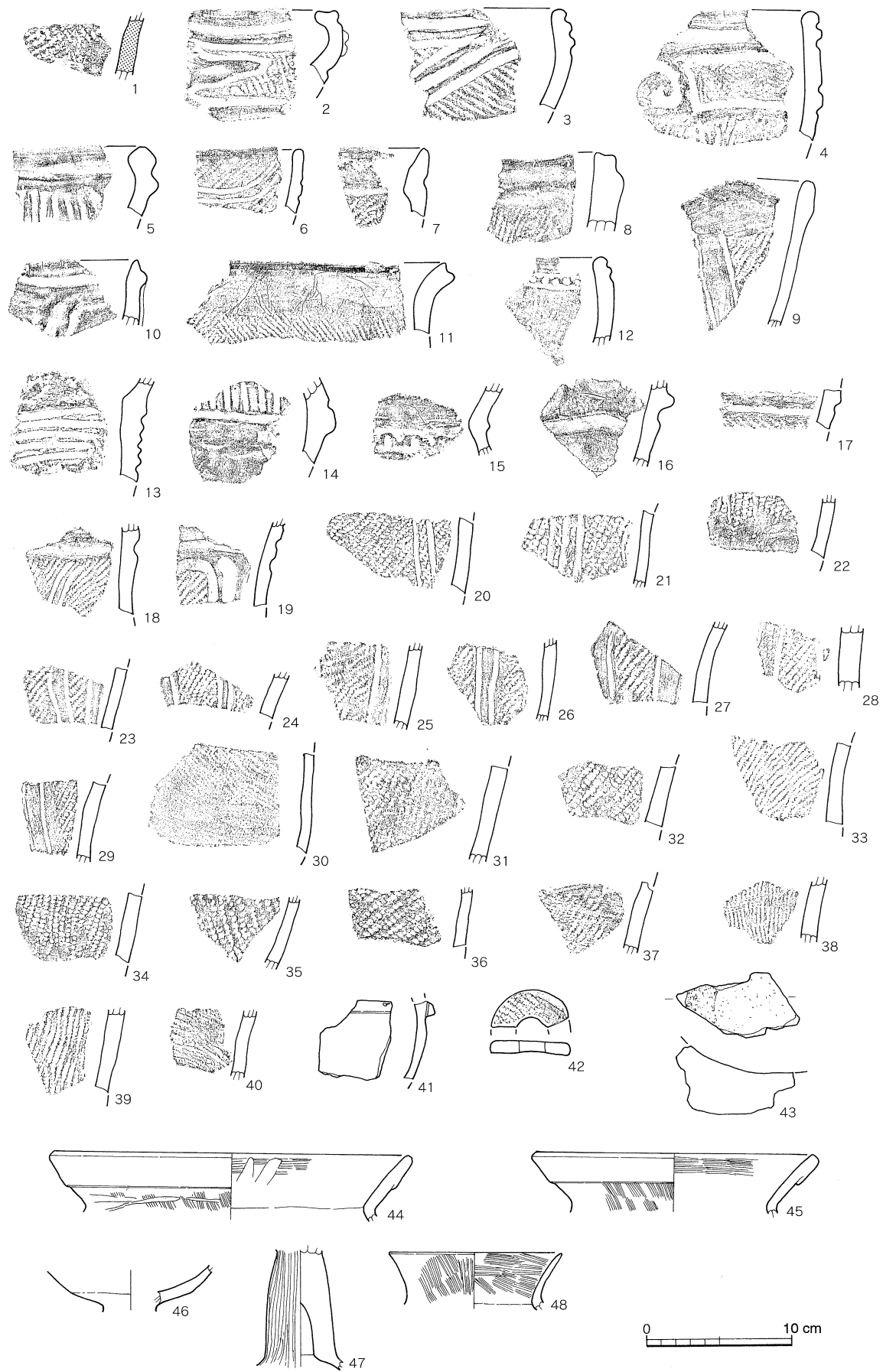
台地突出部の中央南側の東西に設定したトレンチであるが、未買収によって予定よりも半分以下の調査となった。調査対象地は台地平坦部から東に緩傾斜する地点で、総長26m、調査面積52m²を測る。現状は荒地で、表土層上に多量の土砂によって盛土されている。しかし、表土下の遺構の遺存状態は良好で、確認調査部分全面に遺構が検出されており、逆に遺構の落ち込み部が全面におよぶためその範囲を正確に把握できていない。取り敢えず確認した遺構数は、住居跡6軒、土坑7基である。

遺物は全面で検出されている。縄文時代の縄文土器が主体で、時期は前期中葉の土器、中期後半の土器、そのほか中期後半の有孔円板や石器である石皿片が出土し、また古墳時代の土師器も確認されている。第12図No1は前期中葉・黒浜式土器である。土器の胎土に多量の繊維を含む。No2～41は中期後半・加曾利E式土器で、加曾利E I・E II・E III式期がある。E II・III式は少ないが、No41は末葉の有孔鏝付土器の胴部破片である。No42は半分が欠損している有孔円板である。孔部および周縁部を丁寧に研磨して仕上げている。No43は安山岩製の石皿の破片である。No44～48は古墳時代前期の土師器である。No44・45は壺の口縁部、No46・47は高坏、No48は小型壺である。

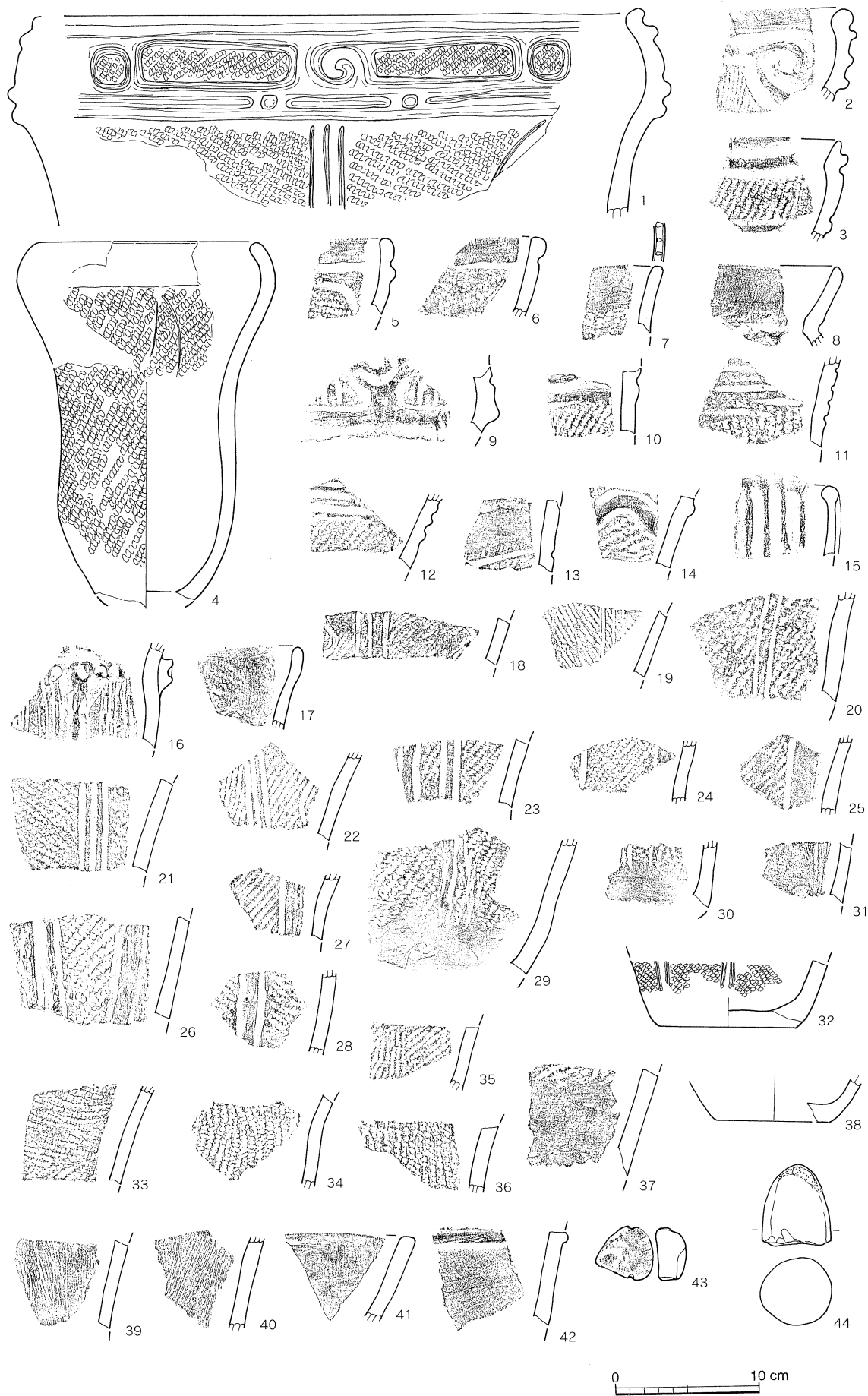
8 a トレンチ (第10・13図 PL.1・6)

台地突出部の中央南西側に設定したトレンチである。現状は荒地の平坦部で、表土層は薄層となっている。総長36m、調査面積72m²を測る。確認された遺構は北側各トレンチより若干薄くなるとはいえ、ほぼ全面的に分布している。検出された遺構は、住居跡5軒、土坑13基、溝状遺構4条である。出土遺物はいずれも縄文土器で、その他縄文期の土器片錘や石器として叩石がある。

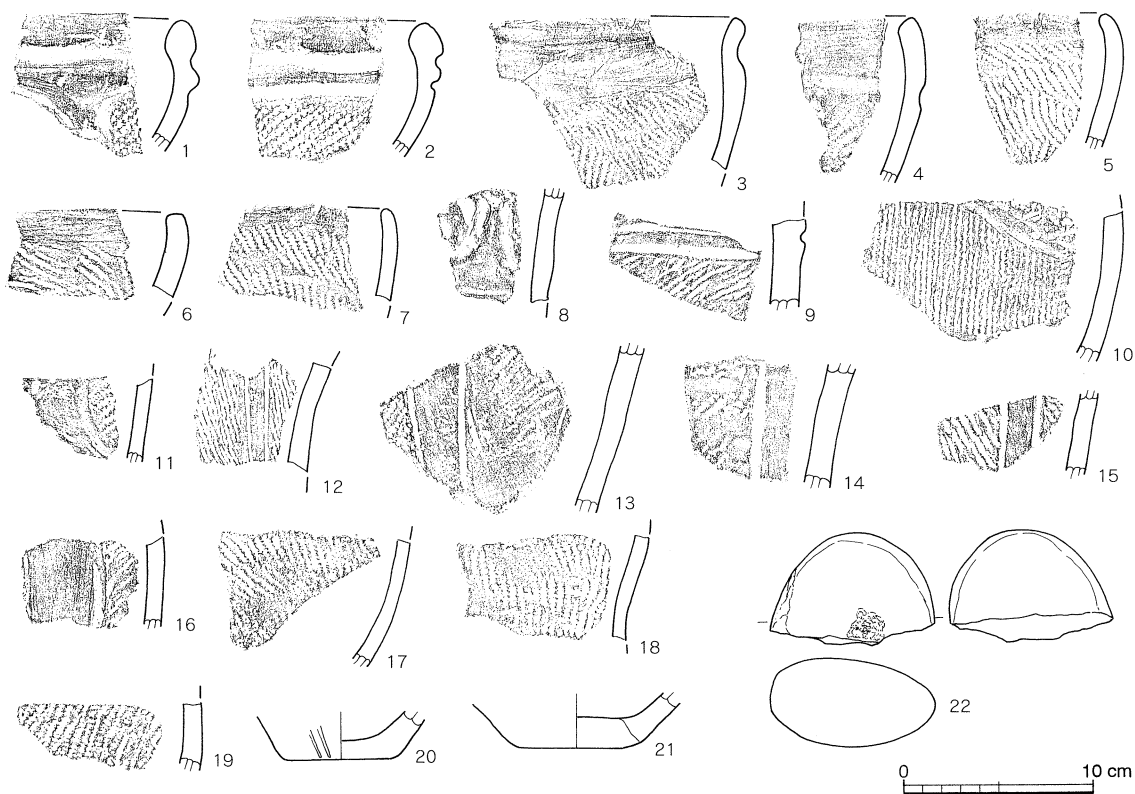
遺物は全面で検出されている。とくに縄文中期の遺物によって占められている。ここでは中期後半・加曾利E I式新期の土器が主体となっており、加曾利E II式が僅かに含む。また中期の土器片錘と叩石が出土している。第13図No1は大形のキャリパー形の深鉢。口縁部は沈線による杵状文内に渦巻き文と楕円形区画文を配し、頸部には3本単位の直線と波状懸垂文が垂下する。No2・3は隆帯による渦巻き文や杵状文を施す。No4は口縁部が僅かに残る程度で、胴部中央から下位は完存し、また底部は欠損していた。No15・16は曾利系の深鉢である。No43は完存する土器片錘で、加曾利E式期である。No44は端部に被叩打痕を明瞭に残置した叩石である。



第12図 7 トレンチ出土遺物実測図



第13図 8aトレンチ出土遺物実測図



第14図 8b・cトレンチ出土遺物実測図

8b・cトレンチ (第10・14図 PL.1・6)

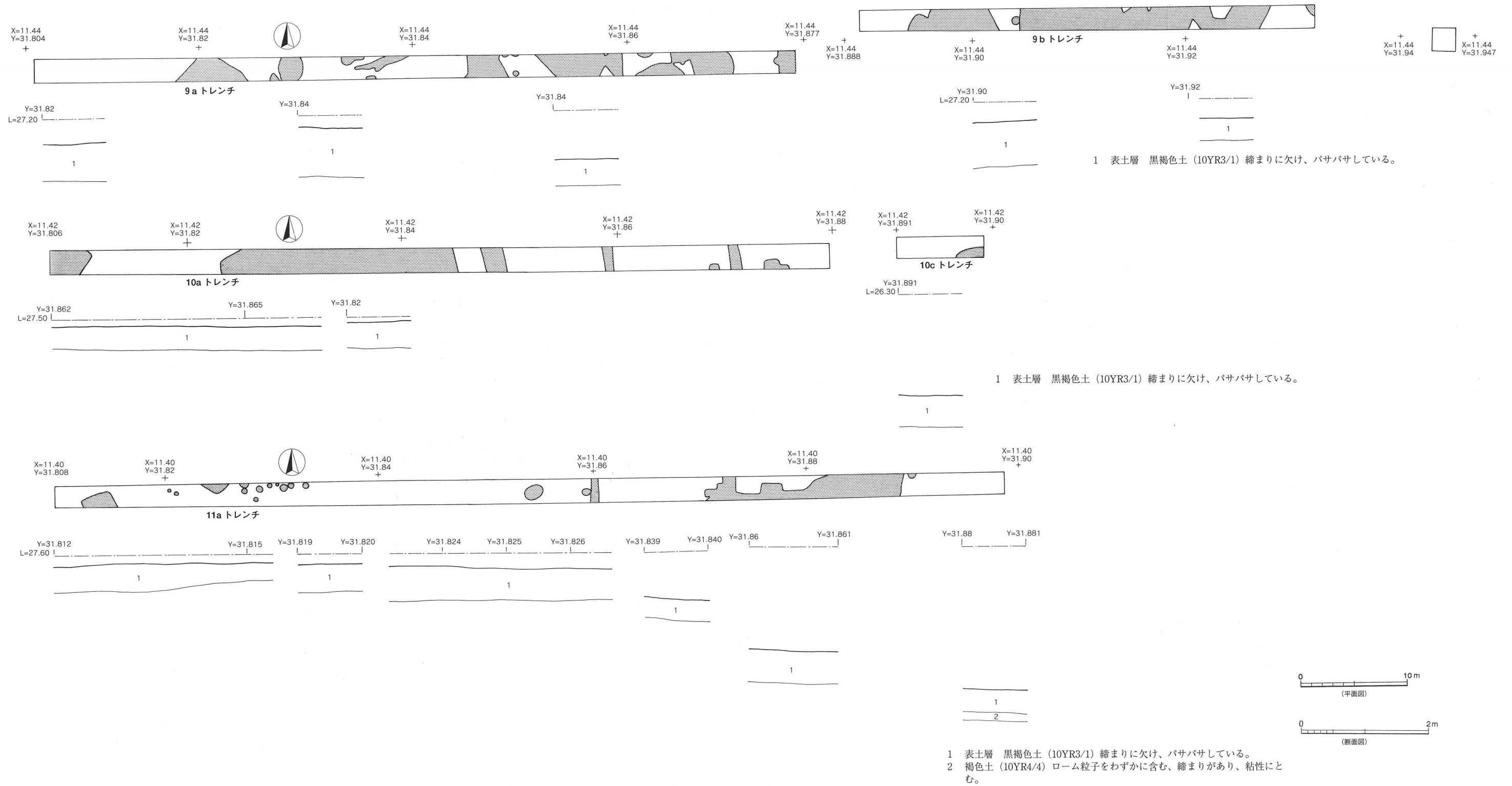
未買収地が間に入ってしまったが、8aトレンチの東側で、東西軸が同じ延長トレンチである。調査の関係で木根により短くbとcトレンチに便宜上分かれてしまった。東に突出する台地の東端部で、わずかに南側にも緩傾斜する。総長21m、調査面積42㎡を測る。現状は荒地と山林であるが、表土層は全体的に薄層で、表土層下は基盤層であるローム層となる。確認された遺構は、住居跡1軒、土坑6基である。

検出された遺物はやはり縄文土器のみで、すべて中期後半・加曾利E式である。加曾利EⅠ・EⅡ式に加え、ここにきて加曾利EⅢ式土器が出土している。第14図No4は口縁部を沈線によって区画し、無文帯をもつ深鉢である。No16は胴部破片であるが、無文の懸垂文の幅が広く、やはり終末のEⅢ式期に属する。No22は半分を欠損している凹石である。ほぼ中央に被叩打痕による窪みがみられる。砂岩製である。

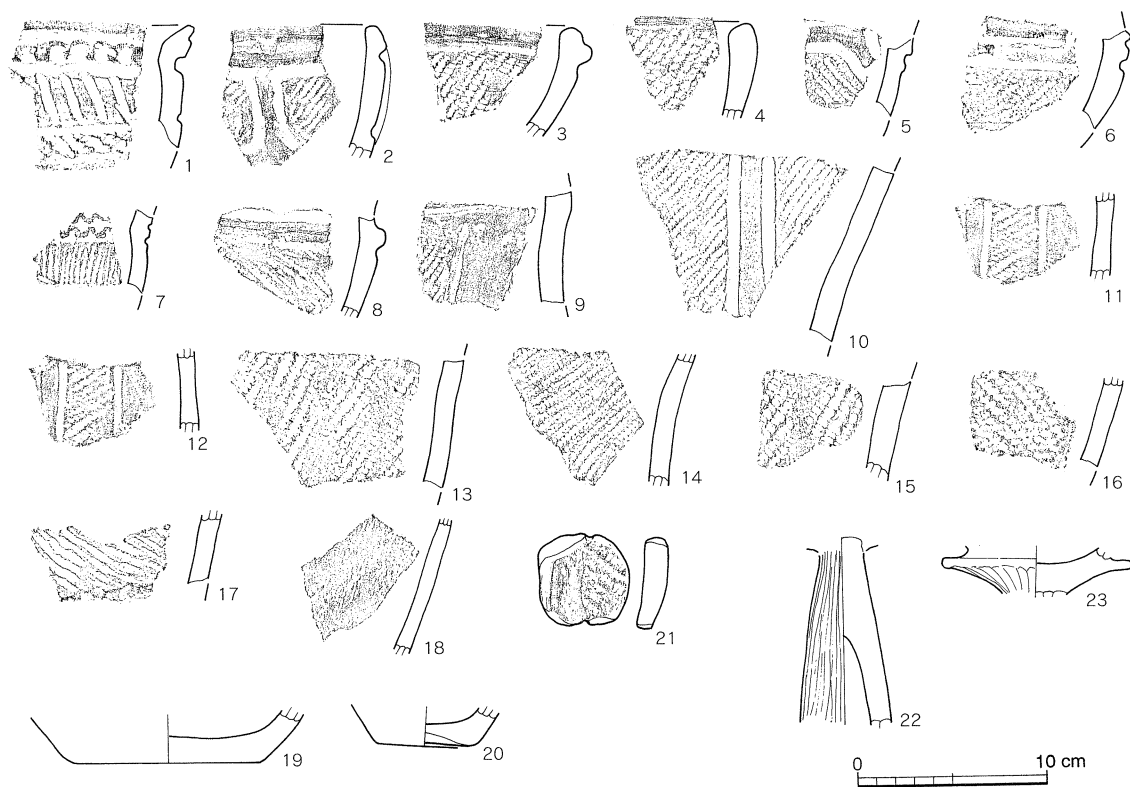
9aトレンチ (第15・16図)

南谷頭部の北西に位置し、トレンチの東側半分は谷部に掛っている。しかし、傾斜角度は緩く、台地平坦部から緩傾斜を呈する地形上に設定している。総長72m、調査面積144㎡を測る。検出された遺構は、住居跡4軒、土坑11基、溝状遺構2条である。現状は荒地で表土層はすべて耕作土である。したがって、層厚は薄く、表土層直下はすぐ基盤であるローム層に達する。

検出された遺物は、縄文土器と土師器である。縄文土器はやはり中期後半・加曾利E式で、加曾利EⅠ・EⅡ式土器が出土している。またNo21は土器片錘である。中期・加曾利E式期に比定される。No22・23は古墳時代前期の土師器破片である。No22は高坏の脚部。No23は器台である。



第15図 9a・9b・10a・10c・11a トレンチ実測図



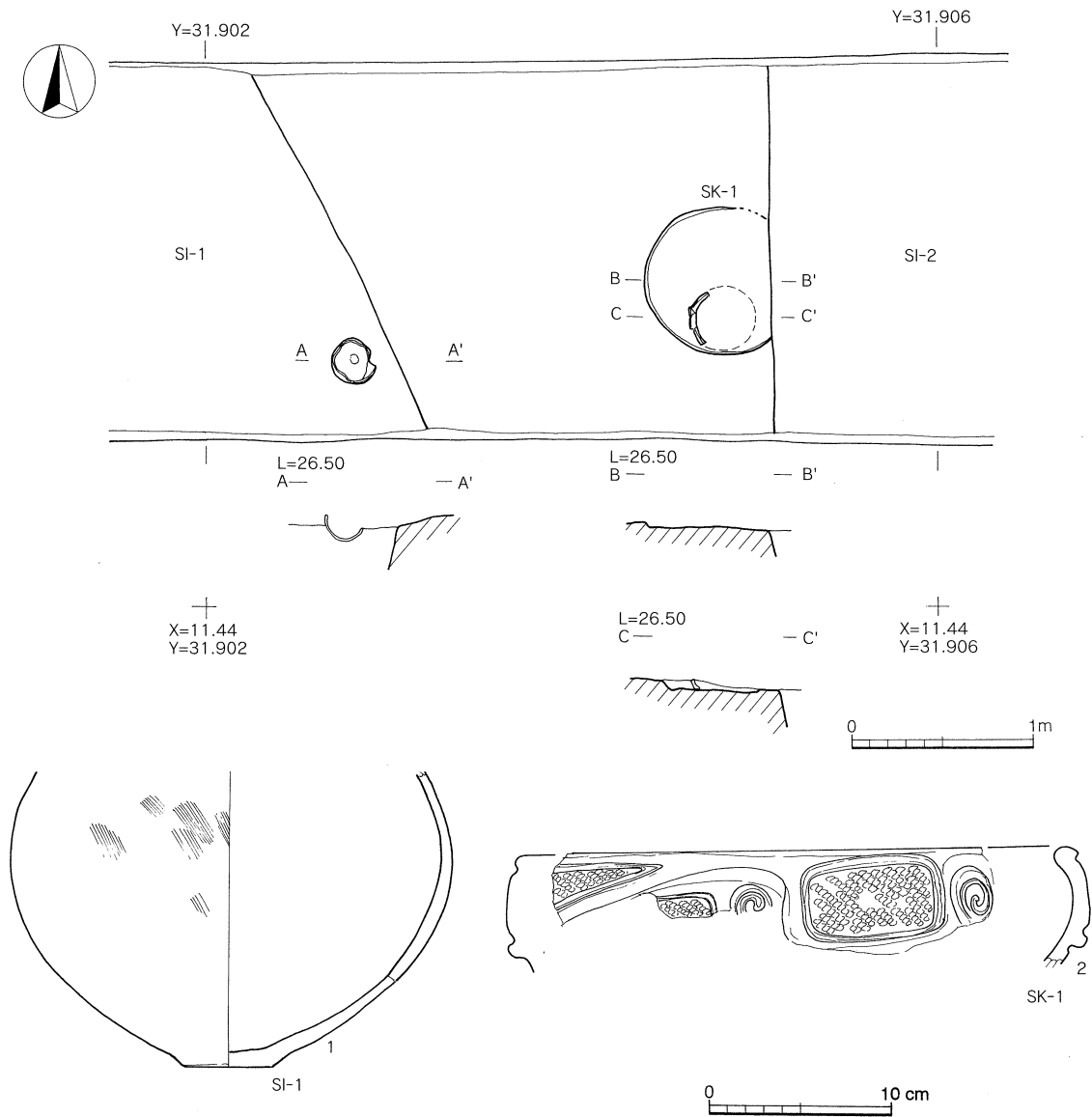
第16図 9aトレンチ出土遺物実測図

9bトレンチ (第15・17・18図 PL.2・7)

9 a トレンチの東側に延長するように設けられているが、未買収地の関係で、基本杭の北側にトレンチを設定した。ここは南側と東側に緩傾斜しているものの、傾斜角度は緩くほぼ平坦面に近い地形を呈している。現状は荒地と山林である。総長43m、調査面積86㎡を測る。表土層は比較的厚く、堆積状況は良好である。ここでは住居跡6軒、土坑2基が検出されているが、東側が谷部に掛るため黒色土の拡がりが大きく、大部分の遺構の範囲を確定できないでいる。また重機による表土層除去の際、やや西寄りの第1号住居跡および第1号土坑覆土から比較的大きな土器の出土があった。そのまま埋め戻し本調査に委ねる予定であったが、深度が浅く、すでに土器の大半が露出していたため、遺構を傷めない程度で、遺物取り上げを実施した。調査は、座標による遺物の出土地点を押さえ、平面図、断面図、写真撮影を行い、すべての調査を終了後、遺物を取り上げた。

第17図No1は、第1号住居跡出土遺物で古墳時代前期の甕である。東側壁際の覆土上面で検出されている。胴部上位から口縁部はすでに欠損し、肩部から底部までほぼ完存する。平底の底部から胴部は球形を呈する。外面はハケメ調整の後、ヘラナデ。内面ハケメ調整。No2は第1号土坑出土遺物で、縄文時代中期後半・加曾利E I式土器である。出土状況は口縁部が逆になる伏甕状で、ほぼ土坑底面に口縁部が接していた。キャリパー形の深鉢で、口縁部のみ約1/3が残存していた。文様は隆帯による渦巻き文と長方形区画文を配し、区画内に縄文を充填する。

その他トレンチ内から縄文土器が出土している。いずれも中期後半・加曾利E I・II式で、第18図No1～5は口縁部破片。No1・2は加曾利E I式のキャリパー形の深鉢、No3～5は加曾利E II式で、No3は波状口縁である。No6からNo27は胴部破片。No28～30は底部破片。No28は底部に網代痕を残す。No31は土器片錘である。No32は古墳時代前期の甕であるが、盛土中から出土したもので、出土地点は明確ではない。

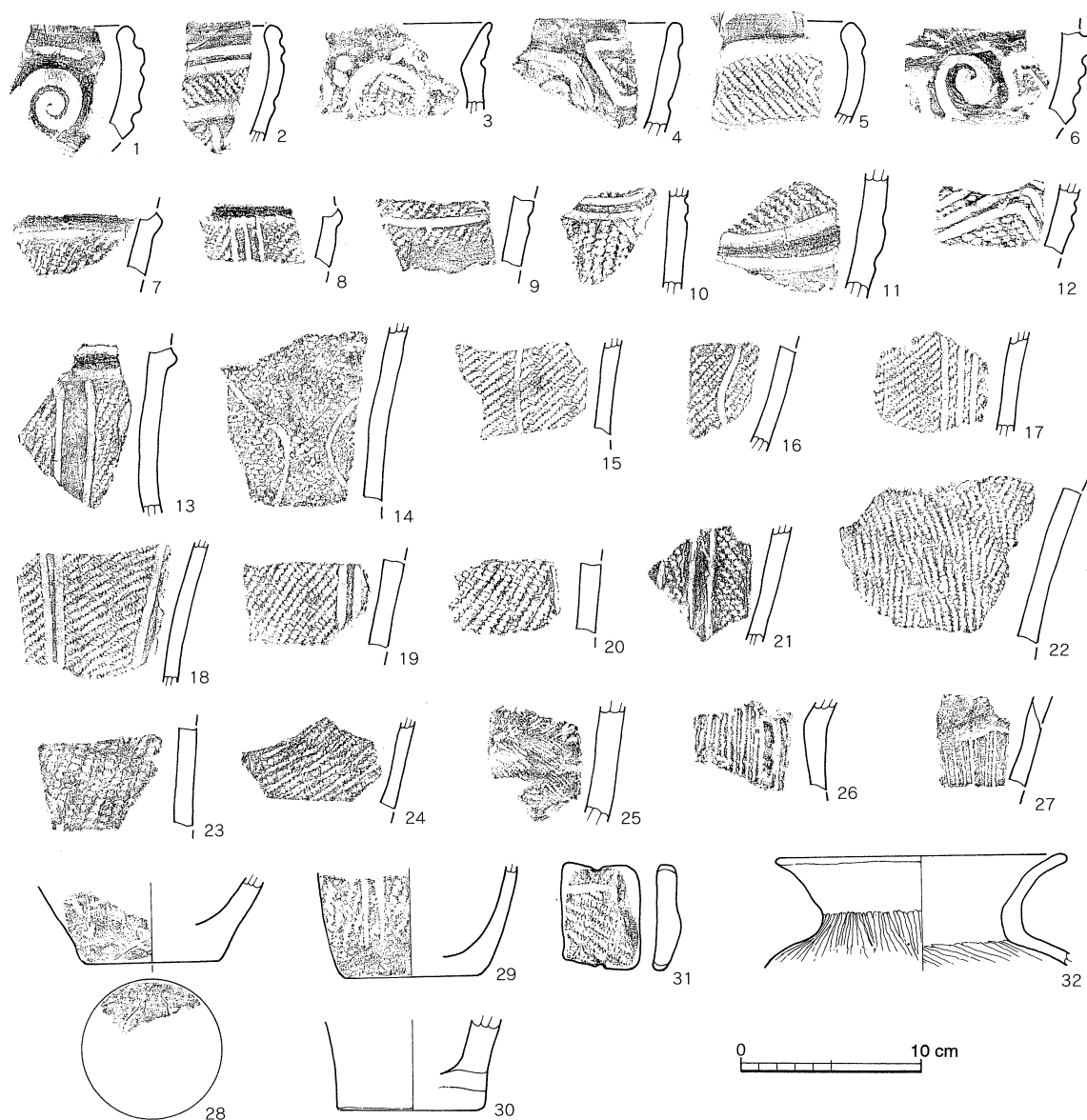


第17図 9bトレンチ第1号住居跡および第1号土坑確認状況と出土遺物実測図

10a トレンチ (第15・22図 PL.2)

谷頭から南東方向に向かって緩傾斜する地形で、トレンチの中央付近から東側が傾斜地にかかる。表土層は薄く、30cm前後の表土を除去すると基盤層であるローム層に達する。総長73.5m、調査面積は147m²を測る。ほぼ全面から遺構が確認されており、住居跡4軒、土坑3基以上、溝状遺構3条が検出されている。なお、トレンチ中央の西側に黒色土の規模の大きな落ち込みがあり、覆土の状態から判断して、中近世以降の比較的新しい時期に属するものと推定される。

出土遺物(第22図No1~3)は少ないが、トレンチ中央付近のローム層直上から頁岩製のナイフ形石器1点出土している。1は縦長剥片を素材とし、先端部をわずかに欠損しているが、遺存状態は良好である。二側縁加工で、背潰し加工は急角度を有する。現存する長さ4.19cm、最大幅1.29cm、厚さ0.66cmを測る。重さは4.06gである。No2は縄文時代中期後半・加曾利E式土器の深鉢胴部破片である。単節LR縦位回転によって施文している。No3は近世土器・焙烙の口縁部破片である。口唇部は幅広に造り出され、さらに凹帯が巡る。胎土に微細な雲母片を多く含む。



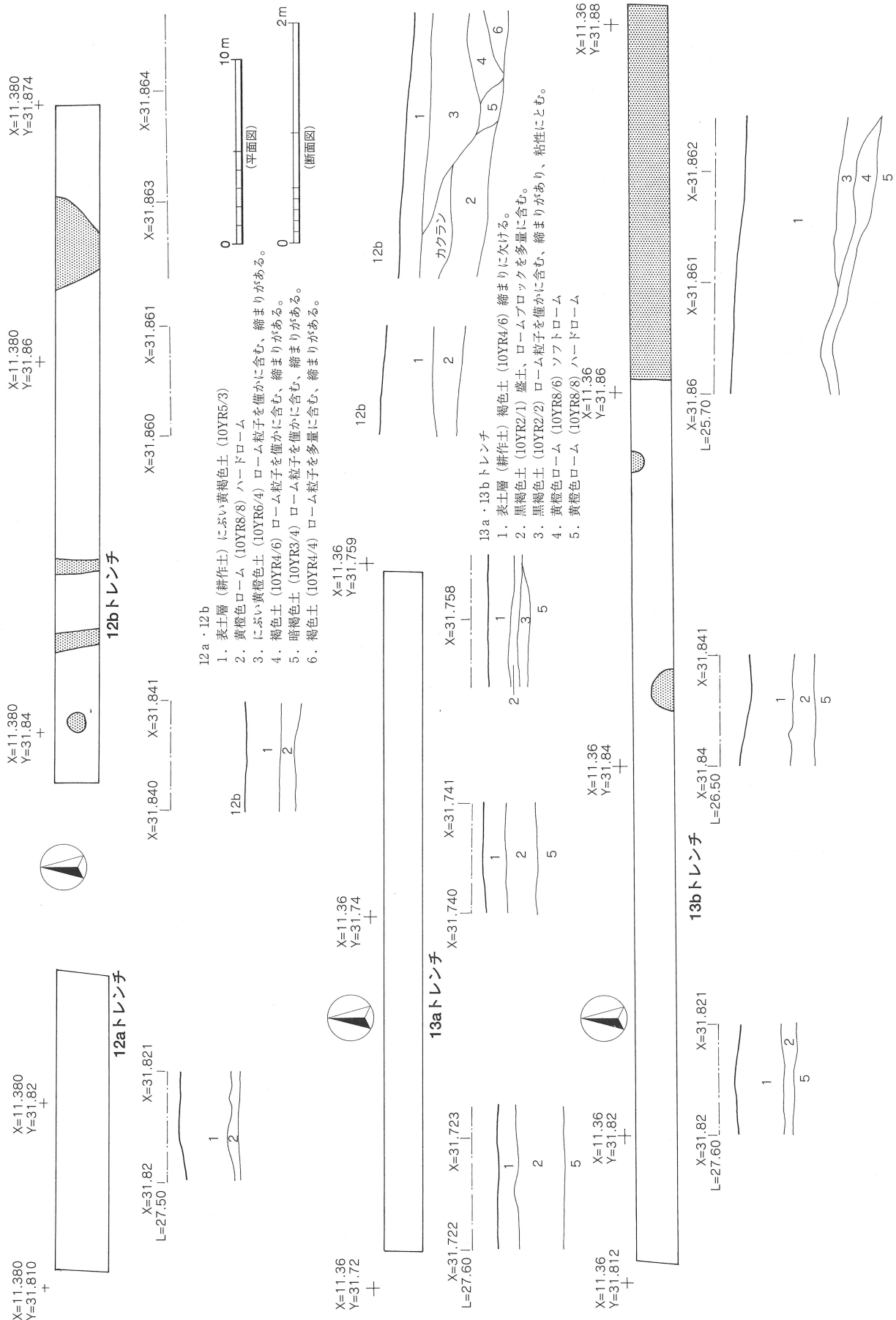
第18図 9bトレンチ出土遺物実測図

10cトレンチ (第15図)

10aトレンチと未買収地を挟んで東側に延長するように設定されている。東側の谷面に向かって緩傾斜する地形を呈する。総長9m、調査面積18m²を測る。現状は荒地である。表土層は厚く50cmでローム層に達する。トレンチ東端で縄文時代と思われる遺構が確認された。遺物の出土はなかった。

11aトレンチ (第15・22図 PL.2)

谷頭部の北側で、谷部の傾斜にほぼ平行して設定されている。総長91m、調査面積182m²を測る。表土層は30~50cmで地山であるローム層に達する。検出された遺構は、建物跡1軒、竪穴住居跡2軒、土坑3基、溝状遺構1条である。とくにトレンチ東側寄りに礎石を伴う建物跡が検出された。時期は中世以降と思われるが、本調査の結果を期待したい。やはり西端近くにも比較的範囲の広い黒色土の落ち込みが確認された。顕著な遺物はないものの、やはり中近世以降の遺構と考えられた。



第19図 12a・12b・13a・13bトレンチ実測図

第22図No.4～6は出土遺物で、No.4・5は縄文時代中期後半・加曾利E I式土器の深鉢胴部破片である。No.6は土器・灯明皿（小皿）で、ロクロ回転で成形されている。

12a トレンチ（第19・22図）

谷頭部に直交するように設定されているトレンチで、谷部の中央を東側に向かって傾斜していく。総長16m、調査面積32㎡を測る。表土下40cmで地山であるローム層に達する。ここでの遺構の確認はできなかったが、第22図No.7・8で図示した遺物は縄文時代中期後半・加曾利E I式土器で、No.7はキャリパー形の深鉢口縁部破片である。隆帯による区画文をもつ。No.8は口縁部が外反する深鉢で、口縁部は無文となる。

12b トレンチ（第19・22図）

12a トレンチに延長するもので、谷部中央から東に大きく傾斜するトレンチで、西端部から低位部の東端部の比高差は約2.5mある。総長37m、調査面積74㎡を測る。また表土層は東端から中央部にかけては30～50cm、西側では20cmである。ここでは遺構として土坑1基、溝状遺構3条検出された。出土遺物は縄文土器が主体で、第22図No.9～12を図示できた。No.9は小突起を有する深鉢口縁。No.10は口縁部がわずかに内湾する深鉢。No.11は胴部破片。No.12は土器片錘である。

13a トレンチ（第19図）

谷頭上部の平坦面に設定している。総長37m、調査面積74㎡を測る。表土層は耕作土で、さらに大部分の表土層直下は二次堆積の比較的新しい盛土によって整地されており、全体的に攪乱が著しいトレンチである。ここでは地山のローム層まで30～60cmあるが、かろうじて西端において表土層下に薄層（10cm程度）の黒色土層が残存している。なおここでは遺構・遺物とも検出されなかった。

13b トレンチ（第19・22図 PL.2）

13a トレンチの延長で、谷頭中央部の傾斜のある地形上にトレンチが設定されている。総長69.5m、調査面積139㎡を測る。トレンチ東端と低位部の西端との比高差は約3mと比較的強い傾斜面を呈している。表土層は西側の平坦面では30～40cmで地山のローム層に達し、しかもローム層もほぼ平坦である。しかし、トレンチ東側約1/3ほどから広範囲の黒色土（10YR1.7/1）の落ち込みが確認され、溺れ谷部であることが判明した。ここでは土坑2基が検出されている。また遺物として第22図No.13～16が出土しており、No.13～15は縄文時代中期後半・加曾利E I式土器で、No.13は口縁部の破片。区画内は短沈線によって充填されている。No.14は深鉢の胴部破片。いずれも加曾利E I式である。No.15は壺の胴部破片である。No.16は砥石である。谷部の表土層下位、黒褐色土下層から検出された。端部が欠損しており、現存する長さは9.95cm、最大幅3.72cm、厚さ3.4cmを測る。

14a トレンチ（第20図）

台地平坦面に設定されたトレンチで、総長31m、調査面積62㎡を測る。表土層は耕作により著しく攪乱されているが、ここから縄文時代中期末葉・加曾利E IV式期の住居跡1軒と土坑1基さらに近代以降の溝状遺構1条が確認された。北側に隣接する13aトレンチおよび南側の15aトレンチともに遺構の検出がなかったため、遺構の属する時期等を考慮しながら、これ以上遺跡として拡大することはないと判断し、住居跡を中心とする区域を本調査区として拡張することとなった。住居跡および土坑については次節において詳述する。

14b トレンチ（第20・22図）

14a トレンチの東側に延長されたトレンチである。ここは北斜面を呈する谷部南側に設定されている。総長72m、調査面積142㎡を測る。表土層はすべて耕作によって攪乱を受けており、地山のローム層までは30～50cmである。ここでは住居跡1軒、土坑10基、溝状遺構1条確認されている。出土遺物は少ないが縄文

14aトレンチ

1. 表土層 (耕作土) 褐色土 (10YR4/4) 締まりに欠ける。
2. 黒褐色土 (10YR2/2) 耕作土、ローム粒子を多量に含む、締まりに欠ける。
3. 褐色土 (10YR4/3) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
4. 黄褐色ローム (10YR8/8) ソフトローム

X=11.34
Y=31.76
+

X=11.34
Y=31.75
+

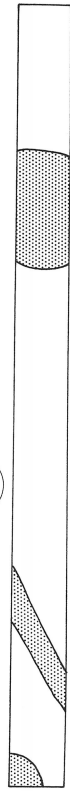
X=11.34
Y=31.728
+

X=11.34
Y=31.82
+

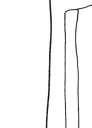
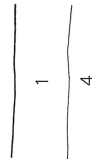
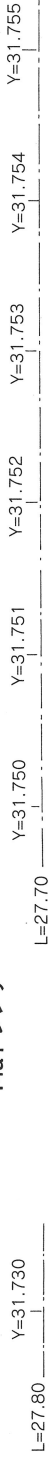
X=11.34
Y=31.84
+

X=11.34
Y=31.86
+

X=11.34
Y=31.88
+



14aトレンチ

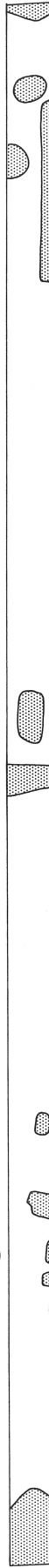


X=11.34
Y=31.813
+

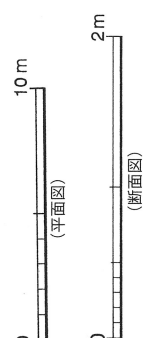
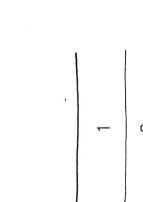
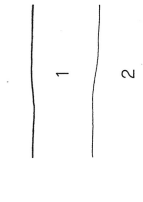
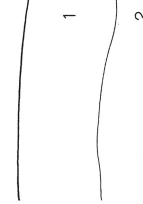
X=11.34
Y=31.84
+

X=11.34
Y=31.86
+

X=11.34
Y=31.88
+



14bトレンチ



1. 表土層 (耕作土) 褐色土 (10YR4/4) 締まりに欠けバサバサしている。
2. 黄褐色ローム (10YR8/8) ハードローム

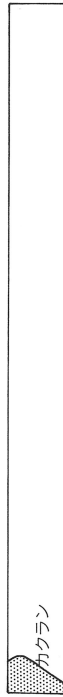
X=11.32
Y=31.70
+

X=11.32
Y=31.72
+

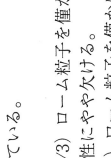
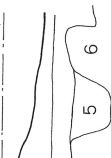
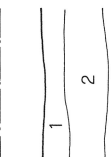
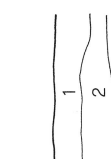
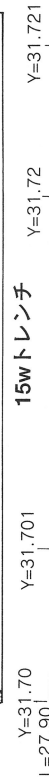
X=11.32
Y=31.744
+

X=11.32
Y=31.76
+

X=11.32
Y=31.88
+



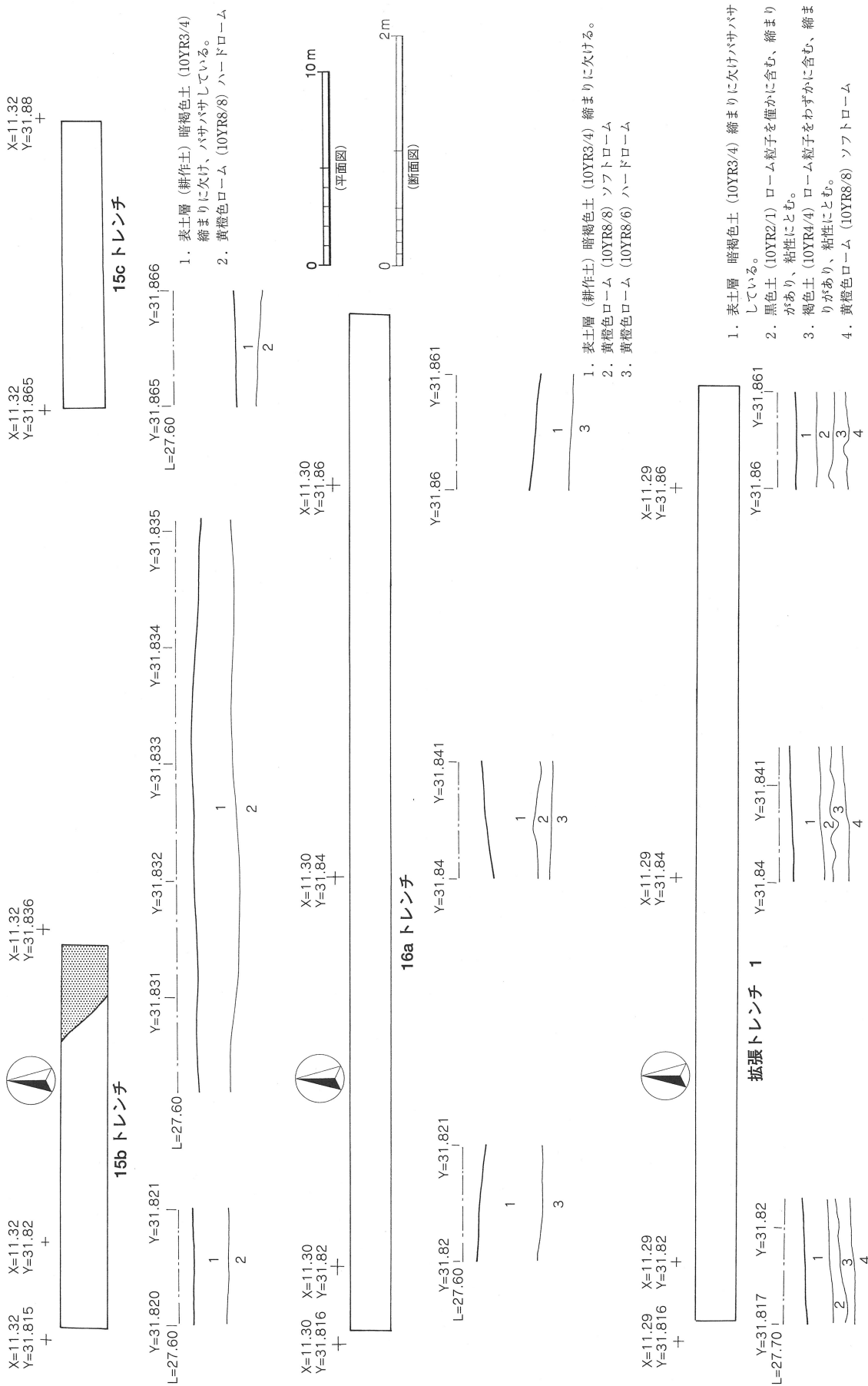
15aトレンチ



15w・15aトレンチ

1. 表土層 (耕作土) 暗褐色土 (10YR3/4) 締まりに欠け、バサバサしている。
2. 盛土
3. 黒褐色土 (10YR2/3) ローム粒子を僅かに含む、締まりにやや欠ける。
4. 褐色土 (7.5YR4/4) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
5. カクラン
6. 黄褐色ローム (10YR8/8) ハードローム

第20図 14a・14b・15w・15aトレンチ実測図



第21図 15b-1・15b-2・16a・拡張1トレンチ実測図

土器と土器片錘を図示した。第22図No17は中期後半・加曾利E式の深鉢胴部破片である。No18はやはり中期後半・加曾利E式の土器片錘である。この区域は今回の本調査対象区となった。

15w トレンチ (第20・22図)

台地平坦面に設定されたトレンチである。総長27m、調査面積54m²を測る。表土層は盛土あるいは耕作によって大きく改変され、状態は不良である。地山であるローム層までは20～40cmである。こうした攪乱のなか、西端部で僅かな黒色土の落ち込みを確認した。しかし、周辺の耕作による攪乱が著しく、明瞭な遺構として捉えることはできなかった。また遺物は縄文土器のみで、第22図No19～24はいずれも中期後半・加曾利E式期、No19は加曾利E式末期・EIV式の口縁部破片である。

15a トレンチ (第20図)

15w トレンチの東側に延長されたもので、台地平坦面に設定された。総長14.5m、調査面積29m²を測る。やはりここでも表土層は攪乱が著しく、状態は不良であった。地山のローム層まで40cmである。遺構は検出されていない。遺物はごく僅かに出土したが、図示できるものではなかった。

15b トレンチ (第21・22図)

15a トレンチの延長線上であるが、離れて設定された。谷頭部の南西に位置し、わずかに東側に緩傾斜をもつものの、ほぼ平坦な地形を呈する。総長20m、調査面積40m²を測る。ここに古墳時代前期の住居跡1軒が検出された。また遺物として第22図No25は縄文時代前期中葉・黒浜式土器である。胎土に繊維を多量に含む。

15c トレンチ (第21・22図)

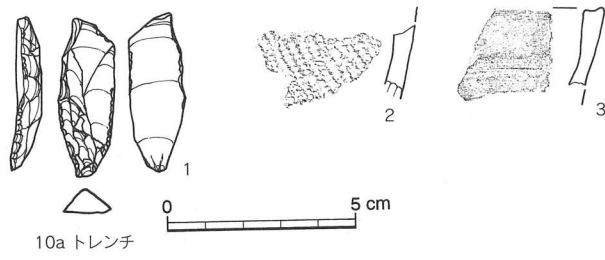
15b トレンチの東側に延長したトレンチで、北側が谷頭部で東側が谷部にあたる台地縁辺部に設定された。ただし、トレンチの比高差はほとんどない。総長15m、調査面積30m²を測る。表土層は耕作土で、地山のローム層までは薄くわずかに20cmである。顕著な遺構は確認できず、遺物として第22図No26の縄文時代中期後半・加曾利E式土器が1点のみ検出している。

16a トレンチ (第21・25図)

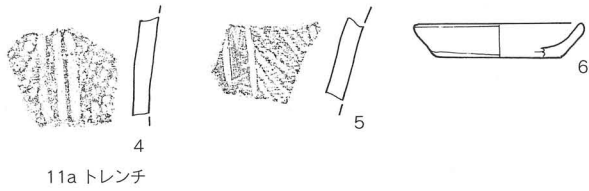
谷頭部の南側で、台地がほぼ平坦を呈する地形上に設定された。総長52m、調査面積104m²を測る。表土層は耕作によって攪乱され、全体的に薄層で平均すると40cm前後である。明瞭な遺構は検出できなかったが、トレンチ東側に硬化面が確認された。時期・性格は不明である。また遺物は縄文時代が主体となる。第25図No1～9は縄文土器、No10は磨石である。No1は前期中葉・黒浜式土器で胎土に多量の繊維を含む。No2～9は中期後半・加曾利E式土器である。No10は縄文時代に属する磨石である。

拡張トレンチ1 (第21・25図)

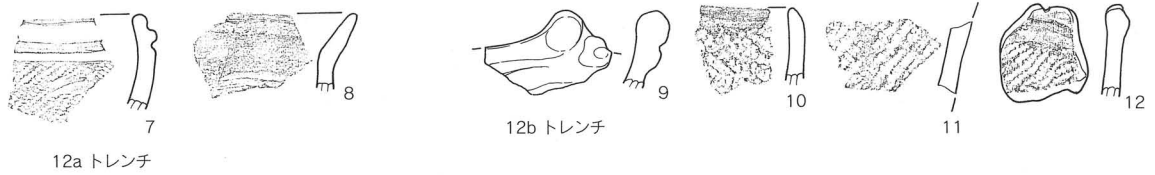
16a トレンチと17a トレンチに挟まれた平坦部に設定されたトレンチである。総長48m、調査面積96m²を測る。表土層は20～30cmの耕作土で、平均した層厚を呈し、表土層下地山のローム層まで30cm前後黒色土や褐色土が残存している。明瞭な包含層を呈していないが、中近世遺構と古墳時代の遺構を判断する鍵層となっている。顕著な遺構はないが、遺物として縄文土器、中近世遺物が出土している。第25図No11は縄文時代前期中葉・黒浜式土器の深鉢底部破片である。やや上げ底気味の底部をもち、胎土に多量の繊維を含む。No12は中期後半・加曾利E I式深鉢の口縁部破片。口縁が僅かに外反し、無文となる。頸部は並列する円形刺突文が巡る。No13も深鉢の口縁部破片である。No14は常滑系陶器の甕胴部破片。焼成は良好で、胎土は灰色を呈する。時期は不明。



10a トレンチ

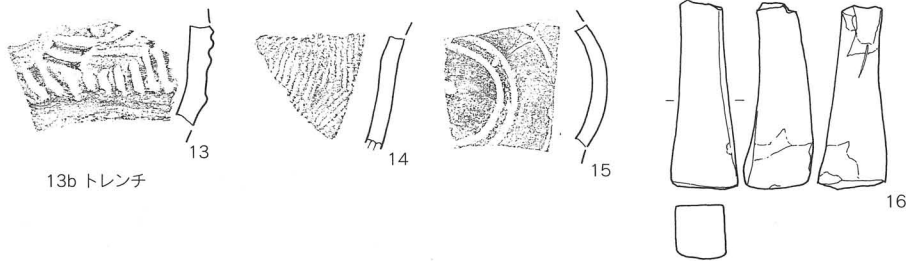


11a トレンチ

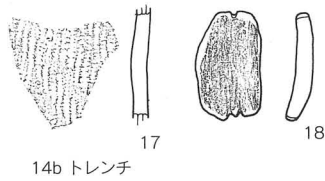


12a トレンチ

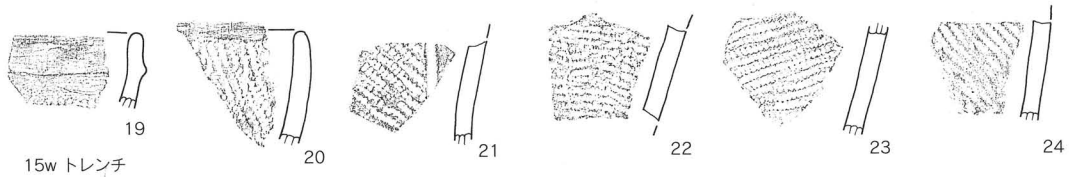
12b トレンチ



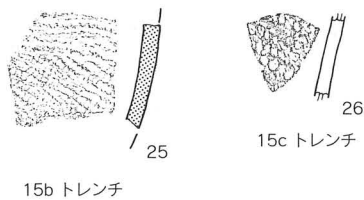
13b トレンチ



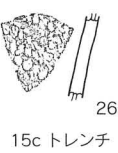
14b トレンチ



15w トレンチ



15b トレンチ

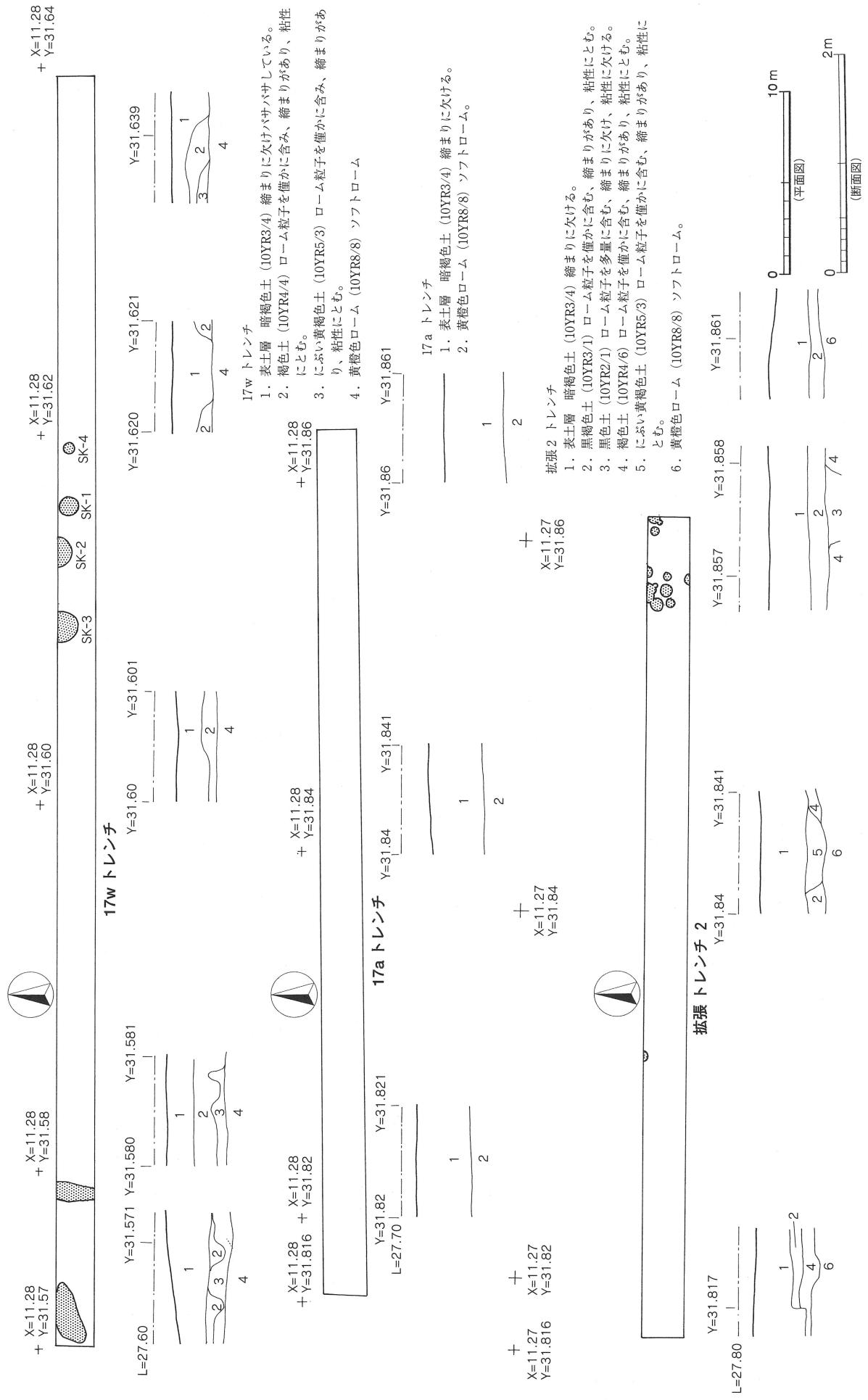


15c トレンチ

- | | |
|---------------------|--------------------|
| 1 ~ 3 (10 a トレンチ) | 19 ~ 24 (15w トレンチ) |
| 4 ~ 6 (11 a トレンチ) | 25 (15 b トレンチ) |
| 7 · 8 (12 a トレンチ) | 26 (15 c トレンチ) |
| 9 ~ 12 (12 b トレンチ) | |
| 13 ~ 16 (13 b トレンチ) | |
| 17 · 18 (14 b トレンチ) | |



第22図 10a・11a・12a・12b・13b・14b・15w・15b・15c トレンチ出土遺物実測図



第23図 17w・17a・拡張2 トレンチ実測図

17w トレンチ (第23・25図 PL.2・3)

常名台の台地ほぼ中央に位置する平坦部に設定したトレンチである。総長77.5m、調査面積155m²を測る。表土層は平均30cm前後と均一しており、全面耕作土であるが、耕作土直下から地山のローム層まで10～20cmは褐色土および漸移層であるにぶい黄褐色土に覆われており、耕作が深くまで及んでいないことを示していた。ここから縄文時代中期末葉の加曾利E IV式期の土坑4基を検出した。第1～3号土坑は規模も大きく遺存状態は良好である。周辺の様相から判断してこれ以上広範囲に遺構の分布は及ばないものとして、この地区を本調査域とした。詳述は次節において行う。なお、トレンチ確認調査の際に遺構以外に遺物の出土がある。第25図No15～18で、No15は加曾利E IV式の深鉢口縁部破片。微隆帯による逆U字区画紋を配する。No16・17は土器片錘である。やはり中期末葉に比定される。No18は須恵器破片である。表面に横位の叩き目が施されており、9世紀代に比定される。

17a トレンチ (第23・25図)

17w トレンチの延長線上に設定されているが、距離は離れている。北側に谷頭部を臨むがここはほぼ平坦な地形を呈している。総長47m、調査面積94m²を測る。表土層は耕作土で、比較的層厚は厚く、40～50cmにおいて地山のローム層に達する。明瞭な遺構はなく、遺物も僅かに縄文土器が検出されているに過ぎない。第25図No19は縄文時代中期後半・加曾利E II式期の深鉢口縁部付近の破片。隆帯による渦巻き文が施されている。

拡張トレンチ 2 (第23・25図)

17a トレンチと18a トレンチに挟まれた平坦面に設定された。総長44.5m、調査面積89m²を測る。表土層は耕作土で30～40cmでほぼ均一している。この表土層下から地山のローム層まで20cmほど黒褐色土および褐色土が良好に残存し、耕作が深くまで及んでいないことを示している。ここから東端部を中心に径70～80cmを最大に40cm前後の柱穴と思われるピットが8基検出された。また柱穴内から土師質の土器が出土しており、明らかに中近世の建物跡であることを示している。これら柱穴群がどのような性格をもつ建物であるかについては本調査に委ねるほかない。なお、当トレンチのほぼ中央部からも同様な柱穴跡が確認されており、広範囲におよぶ建物跡群の存在が想定できる。遺物は土師質の土器以外に縄文土器の出土がある。第25図No20～23のうち、No20～22は縄文時代前期中葉・黒浜式土器である。胎土に多量の繊維を含む。No23は中期後半・加曾利E式土器の深鉢胴部破片である。

18b トレンチ (第24図)

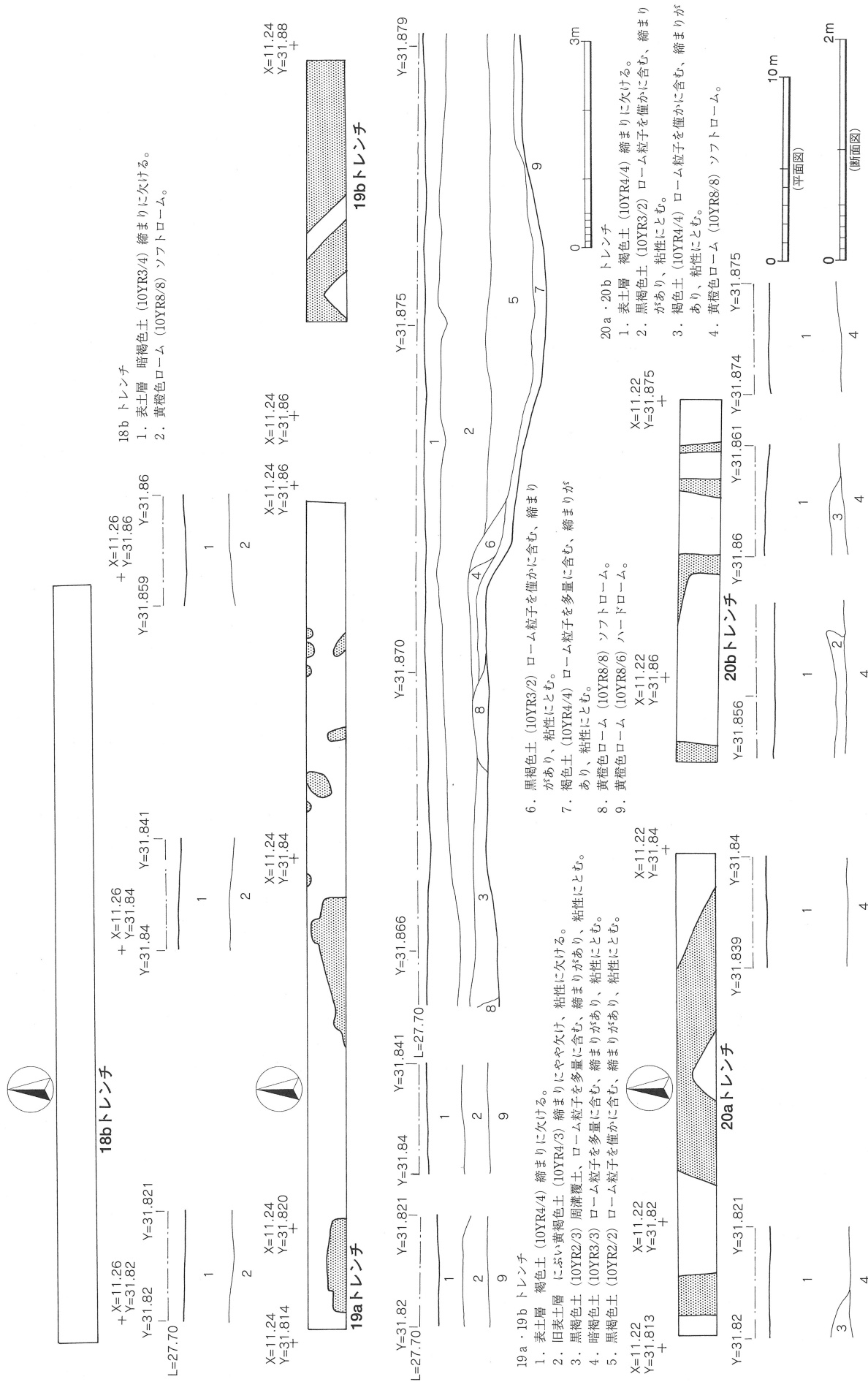
南台地突出部のほぼ中央で、突出部に平行して設定したトレンチである。総長41m、調査面積82m²を測る。表土層は耕作土で、平均40cm前後で地山であるローム層に達する。ここでは遺構は検出されなかった。また図示できる遺物も出土していない。

19a トレンチ (第24図 PL.3)

やはり南台地突出部のほぼ中央を平行して設定したトレンチである。総長44.5m、調査面積89m²を測る。表土層は比較的薄層で、20～30cmで地山のローム層に達する。ここから遺構として住居跡4軒、土坑9基が検出されたが、各遺構とも遺物の出土はなく、時期を判定する材料に欠けるが、古墳時代に属するものと思われる。

19b トレンチ (第24図 PL.3)

19a トレンチの東側に延長するトレンチで、ほぼ平坦な地形を呈する台地上に設定されている。総長14m、調査面積28m²を測る。ここは新旧2層の耕作土が確認されており、層厚は60～90cmと厚く、間層はなく地



第24図 18b・19a・19b・20a・20b トレンチ実測図

山のローム層に達する。表土層除去した後、広範囲の黒色土の拡がりが見られ、これが古墳（方墳）の周溝であることが判明した。しかも2基存在することも明らかになった。図示できる遺物は出土していない。

20a トレンチ（第24図）

南台地の突出部に平行して設定したトレンチで、ほぼ平坦面を呈する。総長26m、調査面積52m²を測る。表土層は40～50cmと均一しているが、間層はなく地山のローム層に達する。ここでも表土層除去後、広範囲の黒色土の落ち込みが確認されている。トレンチ中央から東側方向にかけて溝状の遺構は古墳（方墳）の周溝であることが判明した。また西端に近い溝状遺構は覆土の状況から判断して、比較的新期に構築されたものと判断した。なお、これら遺構の時期を確定するほどの遺物の出土はない。

20b トレンチ（第24・25図 PL.3）

20a トレンチの東側に延長して設定されたトレンチである。総長18.5m、調査面積39m²を測る。表土層は比較的厚層で、平均50cm前後で、間層なく地山のローム層に達する。ここではトレンチに直交するように4条の溝状遺構が検出された。西から第1～4号溝と命名したが、時期や性格を判断する遺物の出土に恵まれず、詳細は本調査に委ねたい。なお、第25図No24・25は縄文時代前期中葉・黒浜式土器で、胎土に多量の繊維を含む。

21a トレンチ（第25・26図 PL.3）

南側に傾斜面をもつ台地平坦面に設定したトレンチで、谷方向と平行する。総長27m、調査面積54m²を測る。表土層は50～60cmで間層もなく、地山のローム層に達する。ここでは西側寄りで「ハ」の字状を呈する黒色土の落ち込みが確認された。古墳（方墳）の周溝と判断した。図示できる遺物は、すべて縄文土器である。第25図No26～33は縄文時代前期中葉・黒浜式土器である。胎土に多量の繊維を含む。No24は中期後半・加曾利E式土器である。

22 トレンチ（第26図）

南側に傾斜する斜面部の縁辺で、谷部と平行して設定されたトレンチである。総長39.5m、調査面積79m²を測る。表土層は平均40cm前後と均一しており、間層もなく地山のローム層に達する。ここでは住居跡2軒、土坑1基、溝状遺構3条確認されている。各遺構からの出土遺物はなく、時期を特定できないているが、住居跡は古墳時代、溝状遺構は中近世に属するものと判断した。しかし、遺構の全体を把握できていないため断定はできない。

イ-トレンチ（第26図 PL.3）

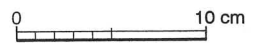
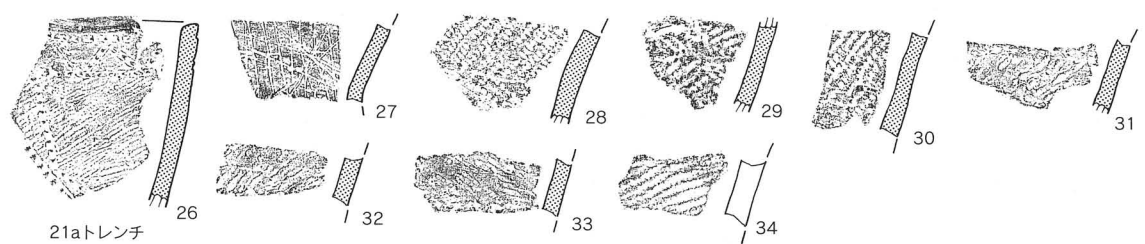
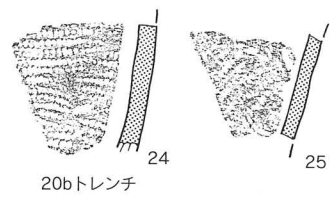
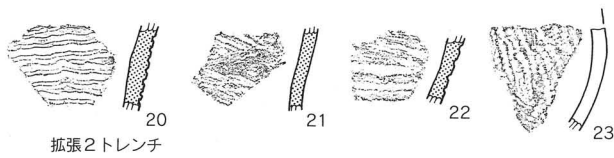
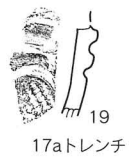
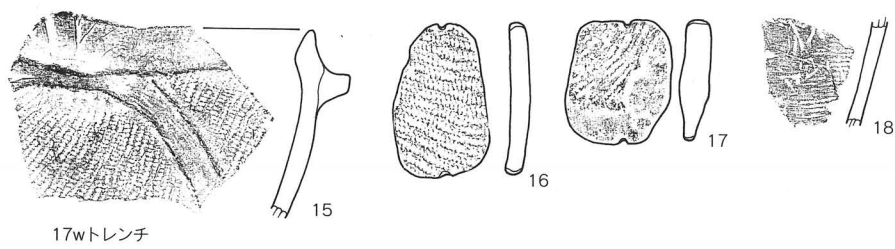
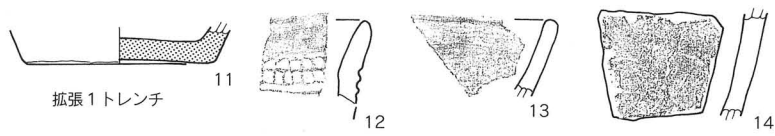
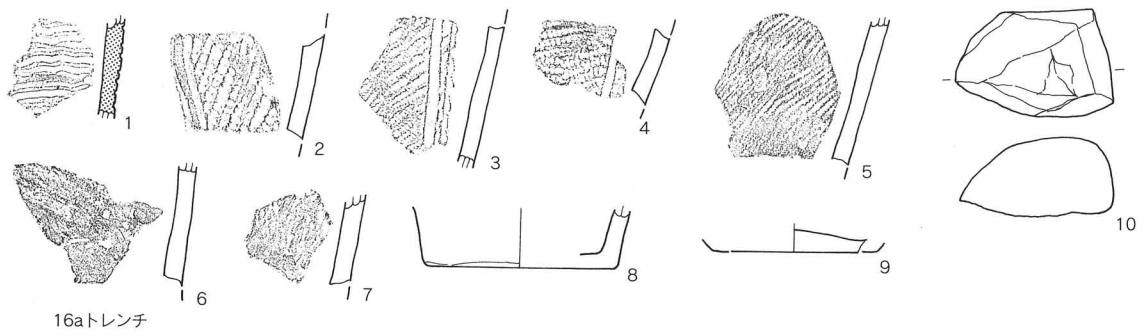
常名台地のほぼ中央の平坦部で、東西方向のトレンチを設定した。トレンチ中央で方形のコーナー部分に相当する黒色土の落ち込みが検出された。この遺構が住居跡であるのか、あるいは溝であるのか判断に苦慮したため、落ち込みの方向を検討しながら西側に拡張し、遺構の性格を確認することとした。結果古墳（方墳）の周溝であることが判明した。したがってトレンチの総長は30.5m、拡張部を含めた調査面積は84m²を測る。なお、表土層は耕作土と旧表土層の2層で30cm前後と均一し、間層はなく、地山のローム層に達する。古墳の周溝以外には近年の溝状遺構1条が検出されている。なお、図示できる遺物の出土はない。

ロ-トレンチ（第26図）

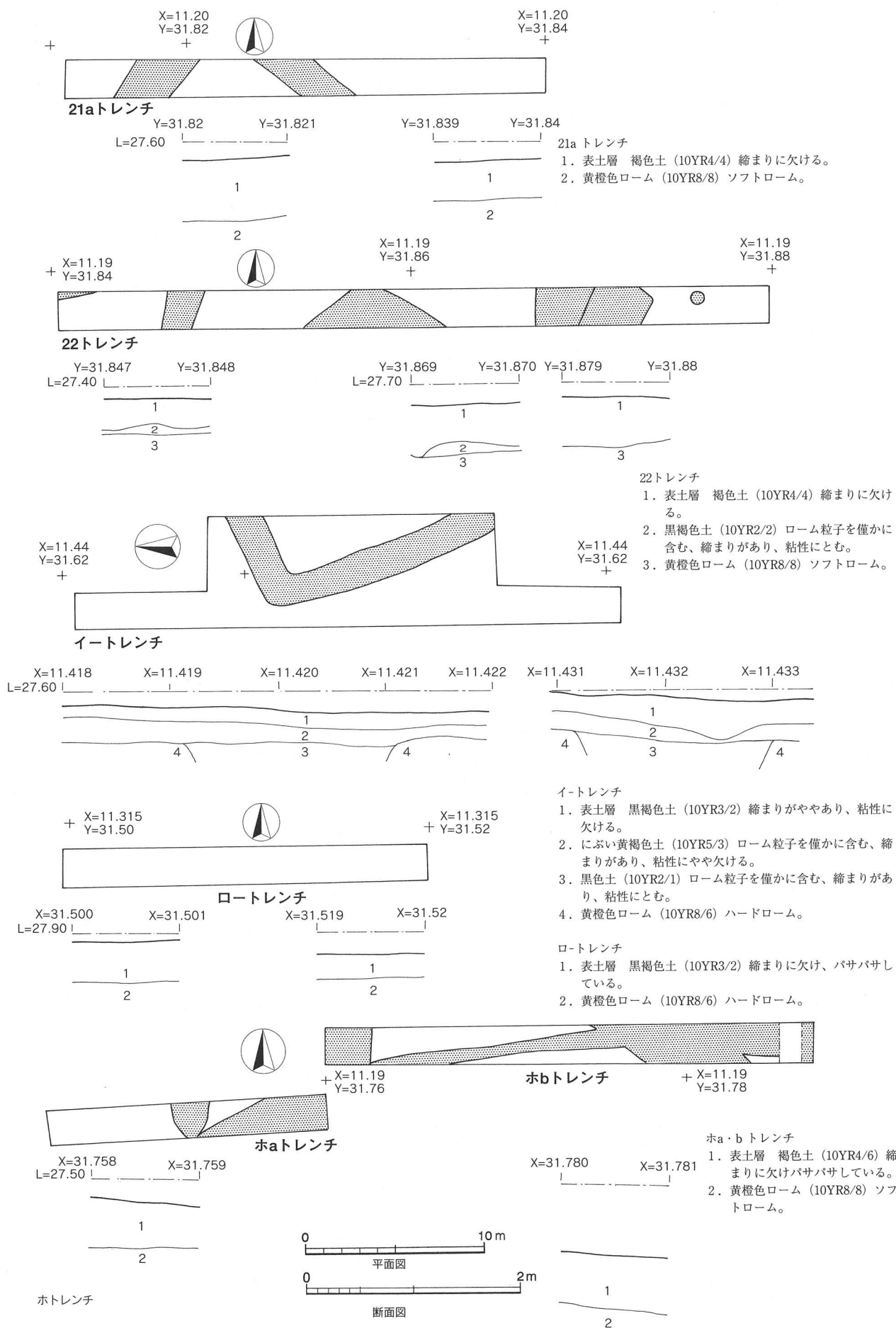
今回の確認調査で最も西側に設定したトレンチである。台地の中央やや南側に位置し、平坦部である。総長20.5m、調査面積41m²を測る。表土層は20cm前後と薄層で、遺構・遺物は検出されていない。

ホa-トレンチ（第26図）

常名台の南端で、南側が急傾斜する台地縁辺に、谷方向に平行してトレンチを設定した。総長15.5m、調



第25図 16a・拡張1・17w・17a・拡張2・20b・21aトレンチ出土遺物実測図



第26図 21a・22・イ・ロ・ホa・ホbトレンチ実測図

査面積31m²を測る。表土層は耕作土で、40cm前後と均一している。間層なく地山のローム層に達する。確認された遺構は東端で北東－南西方向に走る溝状遺構が検出された。溝の幅からみて古墳の周溝と判断した。また土坑1基がトレンチ中央付近で確認されている。遺物の出土はない。

ホb-トレンチ（第26図）

ホaトレンチの東側で基本杭の反対側である北側に設定した。総長27m、調査面積54m²を測る。表土層は耕作土で、間層もなく50cm前後で地山のローム層に達する。遺構はホaトレンチの東端部で検出された古墳の周溝に繋がる溝状遺構が西端で確認されている。また東側にも溝状遺構と思われる黑色土の落ち込みが広範囲に広がっている。顕著な遺物の出土はない。

第4節 遺構調査

確認調査の結果、遺構の検出状況から、集落等の広がり期待できないと判断し、引き続き本調査に移行した箇所が2地点ある。台地の中央付近に位置する14aトレンチと17wトレンチである。それぞれ縄文時代中期末葉に比定される遺構が検出されたところで、14aトレンチでは住居跡1軒、土坑1基が、また17wトレンチでは土坑4基の発掘調査を行った。

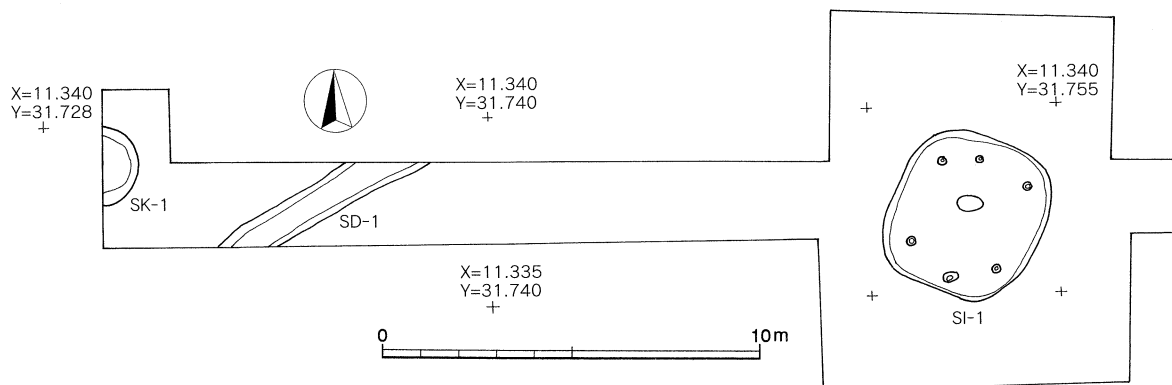
1) 14aトレンチの調査

(a)第1号住居跡(14・S I-1)(第27~31図 PL.4・7・8)

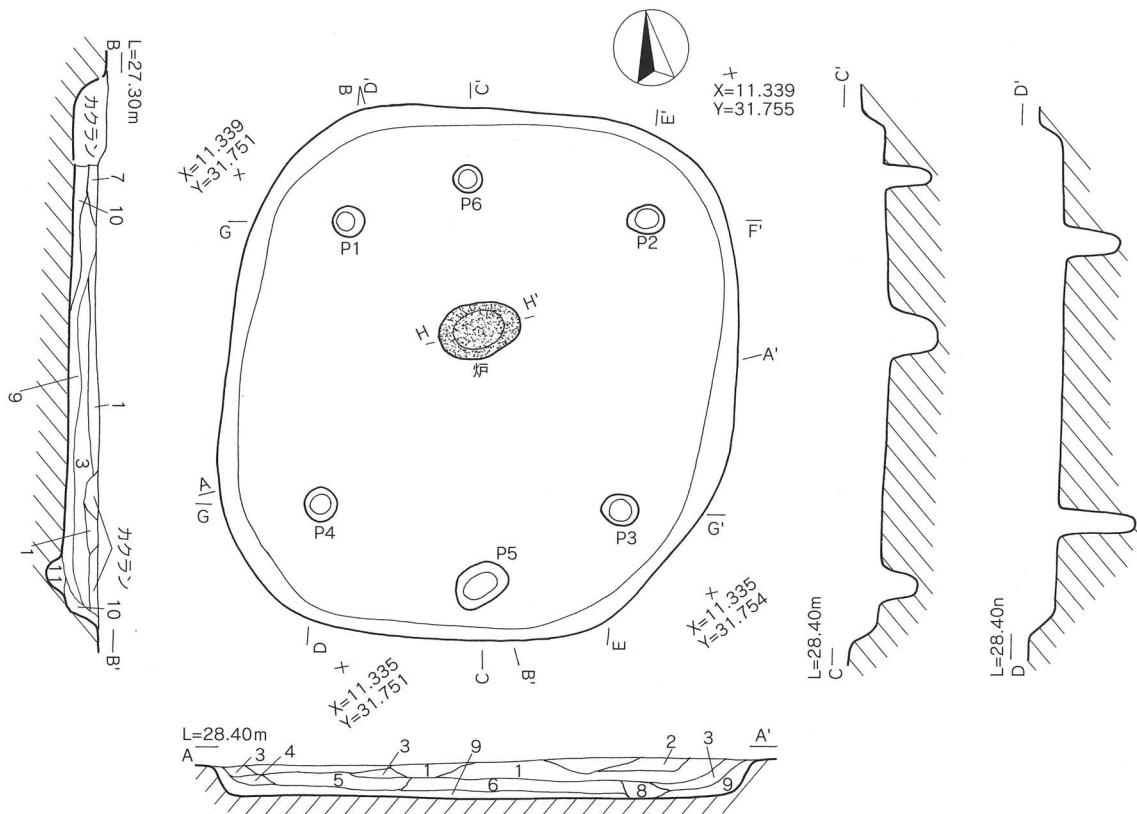
遺構の平面プランは、隅丸長方形を呈し、規模は長軸長4.21m、短軸長4.00m、壁高24cmを測る。主軸方位はN-31°-Eを指す。床面は直床で、部分的に硬化面が観察できるが、とくに範囲として捉えることは困難であった。したがって全体的には軟弱で、貼床であったかは不明瞭である。ただし、微妙な凹凸があるものの、ほぼ平坦である。

支柱穴はP 1~4で柱間は2.3m×2.4mで、柱穴埋土は、総じて覆土床面直上堆積土層類似のにぶい黄橙色土(10YR6/4)が認められる。上端の最大径は、P 1が25cm、P 2が30cm、P 3が29cm、P 4が26cmで、深さはP 1が59cm、P 2が60cm、P 3が56cm、P 4が44.5cmである。断面形はほぼ逆円錐台状で、平面形は楕円形もしくは円形である。また支柱穴以外に2本のピットが検出されている。P 5は南壁際に位置し、14cm×21cm、深さ30cmの楕円形を呈し、入り口施設である梯子穴と考えたが十分検証はできていない。また反対の奥壁にあたる北壁際に10cm×12cm、深さ35cmの円形ピットが穿ってあった。支柱穴と比べるとやや小形である。床面上で確認できたため、本跡に伴うピットであることは間違いないので支柱穴と考える。炉は主軸線上の中央より北側で検出され、掘り込みの深い地床炉である。平面形は東西に長軸をもつ不正楕円形で、長軸長73cm、短軸長62cm、深さ39cmで、断面形は船底状を呈する。壁面下端から約1/3ほど被熱による赤化面が顕著にみられた。覆土も下層に焼土層が確認できる。住居跡の覆土は11層に分けられる。上層の1~3層は縄文時代の遺構覆土に堆積している土質に近似している。とくに3層褐色土(10YR4/4)は本跡の主要土層である。下層は柱穴内にも堆積していた9層のにぶい黄橙色土(10YR6/4)が床面の大部分を覆っていた。

遺物は土器を主体とし、土器片錘や有孔円板以外、土器のすべては破片である。遺物の出土状況は第29図で示したとおりであるが、床面直上はほとんどなく、床面よりかなり浮いた状態で検出されている。しかも全体的に纏まりはなく、炉を中心とした中央部から南壁付近に集中する傾向がみられるし、各壁際は極端に限定されている。わずかに土製蓋のみが南壁際に接して出土していた。

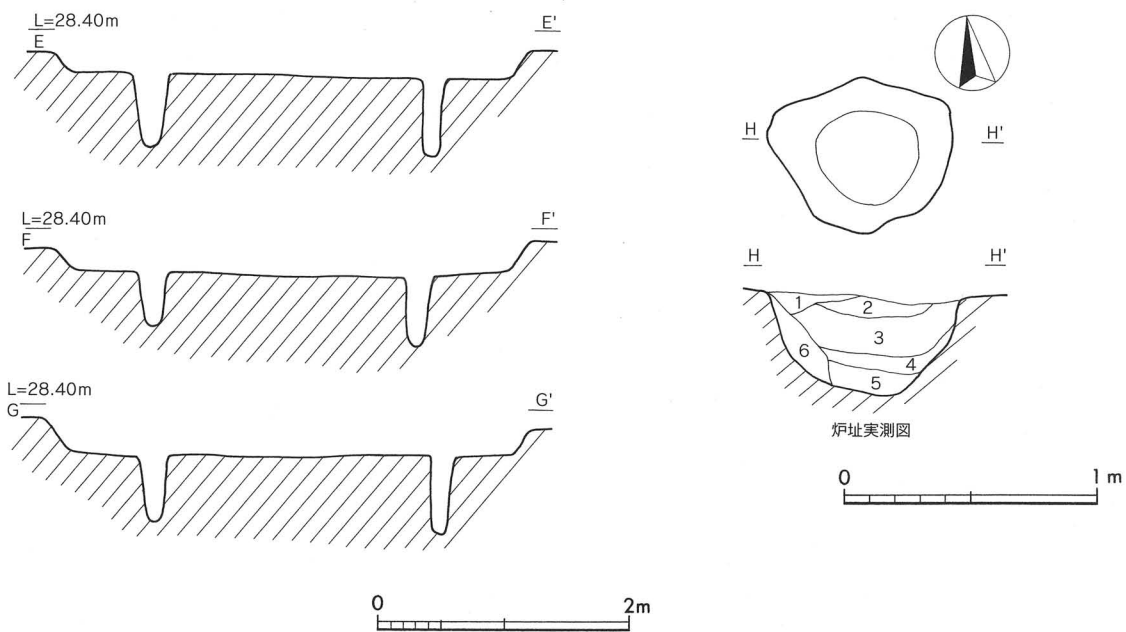


第27図 14aトレンチ遺構配置図



14 a-S I-1

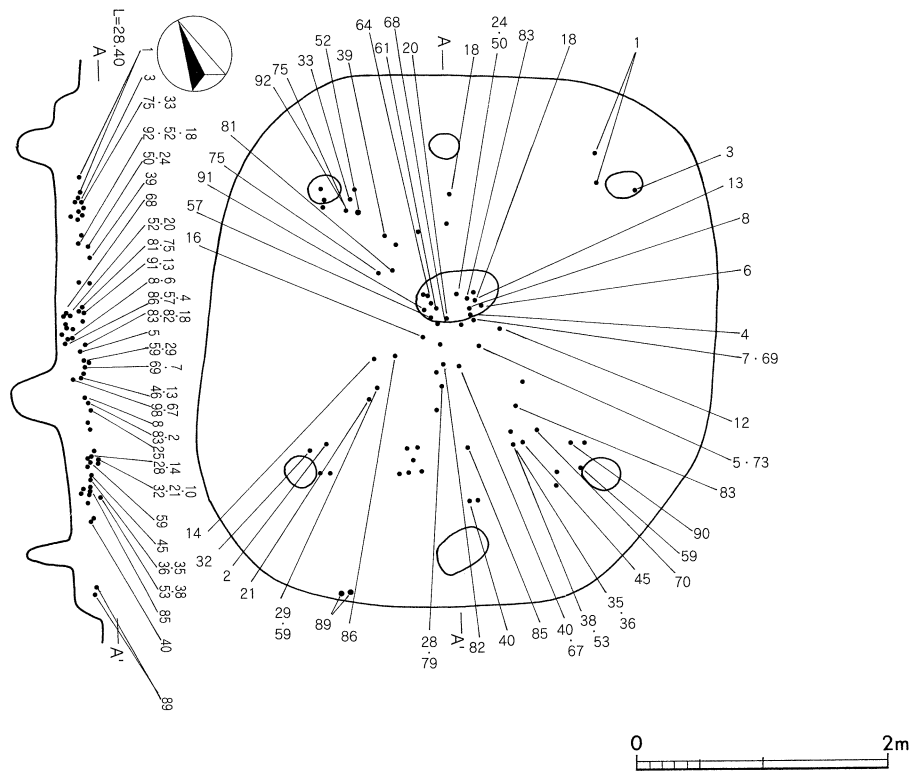
1. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒子を多く含む。締まりがあり、粘性にとむ。
2. 明黄褐色土 (10YR7/6) ローム粒子を多く含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3. 褐色土 (10YR4/4) ローム粒子を多く含む。締まりがあり、粘性にとむ。
4. 黒褐色土 (10YR3/2) ローム粒子を僅かに含む。締まりあり、粘性にとむ。
5. 黄褐色土 (10YR5/6) ローム粒子を多く含む。締まりがあり、粘性にとむ。
6. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) ローム粒子を多く含む。締まりがあり、粘性にとむ。
7. 橙色土 (2.5YR6/8) 焼土粒子を多く含む。締まりにやや欠け、粘性に欠ける。
8. 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子をわずかに含む。締まりがあり、粘性にとむ。
9. にぶい黄橙色土 (10YR6/4) ローム粒子を多く含む。締まりがあり、粘性にとむ。
10. 浅黄橙色土 (10YR8/4) ローム粒子を多く含む。締まりがあり、粘性にとむ。
11. 黄褐色土 (10YR7/8) ローム粒子を多く含む。締まりがあり、粘性にやや欠ける。



炉址

1. 明黄褐色土 (10YR7/2) ローム粒子・ロームブロックを多量に含む。締まりがあり、粘性にやや欠ける。
2. 褐色土 (10YR4/4) ローム粒子を多く含む。締まりがあり、粘性にとむ。
3. 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子を多く含む。締まりがあり、粘性にとむ。
4. 赤色焼土 (2.5YR4/8) 焼土粒子を多く含む。締まりに欠け、粘性に欠ける。
5. 暗赤褐色土 (2.5YR3/3) 焼土粒子を多く含む。締まりに欠け、粘性に欠ける。
6. 黄橙色ローム (10YR8/8) ロームブロック堆積層 粒子は粗いが、締まりがあり、粘性にとみ、堅緻である。

第28図 14aトレンチ 第1号住居跡実測図



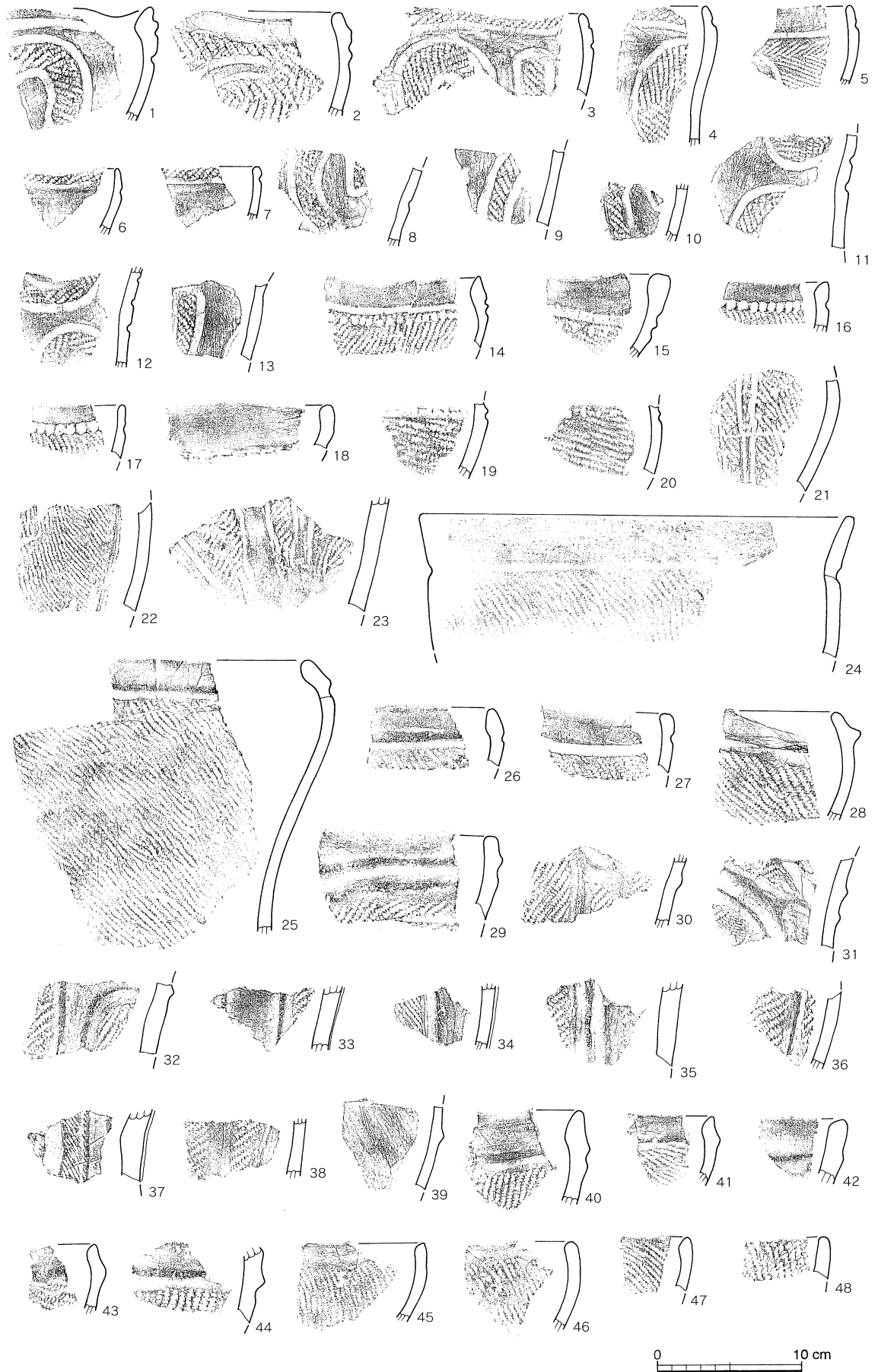
第29図 14aトレンチ 第1号住居跡遺物出土状況図

出土遺物 (第30図・第31図)

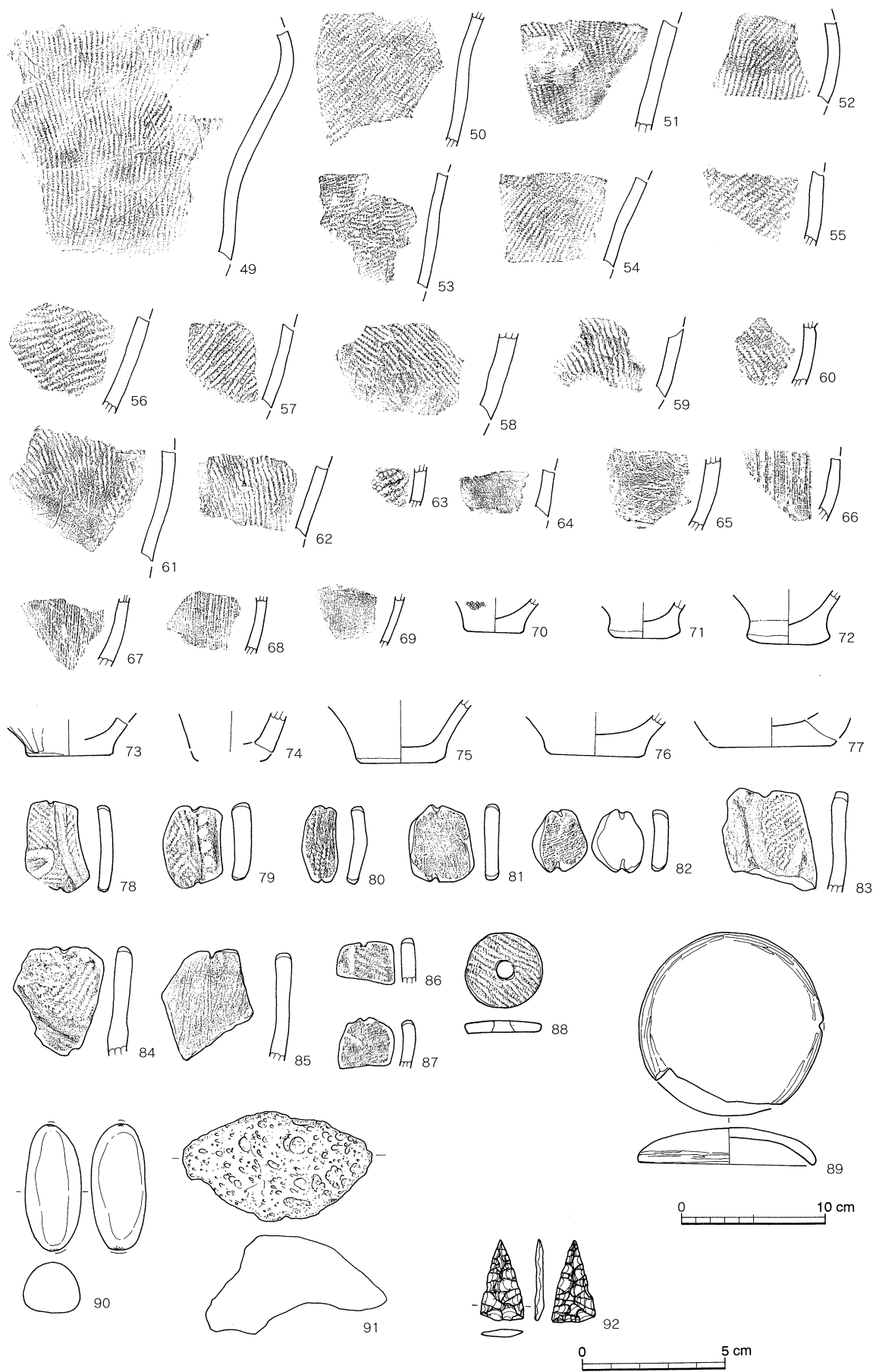
出土した土器および土製品、石製品92点を図示した。第30図No 1～48、第31図No49～77はいずれも縄文時代中期末葉・加曾利E IV式に属する土器群である。No 1～13は沈線による区画文が描かれる一群で、No 1・3～12は渦巻き区画文内に縄文を充填する。No 1・3は波状口縁を呈し、No 3はNo 4・6・7と同様に口唇部に幅狭な縄文帯を巡らす。No 2も波状口縁で、地文に単節RLが施され、渦巻区画内を磨消している。No 13は逆U字沈線文が描かれ、区画内に単節RL縄文が施文される。No 14～20は口縁下に刺突文が巡るもので、No 14は口唇部が内削状に尖り、無文の口縁下に1条の沈線を巡らし、直下に1列の刺突文を施す。地文に単節RL縄文が施文されている。No 15は口唇部が肥厚し、平坦になっている。口縁下に刺突文が巡る。No 16・17は口唇部が内削状で、刺突文が巡る。No 21～23は平行沈線内を磨消す懸垂文が垂下する。No 24～27は無文の口縁下に沈線を巡らすもので、No 24は口縁部が外反する。地文は単節RLの縦位施文である。No 25～27は口縁部が内湾する。地文はNo 24と同様、単節RL縄文を縦位施文する。No 28・29は口縁下に隆帯が巡るもので、No 28は波状口縁で、口縁に並行して隆帯が巡る。No 29は2条の隆帯による口縁区画文を配する。No 30～38は微隆起線による区画文が施されている。No 40～44は無文の口縁下に微隆起線文が巡る。No 45～48は口縁部が内湾する深鉢。口縁以下に縄文が施文されているもので、No 45・46は口唇部にわずかな無文帯をもつ。第31図No 49～63は胴部破片で、縄文が施されている。No 49は胴部がくびれ、口縁が内湾する深鉢である。地文は単節RL縄文が施文されている。No 64はナデによる擦痕。No 65～69は櫛歯状条線文が施されたもので、No 65は横位の弧状に施文し、No 66～69は縦位に施文されている。No 70～77は深鉢の底部破片である。

土製品 (第31図78～89)

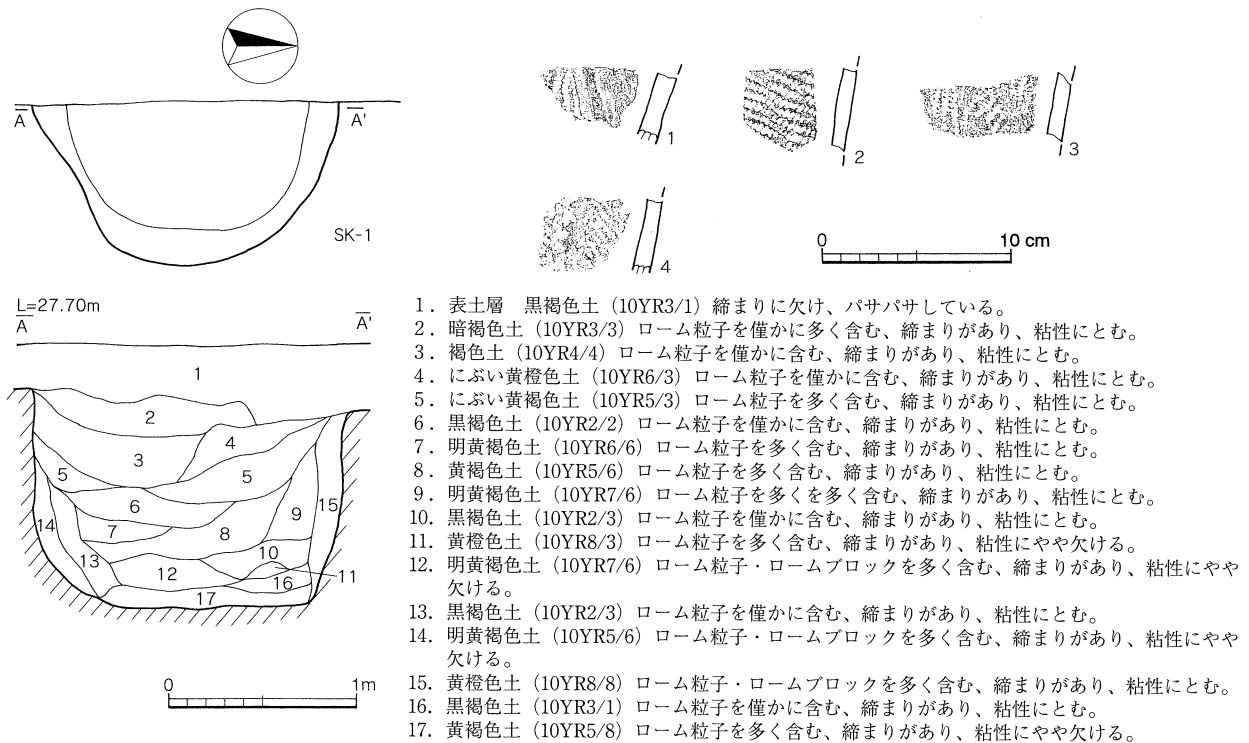
土製品として土器片利用の土錘、有孔円板および土製蓋が出土している。No 78～87は土器片錘である。



第30図 14aトレンチ 第1号住居跡出土遺物実測図 (1)



第31図 14aトレンチ 第1号住居跡出土遺物実測図(2)



第32図 14aトレンチ 第1号土坑および出土遺物実測図

No78～82は顕著な研磨が施されているもので、No78・79は利用部位が口縁部のため、口唇部を除く側面において丁寧な研磨がみられる。またNo82は糸掛け部の切り込みが深く、しかも表裏面に大きく入れているのが特徴である。No88は有孔円板である。外縁および内縁とも丁寧な研磨が施されている。No89は土製蓋である。一部口縁部を欠損するものの完存に近い。形状はほぼ円形で、断面は弧状を呈する椀形をなす。器面は細かなヘラナデによる整形が施され、全体的には粗い仕上げである。大きさは径12.8cm、器高2.47cmを測る。No90～92は石製品である。No90は棒状の自然礫の両端部に被印打痕が認められる。長さ8.95cm、幅3.97cm、厚さ3.35cm、重さ176gを測る。結晶片岩製である。No91は軽石である。横幅が13.16cmもあり、加工痕は認められなかったが、石器素材として搬入した可能性がある。No92はチャート製の石鏃である。完存品で、基部に挟りのない二等辺三角形を呈した無茎鏃である。表裏面とも丁寧な調整剥離が施されている。長さ2.84cm、幅1.59cm、厚さ0.27cm、重さ1.04gを測る。

(b) 第1号土坑 (14a・SK-1) (第32図)

14wトレンチの西端に位置する。西側半分は未買収地にかかるため、調査は東半部のみとなった。平面形は略円形である。確認面での上面南北長が最大1.6m、東西長0.86m。下面南北長1.27m、東西長0.68m。深さは最大で1.18mを測る。坑底は、やや起伏がみられるがおおむね平坦である。壁は垂直気味に掘りくぼめられ、底面近くでは外側にオーバーハングして坑底にいたる。土坑の覆土は、細かく17層に分けられるが、大きく上層、中層、下層に分層可能である。上層は褐色系土層で覆われる。確認面では暗褐色土(10YR3/3)が、その下位は褐色土(10YR4/4)やにぶい黄褐色土(10YR5/4)といった自然堆積層である。中層は黒褐色土とローム粒子を多く含む黄褐色系土層が互層しており、埋め戻しと自然堆積層と考えられる。下層は黄褐色土層の自然堆積層である。

遺物は、覆土中から縄文時代中期末葉・加曾利E IV式土器が出土している。No 1は微隆起線文が施された深鉢である。No 2～4は縄文施文の深鉢である。

2) 17Wトレンチの調査 (第33～37図)

(1) 土坑

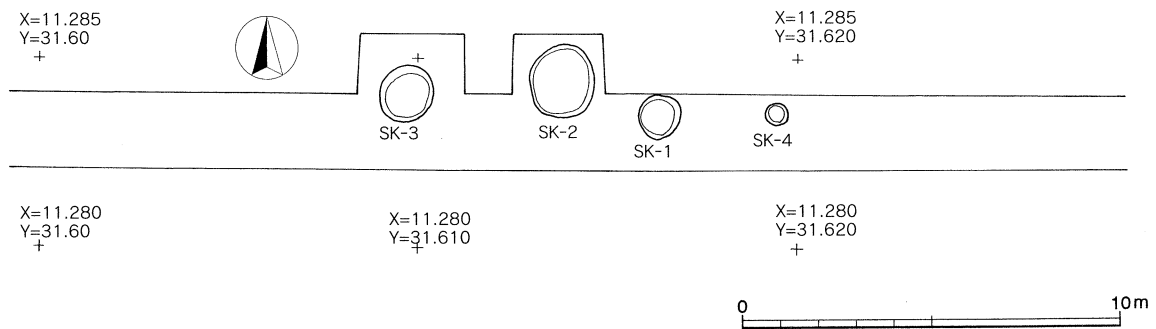
第1号土坑 (17w・SK-1) (第34図 PL.2)

トレンチの東寄り、西側に1.2m離れて第2号土坑が、東側に約2m離れて第3号土坑がある。平面形は円形である。規模は確認面での上端東西長1.12m、南北長1.08m、下端東西長0.91m、南北長0.85m、深さは最大で0.69mを測る。坑底は中央部が低く、壁周縁では高くなり、やや凹面を呈する。壁は直線的に掘り窪められ、緩く外上方面へ開く。覆土は6層に分けられるが、大きく1～4層の上層と5・6層の下層に分層することができる。上層がローム粒子、ロームブロックを多く含む褐色系土層、下層が自然堆積層である黒色系土層である。遺物は上層覆土層中から比較的纏まって出土している。いずれも縄文時代中期末葉・加曾利EⅣ式土器と石器である磨石1点がある。

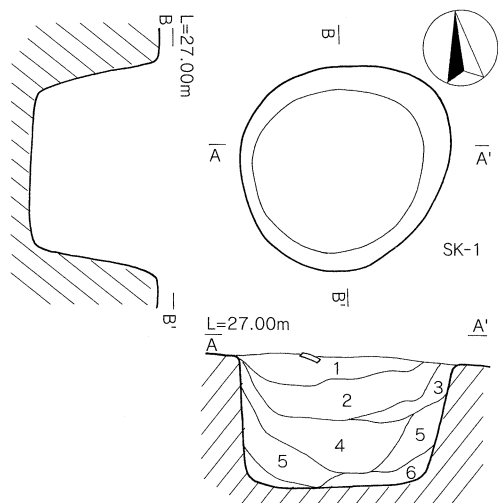
出土遺物 (第34図No1～15) No1～12は微隆起線によって文様が構成されるもので、No1は口縁部に突起状に肥厚し、微隆起線によって区画文が施されている。No2～7は口縁部に平行して微隆起線が巡るもので、No2は2条の微隆起線が施されている。またNo8～12は胴部破片で、並行する2条の微隆起線によって区画されている。区画内には磨消縄文が施される。No13・14は縄文施文の胴部破片である。No15は磨石で、表裏面に使用痕が認められる。長さ7.42cm、幅6.64cm、厚さ3.75cm、重さ254gを測る。

第2号土坑 (17w・SK-2) (第35・36図 PL.3・8)

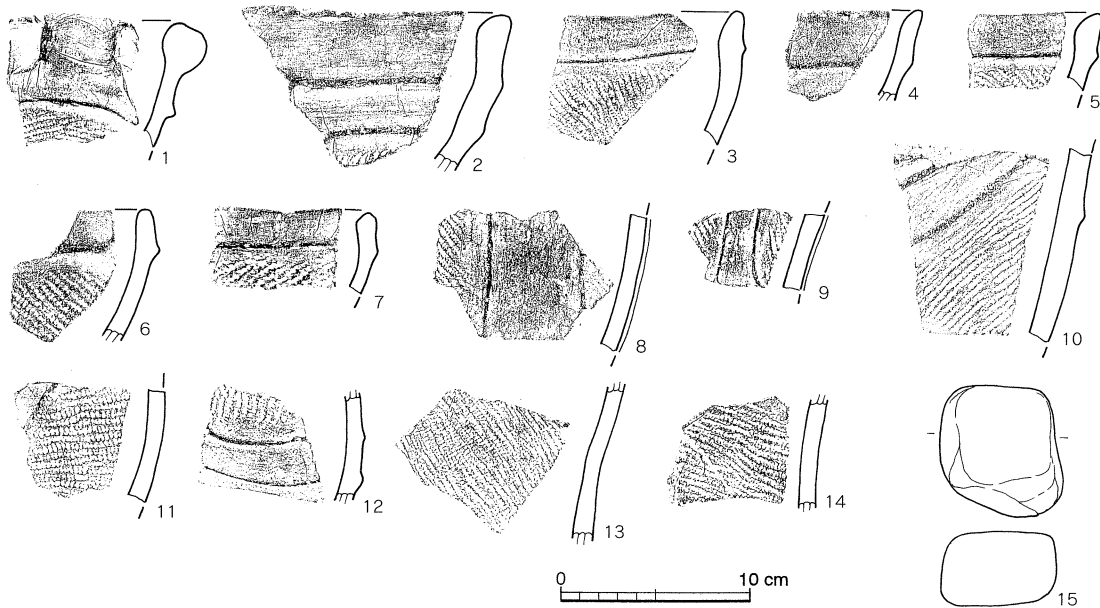
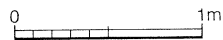
トレンチ東側、東に1.2m離れて第1号土坑が、西に2.5m離れて第3号土坑がある。平面形は円形である。規模は確認面の上端東西長1.68m、南北長1.78m。下端東西長1.48m、南北長1.63m。深さは最大1.13mを測る。坑底は、やや起伏がみられるが概ね平坦である。壁はほぼ垂直に掘り窪められている。土坑の覆土は、8層に分けられるが、大きく上層と下層に分離することが可能である。上層は1～3、5・6層で、褐色系土層で覆われ、下層は4・7層の黒色系土層が堆積している。さらに最下層はロームブロックがかなり含まれる褐色土である。遺物は下層の黒色系土層に集中して出土している。石皿を含む大形の土器は4層と7層の間層に纏まって包含されており、第36図No1・5・17および石皿のNo32が検出されている。いずれも縄文時代中期末葉・加曾利EⅣ式土器と石器である。なお、石器は石皿のほかに凹石、磨石、叩石がある。また土器片錘が3点出土している。



第33図 17wトレンチ遺構配置図



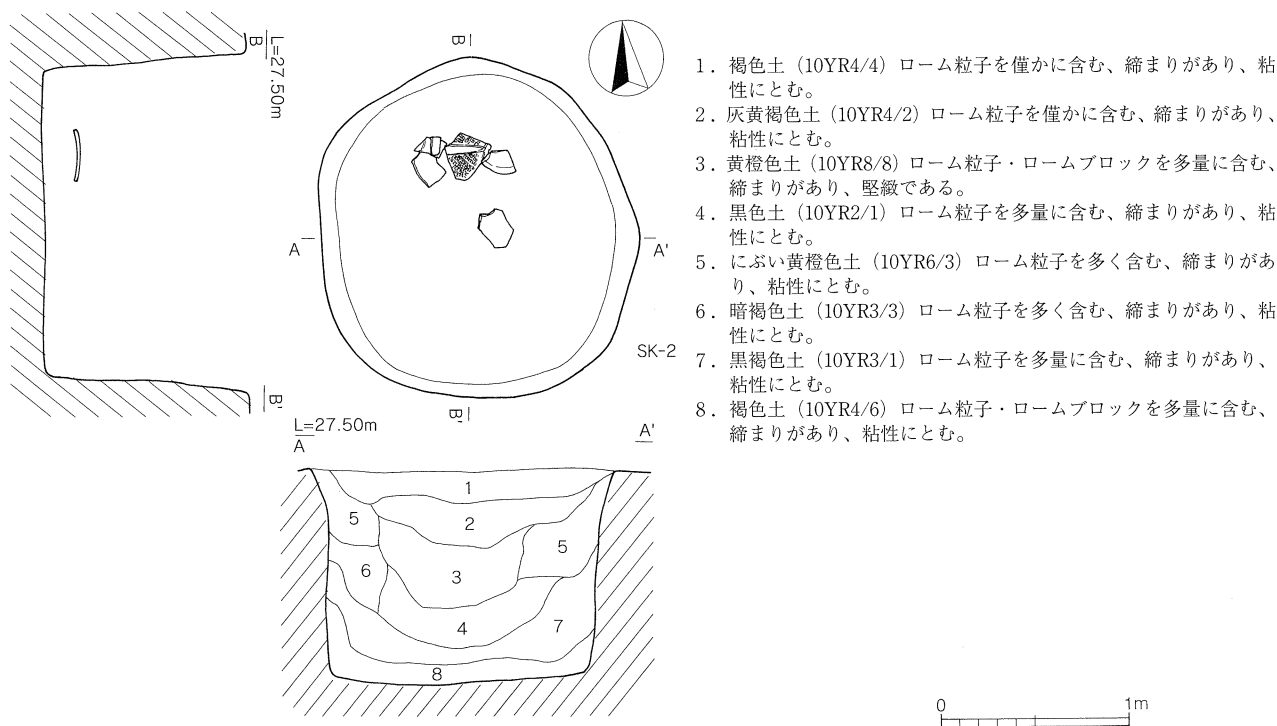
1. 褐色土 (10YR4/4) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
2. 灰黄褐色土 (10YR5/2) ローム粒子・ロームブロックを多量に含む、締まりがあり、粘性にとむ。
3. におい黄橙色土 (10YR7/4) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
4. 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
5. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
6. 暗褐色土 (10YR3/4) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。



第34図 17wトレンチ 第1号土坑および出土遺物実測図

出土遺物（第36図No1～32）No1～14は微隆起線文によって区画文が施される一群である。No1は4単位の小突起を有する深鉢で、胴部で括れ、口縁部は大きく内湾する。文様は磨消された2条の平行する微隆起線によるU字状区画文内に縄文を充填する。No2～7・12・14も同様の文様構成をもつ。平縁の深鉢で、口縁部には無文帯をもつ。No8は把手部の破片。No11は壺形を呈し、釣り手状の把手が付く。No17・18は沈線によって区画文が施されるもので、No17はU字、逆U字状文を交互配置している。No21・22は櫛歯状工具による縦位の条線を施す。

No26～28は土器片錘である。No26・27は周縁を丁寧に研磨している。No28は土錘としてよりも器面に塗りなおした粘土が剥離し、下地にあった縄文施文が露出していた。土器製作とくに文様施文のあり方についても興味ある資料である。No29～32は石製品である。No29・30は凹石である。No29は軟質砂岩製で、径1.5cm



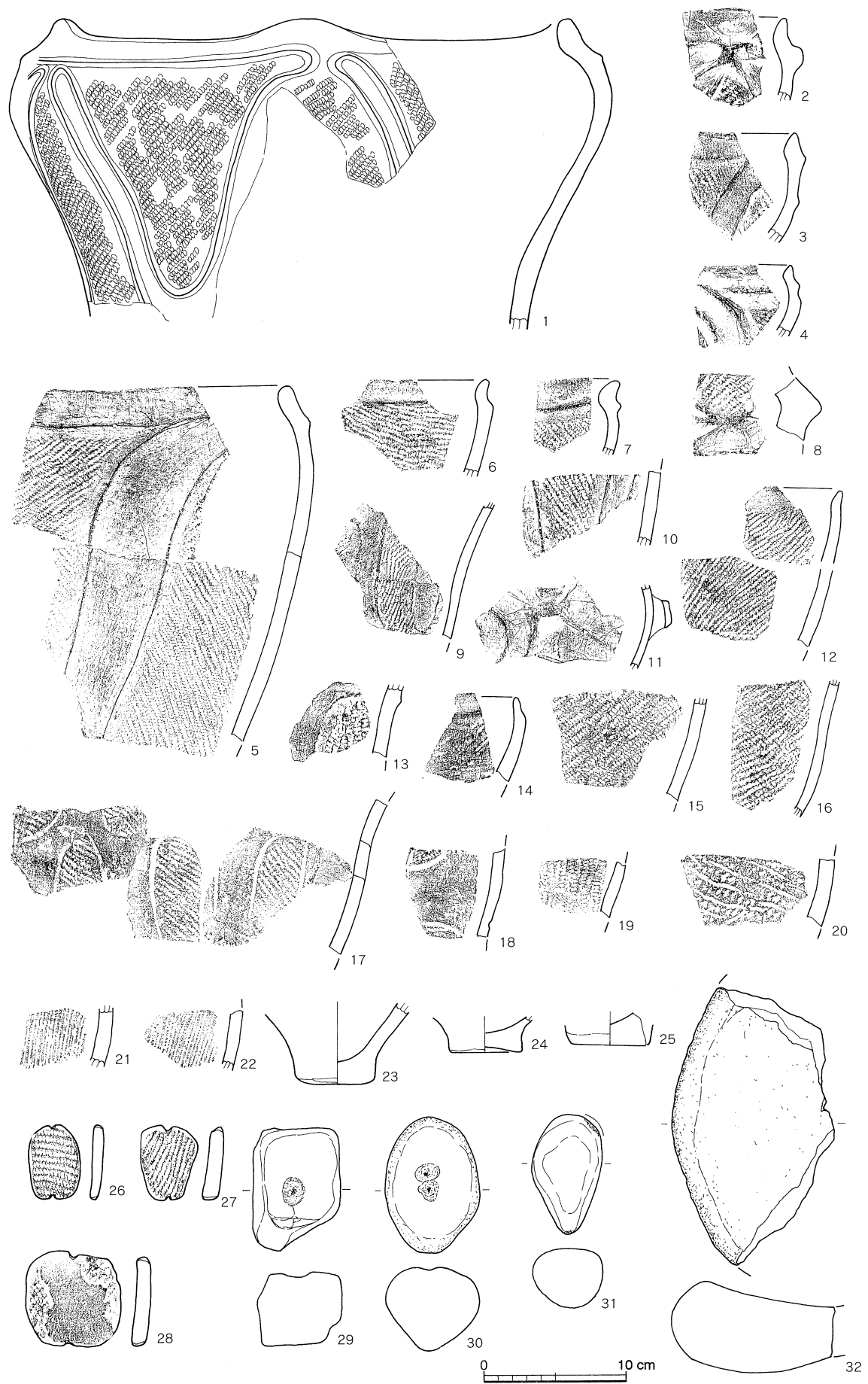
第35図 17wトレンチ 第2号土坑実測図

前後の凹部を有する。No30は凹部以外に使用痕が全く認められない、ほぼ自然石に近い石器である。長さ9.78cm、幅6.79cm、厚さ5.65cm、重さ431gを測り、安山岩製で完存品である。No31も棒状礫を素材とした叩き石で、端部に叩打痕が残る。長さ8.34cm、幅5.1cm、厚さ4.04cm、重さ223gを測る。砂岩製である。No32は多孔質安山岩製の石皿である。大きく欠損しているものの、形状は円形もしくは楕円形であろう。明瞭な縁部が施されており、表裏面とも顕著な研磨がみられる。現存する大きさは長さ19.8cm、幅11.62cm、厚さ6.16cm、重さ1358gを測る。

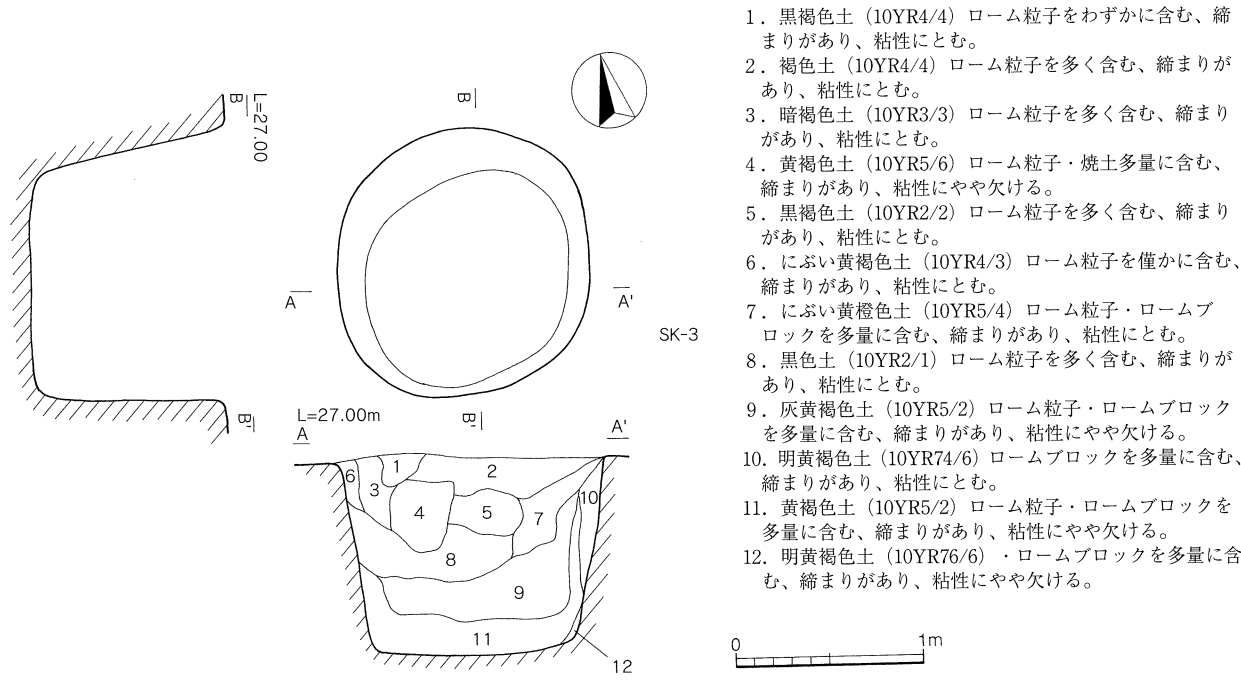
第3号土坑 (17w・SK-3) (第37図 PL.3)

トレンチ東寄り、東側に約2.5m離れて第2号土坑が位置する。平面形は円形で、規模は確認面上端東西長1.40m、南北長1.37m。下端東西長1.18m、南北長1.02m、深さ最大1.03mを測る。坑底は、ほぼ平坦で、壁は直線的に外上方へ開き気味に立ち上がり、底端で丸みをもって坑底にいたる。覆土は11層に分けられるが、大きく上層、中層、下層の3層に分層可能である。上層は2～4層の褐色系土層で、ローム粒子を多く含む、中層は5・8層の黒色系土層である。やはりローム粒子を多く含む。また下層は9・11層の黄褐色系土層で、ローム粒子やロームブロックを多量に含む。なお、出土遺物は少なく、8層下部より検出された土器片がわずかに確認されているだけである。

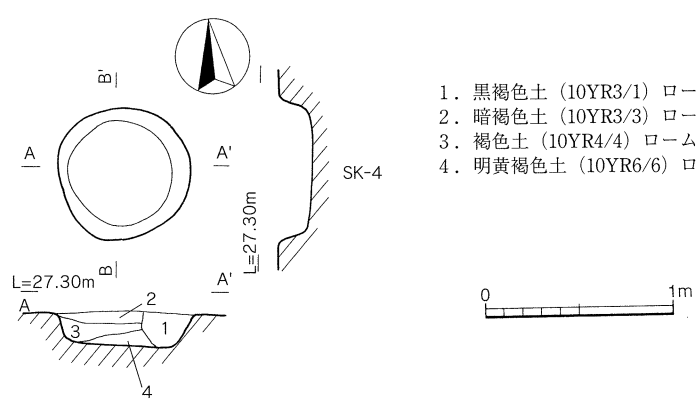
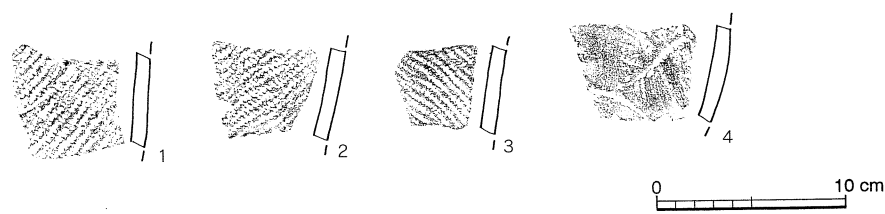
出土遺物 (第37図No1～4) No1～3は深鉢の胴部破片。縄文施文の土器である。No4は微隆起線文が施されている。



第36図 17wトレンチ 第2号土坑出土遺物実測図



1. 黒褐色土 (10YR4/4) ローム粒子をわずかに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
2. 褐色土 (10YR4/4) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
3. 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
4. 黄褐色土 (10YR5/6) ローム粒子・焼土多量に含む、締まりがあり、粘性にやや欠ける。
5. 黒褐色土 (10YR2/2) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
6. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
7. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) ローム粒子・ロームブロックを多量に含む、締まりがあり、粘性にとむ。
8. 黒色土 (10YR2/1) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
9. 灰黄褐色土 (10YR5/2) ローム粒子・ロームブロックを多量に含む、締まりがあり、粘性にやや欠ける。
10. 明黄褐色土 (10YR7/6) ロームブロックを多量に含む、締まりがあり、粘性にとむ。
11. 黄褐色土 (10YR5/2) ローム粒子・ロームブロックを多量に含む、締まりがあり、粘性にやや欠ける。
12. 明黄褐色土 (10YR7/6) ・ロームブロックを多量に含む、締まりがあり、粘性にやや欠ける。



1. 黒褐色土 (10YR3/1) ローム粒子を僅かに含む、締まりがあり、粘性にとむ。
2. 暗褐色土 (10YR3/3) ローム粒子を僅かに多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
3. 褐色土 (10YR4/4) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。
4. 明黄褐色土 (10YR6/6) ローム粒子を多く含む、締まりがあり、粘性にとむ。

第37図 17wトレンチ 第3・4号土坑および出土遺物実測図

第4号土坑 (17w・SK-4) (第37図)

トレンチ東寄り、西側に2.2m離れて第1号土坑が位置する。平面形は円形で、確認面における上端の東西長は0.69m、東西長0.70m。下端東西長0.55m、南北長0.56m、深さ最大で0.18mを測る。坑底は起伏が顕著で、壁はなだらかに掘り窪められている。覆土は4層に分けられ、1層は後世の攪乱層であろう。2～4層は自然堆積層である。遺物は図示できるものはないが、縄文時代中期末葉・加曾利E IV式土器が出土している。

第5節 まとめ

今回の確認調査は、トレンチ方式を採用し、遺跡の有無およびその性格についてある程度明確に把握することができた。さらにこのトレンチ調査において遺構等が検出され、その範囲が明らかに特定できる地点では本調査にそのまま移行して実施することができた。

まず確認調査では、トレンチ総距離にして1,558.5mにおよび、その調査面積は3,117m²であった。一部耕作などにより削平されたり、盛土されたり遺跡の表面が荒らされている地区もあるものの、大半は表土層がしっかり遺存している個所が多い。したがって、下層の遺構までは十分に把握することが可能であった。これまで35本の確認トレンチを入れたなかで、住居跡と考えられる遺構は76軒、土坑128基、溝状遺構34条、古墳の周溝4ヶ所である。また検出された遺物は、旧石器時代のナイフ形石器をはじめとして、縄文時代の土器・石器・土製品、古墳時代から奈良・平安時代の土師器、須恵器、石製品、中近世の陶磁器類、などが出土している。

トレンチの配置は、すでに報告したとおり開発予定区域全体をカバーできるように設定してある。これによって、確認調査の段階で、ここ常名台における遺跡のあり方がある程度掌握できる。まず旧石器時代のナイフ形石器が出土した10aトレンチは台地中央の東から入り込む谷頭部の先端で、ローム層の発達は良好ではないが、周辺の土層からみても、十分生活跡のひとつであるユニットが検出される環境にある。次の縄文時代では前期中葉の土器と中期後半の遺構・遺物が確認されている。前期は調査区の南側に纏まりをもち、とくに22トレンチでは集中していた。しかし、遺物の出土はあるものの、遺構としては確認できず、本調査に期待したい。また縄文中期後半期の遺構・遺物は充実している。加曾利E I 式後半から終末の加曾利E IV 式期までは住居跡や土坑等が検出され、規模の大きな集落跡を形成していたことが判明した。調査区域の北側に位置する5トレンチから南側の9トレンチまでは加曾利E I 式期の住居跡や土坑が纏まっている。若干新期の加曾利E II 式期が含まれるが、市内においてこの段階の集落跡が確認できたことは大きな成果であった。また9トレンチから南側の17トレンチにかけては散在しているものの、末葉の加曾利E III・IV 式期の集落が存在している。本来当該期の集落は先のE I 式期段階と比較して、その集落規模は縮まる傾向にあることは周知の事実である。これを含味すれば点在的であるとはいえ、住居跡や土坑の検出数が少ないとは侮れない。なお、この終末段階の遺跡として、14aトレンチおよび17wトレンチで確認された住居跡および土坑の本調査を今回実施している。

次に古墳時代の遺構・遺物も充実している。調査区の北側に設定した4aトレンチでは前期の住居跡が集中していた。ここは隣接して先に本調査した「北西原遺跡」の集落がさらに拡がることを証明したことになる。しかも、5aから9cトレンチにかけて確認されておりさらに本調査を実施した12～15トレンチまで拡がり、縄文中期集落よりも規模の大きな集落である可能性が高くなってきた。なお、中期から後期段階の集落は全く検出されていないが、谷を隔てた1トレンチではかなり纏まって確認されており、南側に集中する古墳群と合わせて検討することが必要であろう。その他、わずかであるが奈良・平安時代の住居跡が点在している。5・6トレンチの東端で確認されており、集落規模としては小さいと考えられる。また中世以降の遺構・遺物が確認されている。これら総合的にみても、市内でも最大級の遺跡のひとつになることは確実である。今回提示した資料を基に新たな集落論の展開を期待したい。

第1表 確認調査出土遺物観察表(縄文)

図版番号	器種	部位	文様の特徴	色調	胎土	時期	備考
5bトレンチ 第8図	-1	深鉢 口縁部	波状口縁。隆帯による渦巻文・区画文。単節LR	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-2	深鉢 口縁部	平縁。隆帯による渦巻文	にぶい黄褐色	雲母・長石・石英	加曾利E I	
	-3	深鉢 口縁部	平縁。隆帯による長方形区画文。単節LR	暗赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-4	深鉢 口縁部	平縁。隆帯による長方形区画文。単節LR	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-5	深鉢 口縁部	平縁。隆帯による長方形区画文。	にぶい黄橙色	雲母・石英・長石・角閃石	加曾利E I	
	-6	深鉢 口縁部	平縁。隆帯による長方形区画文。単節LR	橙色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-7	深鉢 口縁部	平縁。沈線区画に、縦位の沈線文。	明褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-8	深鉢 口縁部	平縁。沈線区画内に単節RL	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E III	
	-9	深鉢 口縁部	平縁。沈線文	暗褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-10	深鉢 胴部	隆帯。単節LR	赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-11	深鉢 胴部	隆帯。単節RL	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-12	深鉢 胴部	横位の沈線。単節RL	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-13	深鉢 胴部	集合沈線。沈線懸垂文。単節RL	黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-14	深鉢 胴部	沈線区画文。	暗褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-15	深鉢 胴部	沈線懸垂文。単節LR。	赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-16	深鉢 胴部	隆帯区画文。複節LR	橙色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-17	深鉢 胴部	平行沈線。単節LR	黒褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-18	深鉢 胴部	沈線による蛇行懸垂文。単節RL	暗赤褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-19	深鉢 胴部	平行沈線。単節RL。	橙色	石英・長石	加曾利E I	
	-20	深鉢 胴部	平行沈線。単節RL。	橙色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-21	深鉢 胴部	平行沈線。単節LR	暗褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-22	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節RL	黒褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-23	深鉢 胴部	単節RL	橙色	石英・長石	加曾利E	
	-24	深鉢 胴部	単節LR	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-25	深鉢 胴部	単節RL	にぶい褐色	石英・長石	加曾利E	
	-26	深鉢 胴部	単節RL	暗赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-27	深鉢 胴部	単節RL	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-28	深鉢 胴部	単節RL	橙色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-29	深鉢 胴部	単節RL	にぶい褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-30	深鉢 胴部	単節RL	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-31	深鉢 胴部	単節LR	にぶい褐色	石英・長石	加曾利E	
	-32	深鉢 胴部	単節RL	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-33	深鉢 胴部	単節RL	にぶい褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-34	深鉢 底部	ナデ	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-35	深鉢 底部	底部網代痕	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
6トレンチ 第9図	-1	深鉢 口縁部	隆帯区画文、刻み文、単節LR	赤褐色	雲母・石英・長石・角閃石	加曾利E I	
	-2	深鉢 口縁部	隆帯区画文。単節RL	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-3	深鉢 口縁部	隆帯区画文。複節RLR	にぶい褐色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-4	深鉢 胴部	隆帯区画文。単節RL	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-5	深鉢 口縁部	隆帯区画文・渦巻文	にぶい褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-6	深鉢 口縁部	交互刺突文	暗赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-7	深鉢 口縁部	交互刺突文。連弧文。撚糸R	黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-8	深鉢 口縁部	隆帯	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-9	深鉢 胴部	平行沈線。撚糸R	にぶい褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-10	深鉢 胴部	隆帯区画文。単節RL	褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-11	深鉢 胴部	平行隆帯区画文。単節RL	黒褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-12	深鉢 胴部	沈線区画文。単節RL	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-13	深鉢 胴部	沈線区画文。単節RL	暗赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-14	深鉢 胴部	沈線懸垂文。単節RL	にぶい赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-15	深鉢 胴部	平行沈線区画。単節RL	黒褐色	石英・長石・スコリア	加曾利E I	
	-16	深鉢 胴部	隆帯。単節LR	暗褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-17	深鉢 胴部	平行沈線区画。単節RL	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-18	深鉢 胴部	沈線懸垂文。単節RL	赤褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-19	深鉢 胴部	沈線懸垂文。単節LR。	黒褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-20	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節RL	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-21	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節LR	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-22	深鉢 胴部	沈線懸垂文。単節LR。	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-23	深鉢 胴部	沈線懸垂文。複節RLR	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-24	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節RL	褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-25	深鉢 胴部	平行沈線。磨消縄文。単節RL	にぶい褐色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-26	深鉢 胴部	平行沈線。磨消縄文。単節RL	黒褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-27	深鉢 胴部	平行沈線。磨消縄文。単節RL	浅黄褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-28	深鉢 胴部	平行沈線。磨消縄文。複節RL	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-29	深鉢 胴部	平行沈線。磨消縄文。単節RL	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-30	深鉢 胴部	平行沈線。磨消縄文。単節RL	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-31	深鉢 胴部	平行沈線。磨消縄文。単節LR	明赤褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-32	深鉢 胴部	平行沈線。磨消縄文。単節LR	黒褐色	石英・長石・スコリア	加曾利E II	
	-33	深鉢 胴部	平行沈線。磨消縄文。単節RL	褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-34	深鉢 胴部	平行沈線。磨消縄文。単節LR	褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-35	深鉢 口縁部	単節RL。外面スス付着	にぶい褐色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-36	深鉢 口縁部	単節RL	明赤褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-37	深鉢 胴部	単節RL、羽状縄文	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-38	深鉢 胴部	単節RL	暗褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	

図版番号	器種	部位	文様の特徴	色調	胎土	時期	備考
第9図	-39	深鉢 胴部	隆帯。単節 R L	橙色	石英・長石	加曾利 E I	
	-40	深鉢 胴部	単節 L R	橙色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-41	深鉢 胴部	単節 R L	橙色	雲母・石英・長石	加曾利 E	
	-42	深鉢 胴部	単節 L R	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E	
	-43	深鉢 胴部	複節 L R	暗褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E	
	-44	深鉢 胴部	単節 R L	暗褐色	石英・長石	加曾利 E	
	-45	深鉢 胴部	単節 R L。外面スス付着	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E	
	-46	深鉢 胴部	単節 R L	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E	
	-47	深鉢 胴部	単節 R L	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E	
	-48	深鉢 胴部	単節 L R	にぶい褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E	
	-49	深鉢 胴部	単節 R L	にぶい橙色	雲母・石英・長石	加曾利 E	
	-50	深鉢 胴部	沈線。櫛菌状条線	黒褐色	石英・長石	加曾利 E	
	-51	浅鉢 口縁部	横位のナデ	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E	
	-52	深鉢 底部	沈線懸垂文。単節 R L	橙色	石英・長石	加曾利 E I	
-53	深鉢 底部	単節 R L	橙色	雲母・石英・長石	加曾利 E I		
-54	深鉢 底部	ナデ	橙色	石英・長石	加曾利 E		
-56	深鉢 口縁部	紐線文。斜線文。単節 L R	橙色	石英・長石	加曾利 B1		
-57	深鉢 胴部	斜線文、単節 L R	灰黄褐色	石英・長石	加曾利 B1		
7トレンチ 第12図	-1	深鉢 胴部	単節 R L	にぶい黄褐色	繊維。石英・スコリア	黒浜	
	-2	深鉢 口縁部	隆帯区画文。単節 R L	にぶい赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-3	深鉢 口縁部	隆帯区画文。単節 R L	にぶい褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-4	深鉢 口縁部	隆帯長方形区画文。渦卷文。平行沈線懸垂文。単節 R L	褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E II	
	-5	深鉢 口縁部	隆帯。縦位の沈線を充填。	褐灰色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-6	深鉢 口縁部	弧状の平行沈線。単節 R L	褐灰色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-7	深鉢 口縁部	沈線。単節 R L	にぶい赤褐色	石英・長石	加曾利 E I	
	-8	深鉢 口縁部	口唇部凹帯。隆帯。単節 R L	褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-9	深鉢 口縁部	口縁部無文。磨消縄文の平行沈線懸垂文。単節 R L	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E III	
	-10	深鉢 口縁部	隆帯区画文	褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-11	深鉢 口縁部	口唇部凹帯。隆帯。単節 R L	灰褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-12	深鉢 胴部	口縁部に沿って平行沈線内を円形刺突文を巡らす	にぶい褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E II	
	-13	深鉢 胴部	平行沈線。単節 L R	にぶい褐色	雲母・石英・長石・角閃石	加曾利 E I	
	-14	深鉢 胴部	隆帯。縦位の沈線を充填。	にぶい褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-15	深鉢 胴部	交互刺突文	明赤褐色	石英・長石・スコリア	加曾利 E I	
	-16	深鉢 胴部	太沈線区画文	にぶい褐色	石英・長石	加曾利 E I	
	-17	深鉢 胴部	隆帯。沈線。単節 R L	にぶい赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-18	深鉢 胴部	隆帯。沈線。単節 R L	灰褐色	石英・長石	加曾利 E I	
	-19	深鉢 胴部	沈線区画文。単節 R L	明黄褐色	石英・長石・角閃石	加曾利 E II	
	-20	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節 R L	にぶい褐色	石英・長石	加曾利 E I	
	-21	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節 R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-22	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節 R L。内面スス付着	にぶい赤褐色	石英・長石	加曾利 E I	
	-23	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節 R L	褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-24	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節 R L	褐色	石英・長石	加曾利 E I	
	-25	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節 R L	にぶい褐色	石英・長石	加曾利 E I	
	-26	深鉢 胴部	磨消平行沈線懸垂文。単節 R L	にぶい褐色	石英・長石・スコリア	加曾利 E II	
	-27	深鉢 胴部	磨消平行沈線懸垂文。単節 R L	灰褐色	石英・長石	加曾利 E II	
	-28	深鉢 胴部	磨消平行沈線懸垂文。単節 R L	にぶい褐色	石英・長石	加曾利 E II	
	-29	深鉢 胴部	磨消平行沈線懸垂文。単節 R L	暗褐色	石英・長石	加曾利 E II	
	-30	深鉢 胴部	無節 R	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利 E	
	-31	深鉢 胴部	単節 R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利 E	
-32	深鉢 胴部	単節 R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利 E		
-33	深鉢 胴部	単節 R L	灰黄褐色	石英・長石	加曾利 E		
-34	深鉢 胴部	単節 R L	にぶい褐色	石英・長石	加曾利 E		
-35	深鉢 胴部	単節 R L	灰褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E		
-36	深鉢 胴部	単節 R L	にぶい赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E		
-37	深鉢 胴部	単節 R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E		
-38	深鉢 胴部	擦糸 L	褐灰色	石英・長石	加曾利 E		
-39	深鉢 胴部	単節 R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E		
-40	深鉢 胴部	単節 L R	黄褐色	石英・長石	加曾利 E		
-41	深鉢 胴部	無文。有孔鏝付	黒色	石英・長石	加曾利 E		
8aトレンチ 第13図	-1	深鉢 口縁部	隆帯による長方形区画文、渦卷文。沈線懸垂文。複節 L R L	暗赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-2	深鉢 口縁部	隆帯による長方形区画文、渦卷文。擦糸 L	にぶい褐色	石英・長石	加曾利 E I	
	-3	深鉢 口縁部	隆帯区画文。単節 R L	褐灰色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-4	深鉢 口縁部	口縁部を無文帯。拵れ部に細沈線による斜線文。単節 L R	明褐色		加曾利 E I	
	-5	深鉢 口縁部	隆帯区画文。沈線	灰黄褐色	石英・長石	加曾利 E I	
	-6	深鉢 口縁部	沈線区画文。	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E	
	-7	深鉢 口縁部	口縁部無文帯。口唇部刺突文。単節 R L	褐灰色	石英・長石	加曾利 E	
	-8	深鉢 口縁部	口縁部無文帯。沈線。	灰黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-9	深鉢 胴部	隆帯区画文。渦卷文。縦位沈線を充填	灰褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-10	深鉢 胴部	隆帯。単節 R L	灰黄褐色	石英・長石	加曾利 E I	
	-11	深鉢 胴部	沈線文。単節 L R	にぶい褐色	石英・長石	加曾利 E I	
	-12	深鉢 胴部	横位の平行沈線。単節 L R	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利 E I	
	-13	深鉢 胴部	沈線。単節 L R	灰黄褐色	石英・長石	加曾利 E I	

図版番号	器種	部位	文様の特徴	色調	胎土	時期	備考
第13図	-14	深鉢 胴部	隆帯区画文	褐灰色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-15	深鉢 口縁部	縦位の隆帯。	にぶい赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-16	深鉢 胴部	隆帯。刺突文。縦位の条線文	灰褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-17	深鉢 口縁部	単節R L	暗褐色	石英・長石	加曾利E	
	-18	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節R L	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-19	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。無節L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-20	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-21	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節L R	灰黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-22	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-23	深鉢 胴部	磨消平行沈線懸垂文。単節R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-24	深鉢 胴部	磨消平行沈線懸垂文。単節R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-25	深鉢 胴部	磨消平行沈線懸垂文。単節R L	橙色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-26	深鉢 胴部	磨消平行沈線懸垂文。単節R L	灰黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-27	深鉢 胴部	磨消平行沈線懸垂文。単節R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-28	深鉢 胴部	磨消平行沈線懸垂文。単節L R	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-29	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節R L	黄褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-30	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節L R	にぶい橙色	石英・長石	加曾利E I	
	-31	深鉢 胴部	磨消平行沈線懸垂文。撚糸L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-32	深鉢 底部	平行沈線懸垂文。無節L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-33	深鉢 胴部	単節R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-34	深鉢 胴部	単節R L	にぶい褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-35	深鉢 胴部	単節R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-36	深鉢 胴部	複節L R	褐色	石英・長石	加曾利E	
	-37	深鉢 胴部	単節R L	黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
-38	深鉢 底部	ナデ	明赤褐色	石英・長石	加曾利E		
-39	深鉢 胴部	縦位の条線	灰黄褐色	石英・長石	加曾利E		
-40	深鉢 胴部	縦位の条線	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E		
-41	深鉢 口縁部	ナデ	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E		
-42	深鉢 胴部	隆帯	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E		
8b<tr>c</tr>トレンチ							
第14図	-1	深鉢 口縁部	隆帯区画文。複節L R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-2	深鉢 口縁部	隆帯区画文。複節L R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-3	深鉢 口縁部	口縁部無文帯。単節R L	にぶい褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-4	深鉢 口縁部	口縁部無文帯。単節L R	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E III	
	-5	深鉢 口縁部	口唇部下無文。単節R L。羽状縄文	にぶい赤褐色	石英・長石	加曾利E III	
	-6	深鉢 口縁部	口唇部下無文。単節R L。	にぶい赤褐色	石英・長石	加曾利E III	
	-7	深鉢 口縁部	口唇部下無文。単節R L。	にぶい赤褐色	石英・長石	加曾利E III	
	-8	深鉢 胴部	隆帯区画文。	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-9	深鉢 胴部	磨消平行沈線。無節L	にぶい褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-10	深鉢 胴部	磨消平行沈線。撚糸L	にぶい褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-11	深鉢 胴部	磨消縄文。単節R L	にぶい褐色	石英・長石	加曾利E III	
	-12	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。撚糸L	明褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-13	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節R L	黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E III	
	-14	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節R L	明黄褐色	石英・長石	加曾利E III	
	-15	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。無節L	にぶい褐色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-16	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節R L	褐色	石英・長石	加曾利E III	
	-17	深鉢 胴部	単節R L	褐色	石英・長石	加曾利E	
	-18	深鉢 胴部	単節R L	明赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-19	深鉢 胴部	単節R L	灰褐色	石英・長石	加曾利E	
	-20	深鉢 底部	磨消縄文懸垂文。	明赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-21	深鉢 底部	ナデ	にぶい褐色	石英・長石	加曾利E	
9a<tr>b</tr>トレンチ							
第16図	-1	深鉢 口縁部	押圧紐線文。沈線区画文。縦位の沈線文の充填。単節R L	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-2	深鉢 口縁部	隆帯区画文。単節R L	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-3	深鉢 口縁部	隆帯区画文。単節R L	暗褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-4	深鉢 口縁部	複節R L	暗褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-5	深鉢 胴部	隆帯区画文。単節R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-6	深鉢 胴部	隆帯区画文。単節R L	赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-7	深鉢 胴部	交互刺突文。撚糸L	黒褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-8	深鉢 口縁部	隆帯区画文。単節L R	黒褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-9	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節R L	灰褐色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-10	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節R L	灰褐色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-11	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節R L	明黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-12	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節R L	明黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-13	深鉢 胴部	単節R L	暗褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-14	深鉢 胴部	単節R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-15	深鉢 胴部	単節R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-16	深鉢 胴部	複節L R	明黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-17	深鉢 胴部	複節L R	赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-18	深鉢 胴部	縄文	黒褐色	石英・長石	加曾利B1	
	-19	深鉢 底部	無文	赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-20	深鉢 底部	無文	黒褐色	石英・長石	加曾利E	
9b<tr>c</tr>トレンチ							
第17図	-2	深鉢 口縁部	キャリバー形。隆帯楕円形区画文・渦巻文。単節R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	第1号土坑

図版番号	器種	部位	文様の特徴	色調	胎土	時期	備考
9bトレンチ 第18図	-1	深鉢 口縁部	キャリパー形。隆帯楕円形区画文・渦巻文。	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	曾利系
	-2	深鉢 口縁部	隆帯・沈線区画文。磨消平行沈線懸垂文。単節R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-3	深鉢 口縁部	波状口縁。隆帯による渦巻文・区画文。単節R L	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-4	深鉢 口縁部	キャリパー形。隆帯楕円形区画文・渦巻文。単節R L	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-5	深鉢 口縁部	キャリパー形。隆帯楕円形区画文	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-6	深鉢 口縁部	キャリパー形。隆帯楕円形区画文・渦巻文。	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-7	深鉢 胴部	隆帯。単節LR	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-8	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節R L	黒褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-9	深鉢 胴部	沈線。単節R L	暗赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-10	深鉢 胴部	沈線。複節R L R	橙色	石英・長石	加曾利E I	
	-11	深鉢 胴部	隆帯区画文	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-12	深鉢 胴部	沈線。単節L R	灰黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-13	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節R L	暗褐色	雲母・石英・長石	加曾利E II	
	-14	深鉢 胴部	沈線文。単節R L	黒褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-15	深鉢 胴部	沈線文。単節R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-16	深鉢 胴部	沈線文。単節R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-17	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-18	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-19	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-20	深鉢 胴部	沈線文。単節R L	橙色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-21	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節L R。内面スス付着	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E II	
	-22	深鉢 胴部	単節R L	黒色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-23	深鉢 胴部	単節R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-24	深鉢 胴部	単節L R	淡橙色	石英・長石	加曾利E	
	-25	深鉢 胴部	無節L	橙色	石英・長石	加曾利E	
	-26	深鉢 胴部	隆帯。縦位の条線文	暗赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-27	深鉢 胴部	縦位の条線	橙色	石英・長石	加曾利E	
	-28	深鉢 底部	縦位の条線。底面網代痕	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-29	深鉢 底部	平行沈線懸垂文。単節R L	明赤褐色	石英・長石	加曾利E I	
	-30	深鉢 胴部	ナデ	橙色	雲母・石英・長石	加曾利E	
10aトレンチ 第22図	-1	深鉢 胴部	単節L R	暗赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
11aトレンチ 第22図	-4	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節R L	浅黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-5	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節L R。	灰黄褐色	石英・長石	加曾利E II	
12aトレンチ 第22図	-7	深鉢 口縁部	キャリパー形。隆帯区画文。単節R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-8	深鉢 口縁部	無文	橙色	雲母・石英・長石	加曾利E	
12bトレンチ 第22図	-9	深鉢 口縁部	小突起。沈線。	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-10	深鉢 口縁部	単節R L	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-11	深鉢 胴部	単節L R	にぶい褐色	石英・長石	加曾利E	
13bトレンチ 第22図	-13	深鉢 口縁部	隆帯。沈線。	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-14	深鉢 胴部	単節L R	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-15	深鉢 胴部	沈線区画文	暗赤褐色	石英・長石	加曾利E III	
14bトレンチ 第22図	-17	深鉢 胴部	単節R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
15wトレンチ 第22図	-19	深鉢 口縁部	口縁部無文帯。微隆起線文。単節L R	にぶい赤褐色	石英・長石	加曾利E IV	
	-20	深鉢 口縁部	単節R L	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-21	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節L R	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E III	
	-22	深鉢 胴部	単節L R	橙色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-23	深鉢 胴部	単節R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
-24	深鉢 胴部	単節L R	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利E		
15bトレンチ 第22図	-25	深鉢 胴部	2段の有節平行沈線。単節R L	にぶい黄褐色	繊維・石英・長石	黒浜	
15cトレンチ 第22図	-26	深鉢 胴部	単節R L	浅黄褐色	石英・長石	加曾利B1	
16aトレンチ 第25図	-1	深鉢 胴部	波状沈線文。	黒褐色	繊維・石英・長石	黒浜	
	-2	深鉢 胴部	磨消縄文懸垂文。単節R L	橙色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-3	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節RL	にぶい橙色	石英・長石	加曾利E I	
	-4	深鉢 胴部	平行沈線懸垂文。単節RL	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利E I	
	-5	深鉢 胴部	単節L R	橙色	石英・長石	加曾利E	
	-6	深鉢 胴部	無節R	にぶい橙色	石英・長石	加曾利E	
	-7	深鉢 胴部	無文	にぶい橙色	石英・長石	加曾利E	
	-8	深鉢 底部	無文	赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-9	深鉢 底部	無文	橙色	石英・長石	加曾利E	
拡張1トレンチ 第25図	-11	深鉢 底部	無文	にぶい橙色	繊維・石英・長石	黒浜	
	-12	深鉢 口縁部	口縁部無文帯。2列の刺突文	褐灰色	石英・長石	加曾利E	
	-13	深鉢 口縁部	口縁部無文帯	明赤褐色	石英・長石	加曾利E	

図版番号	器種	部位	文様の特徴	色調	胎土	時期	備考
17wトレンチ 第25図-15	深鉢	口縁部	口縁部無文帯。微隆起線文による逆U字状区画文。小突起	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	
17aトレンチ 第25図-19	深鉢	口縁部	隆帯区画文。単節RL	にぶい橙色	雲母・石英・長石	加曾利EI	
拡張2トレンチ 第25図-20	深鉢	胴部	波状沈線文。	にぶい黄褐色	繊維・石英・長石	黒浜	
-21	深鉢	胴部	有節沈線文	橙色	繊維・石英・長石	黒浜	
-22	深鉢	胴部	撚糸L	浅黄褐色	繊維・石英・長石	黒浜	
-23	深鉢	胴部	単節RL	黒褐色	石英・長石	加曾利E	
20bトレンチ 第25図-24	深鉢	胴部	単節RL	にぶい黄褐色	繊維・石英・長石	黒浜	
-25	深鉢	胴部	無節L	にぶい黄褐色	繊維・石英・長石	黒浜	
21トレンチ 第25図-26	深鉢	口縁部	有節沈線文による区画文。無節R	橙色	繊維・石英・長石	黒浜	
-27	深鉢	口縁部	縦位の沈線文、格子状沈線文。	明赤褐色	繊維・石英・長石	黒浜	
-28	深鉢	胴部	単節LR	暗褐色	繊維・石英・長石	黒浜	
-29	深鉢	胴部	単節LR	橙色	繊維・石英・長石	黒浜	
-30	深鉢	胴部	無節L	橙色	繊維・石英・長石	黒浜	
-31	深鉢	胴部	無節L	にぶい褐色	繊維・石英・長石	黒浜	
-32	深鉢	胴部	無節L	浅黄褐色	繊維・石英・長石	黒浜	
-33	深鉢	胴部	無節R	にぶい褐色	繊維・石英・長石	黒浜	
-34	深鉢	胴部	単節RL	にぶい褐色	石英・長石	加曾利E	

第2表 14a・17wトレンチ発掘調査出土遺物観察表

図版番号	器種	部位	文様の特徴	色調	胎土	時期	備考
14a・SI-1 第30図-1	深鉢	口縁部	波状口縁。沈線区画による磨消縄文の渦巻文。単節LR	黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	
-2	深鉢	口縁部	波状口縁。沈線区画による磨消縄文の渦巻文。単節RL	暗褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-3	深鉢	口縁部	波状口縁。口唇部下に縄文帯。沈線区画の渦巻文。単節LR	橙色	石英・長石	加曾利EIV	3と同一個体
-4	深鉢	口縁部	波状口縁。口唇部下に縄文帯。沈線区画の渦巻文。単節LR	橙色	石英・長石	加曾利EIV	
-5	深鉢	口縁部	平縁。口縁部無文帯。沈線区画の磨消縄文渦巻文。単節LR	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-6	深鉢	口縁部	波状口縁。口唇部下に縄文帯。単節LR	橙色	石英・長石	加曾利EIV	3と同一個体
-7	深鉢	口縁部	波状口縁。口唇部下に縄文帯。単節LR	灰黄褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-8	深鉢	胴部	沈線区画による磨消縄文の渦巻文。単節LR	褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-9	深鉢	胴部	沈線区画による磨消縄文の渦巻文。単節LR	橙色	石英・長石	加曾利EIV	
-10	深鉢	胴部	沈線区画による磨消縄文の渦巻文。単節LR	褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-11	深鉢	胴部	沈線区画による磨消縄文。単節LR	褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-12	深鉢	胴部	沈線区画による磨消縄文。単節LR	褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-13	深鉢	胴部	沈線区画による磨消縄文。単節LR	赤褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-14	深鉢	口縁部	口縁部無文帯。沈線区画。沈線下に刺突文。単節RL	黒褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-15	深鉢	口縁部	波状口縁。口唇部が肥厚。口縁部無文帯。2列刺突文。単節LR	黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	
-16	深鉢	口縁部	口縁部無文帯。刺突文を巡らす。単節RL	浅黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	
-17	深鉢	口縁部	口縁部無文帯。刺突文を巡らす。単節RL	浅黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	16と同一個体
-18	深鉢	口縁部	波状口縁。口唇部が肥厚。口縁部無文帯。刺突文が巡る。	黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	15と同一個体
-19	深鉢	胴部	刺突文が巡る。単節LR	黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	15と同一個体
-20	深鉢	胴部	刺突文が巡る。単節LR	黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	15と同一個体
-21	深鉢	胴部	平行沈線の懸垂文。単節LR	浅黄褐色	石英・長石	加曾利EIII	
-22	深鉢	胴部	沈線懸垂文。単節LR	黄褐色	石英・長石	加曾利EI	
-23	深鉢	胴部	平行沈線磨消縄文の懸垂文。単節RL	黒褐色	石英・長石	加曾利EIII	
-24	深鉢	口縁部	無文帯の口縁部が外反し。沈線によって区画される。単節RL	灰黄色	石英・長石・スコリア	加曾利EIII	
-25	深鉢	口縁部	口縁部無文帯。沈線区画。単節RL	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-26	深鉢	口縁部	口縁部無文帯。沈線区画。単節RL	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EIV	25と同一個体
-27	深鉢	口縁部	口縁部無文帯。沈線区画。単節RL	明黄褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-28	深鉢	口縁部	口縁部は無文帯。隆帯区画で、単節RL	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-29	深鉢	口縁部	2条の隆帯による区画文。単節RL	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EIII	
-30	深鉢	胴部	微隆起線文による区画文。単節RL	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	
-31	深鉢	胴部	微隆起線文による区画文。単節RL	褐色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	
-32	深鉢	胴部	微隆起線文による区画文。単節RL	褐色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	
-33	深鉢	胴部	微隆起線文による区画文。単節RL	褐色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	
-34	深鉢	胴部	微隆起線文による区画文。単節RL	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-35	深鉢	胴部	微隆起線文による区画文。単節RL	灰黄色	石英・長石	加曾利EIV	
-36	深鉢	胴部	微隆起線文による区画文。単節RL	褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-37	深鉢	胴部	微隆起線文による区画文。単節LR	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-38	深鉢	胴部	微隆起線文による区画文。単節RL	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	
-39	深鉢	胴部	微隆起線文による区画文。単節RL	明赤褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-40	深鉢	口縁部	口縁部無文帯。微隆起線文による区画。単節RL	赤褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-41	深鉢	口縁部	口縁部無文帯。微隆起線文による区画。単節LR	褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-42	深鉢	口縁部	口縁部無文帯。微隆起線文による区画。単節LR	褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-43	深鉢	口縁部	口縁部無文帯。微隆起線文による区画。単節LR	黄褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-44	深鉢	胴部	口縁部無文帯。微隆起線文による区画。単節RL	明黄褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-45	深鉢	口縁部	口縁部無文帯。単節RL	褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-46	深鉢	口縁部	口唇部下に浅い沈線が巡る。単節RL	浅黄褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-47	深鉢	口縁部	単節RL	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EIV	
-48	深鉢	口縁部	単節RL	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EIV	

図版番号	器種	部位	文様の特徴	色調	胎土	時期	備考
第31図	-49 深鉢	胴部	胴部が括れ、口縁部が内湾する。単節 R L。	にぶい黄橙色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-50 深鉢	胴部	単節 R L	明赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-51 深鉢	胴部	単節 L R	にぶい黄橙色	石英・長石	加曾利E	
	-52 深鉢	胴部	単節 R L	明赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-53 深鉢	胴部	単節 R L	橙色	石英・長石	加曾利E	
	-54 深鉢	胴部	単節 R L	にぶい橙色	石英・長石	加曾利E	
	-55 深鉢	胴部	単節 R L	にぶい橙色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-56 深鉢	胴部	単節 R L	橙色	石英・長石	加曾利E	
	-57 深鉢	胴部	単節 R L	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利E	
	-58 深鉢	胴部	単節 L R	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-59 深鉢	胴部	単節 L R	にぶい橙色	石英・長石	加曾利E	
	-60 深鉢	胴部	単節 L R	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-61 深鉢	胴部	単節 L R	明赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-62 深鉢	胴部	無節 L	褐色	石英・長石	加曾利E	
	-63 深鉢	胴部	単節 R L	明赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-64 深鉢	胴部	櫛歯状工具による弧状文	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-65 深鉢	胴部	櫛歯状工具による弧状文	褐色	石英・長石	加曾利E	
	-66 深鉢	胴部	縦位の条線文。外面にスス付着	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-67 深鉢	胴部	縦位の条線文。	褐色	石英・長石	加曾利E	
	-68 深鉢	胴部	縦位の条線文。	暗褐色	石英・長石	加曾利E	
	-69 深鉢	胴部	縦位の条線文。	明赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-70 深鉢	底部	平底。単節 L R	黒褐色	石英・長石	加曾利E	
	-71 深鉢	底部	平底。無文	褐色	石英・長石	加曾利E	
	-72 深鉢	底部	平底。無文	褐色	石英・長石	加曾利E	
	-73 深鉢	底部	平底。無文	明赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-74 深鉢	底部	無文。	赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-75 深鉢	底部	平底。無文	明赤褐色	石英・長石	加曾利E	
	-76 深鉢	底部	平底。無文	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-77 深鉢	底部	平底。	褐色	石英・長石	加曾利E	
14a・SK-1							
第32図	-1 深鉢	胴部	微隆起線文による区画文。単節 R L	暗褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-2 深鉢	胴部	単節 L R	褐色	石英・長石	加曾利E	
	-3 深鉢	胴部	単節 R L	灰黄褐色	石英・長石	加曾利E	
	-4 深鉢	胴部	単節 R L	黒褐色	石英・長石	加曾利E	
17w・SK-1							
第34図	-1 深鉢	口縁部	肥厚する小突起をもつ。微隆起線文による区画文。単節 L R	暗褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-2 深鉢	口縁部	口縁部は無文帯。2条の微隆起線による区画文。単節 L R	明黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-3 深鉢	口縁部	口縁部は無文帯。微隆起線による区画文。単節 L R	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-4 深鉢	口縁部	口縁部は無文帯。微隆起線による区画文。	黒褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-5 深鉢	口縁部	口縁部は無文帯。微隆起線による区画文。単節 L R	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-6 深鉢	口縁部	口縁部は無文帯。微隆起線による区画文。単節 L R	褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-7 深鉢	口縁部	口縁部は無文帯。微隆起線による区画文。単節 R L	黒褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-8 深鉢	胴部	平行する微隆起線文内は磨消。単節 L R	暗褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-9 深鉢	胴部	平行する微隆起線文内は磨消。単節 L R	にぶい褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-10 深鉢	胴部	平行する微隆起線文内は磨消。単節 R L	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-11 深鉢	胴部	微隆起線区画文。単節 R L	褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-12 深鉢	胴部	平行する微隆起線文内は磨消。単節 L R	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-13 深鉢	胴部	単節 L R	にぶい黄褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-14 深鉢	胴部	単節 L R	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
17w・SK-2							
第36図	-1 深鉢	口縁部	4単位の小突起。微隆起線区画文で逆U字状に配する。単節 R L	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-2 深鉢	口縁部	波状で、口縁部は無文帯。小突起を有し微隆起線区画。単節 R L	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-3 深鉢	口縁部	平縁。口縁部無文帯。微隆起線区画文。外面スス付着。単節 L R	黒褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-4 深鉢	口縁部	平縁。微隆起帯による渦巻状区画文。単節 L R	黒褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-5 深鉢	口縁部	平縁。口縁部は無文帯。平行する微隆起線内は磨消。単節 R L	暗褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-6 深鉢	口縁部	口縁部は無文帯。微隆起線による区画文。単節 L R	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-7 深鉢	口縁部	口縁部は無文帯。微隆起線による区画文。単節 L R	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-8 深鉢	把手	把手部の破片。単節 R L。	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-9 深鉢	胴部	微隆起線区画文。単節 R L	黒褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-10 深鉢	胴部	微隆起線区画文。単節 R L。外面にスス付着。	黒褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-11 深鉢	胴部	微隆起線のみによる区画。小把手が付く。	明赤褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-12 深鉢	口縁部	口縁部は無文帯。微隆起線による区画文。単節 R L	黒褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-13 深鉢	胴部	微隆起線区画文。単節 R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-14 深鉢	口縁部	口縁部は無文帯。微隆起線による区画文。単節 R L	褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-15 深鉢	胴部	単節 R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-16 深鉢	胴部	単節 R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-17 深鉢	胴部	沈線区画文は逆U状をもつ。単節 L R	暗褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-18 深鉢	胴部	弧状の沈線区画文。単節 R L。	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-19 深鉢	胴部	単節 R L	にぶい黄褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-20 深鉢	胴部	附加条 L R	黒褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-21 深鉢	胴部	縦位の条線文	にぶい褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-22 深鉢	胴部	縦位の条線文	褐色	石英・長石	加曾利EV	
	-23 深鉢	底部	平底。無文	明赤褐色	雲母・石英・長石	加曾利EV	
	-24 深鉢	底部	上げ底。無文。	暗赤褐色	石英・長石	加曾利EV	

図版番号	器種	部位	文様の特徴	色調	胎土	時期	備考
-25	深鉢	底部	平底。無文	橙色	雲母・石英・長石	加曾利EIV	
17w・SK-3							
第37図	-1 深鉢	胴部	単節RL	明赤褐色	石英・長石	加曾利EIV	
	-2 深鉢	胴部	単節RL	黒褐色	石英・長石	加曾利EIV	
	-3 深鉢	胴部	単節LR。外面スス附着	褐灰色	石英・長石	加曾利EIV	
	-4 深鉢	胴部	微隆起線区画文。単節RL。	橙色		加曾利EIV	

第3表 確認調査出土土製品観察表

出土地点	種類	図版番号	計測値				部位	加工状態	形態	切り込み等の状態	
			長さcm	幅cm	厚さcm	重さg					
6トレンチ	土器片錘	第6図	-55	4.09	4.93	1.05	29.04	胴部	打割調整	長方形	短軸に1対
7トレンチ	有孔円板	第12図	-42	2.56	5.28	0.8	11.01	胴部	打割・全周研磨	円形	長軸に1対・1/2欠損
8aトレンチ	土器片錘	第13図	-43	3.58	3.84	2.11	26.72	口縁部	打割・全周研磨	不正円形	短軸に1対
9aトレンチ	土器片錘	第16図	-21	4.79	4.95	1.07	35.16	胴部	打割調整	不正円形	短軸に1対
9bトレンチ	土器片錘	第18図	-31	5.75	4.45	1.14	43.01	胴部	打割調整	長方形	長軸に1対
12bトレンチ	土器片錘	第22図	-12	4.93	4.68	1.1	32.1	胴部	打割調整	楕円形	長軸に1対
14bトレンチ	土器片錘	第22図	-18	5.52	3.45	0.93	24.37	口縁部	打割調整	楕円形	長軸に1対
17wトレンチ	土器片錘	第25図	-16	8.02	5.08	0.89	44.32	胴部	打割調整	楕円形	長軸に1対
	土器片錘		-17	6.59	5.41	1.28	50.58	胴部	打割調整	長方形	長軸に1対
14aトレンチS I-1	土器片錘	第30図	-78	6.34	3.95	1.01	26.71	口縁部	打割調整	長方形	長軸に1対
	土器片錘		-79	5.62	3.73	1.11	29.58	口縁部	打割調整	楕円形	長軸に1対
	土器片錘		-80	5.25	2.27	0.92	14.09	口縁部	打割調整	楕円形	長軸に1対
	土器片錘		-81	5.52	4.33	0.95	31.56	胴部	打割全周研磨	楕円形	長軸に1対
	土器片錘		-82	4.24	3.48	1.21	21.18	胴部	打割全周研磨	楕円形	長軸に1対
	土器片錘		-83	(7.08)	6.13	1.05	55.37	胴部	打割調整	長方形	長軸に1対
	土器片錘		-84	(7.52)	6.26	1.29	65.8	胴部	打割調整	不正長方形	長軸に1対
	土器片錘		-85	(7.65)	5.61	0.95	42.27	胴部	打割調整	不正形	長軸に1対
	土器片錘		-86	(2.91)	3.94	0.9	13.47	胴部	打割全周研磨	長方形	長軸に1対
	土器片錘		-87	3.77	3.7	0.74	12.88	胴部	打割調整	長方形	長軸に1対
	有孔円板		-88	5.31	5.3	0.69	22.32	胴部	打割全周研磨	円形	中央に穿孔
17wトレンチSK-2	土器片錘	第36図	-26	5.15	3.57	0.69	18.24	胴部	打割全周研磨	楕円形	長軸に1対
	土器片錘		-27	5.19	4.01	1.09	28.6	胴部	打割全周研磨	不正楕円形	長軸に1対
	土器片錘		-28	6.55	6.57	1.04	66.7	胴部	打割調整	方形	短軸に1対

第4表 確認調査出土石器観察表

出土地点	種類	図版番号	計測値				遺存度	特徴	石材	備考	
			長さcm	幅cm	厚さcm	重さg					
1トレンチ	剥片	第6図	-1	3.53	4.3	1.35	14.76	完存	加工はなし	チャート	
5bトレンチ	磨石	第8図	-36	10.05	6.65	3.88	445	端部欠	凹み痕表2・側面2	砂岩	全面磨耗痕
7トレンチ	石皿	第12図	-43	4.29	8.72	3.62	85	部分	表面研磨	多孔質安山岩	
8aトレンチ	叩石	第13図	-44	5.74	5.13	4.48	209	下半欠	端部叩痕	流紋岩	
8cトレンチ	磨石	第14図	-22	6.01	8.75	4.59	275	下半欠	凹み痕1	緑色凝灰岩	全面磨耗痕
10aトレンチ	ナイフ	第22図	-1	3.18	1.39	0.67	4.06	先端欠	両側面加工	頁岩	旧石器
13bトレンチ	砥石	第22図	-16	9.79	3.64	3.15	151	端部欠	全面研磨		
16aトレンチ	磨石	第25図	-10	6.41	8.17	4.03	288	大半欠	一部磨面	砂岩	

第5表 確認調査出土遺物観察表（古墳時代以降）

図版番号	器種	計測値(cm)	遺存度	器形の特徴	成形・成形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
1トレンチ 第6図-2	土師器 高坏	口径 -- 器高 (9.4) 底径 --	脚柱部1/2 残存	細長い脚柱部は下方で径を増し、裾部で屈曲する。	外面：縦位のヘラミガキ 内面：ヘラナデ	石英・長石 粒を含む。 焼成：良好	にぶい橙色 5YR7/4	S I-1
-3	土師器 坏	口径 13.8 器高 (5.2) 底径 --	体部1/2 残存	口縁部は内湾気味に立ち上がり、体部との境には明瞭な段を有し、そこから丸底に近い底部に向かってやや強く内湾して移行する。	外面：口縁部横ナデ。体部横位の比較的粗いヘラケズリ。内面の黒色処理が外面口縁にもおよぶ。 内面：口縁部から体部に同一工具によるヘラナデ。	雲母・石英・ 長石を含む。 焼成：良好	黒色 7.5YR2/1	S I-2 内面黒色処理
-4	土師器 坏	口径 13.0 器高 (3.3) 底径 --	体部1/4 残存	口縁部は多少内湾するものの、ほぼ垂直に立つ。口縁部と体部との境は屈曲する程度で、段をもたない。体部外面には輪積の接合面が残置する。	外面：ヘラ状工具による横ナデ。体部ナデ。接合部が明瞭に残る。 内面：口縁部から体部にかけてヘラナデ。	雲母・石英・ 長石を含む。 焼成：良好	にぶい黄褐色 10YR5/4	S I-2
-5	土師器 坏	口径 14.2 器高 (3.5) 底径 --	体部1/5 残存	口縁部の器厚は薄手で、内湾気味に立ち上がる。口縁部と体部の境は、屈曲する程度で、段を有しない。	外面：口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。 内面：口縁部から体部にかけてヘラナデ。	石英・長石 粒を含む。 焼成：良好	黒色 7.5YR2/1	S I-2 外面黒色処理
-6	土師器 坏	口径 12.4 器高 5.2 底径 --	完形	口縁部は短く内湾して立ち上がる。体部との境は屈曲し、明瞭である。そこから比較的深い丸底の底部に向かって移行する。	外面：口縁部横ナデで、僅かに赤彩痕がみられる。体部は不定方向のヘラケズリが施されている。 内面：口縁部から体部にかけてヘラナデ。	石英・長石 粒を含む。 焼成：良好	浅黄橙色 10YR8/4 内面黒色 タールの付 着がある。	S I-2 外面赤彩処理 が施されてい る。
-7	土師器 坏	口径 13.8 器高 4.3 底径 --	体部1/5 欠損	口縁部は短く内傾気味に立ち上がる。口唇端部は尖り、体部との境も屈曲しながら明瞭である。そこから平底気味の底部に向かって移行する。	外面：口縁部横ナデ。体部横方向のヘラケズリ。底部に木葉痕が小さく残置している。境には接合部がみられる。 内面：ヘラナデ	石英・長石 粒を含む。 焼成：良好	黒褐色 10YR3/1	S I-2
-8	土師器 坏	口径 13.8 器高 (2.1) 底径 --	体部1/3 残存	口縁部は短く内傾気味に立ち上がる。口唇端部は鋭く尖り、体部との境は丸みをもち明瞭ではない。	外面：口縁部横ナデ。体部横位のヘラケズリ。 内面：横ナデ	石英・長石 粒を含む。 焼成：良好	浅黄橙色 10YR8/4	S I-2
-9	土師器 坏	口径 15.4 器高 4.4 底径 --	口縁部2/3 欠損	口縁部は短く内傾気味に立ち上がる。口唇端部は鋭く尖り、体部との境は丸みをもち、不明瞭である。体部は浅く、丸底の底部へ移行する。	外面：口縁部横ナデ。体部不定方向のヘラケズリ。 内面：ヘラナデ。全面タールが付着し、黒色処理が施されている。	石英・長石 粒を含む。 焼成：良好	外面；暗褐色 7.5YR3/4。 内面黒色 10YR17/1	S I-2
-10	土師器 甕	口径 -- 器高 (4.5) 底径 8.0	底部のみ 3/4残存	ほぼ平底の底部から、体部は大きく開きながら外方へ立ち上がる。	外面；体部縦位もしくは斜位の細かなヘラナデ。底部もほぼ一方方向の細かなヘラナデ。 内面；底面ヘラナデ。	雲母・石英・ 長石を含む。 焼成：良好	黒色 7.5YR2/1	S I-2
-11	須恵器 坏	口径 13.6 器高 4.5 底径 5.0	体部1/4 残存	体部はほぼ直線的に外上方へ立ち上がる。口唇部は小さく外反する。また体部にはロクロ成形痕が明瞭に残る。底部は手持ちヘラケズリ。	ロクロ成形。内外面ともロクロナデ。体部下端部は手持ちヘラケズリ。底部一方方向の手持ちヘラケズリ	雲母・石英・ 長石粒を含む 焼成：良好	にぶい黄褐色 10YR6/3	S I-3
-12	土師器 高台付 坏	口径 -- 器高 (2.3) 底径 8.6	高台1/4 残存	ロクロ成形。高台は貼り付けで、「ハ」の字状に短く開く。坏部は大きく開く。	ロクロ成形。底部回転ヘラ切り。高台貼付け部はナデ整形。	雲母・石英・ 長石粒を含む 焼成：良好	橙色 2.5YR6/8	S I-3
-13	須恵器 甕	口径 30.0 器高 (6.3) 底径 --	口縁部1/4 残存	肩部の張りはなく、口縁部は強く外反し、口唇部は短く摘み上げられる。	外面：口縁部横ナデ。体部縦位のタキメ。 内面：口縁部横ナデ。体部横位のヘラナデ。	雲母・石英・ 長石粒を含む 焼成：良好	黒色 7.5YR2/1	S I-3
-14	土師器 甕	口径 17.0 器高 22.8 底径 8.0	口縁部1/8、 体部1/2残 存	平底の底部から倒卵形の胴部に移行し、口縁部は比較的弱く外反す。胴部最大径は上位にもつ。口唇部は短く摘みつ。口唇部は短く上方へ摘み上げられる。	外面：口縁部横ナデ。体部上半部ヘラナデ。下半部縦方向の細かいヘラナデ。底部ヘラナデ。 内面：口縁部横ナデ。体部横位のヘラナデ。	雲母・石英・ 長石粒を含む 焼成：良好	にぶい褐色 7.5YR7/4	S I-3
-15	須恵器 甕	口径 -- 器高 (4.5) 底径 --	胴部破片	胴部下半部の破片。直線的に立ち上がる。	外面：沈線がめぐる。ナデ整形。 内面：ヘラナデ	石英・長石 粒を含む。 焼成：良好	灰色10Y6/1	S I-3
4トレンチ 第7図-1	土師器 高坏	口径 -- 器高 (5.5) 底径 --	脚柱部の み残存	坏部は下位で屈曲し、ほぼ直線的にひらく。脚部は裾広がりに開く。	外面：坏部ヘラナデ。脚部縦位のヘラナデ。 内面：坏部ヘラナデ。脚部ヘラナデ	石英・長石 粒を含む。 焼成：良好	橙色 7.5YR7/6	S I-1
-2	土師器 鉢	口径 -- 器高 (4.5) 底径 3.8	体部1/3 欠損	平底の底部から体部は内湾気味に立ち上がる。	外面：体部ヘラナデ。底部ヘラナデ。 内面：横位のヘラナデ	石英・長石 粒を含む。 焼成：良好	橙色 7.5YR7/6	
-3	土師器 甕	口径 19.2 器高 (4.8) 底径 --	口縁部の み1/3残存	口縁部は直線的に開く。口唇部は平坦である。	外面：口縁部斜行するハケメ調整の後、斜行するヘラナデ 内面：横位のハケメ調整。体部横位のヘラナデ	石英・長石 粒を含む。 焼成：良好	黄橙色 7.5YR8/8	
-4	土師器 台付甕	口径 -- 器高 (8.2) 底径 10.4	脚部のみ 完存	脚部は内湾気味にやや膨らみをもちながら開く。	外面：縦位のハケメ調整。ヘラナデを施す。 内面：甕底部ヘラナデ。脚部横位の丁寧なヘラナデ	石英・長石 粒を含む。 焼成：良好	橙色5YR7/8	
5bトレンチ 第8図-37	土師器 器台	口径 -- 器高 (1.8) 底径 --	坏部下半 部のみ	坏部は下位でわずかに屈曲し、外上方へ開く。 脚部は接合部から欠損している。	外面：坏部ヘラナデ。 内面：坏部ヘラナデ。	石英チャ ート粒を含む 焼成：良好	橙色5YR7/8	

図版番号	器種	計測値(cm)	遺存度	器形の特徴	成形・成形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
-38	土師器 器台	口径 ー 器高 (5.6) 底径 ー	脚柱部上半部のみ	脚柱部は接合部から直線的にのび、中位付近からゆるくカーブを描きながら外方へ開く。透孔は4個であろう。	外面：脚柱部縦位のヘラナデ。 内面：受部内ヘラナデ。脚部縦位、斜位のハケメ調整。	雲母・石英・長石粒を含む。 焼成：良好	浅黄褐色 10YR8/4	
-39	土師器 甕	口径 17.6 器高 (4.1) 底径 ー	口縁部のみ1/5残存	口縁部はやや外反気味に開く。外面にスス状の炭化物が付着。	外面：横ナデ 内面：横ナデ	石英・長石粒を含む。 焼成：良好	浅黄褐色 7.5YR8/4	
-40	土師器 甕	口径 ー 器高 (1.7) 底径 7.8	底部のみ1/5残存	やや上げ底気味の底面は、大きく外側に突出し、体部は大きく開く。	外面：ヘラナデ。底部ヘラナデ 内面：ヘラナデ。	雲母・石英・長石粒を含む。 焼成：良好	黒褐色 7.5YR3/1	
-41	土師器 坏	口径 ー 器高 (3.1) 底径 ー	体部のみ1/4残存	平底気味の底部からわずかに稜をもって体部に移行する。わずかに残存する口縁部との境に明瞭な段をもつ。	外面：口縁部横ナデ。体部ヘラケズリ。 内面：ヘラナデ。	雲母・石英・長石粒を含む。 焼成：良好	暗褐色 10YR3/3	
-42	土師器 坏	口径 14.6 器高 4.4 底径 6.6	体部の一部を欠損するもの、ほぼ完存	体部はほぼ直線的に開き、口唇部で小さく外反する。底部は平底。体部内外面は明瞭なロクロ目が残る。	外面：ロクロ目が明瞭に残る。体部下端部は手持ちヘラケズリ。底部回転ヘラ切り後、手持ちヘラケズリ。 内面：ロクロナデによるロクロ目が明瞭に残る。	雲母・石英・長石粒を含む。 焼成：良好	内面にぶい 黄褐色 10YR7/4	
-43	陶器 甕	口径 ー 器高 13.5 底径 ー	胴部破片	胴部下半部の破片。やや内湾気味に立ち上がる	外面：ヘラナデ。 内面：ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 焼成：良好	灰黄褐色 10YR5/2	
-44	磁器 碗	口径 ー 器高 (4.1) 底径 4.9	体部下半部約1/4残存	肥前系磁器染付碗。高台は短く「ハ」の字状に付く、体部は丸く立ち上がる。	ロクロ成形。内外面および高台内面に釉が掛る。 文様は草花文と思われる。	素地は灰白色 焼成：良好	灰色5Y4/1	
6トレンチ 第11図 -58	土師器 壺	口径 26.0 器高 (2.7) 底径 ー	口縁部のみ1/10残存	複合口縁の複合帯にあたる。複合帯の幅は2.7cmを測る。	外面：横ナデ。赤彩痕がみられる 内面：横ナデの後、ヘラミガキ	石英・長石粒を含む 焼成：良好	橙色 2.5YR6/8	
-59	土師器 高坏	口径 ー 器高 (9.4) 底径 ー	坏部・脚柱部を欠出し、脚柱部のみ残存	脚柱部は接合部から直線的にのび、中位付近がわずかに膨らむ。裾部は強く屈曲する。	外面：縦位の細かなヘラナデの後、上半部のみ横方向のヘラミガキを施す。赤彩が施されている。 内面：脚柱内面はヘラ状工具によるナデ整形。	石英・長石粒を含む 焼成：良好	明赤褐色 2.5YR5/8	
-60	土師器 高坏	口径 ー 器高 (3.8) 底径 ー	脚柱部上半部のみ残存	脚柱部は坏接合部からほぼ直線的に徐々に開きながら下方へのびる。	外面：縦位の細かなヘラナデの後、上半部のみ横方向のヘラミガキを施す。赤彩が施されている。 内面：欠損しており不明	石英・長石粒を含む 焼成：良好	明赤褐色 2.5YR5/8	
-61	土師器 器台	口径 ー 器高 (1.2) 底径 ー	受部のみ1/4残存	受部底部は扁平な円盤状を呈し、口縁部は外上方へ大きく開くと思われる。境界には外方へ張り出す明瞭な段を有する。	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	石英・長石粒を含む 焼成：良好	橙色 2.5YR7/8	
-62	土師器 台付甕	口径 ー 器高 (4.3) 底径 ー	甕底部から脚部接合部付近のみ残存	甕底部はやや急角度ですばまり、脚部は緩く外方へ開く。	外面：縦位のハケメ調整 内面：甕底部ヘラナデ。脚内面ヘラナデ。	石英・長石粒を含む 焼成：良好	明赤褐色 2.5YR5/8	
-63	土師器 甕	口径 22.2 器高 (7.0) 底径 ー	口縁部のみ1/10以下残存	肩部の張りは比較的弱く、口縁部は強く外反する。口唇部は揃み上げられ、小さく外反する	外面：口縁部横ナデ。体部ヘラナデ。 内面：口縁部横ナデ。体部ヘラナデ。	雲母・石英・長石を含む 焼成：良好	暗褐色 7.5YR3/3	
-64	土師器 甕	口径 ー 器高 (5.1) 底径 ー	胴部破片	胴部下半部で、ほぼ直線的に外上方へ開く。	外面：縦位のタタキメ 内面：ヘラナデ	雲母・石英・長石を含む 焼成：良好	褐色 10YR4/4	
-65	土師器 甕	口径 ー 器高 (3.4) 底径 ー	胴部破片	胴部下半部で、ほぼ直線的に外上方へ開く。	外面：縦位のタタキメ 内面：ヘラナデ	雲母・石英・長石を含む 焼成：良好	褐色 10YR4/4	
7トレンチ 第12図 -44	土師器 甕	口径 25.4 器高 (4.0) 底径 ー	口縁部のみ1/8残存	頸部は短く外上方へ立ち上がり、口縁部は複合口縁である。複合帯の幅は2.5cmで、外反の度は頸部とほぼ同じである。	外面：口縁部横ナデ。頸部縦位のハケメ調整。 内面：口縁部横位のハケメ調整後、横ナデを施す	雲母・石英・長石を含む 焼成：良好	暗褐色 7.5YR3/3	
-45	土師器 甕	口径 20.0 器高 (3.9) 底径 ー	口縁部のみ1/15	頸部は短く外上方へ立ち上がり、口縁部は複合口縁である。複合帯の幅は2.5cmで、外反の度は頸部とほぼ同じである。	外面：口縁部横ナデ。頸部縦位のハケメ調整。 内面：口縁部横位のハケメ調整後、横ナデを施す	雲母・石英・長石を含む 焼成：良好	暗褐色 7.5YR3/3	
-46	土師器 高坏	口径 ー 器高 (2.5) 底径 ー	坏下半部1/2残存	坏部底部と口縁部の境に明瞭な段を有する。	外面：ヘラミガキ 内面：ヘラミガキ	石英・長石粒を含む。 焼成：良好	赤褐色 2.5YR4/8	
-47	土師器 高坏	口径 ー 器高 (8.8) 底径 ー	脚柱部のみ残存	坏接合部からわずかに中膨らみを呈しながら垂直気味に裾部に移行する。裾部は強く屈曲する。	外面：縦位のヘラミガキ 内面：脚内部ヘラナデ。裾部ヘラナデ	雲母・石英・長石を含む。 焼成：良好	明赤褐色 2.5YR5/8	
-48	土師器 小型壺	口径 12.0 器高 (3.4) 底径 ー	口縁部のみ1/10以下残存	口縁部はわずかに内湾気味に大きく開く。	外面：縦位、斜位のハケメ調整 内面：横位のハケメ調整	石英・長石粒を含む。 焼成：良好	浅黄褐色 10YR8/3	

図版番号	器種	計測値(cm)	遺存度	器形の特徴	成形・成形の特徴	胎土・焼成	色調	備考
9aトレンチ 第16図-22	土師器 高坏	口径 --- 器高 (10.8) 底径 ---	脚柱部の み残存	細長い脚柱部は下方で径を増す。やや中膨らみがみられる。	外面：縦位のヘラミガキ。赤彩が施されている。 内面：ヘラナデ。	石英・長石粒を含む。 焼成：良好	橙色 2.5YR7/6	
-23	土師器 器台	口径 --- 器高 (2.3) 底径 ---	受部下部 完存	受部底部は扁平な円盤状を呈し、さらに坏部を円盤上に貼り付ける。底部と坏部の境は外方へ大きく突出する。	外面：縦位のヘラミガキ。 内面：ヘラミガキ。	石英・長石粒を含む。 焼成：良好	にぶい橙色 7.5YR7/4	
9bトレンチ 第17図-1	土師器 甕	口径 --- 器高 (16.8) 底径 6.0	胴部下半 部のみほぼ 完存	小さく平底の底部は短く外側に突出し、胴部は球形を呈する。最大径は胴部中位で24cmを測る。またここには帯状にスス状の炭化物が付着。	外面：体部斜行するハケメ調整の後、ヘラミガキ。底部ヘラナデ。 内面：体部横位のヘラナデ。底部斜位のヘラナデ。	石英・長石粒を含む。 焼成：良好	外面：橙色 5YR6/8 内面：橙色 5YR7/6	S I -1
9bトレンチ 第18図-32	土師器 甕	口径 16.2 器高 (5.5) 底径 ---	口縁部の み完存	肩部が張り、口縁部は大きく外反する。口縁部上位はわずかに有段となる。接合部における輪積痕を消失させるためのナデ整形痕であろう。	外面：口縁部ヘラ状工具による横ナデ。頸部から肩部縦位のヘラナデ。 内面：口縁部横ナデ。肩部斜位のヘラナデ。	雲母・石英粒を含む。 焼成：良好	外面：黄橙色 7.5YR7/8 内面：橙色 7.5YR7/6	表面採集資料 出土等詳細 は不明
10aトレンチ 第22図-3	土器 焙烙	口径 --- 器高 (4.3) 底径 ---	口縁部破 片	口縁部はやや内湾するものの、垂直気味に立ち上がる。口唇部は凹帯がめぐる。	ロクロナデ。	雲母・石英粒を含む。 焼成：良好	外面：黒色 10YR2/1 内面：にぶい 橙色 7.5YR7/4	
11aトレンチ 第22図-6	土器 灯明皿 (小皿)	口径 9.0 器高 1.7 底径 6.6	体部1/3 残存	平底の底部から体部は内湾気味に外上方へ開く。	ロクロ成形。底面ナデ整形。	雲母片含む 焼成：良好	浅黄橙色 7.5YR8/4	

第4章 神明遺跡第3次調査

第1節 調査の方法

1. 調査の目的

神明遺跡は、運動公園建設予定地のほぼ中央部に位置する。南北300m、東西250mにわたって広がっており、その広大な面積を記録保存化するには複数年次にわたる調査が必要とされる。平成9年度に実施された第1次・2次調査は、当遺跡を南北に縦断する現有の農道を基準に、その西側部分を対象として行なわれ、約7,000㎡の調査を終了している。残された東側部分が今年度以降の調査対象地となるが、より広い面積が残されている中で、遺跡の性格が的確に把握され、かつ単年度の作業に適した広さをもつ調査区の設定が今般の課題となっていた。

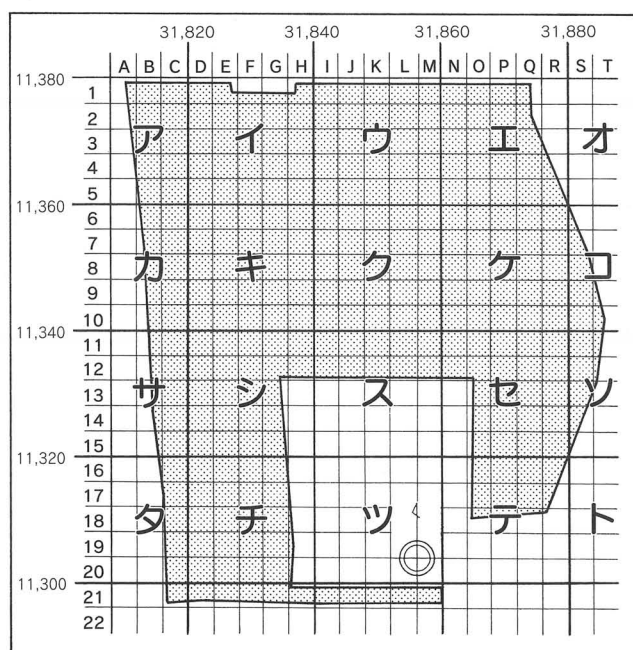
常名台遺跡群全体を対象とする確認調査は、神明遺跡第3次調査に半月ほど先駆けて行われていたが、その成果によって、当遺跡の北側部分には濃密な住居跡の存在が確認され、反対に当遺跡よりも南方には古墳ないし周溝墓が点在している様子が把握された。この南北の対照的なあり方は、それぞれ隣接する北西原遺跡と山川古墳群の性格に対応したものと考えられ、以下のような予想を導くことになった。

- ①北西原遺跡は100軒を超える古墳時代前期の大集落であるが、神明遺跡の北側にもその一部が広がっているとと思われること。
- ②山川古墳群は過去の調査で7基以上の古墳が確認されているが、その墓域が神明遺跡の南側にまで伸びている可能性があること。

北に集落、南に墓域という構図は、ひとり神明遺跡の性格を考える上だけでなく、常名台全体の遺跡のあり方を知り、ひいては向後の調査方針を決定する上でも確実な実態把握が求められることであった。これを踏まえ、第3次調査区の設定は、集落域と墓域の予想される中間地点を選ぶように配慮し、その実態究明に当ることとした。また、確認調査では当遺跡の北側部分に縄文時代の濃密な遺構分布を確認しているが、作業量を勘案してこれに正面から当たることを避ける方針を採った。同時に、未買収地や現有の農道を犯さず、作業の安全を確保できる範囲で調査を行なうこととした。

2. 地区設定

神明遺跡第3次調査区の設定は、日本平面直角座標第Ⅸ系を用いて区画し、 $X = 11.380\text{m}$ 、 $Y = 31.820\text{m}$ の交点を基準点とした。この基準点は、常名台遺跡群の確認調査で設定した12トレンチのX座標値を踏襲しており、12トレンチ自体を調査区の北限にしている。この基準点を軸にして、今回の調査予定区域を20m四方の大グリッドに分割し、さらにこれを東西南北に5分割して4m四方の小グリッド



第38図 グリッド設定図

の調査予定区域を20m四方の大グリッドに分割し、さらにこれを東西南北に5分割して4m四方の小グリッド

ドを設定した。各グリッドの名称は、大グリッドと小グリッドの混乱を避けるため、大グリッドにはカタカナ表記を使用し、小グリッドにはアルファベットと算用数字の組み合わせで表記することにした。すなわち、大グリッドは北西隅から「アGrid」、「イGrid」…、小グリッドは同じく「A 1区」、「B 1区」…の名称を与えている。

3. 調査および記録方法

当遺跡の主体部分は台地上の平坦地にあり、調査前は畑作地として利用されていた。台地上面の表土はきわめて薄く、場所によっては20cm程度の掘削でローム地山に到達してしまう状況であった。従って、重機による表土除去は慎重に行ない、鋤簾を用いた人力による遺構の確認・精査を積極的に行った。木根やごく新しい時期の攪乱などについては、当初から掘らないかもしくは完掘しても記録化しない方針とした。個別遺構の発掘は、主に移植ゴテを用い、遺物の出土状況および覆土の堆積状況を記録化しながら掘り下げた。完掘後、スライド用と白黒のフィルムで写真撮影を行ない、平板と遣り方の両者を併用した実測作業を行った。調査終了後、遺跡全体の航空写真の撮影と測量を委託事業で行なった。

遺構の呼称・記録に際しては、凡例と同じく以下の記号を使用した。「埋没谷」や「中世ピット群」など特異なものは判り易さを優先して記号を充てないことにした。

竪穴住居跡…S I、土坑…S K、溝…S D、その他の遺構…S X、攪乱…K、ピット…P

遺構の実測図は、調査地では1/20ないし1/40を基本縮尺として作成し、報告に際しては1/60を基本とした。遺物の実測図は1/3を基本に作成し、必要に応じてスケールを付して縮尺を変更している。遺物の名称や計測値などは原則として観察表にまとめているが、縄文土器や石器に関してはその限りではない。

第2節 遺跡の概要

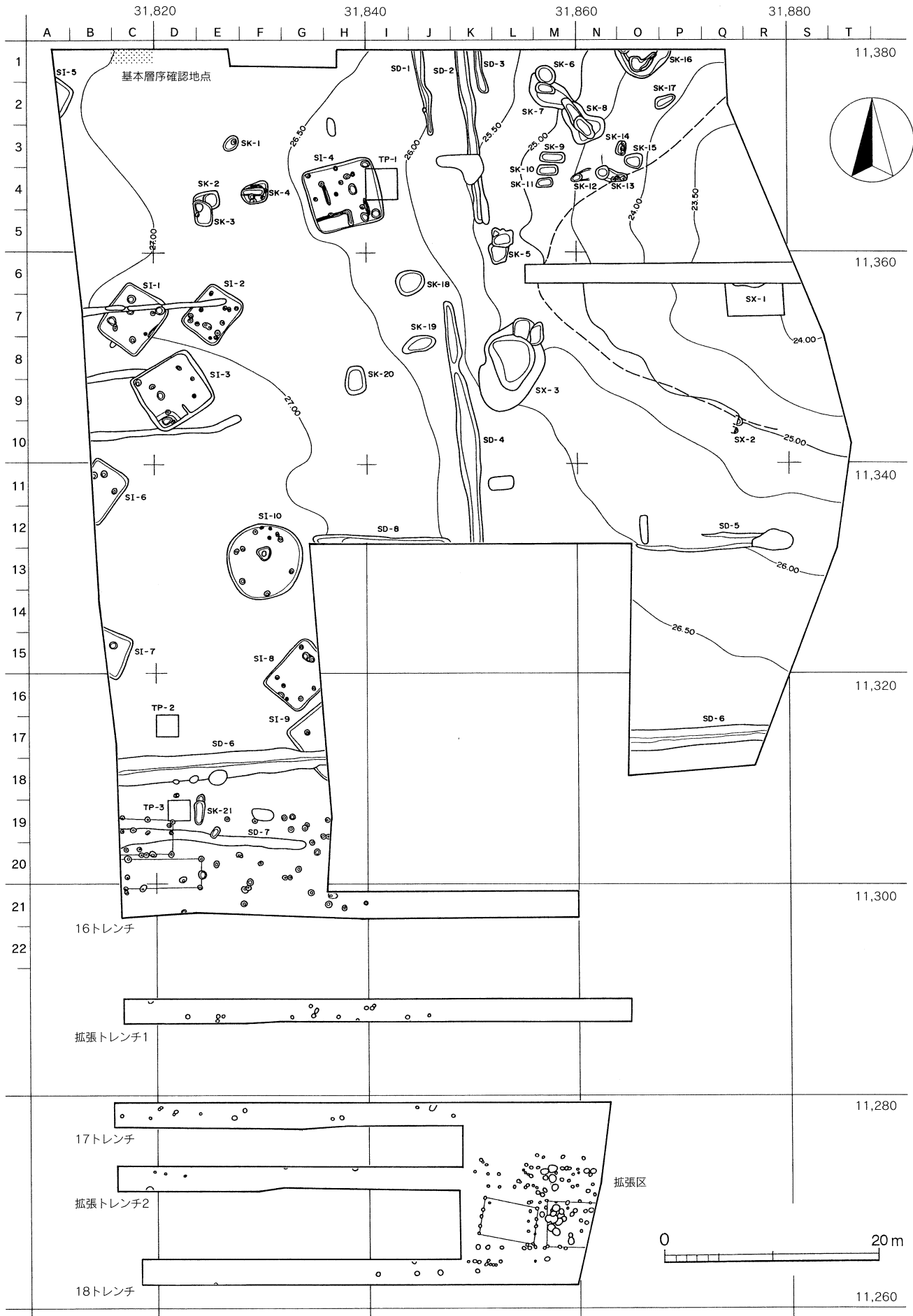
神明遺跡は、桜川低地から入り込む開析谷の西側に広がる台地上に位置する。この台地は東側に小支谷を抱えるため凹字形を呈しているが、今回の調査地はまさにその中央の窪み部分に相当する。調査面積は、平坦地および埋没谷を含めて約4,420m²である。

検出された遺構は、竪穴住居跡が10軒、土坑が21基、溝が8条、その他の遺構が3基、そして埋没谷の堆積土中に土器の包含層が一面、中世の建物跡と思われる複数のピット群である。これを時代別にみるならば、縄文時代中期と古墳時代前期、そして中世前期のおよそ3つの時代の遺構群に分けることができる。

縄文時代の遺構は、住居跡が1軒、土坑が3基以上、埋没谷の包含層が1面である。住居跡は直径7mを超える大型のもので、土器を埋設した炉を備えていた。土坑は貝殻が投棄されたいわゆる「地点貝塚」相当のものが2基、粘土採掘坑が1基検出された。いずれも加曾利EⅡ～Ⅲ式の段階に相当する。また、埋没谷に堆積した黒色土中からは加曾利EⅡ～Ⅲ式を中心とした土器片が含まれており、該期の包含層と認識することができた。

古墳時代の遺構は、住居跡が9軒で、遺物からすべて前期のものと判断された。当調査区の北西至近にある北西原遺跡で検出された大集落とほぼ同時期であり、その南端に連なる9軒と考えることができよう。結合器台やパレススタイルの壺など、特徴のある遺物も出土している。

中世の遺構は、土坑が4基以上、長さ70m以上にわたる薬研堀の溝が1条、掘立柱建物跡の柱穴とみられるピット群が複数群、埋没谷の中の整地遺構が1基である。また、当調査区の南方20mの地点に拡張区を設け、複数棟の掘立柱建物跡の存在を確認している。特筆されるのは、薬研堀とそれに囲まれた掘立柱建物群の存在である。第1次調査の成果とあわせると、薬研堀はおそらく方一町余りの方形に巡る堀になると推測



第39図 神明遺跡第3次調査区全体図

され、中世前期の本格的な居館跡となる可能性が高い。

さらに遺物のみであるが、旧石器時代のナイフ形石器が2点と剥片が1点、平安時代の須恵器高台坏が2点、近世の箱庭具（ミニチュアの道標）や泥面子各1点なども出土しており、近辺にはさらに多くの時期にわたる遺構が伏在しているものと予想される。

第3節 基本層序と地質環境

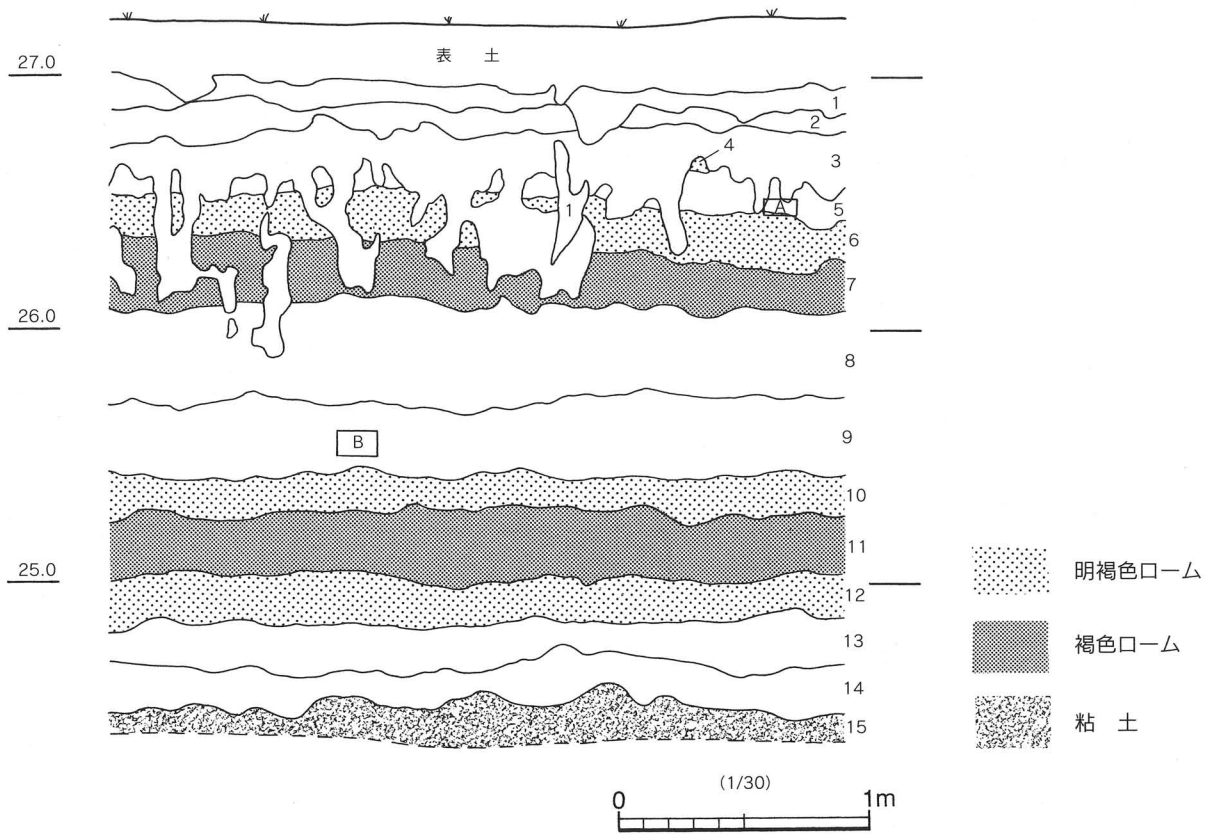
神明遺跡を含めた常名台遺跡群は筑波山南麓に広がる新治台地南縁に立地する。新治台地は西が高く東に向かい標高を徐々に下げる台地で、開析谷や河岸段丘の形成が比較的少ない起伏の弱い平坦な台地という印象がある。標高27mの台地上面では関東ローム層によって被覆されているが、24m以下の部分は粘土層や砂層から構成され、武蔵野台地以西の台地で多く認められる武蔵野礫層などの基盤礫層と同様な礫層は確認されていない。当遺跡では第1・2次と今次調査で基本層序の確認を目的として、調査区北側に試掘坑を掘削し風成堆積部分の観察を行なった。その結果判明した内容を要約しておく。

下末吉海進期に形成された常総粘土直上の14層に箱根東京軽石（Hk-TP）粒子が含まれていることを確認した。箱根東京軽石は降下年代が49,000年から60,000年前に想定されている軽石層で（町田・新井1992）、降下頃にはすでに離水陸化が進行して降下テフラが堆積可能な環境となっていたと考えられる。10層は3層と同等に軟質で、硬質な11・12層と共に色調が暗い層である。この3層は武蔵野台地で確認された武蔵野ローム下部暗色帯群に対比できると考えられる。9層には、青灰色粗粒火山灰（BCVA）に相当する青灰色スコリアが多量に含まれている。区分したローム層中最も硬質な層位で、写真撮影でもこの部分が白いブロック状に写っている。8層には赤城鹿沼軽石（Ag-KP）粒子が含まれている。7.6層は立川ローム第2暗色帯上部・下部に相当する。常陸南部地域ではこの第2暗色帯が比較的認識しやすいため、現地調査で層位対比の指標となる。5層は始良丹沢軽石（AT）を含む層位で、壁面削り作業の際にも砂質感が強い。4層以上3層が軟質ロームとなっているため、立川ローム第1暗色帯の確認が困難である。また軟質化が第2暗色帯にまで達するものもあり、ローム層の遺存状況はあまり良好とは言えない。1・2層が縄文時代以降の遺物包含層であり遺構覆土の主要母材となっている。

当遺跡の調査では、立川ローム対比Ⅶ層段階の石器が散発的に検出されている。これらの石器は、ローム層の遺存状況から考えると後期旧石器時代前半の資料が表土近くに移動している可能性が高い。東側開析谷を挟み対峙する弁才天遺跡にも同期の石器が多数検出されている。開析谷から比較的離れた平坦地でナイフ形石器が数点出土しており、谷に近い東側台地縁辺の傾斜変換線付近を中心に同時期の石器群が多数出土する可能性は高い。

縄文時代以降の遺物包含層の大半は、近世以降の開墾などによって攪乱を受けているため台地平坦面では遺物包含層が残らず、遺構内に埋没したものが残存していた。調査区東側には開析谷に向かい開く埋没谷が1ヶ所検出された（第88図、「第4節 7. 埋没谷」参照）。この谷は黒色土によって埋没していたが、この覆土の9b層中には赤褐色スコリアと共に透明ガラス片が大量に含まれていたことを水洗作業によって確認した。おそらく完新世以降の新时期テフラが堆積していたものと考えられる。斜面堆積の土壌のため二次堆積の可能性があるが、9b層より上位に縄文時代中期以降の遺物が包含されていたことなどからも、前期以前の包含層の可能性はある。

（参考文献） 町田 洋・新井 房夫 1992『火山灰アトラス』東京大学出版会



- | | |
|---|--|
| <p>1. 褐色土 (7.5YR4/6)</p> <p>2. 褐色土 (7.5YR4/6)</p> <p>3. 明褐色軟質ローム (7.5YR5/8)</p> <p>4. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/6)</p> <p>5. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/8)</p> <p>6. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/6)</p> <p>7. 褐色硬質ローム (7.5YR4/6)</p> <p>8. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/6)</p> <p>9. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/8)</p> <p>10. 明褐色軟質ローム (7.5YR5/6)</p> <p>11. 褐色硬質ローム (7.5YR4/4)</p> <p>12. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/6)</p> <p>13. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/8)</p> <p>14. 明褐色硬質ローム (7.5YR5/8)</p> <p>15. 明褐色粘質土 (7.5YR5/6)</p> | <p>縄文時代以降の遺物包含層 ローム粒子 ($\phi \sim 3 \text{ mm}$) 僅かに含む。</p> <p>ローム粒子 ($\phi \sim 5 \text{ mm}$) 多く含む。</p> <p>スコリア等見られない。</p> <p>赤色スコリア ($\phi \sim 1 \text{ mm}$) 僅かに含む。立川ローム第1暗色帯 (BB 1) に相当。</p> <p>青灰色スコリア ($\phi \sim 2 \text{ mm}$)、赤色スコリア ($\phi \sim 1 \text{ mm}$) 多量、炭化物粒 ($\phi \sim 2 \text{ mm}$) 僅かに含む。</p> <p>鎌掛け時の砂質感が強い。A T 包含層。分析用土壌サンプル (A) 採取。</p> <p>赤色スコリア ($\phi \sim 1 \text{ mm}$) 多量に含む。壁左側には炭化物粒 ($\phi \sim 10 \text{ mm}$) が多量に分布する。</p> <p>立川ローム第2暗色帯上部 (BB 2 U、VII層) に相当する。</p> <p>黒色スコリア ($\phi \sim 0.5 \text{ mm}$) 多量、赤色スコリア ($\phi \sim 1 \text{ mm}$) 僅か、炭化物粒 ($\phi \sim 1 \text{ mm}$) 僅かに含む。</p> <p>立川ローム第2暗色帯下部 (BB 2 L、IX層) に相当する。</p> <p>青色スコリア ($\phi \sim 0.5 \text{ mm}$) 多量、赤城鹿沼パミス (Ag-KP) 僅かに含む。</p> <p>白色粒子 ($\phi \sim 1 \text{ mm}$) と赤褐色粒子 ($\phi \sim 10 \text{ mm}$) とともに僅かに青灰色スコリア ($\phi \sim 0.5 \text{ mm}$) 極めて多量に含む。青色不発泡質火山灰 (BCVA) 包含層。極めて硬質。土壌サンプル (B) 採取。</p> <p>白色粒子 ($\phi \sim 0.5 \text{ mm}$) 僅か、赤色スコリア ($\phi \sim 0.5 \text{ mm}$) 僅か、青灰色スコリア ($\phi \sim 0.5 \text{ mm}$) 僅かに含む。</p> <p>BCVA下のソフトローム。</p> <p>白色粒子 ($\phi \sim 0.5 \text{ mm}$) 僅か、黒色スコリア ($\phi \sim 0.5 \text{ mm}$) 多量に含む。武蔵野ローム暗色帯に相当する。</p> <p>黒色スコリア ($\phi \sim 1 \text{ mm}$) 多量、白色粒子 ($\phi \sim 1 \text{ mm}$) 僅かに含む。暗色帯下部に相当する。</p> <p>黒色粒子 ($\phi \sim 0.5 \text{ mm}$) 多量、灰白色粒子 ($\phi \sim 3 \text{ mm}$) 多量に含む。かなり硬質。</p> <p>東京箱根パミス (Hk-TP) 粒子 ($\phi \sim 2 \text{ mm}$) 多量、青灰色粒子 ($\phi \sim 1 \text{ mm}$) 多量、赤褐色スコリア ($\phi \sim 2 \text{ mm}$) 僅かに含む。かなり硬質。</p> <p>褐鉄鉱粒子 ($\phi \sim 2 \text{ mm}$) 多量に含む。常総粘土層の最上部。</p> |
|---|--|

A・B：分析用土壌サンプル採取地点
 [凡例] 色調は新版標準土色帖に拠る。

ϕ ：粒子直径の最大値を表示。

第40図 基本層序 (観察地点C 1 Grid)

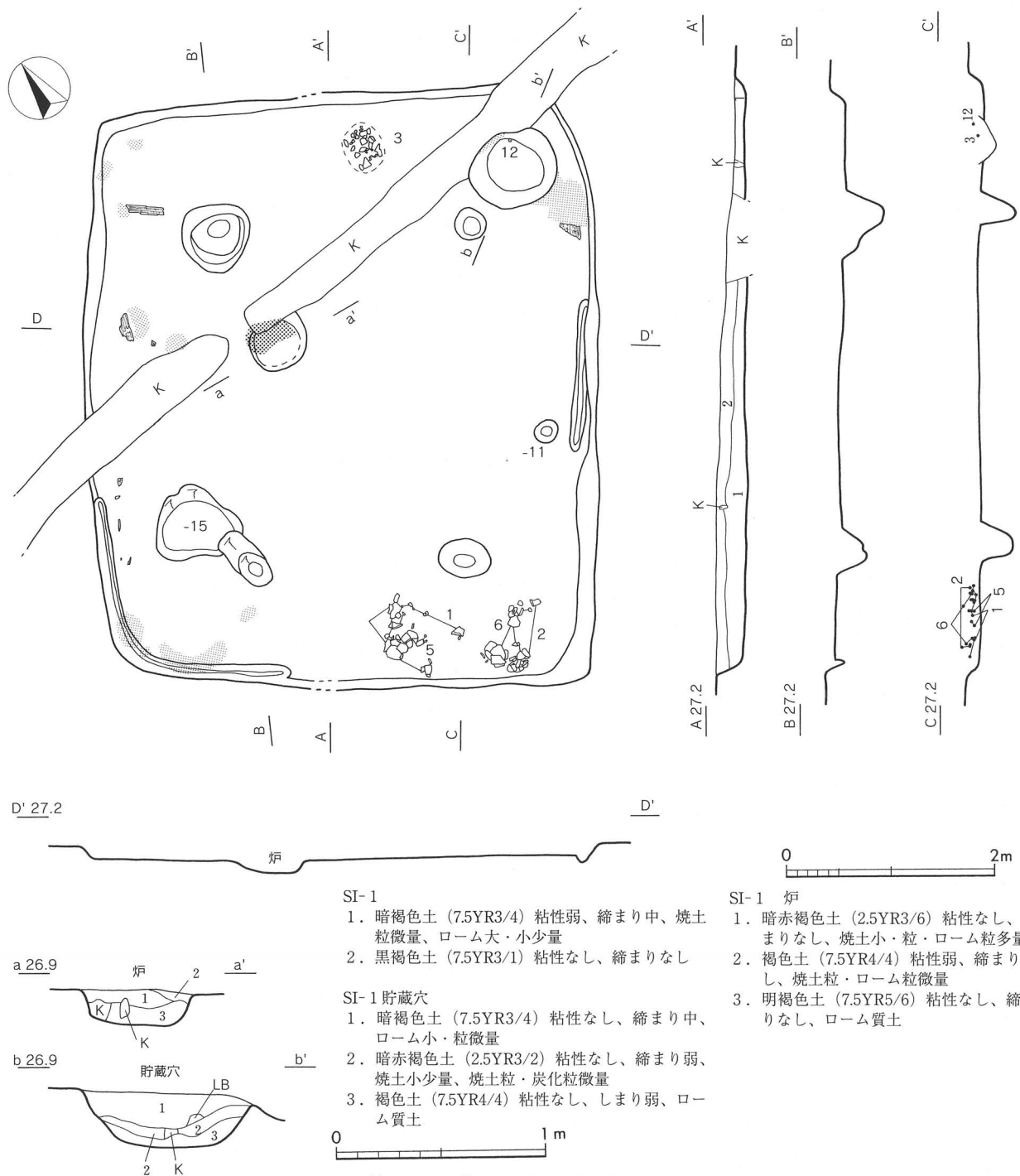
第4節 遺構と遺物

1. 竪穴住居跡 (SI)

住居跡は全部で10軒を検出した。縄文時代の住居跡 (SI-10) が1軒、他はすべて古墳時代前期の住居跡である。立地は調査区の西半分に集中し、台地の高所平坦部を選んで広がっている。切り合い関係を有する住居跡は存在しなかった。

第1号住居跡 (SI-1) [第41~43図、PL.11・25]

位置 調査区北西寄り、B6からC8区 (カ・キGrid) にまたがって位置し、標高27mの台地平坦面に立地



第41図 第1号住居跡実測図

する。東西方向にのびる攪乱溝が当住居跡を斜めに横断しており、壁の一部と床面が破壊を受けていた。

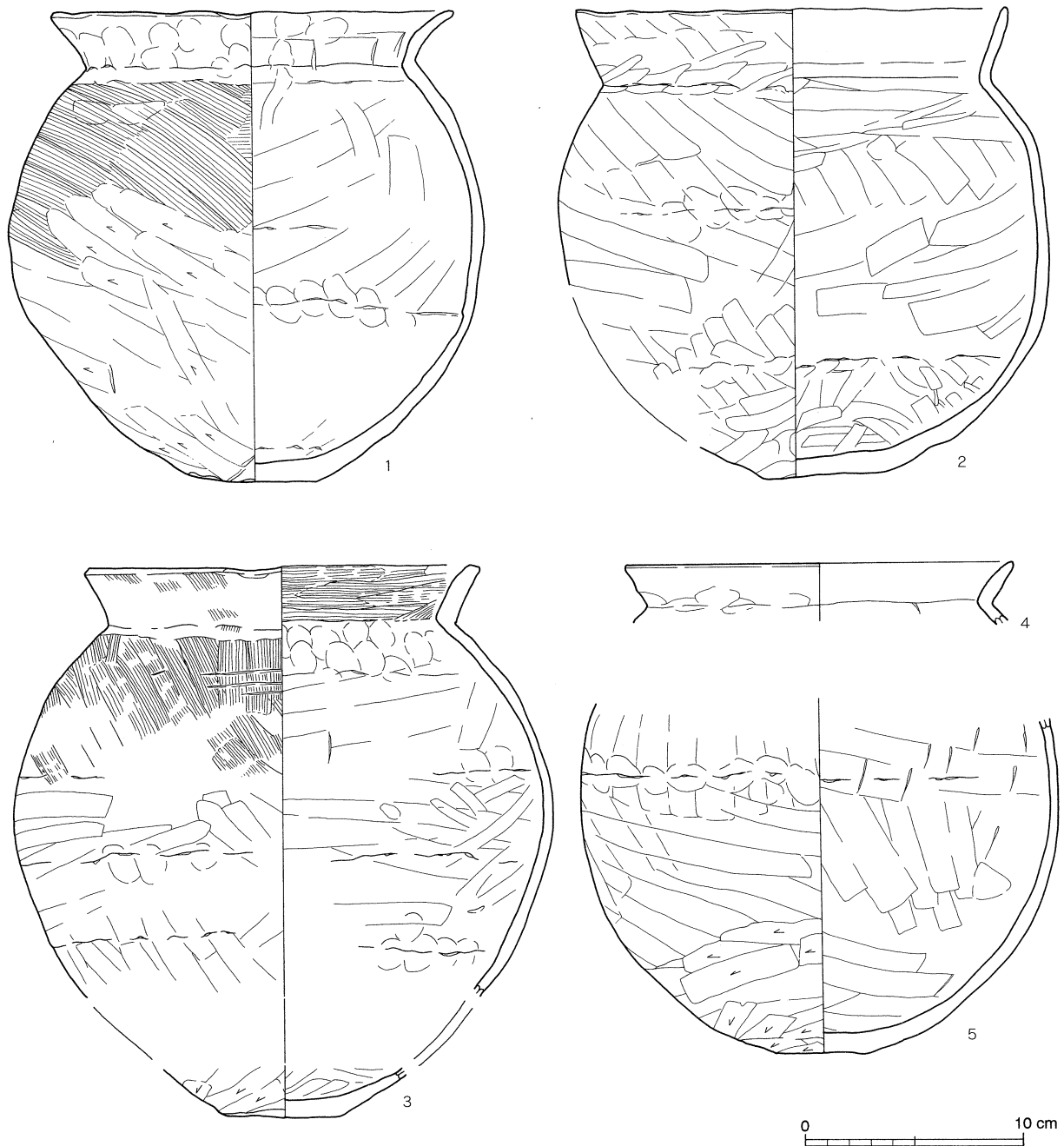
規模 長軸5.64m、短軸4.92mの長方形を呈し、床面積は約27.7㎡である。

主軸方向 N-32° -E。

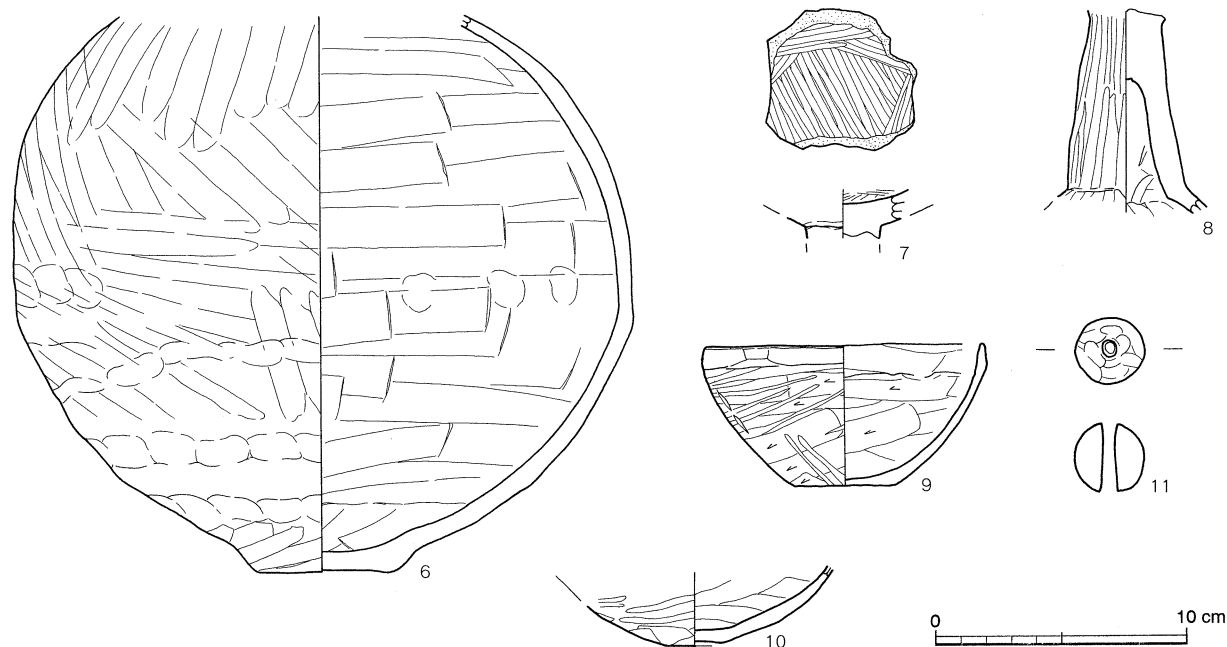
壁 確認面からの深さは南壁の最深部で24cm余り、平均的な深さは14cm程度である。壁は僅かに外傾して立ち上がり、南西コーナーと東壁中央付近には深さ10cm程の壁溝が確認された。

床 およそ平坦で、高低差はない。明確な貼り床は確認されなかったが、中央付近に硬化面が認められた。

ピット 主柱穴は方形に4本配置され、大きなもので直径66cm、深さ66cm、小さなもので直径32cm、深さ36cmである。さらに南西柱穴の西脇に径60cm、深さ15cmの不整形の掘り込みが1つ、東壁寄り中央に径20cm、深さ11cmのピットが1つ、そして北東コーナーには径84cm、深さ30cmの貯蔵穴が1つ確認された。東壁寄りの小ピットを梯子の取り付けに伴う穴（以下、梯子穴）とみるならば、当住居の入り口は東口に相当するこ



第42図 第1号住居跡出土遺物実測図（1）



第43図 第1号住居跡出土遺物実測図(2)

とになるう。

炉 西側の柱穴2本の上に1基確認された。直径60cm、深さ17cmの浅い円形の掘り込みを有し、上面に硬化した焼土が堆積していた。

覆土 水平に堆積した褐色土が2層確認された。特に下層には焼土塊と炭化材片がまばらに含まれていた。

遺物 南東コーナー付近の床面から僅かに浮いた状態で4個体分の土師器壺甕類がまとまって出土した。また、北壁寄り中央の床面からも甕1個体が潰れた状態で出土している。他に貯蔵穴上面から土玉が1点、覆土中より高坏片2点、鉢片1点が出土している。

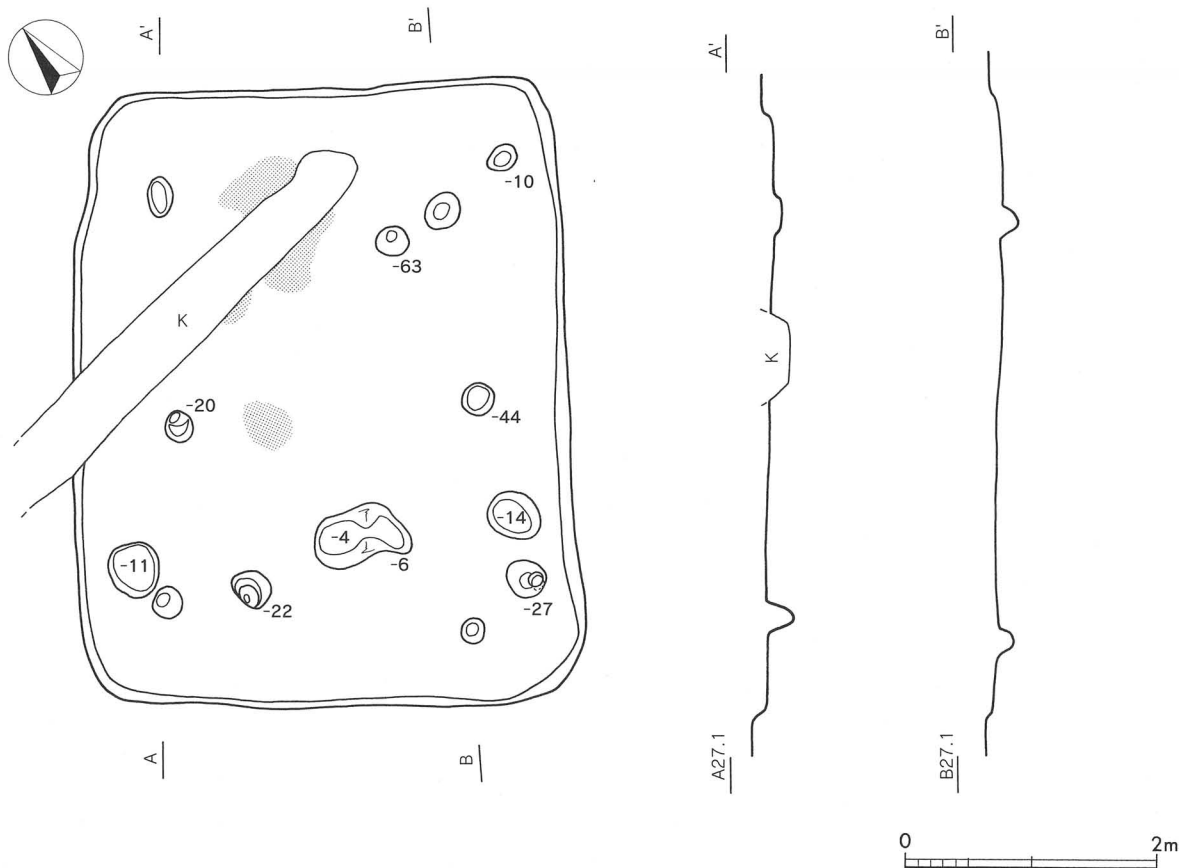
所見 当住居跡は、出土遺物から古墳時代前期に営まれたものと思われる。焼土や炭化材片が検出された点で、廃絶後に火を受けた可能性が考えられる。

第1号住居跡出土遺物

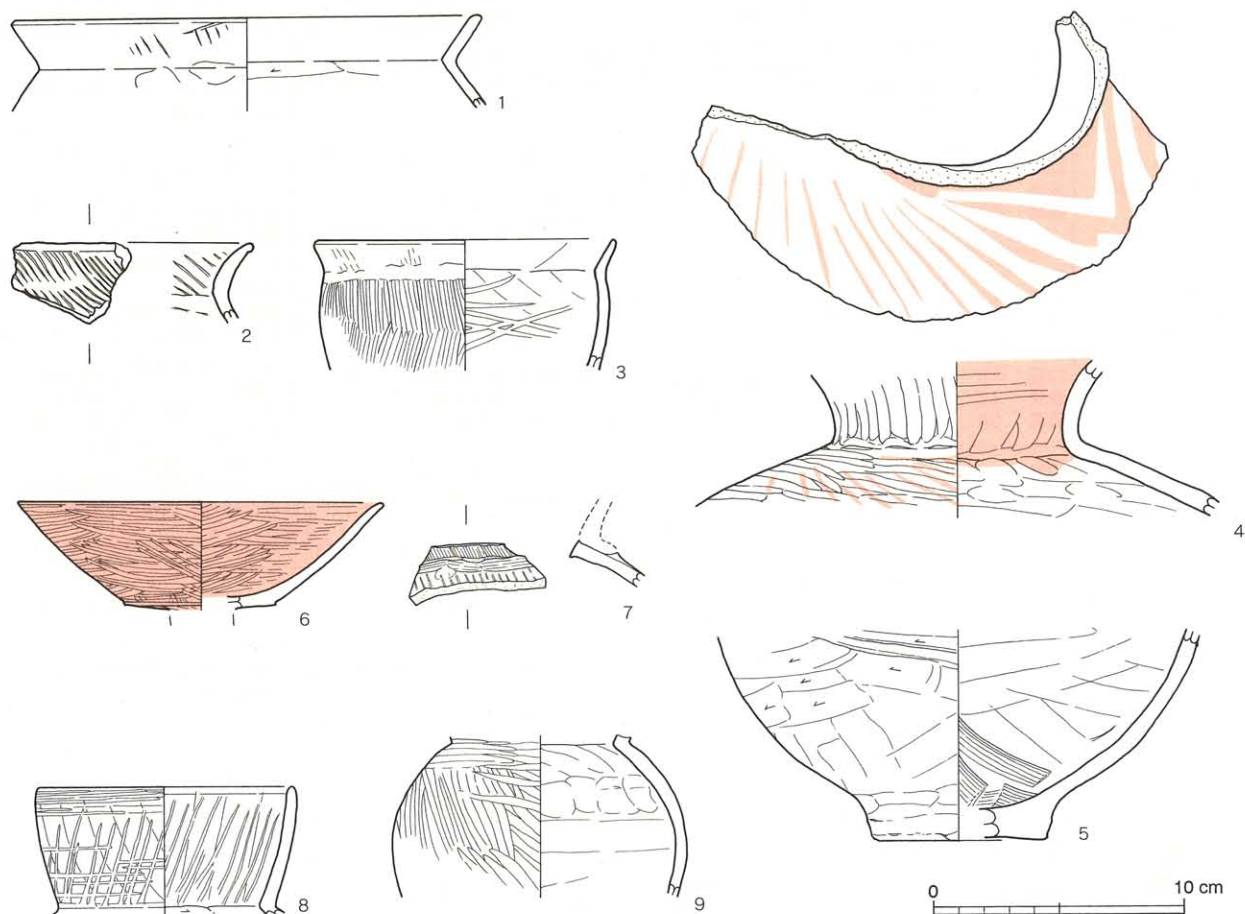
図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第42図 1	甕	口径 18.2 底径 5.6 器高 21.5	ハケ調整球胴甕。体部は球形を呈し、口縁部は外反しながらハの字に大きく開く。底は平底を呈する。器形全体に若干の歪みあり。	体部上位にハケ調整を施し、その後から口縁部を接合する。接合部にはヘラおよび指ナデを施す。体部下位は斜方向のヘラ削りとナデを施す。	長石・石英を中量 外面明赤褐色、内面明赤褐色 良好	80%残存 覆土下層
第42図 2	甕	口径 19.8 底径 5.3 器高 21.5	ヘラナデ調整内湾口縁球胴甕。体部は球形を呈し、口縁部は緩やかに内湾し、口唇部は丸くなる。底は平底を呈する。器形全体にゆがみあり。	内外面共に斜方向のヘラナデを施す。口縁部接合部はヨコナデ。	長石多量、石英中量 外面赤色、内面明赤褐色 やや不良	75%残存 覆土下層
第42図 3	甕	口径 18.0 底径 5.7 器高 25.3	ハケ調整球胴甕。体部は卵形を呈し、口縁部は外反しながらハの字に大きく開く。底は平底を呈する。	体部上位に縦位のハケ調整、下位に縦横のヘラナデ、低部面に斜方向のヘラ削りを施す。口縁部は縦位のハケ調整後ナデ消されている。体部内面ヘラナデ、口縁部内面に横位のハケ調整を施す。	長石・石英を多量 外面にぶい黄橙色、内面灰黄褐色 やや不良	70%残存 外面に炭化物 付着 床直
第42図 4	甕	口径 [17.6] 底径 — 器高 (2.7)	球胴甕。くの字状に強く外反する口縁部片。	内外面共に口縁部接合部にヨコナデ。	長石・石英を多量 外面にぶい褐色、内面黄褐色 普通	5%残存 覆土下層
第42図 5	甕	口径 — 底径 [4.2] 器高 (15.2)	球胴甕。体部が球状を呈すが、口縁部を欠損する。底は平底を呈す。	底面から体部下位にかけてヘラ削り。他は内外面共にヘラナデを施す。	長石多量、石英中量 外面にぶい赤褐色、内面明赤褐色 良好	30%残存 覆土下層

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第43図 6	壺	口径 — 底径 [5.1] 器高 (22.2)	球胴壺。体部中間に最大径を持つ球状を呈すが、口縁部を欠損する。底部が体部から突出し、平底を呈する。	外面はヘラナデ後磨かれている。粘土紐の輪積み部分は指ナデ。内面はヨコナデを施す。	長石・石英・雲母を中量 外面明赤褐色、内面明赤褐色。良好	50%残存 覆土下層
第43図 7	高坏	口径 — 底径 — 器高 (0.8)	柱状脚高坏か。高坏の坏部底面と脚部の接合部片。	外面は剥離してしまっているため調整は不明。内面は受け部底面に縦方向のヘラミガキ後、横方向のヘラミガキを施す。	緻密な胎土。長石・石英を少量、雲母・赤褐色スコリアを中量 外面明赤褐色、内面明赤褐色。良好	10%残存 北東部 覆土上層
第43図 8	高坏	口径 — 底径 — 器高 (7.4)	柱状脚高坏。坏部を欠損するが裾をハの字状に開く中空の脚部。	外面は縦位のヘラミガキ、内面は指ナデ。坏部との接合面に輪積みの痕跡が認められる。	長石中量、石英多量、雲母微量 外面明赤褐色、内面明赤褐色。良好	30%残存 床直
第43図 9	鉢	口径 11.0 底径 4.2 器高 5.6	平底鉢。口縁部が内傾する碗状で、底部は平底を呈する。	外面は底部付近に斜方向のヘラ削り、ヘラナデ、口唇部付近にヨコナデを施す。内面はヘラ削りとヨコナデ。	長石・石英を中量、雲母微量 外面にぶい橙色、内面赤色。良好	80%残存 南東部 覆土上層
第43図 10	壺	口径 — 底径 [2.1] 器高 (2.9)	小型丸底壺。底部は上げ底状で、平底を呈する。	外面はヘラナデ後部分的にミガキを施す。底面はヘラ削り。内面はヨコナデ。	緻密な胎土。長石・石英・雲母を中量 外面赤褐色、内面赤褐色。良好	30%残存 床直

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ (cm)	幅 (cm)	高さ (cm)	重量 (g)			
第43図 11	土製品 土玉	2.6	2.8	—	19.3	孔の径は0.6cm、その周辺と側面をヘラナデで整える。全体的に不均一。	綿密な胎土。長石微量 褐色。良好	完形品 床直



第44図 第2号住居跡実測図



第45図 第2号住居跡出土遺物実測図

第2号住居跡 (S I-2) [第44・45図、PL.12・26]

位置 第1号住居跡の東2mに隣接し、D6からE8区(キGrid)に位置する。第1号住居跡を横切っていた攪乱溝が東に延び、当住居跡の北西壁を破壊していた。

規模 長軸4.88m、短軸3.96mの長方形を呈し、床面積は約19.32m²である。

主軸方向 N-36°-E。

壁 確認面からの深さは12cm程度とごく浅く、壁はほぼ垂直に立ち上がっていた。壁溝らしきものは検出されなかった。

床 およそ平坦で、貼り床は確認されなかった。

ピット 床面に掘り込まれたピットは合計13個確認されたが、配置や大きさは不規則であった。住居の長軸に平行して並ぶピット群が主柱穴に相当すると思われ、四方の隅に4本柱、その中間に2本の柱を入れて棟を支えた6本柱の構造が想定される。いずれの柱穴も直径30cm、深さ10~40cm程度の小さなものであるが、柱の数を増やしてその貧弱さを補っていたものと思われる。貯蔵穴と推定されるピットは南東隅に2つ、南西隅に1つあり、どれもが直径約40cm、深さ11~27cm程の浅いものであった。

炉 住居の主軸上、北東壁寄りの位置に焼土が集中する部分がみられた。掘り込みの浅い炉と考えられたが、その大半が攪乱溝によって破壊されていた。

覆土 ローム粒混じりの暗褐色土層が1層確認された。また焼土混じりの暗褐色土が南西隅の覆土中にみられた他、中央付近の床面近くにも局所的に焼土の堆積を確認している。炭化材はごく僅かに覆土中にみられ

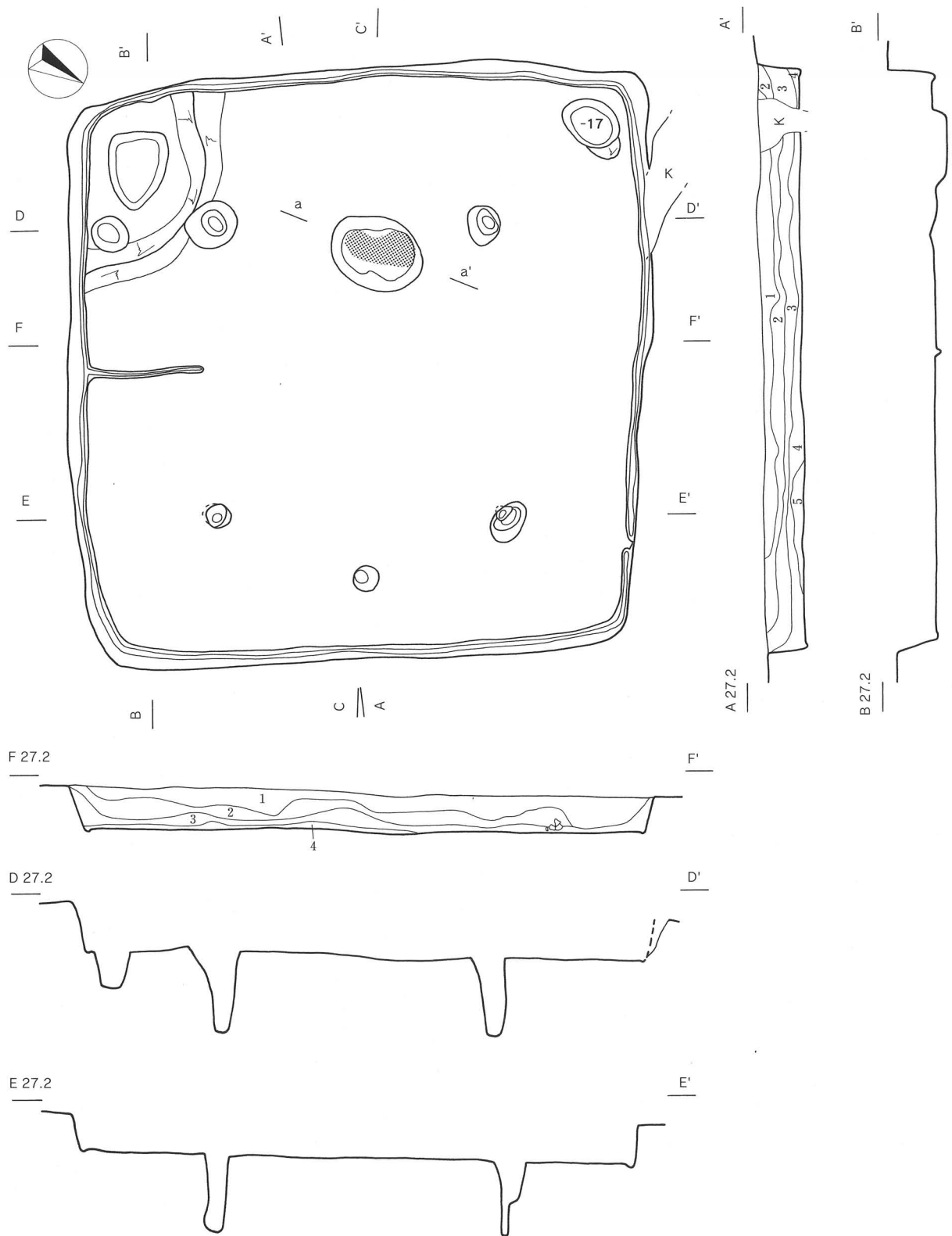
た程度である。

遺物 住居は浅い掘り方を残すのみであったため、出土した遺物はほとんど床面上に散乱していたものとみて差し支えない状況である。遺物の出土量は比較的少なく、図示し得た9点のうち、No4以外は皆小破片である。出土器種は土師器甕、小型甕、壺、小型壺、高坏の5種である。No4は壺の頸から肩にかけての破片で、外面と頸部内面に赤彩が施されている。当初は籠に被われていたようで、籠の付着部分に鮮やかな赤彩が残り、目の部分は黒くすすけて矢羽状の文様を呈している。

所見 当住居跡は、出土遺物の様相から古墳時代前期に営まれたものと考えられる。第1号住居跡の主軸と平行して設営されており、同時併存の確証はないものの、大きな時間的懸隔はないものと想定される。

第2号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第45図 1	甕	口径 [18.6] 底径 — 器高 (4.7)	球胴甕。くの字状に屈曲し、大きくハの字状に開く。	外面口縁部に斜方向のナデ、頸部内面に横方向のヘラ削りを施す。	長石中量、石英・雲母を微量 外面灰黄褐色、内面灰黄褐色。良好	5%残存 覆土
第45図 2	甕	口径 — 底径 — 器高 (3.2)	粗ハケ調整甕。口縁部が緩やかに外反する甕の口縁部片。口唇部は丸くなりやや突出する。	内外面共に櫛目状の工具を用いる。部分的にヨコナデを施す。	長石・石英を中量、雲母微量 外面にぶい橙色、内面橙色。やや不良	5%残存 北西隅覆土 下層
第45図 3	甕	口径 [12.0] 底径 — 器高 (5.2)	密ハケ調整小型甕。体部は卵形を呈し、口縁部は緩やかに外反し、ハの字状に開く。	体部外面にハケ調整、その後頸部から口縁部にかけて横方向のヘラナデ。内面は斜方向のヘラナデ後、横方向のヘラミガキが施される。	緻密な胎土。長石・石英・雲母を微量 外面にぶい橙色、内面にぶい黄橙色 良好	20%残存 北西隅覆土 下層
第45図 4	壺	口径 — 底径 — 器高 (5.3)	球胴壺。体部上位から頸部にかけての破片。頸部は強く引き締まり、外反しながら強く立ち上がる。	体部外面は横・斜方向のヘラナデ、頸部は縦方向のヘラナデを施す。内面も同様。籠の被覆によって外面が矢羽状（籠目）に変色。外面と内面頸部付近に赤彩。	長石・石英を多量 外面にぶい赤褐色、内面橙色。良好	15%残存 北西部床付近
第45図 5	壺	口径 — 底径 [6.8] 器高 (8.1)	球胴壺。体部は球形を呈し、底部は突出し、平底になる。底部から体部下位にかけて恣意的に2ヶ所、丸く割られている。	体部外面に横方向のヘラ削り、縦横の軽いナデ、底部に指頭によるナデ、底面に不定方向のヘラ削りを施す。内面はヘラナデ後部分的にヘラミガキを施す。	緻密な胎土。長石中量、雲母微量 外面にぶい褐色、内面にぶい黄褐色。良好	15%残存 南側覆土
第45図 6	高坏	口径 [14.5] 底径 — 器高 (4.2)	柱状脚高坏。脚部に対し坏部が直線的に大きく開く坏部。脚部との境に小さな稜を有す。	内外面共に縦横にヘラミガキを施した後、赤彩。脚部との境の段付近に削りの痕跡。	緻密な胎土。長石・石英を微量 外面赤褐色、内面明赤褐色。良好	30%残存 貯蔵穴覆土 一括
第45図 7	壺	口径 — 底径 — 器高 (3.1)	ハケ調整壺。体部が球形になる壺の肩部片。	体部を先に製作し、ハケ調整を施した後別作りの頸部を接合する。内面をヘラで平らにナデている。肩の部分には頸部と接合せた際の痕跡が残存する。	緻密な胎土。長石・石英・雲母を微量 外面橙色、内面橙色 良好	5%残存 北東部床付近
第45図 8	壺	口径 [10.2] 底径 — 器高 (5.0)	内湾口縁球胴壺。口縁部が緩やかに内湾し、口唇部は丸味を帯びる。	外面は縦方向のヘラ削り後、縦横にヘラミガキを施す。内面はハケ調整後縦方向のミガキ。体部との接合部に横方向のヘラ削りを施す。	緻密な胎土。長石微量 外面橙色、内面にぶい褐色。良好	20%残存 南側床付近
第45図 9	壺	口径 — 底径 — 器高 (6.2)	小型丸底壺。体部中間に最大径を持ち球形を呈する。	外面は縦横にヘラミガキ、内面は指ナデ及び横方向のヘラナデを施す。	緻密な胎土。長石微量、石英中量 外面明赤褐色、内面明赤褐色。良好	20%残存 南東隅覆土 上層

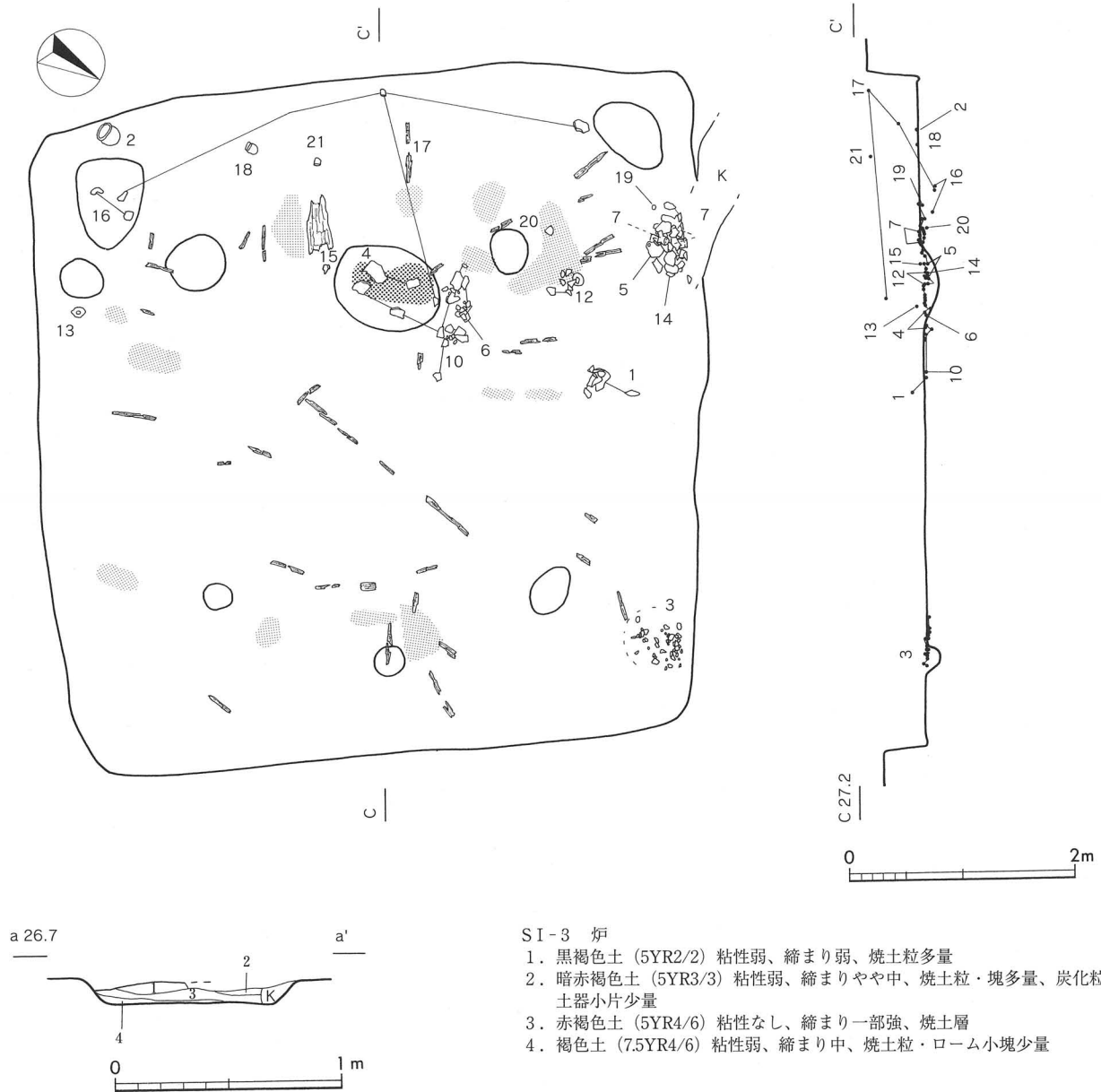


A-A' F-F'

1. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性なし、締まり弱、砂粒少量
2. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まり1層より弱
3. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、締まり中、 ϕ 3 ~ 5 cmのローム塊少量
4. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性中、締まり中、部分的に焼土粒・炭化物多量、 ϕ 5 cmのローム塊少量
5. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、締まり中、焼土粒・炭化物・ ϕ 1 ~ 2 cmのローム粒多量

0 2m

第46図 第3号住居跡実測図



第47図 第3号住居跡遺物出土状況図

第3号住居跡 (S I - 3) [第46~49図、PL.12・13・26・27]

位置 調査区西側、C 8 からE 9 区 (カ・キGrid) にまたがる位置に所在し、第1・2号住居跡のすぐ南側に隣接する。第1・2号住居跡と同様、攪乱溝によって北西壁の一部が破壊を受けていた。

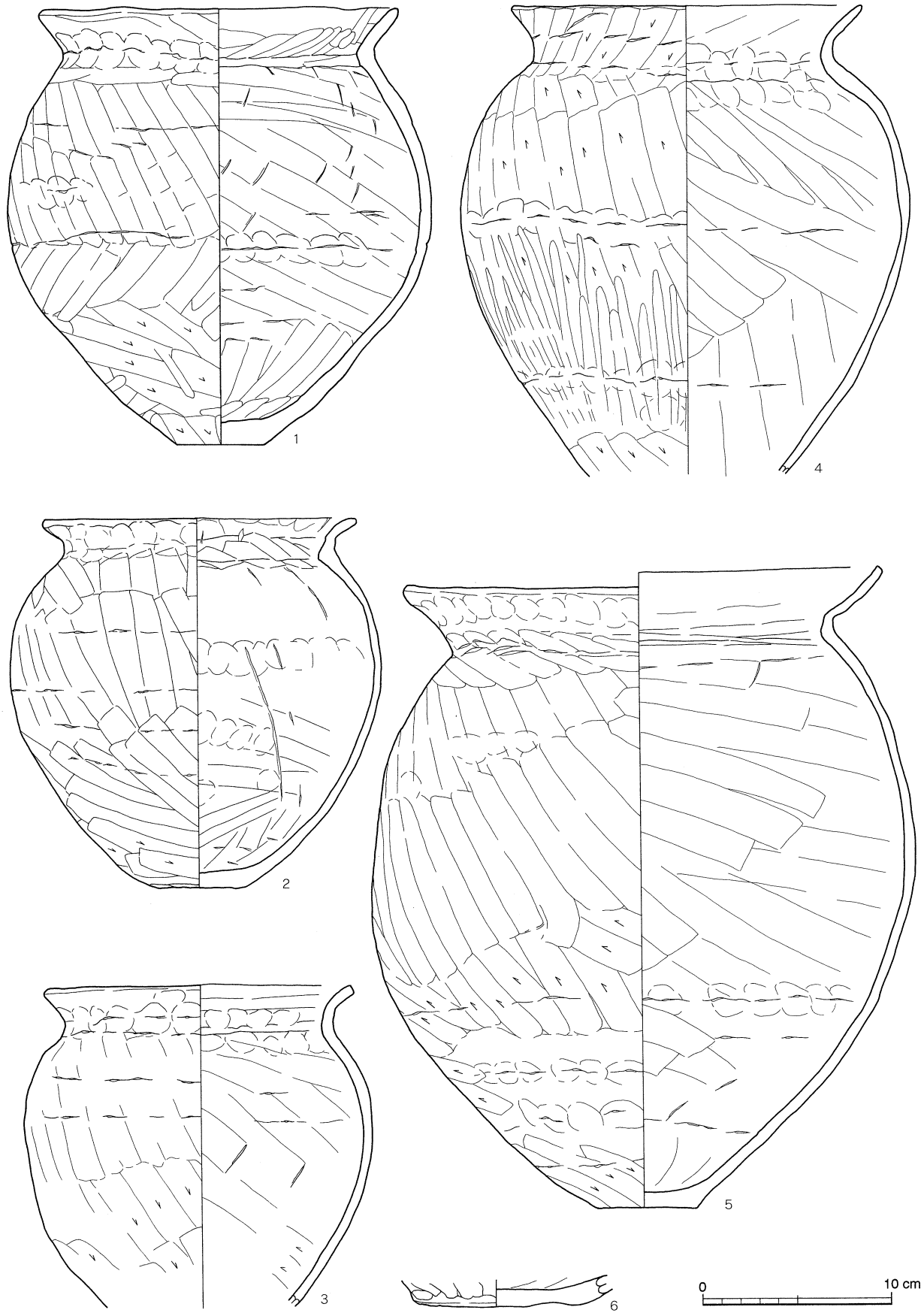
規模 長軸5.96m、短軸5.90mで、平面形態はほぼ正方形に近い。床面積は約35.2m²である。

主軸方向 N - 58.5° - E。

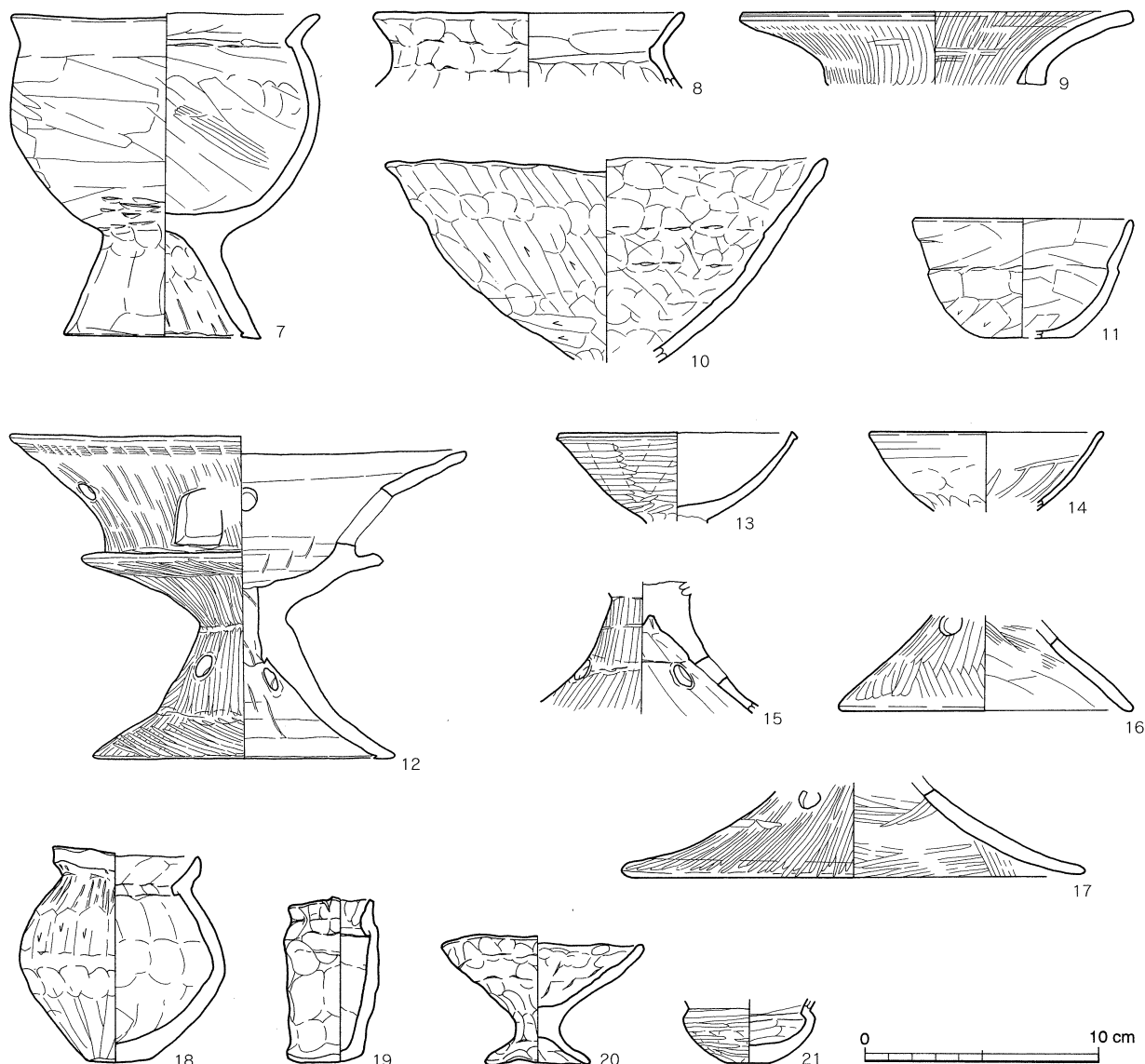
壁 確認面からの深さは62cm、壁はおおむね垂直に立ち上がっていた。今回の調査では最も残りの良い住居跡である。壁溝は幅約10cm、深さ5~8cm程度で、壁際に沿って全周していた。

床 平坦であるが、北西方面 (台地中央の高所方面) が南西方面に比べて10cm程低く掘り込まれていた。床面は壁際を除いて全面的に貼り床が施されていた。この貼り床は、ローム塊と褐色土の混合土が2~5cm程の厚さで硬化したもので、その上に堆積した覆土との分離は容易であった。また、間仕切り溝とみられる幅10cm程の溝が南東部に一条掘り込まれていた。

ピット 主柱穴は4個で、方形に配置されていた。最も大きな南側の柱穴は、直径46cm、深さ76cmで、最も



第48图 第3号住居跡出土遺物実測図(1)



第49図 第3号住居跡出土遺物実測図(2)

小さな東側の柱穴は直径26cm、深さ80cmであった。北東壁寄りには梯子穴とみられる直径27cm、深さ16cmの小ピットがあり、当住居の中心軸上で炉と対峙していた。北東側を出入り口にした住居と考えられる。また、住居の南コーナーにはL字状の微隆起に囲まれた一画があり、その内側に貯蔵穴が2つ掘り込まれていた。一つは直径40cm、深さ37cmの円形で、もう一つは長軸80cm、深さ15cmの不整形を呈していた。さらに西コーナーにも長軸60cm、深さ17cmの楕円形の浅い掘り込みがみられたが、これも貯蔵穴の一つであろう。

炉 南と西側の2つの柱穴の間に1基設営されていた。長軸96cm、深さ11cmの楕円形の掘り込みで、中には硬化した焼土と黄褐色の灰質土が満ちており、周囲には甕類の破片が散乱していた。

覆土 5層確認され、特に下層からは炭化材と焼土が多量に含まれていた。なお、炭化材は幅5cm程度の細長い木材で、住居の中心から放射状に広がる方向性が確認された。垂木材に相当するものであろう。

遺物 今回検出された遺構の中では最も多くの遺物が出土した。土器類の大半は床面直上で検出されており、特に北西壁寄りの一画には4個体以上の土器が一括廃棄された状態で発見された。No2の甕は完形のまま住居の南コーナー付近に直立した状態で発見された他、No3は北コーナー床面で、No4は炉上でそれぞれ押し

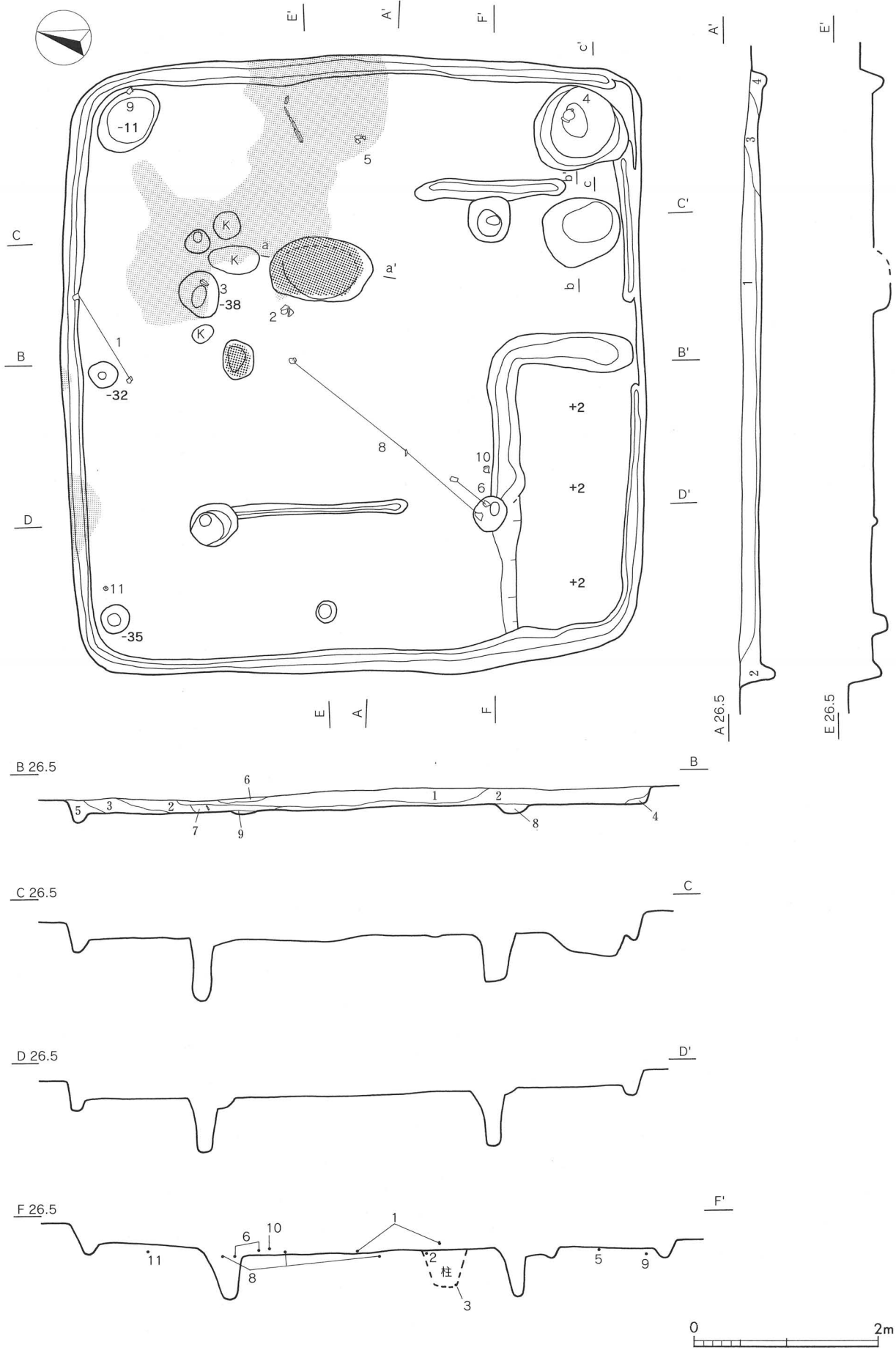
潰れた状態でみつかっており、住居廃絶時に多くの土器が放置されたようである。遺物は全て住居の西半分に固まっており、東半分には存在しない。復元・図示し得た土器は全て土師器で、合計21個体を数える。甕が6個体で最も多いが、結合器台を含む器台・高坏類も6個体以上出土し、さらに手捏ねのミニチュア甕や高坏など特徴のある器種も目立っている。壺に相当する器種が欠落している点も注目されよう。また、出土した甕すべてにハケ調整が施されていないことも特筆される。

所見 出土した土器の様相からみて、当住居は古墳時代前期に営まれたものと考えられる。隣接する第1・2号住居跡とは主軸を違えており、入り口の位置も反対である。平面形態や掘り込みの深さなど異なる点も多く、前二者とはある程度の時期差を見込むべきところであろう。結合器台やミニチュア土器など特異な遺物の存在から、当住居は集落内でもやや特殊な位置を占めていたことが予想される。炭化材や焼土が多量にみられたことから、当住居は廃絶時に火を受けていたことが確実である。

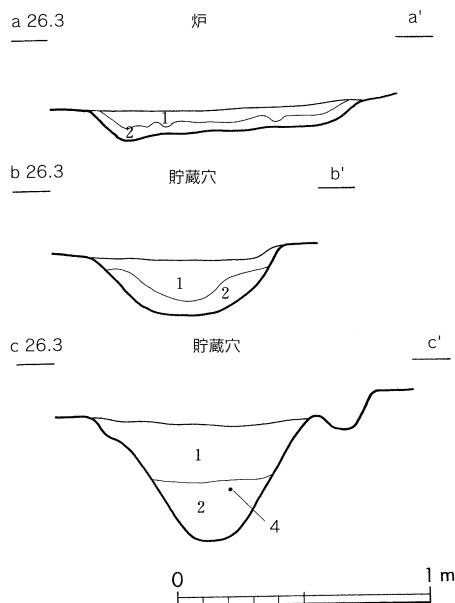
第3号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第48図 1	甕	口径 18.8 底径 4.6 器高 23.1	上膨甕（千種甕）。体部は卵形を呈し、口縁部は大きく外反しハの字に開く。最大径が体部の中間よりやや上に位置する。底部は平底を呈する。	外面は全体的にヘラ削りを施した後、斜方向のヘラナデ、指ナデを施す。口縁部接合部は横方向のヘラナデと指ナデ。内面は斜方向のヘラナデ及び頸部に横方向のヘラナデを施す。	長石多量、石英・雲母を中量外面灰褐色、内面褐色 良好	50%残存 床直
第48図 2	甕	口径 16.5 底径 5.0 器高 19.5	上膨甕（千種甕）。体部は卵形を呈し、口縁部は頸部で一度平坦面を作った後、大きく外反しハの字に開く。底部は平底を呈する。	体部外面は縦横方向のヘラナデ、底部付近は横方向のヘラ削り、口縁部には指ナデを施す。内面は縦方向のヘラナデ、粘土紐接合部に指ナデ、頸部平坦面に斜方向のヘラナデがされる。	長石微量、石英多量、雲母中量 外面にぶい橙色、内面橙色 良好	完形品 ビット内
第48図 3	甕	口径 16.3 底径 — 器高 (12.1)	面取口縁上膨甕（千種甕）。体部は卵形を呈し、口縁部は緩く外反し、ハの字に開く。底部は欠損する。器形全体に若干のゆがみあり。	外面は体部上位にヘラナデ、下位に斜方向のヘラ削りを施す。頸部には口縁部接合の際の指ナデが施される。内面は全体的に斜方向のヘラナデが施され、部分的に斜方向のヘラ削りがなされる。口縁部には横方向のヘラナデと指ナデを施す。	長石多量、石英中量、雲母微量 外面橙色、内面にぶい橙色 普通	65%残存 床直
第48図 4	甕	口径 18.6 底径 — 器高 (24.7)	上膨甕（千種甕）。体部は卵形を呈し、口縁部は大きく外反しハの字に開く。最大径が体部上位に位置する。底部は欠損する。器形全体に若干のゆがみあり。	外面は体部全体に縦方向のヘラ削りをした後、縦方向のヘラナデが施される。底部付近は斜方向のヘラ削り、口縁部は調整を施した体部と結合した後に斜方向のヘラ削りを施す。	長石・石英を多量、雲母中量 外面橙色、内面褐色 良好	80%残存 炉中
第48図 5	甕	口径 25.4 底径 5.9 器高 33.9	有段口縁上膨甕（千種甕）。体部は卵形を呈し、口縁部は強く外反しハの字状に大きく開く。底部は平底を呈する。器形全体にゆがみあり。	外面は体部全体に斜方向のヘラ削り後、上位に斜方向のヘラナデが施される。体部の調整終了後、口縁部を接合し、ヘラナデ、指ナデを施す。内面は斜方向のヘラナデ、頸部平坦部に横方向のナデ、粘土紐接合部に指ナデが施される。	長石多量、石英・雲母を中量 外面褐色、内面褐色 良好	97%残存 床直
第48図 6	甕	口径 — 底径 [8.8] 器高 (1.6)	平底甕。平底を呈する底部片。	外面は、ヨコナデ後縦方向のヘラナデ、内面は斜方向のヘラナデ。	長石・石英を中量、雲母微量 外面にぶい褐色、内面にぶい褐色 普通	5%残存 床直
第49図 7	甕	口径 13.0 底径 8.4 器高 13.9	台付甕。体部は球形を呈し、口縁部は強く外反し、くの字を呈する。体部に対して脚部は小さく全体的にアンバランスである。	体部外面は横方向のヘラナデ、脚部外面は縦方向のヘラナデを施す。体部と脚部の接合部に脚部のナデの際にヘラがあたって出来た傷の痕跡あり。体部内面は横方向のヘラナデ、脚部内面は縦方向の削り後 横方向の軽いナデ、口縁部内面は指頭による回転ナデが施される。	緻密な胎土 長石・石英中量、雲母微量 外面にぶい赤褐色、内面にぶい赤褐色 良好	95%残存 床直
第49図 8	甕	口径 [13.2] 底径 — 器高 (3.2)	体部から下を欠損する甕の口縁部片。頸部に平坦面を作った後、ハの字に大きく開く。	外面は頸部に平坦面を作るためのヨコナデ後、指ナデを施す。内面は、ヨコナデ及び指ナデで、接合面を補強する。	長石多量、石英中量、雲母微量 外面にぶい赤褐色、内面にぶい黄褐色 良好	5%残存

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第49図 9	器台	口径 [16.8] 底径 — 器高 (3.1)	結合器台。大きくハの字状に開く結合器台坏部口縁片。	内外面に縦方向のミガキ、口唇部外面にヨコナデを施す。口縁の内側に粘土が貼り付けられており、稜部分との接合面は平らである。	緻密な胎土 長石中量、石英微量 外面にぶい褐色、内面にぶい黄褐色 良好	10%残存 南ベルト内一括
第49図 10	有孔鉢?	口径 18.9 底径 — 器高 (8.8)	有孔鉢か脚部を欠損した高坏。口縁が大きくハの字状に開く。器形全体がゆがんでいる。	外面は全体的に縦横のヘラ削り後、ヘラナデ、指ナデが施される。内面は粘土紐の輪積み部分に指ナデ後、斜方向のヘラナデ。	長石中量、石英多量、雲母微量 外面明赤褐色、内面明赤褐色 普通	90%残存 床直
第49図 11	鉢	口径 9.4 底径 3.4 器高 5.1	有稜平底鉢。体部中間でやや湾曲し段を作った後、ハの字状に緩やかに外反する。底部は平底を呈する。	外面は底部付近に斜方向のヘラ削り、他はヨコナデを施す。口縁部付近に粘土紐の輪積痕を残す。内面は全体的にヘラナデ。	長石・石英を微量、雲母中量 外面にぶい黄褐色、内面にぶい褐色 良好	40%残存 北西部覆土 上層一括
第49図 12	器台	口径 19.5 底径 12.8 器高 14.0	結合器台。坏部は透かし孔の上から屈曲し大きく外反する。脚部はハの字状に大きく開く。坏部に1cmの円形の透かし孔3、3cmの三角形の透かし孔3、脚部に1cmの円形の透かし孔を3、を有する。	外面は全体的に縦方向のヘラミガキを施す。内面は坏部に横方向のナデ、脚部は縦横のヘラナデが施される。	緻密な胎土 長石微量、雲母中量 外面橙色、内面橙色 普通	90%残存 床直
第49図 13	高坏	口径 10.2 底径 — 器高 (3.8)	小型高坏。口唇部が外に突出する高坏の坏部。浅鉢状を呈する。	外面は縦方向の削り後、横方向のミガキ、口縁部にはミガキのみ。内面は良く磨かれているがミガキの痕跡は見えない。脚部との接合部に輪積みの痕跡が見られる。	長石微量、石英中量、雲母微量 外面橙色、内面橙色 良好	45%残存 覆土下層
第49図 14	高坏	口径 [10.0] 底径 — 器高 (3.3)	小型高坏。高坏の坏部片。口縁はハの字状に開き、器形的には浅鉢状を呈する。	口縁部の内外面に回転ナデを施す。外面底部付近に指押さえ、内面には淡いミガキの痕跡がみうけられる。	長石・石英を中量、雲母微量 外面にぶい褐色、内面にぶい褐色 良好	10%残存 床直
第49図 15	高坏	口径 — 底径 — 器高 (5.8)	内湾脚高坏。裾がハの字状に開く高坏の脚部。1cm程の円形の透かし孔を3つ有する。	外面は縦方向のヘラミガキ及び、透かし孔と同レベルに粘土紐接合によるヨコナデを施す。内面は縦方向のヘラナデ。粘土紐の輪積みがみられる。坏部内面に赤彩を施す。	長石多量、石英・雲母を中量 外面明赤褐色、内面にぶい褐色 良好	40%残存 床直
第49図 16	高坏	口径 — 底径 12.6 器高 (4.0)	内湾脚高坏。ハの字状に大きく開く高坏の脚部。1cm程の円形の透かし孔を3つ有する。	外面は全体的に削りが施された後、縦方向のヘラミガキ、底部付近にはヨコナデを施す。内面は上方に斜方向のハケ調整、下方に斜方向のヘラナデを施す。	緻密な胎土 長石中量、石英・雲母を微量 外面にぶい橙色、内面にぶい褐色 良好	30%残存 貯蔵穴内
第49図 17	高坏	口径 — 底径 19.8 器高 (3.7)	精製胎土小型高坏。裾を大きくハの字状に開く高坏の脚部。円形の透かし孔を3つ有する。	外面は裾付近に回転ナデ後縦方向のヘラミガキを施す。内面は縦横のヘラミガキ。	緻密な胎土 長石・石英・赤褐色 スコリアを微量 外面橙色、内面橙色 良好	30%残存 覆土一括
第49図 18	ミニチュア甕	口径 6.3 底径 2.9 器高 8.7	体部が卵状を呈し、口縁部が強く外反するが、口唇部は縦に伸びる。底部はややまる味を帯びており、不安定である。	外面は体部上位に櫛目状の工具で調整した後、縦方向のヘラ削りを施す。更に底部付近には縦方向のヘラナデ、削りとナデが接する部分にはヨコナデ及び指ナデを施す。口唇部にはヨコナデ。内面は、口縁部接合部にヨコナデ、他は縦方向のヘラナデ。	長石微量、石英中量、赤褐色スコリア微量 外面橙色、内面褐色 やや不良	90%残存 床直
第49図 19	ミニチュア甕	口径 3.6 底径 3.2 器高 7.0	ずん胴型を呈する甕のミニチュア品。全体的にゆがんでいる。	内外面共に指ナデ。	長石・石英を多量 外面褐灰色、内面褐灰色 普通	100% 床直
第49図 20	ミニチュア高坏	口径 8.7 底径 4.5 器高 5.7	坏部が脚部よりも大きくなる高坏のミニチュア品。全体的に大きくゆがんでいる。	内外面共に粘土紐接合のための指ナデ、ヨコナデを施す。	長石中量、石英・雲母を微量 外面にぶい褐色、内面にぶい褐色 普通	100% 床直
第49図 21	ミニチュア壺	口径 — 底径 1.8 器高 (2.7)	小型丸底壺か。底部が平底を呈し、体部は算盤玉状を呈する小型丸底壺。	外面は横方向の削り後、横方向のヘラミガキを施す。底部付近はミガキが雑である。内面は横方向のヘラナデが全体的に施される。	長石・石英を中量 外面褐灰色、内面明赤褐色 良好	60%残存 覆土上層



第50图 第4号住居跡実测图



S I-4 A-A' B-B'

1. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性弱、締まり中、ローム小粒少量
2. 黒褐色土 (7.5YR3/1) 粘性弱、締まり弱、ローム小粒微量
3. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性弱、締まり中、 ϕ 1~2 mmの焼土粒
4. 黒褐色土 (5YR2/1) 粘性弱、締まり弱
5. 黒褐色土 (5YR2/1) 粘性弱、締まり弱、焼土塊少量
6. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まり中、ローム小粒微量
7. 黒褐色土 (5YR3/1) 粘性弱、締まり強、 ϕ 1~2 mmの焼土粒中量
8. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性弱、締まり中、ローム小粒中量
9. 暗赤褐色土 (5YR3/3) 粘性なし、締まり強、焼土粒・塊を多量

a-a'

1. 赤褐色土 (5YR4/8) 粘性弱、締まり部分的に強、主に焼土塊、褐色土・炭化粒が混在
2. 暗赤褐色 (5YR3/3) 粘性なし、締まりやや強、焼土粒・ローム小塊多量

b-b'

1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まり弱、ローム小粒を少量
2. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱、締まり中、ローム小粒を少量、貼り床の流れ込み土

c-c'

1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まり弱、ローム微粒多量、焼土微粒・ローム小塊少量
2. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱、締まり弱、1層より均一な土、ローム微量多量

第51図 第4号住居跡炉・貯蔵穴断面図

第4号住居跡 (S I-4) [第50~52図、PL.14・28]

位置 調査区北部、G4からI5区 (イ・ウGrid) にかけて位置する。調査区東側の埋没谷を臨む標高26.5mの緩傾斜地に立地する。

規模 長軸6.68m、短軸6.3mの長方形を呈し、床面積は約42.1m²である。

主軸方向 N-74° -E。

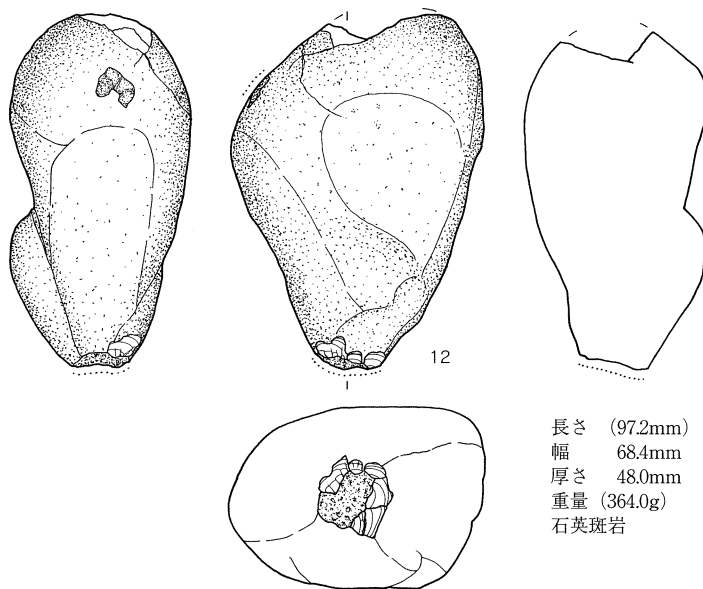
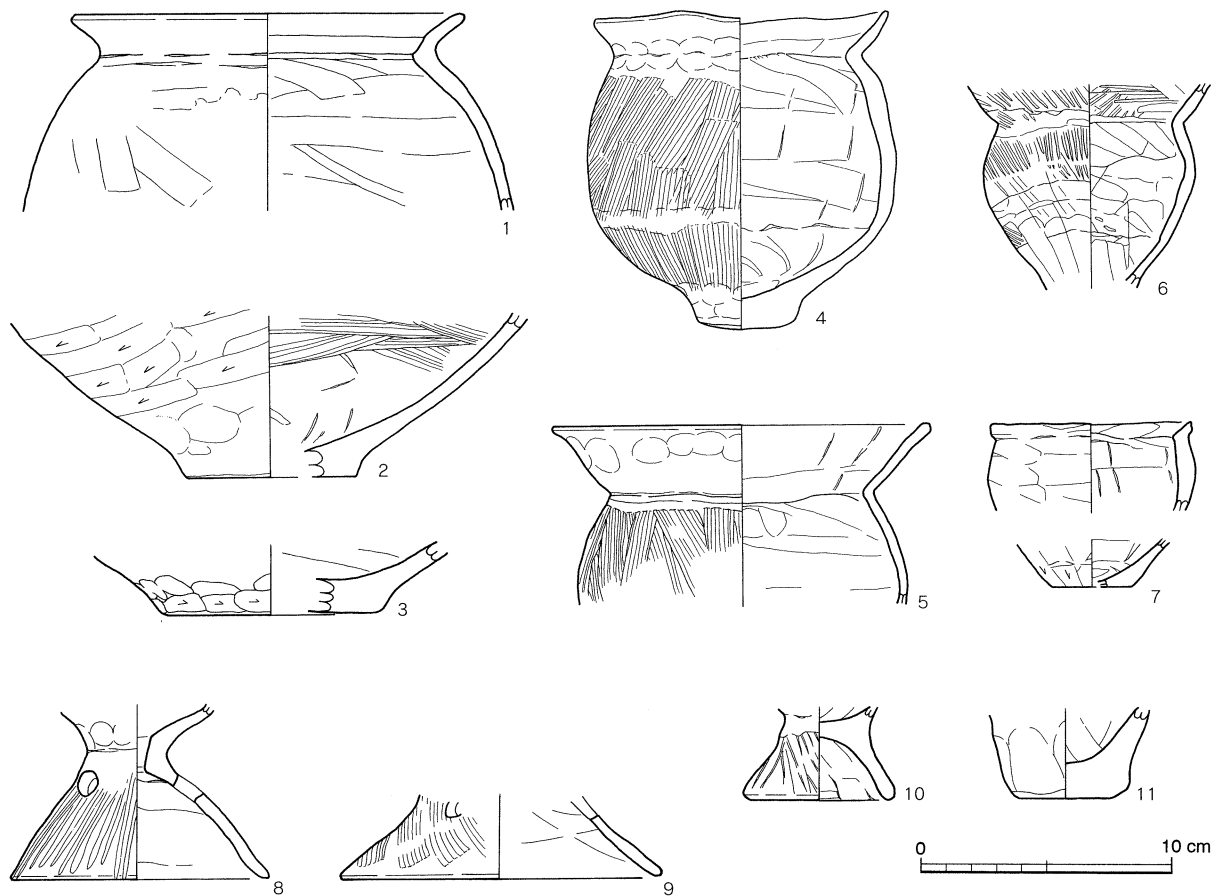
壁 確認面からの深さは最深部で31cm である。壁は僅かに外傾して立ち上がっていた。壁溝は幅30cm、深さ15cm程度で、ほぼ全周にわたって掘り込まれていた。

床 およそ平坦で、高低差はない。床面はローム塊と褐色土の混合土が5cm程の厚さに貼られており、住居の中央部は著しく硬化していた。中央部以外の床面は比較的やわらかく対照的である。南西コーナー付近には、「ベッド状遺構」と呼ばれる2.7m×1.1mの方形区画が作られていた。これはローム地山を床面よりも一段高く削り残し、周囲にL字状の溝を穿って区画したものである。また、いわゆる「間仕切り溝」が、西壁寄りの2本の柱穴の間に一条、南東の柱穴の脇に一条穿たれていた。

ピット 支柱穴は方形に4本配置され、大きなもので直径52cm、深さ60cm、小さなもので直径26cm、深さ70cmである。梯子穴は西壁寄りに1つ、貯蔵穴は南東コーナーに2基確認された。東側の大型の貯蔵穴は長軸1.06m、深さ49cmの楕円形で、小型甕と叩き石が出土している。また、北壁沿いには壁を支える補助的な柱穴であろうか、直径30cm、深さ35cmあまりの小穴が2ヶ所に穿たれていた。北東コーナーには長軸78cm、深さ11cmの浅い楕円形の掘り込みがみられたが、これは柱穴や貯蔵穴というよりも、大型の甕類を据え置くのに適した窪みのようである。

炉 住居の中央部東寄りの位置に大型の炉が1基、北寄りに小型の炉が1基、合計2基が確認された。大型のものは1.14×0.7mの楕円形で深さは13cm、表面に硬化した焼土、底に黄褐色の灰質土が堆積していた。小型の方は同じく楕円形で0.44×0.34m、明確な掘り込みはなく、僅かな窪みに硬化した焼土が堆積した状態であった。

覆土 黒褐色土を基調とする自然堆積層が5層確認された。壁側から流れ込んで順次堆積した状態で、住居



第52図 第4号住居跡出土遺物実測図

の北東部の覆土には焼土粒が多く含まれていた。

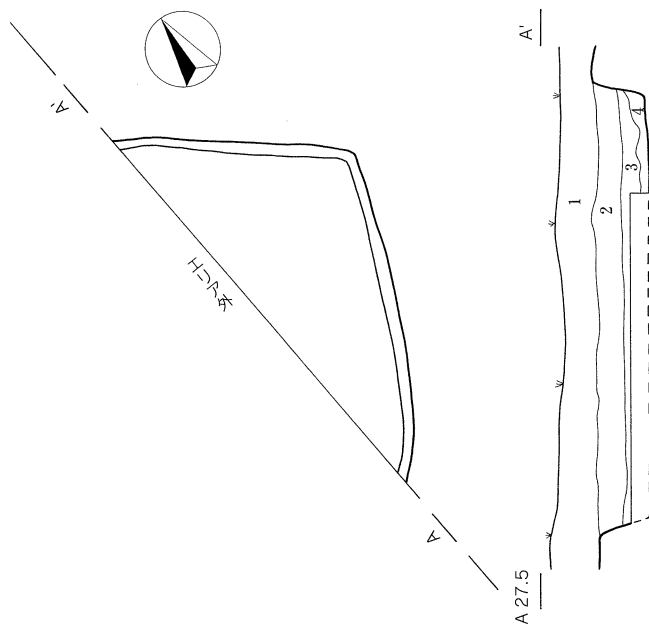
遺物 住居の規模に比して出土遺物は僅かであった。土器はいずれも土師器小片で、床面直上ないし僅かに浮いた位置に散在していた。器種構成は、大小の壺・甕類と器台の2種に偏っている。No4の小型甕が唯一の完形品で、No12の叩き石と並んで貯蔵穴の中程から出土している。この叩き石は、石英斑岩の三角形の円盤を利用した敲打器で、長軸一端に凸状敲打面があり、他にも小範囲な凹状敲打面が認められる。

第4号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第52図 1	甕	口径 [15.6] — 底径 — 器高 (7.8)	短い口縁を有する甕の体部上位から口縁部片。口縁部は、ハの字状に開く。	外面は口縁部接合部にヨコナデを施す。内面はヨコナデ、及び斜方向のヘラナデ。	長石・石英を微量、雲母中量 外面灰褐色、内面に ぶい黄橙色。普通	10%残存 床直
第52図 2	甕	口径 — 底径 [5.6] 器高 (6.2)	球胴甕。甕の体部下位から底部にかけての破片。底部は平底を呈する。	外面は横方向のヘラ削り、底部付近に指ナデを施す。内面は斜方向のヘラナデ。	長石・石英を中量、雲母微量 外面灰黄色、内面に ぶい黄橙色。普通	10%残存 床直
第52図 3	甕	口径 — 底径 [8.2] 器高 (2.8)	平底甕。底部が体部よりやや突出する底部片。	外面は底部付近に横方向のヘラ削り、他は指ナデ、内面は横方向のヘラナデを施す。	長石多量、石英・雲母を中量 外面にぶい赤褐色、 内面にぶい橙色。良好	5%残存 柱穴内
第52図 4	甕	口径 11.7 底径 3.9 器高 12.6	密ハケ調整小型甕。体部はやや角状を呈し、口縁部は外反しハの字に開く。底部は体部より突出しており、底面はデッチリ状になるため不安定である。	体部外面は粘土紐輪積み部分を避けて縦方向のハケ調整を施す。底部付近及び口縁部接合部は指ナデ。内面は横方向のヘラナデを施す。	緻密な胎土 長石微量、石英微量、 雲母多量 外面橙色、内面にぶ い黄橙色。不良	完形品 貯蔵穴内下層
第52図 5	甕	口径 [15.0] 底径 — 器高 (7.3)	密ハケ調整有段口縁小型甕。体部下位から底部を欠く為全体の形状は不明。口縁部は大きく外反し、ハの字状に開く。	外面はハケ調整後口縁部を接合し横方向のナデを施す。口縁部には指ナデ。内面は横方向のヘラナデ及び指ナデを施す。	緻密な胎土 長石・雲母を微量 外面黒褐色、内面黒 褐色。良好	25%残存 器面が部分的 に剥離。床直
第52図 6	甕	口径 — 底径 — 器高 (8.1)	粗ハケ調整小型甕。口唇部と底部を欠損するが全体的に卵形を呈する。口縁部は大きく外反する。底部付近はやや内湾する。	全体に櫛目状の文様を施した後、頸部にヨコナデ、底部付近に縦方向のヘラナデを施す。内面は粘土紐の輪積みに対し斜方向のヘラナデ、口縁部に櫛目状の文様を施す。	長石・石英を中量 外面褐色、内面黒褐 色 やや不良	45%残存 柱穴内
第52図 7	甕	口径 7.8 底径 3.2 器高 (6.5)	小型甕。体部から短く外反する口縁を有する。底部は平底を呈する。	外面は底部付近に縦のヘラ削り、他はヨコナデ、内面は横方向のヘラナデを施す。	緻密な胎土 長石・石英を微量 内外面にぶい黄褐色。 普通	20%残存 覆土一括
第52図 8	器台	口径 — 底径 10.3 器高 (6.5)	内湾脚器台。器受け部を欠損するが、底部径が器受け部径よりも大きい形状を呈する。脚部はハの字状に開く。脚部に1cm程の円形透かし孔を3つ有する。	脚部外面に縦方向のヘラミガキ、器受け部接合部に指ナデを施す。内面はヨコナデを施す。	緻密な胎土 長石微量、石英中量 外面橙色、内面橙色 良好	50%残存 床直
第52図 9	高坏	口径 — 底径 12.8 器高 (3.4)	円形の透かし孔を有する高坏の脚部片。	外面はヨコナデ後縦方向のヘラミガキ、内面は横方向のヘラナデを施す。	緻密な胎土。長石中 量、石英・雲母を微量 外面明赤褐色、内面 明赤褐色。不良	5%残存 床直
第52図 10	甕?	口径 — 底径 6.0 器高 (3.7)	台付甕脚台部か。脚部はハの字状に開き端部は丸くなる。	外面は刻み目状のハケ調整後、甕底部と接合するために粘土を薄く貼り付けている。内面は、縦方向のヘラナデ及び甕接合部にヨコナデを施す。	緻密な胎土 長石少量、石英微量 外面橙色、内面オ リーブ黒色 良好	30%残存 覆土下層
第52図 11	甕壺類?	口径 — 底径 3.8 器高 (3.6)	甕壺類の底部か。平底を呈す。	外面は縦方向のヘラナデ、内面は斜方向のヘラナデを施す。	長石多量、石英・雲母を微量 外面にぶい褐色、内 面灰黄褐色。良好	5%残存 床直

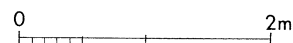
なお、当住居跡に伴うものではないが、壁面を清掃中にメノウ製の剥片を1点発見している(第93図No3)。位置は、東壁のほぼ中央部、標高に換算すると26.045mのレベルになる。ローム地山に突き刺さった状態で発見された。他にも旧石器が存在するか確認するため、当住居跡の東壁を崩すかたちで2×2mのテストピットを設定した(TP-1)。確認面から30cm、剥片の出土レベルよりもさらに下まで掘り下げたが、他に石器を得ることはできなかった。

所見 当住居跡は、梯子穴や炉の配置から、西方を出入り口にしていたことが明らかである。埋没谷に向かう緩い傾斜地(東方)を背後にし、台地平坦部(西方)に広がる集落の方に向きを合せていたことになる。高燥地への志向が窺えると同時に、当住居の立地が居住域の東限を画していたことが知られる。床面に確認された「間仕切り溝」や「ベッド状遺構」は、住居内の空間利用を推測する好資料である。特に大小二つの炉の存在は、調理の用途に応じた使い分けなどを示唆する興味深い資料と言えよう。出土した土器群は、いずれも古墳時代前期に相当するものである。法量の異なる甕の存在や石器の使用などが注目される。覆土に焼土粒や僅かながら炭化材片が含まれていた点で、住居は廃絶後に火を受けていた可能性がある。



SI-5 A-A'

1. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、締まり中、ローム・炭化小粒を少量、表土
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、締まり中、ローム・炭化小粒を少量、表土より黒く、わずかに粘性が強い
3. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性中、締まり中 (部分的に強)、ローム塊・黒色土塊中量、貼り床、部分的に軟質
4. 褐色土 (10YR4/6) 粘性中、締まり中、ローム塊多量、貼り床下の掘り方埋土



第53図 第5号住居跡実測図

第5号住居跡 (SI-5) [第53・54図、PL.15・28]

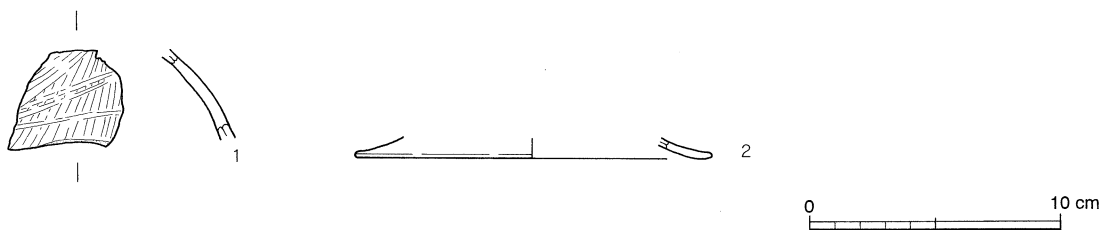
位置 調査区の北西隅、A1からB2区 (A Grid) の位置に所在する。住居の大半部は調査区外であり、確認できたのは東コーナー部のみである。

規模 東壁部2.64m、北壁部1.90mを確認した。平面形態は方形と思われる。

主軸方向 N-29°-Eと予想される。

壁 確認面から床面までの深さは18cm、壁は僅かに外傾して立ち上がっていた。壁溝は確認されなかった。

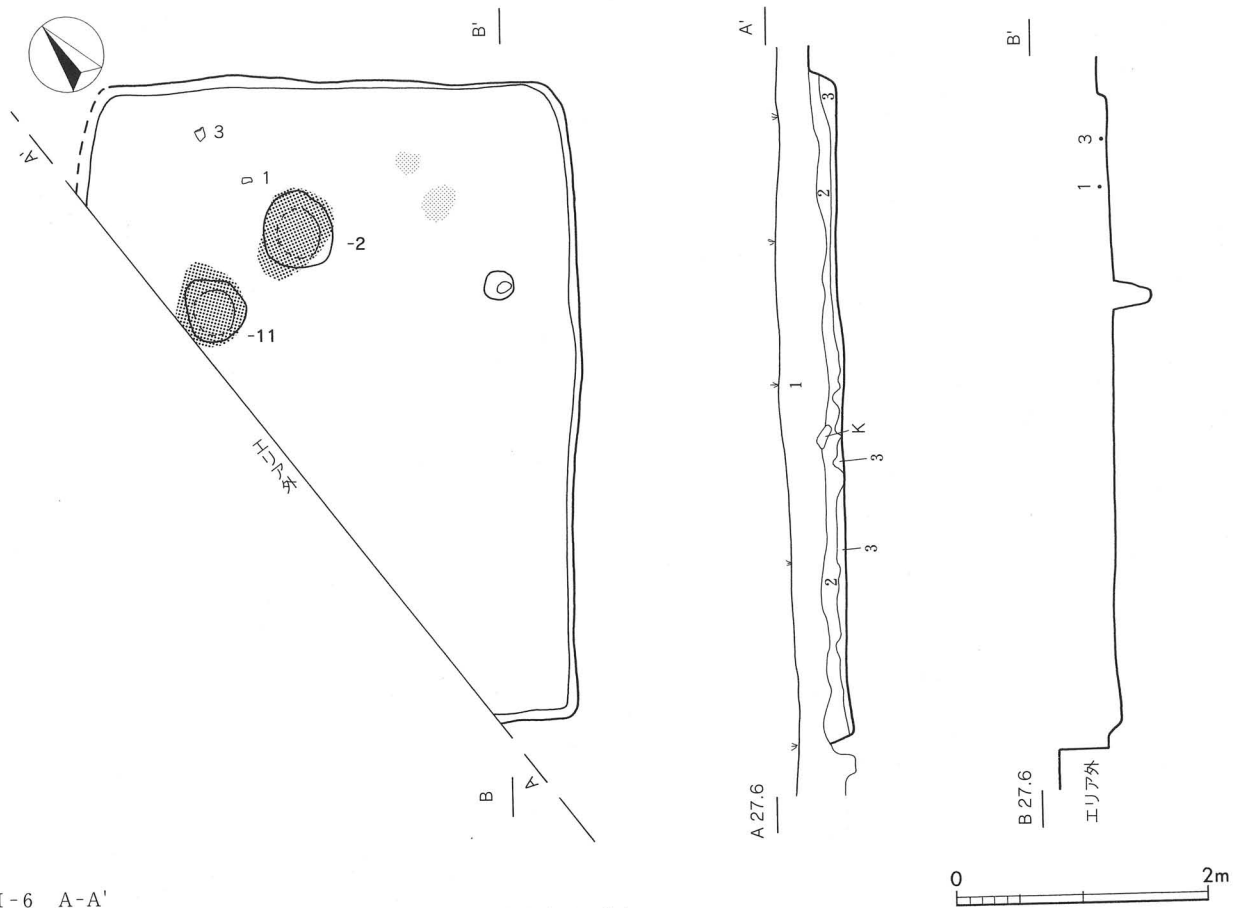
床 黒褐色の覆土を掘り進める中で、硬化面が部分的に確認されたので、そのレベルを床面と認識した。サブトレンチを入れて地山まで下げたところ、一度深めに掘り込んだ後に埋め戻し、厚さ15cmばかりの貼り床を作っている様子が窺えた。



第54図 第5号住居跡出土遺物実測図

第5号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第54図 1	壺	口径 — 底径 — 器高 (4.0)	球形壺の体部片。	外面は縦横のヘラミガキ、内面は横方向のヘラナデを施す。	緻密な胎土長石少量、雲母微量 外面にぶい赤褐色、内面明赤褐色。良好	5%残存 覆土下層
第54図 2	高環 ないし 器台	口径 — 底径 [14.4] 器高 (0.8)	大きくハの字状に開く高環または、器台の脚部片。	内外面共に回転ナデ。	緻密な胎土長石・石英・雲母を中量 外面橙色、内面明褐色。不良	5%残存 覆土下層



SI-6 A-A'

1. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中、締まり中、砂粒・ローム微粒を少量、表土
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、締まり中、 ϕ 1~2 cmのローム粒を中量、ローム塊少量
3. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性中、締まり中、ローム粒が全体に混入、床直上の層

第55図 第6号住居跡実測図

ピット 柱穴や貯蔵穴の類は一つも確認されなかった。

炉 確認されなかった。調査区外に存在すると思われる。

覆土 床上では表土の他に黒褐色土層が1層、床下では暗褐色の貼り床が1層と、地山を掘り込んだ際の埋め戻し土が1層確認された。焼土はみられなかったが、覆土に炭化粒が少量含まれていた。

遺物 覆土中より壺の体部片と器台ないし高坏の脚部片が各1点のみ出土した。

所見 確認されたのが僅かな部分であっただけに、住居の構造はほとんど不明である。出土した土器は僅か2片であるが、古墳時代前期のものとみて差し支えないようである。

第6号住居跡 (SI-6) [第55・56図、PL.15・28]

位置 調査区の西際、B11からC11区 (サGrid) に位置する。当住居の西半分は調査区外に広がっている。第3号住居跡から南西に約4m離れた位置に所在する。

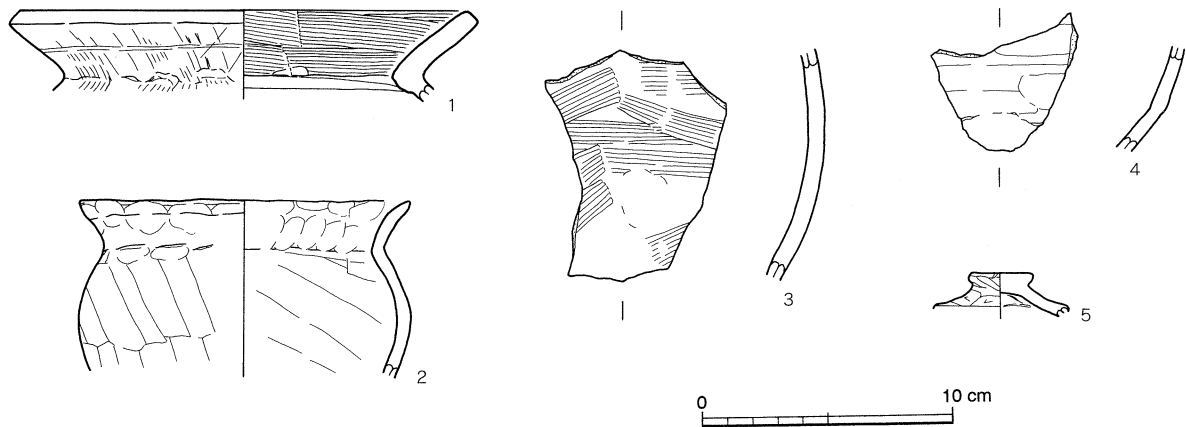
規模 長軸5.06m、短軸3.94mで、平面形態は方形を呈する。床面積は推定20²m²である。

主軸方向 N-36°-E。第2号住居跡の主軸と一致する。

壁 確認面からは最深部で21cm、壁はやや外傾ぎみに立ち上がっていた。壁溝は確認されなかった。

床 平坦である。貼り床は確認されなかった。

ピット 東壁寄りに1基認めただけである。直径23cm、深さ30cmの小穴で、柱穴の一つと思われるがやや東



第56図 第6号住居跡出土遺物実測図

第6号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第56図 1	甕	口径 [16.8] 底径 — 器高 (3.5)	面取口縁上膨甕 (千種甕)。体部以下を欠損する甕の口縁部片。口縁部はハの字状に大きく外反する。	外面は縦方向のハケ調整後、横方向のヘラナデを施す。内面は横方向のハケ調整、及び口縁部接合部に横方向のヘラナデを施す。	長石・石英・雲母を中量 外面褐色、内面にぶい褐色。良好	5%残存 覆土下層
第56図 2	甕	口径 [6.6] 底径 — 器高 (7.0)	ナデ調整輪積痕口縁小型甕。体部下半以下を欠損する甕の破片。口縁部はハの字状に外反する。	外面は口縁部と頸部の接合部に指頭による押さえ、体部には斜方向のヘラナデを施す。内面は口縁部に指頭による押さえ、体部にヘラナデを施す。	長石・石英を多量、雲母微量 外面にぶい褐色、内面にぶい褐色。良好	20%残存 体部外面に炭化物付着 覆土一括
第56図 3	壺	口径 — 底径 — 器高 (9.2)	ハケ調整壺。体部中位片。	外面は横方向のハケ調整、内面は斜方向のヘラナデを施す。粘土紐輪積み痕跡がみうけられる。	緻密な胎土 長石・石英を微量 外面橙色、内面にぶい黄橙色。良好	3%残存 覆土下層
第56図 4	壺	口径 — 底径 — 器高 (2.0)	壺の体部下位片。	外面に横方向のヘラナデ、指ナデを施す。	緻密な胎土。長石中量、石英微量、雲母中量 内外面にぶい黄橙色。 やや不良	5%残存 覆土一括
第56図 5	蓋	口径 — 底径 — 器高 (1.8)	ボタン状のつまみを持つ蓋。	外面はつまみ接合部をヘラナデ、他は横方向のヘラ削りを施す。内面はヘラナデのみ。	長石・石英を多量、雲母微量 外面にぶい褐色、内面にぶい褐色。良好	50%残存 覆土一括

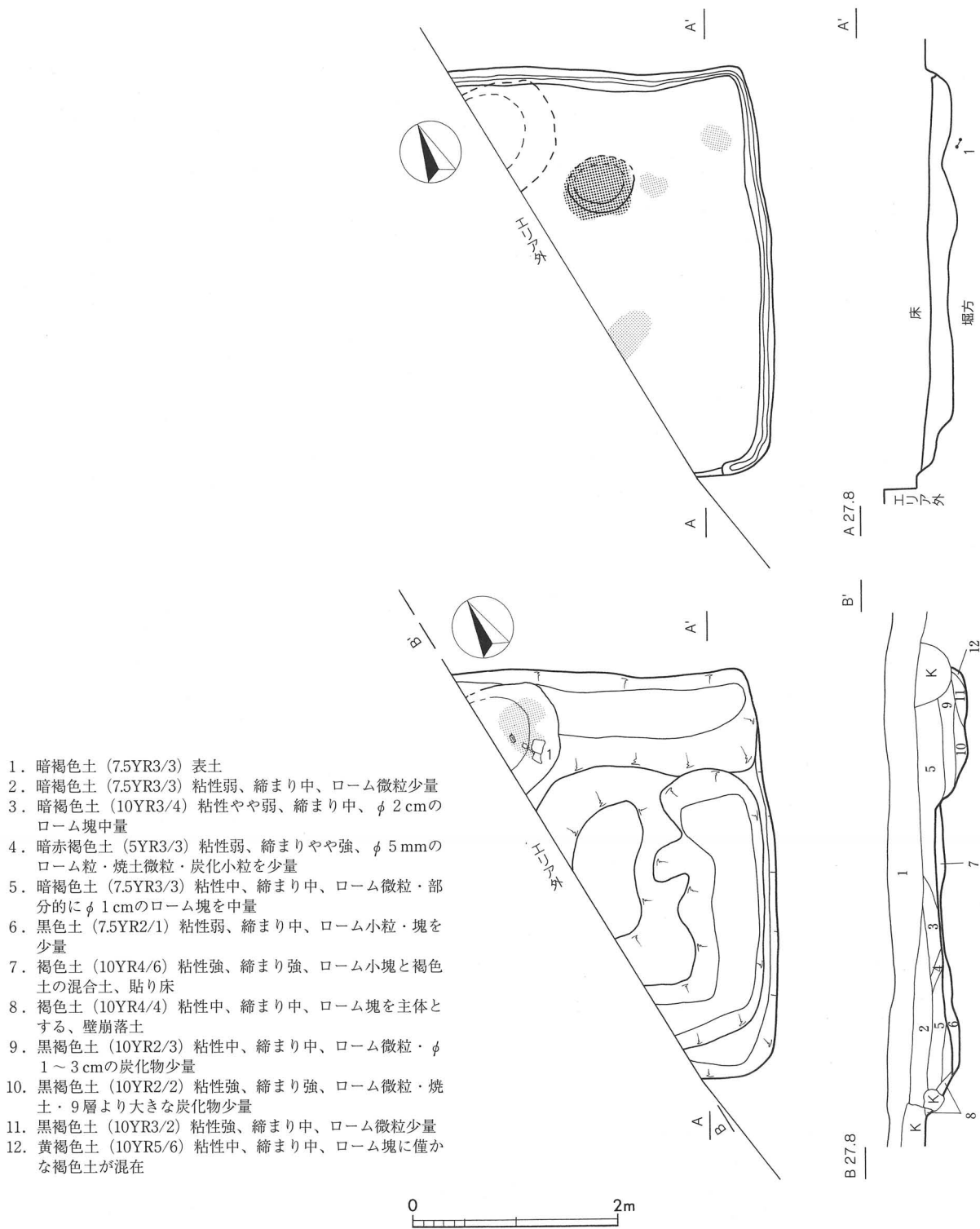
に寄り過ぎの気味がある。他の柱穴を発見すべく床面を精査したが、攪乱穴以外に妥当なものを見つけることができなかった。

炉 住居の中軸線上、北寄りの位置に1基、そこから約50cm南西に離れた地点にもう1基の、計2基を確認した。中軸線上の炉は直径62cm、深さ2cmの浅いもので、硬化した焼土が堆積していた。他方の炉は、直径50cm、深さ11cmで、底に粘性に富む黄褐色の灰質土、その上に焼土塊が堆積していた。

覆土 表土を除き2層が確認された。床面直上の褐色土層はローム粒を主体とした層で、壁面が崩落して流入・自然堆積した土層と想定された。上層の黒褐色土中には、局所的に焼土の包含がみられたが、炭化材等は認められなかった。

遺物 床面より僅かに浮いた位置から土器小片が少量出土した。図化し得たのは土師器壺甕類4点と蓋と思われるもの1点のみである。

所見 当住居跡は、炉の配置からみて南西方向を出入り口にしていたと推定される。出土した土器は少量であるが、古墳時代前期に属するものと考えられる。主軸を共にする第2号住居跡とは、規模の点でも近似しており関連が注目される。



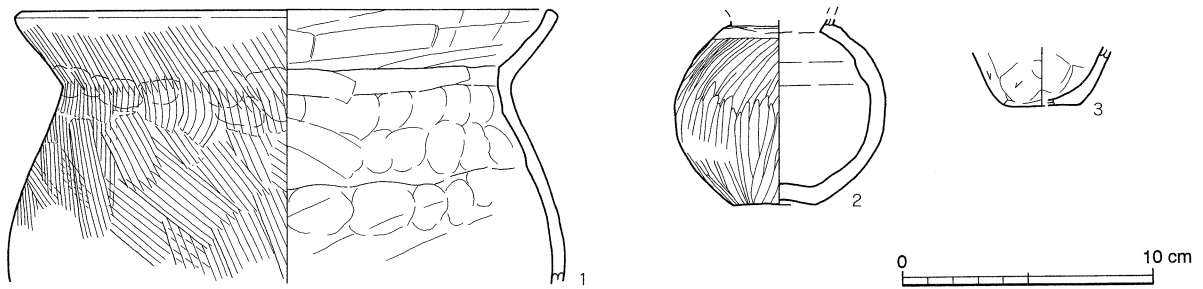
第57図 第7号住居跡実測図

第7号住居跡 (S I-7) [第57・58図、PL.16・29]

位置 調査区の西際、B15からC15区 (サGrid) に位置する。第6号住居跡と同様に、当住居の西半分は調査区外に広がっている。第6号住居跡から南に約10m離れた位置に所在する。

規模 東壁のみが完全に検出されており、長さは3.94mであった。北壁は調査区内で2.82mを測り、さらに調査区外に延びていた。平面形態は方形と考えられるが、床面積は不明である。

主軸方向 東壁を住居の長辺に見立てて主軸線を想定するならば、N-25.5°-Eとなる。他に比べ著しく



第58図 第7号住居跡出土遺物実測図

第7号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第58図 1	甕	口径 [21.5] 底径 — 器高 (10.7)	粗ハケ調整甕。体部下位から底部にかけて欠損するが全体的に卵形を呈する。口縁部は緩やかに外反し、口唇部はやや内湾する。	外面は刻み目状のハケ調整後、口唇部付近にヨコナデ。体部の一部に赤彩あり。内面は頸部に横方向のヘラナデ、体部に指ナデ、口縁部に刻み目状のハケ調整後、ヨコナデを施す。	長石・石英・雲母を中量 外面橙色、内面橙色良好	20%残存 大型ピット内
第58図 2	壺	口径 — 底径 3.5 器高 (7.3)	小型丸底壺。口縁部を欠損するが体部は球形を呈し、底部はやや上げ底状を呈する。	外面は縦方向のヘラミガキ、内面はヨコナデ。口縁部との接合部に輪積みの痕跡がみうけられる。	緻密な胎土。長石微量、石英少量、雲母中量 外面橙色、内面暗灰黄色。やや不良	50%残存 覆土
第58図 3	甕	口径 — 底径 [3.0] 器高 (2.1)	底部が平底を呈する小型甕の底部片。	外面は縦・斜方向のヘラ削り、内面はヘラナデを施す。	緻密な胎土。長石・石英・雲母を微量 外面にぶい橙色、内面橙色。良好	5%残存 覆土

小さな住居となるので、あるいは別の主軸を想定すべきかもしれない。

壁 確認面からの深さは34cmであった。壁は外傾ぎみに立ち上がっていた。壁溝は、床面からの深さが約7cmで、ほぼ全周していた。

床 貼り床で、局所的に硬化面を確認した。床面の形成は、一度地山を不整形に掘り込み、ローム小塊と褐色土を20~30cmの厚さで埋め戻して平坦化をはかっていた。掘り込みは壁際が比較的深く、住居の中央付近は高めに掘り残されていた。

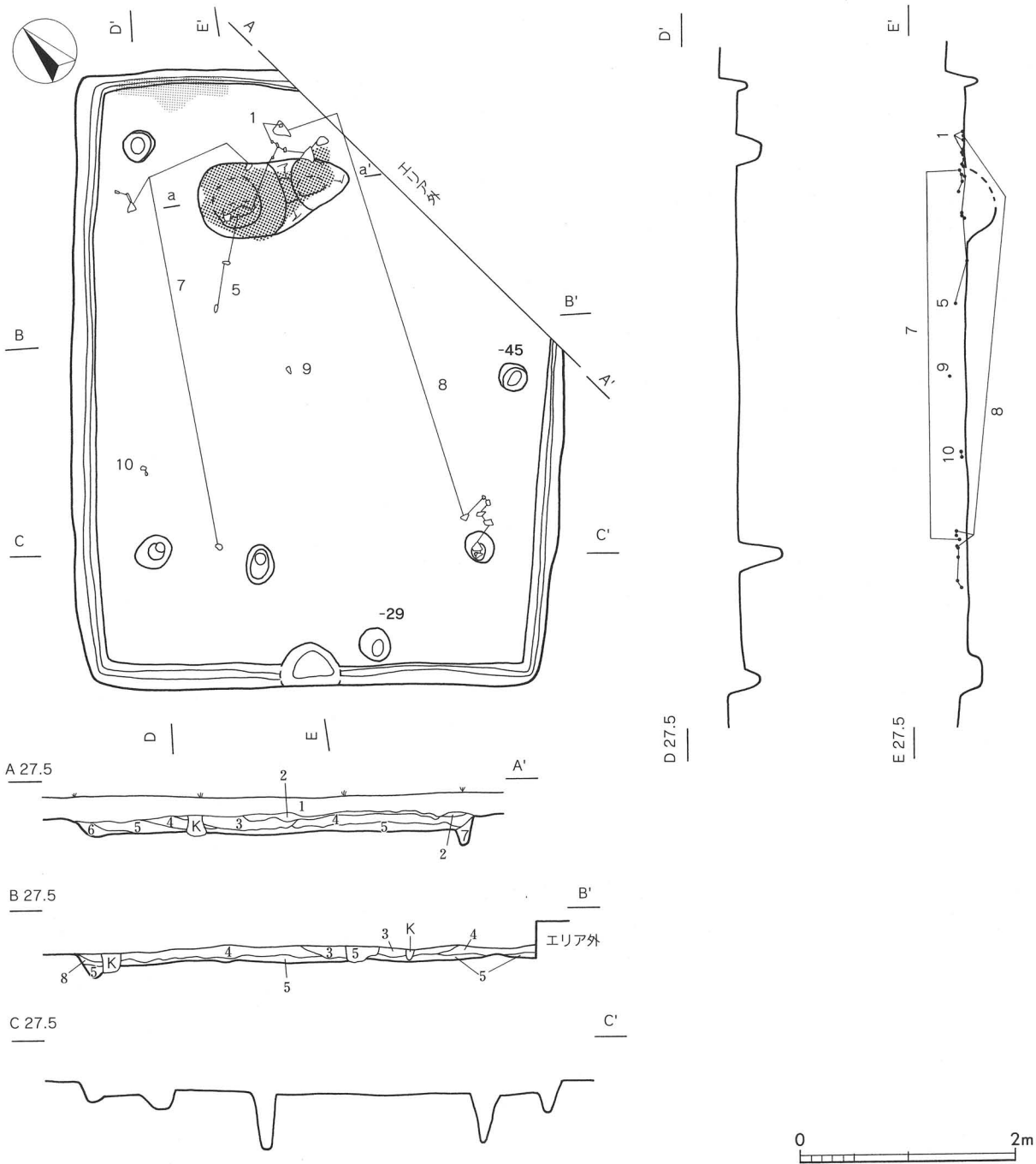
ピット 床面の精査にもかかわらず、柱穴は確認されなかった。ただし、北壁に接して直径約1m、深さ44cmの大型のピットが掘り込まれていた。このピットは、床面積に対して不自然に大きい印象を受けたが、貼り床はこの部分に及んでおらず、中には焼土と土器片が流れ込んでいたので、住居の廃絶までは確実に開口していたようである。貯蔵穴の一種であろうか。

炉 北壁寄りに1基確認した。長軸66cm、短軸54cm、深さ4cmの楕円形で、焼土が硬化していた。

覆土 概ね2層の暗褐色土層が床上に自然堆積しており、間にローム塊や焼土を含んだ土が局所的に入り込んでいた。大型のピットには炭化物を含んだ黒褐色土が堆積していた。

遺物 出土遺物は僅かであった。大型ピットの中からNa1の土師器甕片が出土した他、覆土中より壺の体部片と小型甕の底部片が出土したのみである。

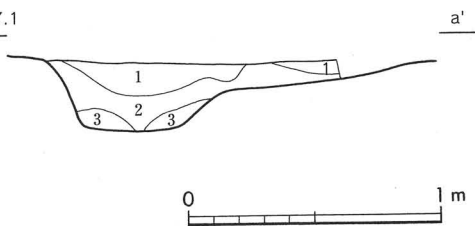
所見 当住居跡は大半が調査区外にあり不明な点が多いが、大型のピットの存在などから若干特殊な性格が推測される。焼土や炭化物は僅かであったが、廃絶時には火を受けていた可能性がある。出土した土器の様相から、当住居跡は古墳時代前期に営まれたものと考えられる。



SI-8 A-A' B-B'

1. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性なし、締まり弱、表土、耕作土
2. 褐色土 (10YR4/4) 粘性弱、締まり弱、ローム小塊・粒少量、焼土粒微量
3. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性弱、締まり中、黒色土が少量混入したローム質土
4. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性中、締まり弱、ローム小粒少量
5. 褐色土 (10YR4/6) 粘性中、締まり中、ローム小粒・塊中量、炭化粒少量
6. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性中、締まり弱、ローム小粒少量、焼土粒・塊中量
7. 褐色土 (10YR4/6) 粘性中、締まり弱、ローム小粒・小塊中量、炭化粒・焼土粒微量
8. 褐色土 (7.5YR4/6) 粘性弱、締まり弱、ローム小粒微量、焼土塊多量

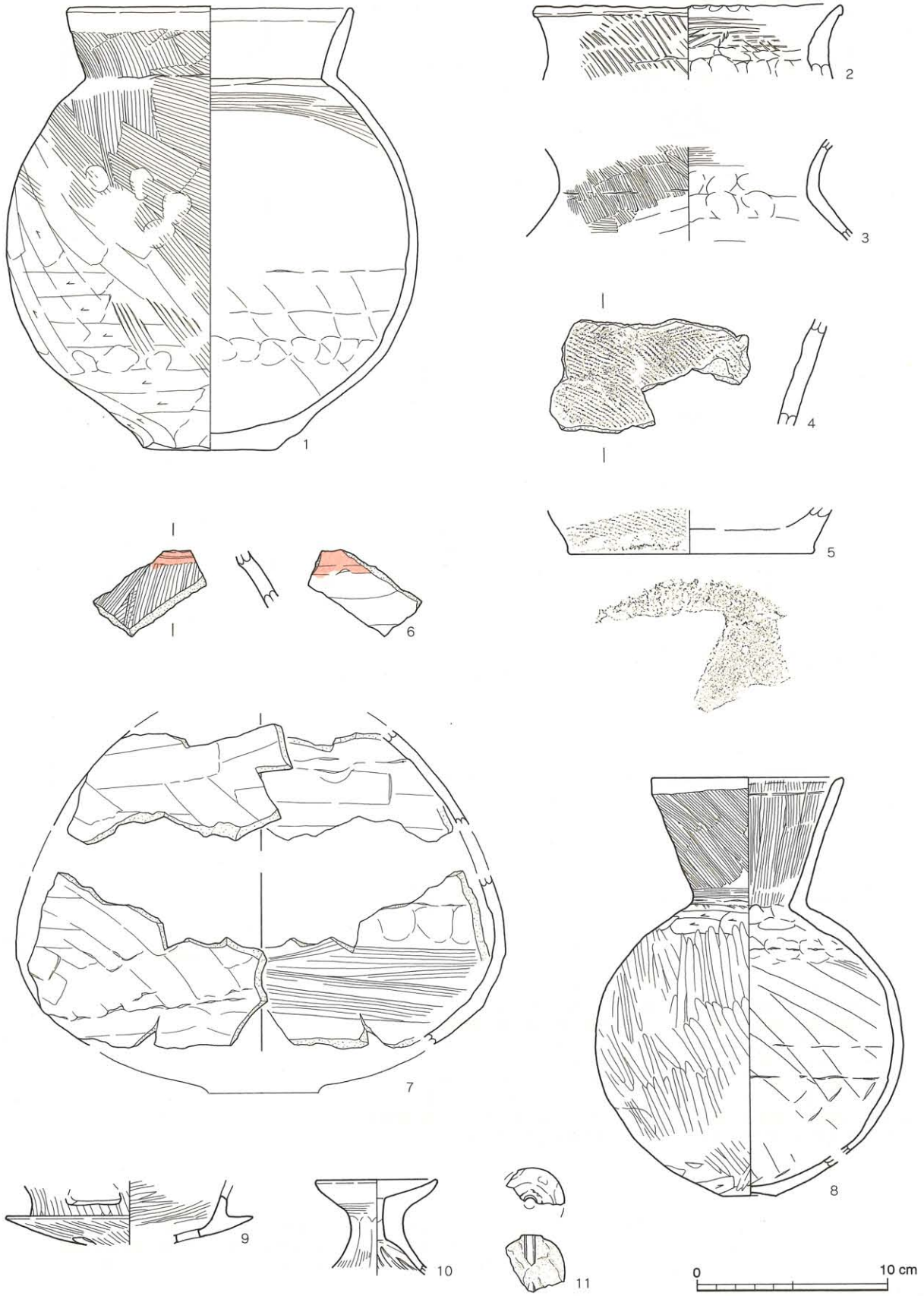
a 27.1



SI-8 a-a'

1. 赤色土 (10R4/8) 粘性弱、締まり中、硬化した焼土を主体
2. 褐色土 (10YR4/6) 粘性弱、締まり中、黄灰色の灰が混在
3. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性中、締まり強、ローム塊を主体

第59図 第8号住居跡実測図



第60图 第8号住居跡出土遺物実測図

第8号住居跡 (S I - 8) [第59・60図、PL.17・19]

位置 調査区中央やや南寄り、標高27mの台地平坦部に位置する。F15からG16区 (シ・チGrid) にまたがり、第9号住居跡の北方に隣接している。当住居跡の東コーナーは調査区外に入り込んでおり、床面積の約1/5が未調査である。

規模 長軸5.7m、短軸5.45mで、平面形態は長方形である。床面積は約31m²と推算される。

主軸方向 N-41.5°-E。

壁 確認面からの深さは18cm、壁はおおむね垂直に立ち上がっていた。壁溝は幅約22cm、深さ12cm程度で、壁際に沿って全周していた。

床 ほぼ平坦である。貼り床を施しているがごく薄いもので、場所によっては地山が床面になっている状態であった。硬化範囲は住居の中央付近にあり、壁沿いは軟弱な部分が目立った。

ピット 未調査の東コーナーを除き、支柱穴を3個検出した。本来は4本柱の構造である。柱穴の配置は比較的壁際ないしコーナーに寄っており、中央の空間を広く取ろうとした意識がうかがえる。柱穴はいずれも規模が小さく、直径は30cm前後、深さは24~44cmであった。南壁沿いの中央部には、壁溝と接して半円形のピットが掘り込まれていた。長軸54cm、深さ13cmをはかり、炉と対峙する位置にあることから、出入り口に関連した施設である可能性が高い。その他、3基の小ピットが確認されたが、その機能は不明である。

炉 北壁に寄った位置に並列して2基確認された。両者は浅い掘り込みによって連結していたが、西側の炉の方が大きく主機能を担っていたようである。直径70cm、深さ28cmで、黄灰色の灰が混じる土層の上に硬化した焼土が堆積していた。東側の炉は、この主要炉の灰を共有しながら補助的に上面で火が焚かれたものであり、硬化した焼土が径40cm程の範囲で広がっていた。

覆土 主として3層の堆積を確認した。褐色土を基調とする土層で、特に下層や壁寄りの土層に焼土や炭化粒が多く認められた。なお、覆土中位から上位にかけてローム主体の土(3層)が確認されたが、これは地山と誤認する程にロームの密度が高く、人為的な投棄を想定させるものであった。おそらく、当住居が廃絶した後、近辺で何らかの掘削が行われ、その廃土が窪みに投棄されたのであろう。

遺物 ほとんどの遺物が床面直上ないし僅かに浮いた位置から出土した。図示し得た土器類は僅か11点であるが、器種構成は特徴的である。No 1~3はハケ目の付いた甕であるが、No 4と5は結節縄文を施した弥生

第8号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 1	甕	口径 14.8 底径 6.3 器高 23.2	粗ハケ調整直口縁球胴甕。体部は球形を呈し、口縁部は大きく外反しハの字状に開く。最大径が体部の中間に位置し、底部は体部よりやや突出する。底部は平底を呈する。器形全体にゆがみがみられる。	外面は、体部上位に斜方向のハケ調整を施す。体部下位には縦横方向のヘラ削り、指ナデを施す。口縁部はハケ調整後、指ナデを施す。内面は粘土紐接合部を指ナデ、頸部から体部上位にかけて横方向のハケ調整を施す。	長石・石英を中量、雲母微量 外面暗褐色、内面に ぶい黄褐色 不良	50%残存 内面はもろく 剥離しやすい 床直
第60図 2	甕	口径 [16.2] 底径 - 器高 (3.9)	口縁押圧甕。体部以下を欠損する甕の口縁部片。口縁部は緩やかに外反する。	外面は縦方向に櫛目状の工具で調整、内面は縦横に櫛目状の工具で調整後、口縁部接合部に指ナデを施す。口唇部はヘラで押さえられている。	長石中量、石英微量 外面褐灰色、内面灰 褐色 普通	15%残存 覆土一括
第60図 3	壺	口径 - 底径 - 器高 (4.5)	密ハケ調整広口壺。頸部片。	外面は斜方向のヘラナデ後、縦方向のハケ調整を施す。内面は上位に回転ナデ、それ以外はヨコナデ後、指ナデを施す。	長石・石英・雲母を中 量 外面灰黄褐色、内面に ぶい赤褐色。不良	5%残存 北側覆土
第60図 4	弥生土器 甕	口径 - 底径 - 器高 (5.2)	附加条縄文施文平底甕。5と同一個体。	外面はLR+2RとRL+2Lにより横位羽状縄文を施す。内面調整は剥落が著しいため観察不可能。	緻密な胎土長石中量、 石英・雲母を少量 外面にぶい黄橙色、 内面オリーブ黒色 不良	10%残存 内面は剥離して いる北側覆 土一括

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第60図 5	弥生土器 甕	口径 — 底径 [13.0] 器高 (2.3)	付加条縄文施文平底甕。4と同一個体。	外面は底部付近まで横位にRL+2Lを施す。内面調整は剥落が著しいため観察不可能。	長石・石英・雲母を多量 外面灰黄褐色、内面に ぶい褐色。不良 緻密な胎土。長石中	床直
第60図 6	壺	口径 — 底径 — 器高 (2.4)	裝飾付球胴壺。壺肩部片。	外面は縦方向のハケ調整、内面は横方向のヘラナデを施す。内外面共に同位置に赤彩付着。	量、石英・雲母を少量 外面にぶい黄橙色、 内面オリーブ黒色。 不良	5%残存 南側覆土
第60図 7	壺	口径 — 底径 — 器高 —	下膨壺。体部下位が下膨れ状を呈するパレススタイルの壺片。破片同士は接合しない。	外面は体部上位に縦横のヘラナデ、下位に斜方向のヘラナデを施す。粘土紐接合の痕跡がみられる。内面は横方向のヘラナデ及び指ナデを施す。	緻密な胎土。長石微量 外面にぶい黄橙色、内外 面明赤褐色。普通	10%残存 二次被熱を受け、器面剥離 覆土下層
第60図 8	壺	口径 10.0 底径 3.0 器高 (21.9)	胴部ミガキ調整直口縁球胴壺。体部は球形を呈し、口縁部は強く屈曲しハの字に開く。口唇部はやや内湾する。底部は中央がやや上げ底状になる。	外面は横方向のヘラ削り後、縦方向のヘラミガキを全体に施す。頸部から口縁部にかけて斜方向のハケ調整後、口唇部にヨコナデを施す。内面は斜方向のヘラナデ、粘土紐接合部に指ナデ、頸部から口縁部にかけてミガキを施す。	緻密な胎土。長石・石 英を中量 外面にぶい橙色、内 面にぶい黄褐色。 良好	45%残存 床直
第60図 9	器台	口径 — 底径 — 器高 (2.9)	結合器台。結合器台の受け部片。円形と三角形の透かし孔を有する。	外面は縦方向のヘラミガキ、内面は縦横のヘラミガキを施す。	緻密な胎土。長石中 量、石英・雲母を微量 外面にぶい褐色、内 面にぶい赤褐色。普通	20%残存 覆土下層
第60図 10	器台	口径 6.3 底径 — 器高 (5.0)	受け部が脚部よりも小さくなる器台。脚部裾を欠損。	外面は受け部に回転ナデ、脚部に縦方向のヘラミガキを施す。内面は脚部に斜方向のヘラナデを施す。	緻密な胎土。長石・石 英・雲母を中量 内外面橙色。やや不良	70%残存 覆土下層

図版番号	器種	法 量				特 徴	胎土・色調・焼成	備 考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第60図 11	土製品 土玉	(3.0)	(2.9)	—	(8.9)	孔の径は0.6cm、その周辺をヘラナデで整える。全体的に均一に丸く整えられている。	綿密な胎土 長石少量 外面にぶい黄褐色。良好	45%残存 土一括

土器の甕である。No.6は頸部に赤彩の施された壺片、No.7は接合しない同一個体片が下膨れした壺に復元された。No.8は長い頸部をもつ壺、No.9は第3号住居跡から出土した結合器台と同様の器台である。No.10は受けが浅く中央に孔の開いた器台である。

所見 当住居跡は、炉やピットの配置から、南西方面を出入り口にしていただと推定される。焼土や炭化物は僅かであるが、廃絶時には火を受けていた可能性がある。出土した土器は古墳時代前期に属するものと考えられるが、弥生土器と土師器の共存や、特異な器形の目立つことなどは特に注目されよう。

第9号住居跡 (S1-9) [第61・62図、PL.18・30]

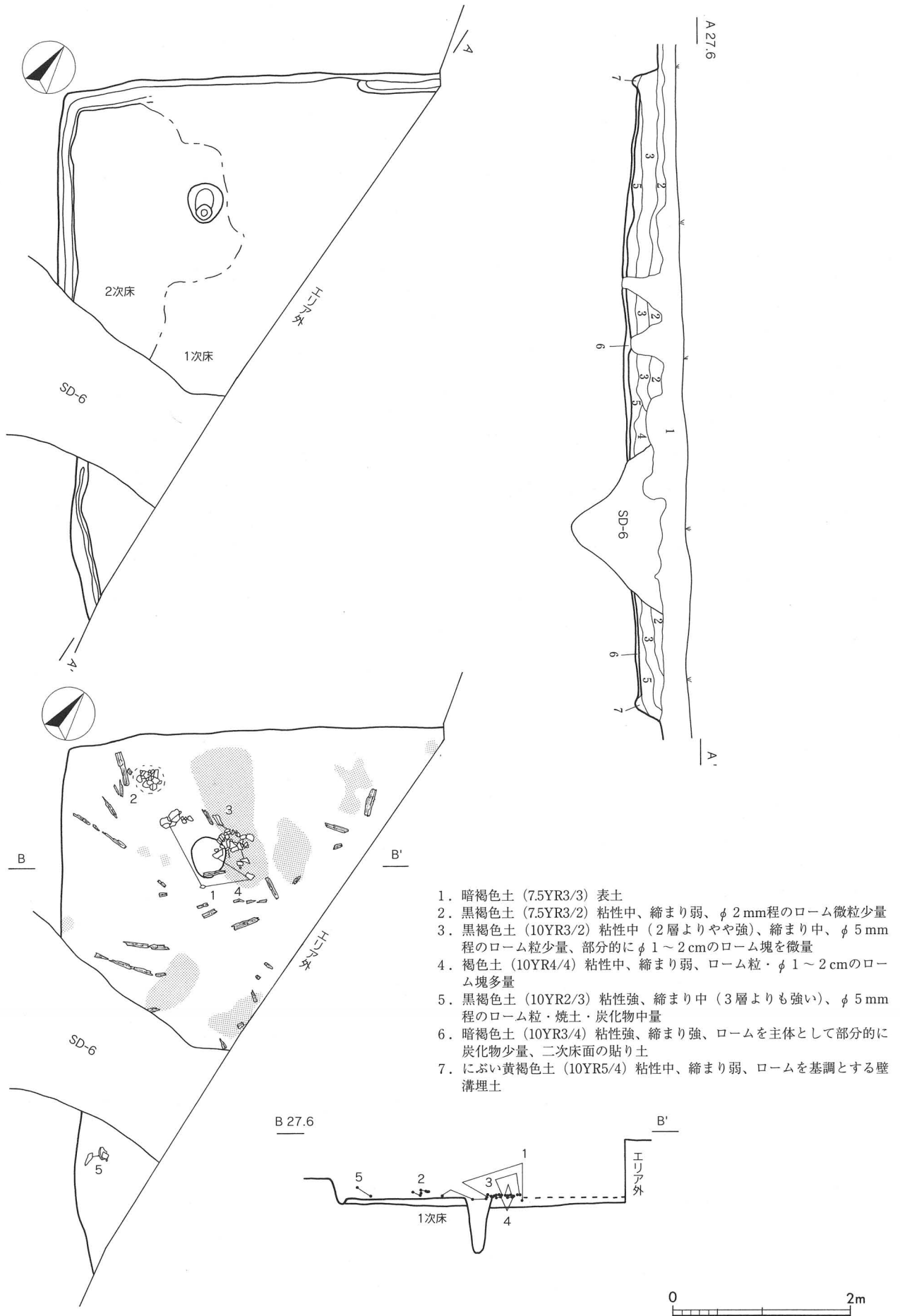
位置 調査区南西部、G16からH18区 (チGrid) にまたがる地点に所在し、床面積の約2/3が調査区外に入り込んでいる。また第6号溝 (SD-6) が当住居跡内を横断しており、壁や床は深い掘削を受けて南北に分断されていた。

規模 本来の平面形態は方形であるが、調査区の境界がこれを斜めに分断していることから、現状では直角三角形状を呈している。調査区内で確認できたのは、住居の西側コーナーを含む一画で、長辺5.95m、短辺4.20m、どちらもさらに広がりをもつと予想される。確認された壁長から復元すると、少なくとも1辺6mを越える大型の住居であった可能性が高い。

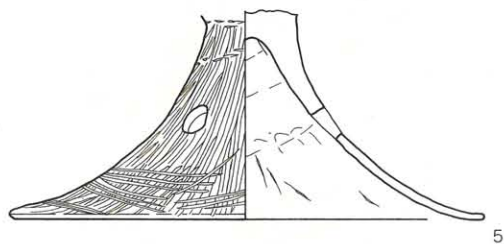
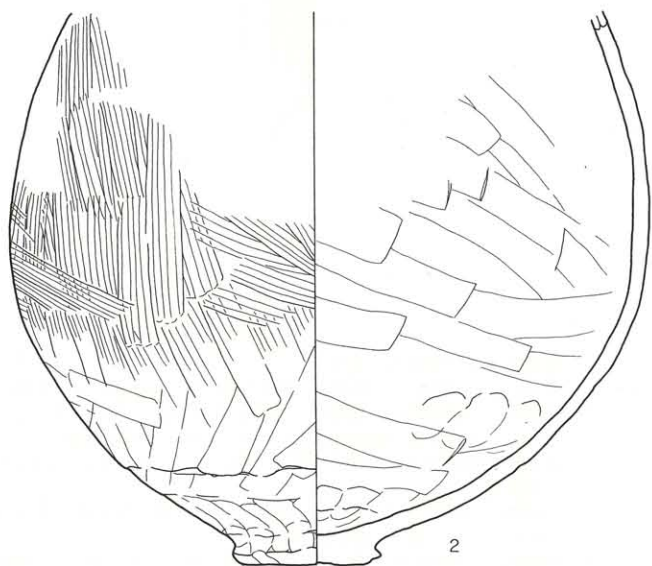
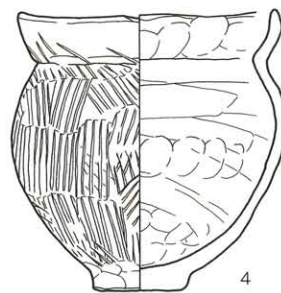
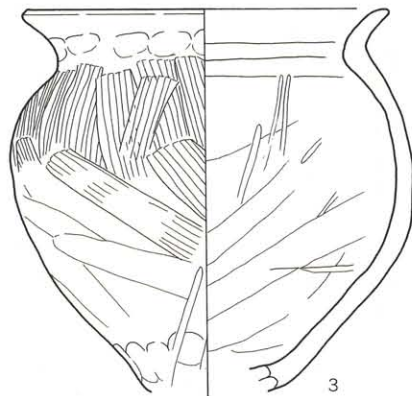
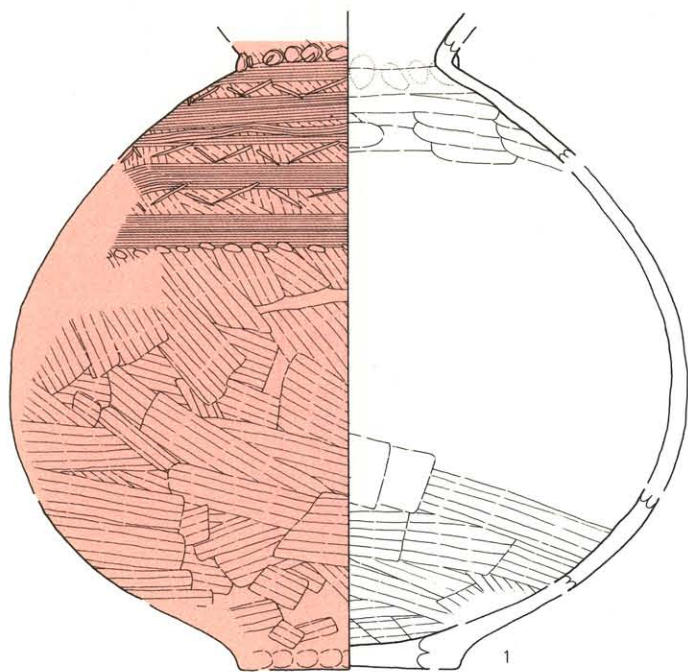
主軸方向 N-52°-Eと予想される。

壁 確認面からの深さは28cm、壁はやや外傾して立ち上がっていた。壁溝は幅約15cm、深さ5～8cm程度で、一部検出できなかったが全周していたものとみられる。

床 概ね平坦であるが、中央部がやや低く作られていた。明確な貼り床は1面で、暗褐色土を5cm程の厚さ



第61図 第9号住居跡実測図



第62図 第9号住居跡出土遺物実測図

第9号住居跡出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第62図 1	壺	口径 — 底径 8.7 器高 (25.9)	円形浮文付パレス文様下膨壺。体部最大径が中央に近いが、下膨れ状を呈するパレススタイルの壺。口縁部は強く外反するものと思われる。底部はやや上げ底状を呈する。頸部には円形浮文が貼り付けられる。	内外面共にハケ状工具により全体の器面調整を施す。外面肩部にはヘラ状工具によって左から右方向に沈線の山形文が施文される。沈線の中には数箇所のキザミ目が観察される。文様最下列には棒状工具による列点文を施す。	緻密な胎土 長石・石英・チャート を少量 外面淡黄色、内面暗 灰黄色 普通	30%残存 体部下半に 二次被熱 二次床直
第62図 2	壺	口径 — 底径 5.0 器高 (22.0)	ハケ調整球胴壺。体部は球形を呈する。底部が体部より突出する。口縁部を欠損する。	外面体部上位はハケ調整後ナデ、下位は斜方向のヘラナデを施す。底部付近に接合痕がみられる。内面は横方向のヘラナデ、底部付近の接合部には指ナデを施す。	長石中量、石英微量、 雲母中量 外面暗灰黄色、内面 暗灰黄色 不良	30%残存 二次床直
第62図 3	甕	口径 14.5 底径 — 器高 (15.2)	粗ハケ調整小型甕。体部は卵形を呈すが、底部付近でやや内湾し、口縁部はハの字状に開く。底部を欠損する。	外面は体部上位に縦方向のハケ調整後、斜方向のヘラナデ、底部付近に指ナデを施す。口縁部はハケ調整後に接合する。内面は斜方向のヘラナデ、口縁部接合部には横方向のヘラナデを施す。	長石・石英を微量、 雲母中量 外面にぶい橙色、内 面にぶい橙色 良好	5%残存 二次床直
第62図 4	甕	口径 10.2 底径 3.0 器高 11.1	粗ハケ調整内湾口縁小型甕。体部は卵形を呈し、底部が体部より突出する。口縁部は受口状に内湾する。	外面は体部全体に櫛目状のものが施された後に口縁部が接合される。底部には指ナデが施される。内面は横方向のヘラナデ及び指ナデ、口縁部には指ナデを施す。	長石・石英・雲母を中 量 外面にぶい赤褐色、 内面にぶい赤褐色 普通	90%残存 二次床直
第62図 5	高坏	口径 — 底径 18.8 器高 (8.2)	精製胎土小型高坏。裾部がハの字状に大きく開く高坏の脚部。裾の端部は丸く処理される。坏部を欠損する。脚部中間に1cm程の円形の透かし孔を4つ有する。	外面は縦方向のヘラミガキ後、裾部には横方向のヘラミガキを加える。内面は横方向のヘラナデ、指ナデを施す。	緻密な胎土。長石微 量、石英中量、雲母 微量 外面橙色、内面にぶ い橙色 良好	40%残存 脚部半分が 黒く焼けて いる 二次床直

で貼り固めていた。調査過程では、住居中央付近の軟質部を掘り抜いてしまったが、結果、その下のローム地山に近い位置にも硬化面があることを確認できた。この硬化面は局所的であったが、褐色土を薄く敷いて平坦に整えている箇所もあり、一応これを1次床面と認識した。上方の貼り床は2次床面となり、複次にわたる床面造成を想定させるものとなった。

ピット 長軸44cm、深さ63cmの楕円形の穴が一つ検出された。主柱穴の一つと考えられる。

炉 確認されなかった。

覆土 表土を除き、3層確認された。2次床面直上の黒褐色土層（5層）には炭化材片と焼土が多く含まれていた。なお、炭化材は幅3～5cm程度の細い木材で、住居の中央から放射状に広がる方向性があり、垂木材を想定させるものであった。

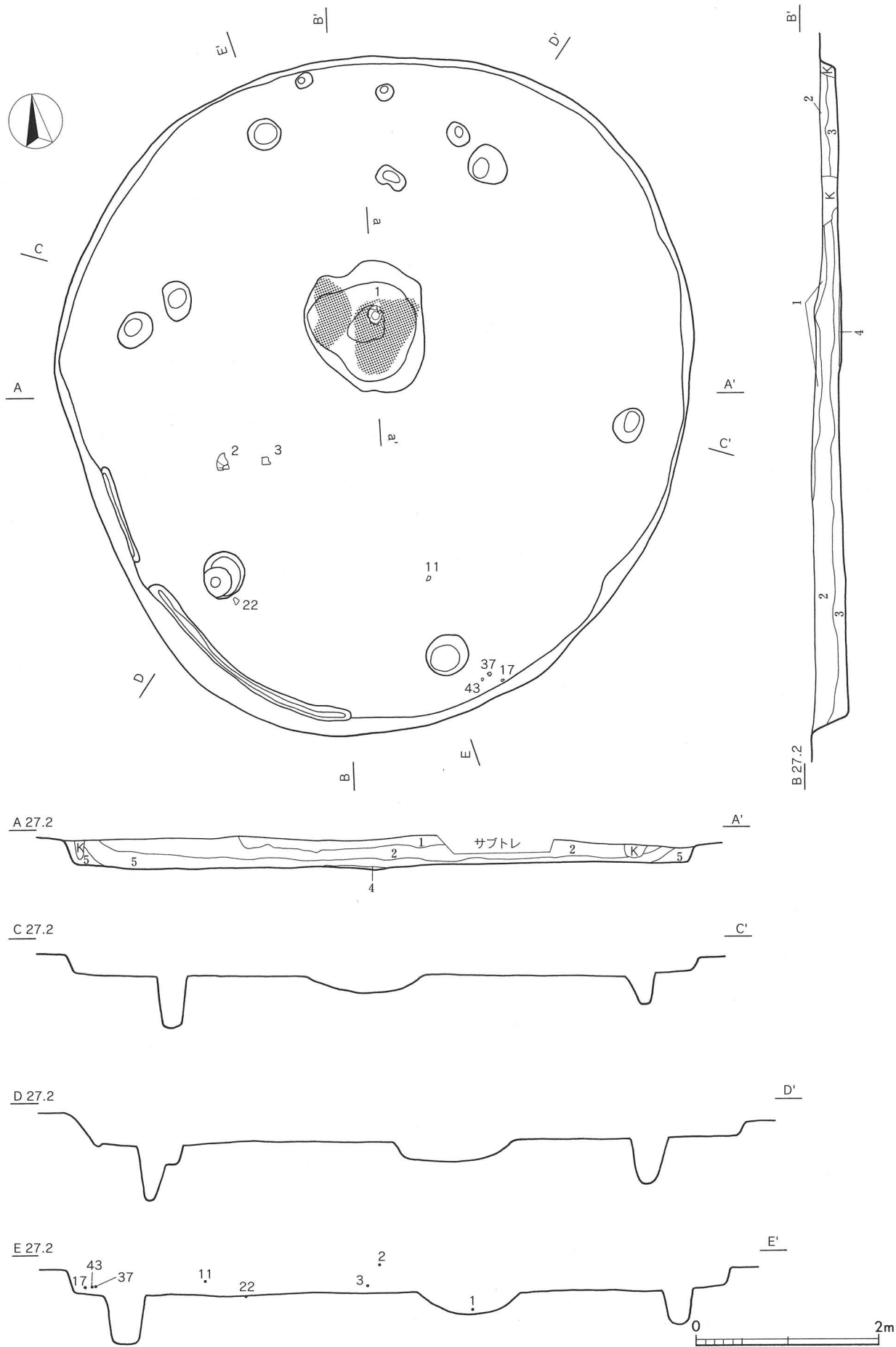
遺物 ほとんどの土器片が2次床面直上から出土した。図示し得たのは僅か5点で、壺甕類が4点、器台ないし高坏が1点である。特筆されるのはNo.1の壺で、いわゆる「パレス・スタイル」の壺を模倣しながら、頸部に粘土粒を貼付けたり全面に赤彩を施すなど、強い地域色が窺える。

所見 出土した土器の様相からみて、当住居跡は古墳時代前期に営まれたものと考えられる。調査できた部分は僅かであるが、本来は第4号住居跡に匹敵する規模をもつものと推定される。隣接する第8号住居跡とは、壁が近接しすぎており同時併存は考え難く、同じ古墳時代前期でも若干の時期差を見込まねばならないであろう。覆土に焼土や炭化材が含まれており、土器片にも黒化したものがみられたことから、当住居跡は廃絶後に火を受けているものと考えられる。

第10号住居跡 (S I -10) [第63～67図、PL.18・19]

位置 調査区南西部、E12からG14区 (シGrid) にまたがり、標高27mの台地平坦部に立地する。

規模 平面形態は円形で、最大径7.30m、最小径6.92mをはかる。



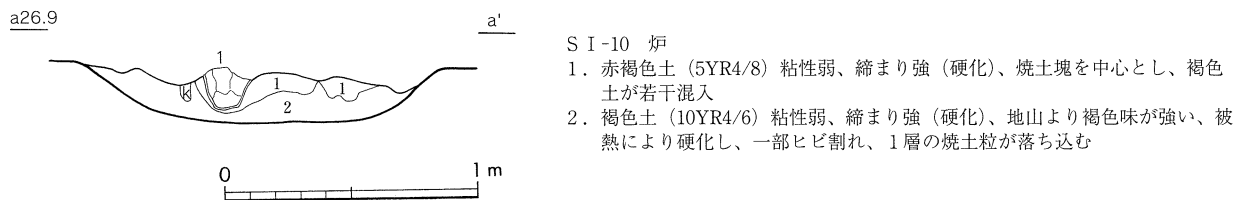
第63図 第10号住居跡実測図

主軸方向 炉の位置から判断するとN-0.05°-Eとなり、ほぼ南北方向に軸をとっていたことになる。

壁 確認面からの深さは22cm、壁は僅かに外傾して立ち上がっていた。壁溝が確認できたのは南西隅の一角のみで、幅約15cm、深さ5cm程度であった。

床 概ね平坦であった。住居中央から柱穴周辺までの床面は硬化していたが、貼り床を作った形跡は認められなかった。

ピット 主柱穴は6ヶ所、ほぼ等間隔に六角形を描くように配列していた。柱穴の規模は、最も大きいもので直径52cm、深さ57cm、小さなもので直径38cm、深さ42cmであった。他に西方の柱穴の脇に同規模のピットが一つ認められた他、住居の北壁付近にも径20cm程の小ピットが4つ確認されたが、これらの性格は不明である。



SI-10 覆土

1. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性弱、締まり中、ローム小粒少量、黒色土粒微量、焼土ごく微量
2. 褐色土 (7.5YR4/6) 粘性弱、締まり中、1層より明るい、ローム小粒多量、黒色土粒・炭化粒ごく微量
3. 褐色土 (10YR4/6) 粘性中、締まりやや強、ローム基調の褐色土、ローム小粒・塊中量、炭化粒微量
4. 褐色土 (10YR4/6) 粘性中、締まりやや強、3層と同質だが炉上面のため焼土塊・粒少量混入
5. 褐色土 (7.5YR4/6) 粘性中、締まりやや強、ローム粒・小塊中量、壁崩落土

第64図 第10号住居跡炉断面図

炉 住居の中央やや北寄りの位置に、直径1.4m、深さ22cmの不整形の大型ピットが1基掘り込まれていた。このピットの底には褐色土、上面には硬化した焼土塊が堆積していたが、灰らしきものは観察されなかった。焼土の範囲は2ヶ所に集中しており、東西に大小2つの火床が設定されていたようである。ピットのほぼ中央、大型の火床の北縁には深鉢形土器が埋め込まれていた。この土器は使用時から上部を欠いていたと思われる、炉直上の覆土を精査したにもかかわらず、接合する破片は検出されなかった。土器の中には焼土粒と褐色土が入っただけで、覆土と何ら変わった様子はみられなかった。土器の周囲は焼土塊に被われて硬化しており、煮炊きの度に引き抜かれていたというよりも、火床に固定された状態で使用されたようである。

覆土 3層確認された。ローム粒を多量に含む褐色土が概ね水平に堆積していた。

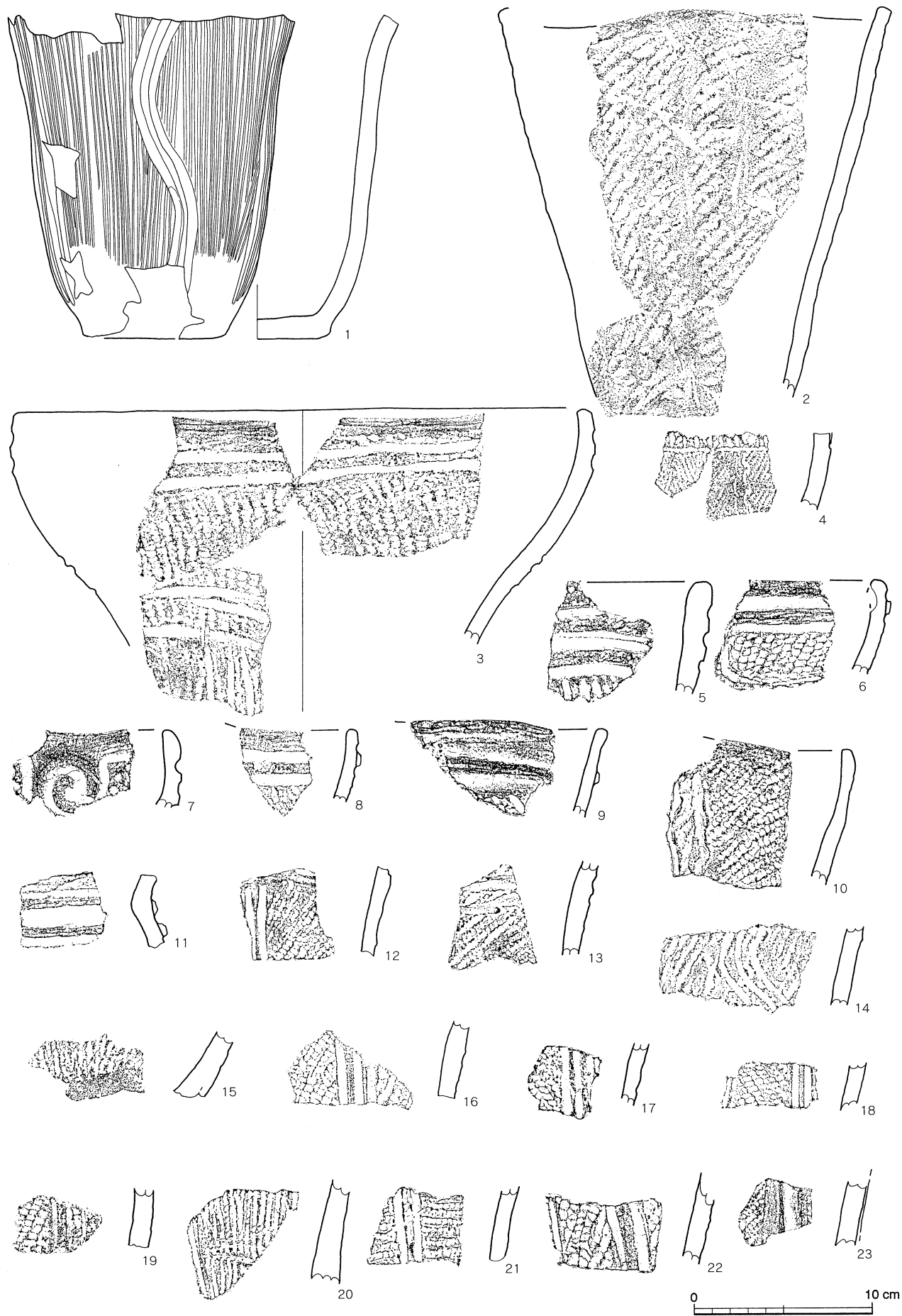
遺物 炉に設置されていた土器を除き、床面から出土した土器片はごく僅かである。覆土中からは一定量の出土がみられたが、ほとんどが小破片である。石器は石鏃の未製品や敲打具など計5点が出土した。いずれも覆土中層からの出土である。出土遺物が比較的少ない中で、土器片錘が多くの割合を占めている点は特筆されよう。遺物の詳細は別記の通りである。

所見 当住居跡は、後述する土器の所見より、縄文時代中期後半、加曾利EⅡ式を中心とした段階に営まれたものと考えられる。該期の住居跡の中でも直径7mを越える規模は大型の部類に属し、これまで当台地上で検出された住居跡では最大である。また、土器を付設した大型の炉の存在も特異なものと思われる。

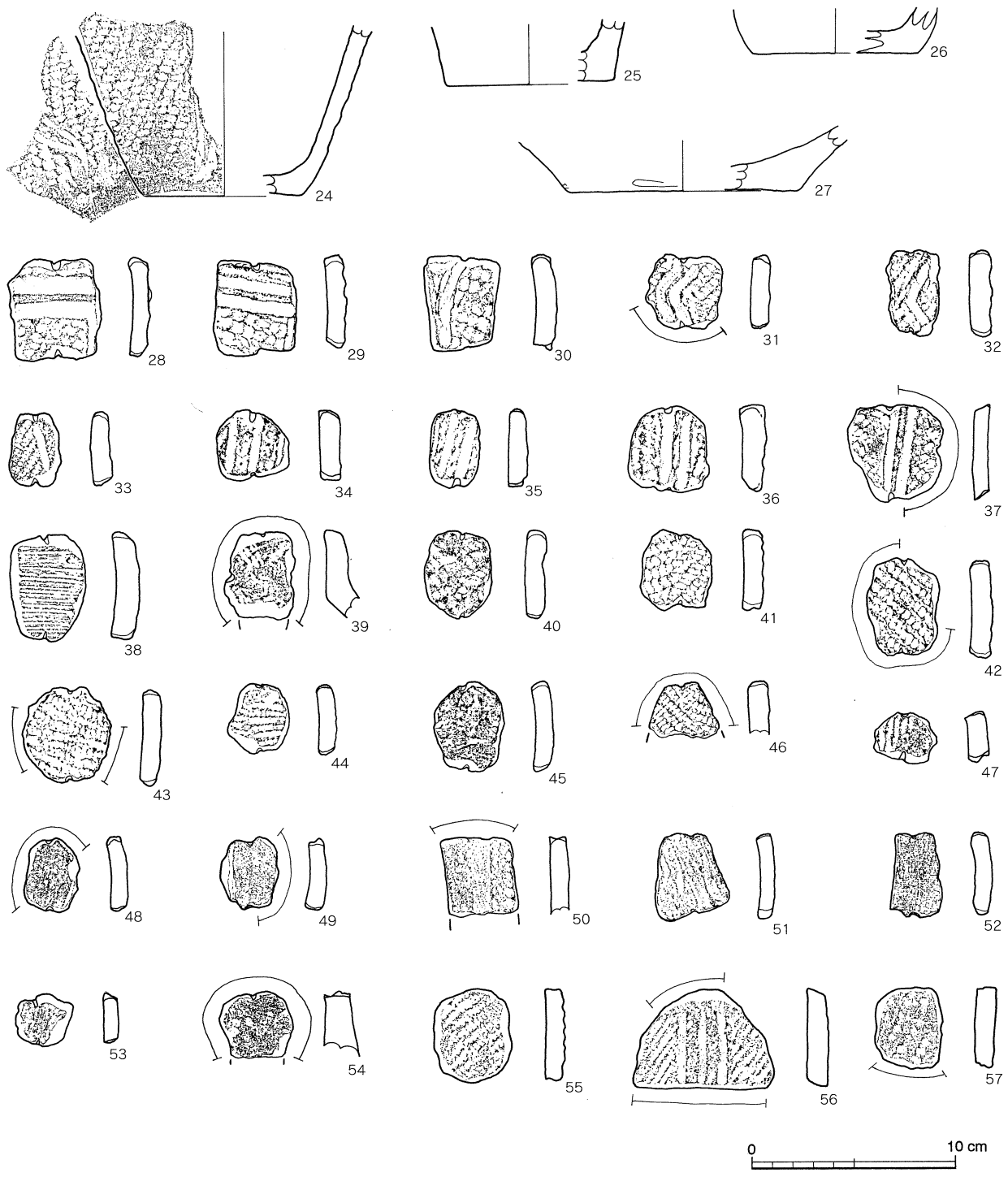
第10号住居跡出土の遺物について

土器・土製品〔第65・66図、PL.30・31〕

No.1は埋設炉である。胴部中位でゆるやかにくびれる器形を呈し、上端部は輪積みで欠損している。全体

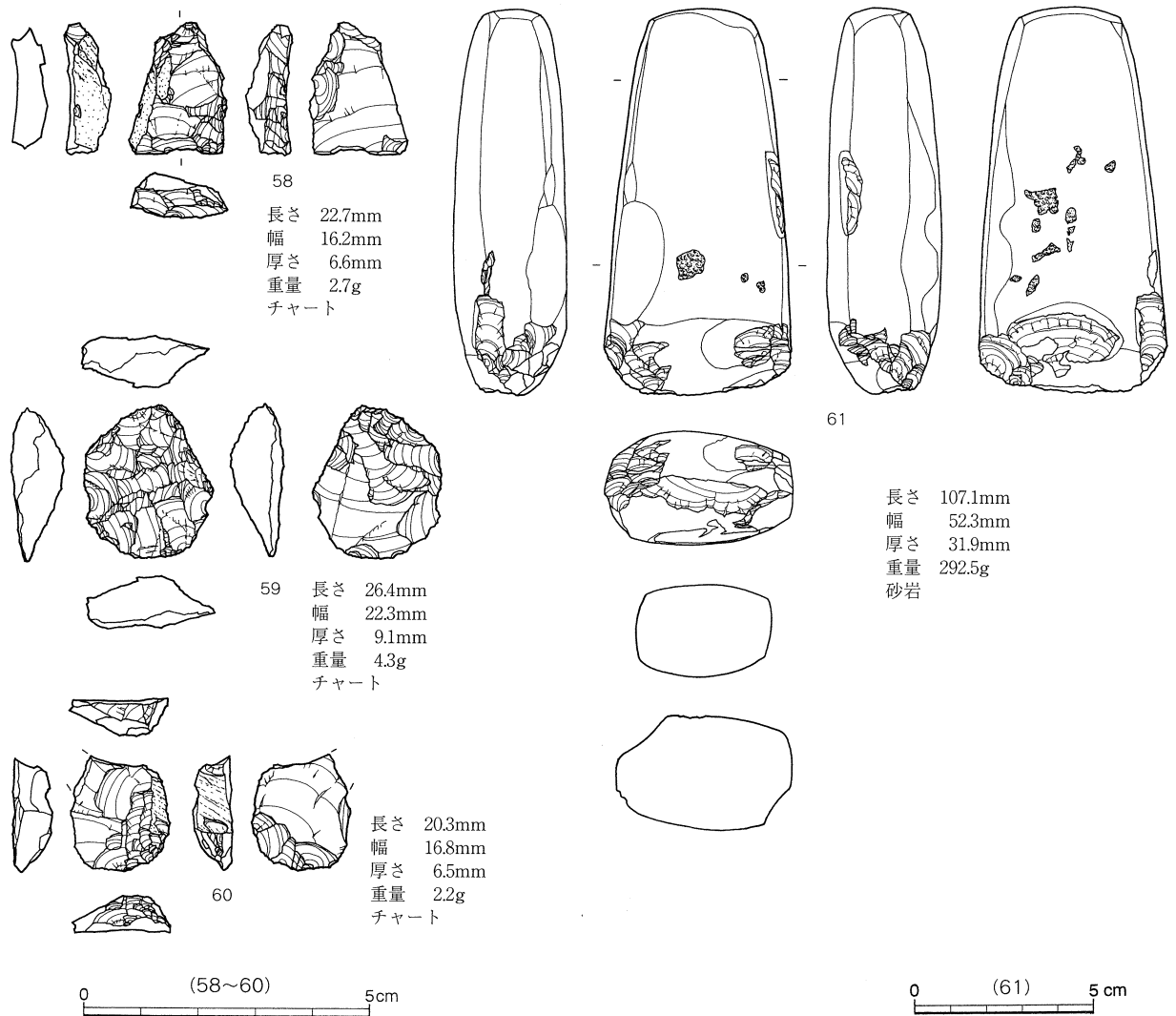


第65图 第10号住居跡出土遺物実測図（1）



第66図 第10号住居跡出土遺物実測図(2)

に被熱によりもろくなっている。地文は5～6条一単位の条線文で、施文方向は上から下、左から右方向となり、底部直上は無文となる。条線文の上から3条一単位の垂下沈線文が3ヶ所(うち1ヶ所は2条)、2条一単位の蛇行沈線文と交互に施文され、各沈線文間は地文が磨り消されている。底面は無文で磨かれていた。残高18.2cm、底径8cmで地文から中部地方の影響が伺える。No 2はゆるやかな波状口縁で推定口径22.0cm、口縁部から胴部下位にかけて約1/5程残存する。胴部下位から口縁部にかけて直線的に外傾する器形を呈する。全面に原体の粗い単節RLが施文されていた。覆土上層からの出土である。No 3は平縁で推定



第67図 第10号住居跡出土遺物実測図(3)

口径32.4cm、口縁部から胴部中位にかけて約1/5程残存する。口縁部はゆるやかに外傾し、頸部にかけて急激にくびれる器形を呈する。地文は単節LRで、口縁部に沿い2条の沈線文が巡り沈線間は磨り消しされる。頸部にも2条の沈線が巡りこの下端の沈線より3条の沈線文が垂下するが、口縁部文様間以外に地文の磨り消しは見られない。外面には炭化物が付着していた。覆土下層からの出土である。No1・2は胎土に長石、No3は石英が多量に混入していた。No1～3は加曾利EⅡ式に相当しよう。

No4は胴部片で地文単節LR、縦位の結節が見られる。結節上は沈線が1条巡り、縦位の短沈線文が連続する。五領ヶ台式に相当しよう。

No5～10は口縁部で、No7以外は平縁となる。No5は幅の広い曲線的な区画文内に縦位短沈線文が充填される。No6・8は地文複節でNo6はRLR、8はLRLとなる。No7は曲線的な区画内に円形刺突文が充填される。No9は口縁に沿って隆帯が巡り下半は斜位の沈線間に縄文が認められるが、原体は不明。No10は地文単節RLで、押し引きされ(結節状)一部波状となる沈線文が2条垂下する。沈線間は磨り消されていない。No5は胎土に石英と雲母、No6・8は長石、No7・9・10は雲母が多量に混入していた。

No11～23は胴部片で、No22は床面直上からの出土である。No11は屈曲部で、屈曲に沿い幅の広い沈線文と

隆帯が巡る。No12は口縁部文様帯直下で地文は単節R L、3条の沈線文が垂下し沈線間は無文となる。No13は地文単節L R、No14は単節R Lでともに沈線間は磨り消されていない。No13は外面に炭化物が付着していた。No15は底部直上片でL撚糸文が施文される。No16～19は地文縄文上に3条一単位の沈線が垂下するもので、いずれも沈線間は無文となる。地文はNo16が0段多条L R、No17・18は複節L R L、No19は単節R Lである。No20は地文L撚糸文で沈線は破片の両側に見えるが条数は不明である。No21・22は2条一単位の沈線が垂下し、No21は地文0段多条R L、No22は同じくL Rで、No22の沈線間は無文となる。No23は地文単節R Lで微隆起線文の両側は、沈線状になでられていた。No20は胎土に長石を多量に混入していた。

No24～27は底部片である。No24は推定底径7.8cm、地文は複節R L Rで垂下沈線と蛇行沈線の一端が認められた。沈線間は磨り消されていない。底面は無文でやや上げ底状を呈し、底部直上と同様に磨かれていた。No25～27はいずれも無文で底面・外面ともに磨かれており、No25・27は若干上げ底気味であった。No27は大きく外傾する器形で浅鉢形と思われる。胎土はNo24は石英・雲母、No26は長石、No27は石英が多量に混入していた。

No1～26は全て深鉢形を呈し、No5～22・24は加曾利EⅢ～Ⅳ式、No23はEⅢ～Ⅳ式に相当しよう。

No28～57は土製品で、No28～54は土器片錘、No55～57は円盤である。土器片錘は27点中23点が完形もしくはほぼ完形品であった（約85%）。挟り部は全て切り目整形で、No39の切り目の1つが90度の位置にある他は全て正対していた（180度）。対となる位置は長軸方向となるものが17点（約73%）と大半を占めた。重量は21g以上（8点）、14g以上（7点）、11g以下（7点）に大別され著しい傾向は認められない。No56の円盤は円形ではなく半円状に研磨されたものである。

石器〔第67図、PL.30〕

本住居跡から出土した石器は全部で5点である。器種別内訳は石鏃の未製品が3点、敲打器が1点、剥片が1点である。No58からNo60は、石鏃未製品である。3点ともにチャートの剥片を素材として、周縁部を中心に整形のための二次加工を施している。この二次加工は、素材剥片のバルブ部分を除去する器厚調整作業が中心である。No61は敲打器である。砂岩を使用した磨製石斧の刃部破損品を転用したもので、折損面を敲打作業部として使用している。また器体の研磨平坦面の一部にも敲打によって生じた凹部が認められる。

第10号住居跡出土土製品観察表

図版番号	種類	長さ×幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	周縁調整	部位	残存	文様	時期	その他
第66図28	土器片錘	4.9 × 4.1	0.9	26.5	全周研磨	胴部	完形	単節RL 幅広の沈線による区画文	加曾利EⅡ	切り目2ヶ所 外面炭化物付着
29	土器片錘	4.7 × 4.1	0.9	27.5	全周研磨	胴部	完形	0段多条RL 幅広の沈線による区画文	加曾利EⅡ	切り目2ヶ所 No30と同一の土器?
30	土器片錘	4.7 × 3.8	1.0	24.3	全周研磨	胴部	完形	地文0段多条RL 沈線磨り消しなし	加曾利EⅡ	切り目2ヶ所
31	土器片錘	2.5 × 2.6	0.9	15.6	一部研磨	胴部	完形	地文0段多条LR 2条の沈線が接する	加曾利EⅡ	切り目2ヶ所
32	土器片錘	4.2 × 2.5	1.1	14.4	打ち欠き	胴部	完形	地文単節RL 沈線文 磨り消しなし	加曾利EⅡ	切り目2ヶ所 石英多量
33	土器片錘	3.6 × 2.5	0.9	10.8	全周研磨	胴部	完形	地文単節RL 沈線文 磨り消しなし	加曾利EⅡ	切り目2ヶ所
34	土器片錘	3.4 × 3.6	1.0	16.8	全周研磨	胴部	完形	地文単節LR 3条の沈線磨り消しなし	加曾利EⅡ	切り目2ヶ所
35	土器片錘	3.8 × 2.5	0.9	11.2	全周研磨	胴部	完形	地文単節LR 3条の沈線磨り消しなし	加曾利EⅡ	切り目2ヶ所 石英多量
36	土器片錘	4.2 × 4.0	1.2	22.9	全周研磨	胴部	完形	地文単節RL 2条の沈線磨り消しなし	加曾利EⅡ	切り目2ヶ所
37	土器片錘	4.7 × 4.7	0.8	21.0	一部研磨	胴部	完形	地文単節LR 2条の沈線沈線間磨り消し	加曾利EⅢ	切り目2ヶ所
38	土器片錘	5.2 × 3.7	1.2	31.1	全周研磨	胴部	完形	条線文	中期後半	切り目2ヶ所
39	土器片錘	(4.3) × 3.4	1.3	(20.6)	残部全周研磨	胴部	一部欠	複節LRL	中期後半	切り目2ヶ所 対でなく90°の方向 雲母多量
40	土器片錘	4.3 × 3.3	1.0	16.0	全周研磨	胴部	完形	単節RL	中期後半	切り目2ヶ所
41	土器片錘	4.0 × 3.6	0.9	16.7	全周研磨	胴部	完形	0段多条RL	中期後半	切り目2ヶ所 雲母多量
42	土器片錘	4.8 × 3.5	1.0	20.9	一部研磨	胴部	完形	附加条 軸不明+Lr	中期後半	切り目2ヶ所 雲母多量
43	土器片錘	4.7 × 4.3	0.9	21.3	一部研磨	胴部	完形	0段多条RL	中期後半	切り目2ヶ所 雲母多量
44	土器片錘	3.4 × 3.0	0.8	(9.5)	全周研磨	胴部	一部欠	単節RL	中期後半	切り目2ヶ所
45	土器片錘	4.4 × 3.3	0.9	17.5	全周研磨	胴部	完形	単節RL	中期後半	切り目2ヶ所 内面炭化物付着
46	土器片錘	(2.8) × 3.4	1.0	(9.9)	残部全周研磨	胴部	半分欠	0段多条LR	中期後半	切り目1ヶ所 長石多量
47	土器片錘	2.5 × 3.0	1.0	8.8	全周研磨	胴部	完形	無節Lr	中期後半	切り目2ヶ所
48	土器片錘	3.6 × 2.6	0.8	10.0	一部研磨	胴部	完形	沈線文	加曾利EⅣ～	切り目2ヶ所 No49と同一の土器?
49	土器片錘	3.5 × 2.8	0.9	10.0	一部研磨	胴部	完形	沈線文	加曾利EⅣ～	切り目2ヶ所
50	土器片錘	(3.8) × 3.8	0.9	(17.4)	一部研磨	口縁部	一部欠	単節RL 幅広の沈線	加曾利EⅣ	切り目1ヶ所
51	土器片錘	4.2 × 3.6	0.8	14.4	全周研磨	口縁部	完形	無文 ヘラなどで	中期後半～	切り目2ヶ所
52	土器片錘	4.1 × 2.5	0.8	9.6	打ち欠き	口縁部	完形	無文 ミガキ	中期後半	切り目2ヶ所
53	土器片錘	2.6 × 2.9	0.7	5.5	打ち欠き	口縁部	完形	無文 ミガキ	不明	切り目2ヶ所 雲母多量
54	土器片錘	(3.2) × 3.6	1.6	(21.2)	残部全周研磨	底部	一部欠	無文 ミガキ	不明	切り目1ヶ所
55	円盤	4.6 × 3.9	0.9	23.9	全周研磨	胴部	完形	単節RL 貼付の痕跡	中期後半	雲母多量
56	円盤	4.9 × 7.0	1.0	44.0	一部研磨	胴部	完形	地文単節RL 3条の沈線沈線間磨り消し	加曾利EⅡ	石英多量
57	円盤	4.0 × 3.3	0.9	17.6	一部研磨	胴部	完形	単節RL	中期後半	多面炭化物付着 雲母多量

2. 土坑 (SK)

土坑は全部で21基を確認した。調査区の北部に集中する傾向にあり、大局的にみて埋没谷に向かう緩傾斜地が選ばれている。性格不明の土坑が大半を占めるが、粘土採掘坑のように特定の用途が推定されたものもある。今回はこれらの「掘り込まれた穴」を一括して土坑に含めることにした。

第1号土坑 (SK-1) [第68図、PL.20]

位置 調査区北西部、E3区 (イGrid) に位置する。立地形は標高26.8mの台地平坦部である。

規模と平面形 長径1.5m、短径1.3mの楕円形を呈する。確認面からの深さは16cmである。

長軸方向 N-23° -E。

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 平坦であるが、東側に長径36cm、深さ20cmのピットが1基掘り込まれていた。

覆土 2層を確認した。下層に褐色土、上層に黒褐色土が堆積し、いずれもしまりのない土層であった。

遺物 底面に縄文土器の小片の出土をみたが、流れ込みによるものと思われた。

所見 時期、性格ともに不明の土坑であるが、黒褐色の覆土の様子から中世以降の時期に掘り込まれたものと思われる。

第2号土坑 (SK-2) [第68・69図No 1～4、PL.20・32]

位置 調査区北西部、E4区 (イGrid) に位置する。立地は標高26.8mの台地平坦部である。

規模と平面形 長辺2.3m、短辺1.6mの台形を呈し、確認面からの深さは14cmである。第3号土坑と重複し、1/3が破壊されていた。

長軸方向 N-84° -E。

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 中央部に8cm程の段差があり、西側がテラス状に高い。東側の中央に直径28cm、深さ30cmのピットが1基掘り込まれていた。

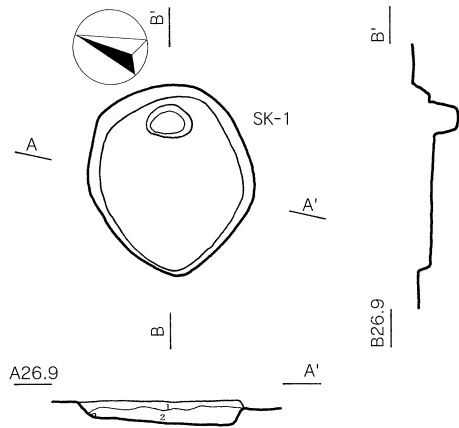
覆土 2層を確認した。ロームブロックを含んだ黒褐色土が主体で、しまりは弱かった。第3号土坑の覆土が当土坑の土層を切っており、明らかに当土坑の方が古い。

遺物 覆土中から縄文土器の小片が出土した他、東側の床面直上から打製石斧が1点出土した。No 1は深鉢形土器の体部片で、単節LR上に平行沈線文が垂下し、この間を縦長の刺突が連続する。外面には炭化物が付着している。No 2・3は鉢形土器の同一個体片である。上半は横位の沈線上に単節LR、下半は無節Rを地文とし沈線文が描かれている。No 1から3はいずれも胎土に長石を多量に含み、堀之内1式に相当するものと思われる。No 4は安山岩を使用した打製石斧である。扁平礫に整形加工を施し、凸状曲刃部と両側縁に顕著な挟り込みが形成された分銅形を呈している。この挟り側縁には敲打による潰し加工が施されている。

所見 出土遺物はいずれも縄文時代のものであるが、土坑形態や黒褐色の覆土の様子は、より新しい時期を想定させるものである。性格は不明とせざるを得ない。

第3号土坑 (SK-3) [第68図、PL.20]

位置 調査区北西部、E4からE5区 (イGrid) に位置し、第2号土坑と重複する。

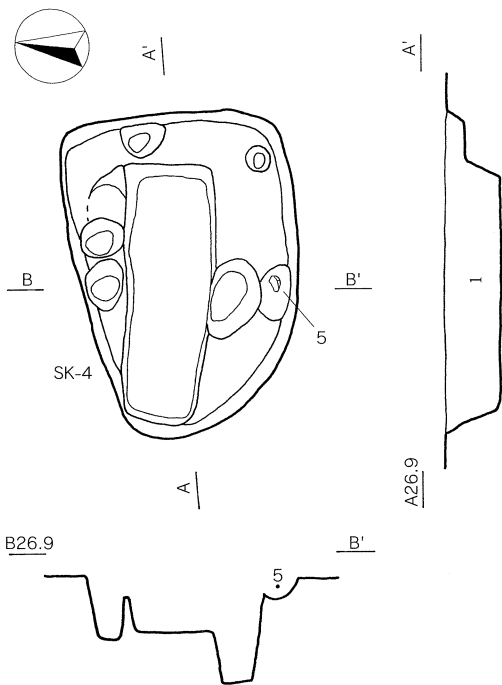
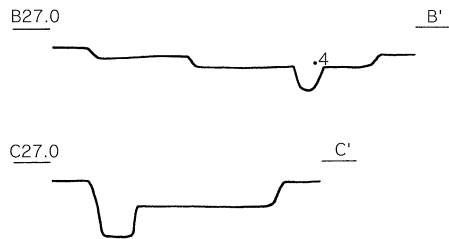
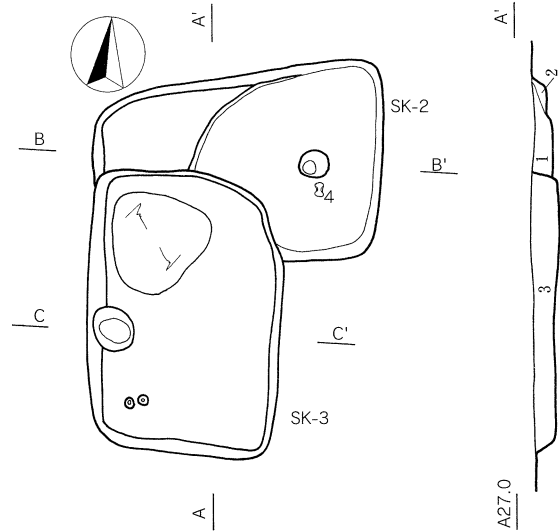


SK-1

1. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性やや強、締まり弱、ローム粒若干
2. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性強、締まり1層より弱、ローム粒・塊多量

SK-2・3

1. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性やや強、締まりやや弱、ローム小塊多、焼土粒のブロック
2. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性弱、締まり強、ローム、第2号土坑壁崩落土
3. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性中、締まり中、サラサラ、ローム小粒微量

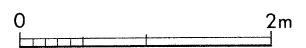
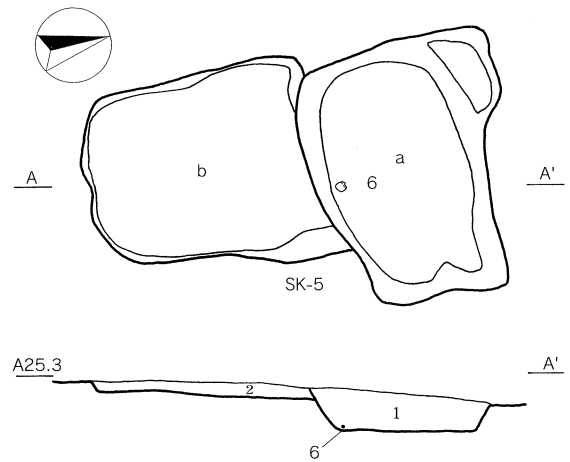


SK-4

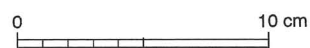
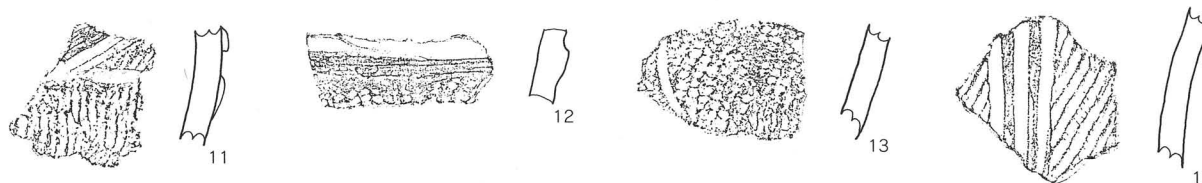
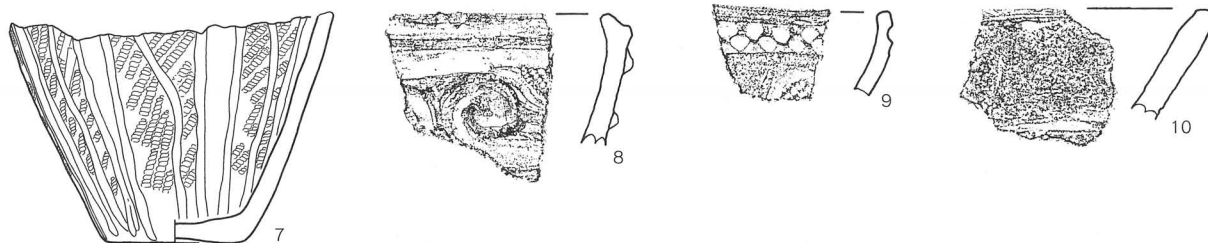
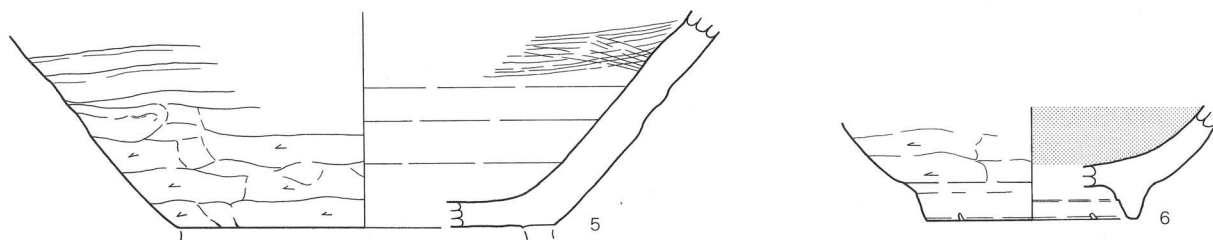
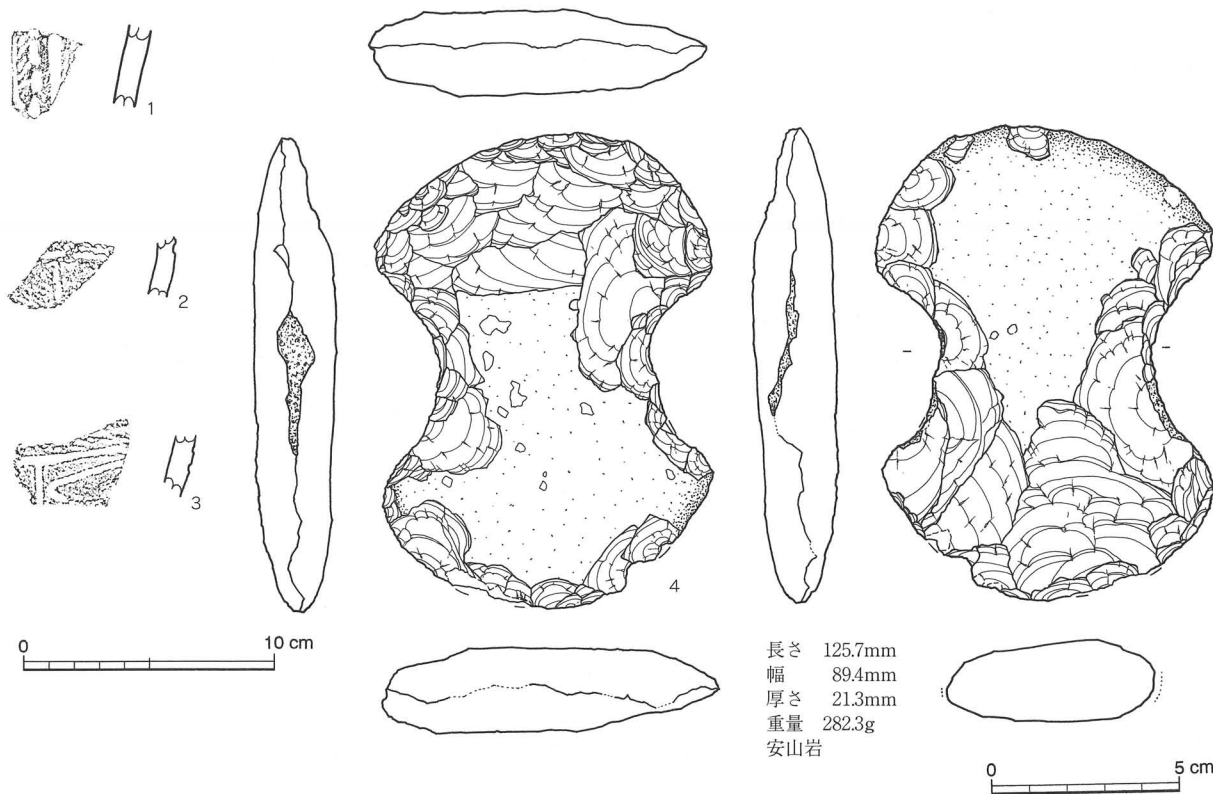
1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性やや強、締まりやや強、ロームの小ブロック、やや黒味の目立つ層

SK-5

1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まり弱、ローム小粒少量
2. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性なし、締まり弱、ローム塊少量



第68図 第1・2・3・4・5号土坑実測図



第69図 第2・4・5・6号土坑出土遺物実測図

規模と平面形 長辺2.2m、短辺1.6mの不整形を呈し、確認面からの深さは22cmである。

長軸方向 N-2° -W。

壁面 外傾しながら立ち上がる。

底面 概ね平坦であった。北側に深さ5cmほどの浅い窪みがあり、また西側の壁に接して直径35cm、深さ25cmのピットが1基掘り込まれていた。

覆土 黒褐色土の単一土層であった。第2号土坑の覆土を切っており、当土坑が新しい。

遺物 微細な縄文土器片が少量出土したが、図示に堪えないものであった。流れ込みによるものであろう。

所見 性格や時期は不明である。覆土の様子は比較的新しい時期を想定させるものであった。

第4号土坑（SK-4）〔第68・69図No5、PL.20・32〕

位置 調査区北西部、F4区（イGrid）に位置する。立地形は標高26.6mの台地平坦部である。

規模と平面形 2段にわたって掘り込まれており、上段は長軸2.58m、短軸1.44mの不整楕円形、下段は長辺2.04m、短辺0.69mの長方形を呈する。深さは上段で15cm、下段は33cmである。

長軸方向 N-86° -E。

壁面 上下段とも壁は僅かに外傾しながら強く立ち上がっていた。

底面 上段は凹凸のあるテラス状で、6基のピットが不定の配置で掘り込まれていた。特に南側のピットは大きく、長径66cm、深さ70cmで、下段の壁を壊すかたちで掘り込まれていた。下段の床面はほぼ平坦であった。

覆土 観察し得る限りでは、上下段に土層の変化がなく、暗褐色土の単一土層であった。

遺物 上段の南側のピットからNo5の鉢底部片が出土した。

所見 No5は、山茶碗窯系（東海南部系）のこね鉢である。割れ口には研磨痕がみられるので、破損後も砥石代わりに利用され続けたようである。中世のものではあるが、さらに時期を絞り込むのは困難であった。土坑の性格も不明とせざるを得ないが、下段の掘り込みは人間一体を埋葬するのに適した規模と形態であり、墓の可能性が想定できる。

第5号土坑（SK-5）〔第68・69図No6、PL.20・32〕

位置 調査区中央部、L5区（ウGrid）に位置する。立地形は標高25.5mの緩傾斜地で、東方の埋没谷の谷頭に面している。なお、当土坑は時期の異なる2基の土坑が切り合ったものだが、当初は1基と認識していたため、一括して第5号土坑と称することにした。

規模と平面形 北側の土坑aは長軸2.1m、短軸1.38m、深さ33cmで、平面形態は不整形である。南側の土坑bは長軸1.74m、短軸1.62m、深さ11cmの不整形である。

長軸方向 土坑aはN-87° -Eの東西軸をもち、土坑bはN-2° -Wの南北軸で、両者の主軸はほぼ直交している。

壁面 土坑aの壁は凹凸が激しく、粗く掘り込んだままの状態であった。北西隅に小さなテラス状の段差が付いていた。土坑bの壁も整えられた様子はなく、場所によっては強く外傾していた。切り合い関係は、土坑aがbを壊しており、aの方が新しく掘り込まれたものである。

底面 土坑aの方がbよりも24cm低く掘り込まれていた。床面は、両土坑とも小さな窪みが多くあり平坦ではないが、一方向に傾斜するような状態ではなかった。

覆土 各土坑とも暗褐色土の単一土層で、しまりは比較的弱いものであった。

遺物 土坑 a の床面近くから鉢の底部片が出土した。断面逆三角形の高台を貼付けたもので、内面には鮮緑色の釉が厚く付着していた。東海南部系の荒肌出の鉢と思われる。

所見 土坑 a から出土した鉢は東海南部系の荒肌出の製品であり、中世前期のものと考えられる。土坑 b は、切り合い関係から、これよりも若干遡る時期のものであろう。両土坑とも性格は不明であるが、平面形態や壁の粗雑さからみて、どちらも計画的に施工されたとは考え難いものである。

第 2・4・5・6 号土坑出土遺物（中世）

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第69図 5	東海南部産 山茶碗窯系 こね鉢	口径 — 底径 [14.8] 器高 (7.6)	底部が平底を呈するこね鉢の底部片。	外面は底部付近に横方向のヘラ削り、体部に強いナデ、底部には高台取付けに伴う回転ナデを施す。内面はヨコナデ及び強いハケ目のついたナデを施す。	長石・石英を多量 外面に濃い赤褐色、 内面灰赤色 良好	割れ口面に研磨痕 覆土一括
第69図 6	東海南部系 こね鉢 または 片口鉢	口径 — 底径 [8.4] 器高 (3.9)	体部が丸味を帯び、高台が付くこね鉢または片口鉢の底部片。	外面は回転ナデ、回転ヘラ削りを施し、底部は回転糸切り後、高台周辺に回転ナデを行なう。粘土が柔らかいという点に刻み目がある。内面に鮮緑色の釉付着。	長石・石英・黒色粒子を少量 外面灰白色、内面オリブ灰色 良好	中世前期 (13~14c前半) 床直

第 6 号土坑 (SK-6) [第70・69図No 7~15、PL.20・21・32]

位置 調査区北東部、M1区 (ウGrid) に位置する。立地形は標高25.3mの傾斜地で、南東方向に埋没谷を臨んでいる。

規模と平面形 平面形態は楕円形で、長軸1.88m、短軸1.58m、深さは0.68mである。南側を第7号土坑に切られており、当土坑の方が先に掘り込まれたものである。

長軸方向 N-50° -W。

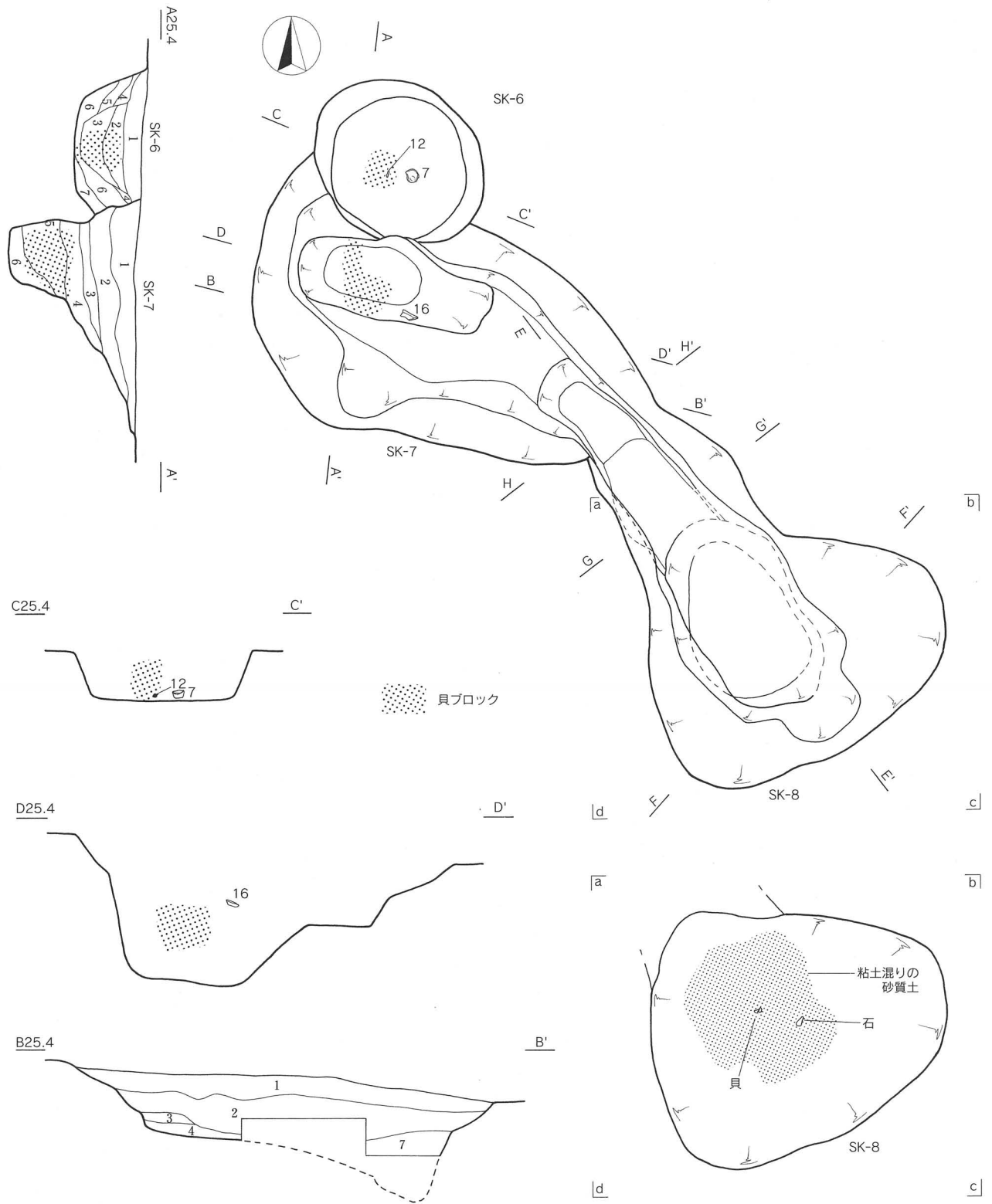
壁面 壁面は凹凸がなく平坦で、僅かに外傾しながら立ち上がっていた。

底面 平坦であった。

覆土 土坑に堆積した土層は基本的には4層であるが、中央部に貝殻を含んだしまりのない土が2層確認された。この貝殻は柱状堆積もしくはブロック状にまとまっており、周囲の層に拡散する様子はみられなかった。よって、貝殻は、袋状のものに入れられて投棄されたのか、あるいは半ば埋没しかけた土坑の中央部を、二次的に掘り込んで投棄されたものと考えられる。周囲の土層は、ローム粒を含む褐色土を基調としており、底の方ほどしまりが強かった。貝殻を含む土層と確認面に近い1層の中には、2~5cm大の自然礫が約700g含まれていた。

遺物 貝殻のブロック中に縄文土器の小片が混入していた。また、土坑の床面からNo 7の深鉢形土器の底部が直立した状態で出土している。なお、貝殻は土ごと塊の状態を取り上げ、整理室に持ち帰って洗浄したが、動物骨のような微小遺存体は検出されなかった。貝殻と礫については、付編に詳細をまとめておいたので参照されたい。

第69図のNo 7~15はいずれも深鉢形土器である。No 7は底部から胴部下位の残存でほぼ同じ高さで割れている。底径5.4cm、底面は無文で良好に研磨され、上げ底状を呈する。地文は0段多条RLで、幅広の垂下沈線文間にゆるやかな波状沈線が交互に描かれ、垂下沈線間は磨り消される。内外面・断面に吸炭の痕跡が認められた。加曽利EⅢ式に相当しよう。No 8~10は口縁部で、No 8は右上がりの波状縁、他は平縁である。No 8は口唇部が段状に凹み、口縁部には渦巻状区画が描かれる。No 8・9ともに区画内は単節RLである。No 10は口縁部が大きく傾く器形である。下端に沈線が巡り、広い無文帯を作り出している。No 11~15は胴部片である。No 11の上半は斜位隆帯文、下半は若干段を有し、単節LRと無節Lrが施文される。No 12は貝ブ

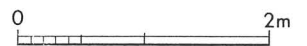


SK-6 A-A'

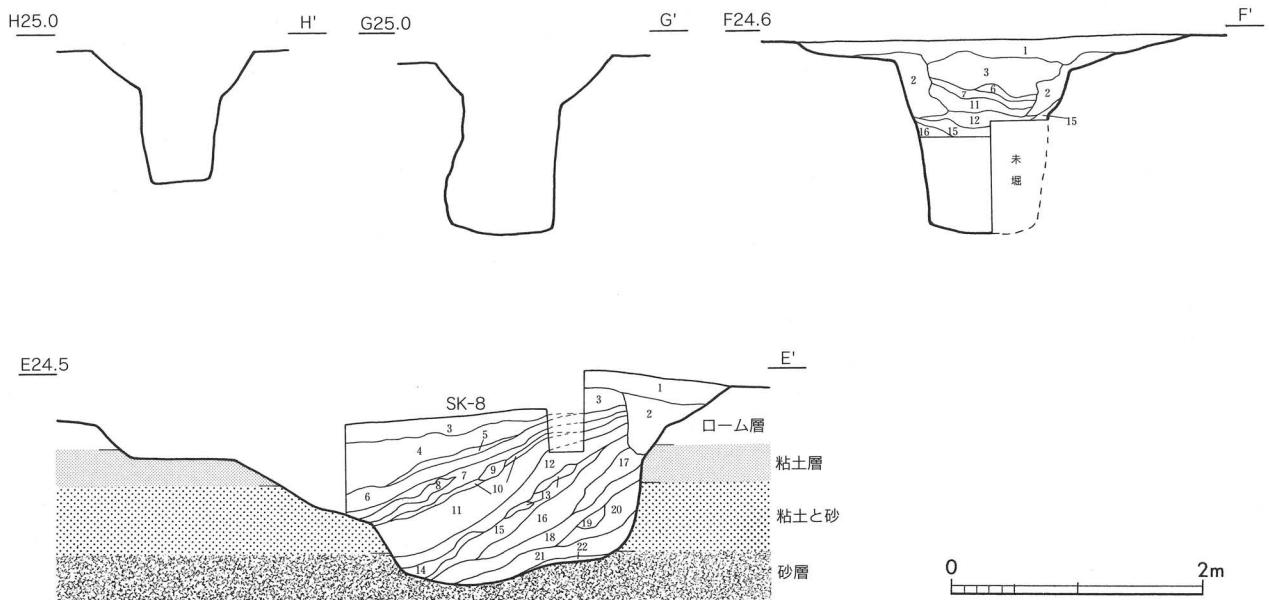
1. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性弱、締まり中、ローム微粒少量
2. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性中、締まり中 (部分的に弱)、ローム微粒中量、貝殻、小礫が混在
3. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性中、締まり弱、2層よりもローム粒が少ない、貝殻、小礫が混在
4. にぶい褐色土 (7.5YR5/4) 粘性弱、締まり中、ローム小粒多量
5. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性中、締まり弱、2・3層よりローム粒少なく暗い色調
6. 褐色土 (7.5YR4/6) 粘性中、締まりやや強、ローム小粒中量
7. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性中、締まりやや強、6層よりも明るくローム主体

SK-7 A-A'及びB-B'

1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性なし、締まり弱、ローム塊を少量、中世の掘り込み
2. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱、締まり中、ローム微粒を微量、中世の掘り込み
3. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 粘性弱、締まり中、ローム小粒少量、小礫が混在
4. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性なし、締まり弱、貝殻、小礫が混在
5. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性弱、締まり弱、ローム小塊を少量、貝殻が混在
6. 褐色土 (7.5YR4/6) 粘性弱、締まり弱、ロームを主体とする
7. 黄褐色土 (10YR5/6) 粘性中、締まり強、ロームを主体とする (SK-8の覆土か)



第70図 第6・7・8号土坑実測図



SK-8 E-E' F-F'

1. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性弱、縮まり弱、ローム小粒を微量
2. 褐色土 (7.5YR4/4) 粘性弱、縮まり弱、ロームを主体とする軟質土
3. にぶい黄褐色土 (10YR5/3) 粘性強、縮まり部分的に強、灰白色粘土と砂粒、褐色土の混合土
4. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性中、縮まり中、灰白色粘土小塊と砂粒の混合土
5. 褐色土 (10YR4/4) 粘性中、縮まり中、4層よりも粘土塊を多く含み、やや暗い色を呈する
6. 灰黄褐色 (10YR4/2) 粘性中、縮まり中、暗褐色土を基調として粘土小塊、ローム塊が混在
7. 褐色土 (10YR4/6) 粘性中、縮まり中、粒塊状になったロームに僅かに暗褐色土が混入
8. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、縮まり弱、ローム塊を中量含む、木根の攪乱土
9. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、縮まり弱、8層と同様で僅かに黒みが強い、攪乱土
10. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性強、縮まり弱、粘土と暗褐色土の混合土、ローム塊を中量
11. 褐色土 (10YR4/6) 粘性中、縮まり中、7層と同じくロームを主体とし僅かに粘土塊が混入
12. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性強、縮まり中、ローム塊を少量、下方部分に粘土小塊が少量混在
13. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性強、縮まり強、黒褐色土を基調とし、粒塊状の粘土が中量流入
14. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性強、縮まり強、13層と同様で、やや粘土の含有量が多い
15. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性中、縮まり弱、ローム小塊、砂粒を中量
16. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強、縮まり中、12層に類似しローム塊を中量
17. 褐色土 (10YR4/4) 粘性弱、縮まり弱、ロームと褐色土の混合土
18. 黒褐色土 (10YR3/1) 粘性中、縮まり中、ローム小粒、ローム塊を中量
19. 灰黄褐色土 (10YR4/2) 粘性弱、縮まり強、ローム塊を中量、ブロック状を呈する
20. 褐色土 (10YR4/4) 粘性中、縮まり強、地山を思わせる純粋なローム土
21. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性強、縮まり強、ローム小粒と砂粒、粘土粒を中量
22. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性弱、縮まり弱、砂粒と粘土塊の混合土

第71図 第7・8号土坑土層断面図

ロック下位より出土したもので、下半は単節RLで右端に曲線的な沈線の一端が見える。No13は地文単節RLで曲線的な沈線が描かれる。地文は磨り消されない。No14・15は地文単節RL上に沈線文が垂下し、沈線間は磨り消される。No15は貝ブロック内からの出土である。No12は胎土に雲母・石英、No13・15は雲母を多量に混入していた。No8～15は加曾利EⅡ～Ⅲ式に相当すると考えられる。

所見 当土坑の時期は、前述の通り、縄文時代中期後半、加曾利EⅡ～Ⅲ式段階と考えられる。土坑の底に直立していた深鉢形土器と、貝殻ブロックに混在していた土器片は同段階のものであり、仮に二次的な掘り込み投棄が行われたとしても、大きな時間差を見込む必要はないようである。当土坑の性格は、いわゆる「地点貝塚」に相当するものと思われる。至近に該期の住居跡は確認されなかったが、調査区の外側、北方の台地上には大規模な集落跡の存在が確認調査で予測されており、この貝殻はおそらくそこからもたらされたものであろう。

第7号土坑 (SK-7) [第70・72図、PL.20・21・32]

位置 調査区北東部、M2区 (ウGrid) に位置し、周囲は標高25m程の傾斜地である。第6号土坑の南側と一部重複し、さらに第8号土坑とも南東部で切り合っている。

規模と平面形 当土坑は時期の異なる二つの掘り込みが重複したもので、上段と下段に分別される。上段の土坑の平面形態は長楕円形で、長軸は4.3m、短軸2.28m、深さはおよそ48cmであったと推定される。下段の土坑は、下方しか残されていないが、長軸1.9m、短軸1.26m、上段の土坑からさらに84cm深く掘り込まれていた。なお、第6号土坑は、当土坑に切られており、少なくとも上段の土坑が最も新しい。第8号土坑との切り合い関係については、当土坑の下段が第8号土坑に先行し、その上から上段の土坑が掘り込まれていた。

長軸方向 上段はN-68°-W。下段はN-72°-W。

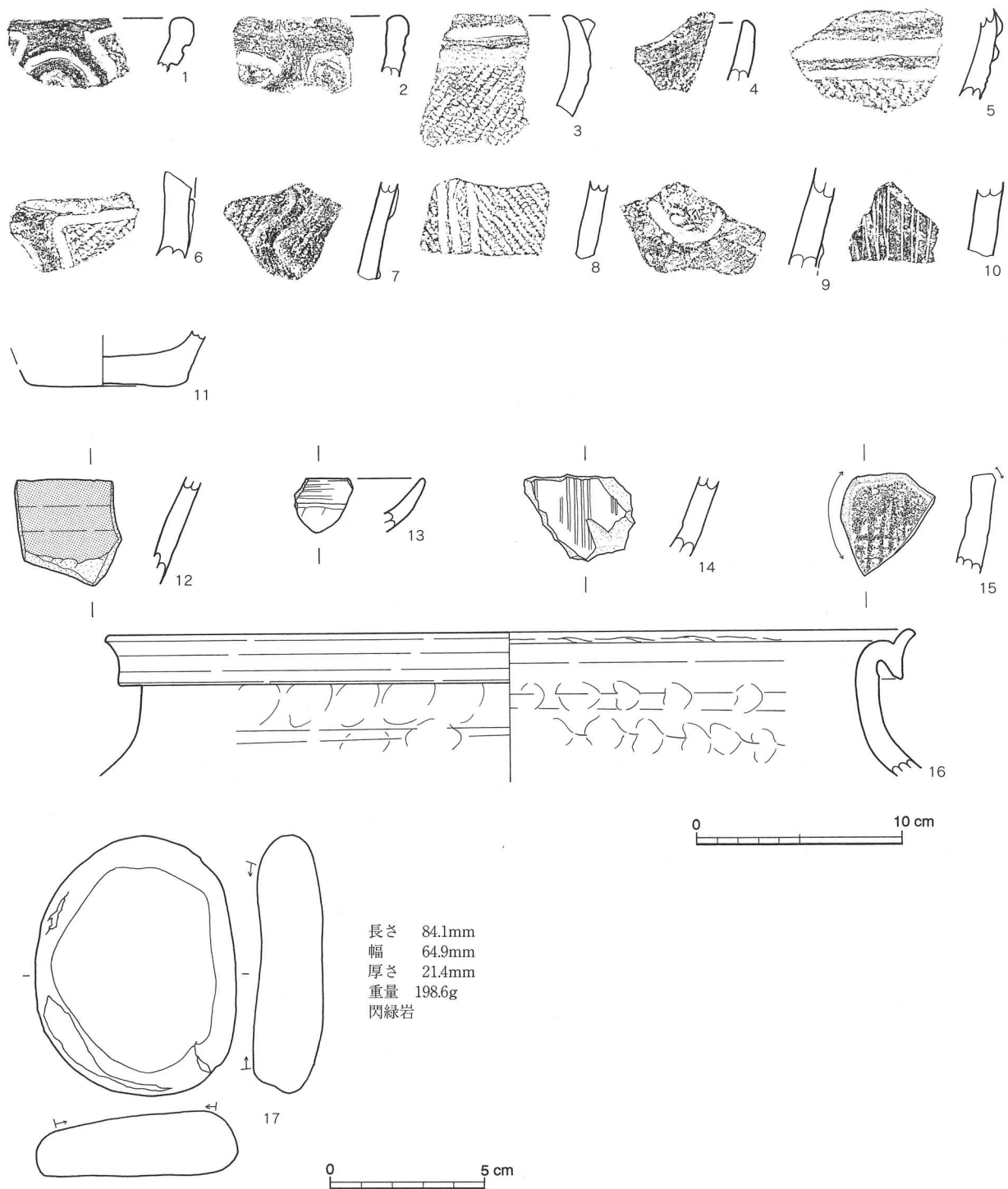
壁面 上段の土坑の壁は、船底状に丸みをもって緩やかに立ち上がっていた。下段の方は垂直もしくは僅かに外傾する程度の強い立ち上がりで、東側の壁だけが比較的緩やかであった。

底面 下段の土坑の底は狭いが平坦で、東側にやや傾斜していた。

覆土 上下段を通して6層を確認した。上段の土坑の覆土は上部の2層で、しまりの弱い暗褐色土であった。下段の覆土は下部の4層で、内2層に貝殻が多量に含まれていた。この貝殻は、第6号土坑と同様に、ブロック状を呈しており、小礫も多く混在していた。いずれの土層もローム粒・塊を含む褐色土で、貝殻が混在するためにしまりのない土になっていた。

遺物 下段の土坑から縄文土器片と貝殻、自然礫が出土し、上段の土坑からは中世陶器が出土している。貝殻のブロックは、第6号土坑の場合と同様に、土ごと持ち帰り洗浄したが、動物骨のような微小遺存体は検出されなかった。貝殻と礫の詳細は付編に記す通りである。

No1～11は縄文土器で、いずれも深鉢形である。No1～4は口縁部で、No1・3は平縁である。No1は口唇部小突起下に渦巻文、その両側は区画文となる。区画内は複節RLRか。No2は浅い沈線による曲線的な区画内に縄文が施文されるが、原体不明。No3は内湾する口縁部に断面三角形の隆帯文が巡る。この上面をなできらずに沈線状としている。下半は0段多条LRである。No4は波状縁に沿わず下方が水平となる幅の狭い無文帯を作り、単節RLが施文される。No1は胎土に雲母、No2は長石、No3は石英を多量に混入していた。No5～10は胴部片、No5・6は隆帯と沈線による区画文で、No6は区画内単節RLである。No5はRLR多条の複節か。No6の上端は欠損しているが、幅の広い貼付下に縄文が残されており、施文順位を知る



第72図 第7号土坑出土遺物実測図

上で良好な資料といえる。No 7は単節RL上に波状隆帯文が垂下する。No 8は地文単節LR、3条の沈線文が垂下し沈線間には縄文が残される。No 9は微隆起線文と沈線による曲線的な区画内に縄文が施文されるが、原体不明。No 10は条線文で内面・断面に炭化物が付着していた。No 5・7・8は石英、No 6は石英・雲母、No 9は長石・石英を胎土に多量に混入していた。No 11は底部で貝ブロック内より出土している。底径7.6cm、外面・底面は無文で良好に研磨される。底面はやや上げ底状を呈する。胎土に石英・雲母を多量に混入していた。No 4は加曾利E IV、他はE II～III式に相当すると考えられる。

No 12～16は中世陶器で、上段の土坑覆土から出土した。器種、法量などは観察表に示す通りである。特記

されるのはNo16の常滑大甕の口縁部で、上段土坑の底と思われる位置から出土した。この大甕は6 b型式、鎌倉時代後期（13世紀後葉）に相当する。他の陶器片は小片のため時期を絞ることはできないが、大甕の時期と大きく齟齬するものではないようである。No17は下段の土坑から出土した閃緑岩製の研磨器で、表面の研磨面は浅い凹面を呈している。土器と同様に縄文時代中期のものであろう。

所見 当土坑の時期は、下段が縄文時代中期後葉、加曽利EⅡ～Ⅲ式を中心とした時期、上段が鎌倉時代後期と考えられた。性格は、土坑に貝殻と小礫が投棄されたいわゆる「地点貝塚」に相当するもので、その直上を中世の土坑が攪乱しているものと判断された。

第7号土坑出土遺物（中世）

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第72図 12	山茶碗窯系 こね鉢	口径 — 底径 — 器高 (4.8)	こね鉢の体部片。	外面に回転ナデを施す。内面は自然釉が付着。	長石少量 外面灰白色、 内面灰白色 良好	中世 上段覆土
第72図 13	土師質土器 皿	口径 — 底径 — 器高 (2.6)	底部が丸底を呈する皿の口縁部片。	口縁部外面及び内面共に回転ナデ、体部下位は未調整。	長石微量 外面明赤褐色、 内面にぶい褐色 良好	中世 上段覆土
第72図 14	土師質土器 播鉢	口径 — 底径 — 器高 (3.9)	播鉢の体部片。	内面に1単位5条の沈線を施す。	長石・石英を少量、雲母多量 内外面にぶい褐色 やや不良	5%残存 15～16 c 上段覆土
第72図 15	常滑 壺甕類	口径 — 底径 — 器高 (4.7)	壺甕類の体部片。壺甕類の小片を砥石に再利用したもの。	表面に小さな格子目の叩き目がつく。内面にごく淡い緑の自然釉付着。	長石微量 外面にぶい橙色、 内面浅黄色。良好	上段覆土
第72図 16	常滑 大甕	口径 [39.2] 底径 — 器高 (6.8)	口縁部が受け口状になり、N字状の縁帯をもつ大甕の口縁部片。	内外面共に回転ナデ及び粘土紐輪積み部は指頭による押さえを施す。外面に黄灰色の自然釉付着。	長石・石英中量 外面暗赤灰色、 内面赤灰色 良好	5%残存 6 b型式 (1275～1300) 上段坑底

第8号土坑（SK-8）〔第70・71図No1～7、PL.21・32〕

位置 調査区北東部、N2・3区（ウ・エGrid）に位置し、周囲は標高24.5mの傾斜地である。第7号土坑の東端と切り合い関係を持ち、第7号土坑の上段が新しい。

規模と平面形 平面形態は凸字形、ないしは先細りの瓢箪形ともいべきもので、南東部に大型の円形土坑、北西方向に細長い溝状の掘り込みが延びている。長軸は推定5m、円形部分の最大幅が3.2m、溝状に狭くなった部分の最大幅が1.3m、最小幅は0.5mである。深さは最も深い南東部で1.62m、最も浅い北西部で1.1mである。人一人がようやく作業できる程の狭い土坑である。

長軸方向 N-37° -W。

壁面 壁は垂直に近い角度で掘り込んであり、場所によってはオーバーハングしている部分もみられた。地表面近くは緩い傾斜で播鉢状に開いていた。

底面 最深部の底面は、ローム層下約90cmの砂層まで達しており、整った底面をなしていなかった。北西方向に延びる溝状の部分では、粘土層を削り取って底面が形成されており、段をもって緩やかに上がっていた。

覆土 黒褐色土と褐色土の層が交互に傾斜堆積していた。傾斜は南東方面の円形土坑内が高く、北西方面の溝状の部分に行くにしたがって低くなっていた。褐色土の中には粘土塊や砂粒が含まれており、自然層位中の粘土や砂があたかも天地返しに遭ったような状態であった。特に円形土坑の上層は、黄褐色の砂質土が盛られたような状態で検出されている。

遺物 出土した遺物は僅かであるが、貝殻と石器の出土は特筆される。貝殻は、円形土坑の覆土上層、黄褐

色砂質土第71図（F-F'の3層）の上面から16枚まとまって発見された。また、そこから35cm程離れた同一レベルの地点でNo7の石器が発見されている。

No1～5は縄文土器の細片で、すべて覆土中より出土した。No1からNo4は深鉢形、No5は土製円盤である。No1・2は口縁部でいずれも平縁である。No1は口縁に沿って幅の広い沈線が巡り、下半は浅い沈線による曲線の区画内に縄文が施文される。複節RLRか。胎土には石英が多量に混入していた。No2は間隔を開けて沈線文が数条垂下する。No3・4は胴部片で、No3は平行に巡る微隆起線下が沈線で区画され、縄文が施文される。原体は不明である。No4は単節LRである。No5の土製円盤は完形で、3.8×4.0cm、厚さ0.8cm、重量13.2gをはかり、単節LRの胴部片を利用し、全周研磨されている。No1・2は加曾利EIV、No3は堀之内1式、No4・5は中期後半期に相当しよう。No6は中世のこね鉢片で、円形土坑の確認面から出土した。流れ込みによるものであろう。No7の石器は、安山岩を使用した研磨・敲打器である。長方形を呈する形状で、表裏両面の研磨面に数条の線条痕が認められる。

所見 当土坑は、特殊な掘り方や覆土の様子からみて、粘土採掘土坑であると思われる。立地の点で台地低部の傾斜地を選んでいるのは、ローム層が薄く、粘土層に容易に到達できるためであろう。粘土層はローム層の直下に広がっているが、さらにその下には粘土塊の混じる砂層があり、次いで純粋な砂層が存在する。当土坑は、最初に深く掘り込みを入れ（南東の円形土坑）、粘土層から純粋な粘土を採掘し、さらに下の粘土混じりの砂層からも粘土を採取したと思われる。この層を掘り抜いて純粋な砂層に到達すると、今度は横方向に転進し、北西方面（台地の高所方面）に向かって粘土層を採掘し続けたのであろう。覆土が不自然な傾斜堆積をしていたのは、採掘に伴う廃土を後方に捨てた結果と考えられる。なお、円形土坑の上部に堆積していた黄褐色砂質土は、採掘の最終段階に出た廃土と思われるが、そこから貝殻と石器が出土したのは、第6・7号土坑との関連を示唆するものと思われる。出土した土器片はいずれも微細なものであるが、貝殻や石器の存在と併せて、当土坑を縄文時代中期後半頃のものとするのが妥当であろう。

第8号土坑出土遺物（中世）

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第73図 6	東海南部産 山茶碗窯系 こね鉢	口径 — 底径 — 器高 (3.1)	こね鉢の体部片。	内外面共にヘラナデを施す。	長石少量、石英微量 外面黄灰色、 内面灰色 良好	中世 覆土上層

第9号土坑（SK-9）〔第74・73図No8～10、PL.21・32〕

位置 調査区北東部、M3区（ウGrid）に位置する。立地形は標高24.8mの傾斜地である。第10・11号土坑と並列しており、当土坑は3基の中で一番北側に位置している。

規模と平面形 平面形態は隅丸の長方形で、短辺にテラス状の段が付く。確認面での規模は、最大長2.46m、最大幅0.98m、底面は長辺1.62m、短辺0.81mをはかる。確認面からの深さは60cmであった。

長軸方向 N-89° - E。

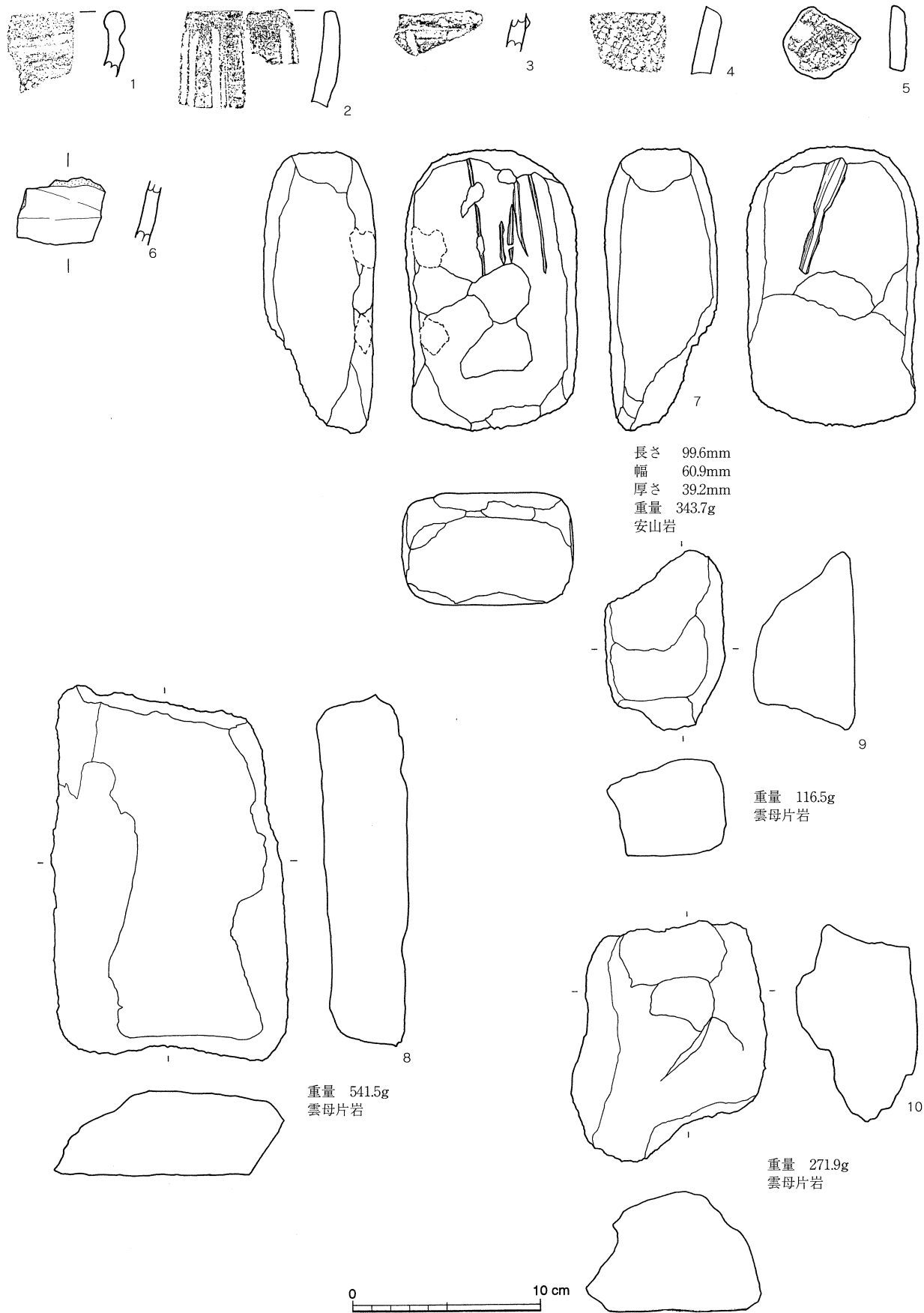
壁面 壁は僅かに外傾しながら強く立ち上がっていた。

底面 平坦で、ほぼ水平に整えられていた。

覆土 黒褐色土の単一層であった。

遺物 覆土の上方から、雲母片岩の破片3点が出土した。人為的な加工痕は観察されないが、搬入された可能性を考え、遺物として扱った。

所見 当土坑は、性格、時期ともに不明とせざるを得ない。いわゆる「イモ穴」の可能性も否定できないが、



第73図 第8・9号土坑出土遺物実測図

覆土の様子は今回の調査で確認された中世遺構のものに類似していた。また、人間一体分を埋葬するのに適した規模である点も気付きである。あくまで一つの可能性として、中世以降の墓を想定することもできよう。

第10号土坑 (SK-10) [第74図、PL.21]

位置 調査区北東部、M4区 (ウGrid) に位置する。立地形は標高24.8mの傾斜地である。第9・11号土坑と並列しており、当土坑は3基の中央に位置している。

規模と平面形 平面形態は隅丸長方形で、長辺の一角に小さなテラス状の段が付く。確認面での規模は、最大長1.95m、最大幅1.03m、底面は長辺1.65m、短辺0.81mをはかる。確認面からの深さは30cmである。

長軸方向 N-89° -E。

壁面 壁は僅かに外傾しながら強く立ち上がっていた。

底面 平坦で、ほぼ水平に整えられていた。

覆土 暗褐色土の単一層であった。

遺物 出土しなかった。

所見 当土坑は、第9号土坑と同様に、性格、時期ともに不明である。3基の土坑が等間隔で並列していることから、あまり時間差なく掘り込まれたことが推測される程度である。

第11号土坑 (SK-11) [第74図、PL.21]

位置 調査区北東部、M4区 (ウGrid) に位置する。立地形は標高24.8mの傾斜地である。第9・10号土坑と並列し、当土坑は3基の内一番南側に位置している。

規模と平面形 平面形態は隅丸長方形で、北側短辺の一角に小さなテラス状の段が付く。確認面での規模は、最大長1.8m、最大幅0.96m、底面は長辺1.32m、短辺0.66mをはかる。確認面からの深さは30cmである。

長軸方向 N-76° -E。

壁面 壁は緩やかに外傾して立ち上がっていた。

底面 平坦で、ほぼ水平に整えられていた。

覆土 暗褐色土と褐色土の2層が、ほぼ水平に堆積する様子が確認された。

遺物 出土しなかった。

所見 当土坑は、第9・10号土坑と同様に、性格、時期ともに不明である。

第12号土坑 (SK-12) [第74図、PL.21]

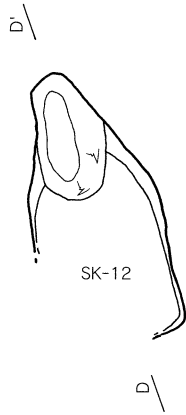
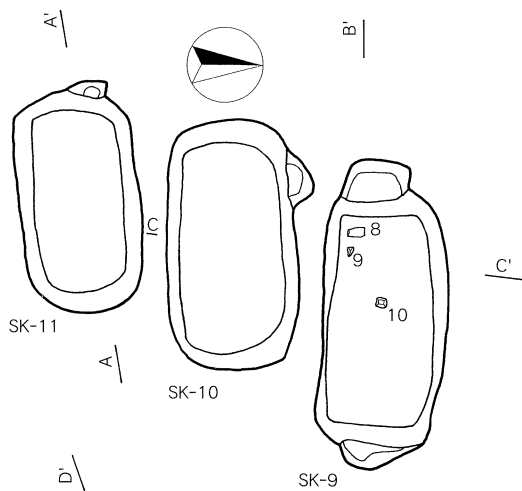
位置 調査区北東部、N4区 (エGrid) に位置する。立地形は標高24.5mの傾斜地である。第9～11号土坑から東に1.2mの距離にあり、埋没谷を間近に臨んでいる。

規模と平面形 土坑の一部は削平を受けているが、本来は長楕円形の平面形態であったと思われる。西側の壁を壊して楕円形のピットが入り込んでおり、調査時点では不整形の土坑と認識していた。ピットを除いた規模は、長辺1.8m、短辺1.1mで、深さは最も残りの良い部分で10cmであった。

長軸方向 N-69° -E。

壁面 壁は緩やかに外傾していた。

底面 ほぼ平坦であった。



SK-11 A-A'

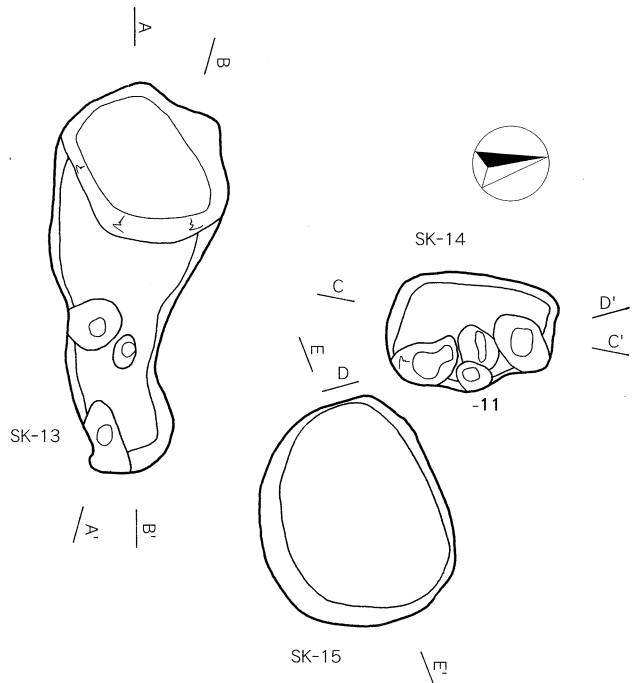
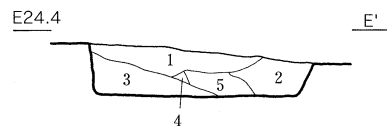
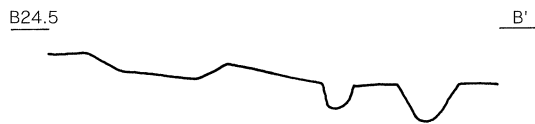
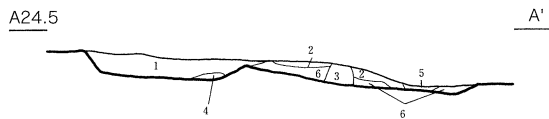
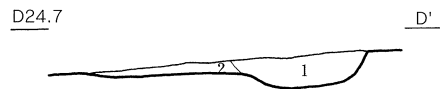
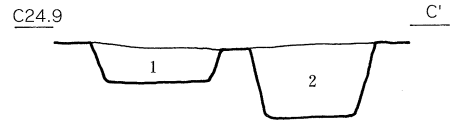
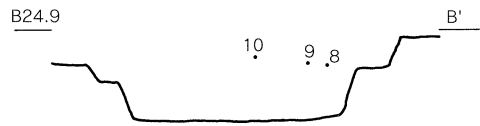
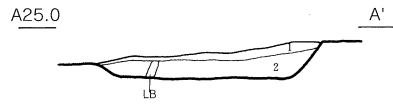
1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まりなし、ローム小粒少量
2. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性中、締まり強、ローム小粒中量

SK-9・10 C-C'

1. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中、締まり中、ローム小粒少量
2. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まり中、ローム小粒中量

SK-12 D-D'

1. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性弱、締まり弱
2. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まり中、ローム小粒少量



SK-13 A-A'

1. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性なし、締まりなし、ローム小粒少量
2. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性ややあり、締まり弱
3. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性ややあり、締まり弱、ローム小粒微量
4. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性なし、締まり弱、ローム小粒少量
5. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性ややあり、締まりなし、φ 5 cm程のローム塊微量
6. 褐色土 (7.5YR4/6) 粘性弱、締まり中、ローム主体の褐色土

SK-14 C-C'

1. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性あり、締まり中、ローム小粒微量

SK-15 E-E'

1. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性ややあり、締まり中、ローム小粒若干
2. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性なし、締まりやや弱、ロームまじりの層
3. 褐色土 (10YR4/4) 粘性中、締まり弱、ローム小粒多量
4. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まり中、ロームを全体的に含む
5. 褐色土 (10YR4/6) 粘性中、締まり中、地山に似るが黒色土小粒を全体に含む



第74図 第9・10・11・12・13・14・15号土坑実測図

覆土 土坑の覆土は暗褐色土が一層確認されたのみであるが、これを切るかたちで黒褐色のピット覆土が入り込んでいた。

遺物 出土しなかった。

所見 当土坑の性格および時期は不明である。

第13号土坑 (SK-13) [第74図、PL.21]

位置 調査区北東部、N4区 (エGrid) に位置する。立地形は標高24.3mの傾斜地である。第12号土坑の東約1mの距離にあり、埋没谷を間近に臨んでいる。

規模と平面形 平面形態は不整の長楕円形で、西側に一段深い掘り込みをもつ。規模は、長軸で3.1m、最大幅1.4m、深さは最深部で18cmであった。

長軸方向 N-72° -W。

壁面 壁は緩やかに外傾していた。

底面 地形の傾斜に合わせて東側に緩く傾斜していた。木の根による攪乱があり、平坦面は僅かであった。

覆土 黒褐色土を基調とし、いずれもしまりは弱かった。

遺物 出土しなかった。

所見 当土坑の性格および時期は不明である。覆土の様子から、比較的新しい時期が予想される程度である。

第14号土坑 (SK-14) [第74図、PL.21]

位置 調査区北東部、O3区 (エGrid) に位置する。立地形は標高24.3mの傾斜地である。第13号土坑とは北に約1.5m、第15号土坑とは北に0.4mの距離にある。

規模と平面形 平面形態は不整の長方形で、長軸1.4m、短軸0.9m、深さは22cmである。

長軸方向 N-3° -E。

壁面 壁は緩やかに外傾していた。

底面 西側部分の底面は平坦であったが、東側は4基の小ピットが不規則に掘り込まれていた。

覆土 黒褐色土の単一土層であった。

遺物 出土しなかった。

所見 当土坑の性格および時期は不明である。第13号土坑と同様に、覆土の様子は比較的新しい時期を予想されるものであった。

第15号土坑 (SK-15) [第74図、PL.21]

位置 調査区北東部、O3区 (エGrid) に位置する。立地形は標高24.2mの傾斜地である。第14号土坑との距離は、南に40cmである。

規模と平面形 平面形態は楕円形で、長軸1.78m、短軸1.5m、深さは40cmである。

長軸方向 N-80° -E。

壁面 壁は僅かに外傾して強く立ち上がっていた。

底面 平坦であった。

覆土 褐色土を基調とする5種の土が確認された。いずれの土もしまりの弱いものであった。

遺物 出土しなかった。

所見 当土坑の性格および時期は不明である。第13・14土坑と同様に、覆土の様子から比較的新しい時期が推測される。

第16号土坑（SK-16）〔第75・76図、PL.22・23〕

位置 調査区北東際、O1区（エGrid）に位置し、北側は調査区の外に延びている。立地形は標高24.5mの傾斜地である。

規模と平面形 調査区内で確認されたのは、東西の最大幅5.22m、南北の奥行き2.7mの半円形である。確認面からの深さは、最深部で66cmであった。

長軸方向 N-88° -E。

壁面 西側（台地高所方面）の壁は垂直に近い角度で立ち上がっていたのに対し、東側（台地低部方面）はなだらかな傾斜となっていた。

底面 掘り込みはローム層下の粘土層に達しており、底面は不整形の凹凸がみられた。

覆土 表土を除いて9層が確認された。褐色土と黒褐色土が互層になって堆積しており、人為性を窺わせるものであった。

遺物 中世陶器片を主として、縄文土器や土師器の小片が出土した。いずれも覆土中に散在する状態で出土している。特筆されるのは、No4の常滑甕の口縁部で、断面形が精細なN字形を描くことから、6b型式相当、13世紀後葉のものと思われる。

所見 当土坑は、他の土坑に比べて規模が大きく、粘土層を故意に掘り込んでいる点に特徴がある。ロームの堆積層が薄い台地低部に立地し、さらに低所から掘り始めた様子があることを勘案すると、第8号土坑と同様に、粘土採掘土坑としての性格が想定できる。ただし、出土した遺物相は当土坑の方が新しいことを示しており、中世の粘土採掘に関わる遺構と考えられる。常滑甕の口縁部から鎌倉時代後期を上限とする遺構と考えておくことにしたい。

第17号土坑（SK-17）〔第75図〕

位置 調査区北東部、P2区（エGrid）に位置する。第16号土坑からの南に約2m、立地形は標高24.2mの傾斜地で、至近に埋没谷を臨んでいる。

規模と平面形 平面形態は不整の隅丸方形で、長軸2.12m、短軸1.2m、深さは22cmである。

長軸方向 N-63° -E。

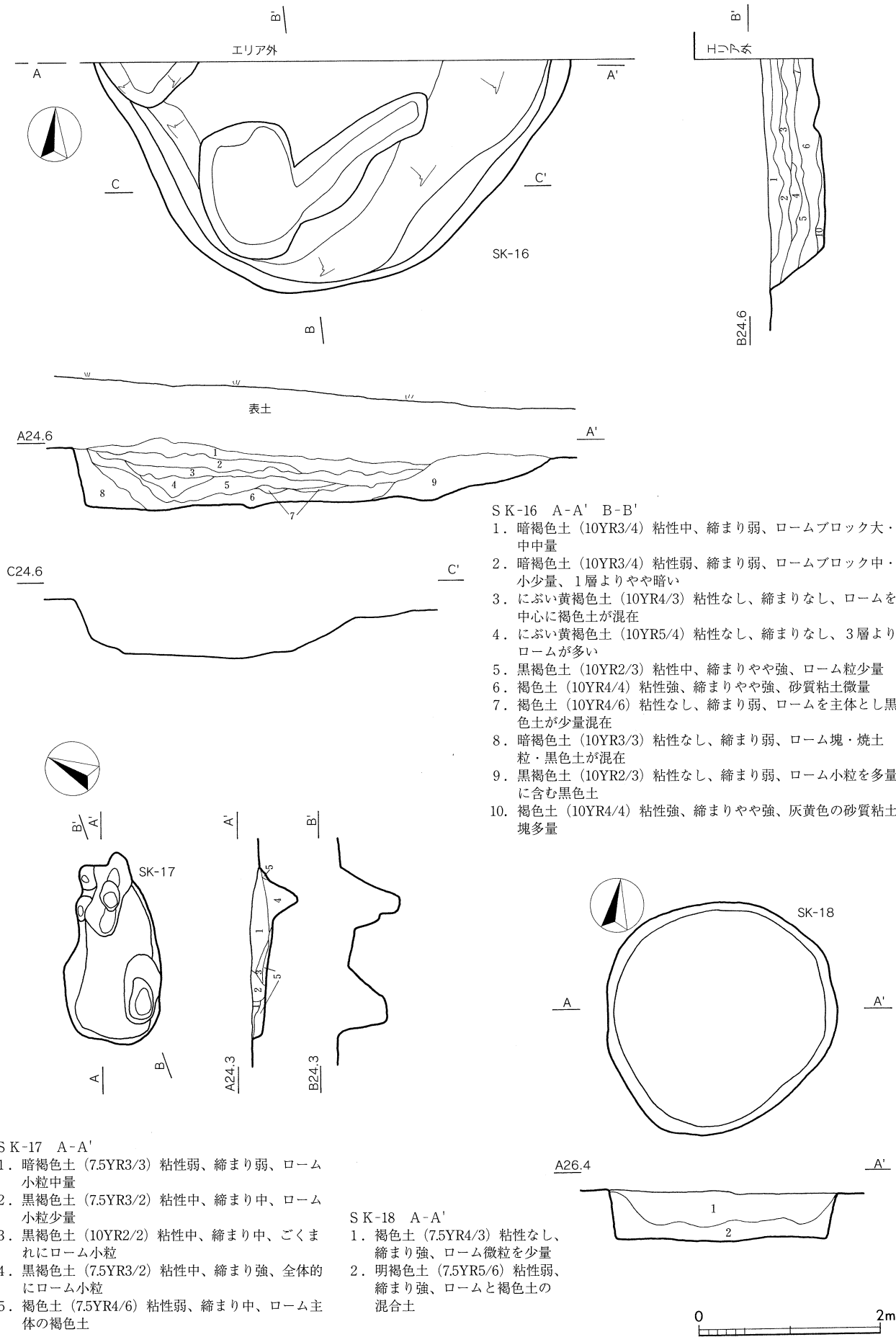
壁面 掘り込みは浅く、壁の傾斜は場所によってまちまちであった。概ね僅かに外傾して立ち上がっていた。

底面 不整形で、地形に対応した緩い傾斜をなしていた。壁際に不整形のピットが2基掘り込まれていた。

覆土 黒褐色ないし暗褐色の土層が4層確認された。

遺物 出土しなかった。

所見 当土坑の性格および時期は不明である。覆土の様子は比較的新しい時期を推測させるものであった。



SK-16 A-A' B-B'

1. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性中、締まり弱、ロームブロック大・中中量
2. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、締まり弱、ロームブロック中・小少量、1層よりやや暗い
3. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性なし、締まりなし、ロームを中心に褐色土が混在
4. にぶい黄褐色土 (10YR5/4) 粘性なし、締まりなし、3層よりロームが多い
5. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性中、締まりやや強、ローム粒少量
6. 褐色土 (10YR4/4) 粘性強、締まりやや強、砂質粘土微量
7. 褐色土 (10YR4/6) 粘性なし、締まり弱、ロームを主体とし黒色土が少量混在
8. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性なし、締まり弱、ローム塊・焼土粒・黒色土が混在
9. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性なし、締まり弱、ローム小粒を多量に含む黒色土
10. 褐色土 (10YR4/4) 粘性強、締まりやや強、灰黄色の砂質粘土塊多量

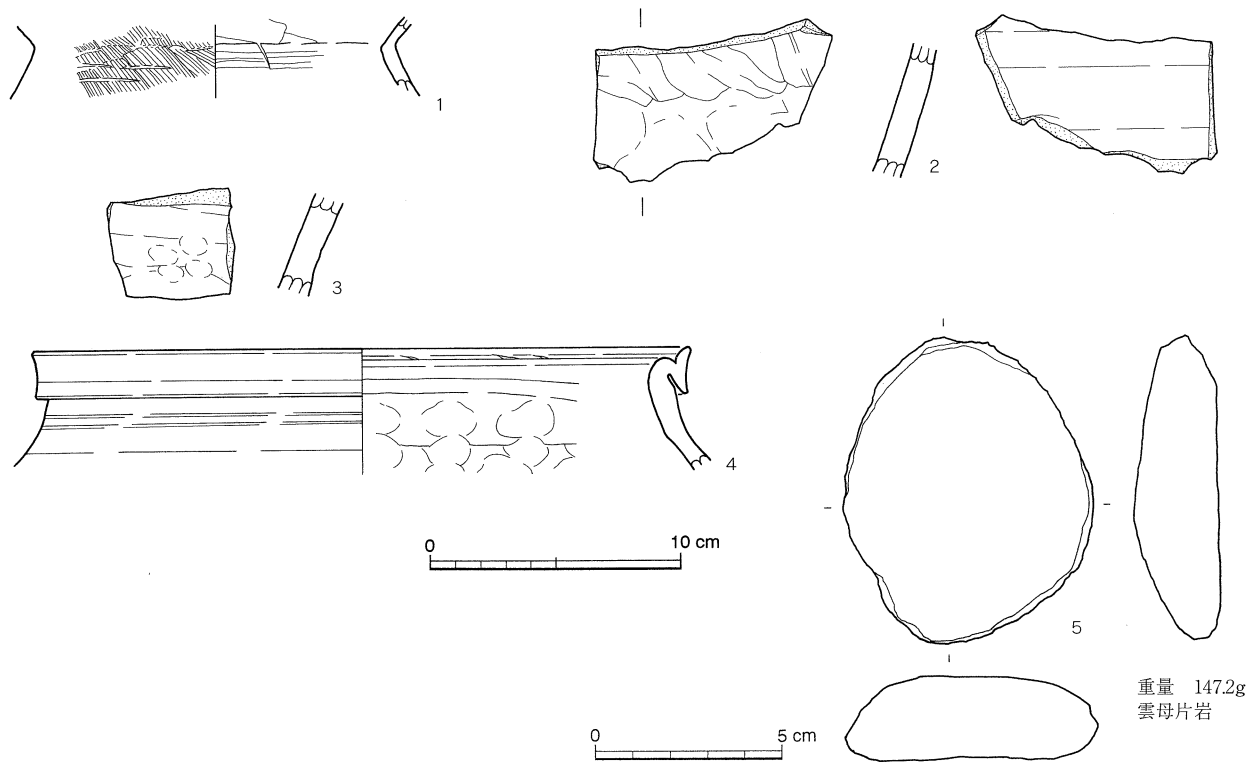
SK-17 A-A'

1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まり弱、ローム小粒中量
2. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中、締まり中、ローム小粒少量
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性中、締まり中、ごくまれにローム小粒
4. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中、締まり強、全体的にローム小粒
5. 褐色土 (7.5YR4/6) 粘性弱、締まり中、ローム主体の褐色土

SK-18 A-A'

1. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性なし、締まり強、ローム微粒を少量
2. 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘性弱、締まり強、ロームと褐色土の混合土

第75図 第16・17・18号土坑実測図



第76図 第16号土坑出土遺物実測図

第16号土坑実測図（中世）

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第76図 1	土師器 甕	口径 — 底径 — 器高 (2.9)	粗ハケ調整甕。くの字状に屈曲し、口縁がハの字状に大きく開く甕の頸部片。	外面は斜方向のハケ調整後、ヨコナデを施す。内面はヨコナデを施す。	長石・石英を中量、雲母微量外面橙色、内面橙色良好	古墳時代前期5%残存覆土一括
第76図 2	常滑 壺甕類	口径 — 底径 — 器高 (5.1)	壺甕類の体部片。	外面は強いヘラナデと方向不定のヘラナデ、内面は回転ナデを施す。	長石・石英を中量外面にぶい褐色、内面黄灰色良好	中世覆土上層一括
第76図 3	常滑 壺甕類	口径 — 底径 — 器高 (3.7)	壺甕類の体部片。	外面はヨコナデ後、指頭による押圧を加える。	長石・石英中量外面にぶい赤褐色、内面にぶい赤褐色良好	中世断面は黒色を呈する覆土上層一括
第76図 4	常滑 大甕	口径 [26.0] 底径 — 器高 (4.5)	口縁部が受け口状になり、N字状の縁帯をもつ大甕の口縁部片。	外面及び口唇部内面に回転ナデ、体部内面には指頭による圧痕が残る。	長石・石英を少量外面赤灰色、内面灰赤色良好	10% 6b型式期相当(1275~1300)覆土一括

第18号土坑（SK-18）〔第75図、PL.22〕

位置 調査区中央部、I6からJ6区にかけての位置（クGrid）にあり、標高26.3mの緩傾斜地に立地する。確認調査の13bトレンチの中央部にかかり、本調査以前からこの土坑の存在は確認されていた。

規模と平面形 平面形態はほぼ正円形に近く、長径2.64m、短径2.5m、深さは54cmである。

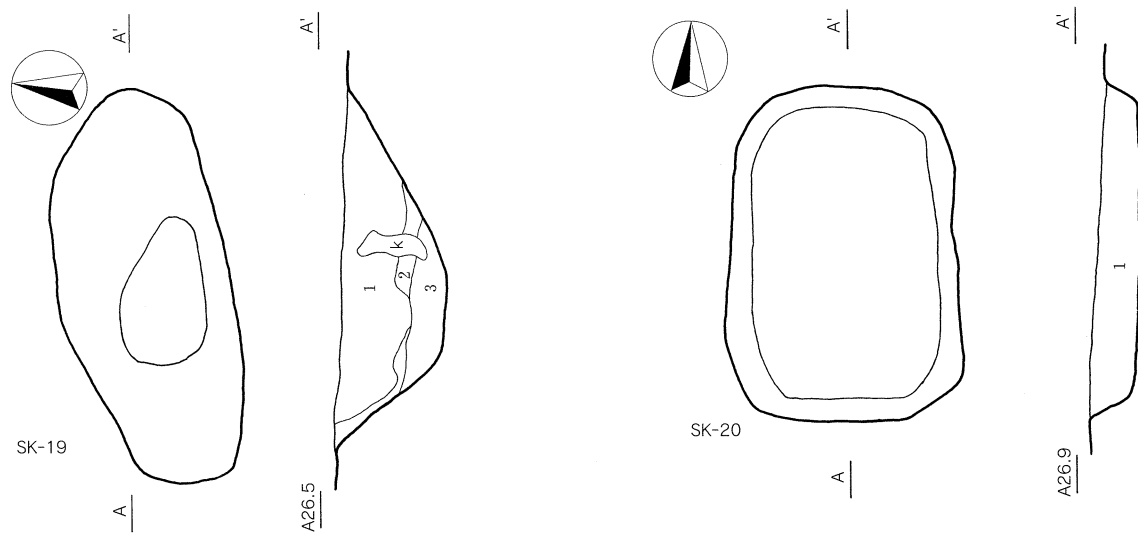
長軸方向 不明。

壁面 垂直に近い強い角度で立ち上がっていた。

底面 整った円形を呈し、ほぼ平坦に作られていた。

覆土 2層確認された。いずれもよくしまった土で、ローム地山と区別がつけ難い褐色土であった。

遺物 出土しなかった。

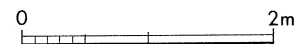
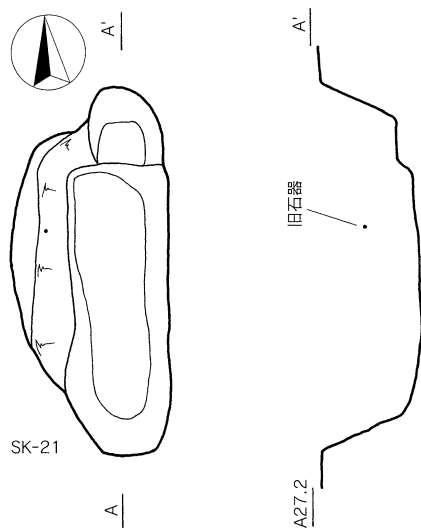


SK-19

1. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱、締まり強、ローム小粒少量
2. 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘性なし、締まり強、ローム基調の褐色土、ロームブロック
3. 明褐色土 (7.5YR5/8) 粘性弱、締まり強、地山に近似した褐色土、ロームより暗い

SK-20

1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まり弱、φ 2 cm大のロームブロック多量



第77図 第19・20・21号土坑実測図

所見 当土坑の性格および時期は不明である。しまりの強い褐色の覆土は、当台地では縄文時代の遺構に固有のものである。埋没谷に面した土坑群の覆土（しまりのない黒褐色土）とは明らかに異なっており、比較的古い時期に掘り込まれた可能性は高いと言えよう。

第19号土坑 (SK-19) [第77図、PL.22]

位置 調査区中央部、J8区 (ク Grid) に位置する。立地形は標高26.3mの緩斜地である。

規模と平面形 平面形態は長楕円形で、長軸3.2m、短軸1.4m、深さは82cmである。

長軸方向 N-73° - E。

壁面 深めのすり鉢状を呈し、壁は緩い角度で外傾していた。

底面 開口部に対して底面は狭く作られていた。平坦部は長軸1.2m程の不整円形を呈していた。

覆土 3層を確認した。上層は暗褐色土、下層は地山に近い褐色土で、いずれもしまりは強かった。

遺物 出土しなかった。

所見 当土坑の性格および時期は不明である。第18号土坑と同様に、覆土の様子は比較的古い時期を推測させるが、確かなことは判らない。

第20号土坑（SK-20）〔第77図、PL.22〕

位置 調査区中央部、H9区（キGrid）に位置する。立地形は標高26.7mの台地平坦部である。

規模と平面形 平面形態は隅丸方形で、長軸2.7m、短軸1.8m、深さは36cmである。

長軸方向 N-5°-E。

壁面 僅かに外傾して立ち上がっていた。

底面 平坦であった。

覆土 暗褐色土の単一土層で、しまりは弱かった。

遺物 出土しなかった。

所見 当土坑の性格および時期は不明である。覆土の様子から、比較的新しい時期が推測される程度である。

第21号土坑（SK-21）〔第77図、PL.22〕

位置 調査区南西部、E19グリッド（チGrid）に位置する。立地形は標高27mの台地平坦部である。当土坑は、覆土が軟質で明らかに新しい掘り込みと判断された。本来ならば報告対象外に留めるところであるが、覆土除去中に旧石器が発見されたため、遺構番号を与えて報告することにした。

規模と平面形 平面形態は不整の長楕円形で、長軸2.9m、短軸1.3m、深さは78cmである。北側にステップ状の掘り込みが付けられていた。

長軸方向 N-4°-E。

壁面 強い角度で立ち上がっていた。

底面 ほぼ平坦であった。

覆土 暗褐色土の単一土層で、ローム塊が多量に含まれ、しまりは弱かった。

遺物 石器以外に出土遺物はなかった。石器はナイフ形石器で、西側の壁面中央部、確認面から約35cm下、標高値で26.78mの位置から発見された（第93図No.143、「8. 遺構外出土遺物」の項目参照）。石器はローム地山の壁面から顔を出すような状態で出土したが、覆土除去作業に伴い作業員に引き抜かれてしまった。石器の型をとったような小穴がローム中に遺存していたため、原位置を記録することができた。なお、これ以外に旧石器が存在するか確認するため、当土坑の西脇と第6号溝を挟んで北側の2地点に2×2mのテスト・ピットを設定した（TP-3、TP-2）。確認面から約50cm、ナイフ形石器の出土レベルよりもさらに下まで掘り下げたが、他に石器は検出されなかった。

所見 当土坑は覆土の様子から近代以降に掘り込まれた「イモ穴」であると思われる。土坑自体の歴史資料的な価値は少ないが、幸い旧石器の存在を示すテスト・ピット的な役割を果たしてくれた。石器が出土した標高値26.78mは、基本層序に照らすと、硬質ローム層の直上の軟質ロームに含まれるレベルである。およそ、2万7千年前のものと考えられる。なお、石器が出土した地点のローム層中に、炭化物などは確認されなかった。

3. 溝 (SD)

溝は8条を確認した。すべての溝が南北もしくは東西の方位に準じた規則性をもっており、斜め方向に走るものやL字に屈曲するような溝は少なくとも当調査区内には認められなかった。深さが僅か20cm程の浅いものから1mを超える葉研掘りの溝まで多様で、時期や性格も一様ではない。

第1号溝 (SD-1) [第78図、PL.23]

位置 調査区北縁の中央部、J1からJ3区 (ウGrid) にかけて南北方向に延びている。周囲は標高26mの緩斜面地で、第2、3号溝と並行している。

規模 調査区北縁からの長さは7.8m、最大幅が92cm、最小幅44cm、深さは18cmである。

断面形 底面はほぼ平坦で、地形に合わせて傾斜していた。

主軸方向 N-10°-W。ほぼ南北方向に延びており、南方に延長すると第4号溝につながる。

覆土 暗褐色土の単一土層で、しまりは弱かった。

遺物 出土しなかった。

所見 覆土の様子からみて比較的新しい時期の溝と推測される。第4号溝につなげて考えると、台地平坦部と傾斜地を区画するように南北に延びており、周辺地形を意識していることがわかる。土地利用に関わるものとするれば、地境溝の可能性が高いと思われる。

第2号溝 (SD-2) [第78図、PL.23]

位置 調査区北縁の中央部、K1からK5区 (ウGrid) にかけて南北方向に延びている。周囲は標高25.5mの緩斜面地で、第1、3号溝と並行している。

規模 調査区北縁からの長さは16m、最大幅は124cm、最小幅100cm、深さは20cmである。

断面形 底面は平坦ないし皿状を呈していた。溝の中央付近は木の根による大きな攪乱を受けており、その前後の溝底面は凹凸が激しく、壁面も乱れていた。

主軸方向 N-5°-W。ほぼ南北方向に延びている。

覆土 暗褐色土の単一土層で、しまりは弱かった。

遺物 微細な縄文土器片が僅かに出土した。

所見 第1号溝と同様、覆土の様子は比較的新しい時期を想定させるものであった。第1・4号溝との並行関係から推して、地境の再設定に伴って掘り込まれた溝ではないかと思われる。

第3号溝 (SD-3) [第78図、PL.23]

位置 調査区北縁の中央部、K1・2区 (ウGrid) に位置し、第2号溝の東脇に並行するかたちで南北に延びている。

規模 調査区北縁からの長さは4.2m、最大幅は80cm、最小幅52cm、深さは6cmである。

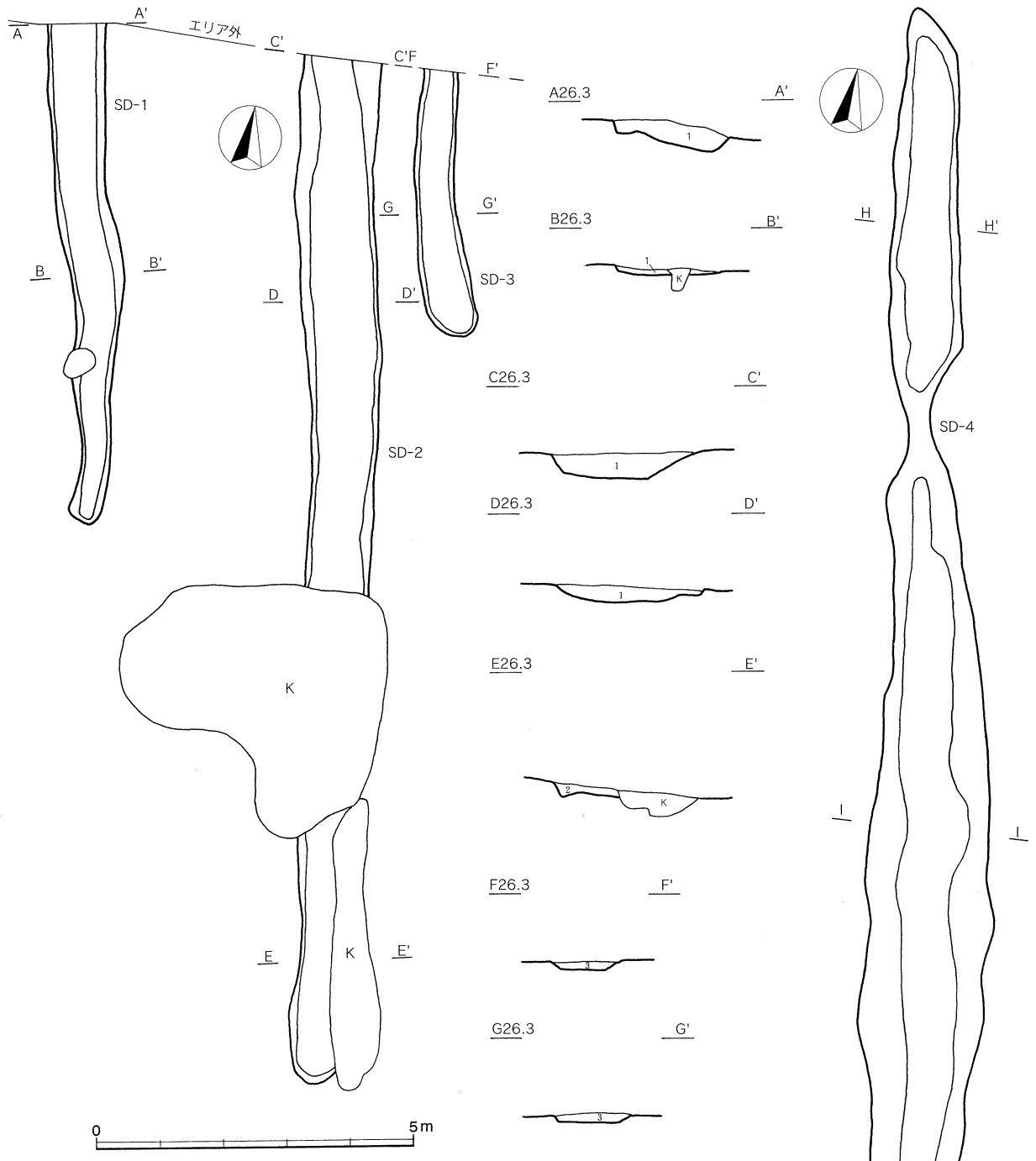
断面形 ごく浅く、底面は平坦であった。

主軸方向 N-6°-W。ほぼ南北方向に延びている。

覆土 暗褐色土の単一土層で、しまりは弱かった。

遺物 出土しなかった。

所見 第1・2号溝と同様に、新しい時期に掘り込まれた地境溝の一種と思われる。



SD-1~3

A-A'~G-G'

1. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱、締まり弱、ローム粒・塊中量
2. 褐色土 (7.5YR4/3) 粘性弱、締まり弱、ローム粒・塊多量
3. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性中、締まり弱、ローム粒中量

SD-4

H-H'~I-I'

1. 暗褐色土 (7.5YR3/4) 粘性弱、締まり弱、ローム小粒・塊中量
2. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まり弱・ローム塊少量

H26.5

I26.5



第78図 第1・2・3・4号溝実測図

第4号溝 (SD-4) [第78図、PL.23]

位置 調査区中央部、K7からK12区 (ク・スGrid) にわたって南北方向に延びている。周囲は標高26.3mの平坦地で、当溝を境にして東側が次第に低くなり埋没谷に至っている。

規模 調査区内での長さは21.7m、埋没谷の谷頭に面する地点で溝の北端が終わっている。幅や深さは地点によって異なり、掘り方も粗い。最大幅は溝の中央部で196cm、最小幅は北寄りの地点で40cm、深さは最深部で20cmである。

断面形 底面は平坦ないし皿状を呈し、壁は底面からなだらかに立ち上がっていた。

主軸方向 N-9°-W。ほぼ南北方向に延びている。

覆土 暗褐色土の単一土層で、しまりは弱かった。

遺物 縄文土器と古墳時代の土器片が僅かに出土したが、図示に耐えないものであった。

所見 覆土の様相は新しい時期を思わせるものであった。第1号溝との関連から地境溝の一種と思われる。

第5号溝 (SD-5) [第79図、PL.23]

位置 調査区東部、O12からR12区 (セGrid) にわたって東西方向に延びている。当溝を西方に延長すると第8号溝につながる。周囲は標高26mの平坦地で、当溝を境にして北側が次第に低くなっている。溝の東端は現代の攪乱坑に破壊され、さらに北辺は掘り込みが浅かったために確認面では壁が検出できなかった。

規模 現状で長さ11.6m、幅は約1.3m、深さは22cmであった。

断面形 底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっていた。

主軸方向 N-88°-E。ほぼ東西方向に軸を合わせて延びている。

覆土 暗褐色土の単一土層で、しまりは弱かった。

遺物 出土しなかった。

所見 覆土の様相からみて、比較的新しい時期に掘り込まれた溝であると思われる。当調査区の中央部に残された方形の未調査エリアは個人所有の畑地であり、当溝はこの境界線に近接・並走している。かつての地境に関連するものと考えられよう。

第6号溝 (SD-6) [第81～83図、PL.22・23]

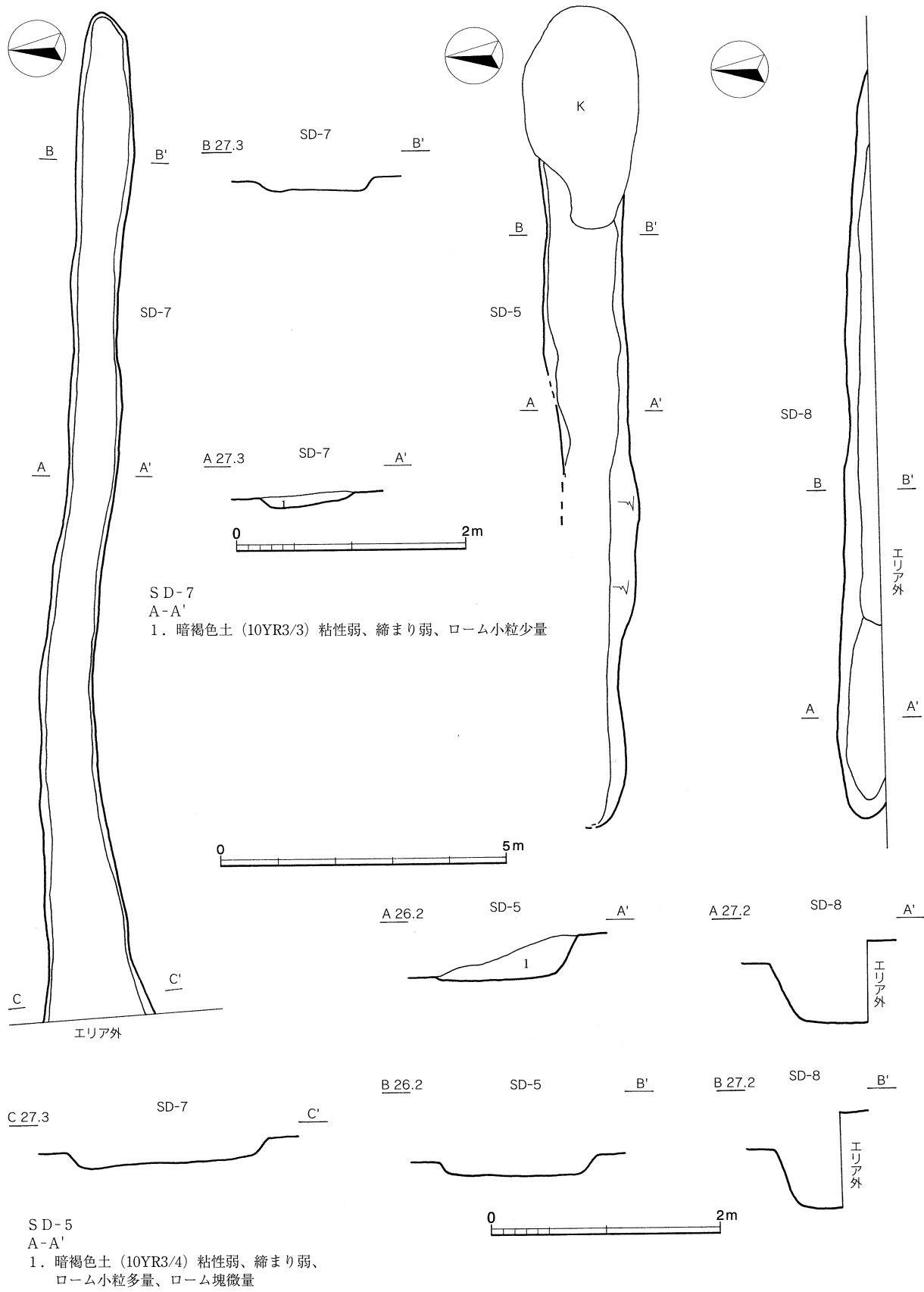
位置 調査区南部、C18からR17区 (タ～テGrid) にわたり調査区を横断して東西方向に延びている。当溝の西端は、平成9年度の第1次調査区内でL字に曲がるコーナーが確認されている。そこから道路を挟んで東進し、今回の調査区内の第9号住居跡を分断、未調査区を通り抜けて調査区東部に現れ、さらに区外の東方へと広がっている。周囲は標高27mの平坦地で、当溝の南側に中世ピット群が広がっている。

規模 一部未調査区を跨ぐが、今回の調査で把握された全長は60.0m、第1次調査区のコーナーから測ると総長73mとなる。溝の幅と深さは当調査区の西縁 (A-A') が最大で、確認面で2.56m、底面で0.18m、深さは1.2mである。一方、調査区東縁 (F-F') では、確認面の幅が1.46m、底面0.42m、深さ0.66mであった。

断面形 断面がV字を呈したいわゆる薬研堀である。底面は片足の幅ほどに狭く、溝底を歩くのは足を前後に交差させねばならない状態であった。西方は底面が比較的狭く、東に行くに従って広がっていた。壁はほぼ直線的で、およそ50°の傾斜をもって開いていた。

主軸方向 N-87°-E。東側が僅かに北に振れているが、ほぼ東西方向に軸を合わせている。

覆土 全部で5箇所の土層観察を行なったが、すべての断面で上層に黒褐色土、下層に褐色土が堆積してい



第79図 第5・7・8号溝実測図

る様子が確認された。いずれも溝の両脇から流れ込んだ自然堆積土とみられ、土塁を伴う溝に顕著な一方向からの土砂流入は一切確認されなかった。土のしまりは概して下層の褐色土の方が強く、上層の黒褐色土は軟質であった。

遺物 溝の中位、黒褐色土中から「開元通寶」1枚の他、中世の陶器片や古墳時代の土師器片、奈良時代の須恵器片などが少量出土した。古銭を含め、遺物は溝の西側部分（D18～F18区）に偏って出土している。なお、「開元通寶」は621年初鑄の唐銭である。日本の中世出土銭貨の中では比較的多くみられる銭種で、当溝の埋没年代を絞る資料とはなり得なかった。

所見 第1次調査と今回の3次調査を通して、当溝は少なくとも東西70m以上にわたって延びる大型の区画溝であることが明らかとなった。南方にも同程度の規模で広がり、最終的には方形に巡ることが予想される。薬研堀であることや、南側（溝の内側）に中世ピット群が存在すること、さらに微細ながら中世陶器片や古銭が出土したことなどを勘案すると、この溝が中世の居館跡を囲う区画溝であった可能性はきわめて高い。未調査の部分が多くあくまで推測に留まるが、台地の平坦部の広さからみて、方一町程度の規模はもっていたと思われる。今回の調査区内では、土橋や橋脚の痕跡は確認されず、また塀の跡なども認めることはできなかった。館の中心部を南方の拡張区付近に想定するならば、当調査区で検出された溝は北西隅の「裏手」に相当し、橋がない以上この地点の往来は頻繁でなかったことが予想される。遺物の出土量が少なかったことは、これを示唆するものと思われる。溝の掘削時期は、遺物から絞り込むことはできなかったが、渥美の壺甕類の破片からおおよそ中世前期と考えておきたい。

第7号溝（SD-7） [第78・79図、PL.33]

位置 調査区南部、019からG20区（タ・チGrid）にわたって東西方向に延びている。第6号溝とは南へ約5m離れて並行しており、中世ピット群の中を横切っている。周囲は標高27mの平坦地である。

規模 調査区西縁からの長さは17.5m、最大幅は1.96m、最小幅0.84m、深さは10cmであった。

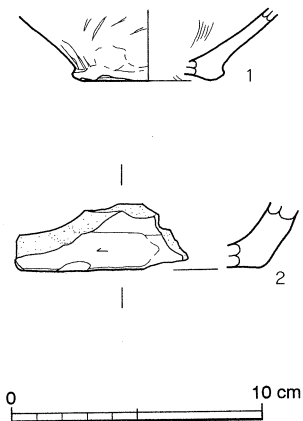
断面形 底面はほぼ平坦で、壁は緩やかに立ち上がっていた。

主軸方向 N-86°-W。ほぼ東西方向に軸を合わせて延びている。

覆土 暗褐色土の単一土層で、しまりは弱かった。

遺物 古墳時代の土師器甕片と中・近世の火舎と思われるの底部片が各1点出土した。

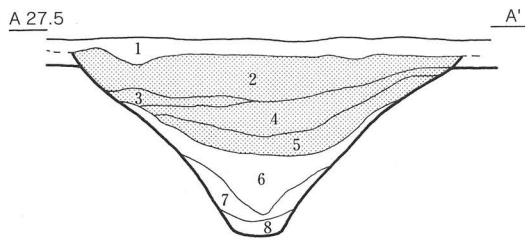
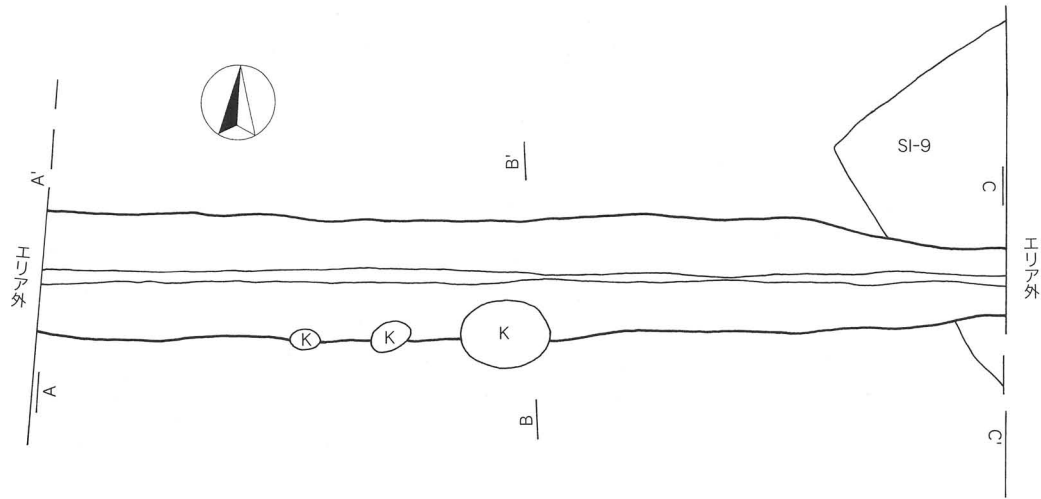
所見 覆土の様子は比較的新しい時期の掘削を予想させる。中・近世の火舎片は当溝の年代の上限を示すものであろう。性格は不明であるが、地境溝の可能性が高いと思われる。



第80図 第7号溝出土遺物実測図

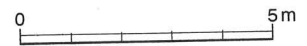
第7号溝出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第80図 1	土師器 壺甕類	口径 — 底径 [6.0] 器高 (2.5)	底部が体部よりやや突出する壺甕類の底部片。底部は凸凹しており不安定である。	外面はヘラナデ後、指頭による押圧を加える。内面はヘラナデのみ。	長石・石英を多量、雲母少量外面褐色、内面黒褐色 普通	古墳時代前期 5%残存 覆土
第80図 2	瓦質土器 火舎?	口径 — 底径 — 器高 (2.3)	底部が平底を呈する火舎?の底部片。	外面に横方向のヘラ削りを施す。	長石・石英中量、雲母多量 外面褐灰色、内面黄灰色。普通	中近世 15~16c 覆土

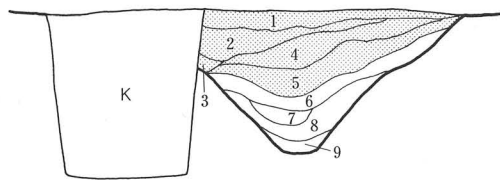


A-A'

1. 表土
2. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、締まりなし、ローム微粒少量
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、締まりなし、ローム微粒中量
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、締まり弱、ローム微粒中量、ローム粒と黒色土の混合土
5. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、締まり中、ローム小粒を少量、黒色土を基調
6. 褐色土 (10YR4/4) 粘性中、締まり中、ロームを主に黒色土・褐色土混入
7. 褐色土 (10YR4/6) 粘性中、締まり中、黒色土粒少量、ローム粒・塊の吹き溜り土
8. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性中、締まり中



B 27.5

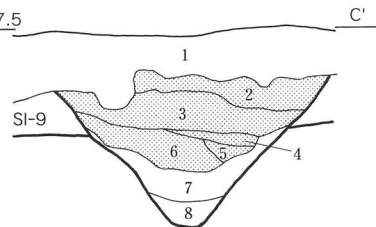


B-B'

B-B'

1. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、締まりなし、ローム微量少量、A-A' 2層に対応
2. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、締まり弱、ローム小粒・塊多量、黒色土小塊とローム粒の混合土、A-A' 4層に対応
3. 褐色土 (10YR4/6) 粘性なし、締まり弱、ローム小塊を主とし、黒色土が若干混合した流れ込み土
4. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性弱、締まり弱、ローム微粒微量、黒色基調土、遺物集中
5. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性弱、締まり中、ローム微粒少量、4層よりローム粒多量、 ϕ 5mm程度の黒色土粒少量、古銭出土、4・5層はA-A' 5層に対応
6. 褐色土 (10YR4/4) 粘性中、締まり中、ローム塊・黒色小粒少量、ロームを主とし黒色土が少量混合
7. 褐色土 (10YR4/4) 粘性中、締まり中、7層に似る、若干ローム粒多く、褐色目立つ、6・7層はA-A' 6層に対応
8. 褐色土 (10YR4/6) 粘性中、締まりやや強、ローム粒・塊を主とした土、黒色土小粒少量、壁崩落土、A-A' 7層に対応
9. にぶい黄褐色土 (10YR4/3) 粘性中、締まりやや強、暗褐色土に黒色土小粒・ローム小塊が混合、A-A' 8層に対応

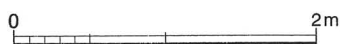
C 27.5



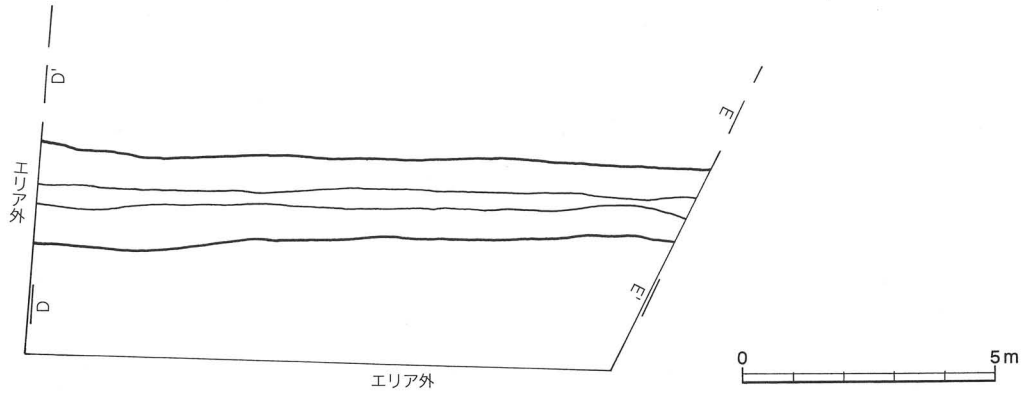
C-C'

C-C'

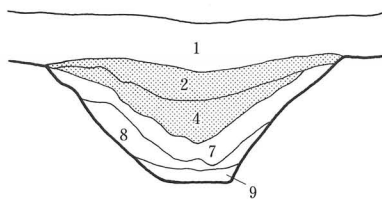
1. 表土
2. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性弱、締まり弱、 ϕ 1mm程のローム粒、砂粒少量
3. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性中、締まり弱、炭化物少量、 ϕ 2mm程のローム粒少量
4. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性強、締まり弱、 ϕ 1~5cmのローム塊少量
5. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性強、締まり弱、 ϕ 2~3mmのローム粒中量
6. 黒褐色土 (7.5YR2/2) 粘性中、締まり中、 ϕ 1mmのローム粒少量
7. 極暗褐色土 (7.5YR2/3) 粘性強、締まり中、 ϕ 5mm程のローム粒少量
8. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性強、締まり中、 ϕ 5mm程のローム粒、 ϕ 1~2mmの炭化物極少量



第81図 第6号溝実測図(1)



D 27.9



D-D'

E-E'

1. 表土

2. 黒褐色土 (7.5YR3/2) 粘性中、締まり弱、黒色土小粒多量、ローム小粒・塊少量

3. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性弱、締まり弱、ローム塊中量、壁の部分的崩落土を含む

4. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性中、締まり弱、ローム小粒・黒色土粒中量

5. 暗褐色土 (10YR3/4) 粘性中、締まり中、ローム小粒多量、黒色土粒少量、4層から6層への漸移層でローム基調ながら黒味が強い

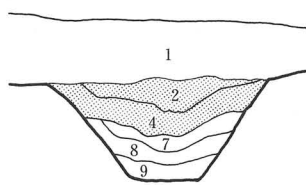
6. 褐色土 (10YR4/6) 粘性中、締まり中、ローム小粒・塊多量、黒色土粒少量、5層に比してロームが多い

7. 褐色土 (10YR4/4) 粘性中、締まり中、ローム塊多量、黒色土粒少量、ロームを基調とし、褐色土混入

8. 褐色土 (10YR4/6) 粘性中、締まり中、ローム小粒・塊多量、壁の一次崩落土

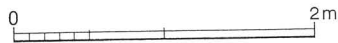
9. 黒褐色土 (10YR2/2) 粘性弱、締まり弱、ローム小粒・黒色土小塊多量

E 27.9

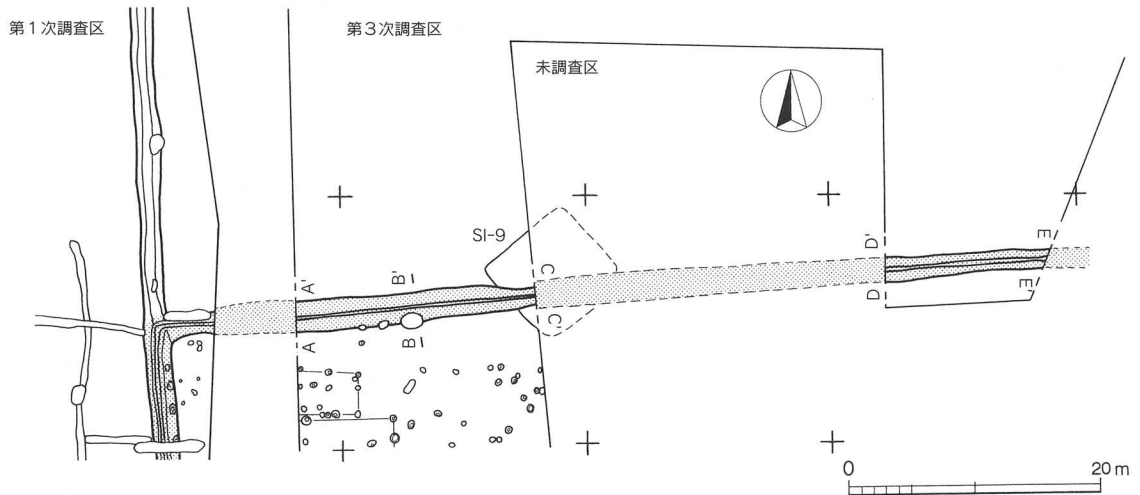


E'

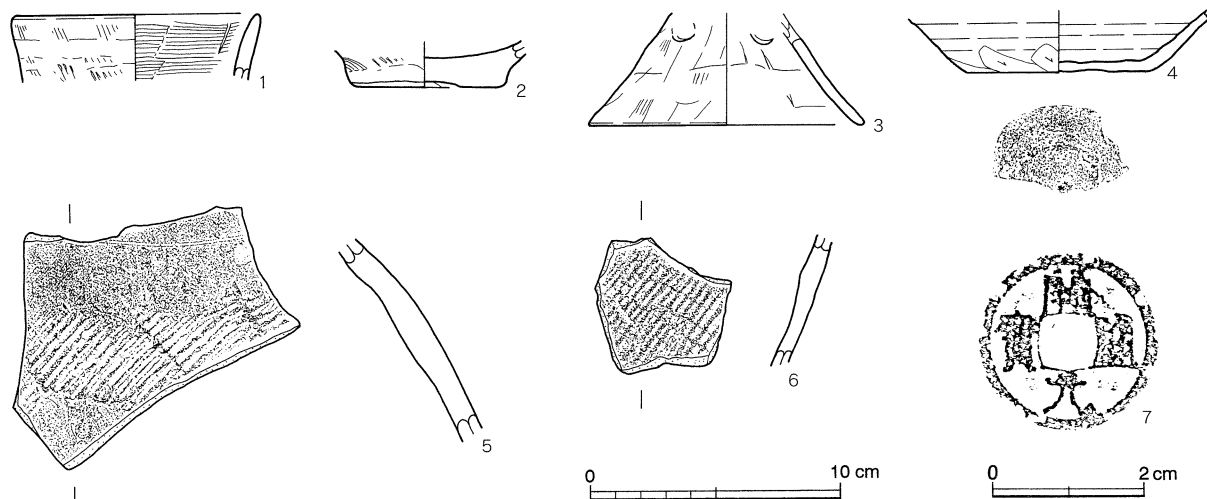
※土層断面図中のトーンは、黒褐色土を基調とする土層を表す。



第6号溝概略図



第82図 第6号溝実測図(2)



第83図 第6号溝出土遺物実測図

第6号溝出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第83図 1	土師器 壺甕類	口径 [9.6] 底径 — 器高 (2.7)	口縁が直立状に伸びる壺甕類の口縁部片。	外面は部分的に縦方向のハケ調整後、ヨコナデを施す。内面は横方向のハケ調整を施す。	長石・石英・雲母を少量 内外面にぶい橙色 良好	5%残存 1区覆土一括
第83図 2	土師器 壺甕類	口径 — 底径 [5.6] 器高 (1.2)	底部が体部よりやや突出する壺甕類の平底を呈する底部片。	外面底部付近にハケ状工具による調整がみられる。	長石少量、石英微量、 雲母中量 外面にぶい赤褐色、 内面にぶい黄橙色 良好	10%残存 2区覆土一括
第83図 3	土師器 高坏	口径 — 底径 [11.0] 器高 (4.5)	小型高坏。ハの字状に開く高坏の脚部片。円形の透かし孔を有する。	外面は縦方向のヘラナデ後、ミガキを施すが、ミガキ痕は部分的にしか見えない。内面は縦方向のヘラナデを施す。	長石・石英を中量、 雲母多量 外面にぶい橙色、 内面にぶい黄橙色 不良	15%残存 2区覆土一括
第83図 4	須恵器 坏	口径 — 底径 [7.2] 器高 (2.6)	口縁が大きく外に開く箱型の須恵器坏。底部は平底を呈する。	体部下端に手持ちヘラ削り、底部は回転ヘラ切り後未調整。	長石・石英を中量、 雲母多量 外面にぶい橙色、 内面橙色。不良	30%残存 南脇確認面
第83図 5	渥美 壺甕類	口径 — 底径 — 器高 (7.6)	壺甕類の体部片。	外面は沈線とギザギザ目のタタキ具で溝状の凹みをつくる。内面は回転ナデを施す。内面に壺・甕の口から降灰した自然釉付着。	長石微量 外面灰黄色、内面灰色 良好	中世 3区覆土一括
第83図 6	須恵器 甕	口径 — 底径 — 器高 (4.7)	須恵器甕の体部片。	外面は斜めに擬格子叩き目、内面は横方向のヘラナデを施す。	長石・石英・赤褐色ス コリア少量、雲母多量 外面にぶい黄橙色、 内面暗灰色。不良	5%残存 区覆土一括

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
第83図 7	古銭 開元通寶	24.3	24.1	1.1	2.3	湯まわりが悪く、左下部にφ0.2mmの穴が2ヶ所開く。字面はつぶれて不明瞭。裏面の堺線のモールドはほとんど失われている。	100%、SD-6 2区覆土中層 模铸銭か

第8号溝 (SD-8) [第78図]

位置 調査区中央部、H12からJ12区 (シ・スGrid) にわたって東西方向に延びている。第5号溝とは軸を共にしており、当溝の南半分は調査区外に入り込んでいる。周囲は標高26.8mの平坦地である。

規模 確認された長さは12.9m、最大幅は60cm、深さは50cmであった。

断面形 底面はほぼ平坦で、壁はやや強めに立ち上がっていた。

主軸方向 N-88° -W。ほぼ東西方向に軸を合わせて延びている。

覆土 暗褐色土の単一土層で、しまりは弱かった。

遺物 出土しなかった。

所見 第5号溝に比べて当溝は深く掘り込まれていたが、覆土はほぼ同様に軟質で新しい時期を想定させるものであった。位置関係からみて、第5号溝とつながる地境溝の可能性が高いと思われる。

4. その他の遺構 (SX)

特殊な遺構が3基検出された。整地遺構 (SX-1)、屋外炉 (SX-2)、竪穴状遺構 (SX-3) という名称を与えた3基で、いずれも埋没谷の周辺に立地している。

整地遺構 (SX-1) [第88図、PL.23・33]

位置 埋没谷の中央部、R6区 (ケgrid) に位置する。

検出状況 当遺構は確認調査で最初に発見された。本調査区の北部を横切る13トレンチは、はからずしも埋没谷の中央部に設定され、谷の堆積土層を断面観察する適所となったが、その際、上層の黒色土中に不自然なローム土の広がりが見られた。また、ローム土層の直上から砥石片 (第22図No16) が出土したため、この土は人為的に運び込まれた可能性が高いと判断された。これを受けて本調査では、13トレンチの南側に5.5×3mのテスト・ピットを設定し、平面的な広がりを把握することにした。

結果、地表面を約80cm下げた地点、標高値にして24.2m付近から、純粋なロームを敷く小規模な整地面が確認された。掘り込み等は認められなかったが、黒褐色土を均した上にローム土を無作為に敷いた状態を確認することができた。ローム土は硬質ローム塊が主体で一定の硬度はあるものの、築き固められたように締まったものではなかった。

規模 ローム土の広がり、テスト・ピットの北際だけに限られていた。南北0.4m、東西3.3mの不整形な帯状を呈し、厚さは最大8cmであった。これはさらに北側に広がっていたはずであるが、13トレンチの開削によって消滅している。ただし、13トレンチ北壁の土層断面にはローム土を見ることができなかったので、北側への広がり最大でもトレンチ幅の2mを超えることはないと考えられる。

土層の様子 ローム土を基点にして、それより下を地業土層、上を覆土層と考え、3つの土層を当遺構に関係する層位と認識した。これよりも下は、黒色を基調とした谷の自然堆積土が1.5mの厚さで堆積している (埋没谷の項参照)。地業土層は、埋没谷の自然堆積土の上の黒褐色土層 (第88図A-A'の5層) で、厚さ15cm、東西幅4.5mの広がりをもつ。土質は自然堆積層とほぼ同じであるが、焼土や炭化物粒が微量に含まれていた。客土を盛ったような堆積ではなく、若干の地均しによって平坦部を作った程度であった。この上のローム土は、硬質ローム塊を主体とする混じりのないロームで、埋没谷内では自然流入し得ない土である。道幅ほどの広がりしか確認されず、局所的に整地面が造成されたことを想定させるものであった。その上には砂粒や焼土、炭化物粒などが少量含まれる黒褐色土が堆積していた。整地面の覆土に相当す

る土層であるが、埋没谷の上層を広く覆う土層であり、自然堆積したものと判断された。

遺物 覆土中の遺物は微細片にいたるまで拾い上げたが、ほとんどが図示に耐えないものであった。第85図No1およびNo2は渥美と常滑の壺甕類の破片である。これ以外は縄文土器と土師器の1cm以下の微細片が48点、小石14点であり、いずれも流れ込みを想定させる出土状況であった。また、ローム土の整地面と同じレベルから、半分に折れた古銭「□祐元寶」が1枚発見されている (No3)。

所見 当遺構は埋没谷の中に作られており、何らかの作業を目的にした整地遺構と推定される。ローム土の広がりはかなり狭いものであり、規模の小さな地業が行なわれ、長期間使われることなく廃棄されたと思われる。遺物は谷に流れ込んだ土に混在したものであり、確実に遺構の時期を反映してはいないが、渥美や常滑の陶器片や古銭が出土したことから、中世のある段階の地業と考えてよいであろう。なお、古銭は「嘉祐元寶」(北宋：1056年初鑄)ないし「景祐元寶」(北宋：1034年初鑄)と推定され、中世の出土銭としては比較的多くみられるものである。銭自体に厚みがなく文字も不鮮明な点で模鑄銭の可能性が高く、遺構の年代を絞り込む資料とはなり得なかった。

屋外炉 (S X-2) [第84図、PL.23]

位置 埋没谷の南縁、Q9,10区 (ケGrid) に位置する。標高25mの緩傾斜地で、埋没谷の黒い堆積土とロームの地山の境目に位置する。

検出状況 円形にまとまった焼土が2つ並んで発見された。竪穴住居跡の炉である可能性を考え、周囲を精査したが、掘り込みや床面、柱穴などは一切確認されなかった。また、2つの炉は、傾斜地形に沿って10cmほどの高低差があり (谷に近い北側の方が低い)、住居跡の床面を想定し難いため屋外炉と判断した。

規模 炉は2つともほぼ円形で、掘り込みは断面観察によりかろうじて浅いすり鉢状と確認された。北側の炉は直径68cm、深さ12cm、南側は直径56cm、深さ8cmである。

土層の様子 両方ともローム地山が赤化した程度の淡い痕跡であったが、褐色土の中に焼土微粒が含まれる様子が確認された。

遺物 出土しなかった。

所見 時期不詳の屋外炉である。地山と同化しかけた土の様子は比較的古い時期を予想させるが、定かではない。埋没谷の間際という立地が注目される。

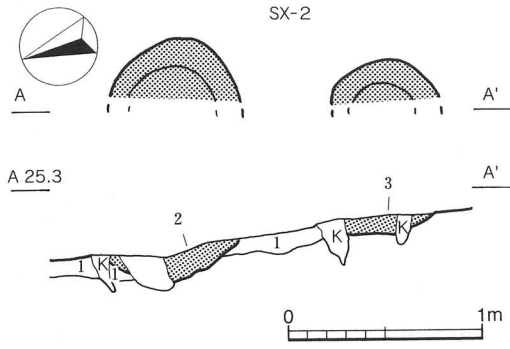
竪穴状遺構 (S X-3) [第84・85図No.4～6、PL.24・23]

位置 調査区の中央部、K8からL9区 (クGrid) にまたがる地点に所在する。埋没谷の谷頭に面し、周囲は標高25.5～26mの緩傾斜地である。

検出状況 遺構確認の段階で、黒色土が詰まった不整形の大きな掘り込みが確認された。住居跡が数軒切り合ったものか、あるいは覆土がやや軟質なので倒木痕ないし抜木痕の可能性が想定された。調査の結果、二段の掘り込みをもつ大型の竪穴1基であることが判明した。上部の平面形態は南北に長い不整楕円形、下部は不整形台形を呈し、壁は上部が浅いすり鉢状、下部は約35°の傾斜をもって立ち上がっていた。北側の壁面にテラス状の掘り込みが2ヶ所あり、底面は平坦に整えられていた。

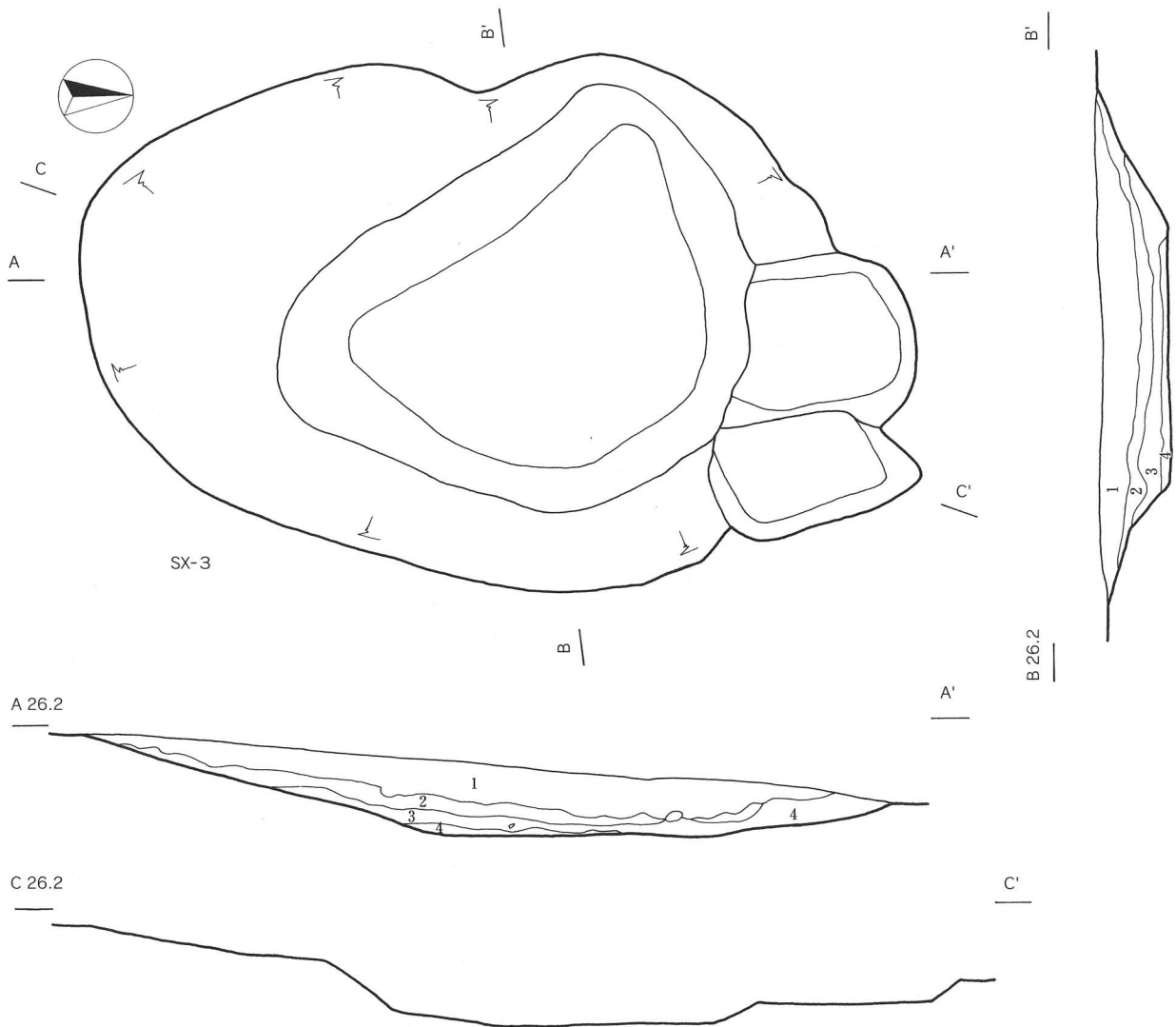
規模 掘り込みの上部は長軸8.9m、短軸5.3m、深さ23cm、下部は長軸5.2m、短軸4.1m、深さ56cmで、確認面から底面までの深さは約80cmである。

土層の様子 暗褐色土を主として4層を確認した。ローム粒の少量混在する黒土が自然流入したような状態



SX-2

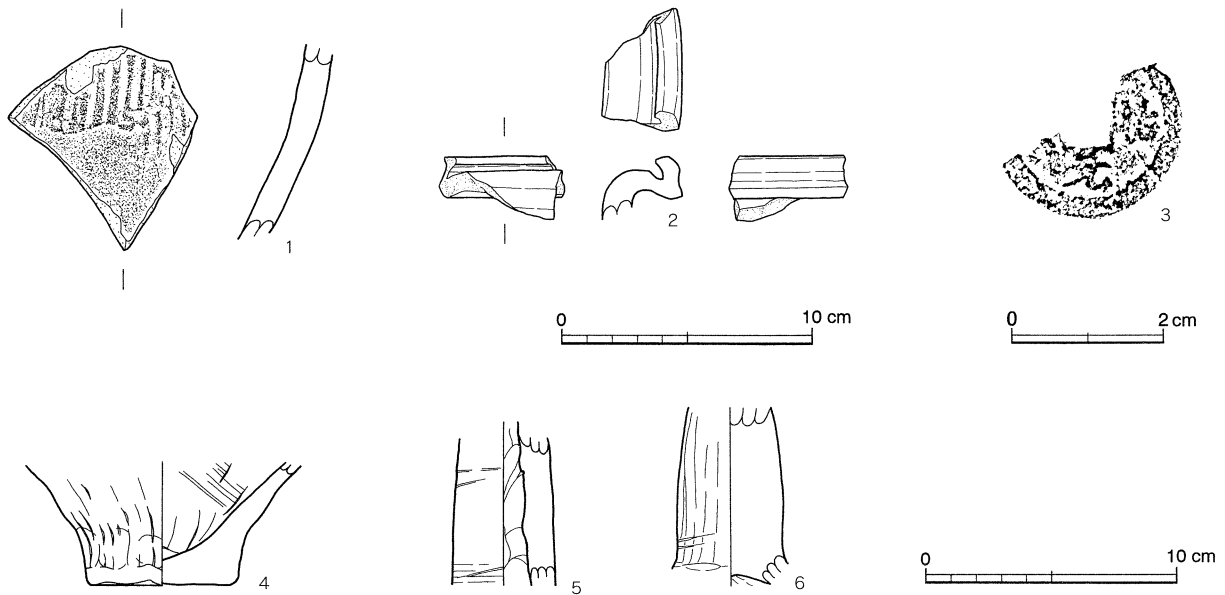
1. 暗褐色土 (7.5YR3/3) 粘性弱、締まりやや強、ロームと黒色土の混合土、谷の堆積土
2. 褐色土 (7.5YR4/6) 粘性弱、締まりやや強、焼土粒多量、ロームが赤化
3. 明褐色土 (7.5YR5/6) 粘性弱、締まりやや強、焼土粒多量、ロームが赤化



SX-3

1. 暗褐色土 (7.5YR 3/3) 粘性微弱、締まり弱、焼土粒微量、ローム小粒中量
2. 暗褐色土 (10YR 3/4) 粘性弱、締まり弱、ローム小粒・ローム塊多量
3. 暗褐色土 (10YR 3/3) 粘性弱、締まり中、ローム小粒少量、1層より締まりが強く、混入物少量
4. にぶい黄褐色土 (10YR 4/3) 粘性中、締まり中、ローム塊を基調にして黒色土が少量混入

第84図 屋外炉および堅穴状遺構実測図



第85図 整地遺構および堅穴状遺構出土遺物実測図

で、炭化物は認められなかった。全体的にしまりは弱かったが、いわゆるイモ穴のような近代の埋め土とは異なっていた。

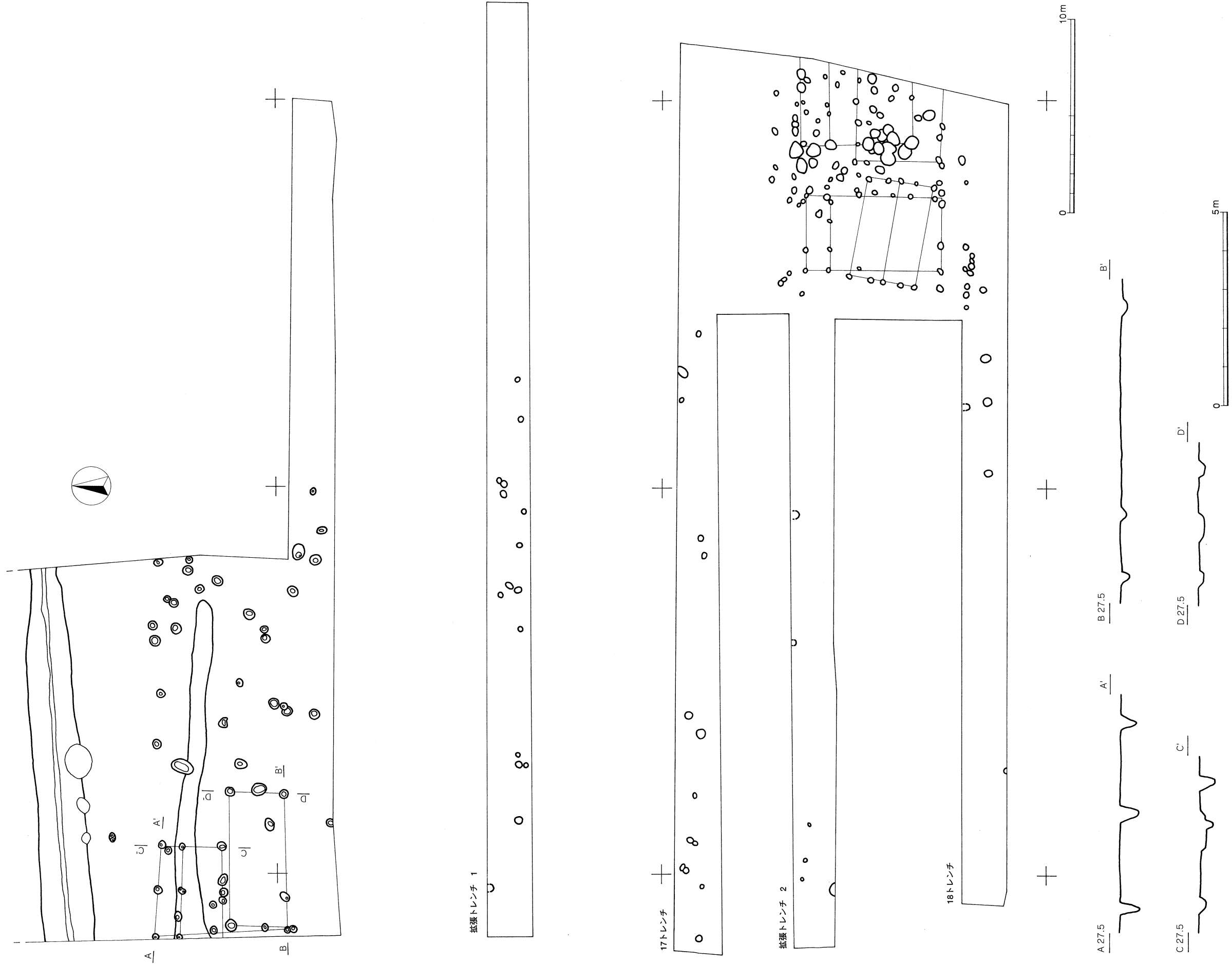
遺物 覆土中より土師器高坏の脚部が2点、甕底部片が1点出土した。また雲母片岩の破片が少量みられたが、人為的な加工痕はみられなかった。いずれも流れ込みを思わせる出土状況であった。

所見 当遺構は掘り方が不整形であるものの、底面は平坦に整えられており、倒木や抜木痕でないことは確

整地遺構および堅穴状遺構出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第85図 1	渥美 壺甕類	口径 — 底径 — 器高 (7.0)	壺甕類の体部片。	外面にウネ状の凸モールドができるような叩き目を施す。外面に釉附着。	長石微量 外面灰オリーブ色、 内面灰色 良好	SX-1 覆土
第85図 2	常滑 大甕	口径 — 底径 — 器高 (2.5)	口縁に短めの縁帯をもつ大甕の口縁部片。	内外面に共に回転ナデを施す。内面に灰オリーブ色の釉附着。	長石・石英を少量 外面明赤褐色、 内面赤褐色 良好	5型式相当 (1220~1250) SX-1 東区覆土
第85図 4	土師器 壺甕類	口径 — 底径 6.0 器高 (4.7)	底部が平底状になる壺甕類の底部片。底部が体部よりも突出する。	外面は縦方向のヘラナデ後、底部付近に指ナデを施す。内面は縦横方向のヘラナデを施す。	長石・石英を中量、 雲母微量 内外面にふい黄褐色 普通	5%残存 SX-3 覆土上層
第85図 5	土師器 高坏	口径 — 底径 — 器高 (5.8)	柱状脚高坏。中空状の柱状を呈する高坏脚部片。ほぼ直立して立つが、裾は大きくハの字状に広がると思われる。	外面は回転ナデ後、ミガキを施している。しかし、単位までは確認できない。内面はヘラナデを施す。	長石・石英・雲母を中量 外面にふい褐色、 内面橙色 良好	10%残存 SX-3 覆土上層
第85図 6	土師器 高坏	口径 — 底径 — 器高 (6.9)	内湾脚高坏。中実状の柱状を呈する高坏脚部片。底部に近づくにつれ徐々に丸みを帯びる。	外面に縦方向のヘラミガキを施す。	長石・石英を多量、 雲母微量 外面橙色、内面橙色 やや不良	10%残存 SX-3 覆土上層

図版番号	器種	法量				特徴	備考
		長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)		
第85図 3	古銭 「景祐元寶」	(19.0)	(19.0)	1.2	(1.3)	残存率は70%で、字画はつぶれて不明瞭。全体的にもろく壊れやすい。裏面の線縁のモールドはほとんど失われている。	70%残存 字形は「景祐元寶」 が最も近い SX-1 覆土



第86図 中世ピット群・拡張区実測図

実である。覆土がロームを基調とせず、黒味の強い暗褐色土であったことは、長期間にわたって開口していたことを示唆しており、木根との関連性を否定するものでもある。一方、柱穴や炉、壁溝などに相当するものもなく、住居跡の可能性もきわめて低い。井戸のように深い掘り込みでもなかったのも、この可能性も薄いと言えよう。結果として、大きな掘り込みをもつ遺構の類例に該当せず、性格不明の堅穴状遺構とせざるを得ないことになる。時期についても、流れ込みの遺物が少量あるだけで、特定することはできない。当調査区では、軟質で黒色の覆土は中世の遺構に通有であったため、当遺構も同じく中世の可能性が指摘できる程度である。

5. 中世ピット群〔第86図、PL24〕

位置 調査区南西部、大グリッドのタ・チGridおよび16トレンチ内で、小規模なピット群が検出された。これらは第6号溝の薬研堀の南側だけに集中して確認されている。さらに南に目を転ずると、17・18トレンチや拡張トレンチ1・2、拡張区へと小ピット群は広がっている様子が分かるが、発掘し得たのは16トレンチを南限とする本調査区内のものだけである。今回は、調査区内で完掘したものだけを「中世ピット群」と呼称して、以南のものとは一応分けておくことにした。

規模 直径20～80cm、深さ10～50cmの小さなピットが、合計53基検出された。ピットの平均的な大きさは直径30cm、深さ30cmである。配列は不規則に見えるが、数基は南北ないし東西軸に並び、掘立柱建物の柱穴を想定できるものもある。ただし、柱間が不規則になる部分や欠落する柱穴もあり、必ずしも明確な建物跡とならず、確実な棟数も把握できる状況ではない。第86図では並列するピットを線で結んで二棟を表現したが、あくまでも想定に留まるものである。

覆土 調査区西際の直径30cm、深さ50cmのピット1基を断ち割り土層を確認した。色調が僅かに異なる黒褐色土が上下に2層堆積していたが、ローム粒以外に混入物はなく、礎石や柱痕、埋め戻し土などは確認されなかった。その他のピットについても、概ね類似した黒褐色土が堆積しており、同様の性格が推定できるが、中にはゴボウ穴と区別が難しいものもあった。

遺物 ピット内から遺物は出土しなかった。

所見 第6号溝の南側という位置関係からみて、当ピット群は中世居館跡の一部である可能性が高い。トレンチによる確認調査の段階では、このピットは木根の攪乱と認識されていたが、実際に単体では柱穴とは想定し得ない小規模なものである。建物自体が簡易な構造であったと推測されるが、さらに数度の建て替えや浅い柱穴の消滅、ゴボウ穴の攪乱など、諸条件が重なることで建物の正確な復元が困難となっている。時期についても、第6号溝との位置関係から中世と考えるのみで、特定はできない。強いて性格を推測するならば、居館推定域の北西隅に位置することから、当ピット群は母屋に対する附属施設、すなわち納屋のような建物ではなかったかと思われる。

6. 拡張区 [第86・87図、PL.24・38]

拡張区とは、今回の試掘調査および発掘調査では予定していなかった地点に、臨時に調査区を設けて遺構の確認を行ったものである。調査期間が終了する時点で中世居館跡の存在が窮知されたため、全面的な発掘を行わず、確認調査に留めるかたちで実施した。結果、複数棟分の掘立柱建物跡と若干の遺物を検出した。

位置 本調査区の南方、17トレンチから18トレンチの間、両トレンチの東側部分を含んだ面積212m²の範囲の表土を除去し、拡張区と仮称することにした。加えて、確認調査で開削した17、18トレンチおよび拡張トレンチ1、2についても、関連区域として再度精査を行うことにした。

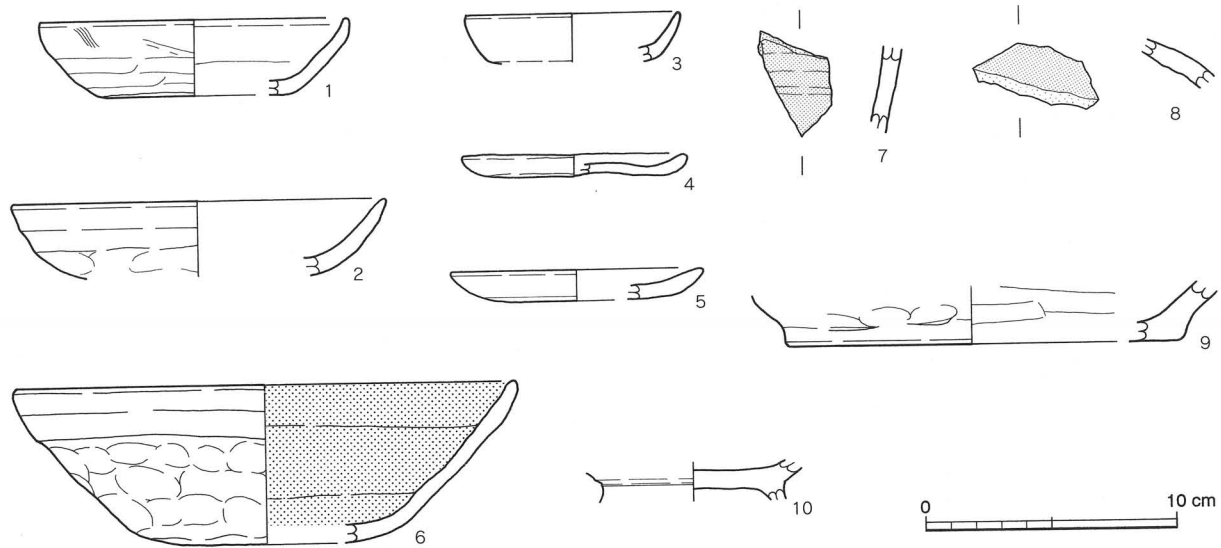
調査内容 確認調査の段階では根の攪乱と認識されていた小規模なピットについて、中世の掘立柱建物跡の柱穴の可能性を考慮し全面的な見直しを行うことにした。また、拡張トレンチ2の東側で、表土およびピットの表面から土師質土器片が出土していたことを受けて、その周囲に拡張区を設定し、中世居館跡の主要施設の存否を確認した。結果、以下のように多数のピットの存在を確認した。

17トレンチ	ピット14基、(直径平均30cm)
18トレンチ	ピット5基、(直径平均40cm)
拡張トレンチ1	ピット16基、(直径平均30cm)
拡張トレンチ2	ピット6基、(直径10cm大が3基、30cm大が3基)
拡張区	ピット117基、(直径10cm大が98基、50cm大が19基)

建物跡 上記のピット群は、すべてが柱穴とは断定できず、木根やゴボウ穴である可能性も残している。トレンチ内の調査ではピットの並びが把握できない限界もあり、何棟の掘立柱建物跡が建っていたかは未知数とせざるを得ない。現状では、4つのトレンチの中におよそ3箇所のピット集中域が認められるので、比較的密集度の低い建物配置が推測できる。一方の拡張区では、大小のピットが非常に多く検出された。密集度が高いため、どのピットを柱穴に見立てても建物を想定できる状態である。小型のピットが数列並ぶ様子が見られ、同時に大型のピットの集中が2箇所に認められる。小型のピット列を附属的な建物2～3棟と見立て、大型のピット群を母屋的な建物が複数回建て替えられた跡と考えるならば、概ね大小3～4棟の建物がここに集中していた様を想定できるであろう。

遺物 拡張区の表土除去に伴ない、土師質土器および陶器の小片が出土した。特筆されるのはNo6の大型の土師質土器で、拡張区中央の大型ピットの表面から出土している。整形や調整技法は小型のものと同様であるにもかかわらず、深碗ないし鉢状を呈し内面を黒色処理している。No10は平安時代の須恵器高台坏で、付近に当該期の住居跡の存在が予想される。それ以外は、小片のため時期の絞り込みは困難であるが、およそ中世の域を出ないものと思われる。

所見 前述したように、第6号溝の薬研堀が仮に方一町の規模で方形に巡っているとすれば、この拡張区は、まさにその中央部に位置することになる。居館跡の中心部という前提でこのピット群を眺めた場合、母屋と附属施設、そしてやや離れた場所に配置された建物数棟の存在を、今回の調査で確認したことになる。建物はさらに東方に広がりを見せているので、より多くの建物群がこのエリアに展開することは容易に推測される。居館跡の全貌把握のためにも、周辺域を含めた本格的な発掘調査に期待がもたれるところである。建物群の時期については、遺物の上では決定的な資料を得られなかった。土師質土器や陶器片の様相から、このピット群が中世のものであることは明らかであり、中世前期と見なした第6号溝とも齟齬をきたすことはないようである。規模の大きな館跡に期待されるような高級陶磁器の破片は今回の調査では確認されなかった。



第87図 拡張区出土遺物実測図

拡張区出土遺物

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第87図 1	土師質土器 小皿	口径 [12.0] 底径 [7.8] 器高 (3.0)	底部は丸底気味で、口唇部がわずかに内湾する小皿片。	内外面共に回転ナデを全体に施す。	長石・石英・雲母を微量 外面橙色、 内面におい橙色 良好	30%残存 中世 確認面
第87図 2	土師質土器 皿	口径 [14.8] 底径 — 器高 (3.0)	底部が丸底を呈する皿片。	底部付近の外面は未調整だが、それ以外の外面と内面には回転ナデを施す。	長石・雲母を微量 外面灰黄褐色、 内面におい黄橙色 普通	30%残存 中世 確認面
第87図 3	土師質土器 小皿	口径 [8.6] 底径 — 器高 (1.9)	底部は丸底を呈すると思われる小皿片。	外面口唇部に回転ナデを施す。	長石・石英を微量 外面橙色、内面におい 橙色 良好	20%残存 中世 確認面
第87図 4	土師質土器 小皿	口径 [5.0] 底径 [7.0] 器高 (0.9)	底部は不整形な平底で、体部がわずかに立ち上がる。	内外面共に回転ナデを施し、底部はヘラ切り後未調整。	長石微量 外面におい黄橙色、 内面におい黄褐色 良好	20%残存 中世 確認面
第87図 5	土師質土器 皿	口径 [9.0] 底径 — 器高 (1.2)	底部が平底を呈する小皿片。	口唇部外面と内面に回転ナデを施す。	長石・雲母を微量 外面橙色、内面橙色 普通	20%残存 中世 確認面
第87図 6	土師質土器 鉢?	口径 [22.0] 底径 — 器高 (6.3)	底部が丸底を呈する鉢もしくは深碗形土器。	外面は口唇部付近に回転ナデ、他は未調整だが軽い指頭痕が残る。内面は回転ナデと黒色処理を施す。ミガキはない。	長石・雲母を微量 外面灰黄褐色、 内面褐灰色 良好	30%残存 中世 ビット上面
第87図 7	瀬戸美濃系陶器 碗皿または鉢類	口径 — 底径 — 器高 (4.1)	碗皿または鉢類の体部片。	外面に回転ナデを施す。内外面に灰白色の釉付着。	長石微量 外面灰白色、 内面灰白色 良好	近世か 確認面
第87図 8	常滑 壺	口径 — 底径 — 器高 (2.0)	壺の肩部片。	外面に濃緑色の釉付着。	長石中量、石英少量 外面灰オリープ色、 内面黒褐色 普通	中世 外面に釉付着 確認面
第87図 9	瓦質土器 壺甕類	口径 — 底径 [16.8] 器高 (2.3)	壺甕類の底部片。	外面はヘラナデ、指ナデを施し、内面は回転ナデ及びヘラナデを施す。	長石・石英を少量、 雲母中量 外面におい褐色、 内面灰褐色 普通	中世 確認面
第87図 10	須恵器 高台坏	口径 — 底径 (7.0) 器高 [1.1]	高台坏の底部及び高台部片。	底部に回転ヘラケズリを施す。	長石・石英を微量、 雲母中量 外面橙色、 内面におい橙色 不良	確認面

7. 埋没谷（縄文土器包含層）〔第88図、PL.10〕

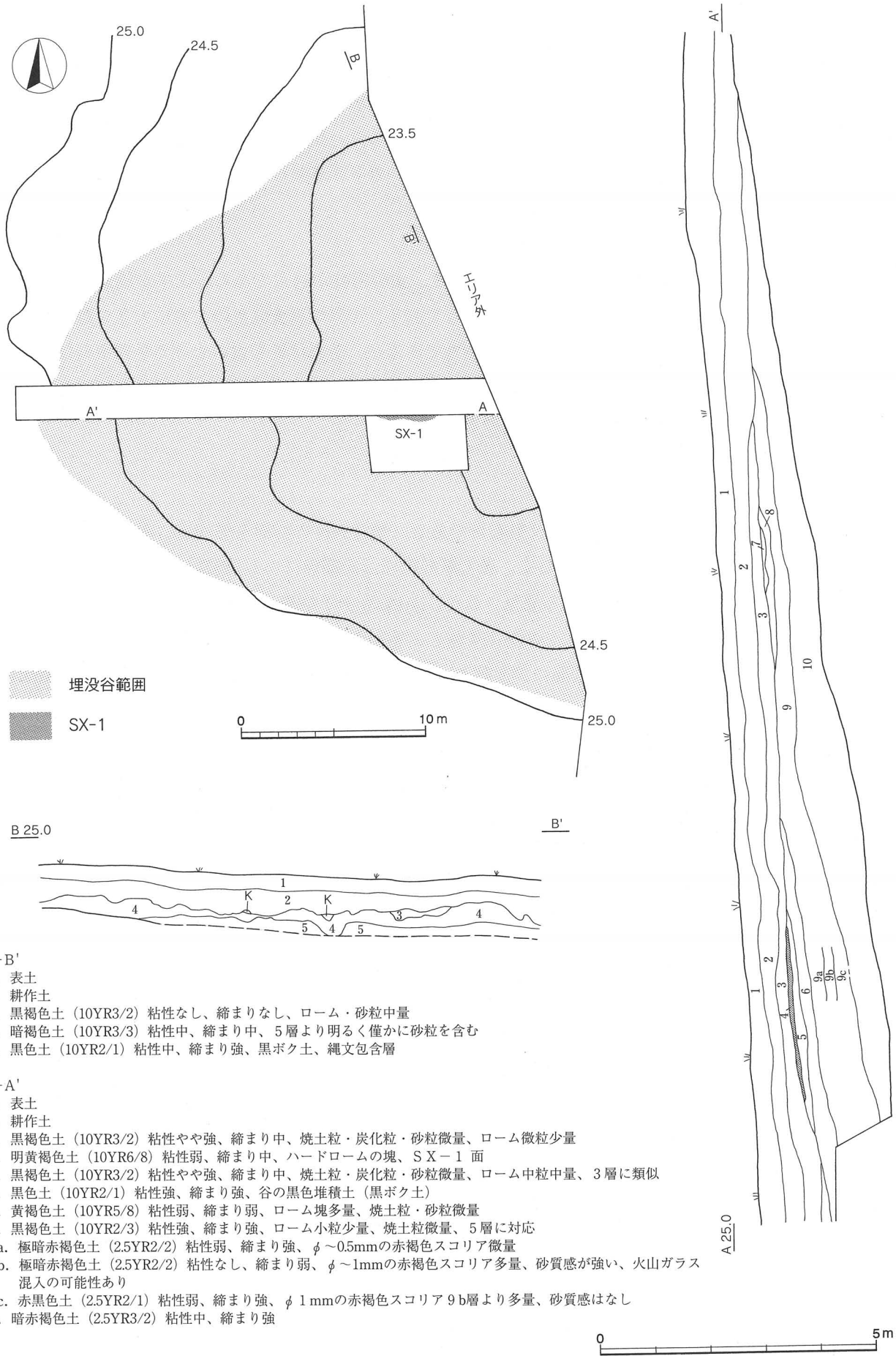
位置と規模 台地東方の開析谷から入り込む小さな支谷の一つで、神明遺跡全体はこの小谷を囲むように広がっている。今回の調査では、調査区の北東部、大グリッドのエ・ケ・コGridにわたる範囲で谷頭部を検出した。表土除去後、黒色土が舌状に広がっている範囲を埋没谷と認識したが、その規模はおよそ南北30m、東西25m、深さは調査区の東際で2.5mである。

調査経緯 谷の存在は確認調査時の13トレンチによって既に確認されていた。13トレンチは谷の中心部を横断しており、壁面観察によって縄文土器の包含層を1層確認している。本調査では、このトレンチをさらに深く下げ、地山までの堆積土層の厚さを把握すること、そして谷自体を包含層のレベルまで下げ、その広がりや遺物相を把握すること、の2点を主眼とした。実際の調査では時間的な制限があり、地山までの土層確認は行ったものの、包含層の追求は谷の北側部分だけに留まり、遺物の取り上げは大グリッドごとに採取する簡易な方法を採用した。

層位 表土と耕作土、および整地遺構（SX-1）を除いて、概ね4層の堆積を確認した（第88図A-A'）。上位の2層は黒褐色土層、下位の2層は暗赤褐色土層に大きく分けられ、それぞれの厚さは最深部で前者が80cm、後者は1.3mである。縄文土器の包含層は前者の下層（6層）にあたる。上位の上層、すなわち谷の堆積土の最上位は黒褐色土層（3層）で、ローム微粒を少量含む他、部分的ではあるが焼土粒や炭化粒も含まれていた。整地遺構（SX-1）を覆っていたのはこの層である。続く黒色土層（6層）は厚さ20cm程の純粋な黒ボク土で、ロームや砂粒などの混入物はみられなかった。縄文土器の小片が層中に散在していた。一方、下位の2層はしまりの強い完全な無遺物層であった。下位上層はスコリアを含む極暗赤褐色土層（9層）であるが、さらに3つの層に分けることができた。その中央の層（9b層）には、土壌サンプリングの結果、火山ガラスの含有が確認されている。下位下層はしまりの強い暗赤褐色土層（10層）で、混入物を一切含まない純層であった。

遺物 包含層から出土した遺物はすべて縄文土器片であり、石器や土師器の類は皆無であった。谷の奥側（調査区東際）から比較的多くの破片が出土したが、いずれも小片であり、特定地点からの投棄を思わせる状況は認められなかった。土器の詳細は「遺構外遺物」の項目にまとめたが、主に縄文時代中期の加曾利EⅡ式を主体とし、僅かに後期の堀ノ内1式と加曾利B1式が含まれていた。

所見 堆積土の下層、9b層に含まれていた火山ガラスは、完新世以降に降下した新期テフラが堆積したものであると思われる。これがアカホヤ火山灰とするならば、この谷の埋没は縄文時代前期を遡る時期から始まったことになろう。縄文時代中期に土器包含層が形成されるまで、少なくともこの谷の周辺部は人の居住域ではなかったと考えられる。それが縄文時代中期を境に、包含層だけでなく、貝殻が投棄された第6、7号土坑や粘土採掘を行った第8号土坑などが現われ、谷が人の生活領域の一部になっていった様子がうかがえる。包含層にみられた土器の起源は、今回の調査区の北側に予想される縄文時代の大集落であろう。また、中世の整地遺構（SX-1）や粘土採掘坑の第16号土坑、性格不明の竪穴状遺構（SX-3）、あるいは時期、性格ともに不明な10基余りの土坑群が皆この谷の周辺に集中しており、いずれも居住とは関連しない点で一致している。台地の上に生きた人々にとって、この埋没谷は後背地的な意味をもっていたことが推測されよう。



B-B'

1. 表土
2. 耕作土
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性なし、締まりなし、ローム・砂粒中量
4. 暗褐色土 (10YR3/3) 粘性中、締まり中、5層より明るく僅かに砂粒を含む
5. 黒色土 (10YR2/1) 粘性中、締まり強、黒ボク土、縄文包含層

A-A'

1. 表土
2. 耕作土
3. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強、締まり中、焼土粒・炭化粒・砂粒微量、ローム微粒少量
4. 明黄褐色土 (10YR6/8) 粘性弱、締まり中、ハードロームの塊、SX-1面
5. 黒褐色土 (10YR3/2) 粘性やや強、締まり中、焼土粒・炭化粒・砂粒微量、ローム中粒中量、3層に類似
6. 黒色土 (10YR2/1) 粘性強、締まり強、谷の黒色堆積土 (黒ボク土)
7. 黄褐色土 (10YR5/8) 粘性弱、締まり弱、ローム塊多量、焼土粒・砂粒微量
8. 黒褐色土 (10YR2/3) 粘性強、締まり強、ローム小粒少量、焼土粒微量、5層に対応
- 9a. 極暗赤褐色土 (2.5YR2/2) 粘性弱、締まり強、 $\phi \sim 0.5\text{mm}$ の赤褐色スコリア微量
- 9b. 極暗赤褐色土 (2.5YR2/2) 粘性なし、締まり弱、 $\phi \sim 1\text{mm}$ の赤褐色スコリア多量、砂質感が強い、火山ガラス混入の可能性あり
- 9c. 赤黒色土 (2.5YR2/1) 粘性弱、締まり強、 $\phi 1\text{mm}$ の赤褐色スコリア9b層より多量、砂質感はなし
10. 暗赤褐色土 (2.5YR3/2) 粘性中、締まり強

第88図 埋没谷および整地遺構実測図

8. 遺構外出土遺物 [第89～95図、PL.34～38]

明確な遺構に伴わず、グリッド単位で取り上げを行った遺物や、明らかに時期の異なる遺構に混入していた遺物などをこれに含めた。テン箱にして2箱分の遺物があり、多くは上記の埋没谷から出土した縄文土器である。以下、縄文土器、石器、古墳時代以降の土器類、の3項に分けて記述する。

1. 縄文土器 [第89～92図、PL.34～37]

図示し得たのは縄文土器片が103点、土器片錘が27点、土製円盤が11点である。大半が調査区北部および北西部（ア～エGrid、カ・キGrid）の表土から出土しており、今回の調査区外の北方に大きな遺構の広がりが見込まれる。個々の土器の詳細は第6表に示す通りであるが、時期は最も古いもので早期中葉以降とみられる尖底土器の底部片（No94）があり、他に前期前半、中期後半、後期前半にわたる土器群が確認された。最も量の多いのは、中期後半、加曾利EⅡ・Ⅲ式の段階である。

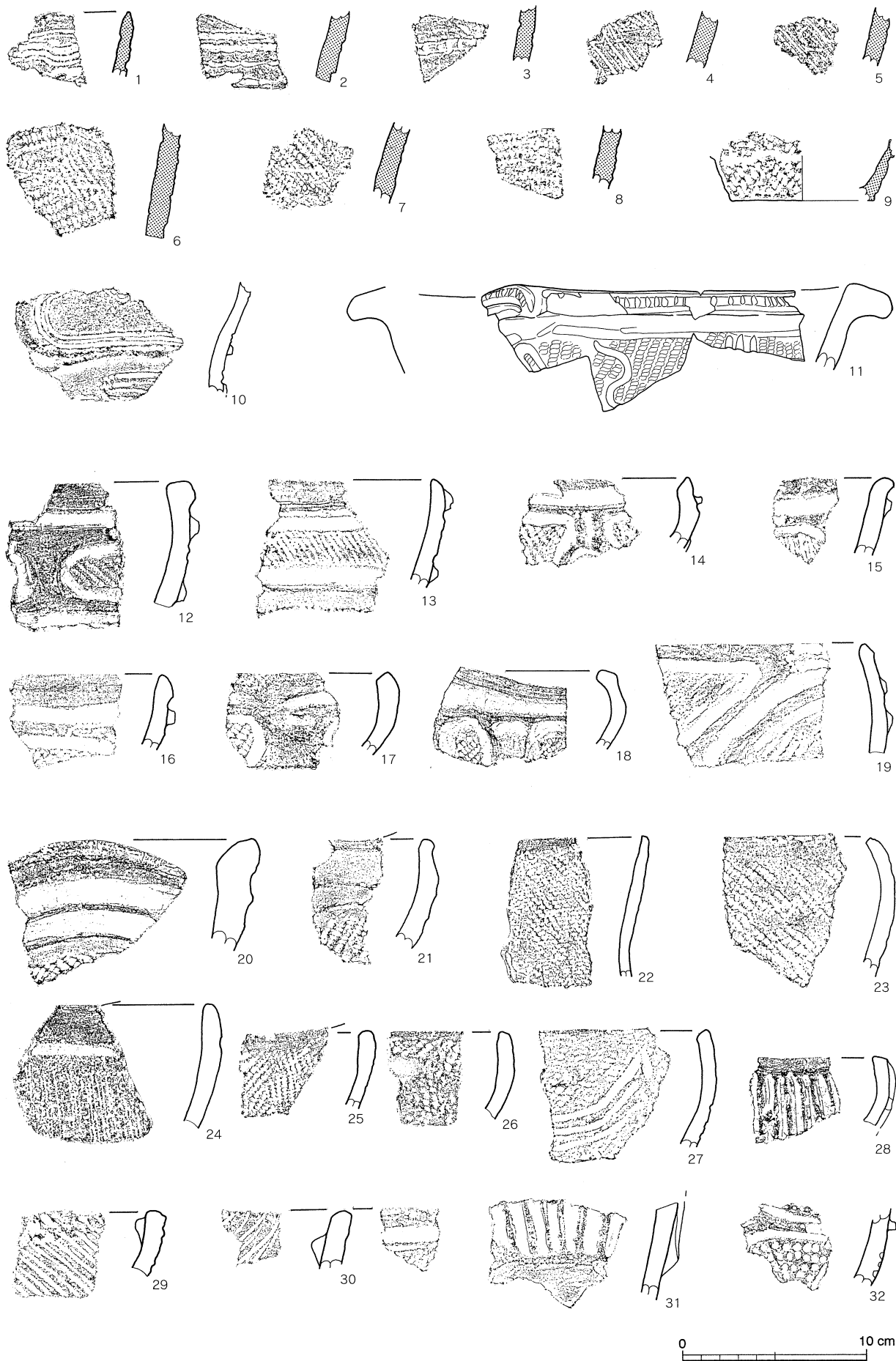
2. 石器 [第93・94図、PL.37]

石器は合計18点を数える。No142はナイフ形石器である。素材剥片の打面を先端側に置き、基部側を中心とした二側縁に二次加工を施し、左刃となす。最大厚計測部は基部側にある。先端には使用による槌状の剥離が生じている。第7号土坑の覆土中から発見された。No143もナイフ形石器である。素材剥片の打面を先端側に置き、基部側を中心とした二側縁に二次加工を施し、右刃となす。最大厚計測部は基部側にある。刃部には刃毀れが生じている。第21号土坑の壁面に突き刺さった状態で出土した。No144は削片である。右側縁には急斜度剥離による二次加工が認められる。この加工部を打面として、下部からの打撃でやや捻れながらも剥離が先端側にまで達している。第4号住居跡の東壁のローム地山に突き刺さった状態で発見された。No145は石鏃である。無茎凹基形で先端を折損する。No146は二次加工のある剥片である。剥片の周囲に二次加工を施している。石鏃の製作途中品と考えられる。シGridから出土した。No147は石錐である。摘み部が楕円形で錐部が長い。先端側を折損するが、折損箇所に近い両側縁は使用による稜線の摩滅が認められる。No148は打製石斧である。刃部側を折損するが、おそらく短冊状であろう。両側縁に潰し加工が認められる。竪穴状遺構（SX-3）の覆土上層から出土した。No149は石棒・石剣などの研磨品の部分破損品である。粘板岩を使用しており、長軸方向と並行する線条痕が認められ、研磨により曲面を形成している。調査区東壁（ケGrid）より出土した。埋没谷の包含層に対応するものであろう。No150は研磨・敲打器である。平面形は隅丸長方形で石鱗様と表現すべきか。表面は研磨凸面で、表裏両面の中央に敲打による窪みが形成されている。側面は敲打と研磨が行なわれている。ウGridの木根の攪乱土から出土した。No151は研磨・敲打器である。楕円形で研磨凸面の片面中央に窪みが形成されている。アGridの表土より出土した。No152は研磨・敲打器である。研磨面は浅く窪んだ槌状の研磨面が7面接しているため、各研磨面との境界には稜線が形成されている。敲打面は2箇所認められ、平坦面をなす。第6号溝の南脇、確認面から出土した。No153は研磨器である。片面の使用頻度が高かったようだ。16トレンチの再精査時に確認面から出土した。No154は砥石である。砥面は正面とした1面のみで、他の3面は鋸による切開痕が残っている。上下両端は折損している。チGridの確認面から出土した。

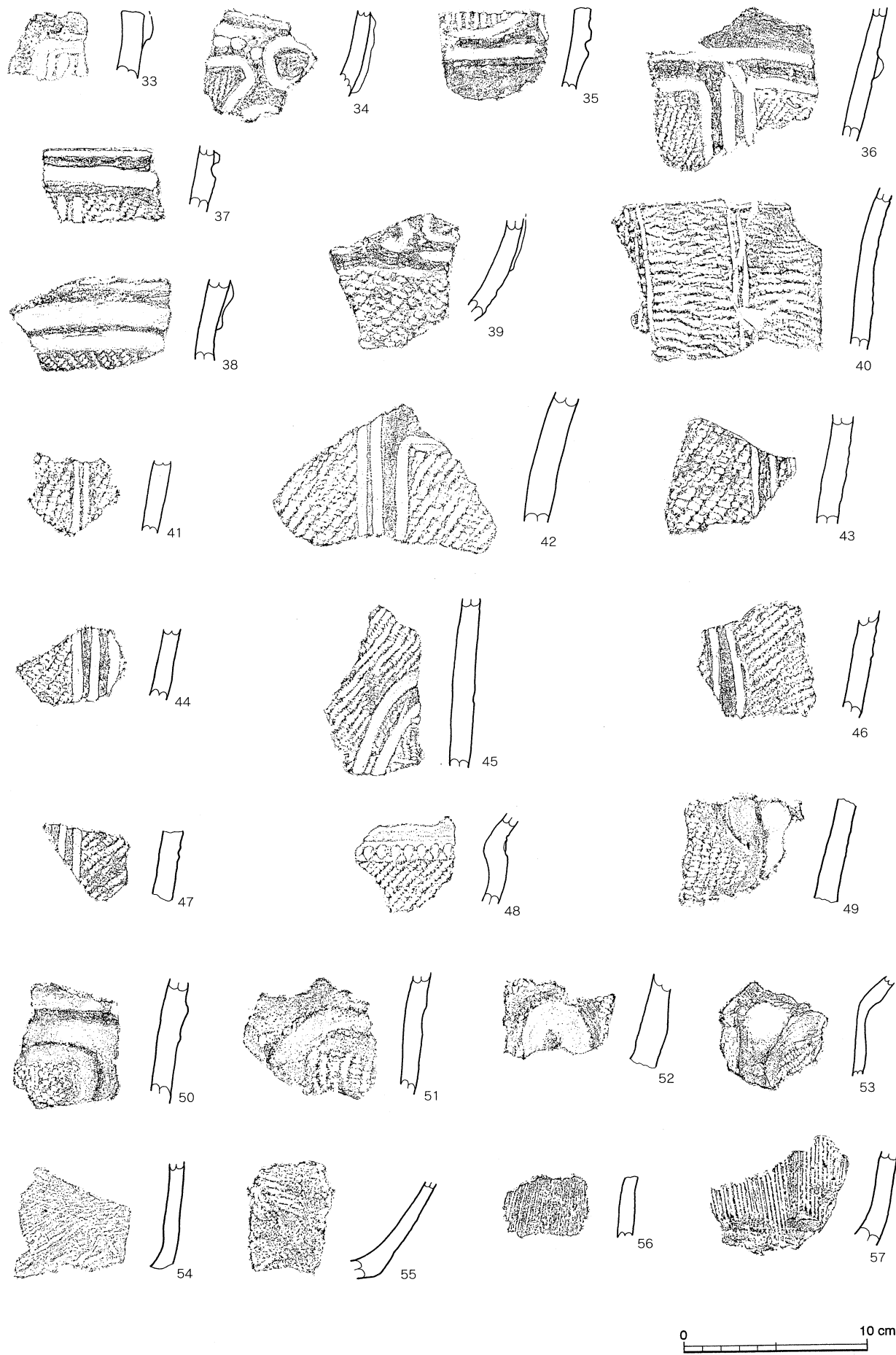
その他に図示しなかったが、剥片が5点ある。石材はメノウ、チャート、凝灰岩、石英斑岩、ホルンフェルス各1点である。

3. 古墳時代以降の土器類 [第95図、PL.38]

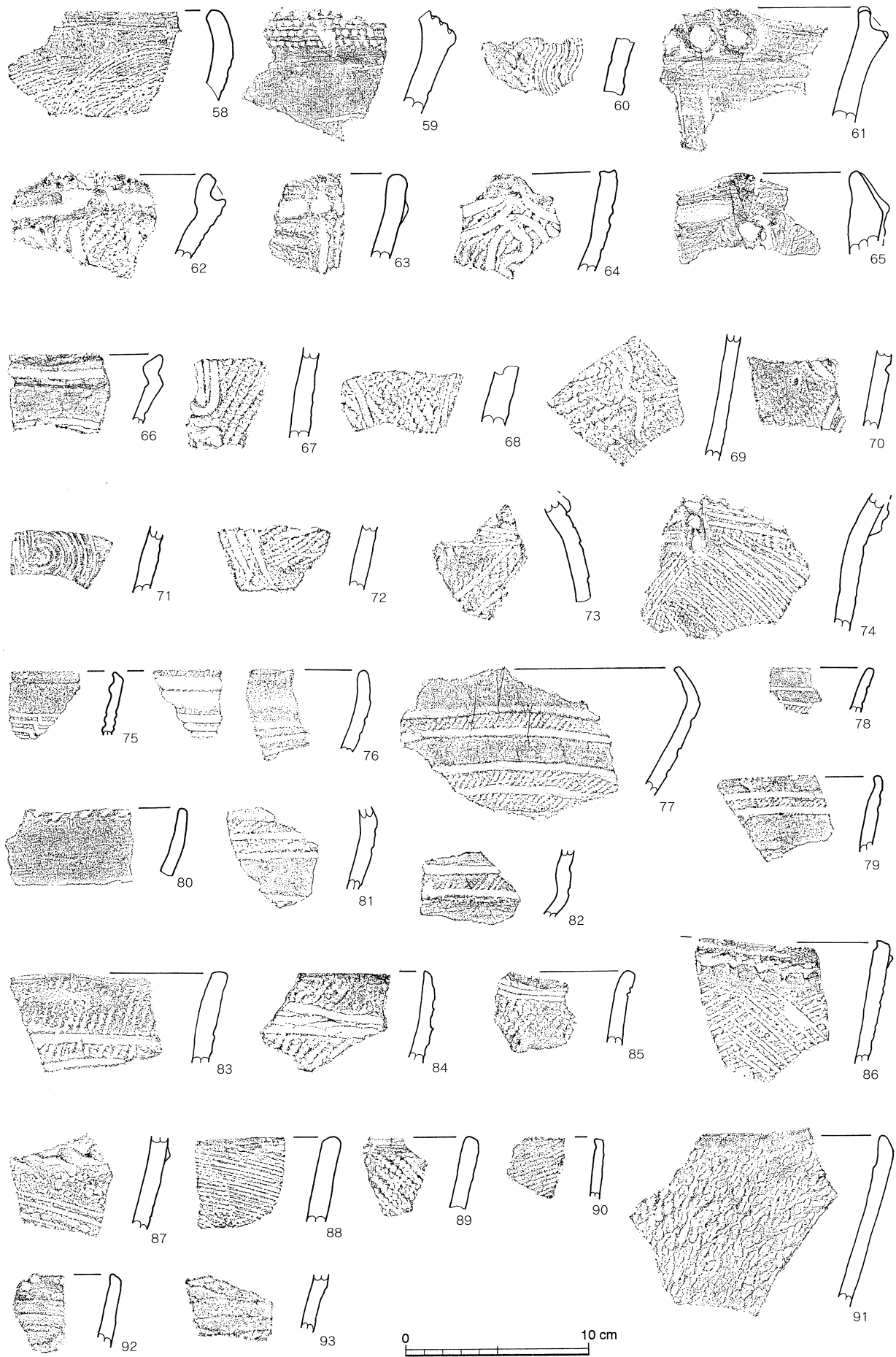
小片でも可能なかぎり図化を試みたが、図示し得たのは全部で24点であった。No155～159は古墳時代前期の土師器である。主にイGrid出土しており、近在する第2号・4号住居跡との関連が想定される。No160は平安時代の須恵器で、高台付坏ないし盤の一部である。調査区中央部のシGridから出土しており、未調査区内にこれと関連する住居跡の存在する可能性を示唆している。No161の土玉は第10号住居跡付近から出土したが、縄文時代の遺物とは思われず、近在する古墳時代前期の第8・9号住居跡などに関連するものであろう。No162～176は中世の遺物である。No162～167は土師質土器の小皿で、形態・法量ともに多様である。調査区北寄りのイGrid付近からの出土が目立ち、11トレンチで確認された礎石使用の建物との関連が想定される。No168は常滑産と思われるすり鉢、No173～175は在地産の内耳土鍋であろう。No169～172は硬質の壺甕類で、常滑や渥美産と推定される。No176は淡緑色の釉が付いた碗類とみられるが、産地は不明である。これらはやはり調査区北寄りのイ～エGridから出土している。No177は近世の箱庭具（ミニチュア）の一種で、「……宿／……道」と記された道標である。表面にごく淡い緑釉が確認される。チGridから出土した。No178は素焼きの泥面子である。カ・キGridから出土した。



第89図 遺構外出土縄文土器実測図（1）



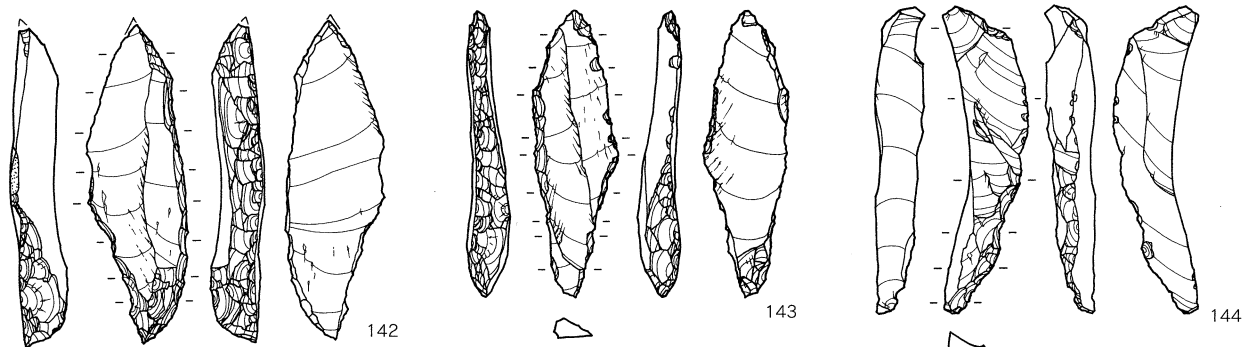
第90图 遺構外出土繩文土器実測図(2)



第91図 遺構外出土縄文土器実測図（3）



第92図 遺構外出土縄文土器実測図(4)



長さ (52.8mm)
幅 16.9mm
厚さ 7.7mm
重量 (6.6g)
流紋岩

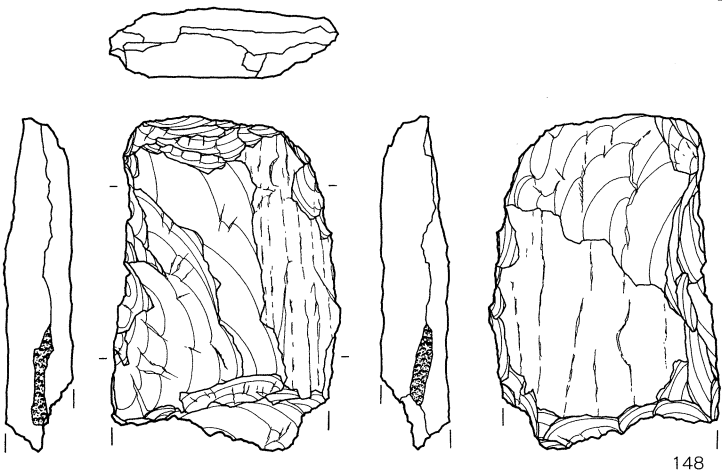
長さ 47.4mm
幅 14.0mm
厚さ 6.1mm
重量 3.5g
珪質頁岩

長さ 50.8mm
幅 13.8mm
厚さ 7.7mm
重量 4.1g
メノウ

145
長さ (13.6mm)
幅 14.2mm
厚さ 3.2mm
重量 (0.6g)
チャート

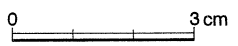
146
長さ 18.6mm
幅 16.6mm
厚さ 3.4mm
重量 1.1g
チャート

長さ (39.6mm) 重量 (4.7g)
幅 20.8mm 玉髄
厚さ 7.8mm

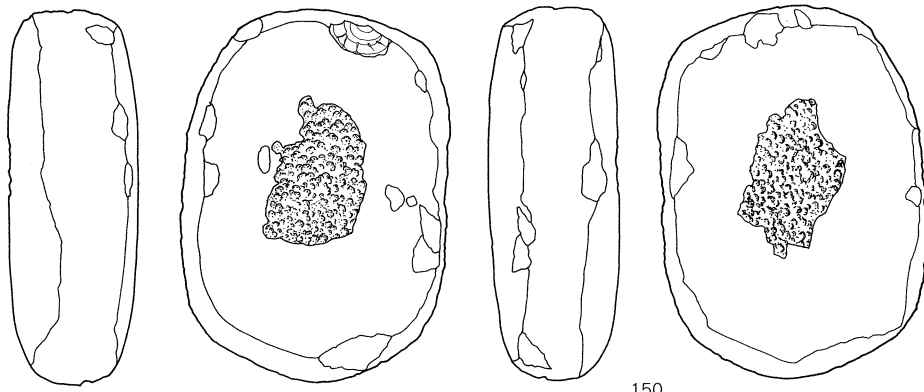


長さ (54.5mm)
幅 (37.8mm)
厚さ (11.2mm)
重量 (29.5g)
粘板岩

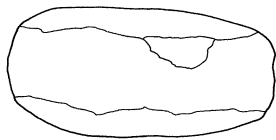
長さ (58.6mm)¹⁴⁹
幅 (25.1mm)
厚さ (6.5mm)
重量 (13.2g)
粘板岩



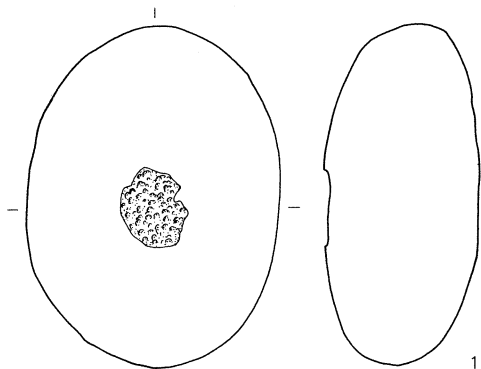
第93図 遺構外出土石器実測図 (1)



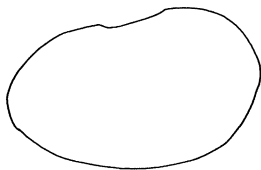
150



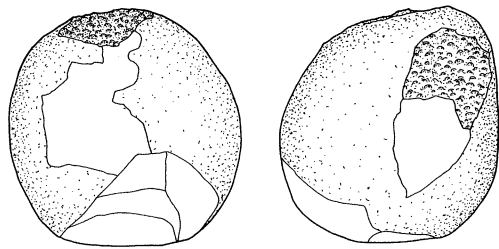
長さ 98.9mm
幅 69.8mm
厚さ 33.7mm
重量 337.2g
安山岩



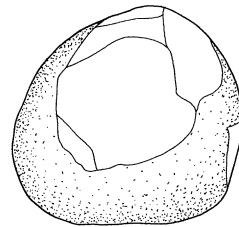
151



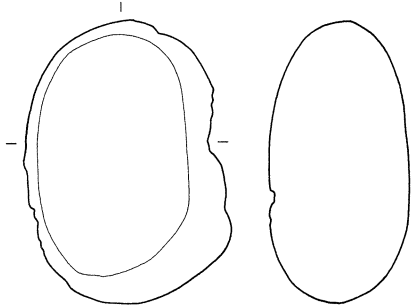
長さ 90.1mm
幅 67.3mm
厚さ 39.1mm
重量 351.0g
石英斑岩



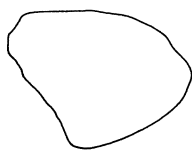
152



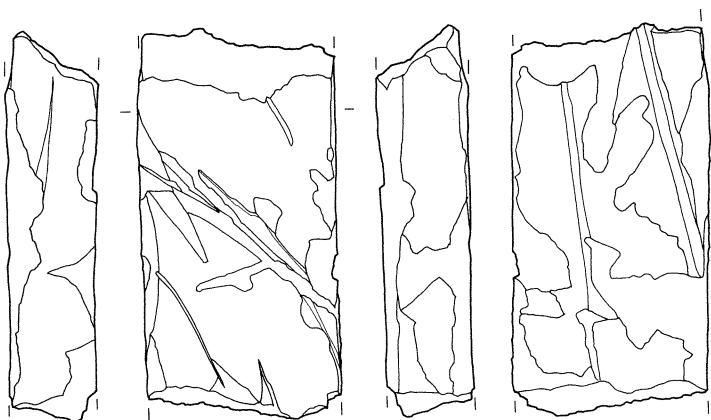
長さ 63.2mm
幅 61.4mm
厚さ 57.8mm
重量 316.9g
砂岩



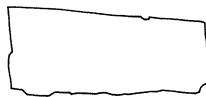
153



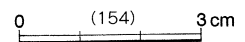
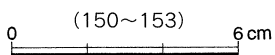
長さ 75.7mm
幅 55.2mm
厚さ 37.7mm
重量 188.9g
石英斑岩



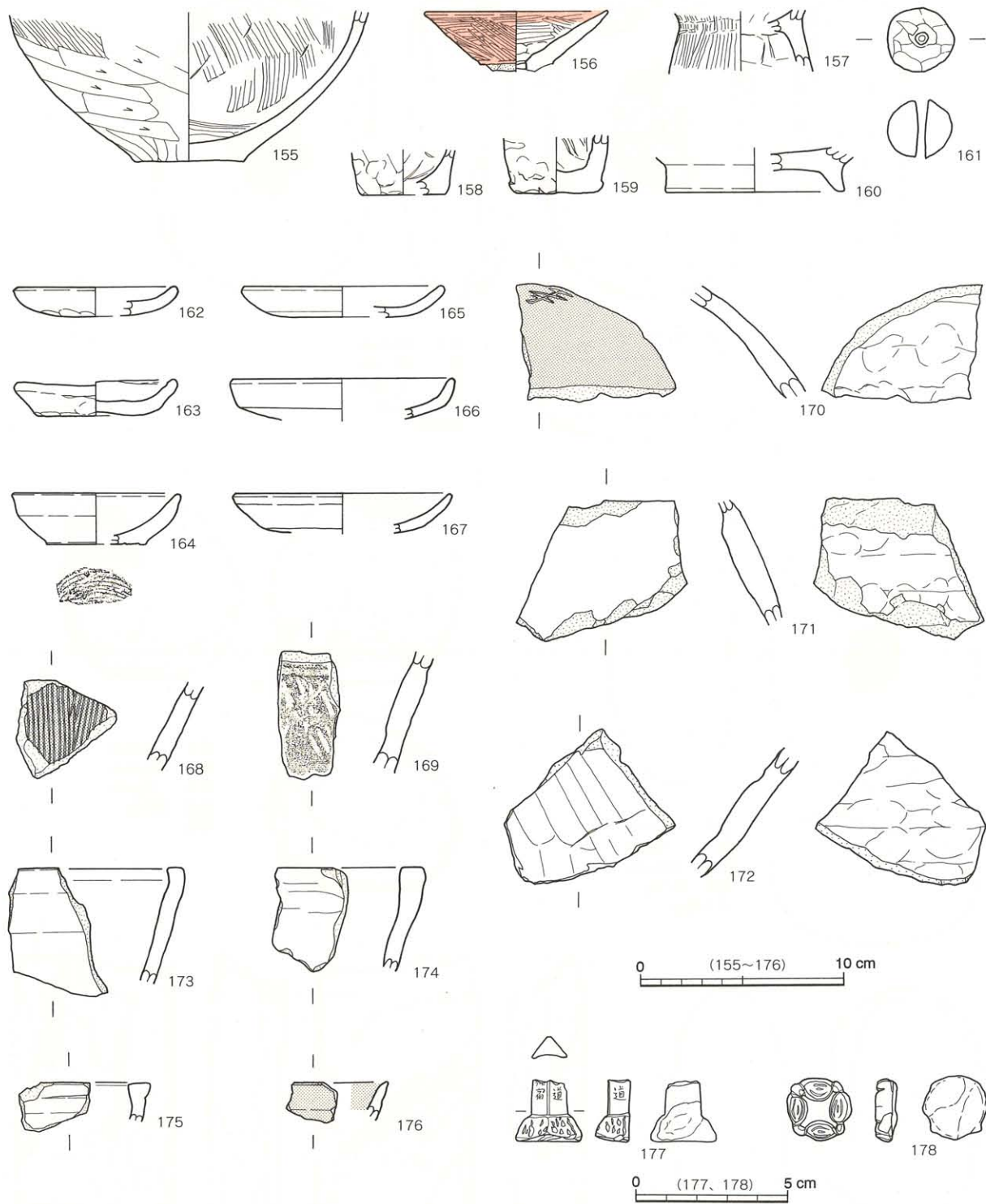
154



長さ (65.2mm) 重量 (50.9g)
幅 (32.4mm) 凝灰岩
厚さ (14.6mm)



第94図 遺構外出土石器実測図(2)



第95図 遺構外出土土師器・陶器・他実測図

第6表 遺構外出縄文土器観察表

図版番号	器種	部位	胎土	色調	器形と文様の特徴 その他 (cm)	時期	出土地点
第89図 1	深鉢	口縁部	繊維	にぶい黄橙	平縁 半截竹管状工具による横位波状文	前期前半	チGrid
2	深鉢	胴部	繊維	橙	半截竹管状工具による弧の浅いコンパス文	前期前半	拡張区
3	深鉢	胴部	繊維	橙	半截竹管状工具による押し引き文	前期前半	拡張区
4	深鉢	胴部	繊維 長石	褐	斜位条線文	前期前半	イGrid
5	深鉢	胴部	繊維 長石	褐	斜位条線文	前期前半	イGrid
6	深鉢	胴部	繊維	にぶい黄褐	0段多条LR	前期前半	拡張区
7	深鉢	胴部	繊維	橙	複節RLR	前期前半	SI-1
8	深鉢	胴部	繊維	にぶい黄橙	単節RL	前期前半	拡張区
9	深鉢	底部	繊維	にぶい褐	底径 [7.8] 単節RL・LR羽状 底面無文	前期前半	チGrid
10	深鉢	胴部	石英 雲母	明褐	隆帯文楕円形区画 区画内側に沿い平行沈線文 下半半截竹管状工具による押し引き文	阿玉台 I b~II	SD-6
11	深鉢	口縁部	石英	褐	口径 [29.4] 波状縁 波頂部を境に右縦短沈線 左隆帯上刺突 地文0段多条RL 蛇行沈線 3条一単位の沈線等垂下	加曾利E II	SI-2他
12	深鉢	口縁部	長石	橙	平縁 口縁下沈線1条 隆帯と沈線による区画文 0段多条RL	加曾利E II	SD-6
13	深鉢	口縁部	石英	灰黄	平縁 口縁下沈線1条 隆帯と沈線による区画文 単節LR	加曾利E II	エGrid
14	深鉢	口縁部		にぶい赤褐	平縁 口縁下沈線1条 隆帯と沈線による区画文 単節RL	加曾利E II	イGrid
15	深鉢	口縁部		橙	平縁 口縁下沈線1条 隆帯と沈線による区画文 条線文	加曾利E II	SI-5
16	深鉢	口縁部		にぶい褐	平縁 口縁下沈線1条 隆帯と沈線による区画文 0段多条RL	加曾利E II	チGrid
17	深鉢	口縁部		橙	平縁 浅い沈線による曲線的区画文 0段多条RL 区画外は無文	加曾利E III	エGrid
18	深鉢	口縁部	石英	にぶい橙	波状縁 口縁下波状縁に沿い無文 微隆起線文と沈線による区画文 交互に単節RL	加曾利E III	カ・キGrid
19	深鉢	口縁部	石英 雲母	明赤褐	平縁 隆帯と沈線による区画文 0段多条RL	加曾利E III	SD-6
20	深鉢	口縁部		橙	波状縁 口縁下波状縁に沿い無文 微隆起線文と沈線による区画文 0段多条RL	加曾利E III~	アGrid
21	深鉢	口縁部	石英	橙	波状縁 口縁下波状縁に沿い無文 微隆起線文と沈線による区画文 0段多条RL	加曾利E IV	SI-1
22	深鉢	口縁部		にぶい褐	平縁 地文複節LRL 垂下沈線文 外面・断面に炭化物付着	加曾利E III~	エGrid
23	深鉢	口縁部	石英 雲母	橙	平縁 口縁下無文帯 0段多条RL	加曾利E III~	キGrid
24	深鉢	口縁部	石英	橙	波状縁 口縁下水平に沈線が巡り、上半無文帯、下半条線文	加曾利E IV	SI-1
25	深鉢	口縁部	長石	褐灰	波状縁 口縁下波状縁に沿い無文 単節RL	加曾利E III~	SI-2
26	深鉢	口縁部	長石	橙	平縁 単節LR	加曾利E III~	E8区
27	深鉢	口縁部	長石 石英 雲母	にぶい褐	平縁 地文複節RLR 連弧文	加曾利E III	SK-21
28	深鉢	口縁部		明赤褐	平縁 貼り付け文後幅広の沈線文	曾利 II ~	イGrid
29	深鉢	口縁部		浅黄橙	平縁 内側に貼り付け文 口唇部上から斜位沈線文	曾利 II ~	SX-3
30	深鉢	口縁部		橙	平縁 内側に貼り付け文 斜位沈線文	曾利 II ~	SI-1
31	深鉢	胴部	雲母	灰褐	有段状 広範囲貼り付け上に幅広の沈線文 下半無文	曾利 II ~	イGrid
32	深鉢	胴部		にぶい橙	隆帯と沈線による区画文 刺突	大木 8 b~	イGrid
第90図 33	深鉢	胴部		にぶい褐	隆帯と沈線による区画文 沈線文	加曾利E I	キGrid
34	深鉢	胴部		明赤褐	隆帯と沈線による区画文 円形刺突 燃糸文L	加曾利E II	エGrid
35	深鉢	胴部	長石	にぶい赤褐	頸部沈線1条 以下無文 区画内条線文	加曾利E II	エGrid
36	深鉢	胴部		黄橙	上半無文 下半隆帯と沈線垂下 複節RLR	加曾利E I ~	SK-16
37	深鉢	胴部		橙	2条の横位沈線下地文単節RL 2条の垂下沈線文	加曾利E II	F7区

図版番号	器種	部位	胎土	色調	器形と文様の特徴 その他 (cm)	時期	出土地点
38	深鉢	胴部	石英	橙	曲線的隆帯文 単節RL	加曾利EⅡ～	SI-1
39	鉢	胴部	雲母	にぶい黄橙	隆帯と沈線による曲線文 単節RL	加曾利EⅡ	シGrid
40	深鉢	胴部	雲母	にぶい赤褐	地文0段多条RL 上端横位沈線1条 2条と3条の垂下沈線文 磨り消しなし	加曾利EⅡ	エGrid
41	深鉢	胴部		橙	地文単節RL 2条の垂下沈線文 沈線間磨り消し	加曾利EⅡ	エGrid
42	深鉢	胴部	長石	にぶい黄橙	地文0段多条RL 沈線による直線的区画 沈線間磨り消し	加曾利EⅡ	エGrid
43	深鉢	胴部		橙	地文0段多条RL 3条の垂下沈線文 磨り消しなし	加曾利EⅡ	カGrid
44	深鉢	胴部		赤	地文0段多条RL 3条の垂下沈線文 沈線間磨り消し	加曾利EⅡ	エGrid
45	深鉢	胴部	石英	にぶい黄橙	地文0段多条RL 曲線的な沈線文 沈線間磨り消し	加曾利EⅡ	アGrid
46	深鉢	胴部	石英	にぶい黄橙	地文単節LR 3条の垂下沈線文 沈線間磨り消し	加曾利EⅡ	アGrid
47	深鉢	胴部	石英 雲母	明赤褐	地文0段多条RL 3条の垂下沈線文 沈線間磨り消し	加曾利EⅡ	チGrid
48	鉢	胴部		明赤褐	上半無文 屈曲部幅広の沈線1条 沈線間刺突列 下半0段多条RL	加曾利EⅡ～	アGrid
49	深鉢	胴部	石英	にぶい黄橙	地文0段多条RL 微隆起線文による曲線文	加曾利EⅢ	SI-1
50	深鉢	胴部	石英	橙	両側に沈線に沿う微隆起線文 単節RL	加曾利EⅢ	SI-1
51	深鉢	胴部	長石 石英	明赤褐	微隆起線文による曲線文 0段多条RL	加曾利EⅢ	カ・キGrid
52	深鉢	胴部	石英	橙	微隆起線文による曲線文 単節RL	加曾利EⅢ	SI-1
53	深鉢	胴部		褐灰	微隆起線文による曲線文 単節RL 外面炭化物付着	加曾利EⅢ	SI-3
54	深鉢	底部直上		にぶい黄橙	無節Lr	中期後半	SI-5
55	深鉢	底部	長石	明赤褐	単節LR 底部直上・底面無文	中期後半	カ・キGrid
56	深鉢	胴部		橙	条線文	中期後半～	キGrid
57	深鉢	底部直上		明赤褐	6～8条一単位の条線文 底部直上無文	中期後半～	イGrid
第91図 58	深鉢	口縁部		にぶい黄橙	平縁 7～8条一単位の曲線的条線文	中期末～	キGrid
59	深鉢	口縁部直下	石英	にぶい褐	口縁部幅広く4条の沈線文間に円形刺突列 下半沈線文	称名寺?	SK-11
60	深鉢	胴部	長石	黒	単節RL 波状に垂下する条線文	中期末～	エGrid
61	深鉢	口縁部	長石	明黄褐	平縁 口縁部中央が凹む大きな円形貼り付け 下半垂下沈線文 地文無文	堀之内1	SK-20
62	深鉢	口縁部	石英	にぶい赤褐	波状縁 口縁下波頂部で途切れる沈線文 地文単節LR 垂下沈線文	堀之内1	F8区
63	深鉢	口縁部	石英	にぶい赤褐	波状縁 波頂部円形刺突 横位沈線文 下半地文無文 垂下沈線文	堀之内1	SI-8
64	深鉢	口縁部	石英 雲母	灰黄褐	波状縁 口縁に沿った沈線文 地文単節LR 波頂部より蕨手文垂下 内外面炭化物付着 朝顔形	堀之内1	ウGrid
65	鉢	口縁部	長石	明褐	波状縁 波頂部より貼り付け垂下 円形刺突 他は無文	堀之内1	アGrid
66	鉢	口縁部		にぶい黄橙	波状縁 口縁下・屈曲部に沈線1条 他は無文	堀之内1～	C4区
67	深鉢	胴部		にぶい赤褐	地文0段多条RL 曲線的沈線文 沈線間磨り消し	堀之内1	イGrid
68	深鉢	胴部	長石	にぶい赤褐	地文複節RLR? 曲線的沈線文 磨り消しなし	堀之内1	SI-3
69	深鉢	胴部	長石	黒褐	地文単節LR 波状沈線垂下	堀之内1	エGrid
70	深鉢	胴部		橙	地文単節LR 縦位に連続する弧状の沈線文	堀之内1	カ・キGrid
71	深鉢	胴部		橙	地文無文 集合沈線による渦巻き文 朝顔形	堀之内1	チGrid
72	深鉢	胴部	長石	明赤褐	地文単節LR 沈線文 磨り消しなし	堀之内1	C4区
73	鉢	胴部	長石	橙	屈曲部にかけて「8」字状貼り付け文 地文単節LR 斜沈線文 磨り消しなし	堀之内1	アGrid
74	鉢	胴部	長石	にぶい橙	屈曲部にかけて「8」字状貼り付け文 地文単節LR 半截竹管状 工具による斜行文	堀之内1	チGrid

図版番号	器種	部位	胎土	色調	器形と文様の特徴 その他 (cm)	時期	出土地点
75	深鉢	口縁部	長石	にぶい褐	波状緑 地文無文 多段の平行沈線間に縦区切り文 内面口唇部 細かな斜刻文 平行沈線文	加曾利B1	SI-5
76	鉢	口縁部		にぶい黄橙	平緑 地文縄文原体不明 平行沈線文	加曾利B1	オGrid
77	鉢	口縁部	長石	黒褐	平緑 横位平行沈線文 単節LR 沈線間磨り消し	加曾利B1	エGrid
78	深鉢	口縁部		にぶい黄	平緑 横位平行沈線文 単節LR 「の」の字文?	加曾利B1	カ・キGrid
79	深鉢	口縁部	長石	にぶい黄橙	波状緑 横位平行沈線間単節LR 他は磨り消し	加曾利B1～	SD-6
80	浅鉢	口縁部	長石	にぶい橙	波状緑 口唇部斜刻文 他無文	加曾利B1～	アGrid
81	鉢?	胴部	長石	にぶい赤褐	横位平行沈線文 単節LR 沈線間磨り消し	加曾利B1～	SX-1
82	鉢?	胴部		にぶい黄橙	横位平行沈線文 単節LR 縦区切り文 磨り消し	加曾利B1～	キGrid
83	深鉢	口縁部	長石	明赤褐	ゆるやかな波状緑 地文単節LR 2条の平行沈線 粗製	後期	SI-4
84	深鉢	口縁部		にぶい橙	平緑 地文単節RL 口縁に沿い複数の沈線 磨り消しなし 粗製	後期	SI-8
85	深鉢	口縁部	長石	にぶい褐	波状緑 地文0段多条LR? 口縁に沿い沈線文2条 粗製	後期	イGrid
86	深鉢	口縁部		橙	波状緑 口縁に沿い紐線文 地文単節LR 斜行沈線文 粗製	堀之内2～	エGrid
87	深鉢	胴部	長石	橙	地文単節LR? 紐線文 斜行沈線文 粗製	堀之内2～	SI-2
88	深鉢	口縁部		にぶい褐	平緑 斜位条線文 粗製	加曾利B～	SD-6
89	深鉢	口縁部		橙	波状緑 0段多条RL 粗製	堀之内2～	カ・キGrid
90	深鉢	口縁部	石英	にぶい赤褐	平緑 裏面浅く凹む 単節RL 粗製	堀之内2～	SI-1
91	深鉢	口縁部	長石	灰黄褐	波状緑 裏面口縁に沿い稜 複節LRL 粗製	加曾利B	イGrid
92	深鉢	口縁部	長石	褐灰	平緑 ヘラ状工具による整形痕?	後期	SI-1
93	深鉢	胴部	長石	にぶい橙	ヘラ状工具による整形痕?	後期	SI-1
第92図 94	深鉢	底部		にぶい黄橙	尖底部 無文 先端部が凹んでいる	早期中葉～	コGrid
95	深鉢	底部	長石 石英 雲母	明赤褐	底径 [7.8] 地文0段多条RL 2条一単位の隆帯文垂下 底部直上・ 底面無文	加曾利E I～	エGrid
96	深鉢	底部	石英	明赤褐	底径6.0 ヘラなどで 外面・底面無文 底面凸レンズ状	中期後半	SI-1
97	深鉢	底部		にぶい橙	底径 [5.4] ヘラケズリ 外面・底面無文 底面凸レンズ状	中期後半	ア～オGrid
98	深鉢	底部	長石	にぶい黄橙	底径 [4.7] 磨き 外面・底面無文	中期後半～	SI-1
99	深鉢	底部	石英	にぶい黄褐	底径5.2 ヘラ磨き 外面・底面無文	中期後半～	カGrid
100	深鉢	底部	石英 雲母	にぶい黄褐	底径6.7 ヘラ磨き 外面・底面無文 底面やや凸レンズ状	中期後半	C4区
101	深鉢	底部	長石	にぶい赤褐	底径 [4.2] 磨き 外面・底面無文	中期後半～	SI-1
102	深鉢	底部	石英	にぶい褐	底径6.8 ヘラなどで 無文 底面やや上げ底 網代痕→ケズリ	後期前半～	ウGrid
103	深鉢	底部		にぶい橙	底径 [10.0] 無文 底面網代痕 ザル編み 1本越え1本潜り1本送り	後期前半～	SI-5

第7表 遺構外出土縄文土製品観察表

図版番号	種類	長さ×幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	周縁調整	部位	残存(%)	文様	時期	その他	出土地点
第92図 104	土器片錘	6.0 × 4.6	1.0	49.5	全周研磨	口縁部	完形	隆帯と沈線による渦巻文 原体不明縄文	加曾利E I ~ II	切り目2ヶ所 長石・石英多量	SD-2
105	土器片錘	4.6 × 3.6	1.3	25.6	全周研磨	口縁部	完形	楕円形区画内条線文	加曾利E III	切り目2ヶ所	F7区
106	土器片錘	3.7 × 3.5	1.1	16.8	全周研磨	胴部	完形	隆帯・沈線 複節RLR	加曾利E II	切り目2ヶ所 石英多量	SD-6
107	土器片錘	3.4 × 3.2	0.9	12.9	全周研磨	胴部	完形	単節RL? 沈線文	加曾利E II ~ III	切り目2ヶ所	SI-9
108	土器片錘	4.5 × 3.7	0.9	21.1	一部研磨	胴部	完形	地文0段多条RL 沈線文	加曾利E II ~ III	切り目2ヶ所 石英・雲母多量	イGrid
109	土器片錘	(2.5) × 2.3	1.3	(16.9)	残部全周研磨	胴部	一部欠	地文L撚糸文 2条の平行沈線間磨り消し	加曾利E II ~ III	切り目1ヶ所	SD-6
110	土器片錘	3.7 × 3.7	1.1	15.1	全周研磨	胴部	完形	地文単節RL 沈線間磨り消しなし	加曾利E II	切り目1ヶ所 長石多量	E区壁
111	土器片錘	(4.7) × 3.6	0.8	(16.4)	一部研磨	胴部	75	地文複節LRL 浅い沈線文	加曾利E II	切り目1ヶ所	クGrid
112	土器片錘	3.4 × 2.9	0.9	11.5	全周研磨	胴部	完形	地文単節RL 微隆起線文 沈線文	加曾利E II ~	切り目2ヶ所	エGrid
113	土器片錘	(6.5) × (7.1)	1.0	(56.0)	残部全周研磨	胴部	75	微隆起線文 単節RL	加曾利E IV	切り目1ヶ所 石英多量	SI-2
114	土器片錘	5.3 × 3.9	1.1	27.9	一部研磨	口縁部	完形	幅の広い沈線文 単節LR	加曾利E IV	切り目2ヶ所 長石多量	カ・キGrid
115	土器片錘	2.7 × 2.8	0.7	8.0	全周研磨	口縁部	完形	2条の平行線間に縄文?	加曾利E III ~	切り目2ヶ所	シGrid
116	土器片錘	(5.8) × 4.3	1.0	(22.6)	一部研磨	胴部	60	浅い沈線1条 単節RL	加曾利E III ~	切り目1ヶ所 長石多量	SI-2
117	土器片錘	5.6 × 3.2	1.0	21.3	全周研磨	口縁部	完形	沈線による曲線的区画区画内単節RL?	加曾利E IV	切り目2ヶ所	SI-1
118	土器片錘	4.5 × 3.8	1.0	21.1	一部研磨	胴部	完形	R撚糸文	中期後半	切り目2ヶ所	拡張区
119	土器片錘	(6.7) × 3.9	1.0	(31.3)	残部全周研磨	胴部	75	0段多条RL	中期後半	切り目1ヶ所	SI-9
120	土器片錘	4.2 × 3.5	0.8	15.5	全周研磨	胴部	完形	単節RL	中期後半	切り目2ヶ所 長石多量	SI-1
121	土器片錘	4.3 × 3.7	1.0	21.3	全周研磨	胴部	完形	単節RL	中期後半	切り目2ヶ所 石英多量	SD-2
122	土器片錘	3.7 × 2.7	1.0	12.6	全周研磨	胴部	完形	単節RL? 粗い原体	中期後半	切り目2ヶ所	SI-1
123	土器片錘	3.4 × 3.0	0.9	9.9	全周研磨	胴部	完形	単節RL	中期後半	切り目2ヶ所	SI-1
124	土器片錘	4.7 × 4.2	1.1	31.0	全周研磨	胴部	完形	単節LR	中期後半	切り目2ヶ所	SI-3
125	土器片錘	(3.5) × 3.4	1.0	(14.9)	全周研磨	胴部	一部欠	0段多条RL	中期後半	切り目1ヶ所	SI-4
126	土器片錘	(3.1) × 3.1	0.7	(6.6)	残部全周研磨	口縁部	50	複節RLR	中期後半	切り目1ヶ所 長石多量	カ・キGrid
127	土器片錘	3.3 × 2.9	1.1	12.9	全周研磨	胴部	完形	単節?	中期後半	切り目2ヶ所	SI-2
128	土器片錘	(3.4) × 3.8	0.9	(17.2)	残部全周研磨	胴部	75	0段多条RL	中期後半	切り目1ヶ所	SI-4
129	土器片錘	4.1 × 4.3	0.8	19.6	全周研磨	胴部	完形	単節RL	中期後半	切り目2ヶ所 長石多量	SI-1
130	土器片錘	3.4 × 4.8	1.0	17.5	全周研磨	胴部	完形	条線文	中期後半	切り目2ヶ所 石英・雲母多量	SI-1
131	円盤	(5.8) × 6.2	2.2	(54.2)	一部研磨	口縁部	一部欠	把手片側隆帯文 沈線文 単節RL	加曾利E I ?	把手部利用 石英・雲母多量	シGrid
132	円盤	5.7 × (3.3)	0.9	(22.0)	残部全周研磨	胴部	50	地文複節LRL 平行沈線間磨り消し	加曾利E III ?	円形	SI-4
133	円盤	4.0 × 3.9	0.9	12.2	全周研磨	口縁部	完形	単節RL	中期後半	方形	SI-4
134	円盤	(2.9) × 3.2	0.8	(10.1)	全周研磨	胴部	一部欠	単節RL	中期後半	円形	SD-6
135	円盤	5.1 × 4.8	0.8	24.9	全周研磨	胴部	完形	複節RLR	中期後半	方形	アGrid
136	円盤	3.4 × 2.1	0.9	7.8	全周研磨	胴部	完形	縄文あり 原体不明	中期後半	楕円形	アGrid
137	円盤	3.1 × 3.0	0.8	9.2	全周研磨	胴部	完形	単節LR	中期後半	円形	SI-1
138	円盤	4.2 × (3.1)	0.8	(14.1)	残部全周研磨	胴部	75	単節RL	中期後半	方形	クGrid
139	円盤	(2.2) × 3.1	0.8	(6.6)	残部全周研磨	胴部	50	単節LR	中期後半	円形	イGrid

図版番号	種類	長さ×幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	周縁調整	部位	残存(%)	文様	時期	その他	出土地点
第92図 140	円盤	3.8 × 4.6	0.9	19.0	全周研磨	胴部	完形	条線文	中期後半	方形	イGrid
141	円盤	2.9 × 2.8	0.8	8.6	全周研磨	胴部	完形	単節LR	中期後半	円形穿孔 裏面中央に 長石多量	ア～オGrid

第8表 遺構外 出土遺物観察表（古墳時代以降）

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 155	壺甕類	口径 — 底径 5.4 器高 (7.2)	球胴甕か球胴壺。底部が平底を呈する壺甕類の体部下位から底部にかけての破片。体部は卵状を呈するものと思われる。	外面は底部から体部にかけて縦方向のヘラナデ後、横方向のヘラ削りを施す。内面は底部に横方向のハケ調整、体部に縦方向のハケ調整を施す。	長石・石英を少量 外面は褐色、 内面は黒褐色 良好	20%残存 表土
第95図 156	器台	口径 [8.8] 底径 — 器高 (2.8)	受け部が脚部よりも小さくなる器台の受け部片。脚部との境に稜をもつ。	内外面に縦横のヘラミガキを施す。外面と口唇部内面に赤彩。	長石微量、雲母中量 外面明赤褐色、 内面橙色 良好	10%残存 表土
第95図 157	甕?	口径 — 底径 — 器高 (3.0)	台付甕脚台部か?	外面は縦方向のハケ調整及び指ナデ、内面はヘラナデを施す。	長石少量、石英中量、 雲母微量 外面にぶい黄橙色、 内面にぶい黄橙色 不良	表土
第95図 158	鉢	口径 — 底径 [4.0] 器高 (2.2)	底部が平底を呈する鉢の底部片。ミニチュアか?	外面は縦方向のヘラナデ、指頭による押さえ、内面はヘラナデを施す。	長石中量、石英微量、 雲母少量 外面黒色、内面黒色 普通	10%残存 表土
第95図 159	鉢	口径 — 底径 [3.6] 器高 (2.8)	底部が体部より突出する鉢の底部片。ミニチュアか?	外面は指頭による押圧、内面はヘラナデを施す。	長石中量、石英微量、 雲母少量 外面にぶい黄色、 内面黄褐色 良好	10%残存 表土
第95図 160	須恵器 高台杯	口径 — 底径 [8.8] 器高 (1.4)	須恵器高台杯の高台部片。	高台部外面はヘラナデを施し、底部は回転ヘラ切り後、ナデを施す。	長石中量、石英少量、 雲母多量 外面灰色、内面灰色 やや不良	15%残存 表土
第95図 162	土師質土器 小皿	口径 [4.0] 底径 [3.4] 器高 (1.5)	底部がやや丸底状を呈する小皿片。口唇部が丸くなり内湾する。	口唇部外面から内面にかけて回転ナデを施す。	長石中量、石英微量 外面明赤褐色、 内面明赤褐色 普通	35%残存 中世 包含層
第95図 163	土師質土器 小皿	口径 [8.0] 底径 [5.4] 器高 (1.7)	底部が丸底を呈する小皿。器形全体がゆがんでいる。	内外面共に回転ナデ。底部は回転ヘラ切り後未調整。	長石・雲母を微量 外面にぶい赤褐色、 内面にぶい赤褐色 やや不良	65%残存 中世表土
第95図 164	土師質土器 小皿	口径 [8.4] 底径 [4.8] 器高 (2.5)	底部が平底を呈し稜を作る小皿片。	内外面共に回転ナデを施す。底部は糸きり後未調整。	長石微量、雲母少量 外面橙色、 内面にぶい橙色 良好	45%残存 表土
第95図 165	土師質土器 小皿	口径 [10.4] 底径 — 器高 (1.5)	底部を欠損するが丸底を呈する小皿片。	口唇部内外面に回転ナデを施すが、他は未調整。	長石少量、雲母微量 外面にぶい橙色、 内面明赤褐色 普通	30%残存 中世表土
第95図 166	土師質土器 小皿	口径 [11.0] 底径 — 器高 (2.0)	丸底を呈する小皿の口縁部片。	外面に回転ナデを施す。	長石微量 外面褐色、内面橙色 良好	10%残存 中世表土
第95図 167	土師質土器 皿	口径 [10.8] 底径 — 器高 (1.9)	底部が丸底を呈する皿の口縁部片。	外面に回転ナデを施す。	長石・雲母を少量 外面橙色、 内面明赤褐色 良好	中世 表土
第95図 168	常滑 播鉢	口径 — 底径 — 器高 (4.1)	粗い溝を有する播鉢体部片。	外面に回転ナデを施す。	長石・石英を微量 外面明褐色、 内面褐色 良好	表土
第95図 169	渥美 壺甕類	口径 — 底径 — 器高 (5.4)	壺甕類の体部下半片。	外面にロクロの目かもしれない一条の沈線と、太い平行線の叩き目を施す。	長石微量 外面褐灰色、 内面褐灰色 良好	表土
第95図 170	常滑 壺甕類	口径 — 底径 — 器高 (5.2)	壺甕類の体部片。	外面に記号ではないが焼成前についたへこみあり。厚い釉の付着。	長石少量 外面オリーブ黄色、 内面黄灰色 良好	中世 表土
第95図 171	渥美 壺甕類	口径 — 底径 — 器高 (4.7)	壺甕類の体部片。	内面に回転ナデ及び指頭による押圧を施す。外面に灰緑色の釉付着。	長石微量 外面灰色、 内面灰色 良好	中世被熱して 表面が荒れて いる表土

図版番号	器種	法量 (cm)	器形の特徴	技法の特徴	胎土・色調・焼成	備考
第95図 172	常滑 壺甕類	口径 — 底径 — 器高 (6.7)	壺甕類の体部片。	外面に斜方向のヘラナデ、内面にヨコナデ及び指頭による押圧を施す。	長石中量、石英少量 外面褐灰色、 内面黄灰色 良好	中世 表土
第95図 173	土師質土器 内耳鍋	口径 — 底径 — 器高 (5.7)	口縁がハの字状に開く内耳鍋の口縁部片。	内外面に回転ナデを施す。	長石・石英を微量、 雲母多量 外面黒褐色、 内面にぶい橙色 普通	15c後半～ 16c前半 表土
第95図 174	土師質土器 内耳鍋	口径 — 底径 — 器高 (5.1)	口縁がハの字状に開く内耳鍋の口縁部片。	内外面にヘラナデを施し、口唇部はヘラで平らにする。	長石・石英微量、 雲母多量 外面灰色、 内面にぶい褐色 良好	表土
第95図 175	土師質土器 内耳鍋	口径 — 底径 — 器高 (1.9)	口唇部が平らになる内耳鍋の口縁部片。	外面に横方向のヘラナデを施す。	長石中量、石英微量、 雲母多量 外面にぶい褐色、 内面にぶい黄褐色 普通	表土
第95図 176	山茶碗？	口径 — 底径 — 器高 (1.8)	山茶碗の口縁部片。口唇部は丸く尖る。	内外面に回転ナデを施し、外面には鮮緑色の釉が流れる。	長石微量 外面淡黄色、 内面灰オリーブ色 良好	中世 表土

図版番号	器種	法量				特徴	胎土・色調・焼成	備考
		長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)			
第95図 161	土製品 土玉	2.9	3.1	—	25.1	孔の径は0.5cm、その周囲をヘラナデで整える。	長石中量、石英少量、 雲母微量 暗灰黄色、良好	100% 表土
第95図 177	土製品 箱庭具	2.0	2.1	1.1	2.3	道標のミニチュア。「□道」、「□宿」と側面に線刻され、表面にごく淡い緑黄色の釉がかかる。	淡黄色、普通	表土
第95図 178	土製品 泥面子	2.1	2.2	0.6	2.7	表面に4つの花卉状モールドを配する。裏面は未調整。	長石微量 橙色、不良	100% 確認面

第5節 まとめ

神明遺跡第3次調査で検出された遺構は、竪穴住居跡10軒、土坑21基、溝8条、その他の遺構3基であり、加えて埋没谷と中世ピット群の調査を行った。約4,400㎡という調査面積に対して、この遺構密度は決して濃密なものではなく、出土遺物も膨大というほどではなかった。しかし、今回得られた情報は、単純に遺構の数や遺物の量でははかることのできない有益かつ貴重なものであった。特に、常名台に広がる遺跡の性格を集約的に把握するという大目的においては、期待通りの成果を上げることができたばかりでなく、予想外の新資料の発見から、学術的にも重要な資料を得ることができた。以下、その要点を記して第3次調査のまとめとしたい。

常名台全体における神明遺跡第3次調査の意義

神明遺跡の第3次調査区は、北西原遺跡と山川古墳群の中間的な位置に設定されている。これは、1.北西原遺跡で確認されている古墳時代前期の大集落が南方にどれほど広がっているか、2.山川古墳群内に点在する方形周溝墓や円墳の北限はどこか、の2点を確認するためである。古墳時代の集落域と墓域を確定することは、すなわち常名台に住んだ人々の空間認識を知ることであり、台地南縁の首長墓、常名天神山古墳・瓢箪塚古墳との関係もそれを踏まえた上で議論されることになるであろう。

調査の結果、古墳時代の住居跡は9軒検出され、すべて北側の集落と同じ前期に属するものと判明した。住居跡は調査区の南部にまで広がっていたが、北西原遺跡にみる稠密さに比べるとはるかに散漫とした分布であり、集落の周縁部的な様相が窺えた。西側の神明遺跡第1次調査区や、さらにその南の山川古墳群の調査区には、同期の住居跡が1軒も検出されていないことを踏まえると、およそ今回の調査区が集落の南限であったと結論付けられる。同時に、方形周溝墓や円墳の存在は一切認められず、拡張トレンチ1・2および拡張区においても、その痕跡は確認されなかった。このことから、山川古墳群に関連する墓域は北側に広がってはならず、その北限は18トレンチ以南、奇しくも現在の神明遺跡と山川古墳群の境界線あたりに設定することができたのである。

以上から、古墳時代前期の集落域は、およそ南北225m、東西150mの広大な領域にわたること、一方の墓域はそれと約50m程の間隔を置いて南方に、南北100m、東西250mの範囲で広がることが明らかとなった。遺構の密度の問題はさておき、この広がり方から分かることは、集落規模が弁才天遺跡にみる同期の集落の約2倍あり、常名台のみならず周辺地域の中でも中核的な集落として拡充を極めていたということである。そして、山川古墳群の領域は、集落域とは隔絶している点で、常名天神山古墳のある台地南縁部の方に強い求心性があったらしいことも推測できる。こうした事柄に確証を得るためには、さらなる調査が必要であることは言を俟たない。しかし、上記のような見通しをもつことは今後の調査・研究の進展に不可欠なものであり、第3次調査の大きな成果の一つと考えることができよう。

各時代ごとの調査成果

今回検出された遺構、遺物からも貴重な知見が得られている。主要なものを時代ごとに概述しておく。

1. 旧石器時代

3点の石器が発見された。2点はナイフ形石器で、1点はスポールである。この内2点は住居や土坑の壁面から発見されており、その出土レベルを記録することができた。ローム層位に対照しておよそ2万7千年

前の石器と考えることができた。なお、発見地点にテストピットを穿ったが、結局遺構や追加資料を見つけることはできなかった。

2. 縄文時代

加曽利EⅡ段階の住居跡を1軒検出した。直径7mのやや大型の住居跡で、炉には土器が埋設されていた。第1次調査から数えて中期の住居は6軒目となるが、当住居はそれらより1～2段階古いものとされる。神明遺跡の北側部分には、中期を主体とした集落の存在が想定されているが、それとはやや距離をもちながら一群が営まれていた様子が窺える。その他に、ほぼ同時期の「地点貝塚」を2基、粘土採掘坑を1基検出した。詳細は付編に記した通りである。なお、かつて存在したと言われる「常名貝塚」は、前期の土器を伴っていたらしく、今回検出したものとは別のものと考えられる。また、遺構ではないが、埋没谷の堆積土中に加曽利Ⅱ式から加曽利B1式段階の土器が埋没している様子を確認した。これに相応する時期の遺構が未調査部分に伏在しているものと思われる。

3. 古墳時代

前述した通り、住居跡が9軒検出され、土器の様相はすべて前期に属するものと判断された。土器群の分類、編年については付編に詳しいが、同じ前期の中にも若干の時期差を見込むことができ、およそ庄内併行期と布留併行期の2つの段階に大別された。この時期差は、常名台における集落の動態を探る鍵になると期待される。なお、該期の土器に明確な編年の位置付けがなされるのは、当地域では初めてのことであり、今回の成果の一つに数えられよう。さらに、個々の土器にも資料的に価値の高いものが見つまっている。北陸に祖形が求められる結合器台や、東海・南関東からの影響を思わせるパレス・スタイルの壺などはその筆頭である。他地域からの影響が窺える反面、装飾や器面調整などには在地的な要素が色濃く表れており、土器作りの情報、ひいては文化の伝達と摂取のあり方をそこに観て取ることができる。

4. 中世

中世の遺構は、土坑4基以上、薬研堀の溝1条、掘立柱建物跡の柱穴とみられるピット群が複数群、埋没谷の中の整地遺構1基が検出された。特筆されるのは、一辺70mを越える薬研堀に囲まれた掘立柱建物群の存在である。方一町程度の規模をもつ居館跡と推測されるが、当地でこれに擬せられる遺称地名や口伝は残っておらず、その存在は予想もされていなかった。戦国期頃に存在したと言われる「常名城」は、この台地上ではなく桜川低地の方に比定されている。しかし、その前身に相当するものが台地上に営まれていたという指摘があり、今後それとの関係が注目されることになる。拡張区を含めて今回の調査で確認されたのは、館の北側の溝と最低3群の建物跡であり、未調査部分にさらに大きな広がりが見込まれる。出土遺物は土師質土器と若干の陶器片、古銭「開元通寶」などで、断片資料のため年代を絞り込むことができなかった。ただし、埋没谷周辺に点在する土坑や整地遺構などから出土した壺甕類は、およそ鎌倉時代後期から室町時代前半にかけての時期と判断することができた。これらが館の経営に関連して営まれた遺構であるとすれば、居館の年代も中世前期の時期を見込むことが許されるであろう。

さて、以上のように第3次調査から得られた情報は多岐にわたり、貴重な知見にも富んでいる。大きな成果と言って憚らないところであるが、同時にこれらは今後の調査の中に生かされ、総合化を経ることで初めて真の成果となり得るであろう。さらなる調査・研究の進展に大きな期待を寄せる次第である。

第5章 総括

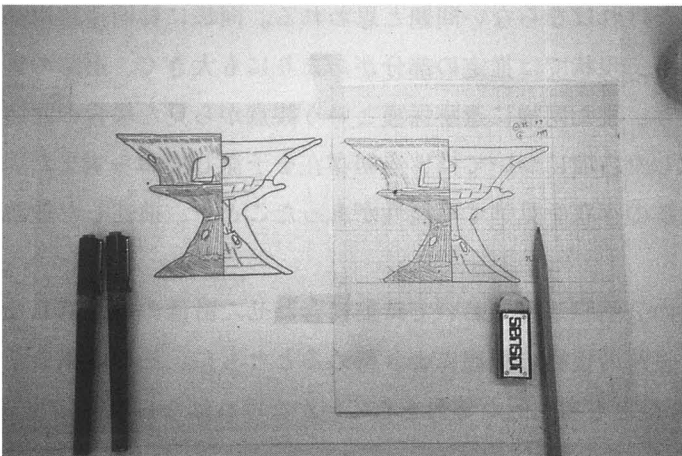
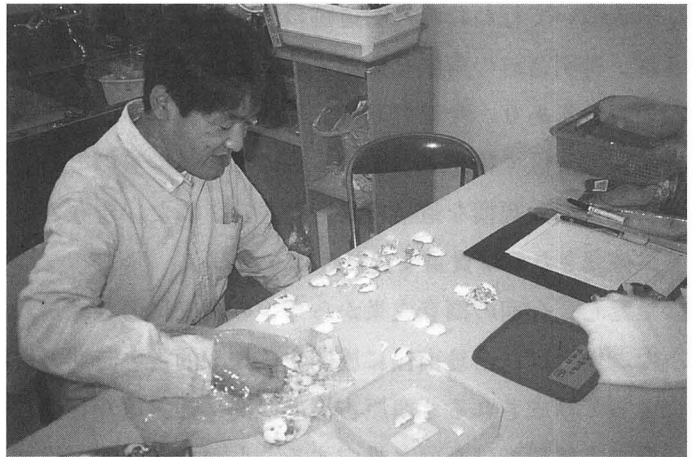
今回の発掘調査は、確認調査期間も含めて約4ヶ月間と今までの常名台遺跡群と比べても特に調査期間が長いものではないが、常名台の遺跡の性格を把握するという点では非常に大きな成果が上がったと考えている。

確認調査では、まずは神明遺跡・山川古墳群に設定したトレンチによって、これらの遺跡の広がりを確認することができた。詳しくはまとめや付編を参照されたいが、それぞれの遺跡の中心は重複せず、神明遺跡は谷津に面した北東部、山川古墳群は台地南側に遺跡の中心が存在することが明らかとなった。特に神明遺跡の東側部分で濃密な遺構の展開が想定されたことは、今後の発掘調査計画を検討する上で重要なポイントになると考えられる。それに対し、北西原遺跡の西側ではいままでもほとんど遺構が検出されないことが知られていたが、今回設定したトレンチでもあまり遺構が検出されず、どうも台地西側では遺跡が希薄になることが再度裏付けられることとなった。これらのことから、同じ台地上であっても人間の土地利用は一様ではなく、遺跡の分布や展開にかなりの差があることが推定されることとなり、特に今回のような大規模開発に伴う遺跡の把握には、十分な試掘・確認調査が必要であることが改めて痛感された。

引き続き行われた神明遺跡の第3次調査では、縄文時代中期の住居跡や古墳時代前期の住居跡が検出され、神明遺跡の南限を確認することができた。ここから出土した古墳時代前期の出土品については興味深い資料もあり、今後の研究成果が期待される。また調査区南寄りで検出された溝およびピット群は平成9年度調査区で検出されているものと一連のものである可能性が指摘され、出土した遺物とともにこの場所に中世の大規模な遺構の展開が想定された。現在のところ市内では同時代の大規模な遺跡は検出例がなく、確認されれば貴重な資料となるだろう。

ただし、今回の調査成果から今後の調査に引き継がれなければいけない問題も新たに生まれることになった。例えば、台地南側に展開する比較的古い時期の古墳によって構成される山川古墳群と、終末期古墳によって構成される北西原古墳群の間には古墳が存在しない部分が存在することから、これらは必ずしも一群の古墳群ではないと推定することができたが、以前の記録では山川古墳群の東側で箱式石棺の出土が伝えられており、必ずしも山川古墳群が古い時期の古墳だけで構成されているとは限らないことが挙げられる。このことは今回確認調査ができなかった部分も加え、常名台における古墳の消長や古墳時代の土地利用を考える上でも今後の調査によって検討されなければならない問題と思われる。同様に神明遺跡南部で検出されている溝を伴う中世の遺構群についても、現状では推定の部分があまりに大きく、遺跡の性格を考えるためには今後の継続調査が必要であろう。また同様に遺跡保護という観点から見た場合の課題としては、北西原遺跡の西北部で今回新たに確認した古墳については、当初存在を予測しておらずまた周辺でも遺構を検出していなかったため、危うく遺跡の存在を見逃す可能性があったことや、前述した遺跡範囲の把握などの問題などが挙げられる。

現在総合運動公園整備計画については、担当課の公園緑地課において時節に合わせた計画の練り直しなどが予定されている。私たちも当該地域における遺跡の性格の把握により努めるとともに、その成果を活かした遺跡の保護と有効な調査の実施のために、今後とも多角的な努力をしていかなければならない。



付 編

1. 神明遺跡の地点貝塚と粘土採掘坑について

—第6・7・8号土坑の性格をめぐって—

吉 澤 悟

はじめに

神明遺跡第3次調査では、貝殻が投棄された2基の土坑と、粘土層を穿って掘り込まれた1基の土坑が検出されている。本編の報告では、前者をいわゆる地点貝塚（第6・7号土坑）、後者を粘土採掘坑（第8号土坑）と想定し、いずれも縄文時代中期の遺構としている。ここでは、そこから出土した貝殻や小礫について若干の追加報告を行い、あわせて粘土採掘の過程にも私見を交えた補足説明を行うことにしたい。なお、貝殻の種類同定は上高津貝塚ふるさと歴史の広場学芸員の関口満氏、礫の石材同定・計測等については石器文化研究会の窪田恵一氏のお手を煩わせている。ただし、図表化および最終的な判断は筆者が行っており、同時に責も負っていることをあらかじめ明記しておく。

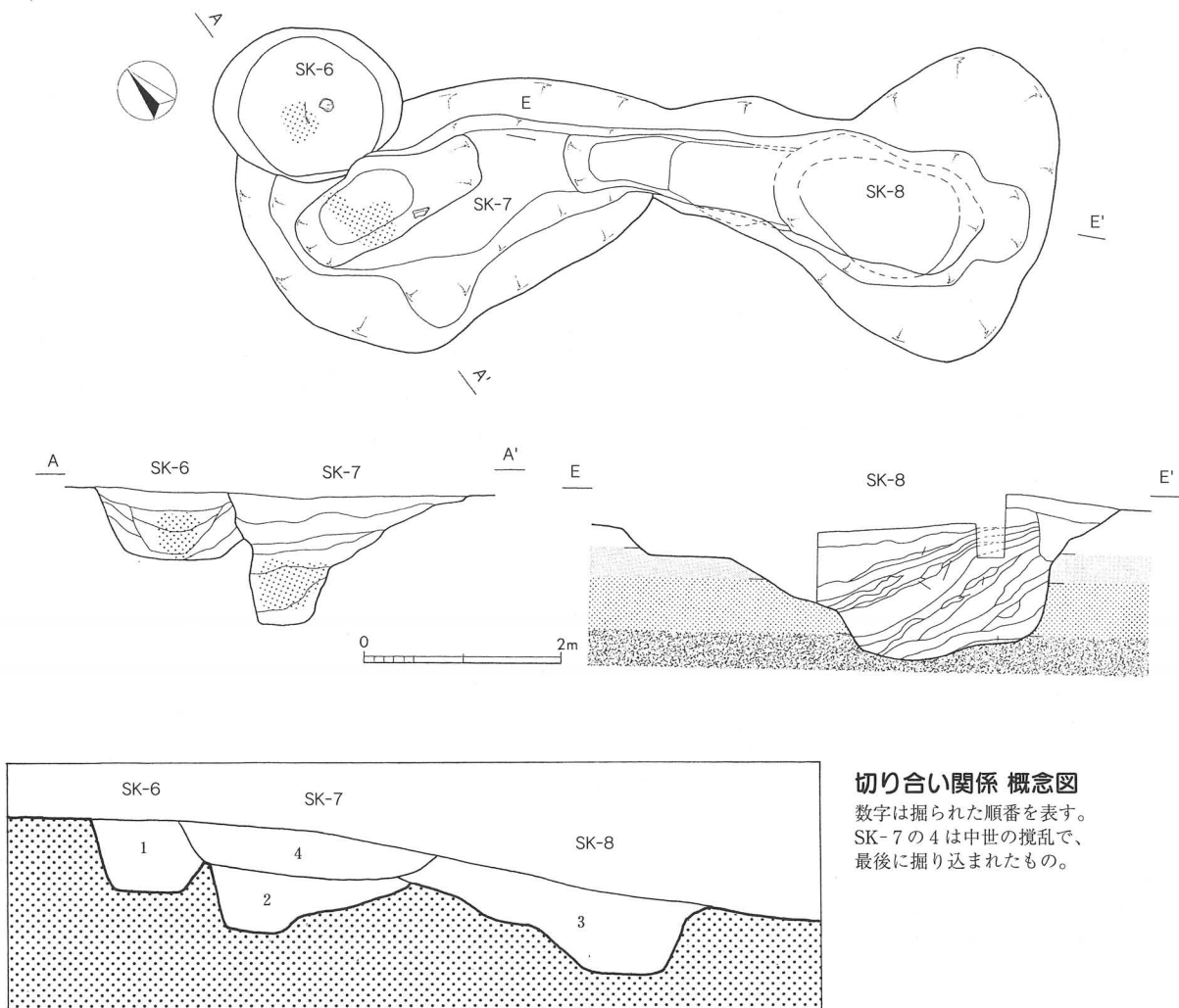
1. 土坑の切り合い関係について

第6・7・8号土坑（以下、SK-6, 7, 8）が切り合い関係をもつことは既に本編に報告した通りである。貝殻と小礫の出土は特筆されるものであるが、その帰属を明らかにしておくため、いま一度3者の切り合い関係について整理しておきたい。ちなみに、SK-6とSK-7は出土した土器からどちらも加曾利EⅡ式段階の遺構、SK-8は微細な土器片のみで時期を特定し難いが、比較的近い時期を想定している。

第1図は、調査時の所見をもとに、3つの土坑の切り合いを概念化したものである。最初に掘り込まれたのはSK-6で、これを一部壊すかたちでSK-7が掘り込まれている。ただし、SK-7は時期の異なる2回の掘り込みが重なったもので、最初に掘り込まれた下段は縄文時代の土坑であるが、その上段からは常滑甕の口縁部が出土しており、中世の攪乱土坑と考えられる。SK-6を壊しているのは、専らSK-7の上段、すなわち中世の掘り込みである。下段はSK-6の壁と接触こそしていないが、かなり近接しており、やはり切り合い関係にあったことは否めない。従って、SK-6とSK-7下段は、どちらが古いかは判然としないものの、ある程度の時期差は存在していたと考えられる。

続いて、SK-7と8の関係であるが、これはSK-7の下段を壊してSK-8が掘り込まれ、その後SK-7の上段が掘り込まれたと推定している。当初、両土坑が切り合うとは考えていなかったため、適切な位置にセクションを設けることができなかったが、土質の所見はこの前後関係を示唆していた。

以上から、土坑を古い順番に列記するならば、SK-6ないしSK-7下段、SK-8、SK-7上段、の順になる。ここで問題になるのは、最後の攪乱であるSK-7上段から出土した遺物の帰属である。ここから出土した遺物の中には、SK-6とSK-7下段の遺物の一部が含まれている可能性が高い。貝殻は一切検出されなかったが、小礫は非常に多く出土している。そこで、以下の統計処理ではSK-7出土の小礫を、覆土上層のものと下層とで分けて表示することにした。また、SK-8の上部に堆積していた砂質粘土中からは、僅か16枚の貝殻と叩き石が出土している。貝殻の投棄地にはあまりにも少なく、またSK-7との切り合い地点からでは貝殻を得ることができない。その存在理由は不明であるが、他の土坑と関連する可能性も否定できず、とりあえず分別して貝種と数量を示しておくことにした。



第1図 第6・7・8号土坑と切り合い関係概念図

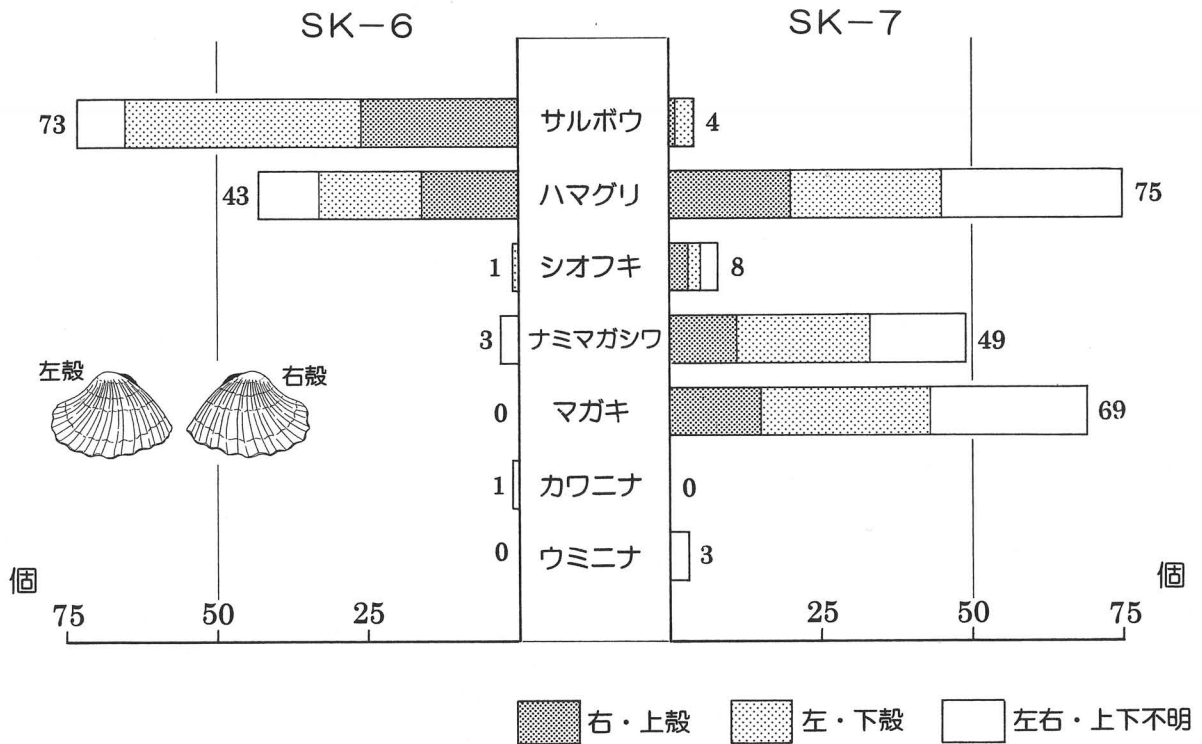
2. 貝殻の種類と数量

各土坑から出土した貝殻の総枚数は345枚を数える。その種類別の数量は、第1表に示した通りである。土坑ごとに見れば、最も多くの貝殻が出土したのはSK-7で208枚、次いでSK-6の121枚である。種類別にみると、サルボウがSK-6では全体の60%を占めて圧倒的なのに対し、SK-7では僅か2%しか含まれていない。一方、ナミマガシワがSK-6では2.5%であるのに対し、SK-7は23.6%と多くを占め、さらにマガキはSK-6では皆無、SK-7では最も多い33.2%を占めている。ちょうどサルボウに対するナミマガシワ、マガキの比率が、2つの土坑で相反しているのである。ハマグリが両者とも35~36%でほぼ同じ割合を示すのに対して、これは大きな違いと言えよう。第2図は、割合ではなく数量を単純にグラフ化したものであるが、SK-6と7の対称的な様子はここでも明らかである。

ところで、サルボウの生息域は一般に浅い海底の砂地とされている。ナミマガシワやマガキは、砂地よりも岩場の多い海底が主な生息域と言われる。両土坑で主体となる貝種に違いがみられたのは、貝の採取地点の違いに起因する可能性が、第一に考えられよう。ただし、ハマグリをはじめ、両者に共通する貝もあるので、全く異なった地点ではないようである。採取の季節が異なる可能性も想定されるところであるが、貝の成長線分析を行っていない現状では、確かなことは分からない。

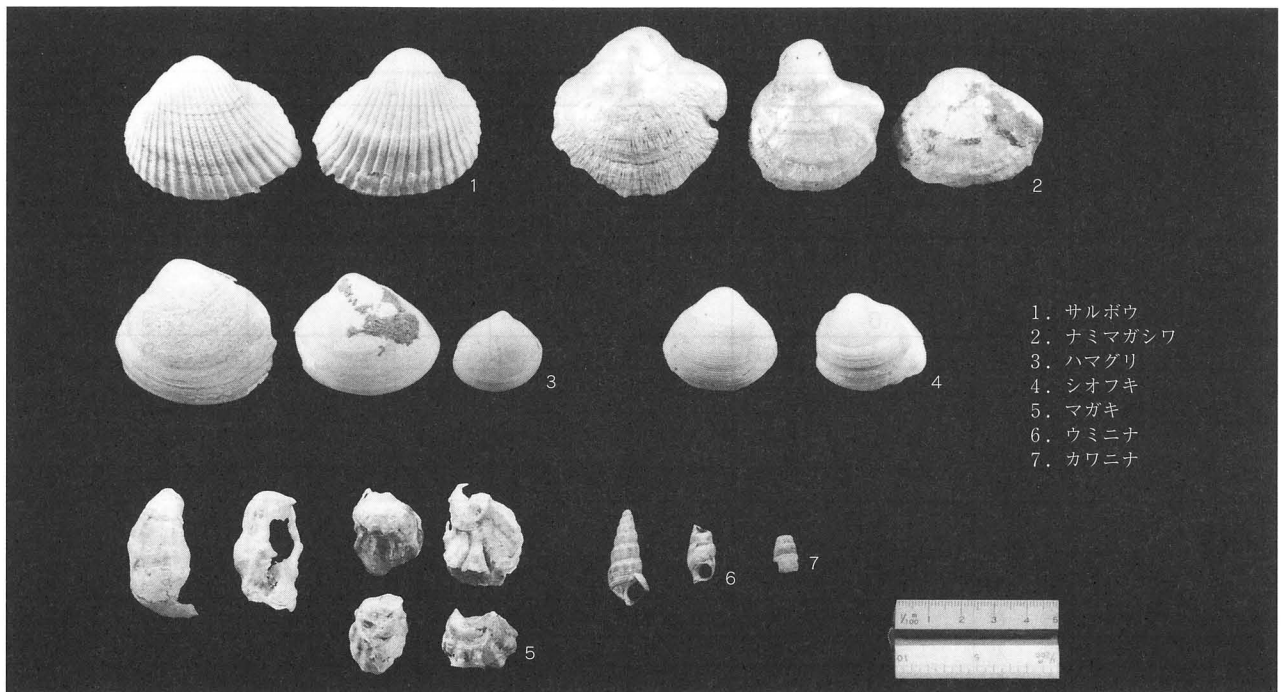
第1表 第6・7・8号土坑出土貝殻の数量

		SK-6		SK-7		SK-8		総合計	
		個数	%	個数	%	個数	%	個数	%
サルボウ	右	26		1		0		27	
	左	39		3		0		42	
	不明	8		0		0		8	
	合計	73	60.3	4	1.9	0	0	77	22.3
ハマグリ	右	16		20		7		43	
	左	17		25		2		44	
	不明	10		30		6		46	
	合計	43	35.5	75	36.1	15	93.8	133	38.6
シオフキ	右	0		3		0		3	
	左	1		2		0		3	
	不明	0		3		0		3	
	合計	1	0.8	8	3.8	0	0	9	2.6
ナミマガシワ	右	0		11		0		11	
	左	0		22		0		22	
	不明	3		16		0		19	
	合計	3	2.5	49	23.6	0	0	52	15.1
マガキ	上	0		15		0		15	
	下	0		28		1		29	
	不明	0		26		0		26	
	合計	0	0	69	33.2	1	6.2	70	20.3
カワニナ	合計	1	0.8	0	0	0	0	1	0.3
ウミニナ	合計	0	0	3	1.4	0	0	3	0.9
総合計		121		208		16		345	



第2図 第6・7号土坑出土貝殻種別数量比

なお、各貝の大きさは、計測し得た資料の平均値で、サルボウが幅4.53cm×高さ3.75cm、ハマグリが3.7cm×3.31cm、ナミマガシワは3.96×4.1cm、マガキの上殻は幅1.93cm×2.36cmである。



第3図 出土貝殻

3. 小礫の数量と石材

3つの土坑の覆土から出土した小礫は、全部で590個、10.5kgに上る。この小礫は、特別な加工痕がみられないピンポン球大の自然礫で、多くが玉石状を呈している。SK-6と7では、覆土の上層から比較的目立って出土していたが、貝殻ブロックの中にも多数混在しており、貝殻と同時に投入されたものと考えられた。SK-8に関しては、SK-7との切り合い部を中心に出土したので、中世の攪乱による混入とみるのが妥当のようである。

さて、第2表は、この礫群を材質別に分け、数量や総重量、大きさの平均値などを表示したものである。SK-6の礫が62個、716g、SK-8が48個、789gであるのに対し、SK-7は下層が229個、4764g、上層が251個、4231gで、圧倒的多数がSK-7から出土していることになる。中世の攪乱を受けた上層の礫を除くとしても、SK-7はSK-6に比して、貝殻の量も多かったが、それ以上に多くの礫が投入された土坑ということになる。石材に関しては、いずれの土坑も石英斑岩が6割以上の主体を占め、砂岩やチャートが少量ながらそれに続くという傾向をもっている。第3図は、これをグラフ化したものであるが、ほとんど同様の構成比率であることが分かる。従って、土坑ごとに特別な石材の選定があったわけではなく、およそ入手し易い礫を中心に採取し、廃棄したものと考えることができよう。サイズについては、石材によっては若干のばらつきはあるが、大多数が平均3～4cmに収まるものである。どの土坑でも小粒のものが選ばれていたようであるが、これは逆に採取地点の礫自体が当初から皆小粒であった可能性をも導くものである。石材を同じ比率で集められ、しかも均一的に小粒のものを選べる状況を考えると、むしろ、ほとんど同じ地点ないし同じエリアで採取したとみるのが、もっとも自然なことと思われるのである。

ところで、当地は岩の路頭や転石に恵まれた土地ではない。現在台地上で拾える石は、極論すれば全て人

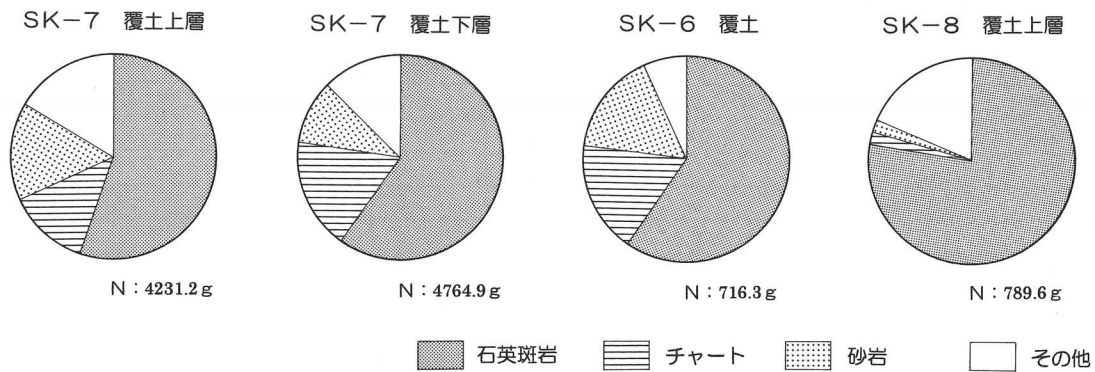
第2表 礫群の石材別・個数・重量・大きさの比較

遺構・地点	石 材	個 数	%	総重量(g)	%	平均長(mm)	平均重量(g)	備 考
SK-6 覆土下層	石英斑岩	39	62.9	425.6	59.4	29.9	0.9	赤化5点、炭酸カルシウム付着1点、破碎礫4点
	流紋岩	0	0	0	0	0	0	
	安山岩	0	0	0	0	0	0	
	花崗岩	0	0	0	0	0	0	
	閃緑岩	0	0	0	0	0	0	
	砂 岩	8	12.9	116.9	16.3	34.9	14.6	破碎礫1点
	チャート	10	16.1	125.8	17.6	30.2	12.6	
	珪質頁岩	3	4.8	23.3	3.3	31.1	7.8	
	石 英	0	0	0	0	0	0	
	ホルンフェルス	1	1.6	5.6	0.8	25.8	5.6	
	結晶片岩	1	1.6	19.1	2.7	38.8	19.1	
	合 計	62		716.3				赤化5点、炭力1点、破碎5点

遺構・地点	石 材	個 数	%	総重量(g)	%	平均長(mm)	平均重量(g)	備 考
SK-7 覆土上層	石英斑岩	155	61.8	2343.2	55.4	33.4	15.1	赤化14点、炭酸カルシウム付着2点、破碎礫3点
	流紋岩	8	3.2	113	2.7	31.8	14.1	
	安山岩	6	2.4	153	3.6	37.8	25.5	赤化1点
	花崗岩	1	0.4	6.6	0.2	23.4	6.6	
	閃緑岩	1	0.4	90	2.1	49.8	90	
	砂 岩	36	14.3	672.1	15.9	26.3	18.7	赤化2点、タール付着1点、破碎礫1点
	チャート	34	13.5	532.8	12.6	24.5	15.7	赤化2点、破碎礫1点
	珪質頁岩	4	1.6	158.1	3.7	44.4	39.5	赤化2点、煤付着2点
	石 英	2	0.8	112.2	2.7	39	56.1	
	ホルンフェルス	4	1.6	50.2	1.2	34.5	12.6	
	合 計	251		4231.2				赤化21点、炭力付2点、タール1点、煤1点、破碎5点

遺構・地点	石 材	個 数	%	総重量(g)	%	平均長(mm)	平均重量(g)	備 考
SK-7 覆土下層	石英斑岩	143	62.4	2840.6	59.6	36.3	19.9	赤化42点、炭酸カルシウム付着1点、破碎礫5点
	流紋岩	0	0	0	0	0	0	
	安山岩	2	0.9	18	0.4	27.9	9	
	花崗岩	1	0.4	30.3	0.6	41.1	30.3	
	閃緑岩	1	0.4	4.9	0.1	23.3	4.9	
	砂 岩	29	12.7	484.5	10.2	33.1	16.7	赤化2点
	チャート	30	13.1	840.3	17.6	36.9	28	
	珪質頁岩	1	0.4	11.7	0.2	28.7	11.7	
	石 英	2	0.9	9.5	0.2	22.8	4.8	赤化1点
	ホルンフェルス	20	8.7	525.1	11	42.2	26.3	炭酸カルシウム付着1点
	合 計	229		4764.9				赤化45点、炭力2点、破碎5点

遺構・地点	石 材	個 数	%	総重量(g)	%	平均長(mm)	平均重量(g)	備 考
SK-8 覆土上層	石英斑岩	37	77.1	611.2	77.4	31.4	16.5	赤化4点、破碎礫4点
	流紋岩	2	4.2	13.4	1.7	26.4	6.7	破碎礫1点
	安山岩	0	0	0	0	0	0	
	花崗岩	1	2.1	5.7	0.7	28.1	5.7	
	閃緑岩	1	2.1	84.6	10.7	67.1	84.6	赤化1点
	砂 岩	2	4.2	19	2.4	29.9	9.5	
	チャート	3	6.3	13.5	1.7	25.4	4.5	
	珪質頁岩	0	0	0	0	0	0	
	石 英	0	0	0	0	0	0	
	ホルンフェルス	1	2.1	32	4.1	57	32	
	結晶片岩	1	2.1	10.2	1.3	31	10.2	
	合 計	48		789.6				赤化5点、破碎5点



第3図 第6・7・8号土坑出土礫群の石材別構成比

為的な搬入の結果とさえ言える程である。従って、出土した礫は川縁や河口付近、あるいは露出した礫層からわざわざ運んできたものとなる。残念ながら、現段階ではそうした地点の礫に関する正確なデータを持ち得ていない。第2表との比較を通じて礫の出所を探りたいところであるが、それは向後の課題としておきたい。

用途については、礫床炉 (Earth oven) や石焼き煮沸法 (Stone boiling) など、一般に言われている礫の利用方法以外には現時点で思い当たるものがない。第2表に特記したように、少数ながら赤化したものや破碎されたものがあり、少なくとも一部は火に関わる使われ方をしたようである。炭酸カルシウムが付着した礫も少量みられるが、これは貝殻と一緒に投棄されていたために二次的に付着したものである。共伴関係だけを最大限に評価するならば、貝と一緒に拾われてきたか、あるいは貝の加工・調理の場で使用されたかのどちらかとなるが、被熱例を考慮して後者の可能性を支持しておくことにしたい。

貝殻と小礫と一緒に出土している事例は、土浦市内では上高津貝塚A地点 (鈴木・佐藤・大内ほか 1994) や石橋南遺跡第6号土坑 (関口ほか 1997) がある。上高津貝塚A地点は、大規模な貝塚をトレンチ調査したものであり、SK-7などとは性格が異なるが、中期から後期にかけてのXVI (堀之内2)・XVII (加曾利E・堀之内1・2)層で、それぞれ53個、127個の礫が検出されている。礫の大きさは2~3cmが主体的で、その75%に赤化・黒色付着物がみられたという。ちなみに貝はヤマトシジミを中心に、若干ハマグリ他の貝が混じる状況であった。石橋南遺跡第6号土坑は、95×70cmの小規模な土坑で、ハマグリやマガキなど約200枚の貝殻と73個の丸い自然礫が出土している。時期は縄文時代早・前期である。自然礫は1個6g未満のものが4割近くを占め、明確な被熱痕はないものの、破碎されたものや黒色の付着物のあるものが少量存在したという。SK-7ときわめて良く似ており、貝種もほぼ共通している。以上の2例は石材に関する所見はないが、貝の加工・調理に関連して礫が利用されたことを裏付ける良い資料であろう。

4. 粘土採掘坑について

SK-8が粘土採掘坑であることは本編に記した通りである。覆土が不自然な傾斜堆積をみせ、粘土塊混じりの砂質土が天地返しをしたように上層に現れていたことなどは、人為的かつ特殊な行為の結果を容易に予測させるものであった。第4図は、現場での所見をもとに、採掘過程を想像し概念的に描いたものである。

SK-8は埋没谷に面した傾斜地にあり、台地上部の平坦地からは約2m50cmの比高差をもつ。この地点のローム層は薄くなっており、場所によっては50cmも掘り下げないうちに粘土層に到達してしまう。SK-8の掘削は、この地形を熟知した上での選地と思われる。粘土層は厚さ約30cm、その下には砂と粘土の混合

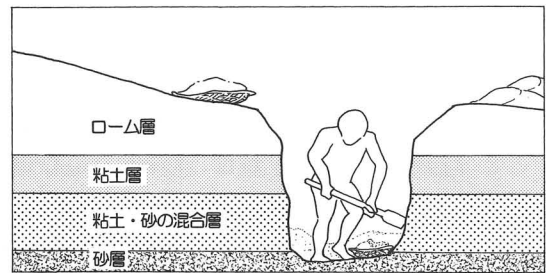
層が約55cmの厚さで広がっており、さらにその下は純粋な砂層となる。SK-8では、この粘土純層と砂の混合層の2層を対象に採掘を行っている。

掘削方法は、最初に深い豎坑を掘り、次に水平方向に転じて溝状に掘り進めて行く方法を採用している。SK-7に到達したところで採掘を止め、別方向への転進もなく廃棄してしまっている。掘り方は狭く、一人分の作業スペースしかない。この空間で純粋な粘土が採れる量は限られており、試算すると僅か1.6~2.2m³程しか採掘できなかった計算となる。粘土の質に難があったのか、当初から多くの量を必要としなかったのか分からないが、決して大掛かりな採掘ではなかったようである。逆に、この程度の採掘が、少人数による土器生産体制の適量なのかもしれない。

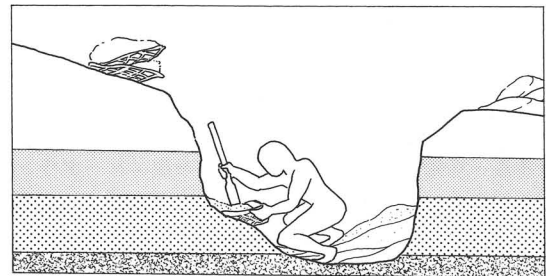
縄文時代の粘土採掘坑で良好な調査事例の一つに多摩ニュータウンNo.248遺跡がある(斎藤・松崎ほか 2000)。縄文時代前期から後期にかけての採掘遺構が6地点にわたって検出され、その面積はおよそ5,500m²もの広がりをもつと推測されている。長期にわたって幾度も採掘が繰り返されており、SK-8とは比較にならない規模であるが、採掘の基本方法は豎坑から水平方向へ転ずる同一のものである。No.248遺跡で採掘された粘土は、ハロイサイトを主体とする粒子の細かい可塑性に富んだ粘土と報告されている。土器作りに適した粘土ということであろうが、SK-8の粘土は感覚的にはやや砂粒の多さを感じるものであった。粘土の純層からだけでなく、砂に混じって堆積する粘土塊も採掘しており、砂質の強さは避けられないところであろう。土器作りには混和材として砂粒を混ぜることもあるので、この粘土の使用自体に支障はないであろうが、質的な問題が短期・小規模採掘の原因となっていたのかもしれない。

まとめ

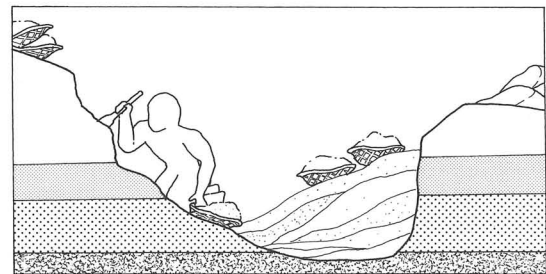
SK-6・7・8は、特徴的な3つの土坑が切り合う希有な事例である。SK-6と7は、いわゆる地点貝塚に相当するものと報告したが、しかし、単純な貝殻廃棄のためにこのような深めの土坑を掘る必要があるのか未だに疑問は残っている。SK-6の底には深鉢の底部が直立していたことなどは、廃棄以上の理由を想像させるものである。翻って、SK-8が容易に粘土を採掘できる低地を狙って掘り込まれていたことを考えると、SK-6や7も偶然同一地点に重なったというよりも、当初から同じ目的をもって逐次的に掘り



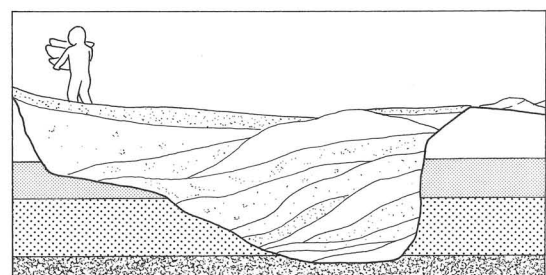
1. 垂直に掘り込み、粘土純層や砂との混合層から粘土を採掘する。砂層に到達し、掘り込みを中止する。



2. 横方向(台地上部方向)に転進し、粘土層を目当てに効率よく採掘を行う。



3. 廃土を後方に捨てながらさらに掘り進める。



4. 土坑が廃棄される。
土坑の覆土は、質の悪い粘土や砂の傾斜堆積となる。

第4図 第8号土坑の形成過程想定図

込まれた可能性さえ想像されるのである。例えば、粘土を採す目的で試し掘りを行い、その穴に貝殻と礫を投棄したことなども想定されて良いかもしれない。いずれにせよ今回は貝種や石材などの基礎資料の提示を第一として、残る課題は比較資料の増加をまって検証することとしたい。

ここで扱った3つの土坑は、埋没谷を臨む傾斜地でささやかに行われていた廃棄行為と生産活動の二つを象徴するものである。調査区の北側には縄文時代の大きな集落が予想されているが、これを生活の表舞台とするならば、今回の埋没谷周辺地は裏舞台に相当する。縄文人の暮らしは両者の上に展開したものであり、景観復元や生業研究の視点でも裏舞台の存在は欠かすことができないと思われる。ここで提示した資料が、向後の調査成果と有機的に関連付けられることを期待する次第である。

参考文献

- 奥谷喬司 1987 『フィールド図鑑 貝類』 東海大学出版会
斉藤進・松崎元樹ほか 2000 『多摩ニュータウン遺跡-No.247・248遺跡-』 東京都埋蔵文化財センター
鈴木公雄・佐藤孝雄・大内千年ほか 1994 『国指定史跡 上高津貝塚A地点』 土浦市教育委員会
関口満ほか 1997 『石橋南遺跡』 土浦市教育委員会ほか

2. 神明遺跡出土遺物の検討 ―古墳時代前期の土器を中心に―

赤坂 亨

1. 神明遺跡出土遺物の分類基準

神明遺跡の住居跡出土遺物は以下の8つ分類基準を設け、ⅠからⅧへ順に細別を進めていった。

- Ⅰ. 機能推定レベル分類…粘土を用いて形作られ焼成されたもののうち、限定された機能しか推定できないもの与其他に分類。前者を土製品とし、後者を土器（非土製品）とする。
- Ⅱ. 用途推定レベル分類…用途推定に基づく土器の大別。煮炊き・貯蔵・盛るなどに用いえないミニチュアと其他に大別。その他土器からは頸部の有るものを壺甕類として分離。
- Ⅲ. 形態レベル大分類…土器全体のプロポーションによる分類。口縁部の長さや屈曲部の広さ、有脚とその他、底面有孔とその他などを基準とする。
- Ⅳ. 形態レベル中分類…土器の大きさによる分類。小型土器とその他。
- Ⅴ. 形態レベル小分類…土器の各部位の形状による分類。胴部・底部・脚部の形状などを基準とする。
- Ⅵ. 形態レベル微細分類…口縁部の形状・調整による分類。口縁部の微細な形状などを基準とする。
- Ⅶ. 表徴レベル分類…器面の大半に及ぶ視覚的特徴。定型文様群・胴部調整・胎土。
- Ⅷ. 表徴レベル小分類…器面の一部を占める視覚的特徴。文様・浮文・文様群構成。

Ⅰ・Ⅱは主観的な推定に基づく機能と用途を、Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ・Ⅵは土器の形態の特徴を、Ⅶ・Ⅷは形態に表れない土器の表面上の特徴をそれぞれ分類基準としている。

それぞれの段階での分類基準を有するもの与其他とに分け、その下の段階でまた同様の分類を繰り返すという分類方針に基づいている。従って各段階の「その他」の中には各段階では分類できない雑多なものが含まれる。各段階の分類基準で分類することが出来ないものはそのまま下の段階へ持ち越しとなる。

なお土器観察表ではⅢで与えた名称が器種に、Ⅷで与えた名称が器形の特徴の最初に記載した名称にそれぞれ該当する。後者の名称は、①ⅧからⅢへと逆に呼んでいく、②その他は読まない、③重複した場合は読まないという規則に基づいて命名した。

2. 神明遺跡の時間的位置付け

2-1 広域編年への位置付け

この分類体系ではⅠからⅧまで8つのレベルの器種名称が存在する。広域で編年を行う場合には、広く分布がみられ、かつ器種内での変化が少ない器種が基準となりうる。

Ⅲ以降の器種をみていくと、Ⅲレベルにおいて出土遺物は壺（17点）・在地弥生土器形土器（1点）・甕（29点）・器台（5点）・高坏（11点）・鉢（4点）・有孔鉢（1点）・蓋（1点）・その他土器（1点）・ミニチュア高坏（1点）・ミニチュア甕（2点）・土玉（2点）の12種類（75点）に分類される。

これら12器種のうち、複数出土していて、かつⅢ以降の下位分類ではほとんど分化しないという器種内分化パターンをもつものは、器台（3住居址、3種類 [Ⅵ] → 3種類 [Ⅷ]）であり、次いで高坏（6住居址、4種類 [Ⅵ] → 6種類 [Ⅷ]）である。また壺 [Ⅲ] 内でもⅤ以降細分されない丸底小型壺 [Ⅴ] は同様の器種内分化パターンをもつといえる。これらの器種は遺跡内での器種の細分化がみられないだけでなく、弥

第1表 神明遺跡出土遺物分類表

I 機能推定 レベル分類	II 用途推定 レベル分類	形態 評価A	形態 評価B	III 形態レベル 大分類	IV 形態レベル 中分類	V 形態レベル 小分類	VI 形態レベル 微細分類	VII 表徴レベル 分類	VIII 表徴レベル 小分類						
土器	壺甕類 (有頸部)	長口縁部	広屈曲部	壺	小型壺	丸底		ミガキ調整	口縁部ハケ調整 胴部ミガキ調整						
			狭屈曲部			球胴壺	直口縁			内湾口縁					
							その他			ハケ調整					
										その他	朱彩 その他				
			下膨壺			パレス文様 その他				円形浮文付					
			広口壺			密ハケ調整									
			狭屈曲部			その他	ハケ調整 その他								
							付加糸縄文施文								
			短口縁部			広屈曲部	壺			在地弥生土器型土器		台付			
										小型甕	その他	有段口縁	密ハケ調整		
		輪積痕口縁		ナデ調整											
		内湾口縁		粗ハケ調整											
		その他		密ハケ調整 粗ハケ調整											
		その他		台付甕											
				上膨甕 (千種甕)	面取口縁			ケズリ調整							
	有段口縁				ケズリ調整										
	その他				ケズリ調整										
	球胴甕			直口縁	粗ハケ調整										
				内湾口縁	ヘラナデ調整										
				その他	ハケ調整 その他										
	口縁押圧甕														
	平底甕														
	その他			面取口縁	密ハケ調整										
		粗ハケ調整													
		その他													
	底面有孔	脚付	器台	小型器台	内湾脚 その他										
				その他	結合器台										
			高杯	小型高杯		精製胎土 その他									
				その他	内湾脚		精製胎土 その他								
			柱状脚												
			その他												
鉢 (その他)			平底鉢	有稜 その他											
				その他											
有孔鉢															
蓋															
?															
ミニチュア		高杯 甕													
その他	管状土製品	球状	土玉												

生時代末～古墳時代前期にかけての東日本や列島規模でも器種の細分化が少ないものである。比田井克人はこれらの器種のVレベルでの器種組成に着目し、南関東地方における古墳時代前期の土器様相は三段階のプロセスをもって進行するとした編年案を提示している（比田井 1994）。

器台を比田井編年に位置付ければ、小型器台 [IV] はSI-4 の8がI段階（古）、SI-8 の10がI段階の範疇となる。結合器台 [V] は、SI-3 の12の類例が千葉県鴨川市根方上ノ芝条里跡E地点SX-1号出土土器群にあり（高田・加藤・小久貫・田中 2001）、この住居跡が比田井編年I段階新相でも前の方に位置付けられていることから、SI-3 の12もほぼ同時期といえる。SI-8 の9は坯部底面に透穴を有するなど、VIレベルでの差異が生じているようだがSI-3 の12と同様の時期を与えられる。

高坏のうち小型高坏 [IV] はSI-3 の13・14が比田井分類の小型高坏A類（比田井 1980）に相当し、比田井編年I段階の範疇に、同17およびSI-9 の5はI段階～II段階に位置付けられる。内湾脚高坏 [V] は比田井分類の元屋敷系高坏に相当し、SI-3 の15・16はI段階～II段階に位置付けられる。柱状脚高坏 [V] は比田井分類の柱状脚部高坏に相当し、SI-1の7・8およびSI-2の6はIII段階に位置付けられる。

丸底小型壺は比田井分類の小型丸底埴に相当し、この土器が組成に加わることが比田井編年II段階のメルクマールとなっており、SI-7の2を含むSI-7出土土器群は比田井編年II段階以降に位置付けられる。

また広域編年に対応させることが出来るものとしてはパレス文様 [VII] がある。SI-9 の1は北関東のパレス壺を対象とした田口分類（田口 1987）ではA-II類に該当し、比田井編年ではI段階～II段階に位置付けられる。

以上の検討から神明遺跡の住居跡は比田井編年I段階に相当するSI-3・SI-4・SI-8・SI-9と、III段階に相当するSI-1・SI-2・SI-7とに大別でき、前者を神明I期、後者を神明II期とする。なおSI-6については出土土器数が少ないため判断を保留しておく。

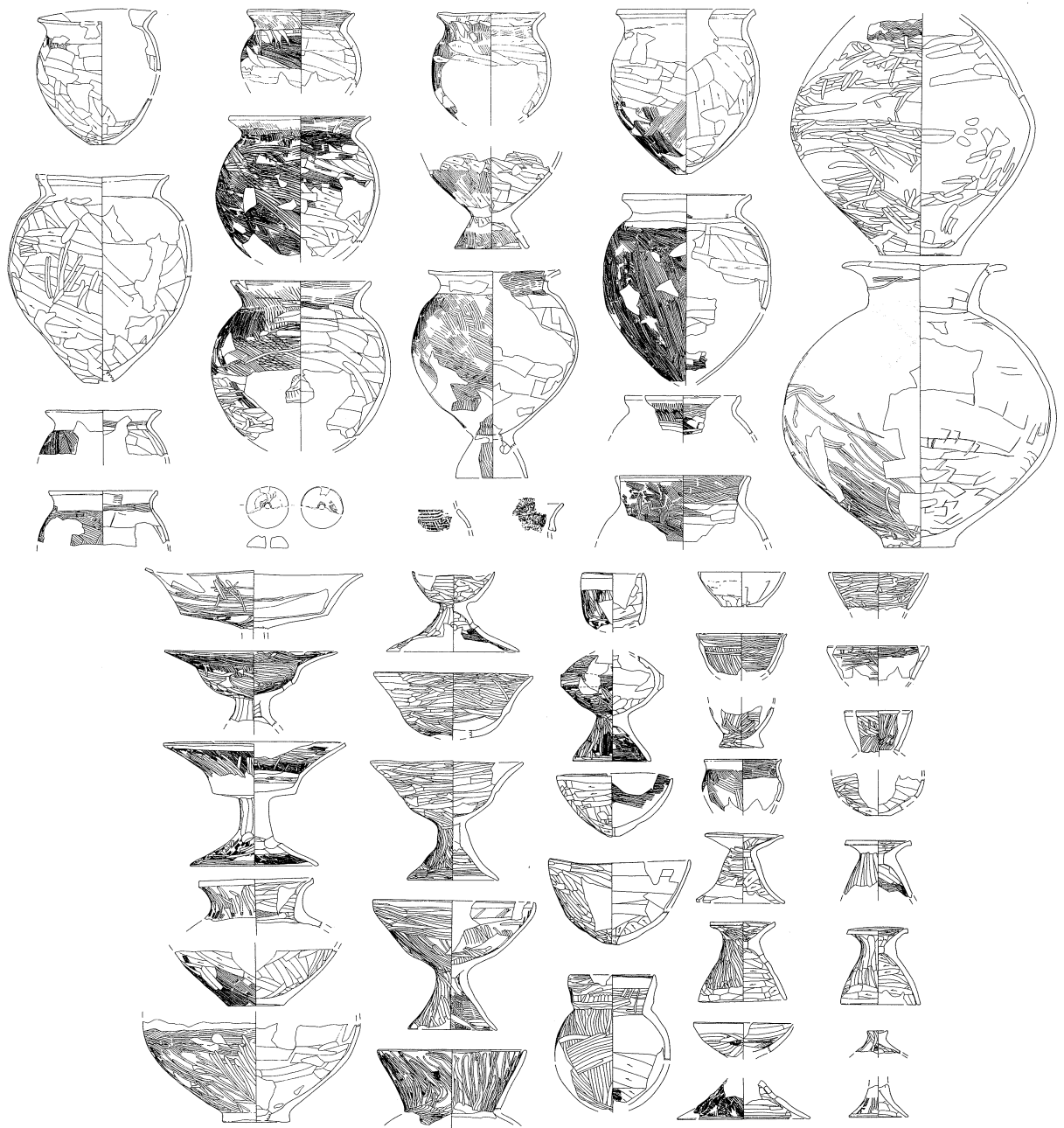
2-2 神明I期における住居跡間の前後関係の検討

特定器種の分析からでは、大別内における住居跡間の前後関係が検討できない。それについてVレベルでの器種と下位分類 [VI・VII・VIII] から検討していく。

神明I期の住居址から出土する土器のほとんどは在地の弥生土器の系譜を引かない外来土器（比田井 1993）である。それらはVレベルでの器種で見ると、その系譜や出自は5大別できる。すなわち、①上膨甕（千種甕）・結合器台・有孔鉢・蓋＝北陸（東部）系、②下膨壺・台付甕の一部・内湾脚小型器台・内湾脚高坏＝東海系、③丸底小型壺・小型高坏・小型器台・柱状脚高坏＝畿内系、④小型甕・台付甕の一部・口縁押圧甕＝南関東系、⑤台付小型甕＝樽式などの北関東系、とそれぞれ捉えられる。

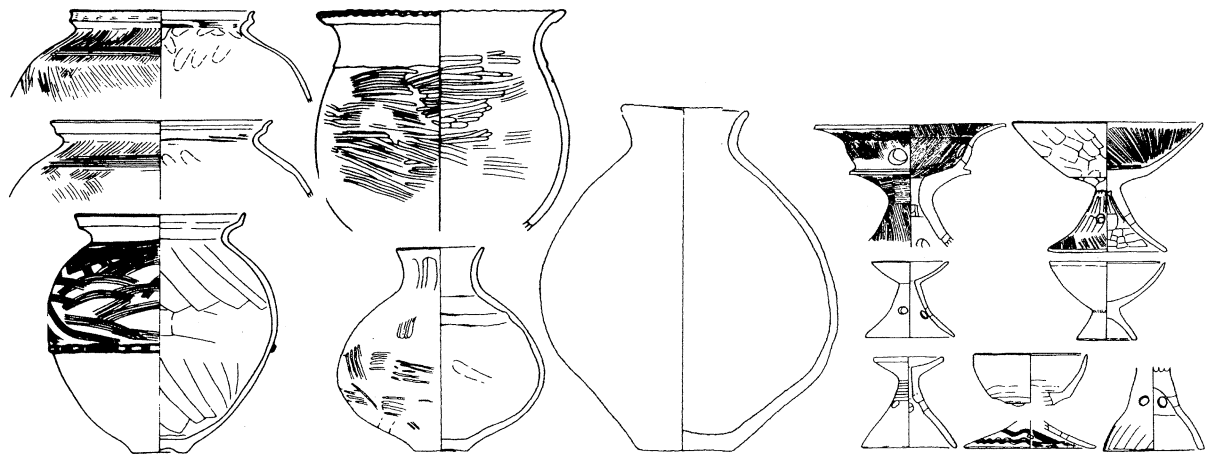
ところがこれら外来土器とされた器種をさらに下位分類まで細分していくと、出自地域の土器とは細部の形状や調整・文様構成が異なっている場合がほとんどである。特に前項で編年基準としなかった壺甕類 [II] において顕著にみられる。例えば上膨甕（千種甕）はもともとVIIレベルでは器面をハケ調整するが、SI-3の上膨甕（千種甕）はすべてケズリ調整している。またパレス文様下膨壺 [VII] はVIIIレベルではもともと頸部に隆帯を貼り付けるが、SI-9の1では頸部に南関東的な円形浮文が貼り付くなど、それぞれ出自地域ではみられない上位レベルと下位レベルとの対応関係が生じている。これは神明I期の壺甕類 [II] の特徴といえるものである。そしてSI-3の上膨甕（千種甕）のように、一定の対応関係を持つ土器は基本的に同一住居跡内でしか共有されないようである。

これに対し異住居跡間の土器では下位分類 [VI・VII・VIII] とした属性が共有される。例えばSI-3の上膨甕（千種甕）の口縁形態 [IV] が、他住居跡の他系統器種の口縁形態 [VI] にも見られるという現象がある。



群馬県前橋市二宮町・荒子町 荒砥上之坊遺跡 2区 33号住居出土遺物

千葉県鴨川市和泉 根方上之芝条里跡 E地点 SX-1号出土遺物



こうした下位分類〔Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ〕属性の共有は異系統土器を直接的接触によって知ることが出来た結果によって生じると考える。従って下位分類〔Ⅵ・Ⅶ・Ⅷ〕属性の共有する土器をもつ住居同士は時間的に同時存在あるいは近接しているということを示すと考える。従って小型甕〔Ⅴ・南関東系〕+有段口縁〔Ⅵ, 北陸(東部)系〕であるSI-4の5、その他甕〔Ⅴ・系統不明〕+面取口縁〔Ⅵ・北陸(東部)系〕であるSI-6の1は上膨甕(千種甕)〔Ⅴ, 北陸(東部)系〕であるSI-3の1・2・3・4・5と時間的に近接して作成されたと考えられ、住居同士も同時あるいは近接して存在していた可能性がある。

またSI-4の6の小型甕〔Ⅴ, 南関東系〕における粗ハケ調整〔Ⅶ〕と頸部ヨコナデ〔Ⅷ?〕は、SI-8の5などの在地弥生土器形土器〔Ⅲ〕にみられる付加条縄文施文〔Ⅶ〕と頸部無文帯を模倣した可能性が考えられる。従ってSI-4とSI-8は同時あるいは近接して存在していた可能性がある。

また異なる住居跡間で、形態・表徴レベルともに独特な器種〔Ⅷ〕を共有することも、同時存在を推定する材料になるだろう。それに該当するのが結合器台〔Ⅷ〕(SI-3の9・12とSI-8の9)であり、SI-3とSI-8は同時あるいは近接して存在していた可能性がある。

以上を整理するとSI-3とSI-4とSI-6、SI-8とSI-4、SI-3とSI-8がそれぞれ同時存在するか、後続する可能性があるものである。これに従うと神明Ⅰ期はSI-3・SI-4・SI-6・SI-8とSI-9との二つに分けられるが、あくまで相対的なものであって同時存在していた可能性は高いと考える。

3. 各時期の特徴

3-1 神明Ⅰ期

この時期の神明遺跡には、壺甕類に外来系でありながら出自地域ではみられない細部形状・調整・文様構成をもつものが存在する。この現象を本稿の分類に照らすと、出自地域と神明遺跡とでは壺甕類の上位レベル(全体の形状・大きさ等)と下位レベル(口縁部形状・器面調整等)との対応関係が変化しているといえる。

この対応関係において他の系統の影響を受けず、一方的に影響を与えるものが北陸系である。このことから、神明遺跡における集落形成の初期段階ではSI-3の北陸系土器を用いた人々が強く関与していた可能性がある。またSI-3の北陸系土器の器種組成〔Ⅴ〕は、北関東における北陸系土器の良好な出土例である群馬県前橋市荒砥上ノ坊遺跡2区33号住居址出土遺跡群の器種組成と類似しており(小島・能登 1995)、群馬経由で北陸系の土器が伝わってきたことを想起させる。

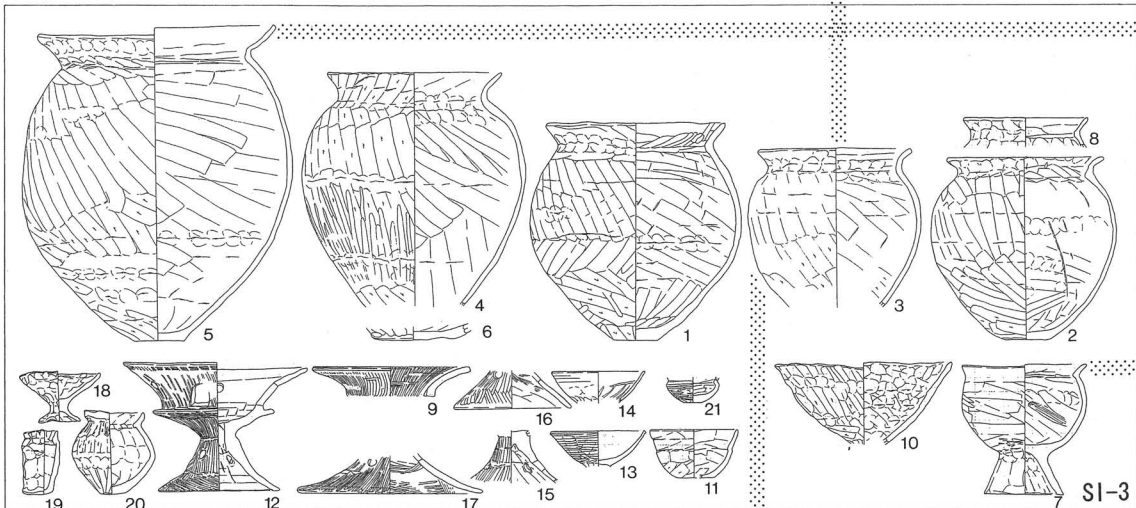
またSI-8からは北陸系土器と付加条縄文を羽状に施文する土器が共伴している。この施文方法は原田遺跡群の弥生時代後期後半の土器にみられるものである。ただし神明Ⅰ期の住居址中の1軒から底部が1点出土しただけであるので時期的な前後関係は慎重に判断せざるを得ないが、神明Ⅰ期=比田井編年Ⅰ段階に弥生時代後期後半の土器を用いた集落が共存していた可能性がある。

調査では神明遺跡内に弥生時代住居跡が確認されておらず、神明Ⅰ期の人々は原田遺跡群のような在地の弥生時代大集落が存在する天の川沿岸を避けて、在地集落の少ない桜川沿岸に集落を形成したのかもしれない。ただし神明Ⅰ期の住居跡にも、原田遺跡群の弥生時代末期の住居跡にも、環濠や武器といった両者の緊張関係を想定させるような遺構や遺物は確認されておらず、両者は共存関係を保っていたようである。

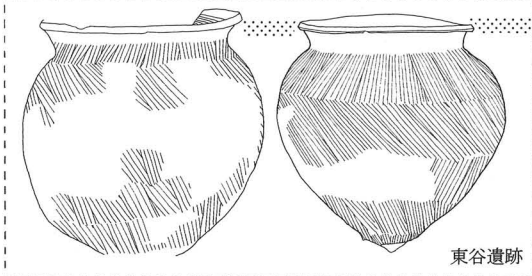
神明Ⅰ期でも後半になるとパレス文様下膨壺〔Ⅶ, 東海系〕に円形浮文を付加する〔Ⅷ, 南関東系〕という、新たなタイプの「出自地域とは対応関係が変化した壺甕類」が出現する。北陸系の影響力の低下は神明Ⅰ期中にすでに生じているようである。

神明Ⅰ期でみられる、北陸系を基本としつつも「出自地域とは対応関係が変化した壺甕類」は周辺遺跡で

神明I期



期

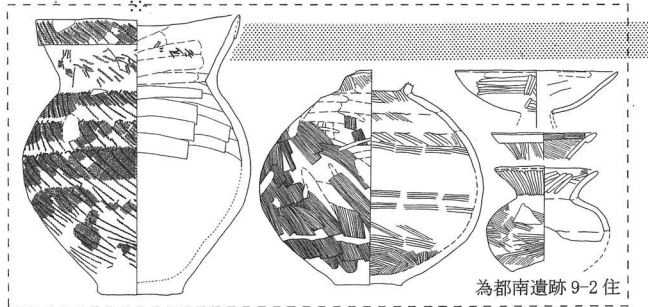


東谷遺跡

凡例

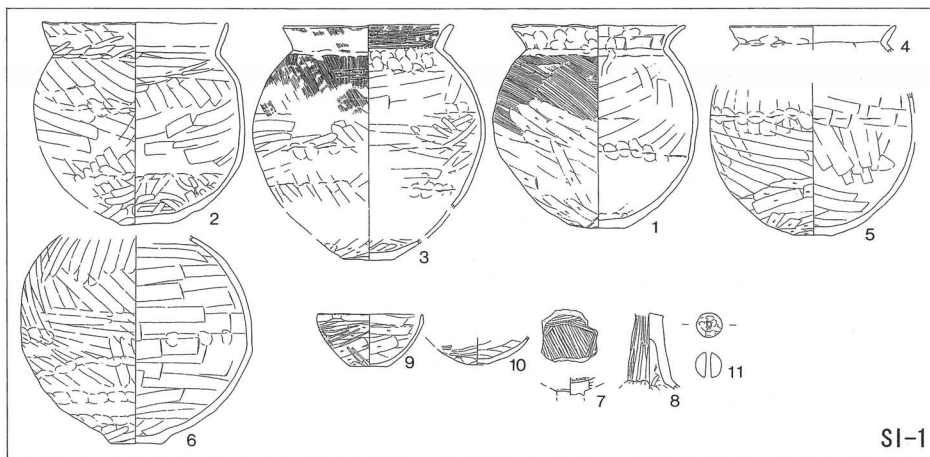
-形態レベル小分類・微細分類での属性共有関係
-表徴レベルでの属性共有関係
-表徴レベル内で一定の関係が保たれない土器群

実線囲み…完掘した住居址から出土した土器群
 1点破線囲み…未完掘の住居址から出土した土器群
 点線囲み…神明遺跡以外の住居址から出土した土器群
 ・縮尺は1/8。ただし東谷遺跡と北西原遺跡 SI-64 出土土器は写真トレースのため縮尺不定。

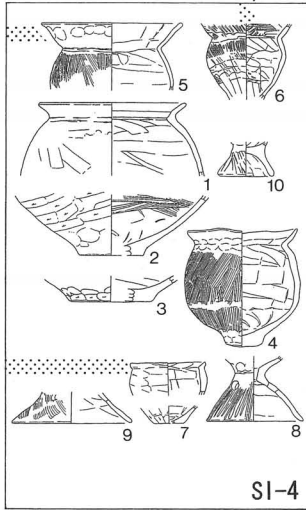


為都南遺跡 9-2 住

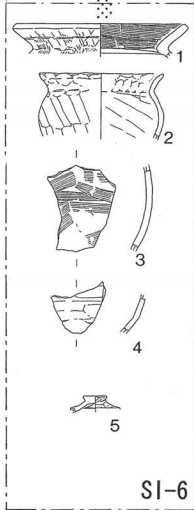
神明II期



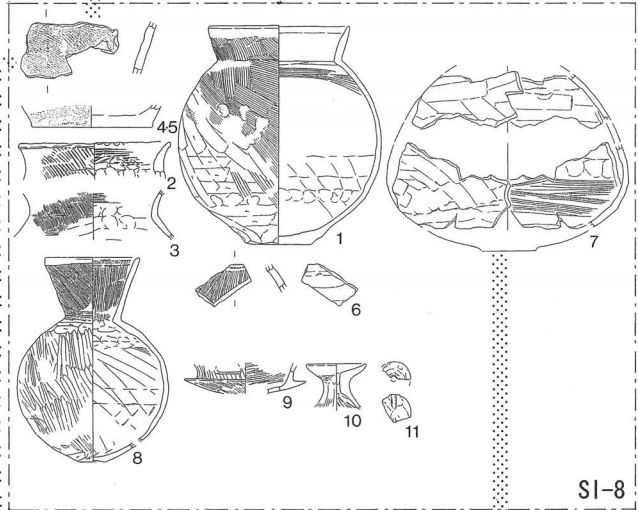
SI-1



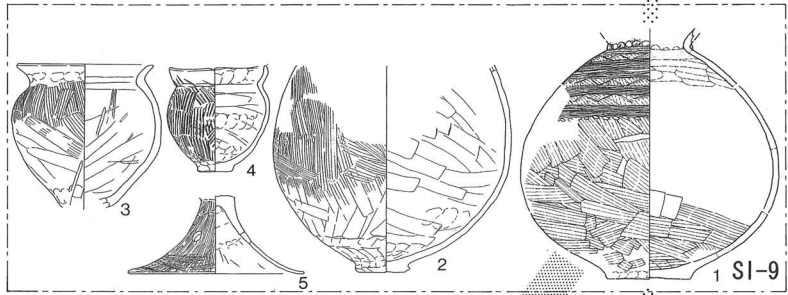
SI-4



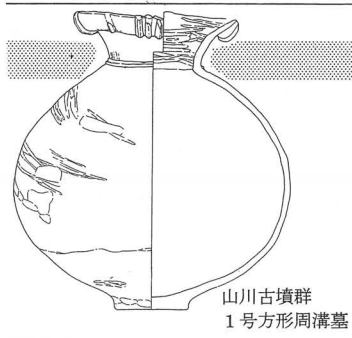
SI-6



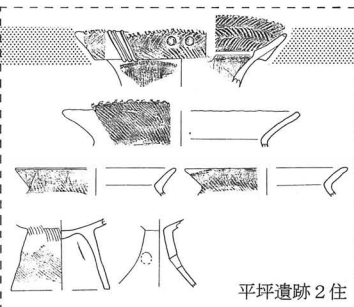
SI-8



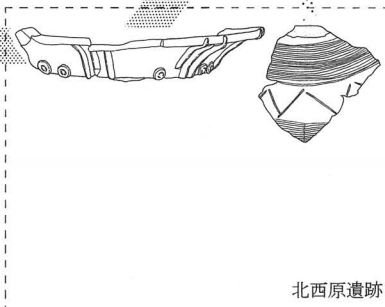
SI-9



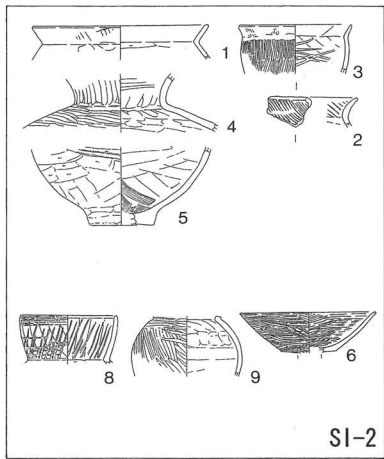
山川古墳群
1号方形周溝墓



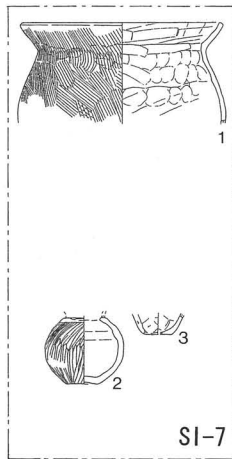
平坪遺跡 2住



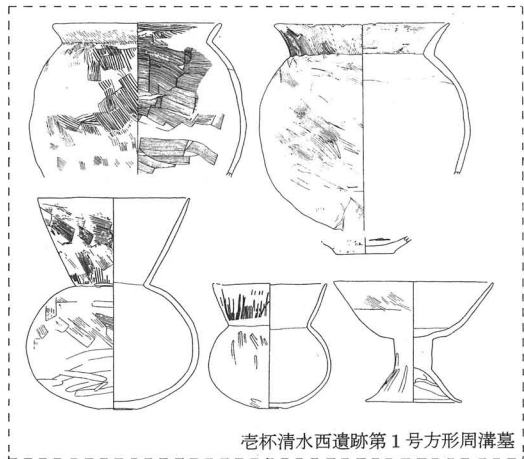
北西原遺跡 SI-64



SI-2



SI-7



老杯清水西遺跡第1号方形周溝墓

もみられ、桜川対岸の土浦市東谷遺跡から出土した面取口縁上膨甕（千種甕）〔VI，北陸系〕の例がある。器面調整はハケを基本〔VII，北陸系?〕とするが、台付になるもの〔VI，北・南関東系もしくは東海系〕も出土している（黒澤 2001）。

こうした「対応関係が流動的な壺甕類」出現の背景には弥生土器からの継続性の無さが影響していると考えられる。弥生土器からの伝統の上に古墳時代土器が成立した地域では、土器における形態レベルと表徴レベルとの対応関係が定められていたが、茨城県南部域では弥生土器とは無関係に古墳時代土器が成立したため土器製作者が任意にその対応関係を変更できたのではないだろうか。

3-2 神明Ⅰ期とⅡ期の間の期間

神明遺跡においては断絶期間となるが、北側の北西原遺跡SI-64では山形のピッチが広く形式的に後続するパレス文様壺が出土しており（黒澤 2001）、常名台遺跡群全体では継続していた。このパレス文様壺は胎土や調整が結城郡千代川村下栗野方台遺跡で出土するパレス文様壺に類似するようであり、この時期には点的だった東海系の影響が、経路は不明ながら面的に展開していったようである。

この時期は装飾的要素の強い器種（壺など）において表徴レベル内で一定の関係が保たれず、複数の系統の属性を各土器がそれぞれに発現し、その結果各土器の外見上の個性が強くなるという特徴がある。例えば、パレス壺と同じ北西原遺跡SI-64からは庄内式系の加飾壺〔VII〕に、南関東弥生土器系統の棒状浮文〔VIII〕が付加されたものが出土している（黒澤 2001）。また、擬似的な付加条縄文を施文する新治郡霞ヶ浦町為都南遺跡9-2号住出土の在在弥生土器形土器や、口縁部に棒状浮文・頸部に隆帯を貼り付ける神明遺跡南側の山川古墳群1号方形周溝墓出土の壺（比毛 1999）や、南関東的な装飾壺の口縁部内面にパレス文様壺的に羽状縄文を施した土浦市平坪遺跡2号住出土の壺（矢ノ倉 1996）などがある。

また神明遺跡を含めた常名台遺跡群で判明している古墳時代の墓制は、この山川古墳群方形周溝墓が最も古く、周辺地域の方形周溝墓や古墳もこの時期から築造が開始されたようである。

3-3 神明Ⅱ期

この時期には各器種〔III〕における対応関係が固定化され、球胴甕・球胴壺・丸底小型壺・柱状脚高坏・平底鉢・土玉という古墳時代中期にも継続していく器種組成〔V〕が完成する。

同時期の墓制としては土浦市壺杯清水西遺跡方形周溝墓（黒澤 1997）が挙げられる。

本文・図版 引用文献

- 赤坂亨・川口武彦・千葉隆司 1991 『為都南遺跡』 出島村教育委員会
伊東 重敏 1994 『権現平古墳群』 玉里村教育委員会
黒澤 春彦 1997 『三夜原東遺跡 新堀東遺跡 壺杯清水西遺跡』 土浦市教育委員会
黒澤 春彦 2001 『第6回特別展図録 弥生から古墳へ』 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
小島 敦子・能登健 1995 『荒砥上ノ坊』 I 群馬県埋蔵文化財調査事業団
高田 博・加藤修司・小久貫隆史・田中裕 2001 『千葉県文化財センター研究紀要』 21
田口 一郎 1987 「パレス・スタイル壺の末裔たち」『欠山式土器とその前後 研究報告編』
比毛 君男 1999 『常名台の古代のむら』 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
比田井克人 1980 「古墳発生時における小型高坏について」『金鈴』 22
比田井克人 1993 「東国における外来土器の展開」『翔古論聚』
比田井克人 1994 「南関東における庄内式併行期の土器」『庄内式土器研究』 VII
矢ノ倉正男 1996 『右舂貝塚東遺跡 内路地台遺跡 念代遺跡 平坪遺跡』 茨城県教育財団

3. 常名台地における遺跡の消長

吉澤 悟

はじめに

常名台遺跡群の調査は平成2年度の試掘から始まり、以来、一時中断はあれ、過去10年以上にわたって発掘調査が継続している。その調査総面積は約7万m²を超え、西谷津遺跡を除く4つの遺跡は、既に過半近くの部分が調査を終了している。残る部分にも今年度、26地点、計39本のトレンチが開けられた。常名の台地における遺構の広がりや密度、時代、性格などは、ここに至りようやく全体的に把握され得るようになったと言える⁽¹⁾。

今回の報告では、これまでの調査で検出された遺構を地図上に配置して、遺跡群の全体図を作成している(付図参照)。この全体図をもとに、遺跡の空間的・時間的な広がりや衰退の過程などを推察するならば、今後の調査や研究に有益な展望を導くことが可能であろう。従来の調査成果を踏まえ、さらに今回の調査の総合的な意味も込めて、常名台における遺跡の消長を概観してみようと思う。なお、まだ未報告のため評価の一定しない遺構もあり、今後の整理・検討によっては修正が必要な部分も出てくると予想される。あくまで現時点での予察であり、尚早な結論を企図したものではないことを断わっておく。

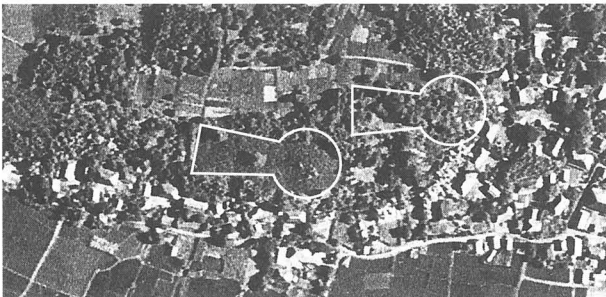
1. 概観

常名台遺跡群(以下、常名台)の地形的特徴は、本編第2章に述べた通りである。およそ南北600m、東西600mのエリアには、台地の南側から貫入するY字状の谷津が1本、そしてそれによって分断された西と東、北側の台地上に各遺跡が広がっている。エリア内では西側の台地が最も広く、北西原遺跡、神明遺跡、山川古墳群の3遺跡が入り組んで存在している(以下、西区)。東側の台地上には弁才天遺跡と天神脇遺跡があり、弁才天遺跡だけが調査エリア内に入っている(以下、東区)。北側の台地には、西谷津遺跡があるが、今年度はじめて確認調査を行ったばかりである(以下、北区)。また、西区の南方、台地縁辺部には常名天神山古墳と瓢箪塚古墳が存在するが、西区と両古墳の間の約100mは調査エリアから外れてしまい、どのような遺構が存在するか、あるいは存在しないのか残念ながら明らかでない。さらに、谷津の中にも何らかの遺構が伏在している可能性があるが、現段階では遺跡と認定されておらず、調査も行われていない。以上の西・東・北区、および南縁の2古墳が、これから遺跡消長を俯瞰する舞台である。この中で遺構が顕著に確認されたのは、縄文時代中期、古墳時代前期、古墳時代後期、古代～中世、の4時期である。次節はこれに従って各時期の遺構分布を眺めて行くことにしたい。

ところで、第1図に掲げた写真は、昭和23年に米軍が撮影したもので、常名台を写した最も古い航空写真である(巻頭カラーとほぼ同一縮尺)。これを見る限り、道路や住宅、水田などが現況と若干異なるものの、台地上の土地利用はほとんど変化していないことが分かる。植生や土質の違いが古墳群や中世の居館跡などの存在を顕わにしてくれると期待したが、これでは確認できない。昭和41年に削平されたという瓢箪塚古墳が、おぼろげながら健在しているのが窺える程度である。

2. 縄文時代

縄文時代の遺構は西区に偏って発見されている。これまでの発掘調査で検出された遺構は、竪穴住居跡が



第1図 昭和23年の航空写真（昭和23年7月25日米軍撮影：国土地理院発行）
左下：常名天神山古墳と瓢箪塚古墳 右下：神明遺跡第3次調査区の範囲



第2図 縄文時代の遺構分布図

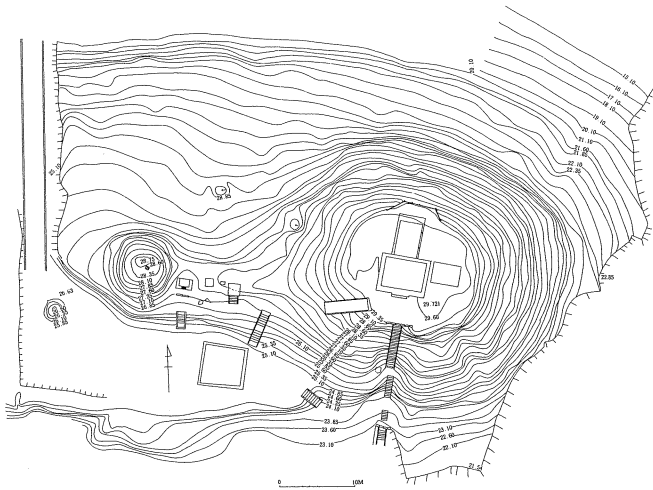
神明遺跡で6軒、北西原遺跡で7軒、土坑が神明遺跡で6基以上、北西原遺跡で9基、山川古墳群の西側部分に2基である。他にも時期不詳とした土坑の中には、縄文時代に擬せられるものが若干含まれている。時期は中期後半の加曾利E式段階を主体とするが、前期の黒浜式、後期の加曾利B式などの土器も散見されている。

一方、確認調査では、上記を数倍も上回る数の遺構が存在すると予想された。第1表は、本編第3章で報告した成果を一覧表にまとめたものである。北から順に20m間隔で設定したトレンチの各所で、縄文時代の遺構ないし土器が確認されている。特に西区の北東側部分にあたる4～10トレンチにかけては、加曾利E式段階を中心とした住居ないし土坑が濃密に存在しており、5bや7トレンチでは遺構の重複によって地山が

第1表 確認調査成果一覧

トレンチNo.	時期	縄文					古墳			古代		中世～	遺構の 密度	確認遺構	
		前期 黒浜	中期 加會利				後期 加會利 B 1	前	中	後	奈良				平安
			E I	E II	E III	E IV									
1								○	○		○		並	住居10、土坑3、溝2	
4a							○						並	住居4、周溝1	
5a		○											密	住居15、土坑18、溝4	
6		○	○			○	○			○	○		密	住居9、土坑32、溝3	
7	○	○	○	○			○						密	住居6、土坑7	
8a		○	○										密	住居5、土坑13、溝4	
8b・c		○	○	○									並	住居1、土坑6	
9a		○	○				○						密	住居4、土坑11、溝2	
9b		○	○				○						密	住居6、土坑2	
10a		○											密	住居4、土坑3、溝3、旧石器1	
10c													希	遺構あり	
11a		○										○	密	住居2、土坑3、溝1、礎石建物1	
12a・b		○											並	神明3次調査区内	
13a													無	なし	
13b		○											希	神明3次調査区内	
14a					○								並	住居1、土坑1、溝1	
14b		○											並	神明3次調査区内	
15w					○								無	攪乱	
15a													無	なし	
15b・c	○	○					○						希	神明3次調査区内	
16a	○	○											希	ピット若干	
拡張1	○	○									○		希	包含層あり	
17w					○					○			並	土坑4	
17a			○										希	ピット若干	
拡張2	○	○									○		希	ピット若干	
18b													無	なし	
19a													並	住居4、土坑9	
19b													並	古墳周溝2	
20a													並	古墳周溝1	
20b	○												並	溝4	
21a	○	○											並	古墳周溝1	
22b													密	住居2、土坑1、溝3	
イ													並	古墳周溝1	
ロ													無	なし	
ホa													並	古墳周溝1、土坑1	
ホb													並	古墳周溝1	

※細分されていない「加會利E式」は罫線を外して表示した。
 ※○印は時期の分かる遺物の存在を示す。



第3図 常名天神山古墳測量図（茂木ほか1991）

と言われた貝殻散布地も、前期の土器が出土している7トレンチ周辺（集落予想範囲の中央）である可能性が高い。埋没谷の包含層で確認された土器群も、付近に大きな集落の存在を想定しなくては理解できないものであろう。一方、これを取り巻くように西、南側には、1ないし2群の住居跡小群が存在している。北西原遺跡や神明遺跡で発掘調査された住居跡群がそれである。神明遺跡の6軒の住居跡を見る限り、それらは加曾利E IからIVにかけて若干の時期差があり、一群でムラを構成していたというよりも、1、2軒が散在するような景観であったと想定される。さらに、その外圏には、山川古墳群内で散見されたような土坑が、広い範囲の中に点在していたようである。土坑の一部は「落とし穴」のような性格が見込めるかもしれない。

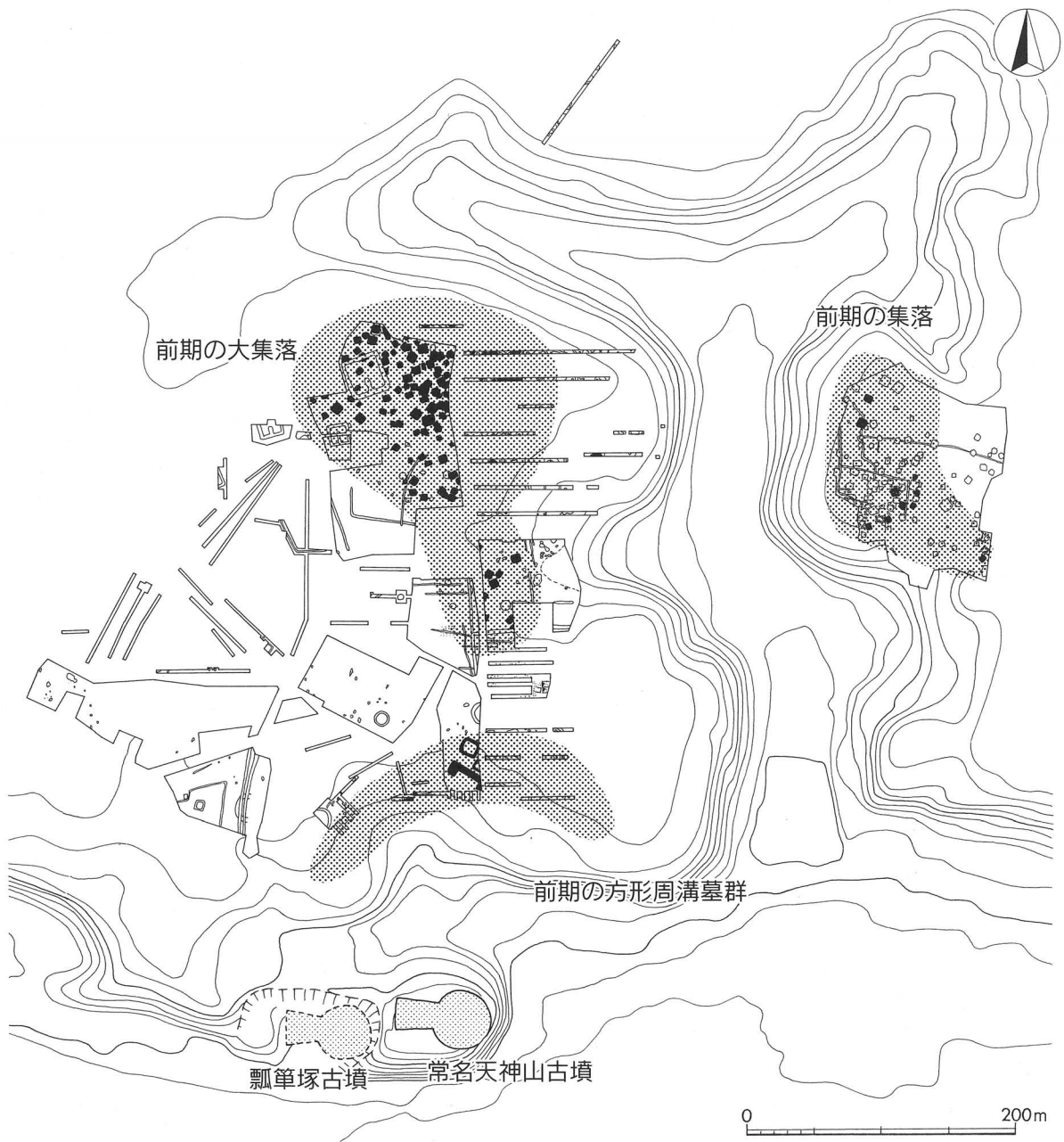
このように、縄文時代の立地は、谷津に面した西区の北側に強い求心性があり、反対に南西方向、台地の奥部に向かうに従って希薄になっていた様子が分かる。全体でどれくらいの住居跡が存在するか、正確な数は分からないが、単純計算でも100軒を越えるものと予想される。縄文中期後半頃の、周辺地域の一大センターとなり得るものであろう。

3. 古墳時代前期

古墳時代前期の立地の特徴は、北に集落、南に墓域が展開することである（第4図）。まず西区については、北西原遺跡で100軒以上の竪穴住居跡を検出しているのに加え、神明遺跡で今回の9軒、4a、6、7、9a、9bの各トレンチでも前期の遺構が確認されている。先の縄文時代の集落と同様、非常に規模の大きな集落となるが、その中心部は縄文時代よりもやや西にずれ、南方への広がりも大きい。本編第4章の「まとめ」では南北225mにわたる集落域と推定したが、その広がり方は谷津に向かう傾斜地を避けるように、不整な「コ」の字を描く。南方は50~70m程の空白地があり、さらにその南には方形周溝墓群が広がっている。山川古墳群内では、一辺30mを越える巨大なものと同様に15m程度の小型のもの2種類、計3基の方形周溝墓が見つかったが、さらに19~21、ホa・b各トレンチにおいても数基分の周溝が確認されている。現状では少なくとも7基以上は存在するとみられ、北側の集落に対して墓域と呼ぶに相応しい状況である。この墓域内に重複する遺構はなく、19トレンチに住居跡らしき遺構（時期不明）が数基みられる程度である。南側は強めの傾斜地となっており、これ以上の広がりはないものと思われるが、常名天神山古墳に向かう南

見えない程であった。さらに南東部、20b、21aトレンチあたりにも前期から中期にかけての土器が一定量確認されており、遺構は希薄であろうが、人跡が残されていることは確実であろう⁽²⁾。

以上の遺構を地形図上に配置したのが、第2図である。西区の北側、特に谷津に向かってせり出した舌状の台地に、縄文時代中期後半頃の大集落が予想される。本編第4章および付編1で報告した「地点貝塚」の貝殻は、位置関係からみて、この北側の集落から排出されたものに違いなく、また、かつて「常名貝塚」

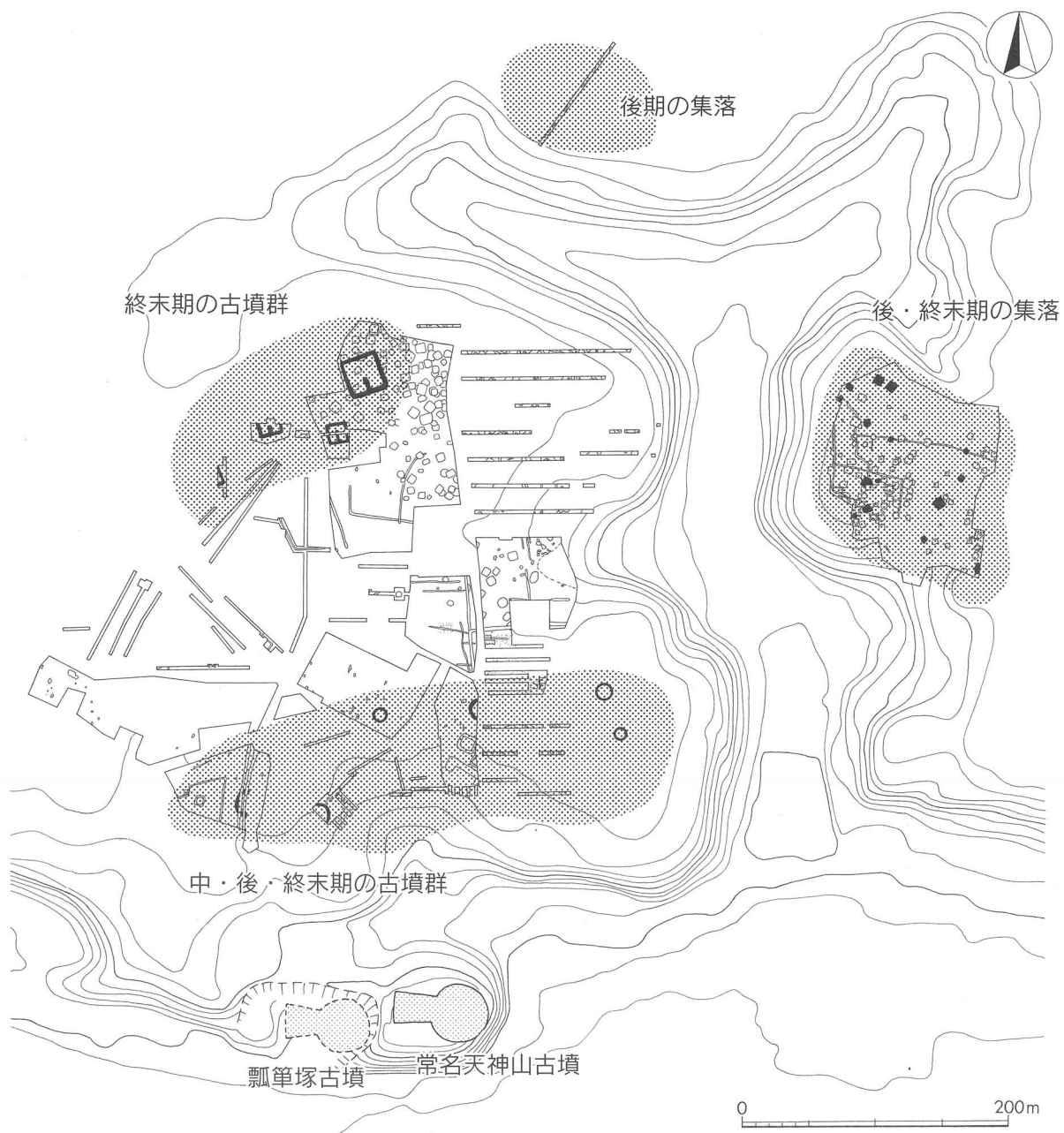


第4図 古墳時代前期の遺構分布図

西方向に広がっている可能性も残されている。

以上が西区の状況であるが、古墳時代前期の集落は、東区にも認めることができる。竪穴住居が十数軒ばかり散在する、西区に比べれば小さな集落である。谷津を挟んで西区に対峙しており、本村から分出したのか、出自を異にするのか、土器等の比較を待っての判断となるが、当地の経営（例えば谷津に水田を営むなど）に際して衛星的な役割を担っていたことは推測されよう。

ところで、こうした集落と墓域の広がる原理について、関連が注目されるのは常名天神山古墳と瓢箪塚古墳の存在である。常名天神山古墳は全長85～90m、瓢箪塚古墳は全長74mとされ、まさに当地の首長墓として相応しい規模をもつ。この両古墳が当地の権勢の象徴である以上、上記の集落や墓域との関係は大いに注



第5図 古墳時代中・後・終末期の遺構分布図

目されるところであるが、現時点では立地が近いこと以外に明確な指摘ができない状況である。両古墳とも発掘調査されておらず、現地に関連した遺物も採集されていない。常名天神山古墳は測量調査によって5世紀前葉とされているのみであり（茂木ほか 1991）、瓢箪塚古墳は湮滅前の写真でやや前方部が高い墳丘形態を知ることができる程度である。もし常名天神山古墳が5世紀前葉の築造であるならば、常名台の前期（4世紀代）の集落や墓域とは同時期にならず、むしろ常名天神山古墳を造る時にはほとんど廃絶してしまっている可能性が高い⁽³⁾。仮に5世紀の初頭、あるいは4世紀末頃にまで溯らせるならば、方形周溝墓群と連続させて考えることも無理ではないが、古墳の築造を境に集落が途絶ないし移転する事情を説明する必要がある。常名台では、明らかに5世紀代と判断される住居跡がほとんどなく、次に盛期を迎えるのは6世紀

以降、しかも西区ではなく、東区、北区でのことである。よって現段階では、常名台の集落や墓域の展開原理に常名天神山古墳、瓢箪塚古墳を据えるわけには行かず、その造営はむしろ外来的な圧力をも予感させるところとなっている。

4. 古墳時代後・終末期

前期から一転して、常名台は荒涼とした景観になる（第5図）。西区の集落は廃絶し、東区に後・終末期の住居跡が十数軒、北区に数軒程度営まれるようになる⁽⁴⁾。東区は、その後奈良・平安時代まで住居跡が継続して営まれており、北区もトレンチ内に平安時代の住居跡がかかっているため、必ずしも大規模ではないが息の長い集落であったと予想される。

一方、西区に人の住んだ痕跡はなく、古墳のみが点在する完全な墓域となっていたようである。古墳の分布はおおまかに2群に分かれ、南側の山川古墳群の一体が円墳を主体とし、北側の北西原遺跡のあたりは方墳だけが集まっている。南の円墳群は、現在までに7基の存在を確認している。周溝から滑石模造品と須恵器が出土し、唯一5世紀代と判断できた円墳が1基あり、他は昭和48年に調査された箱式石棺や、周溝のみ確認された円墳、あるいは調査区外に墳丘が残存するものなどで、どちらかといえば後・終末期に主体があると推定される。前期の方形周溝墓から連続する可能性はあるが、まだ間を埋める資料が十分ではない。北の方墳群は、現在4基が確認され、最も大きな北西原1号墳は一辺約30mの比較的大きな規模をもっている。発掘調査された3基は、いずれも主体部が破壊されていたが、形骸化した横穴式石室を板石で造っていたと判断され、およそ7世紀代に入る時期の古墳と想定されている。両群は巨視的には一連の古墳群とみられようが、約200m離れて分布し、方・円の墳形が混在することもない。あるいは別個の集団による2つの墓域とも考えられよう。東区と北区に住んでいた集団をそれぞれに充てることも可能かもしれない。いずれにせよ、少なくとも常名天神山古墳が築造されてから後、西区の台地は長期にわたって墓域と認識されてきたことは確実である。

5. 古代・中世

先述のように、東区では奈良・平安時代まで集落が継続しており、北区もその可能性がある。東区で検出された住居跡は50軒以上、掘立柱建物5棟以上で、8世紀から10世紀までの遺物が確認されている（第6図）。竪穴住居跡のカマドから「和同開珎」が出土したのをはじめ、緑釉埴、青銅製の丸軛、鉄匙など特殊な遺物が発見されている点で、比較的有力な集団であったと予想される。古東海道から比較的近い位置にあり、同時に桜川の水運にも恵まれた地の利を反映したものと思われ、ムラの安定、充実ぶりが窺える。

一方、古代の西区は、大部分が荒蕪地か森林となっていたと思われ、明確な遺構は山川古墳群内に平安時代の竪穴住居が1軒検出されたのみである。神明遺跡でも僅かな須恵器が採集されているが、やはり閑散とした景観であったと思われる。やや穿ってみれば、東区の住人が畑作や山林資源の供給地として利用していたとも考えられる。

中世に入ると、西区にも大きな転換が訪れる。本編第4章で報告している通り、神明遺跡第3次調査区の南側には、中世の大規模な居館跡が存在する可能性が強まっている。居館跡という言葉が適切かどうかは置くとして、掘立柱建物の柱穴とみられる多数のピット群と、東西に70m以上の長さをもつ薬研堀が検出され、その堀はさらに南に25m以上は延びていることも確認されている。やや大胆ではあるが、この堀は一町四方の規模で方形に巡り、その中には母屋を含む多数の建物が建っていたと推測している。遺物が少ないこともありその時期は確定できないが、およそ鎌倉後期から室町前期にかけての頃と考えている。この他にも、第1次調査区内で四面庇の掘立柱建物跡や、11トレンチで礎石建ちの建物跡なども確認されている。さらに第



第6図 古代～中世の遺構分布図

3次調査区には粘土採掘のためと思われる土坑や、埋没谷内に設けられた整地遺構など、居住以外の活動を示す遺構も発見されている。

ところで、もしこれが推測通りの居館であるならば、一体、誰がどういった経緯で営んだのかという疑問が浮かんでくる。当地に相応の記録や地名、伝承等はなく、不明と言わざるを得ないが、戦国期に菅谷氏が拠点にしたという常名城との関連は注目されてよい。天正十八（1590）年に佐竹義宣に落とされた常名城は桜川低地にあったと言われているが、その前身は台地上にあったという所伝もある（本編第2章参照）。比定地は同じ台地の西方約400～500mのあたりとされ、にわかに該当しないものの、新たな候補地として注目されてもよいと思われる。なお、推定居館域の南側には、地元で「小田街道」と呼んでいる旧道

が北西方面へと延びている。

まとめ

さて、以上のように、常名台における遺跡の消長は、劇的な発展と消滅を辿るもの（古墳時代前期の西区）と、規模は大きくないが比較的継続性の高いもの（奈良・平安時代の東区）があり、その中心地は時期ごとに変転していた様子も窺えた。このバリエーションは第一に、台地の住人たちの生活形態や空間認識の違いを示すものと思われる。例えば、森林資源や耕作地の開発、それに適応した居住地の選択、そして通婚や経営協力などが生み出す人間関係など、様々な集落の内的な要因をこの遺跡の消長に読むことができる。また同時に、当地周辺の時代相を反映しているとも考えられ、自然環境や生産力の変化、政治情勢や社会制度の変革など、外的要因からこれを跡付けることも可能である。ようやく全体像を窺い始めた今の時点で、それぞれの原因や背景に特定の説明を用意しているわけではない。ただ、時代を通じて常に景観の中心であった谷津との関係や（水源であり、水田も作られたであろう）、あるいは常名天神山古墳が象徴する首長権勢との関係、居館の経営と常名城の前身との問題などは、今後も議論の中心になることと思われる。

いずれにせよ、これほどの大規模な調査は数が少なく、そこから得られた一連の資料は土浦市域のみならず、県南地域の歴史においても等閑を許さないことであろう。依然不明とされる点、さらに実態の解明が望まれる事柄は多々あるが、それは今後の調査・研究の進展に期待して、ひとまずの展望を終えることにしたい。

註

- (1) 平成11年、この常名の遺跡群を扱った企画展示が上高津貝塚ふるさと歴史の広場（考古資料館）で行われ、旧石器時代から中世に至る通史的な解説と、各年次の調査区と遺構を配置した全体図が提示された（比毛1999）。常名の台地におけるムラや古墳の広がり、空閑地のあり方などは、およそこれによって知ることができる。本稿もこれに依るところが大きい。
- (2) 台地上の平坦面は、長期にわたる耕作や自然の侵蝕によって、相当な厚さの土が削られていると考えられる。今回の神明遺跡第3次調査では、表土除去を最小限に留める努力をしたが、古墳時代の竪穴住居跡の深さは僅か20cm余りしかなく、当時の地表面は少なくとも20cmから50cm近くは上であろうと推測された。西区南側には、前期の土器が散布しているにもかかわらず、遺構が全くみつからない場所がある。侵蝕、削平によって、すでに遺構が失われている可能性も視野に入れておく必要がある。
- (3) 常名天神山古墳の年代は、墳丘形態のみならず、同じ土浦市内の王塚、后塚との前後関係からも推測されているところである。王塚は全長84m、前方部が細長い前期古墳であり、隣接する后塚も前期の範疇に入れて考えられている。常名天神山古墳は、これらに後続するものと考えられ、5世紀前葉頃に位置づけられている。常名台の集落や墓域との関連性を確かめるには、当然ながら発掘調査で古墳の時期を確定することが必要とされるであろう。
- (4) 北区、すなわち西谷津遺跡では、前期から中期にかけての頃と思われる遺物が若干出土している（本編第3章1トレンチ参照）。確実に中期と言えるか現有資料では結論できないが、小規模な住居跡群が存在した可能性はあると思われる。

参考文献

- 茂木雅博ほか 1991 「土浦市における古墳の測量」『博古研究』 創刊号 博古研究会
比毛君男 1999 『第5回企画展 常名台の古代のむら』 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
土浦市史編さん委員会 1974 『土浦市史』 土浦市



確認調査風景



確認調査風景



1 トレンチ 北部遺構確認状況



1 トレンチ 南部遺構確認状況



5b トレンチ 遺構確認状況



6 トレンチ 遺構確認状況



7 トレンチ 遺構確認状況

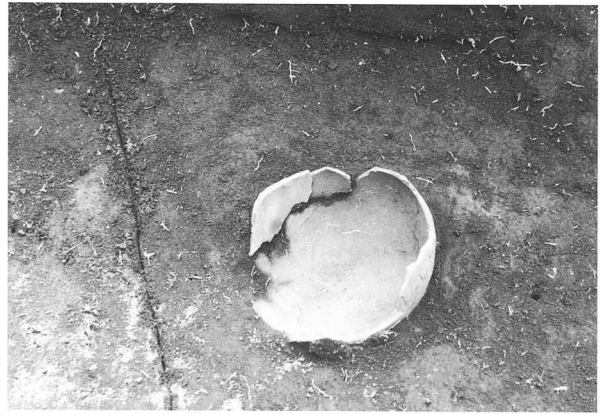


8 トレンチ 遺構確認状況

P L.2 確認調査



9bトレンチ 第1号土坑



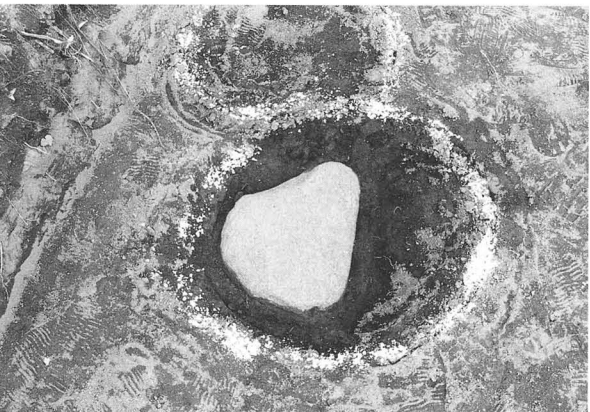
9bトレンチ 第1号住居跡



10aトレンチ 遺構確認状況



11aトレンチ 遺構確認状況



11aトレンチ ピット9



13bトレンチ 遺構確認状況



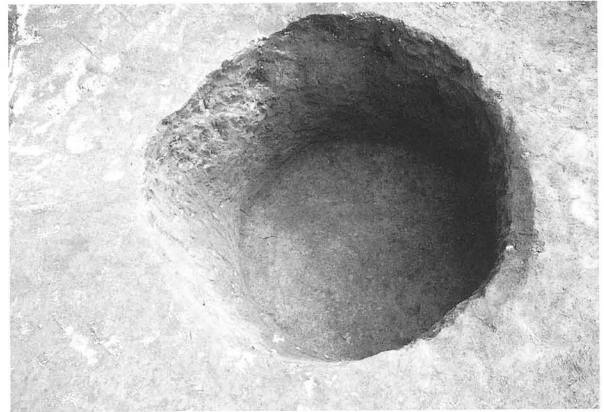
13bトレンチ 埋没土層確認状況



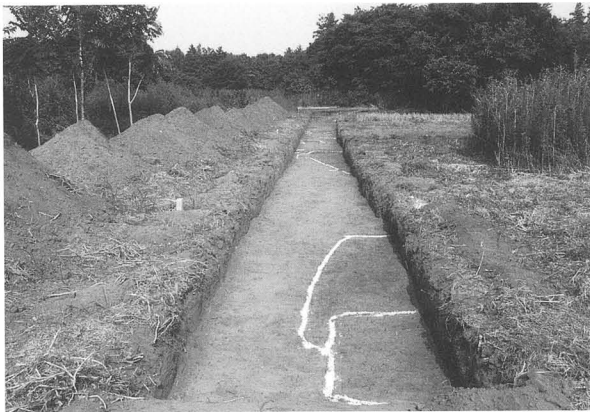
17wトレンチ 第1号土坑



17wトレンチ 第2号土坑



17wトレンチ 第3号土坑



19aトレンチ 遺構確認状況



19bトレンチ 遺構確認状況



19bトレンチ 遺構確認状況



20bトレンチ 遺構確認状況



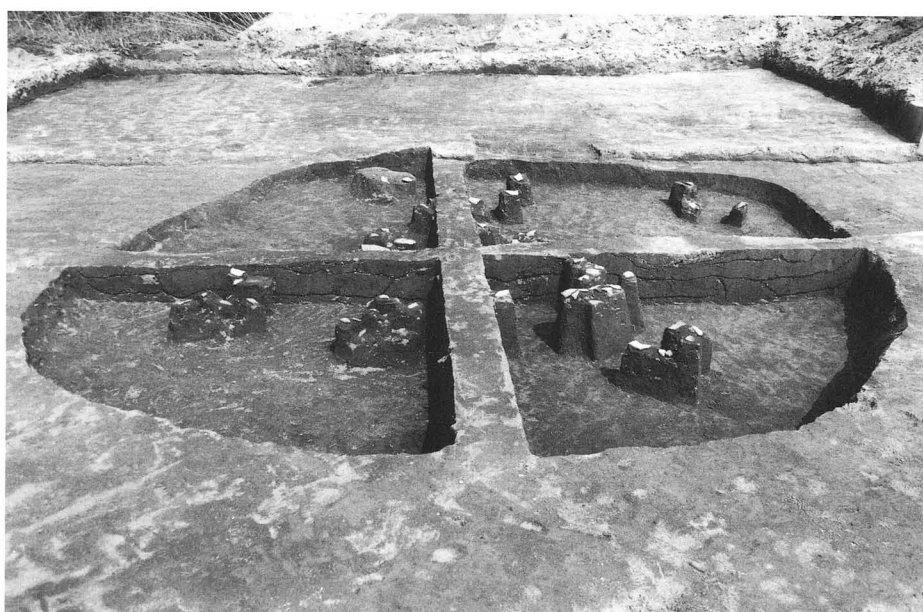
21aトレンチ 遺構確認状況



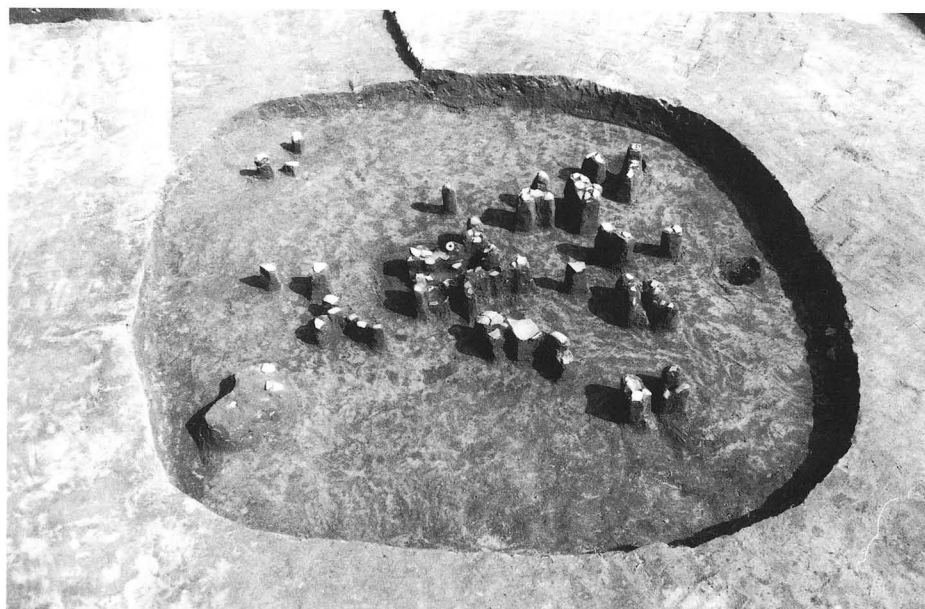
イトレンチ 遺構確認状況



14aトレンチ
第1号住居跡完掘状況



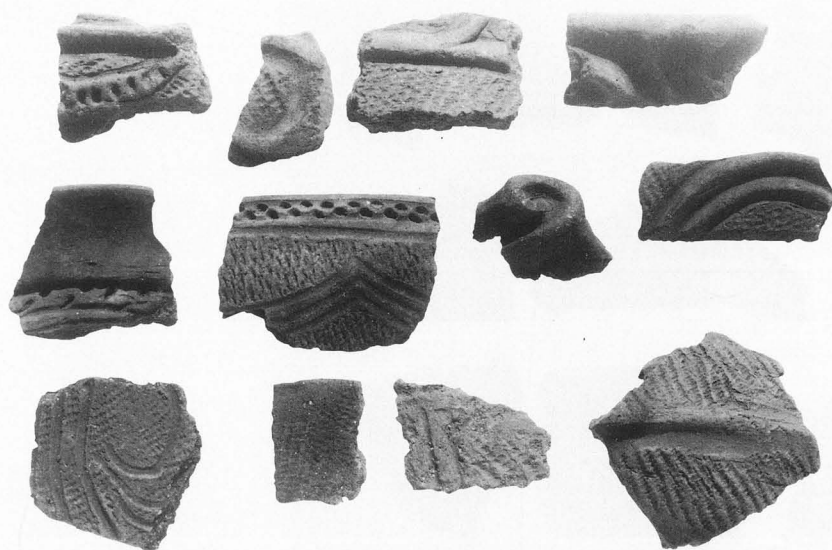
14aトレンチ
第1号住居跡
セクション



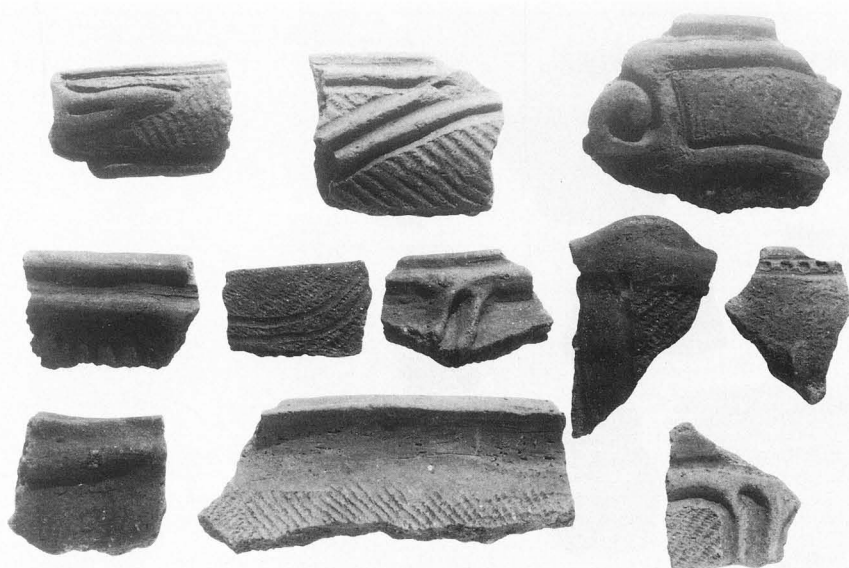
14aトレンチ
第1号住居跡
遺物出土状況



5b トレンチ出土土器



6 トレンチ出土土器



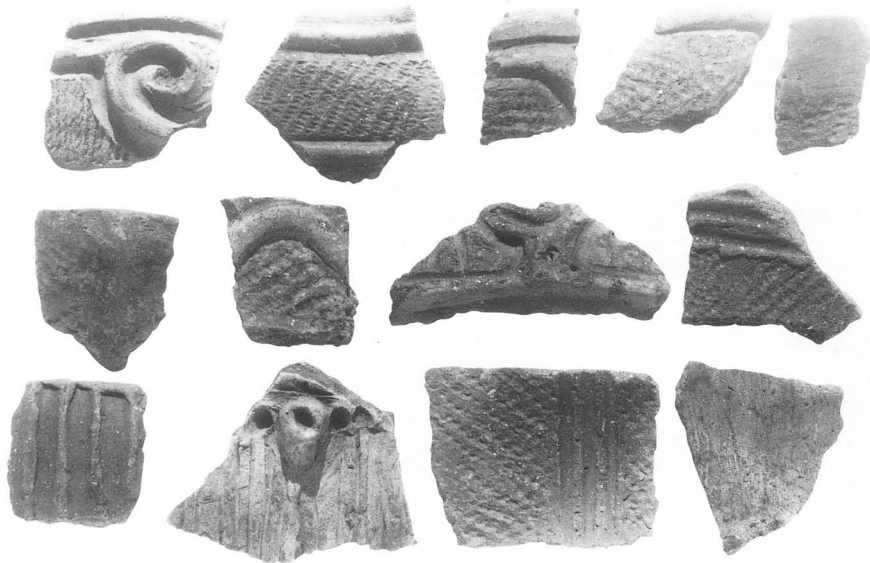
7 トレンチ出土土器



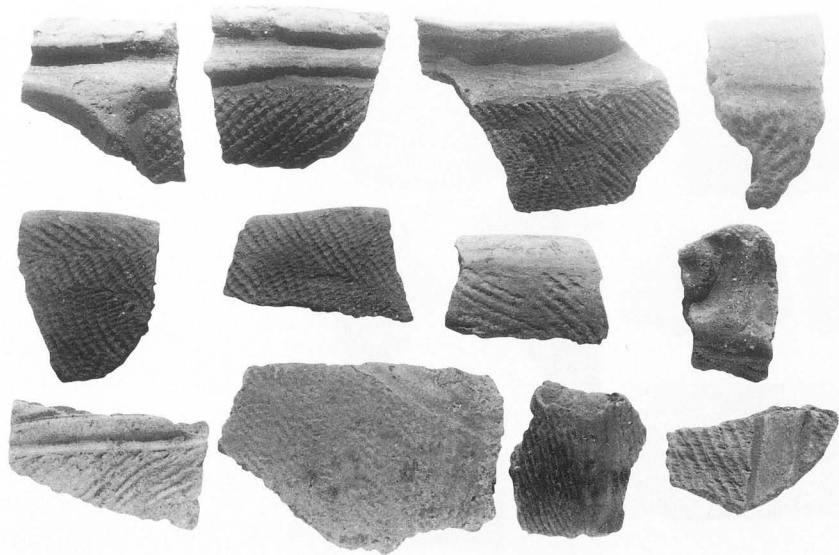
8aトレンチ出土土器



8aトレンチ出土土器



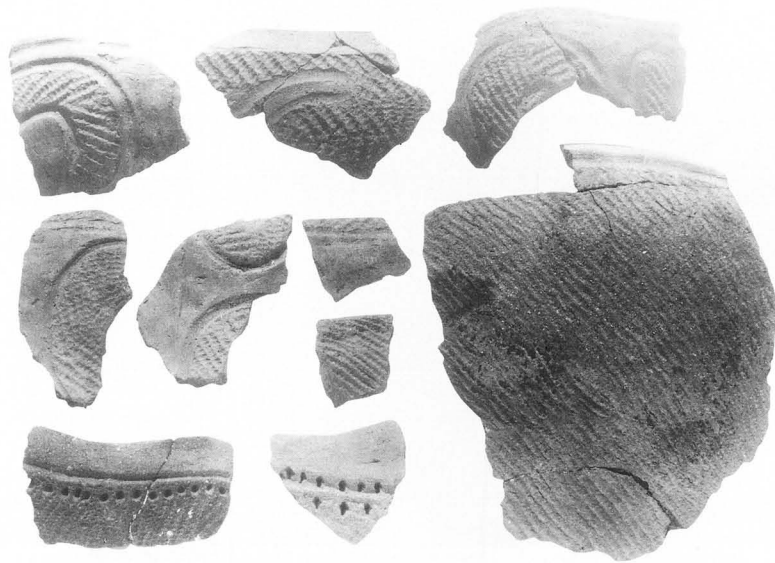
8aトレンチ出土土器



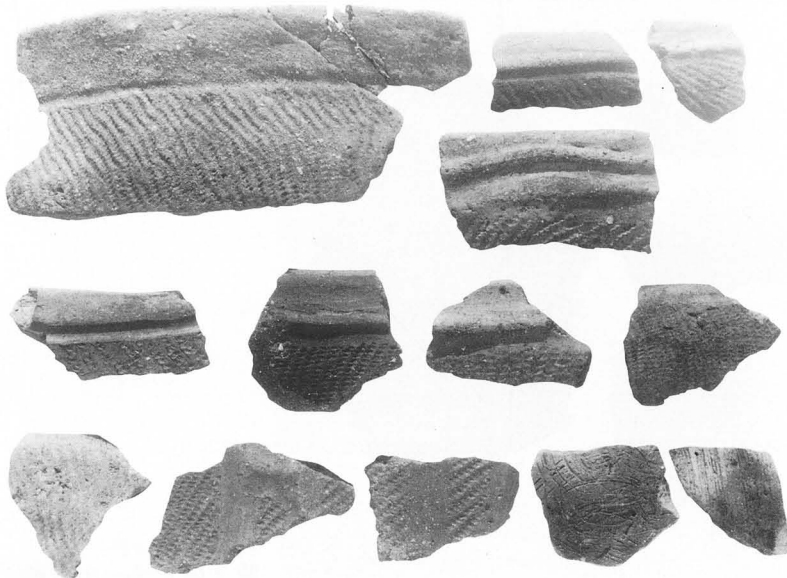
8b・cトレンチ出土土器



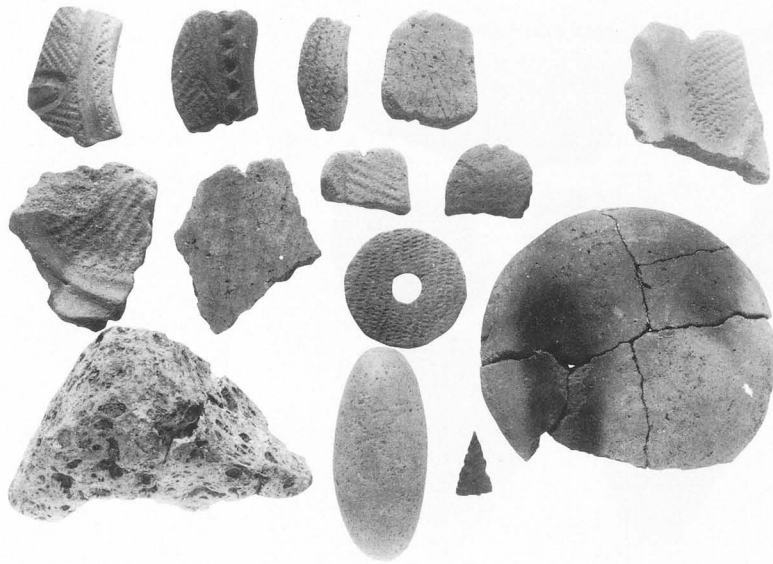
9bトレンチ出土土器



14aトレンチ
第1号住居跡出土土器(1)



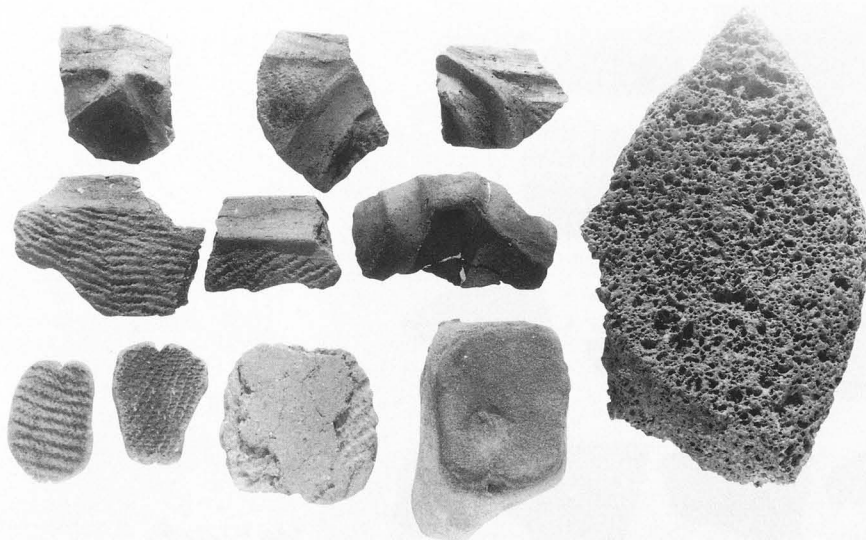
14aトレンチ
第1号住居跡出土土器(2)



14aトレンチ
第1号住居跡出土土器(3)



17wトレンチ
第2号土坑出土土器(1)



17wトレンチ
第2号土坑出土土器(2)



神明遺跡第3次調査区全景とその他周辺地

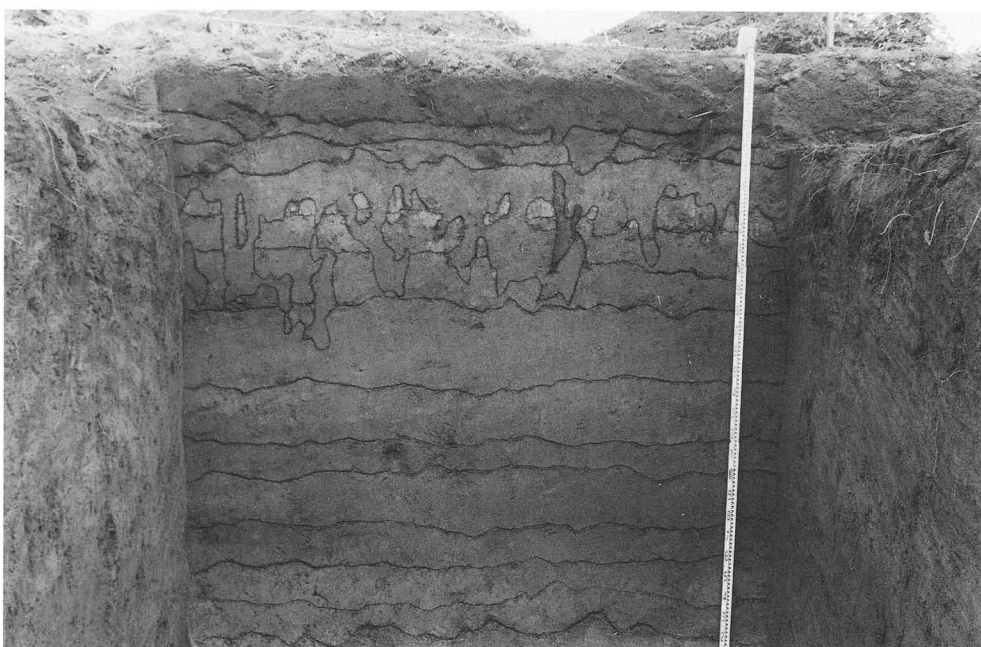
P L.10 神明遺跡



調査区内東部遺構確認状況（北より）



調査区内西部遺構確認状況（北より）



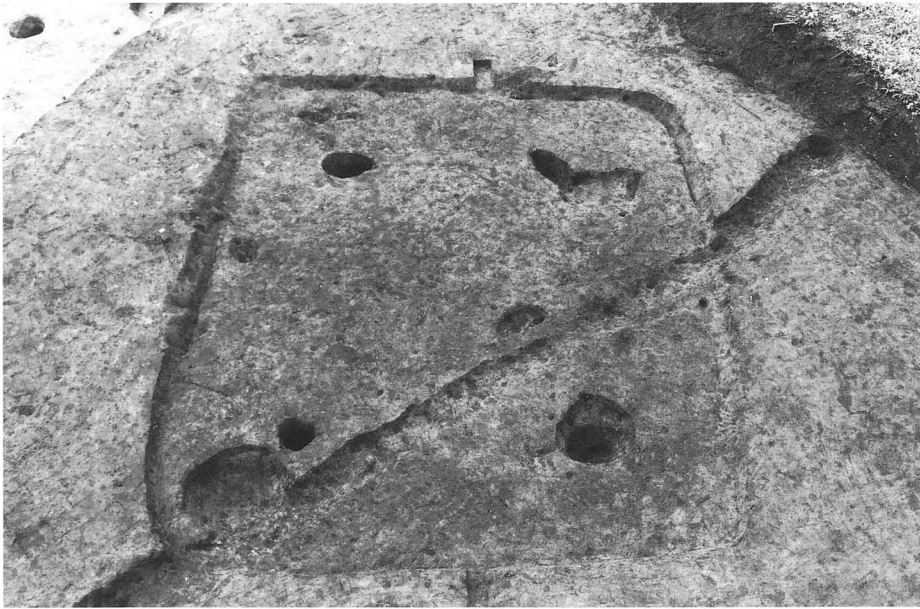
基本層序



埋没谷層序



同左 拡大及びサンプリング地点



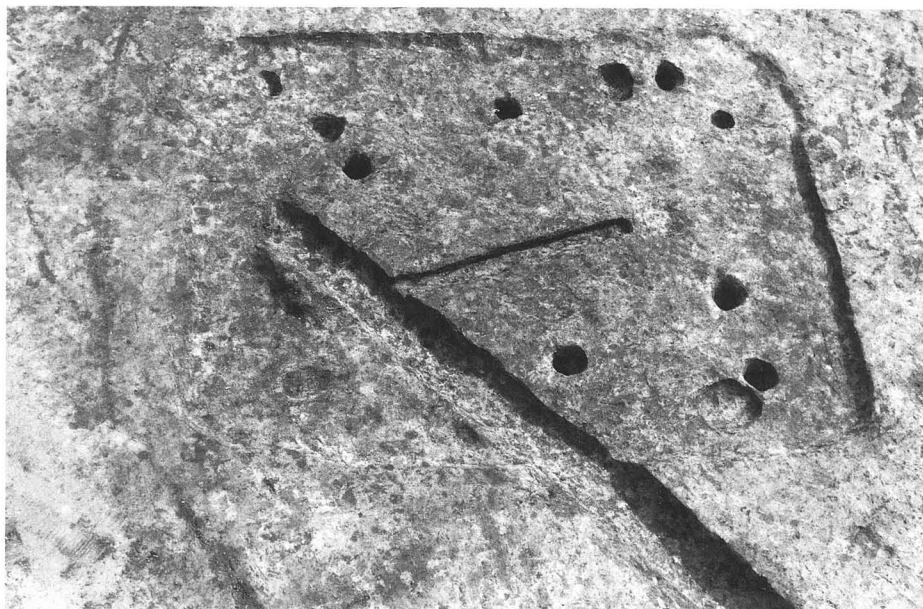
第1号住居跡
完堀状況（北より）



第1号住居跡
遺物出土状況（南より）



第1号住居跡
南東隅遺物出土状況



第2号住居跡
完掘状況（西より）



第3号住居跡
遺物出土状況（北東より）



第3号住居跡
炉跡付近



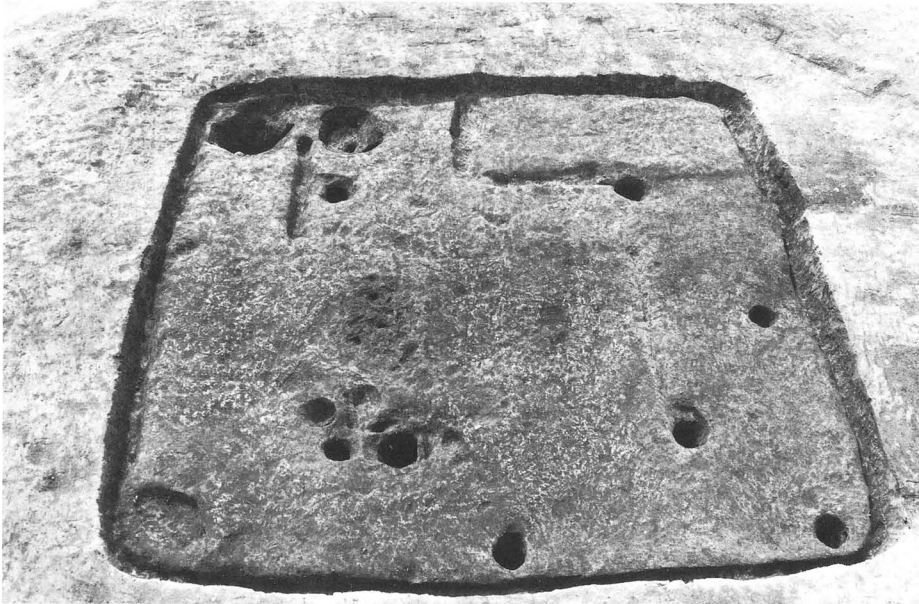
第3号住居跡
貯蔵穴（北より）



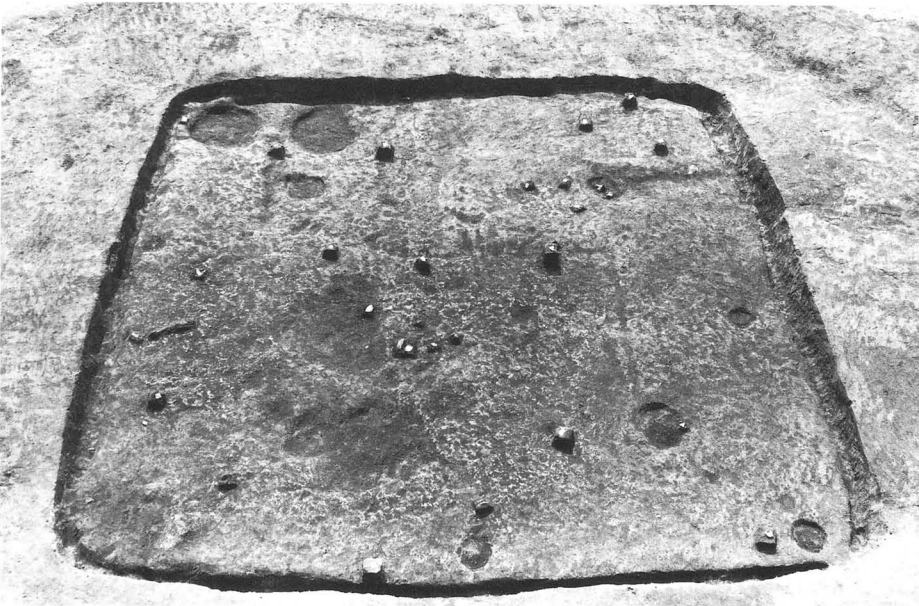
第3号住居跡
西隅付近（南東より）



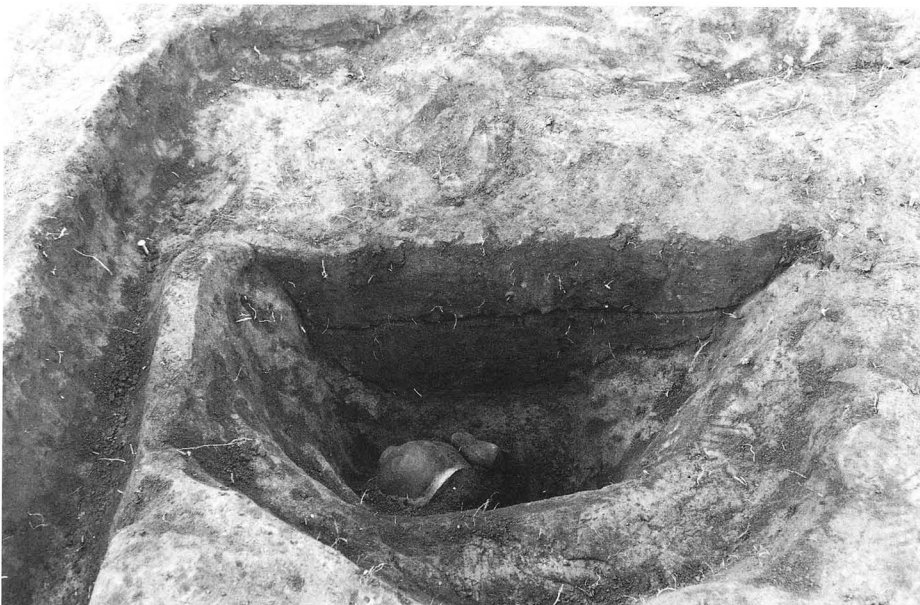
第3号住居跡
同上近影（南西より）



第4号住居跡
完掘状況（北より）



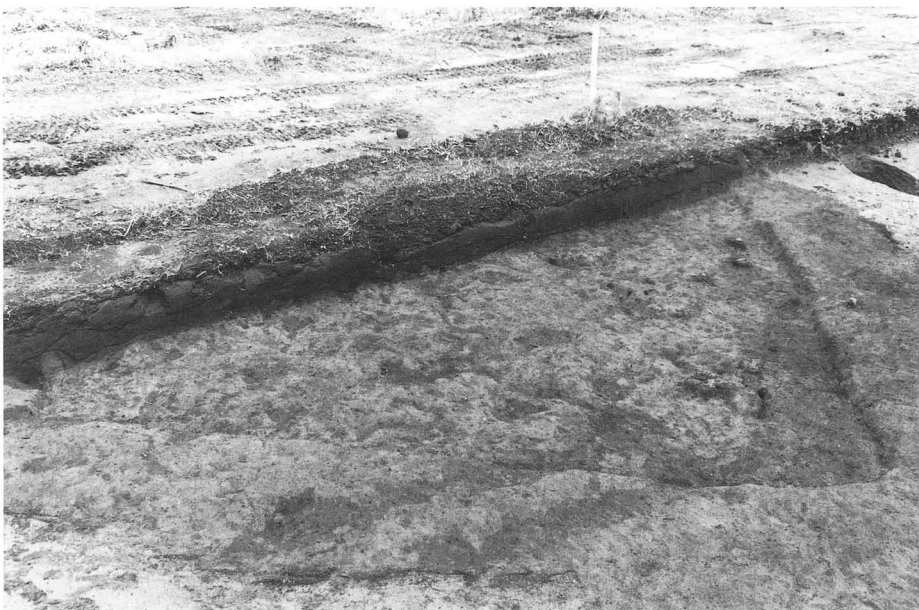
第4号住居跡
遺物出土状況



第4号住居跡
貯蔵穴（北より）



第5号住居跡
完掘状況（東より）



第6号住居跡
完掘状況（南東より）



第6号住居跡
完掘状況（南西より）



第7号住居跡
床面検出状況（東より）



第7号住居跡
掘り方完掘状況



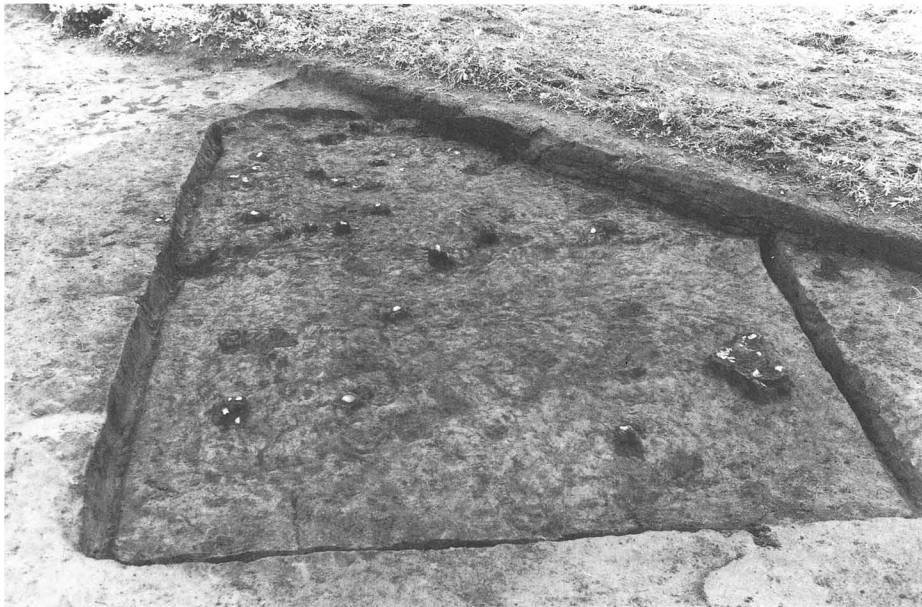
第7号住居跡
炉跡断面（南より）



第7号住居跡
ピット内遺物出土状況（東より）



第8号住居跡
完掘状況（南より）



第8号住居跡
遺物出土状況



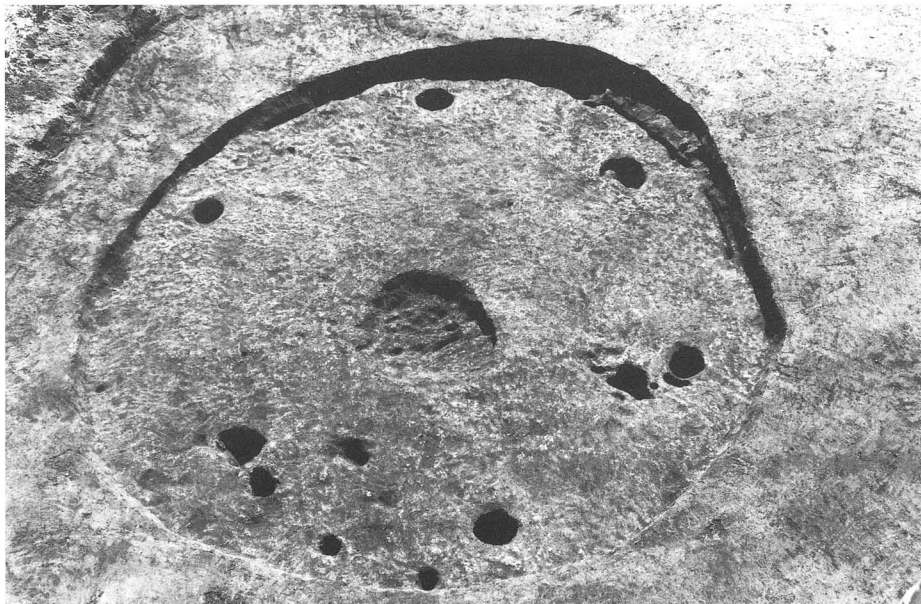
第8号住居跡
北部遺物出土状況（北より）



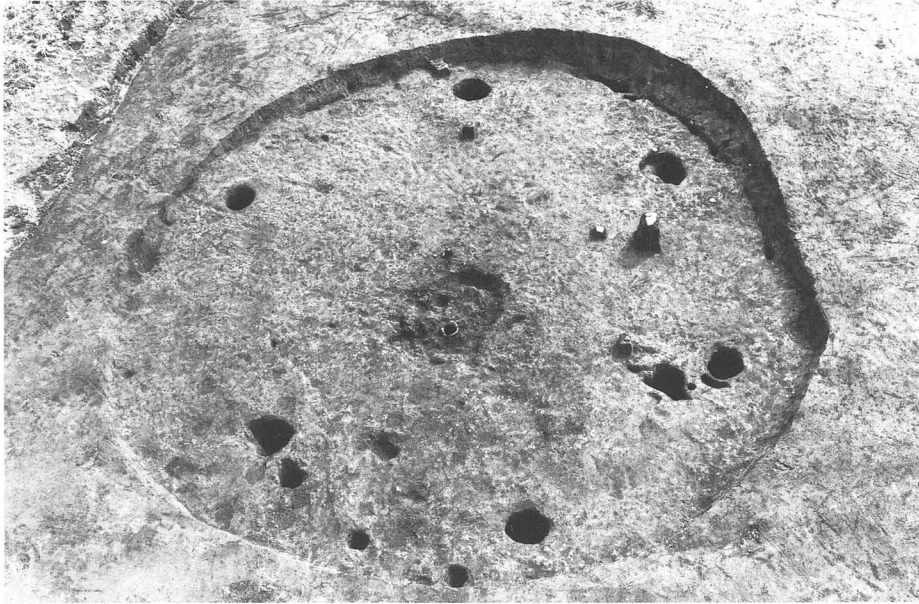
第9号住居跡
床面検出状況 (西より)



第9号住居跡
遺物出土状況



第10号住居跡
完掘状況 (北より)



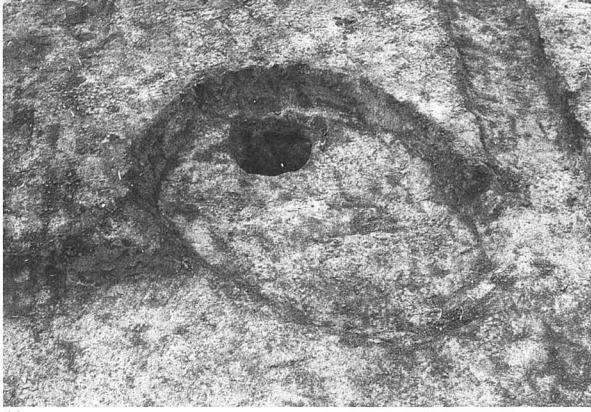
第10号住居跡
床面検出状況（北より）



第10号住居跡
土層断面（南より）



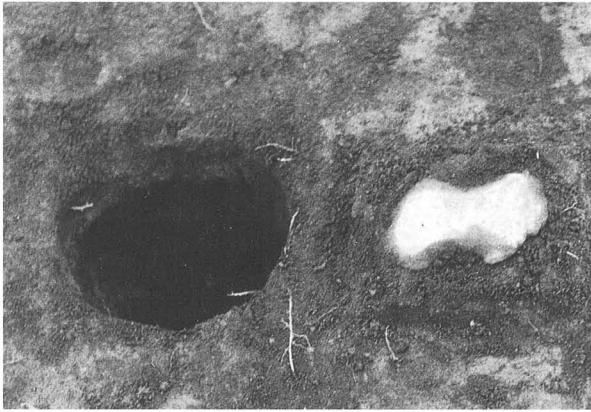
第10号住居跡
炉跡断面（西より）



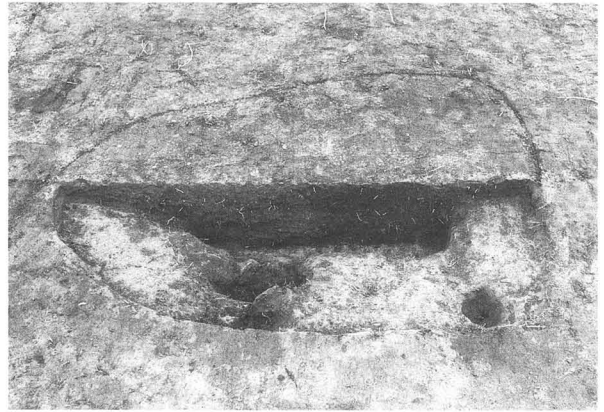
第1号土坑



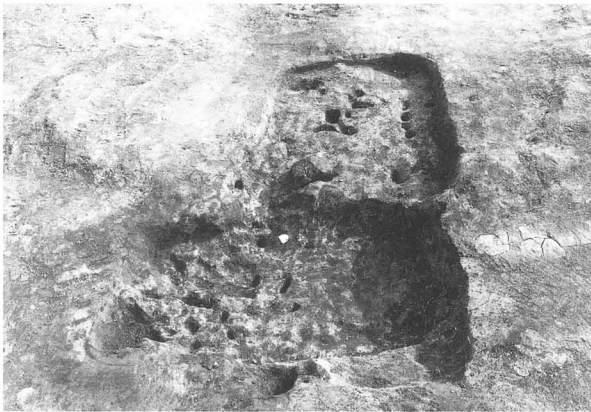
第2・3号土坑



第2号土坑遺物出土状況



第4号土坑



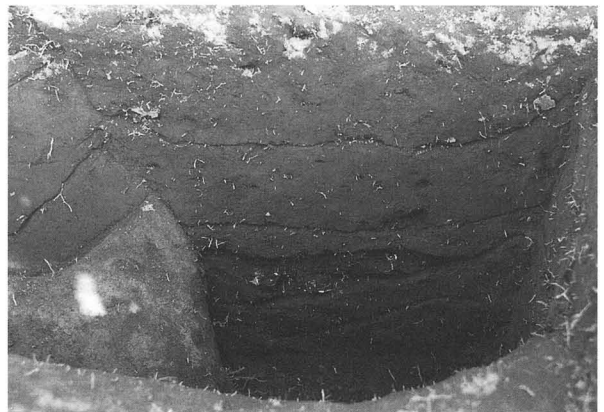
第5号土坑



第6号土坑 (東より)



第6・7号土坑土層断面 (西より)



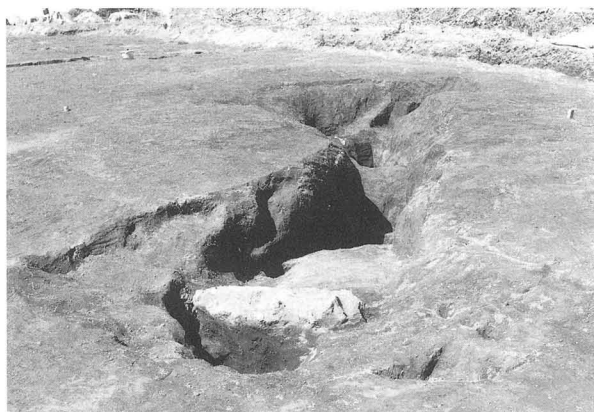
第7号土坑土層断面 (西より)



第6・7・8号土坑（北西より）



第6・7号土坑（東より）



第8号土坑（南東より）



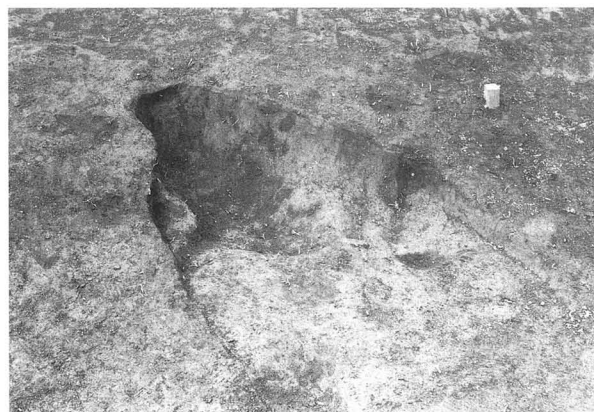
第8号土坑土層断面



第9号土坑



第9・10・11号土坑



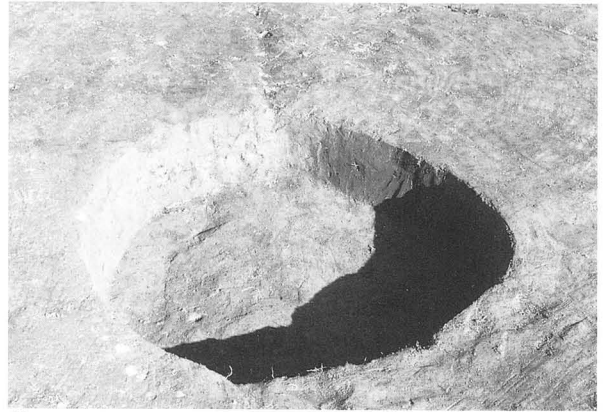
第12号土坑



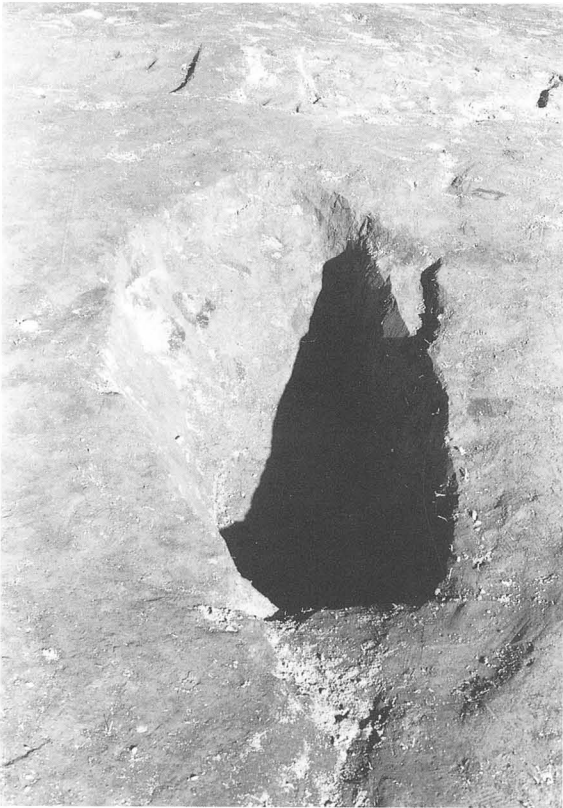
第13・14・15号土坑



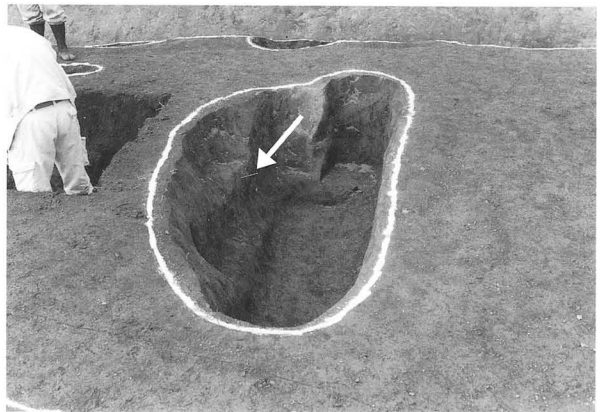
第16号土坑



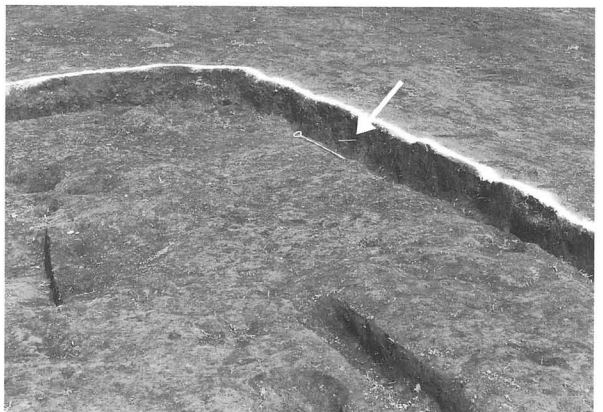
第18号土坑



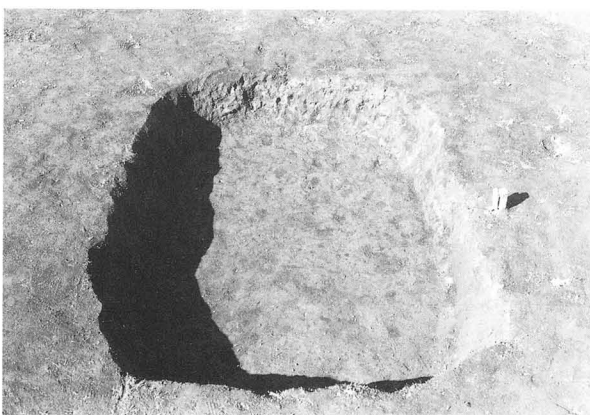
第19号土坑



第21号土坑（矢印は旧石器出土地点）



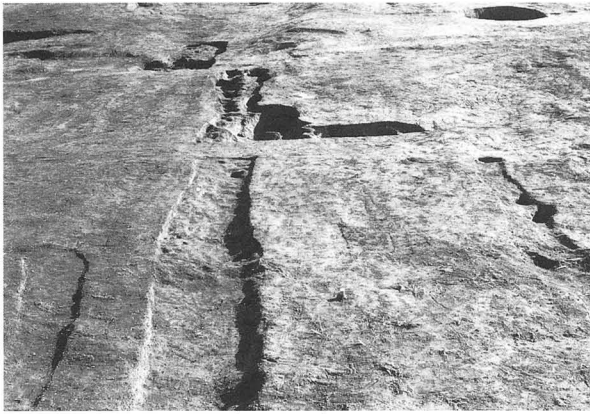
第4号住居跡東壁（矢印は旧石器出土地点）



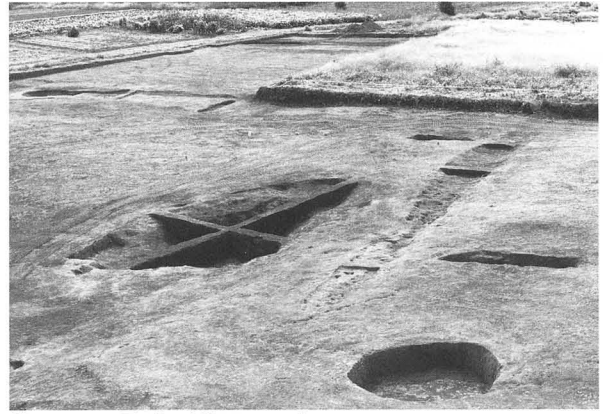
第20号土坑



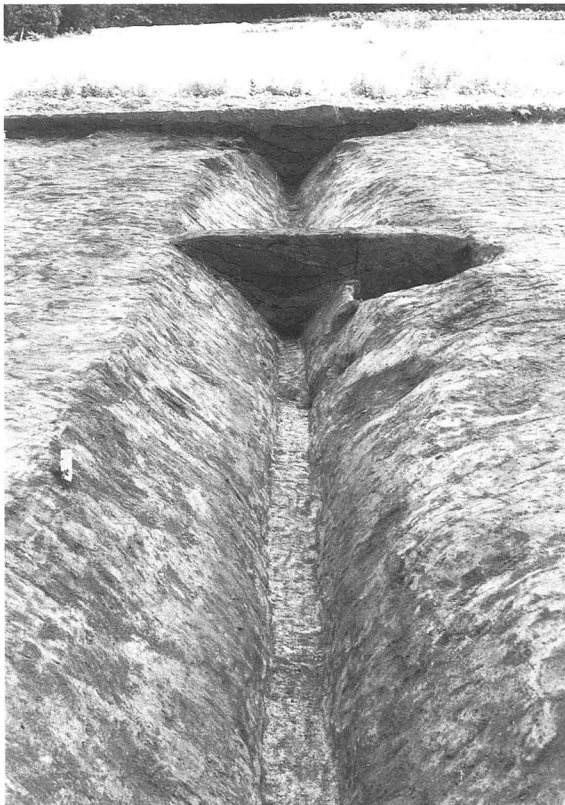
調査北東部 土坑完掘状況



第1・2・3号溝（北より）



第4・5号溝（北西より）



第6号溝（西より）



第6号溝 調査区西側土層断面（B-B'）



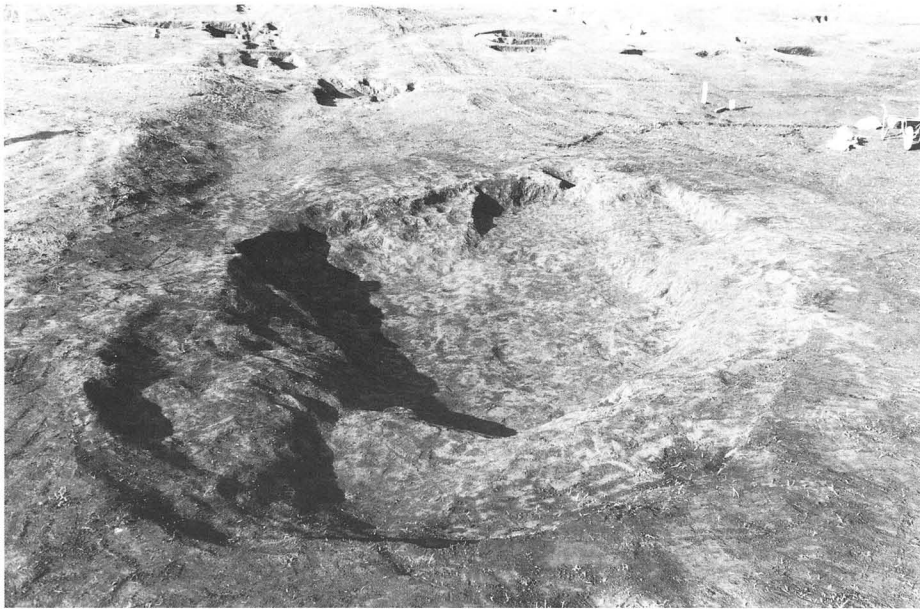
第6号溝 調査区東側土層断面（E-E'）



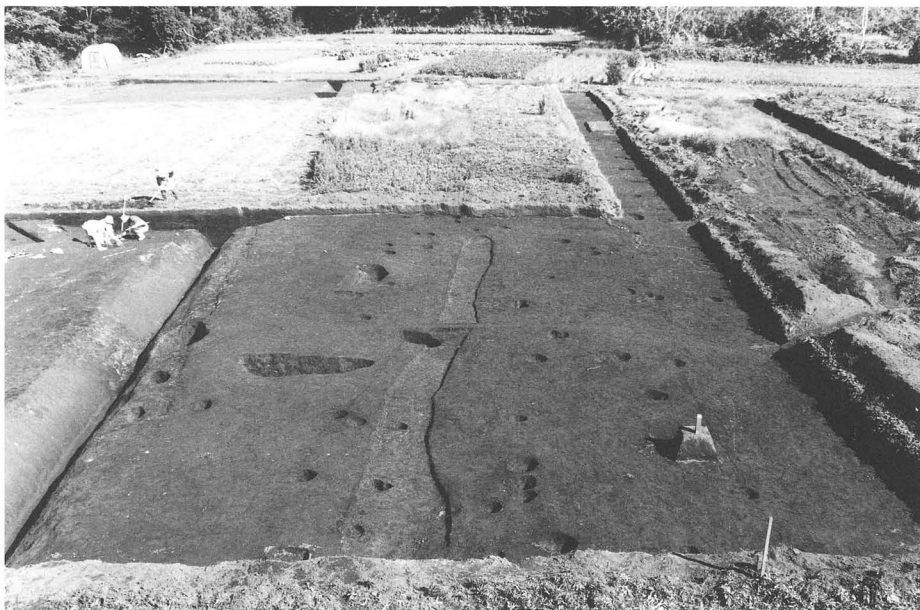
整地遺構（SX-1）



屋外炉（SX-2）



堅穴状遺構 (SX-3)



中世ピット群 (西より)

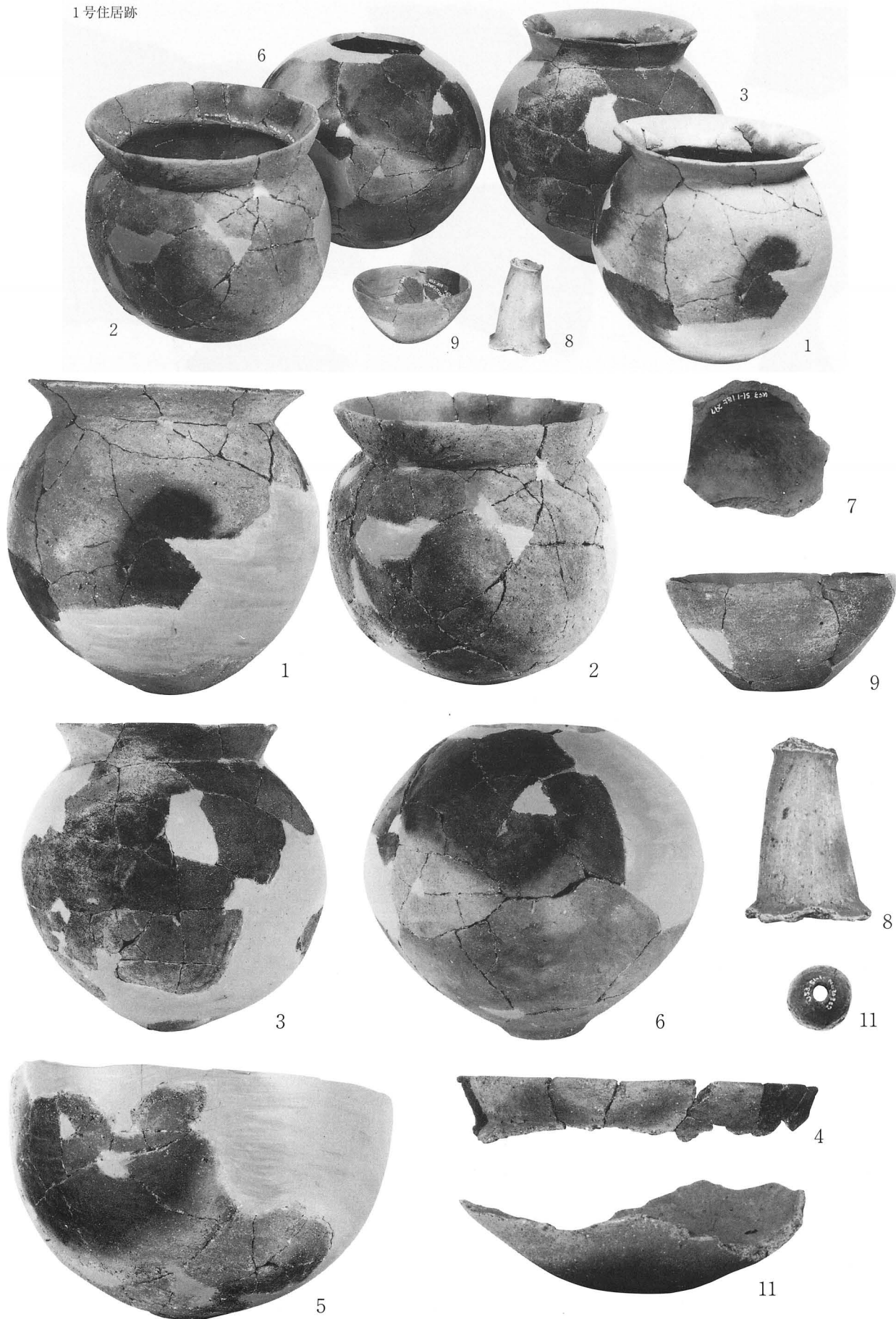


拡張区 柱穴群確認状況 (南より)

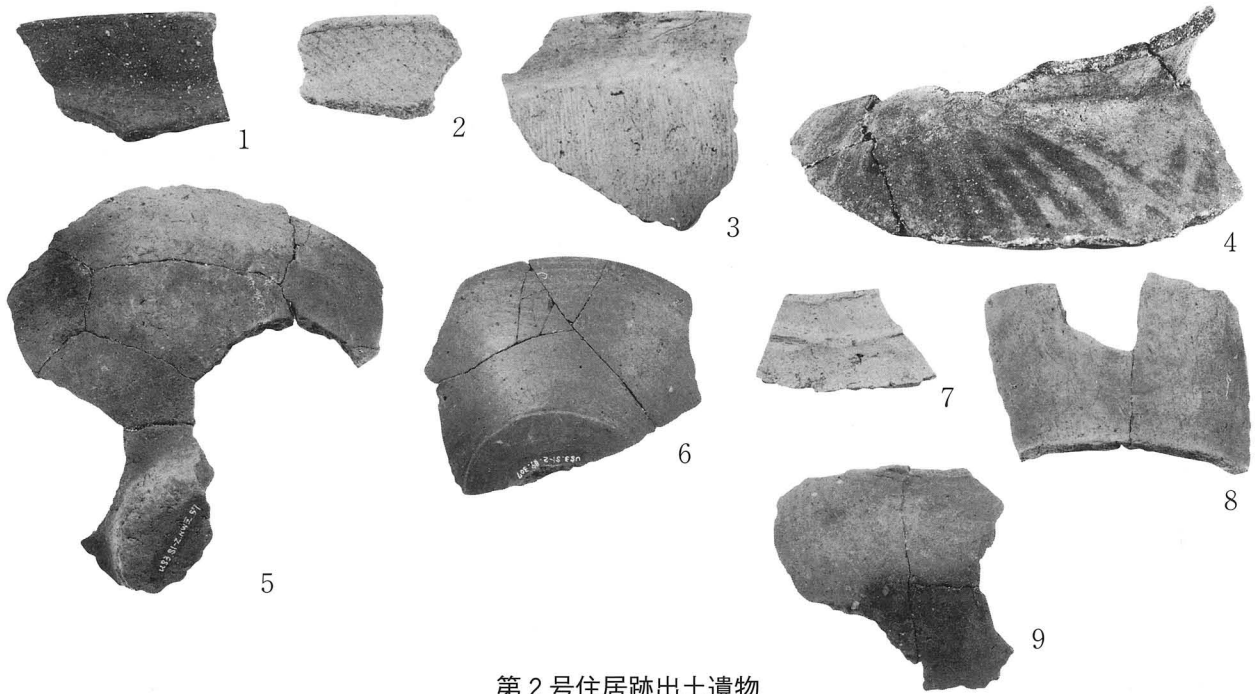


同左 (西より)

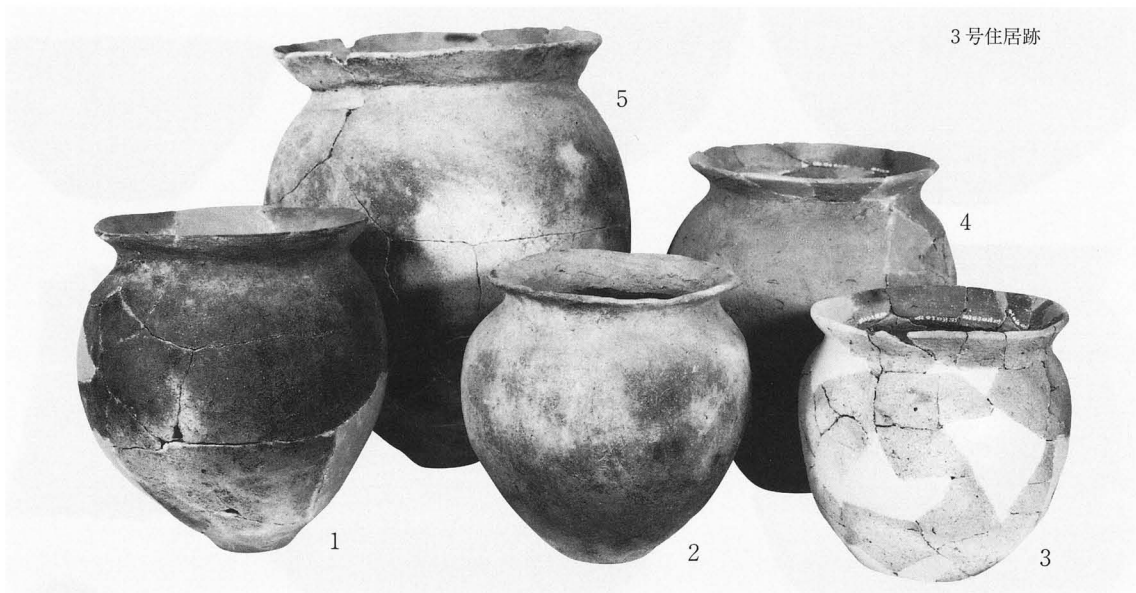
1号住居跡



第1号住居跡出土遺物



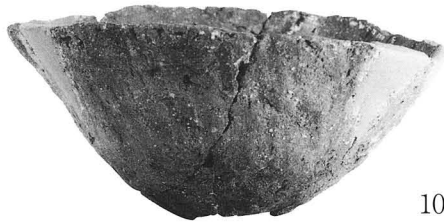
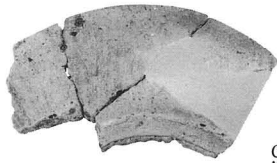
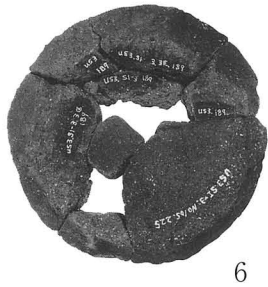
第2号住居跡出土遺物



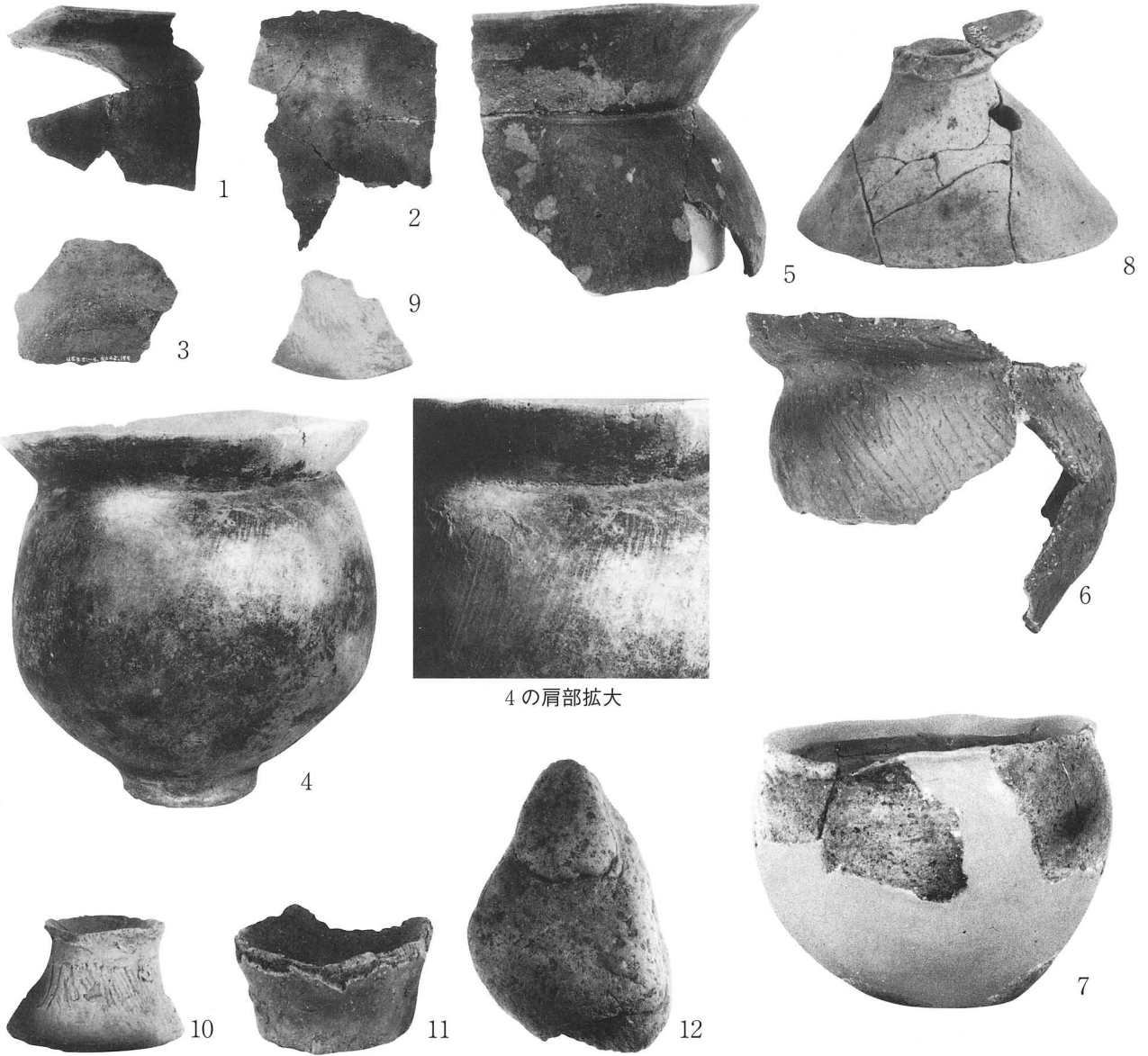
第3号住居跡出土遺物(1)



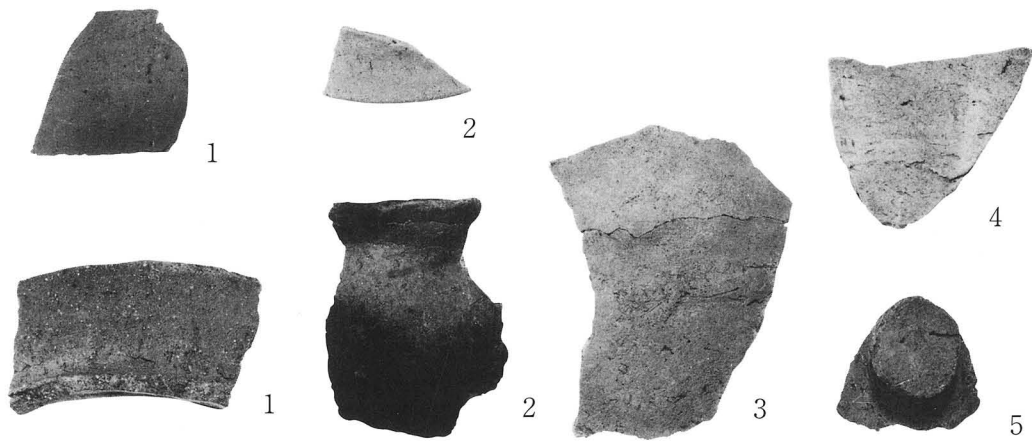
4の肩部拡大



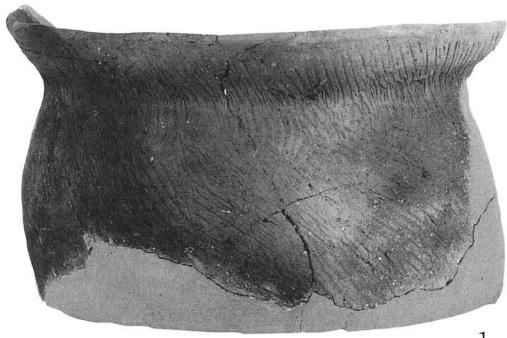
第3号住居跡出土遺物(2)



第4号住居跡出土遺物



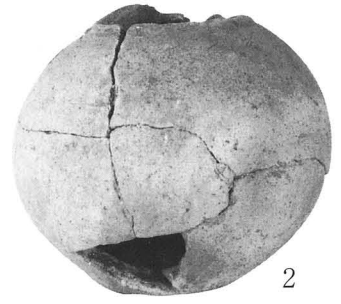
第5・6号住居跡出土遺物



1

1の肩部拡大

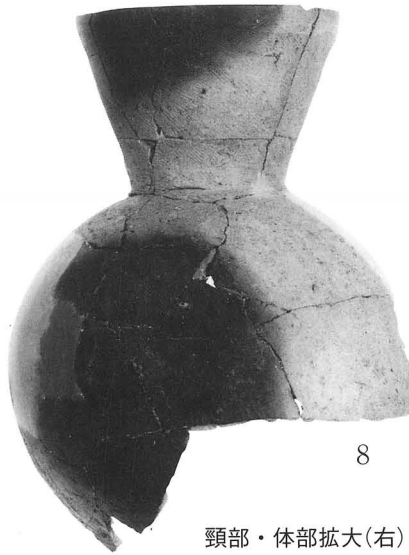
第7号住居跡出土遺物



2

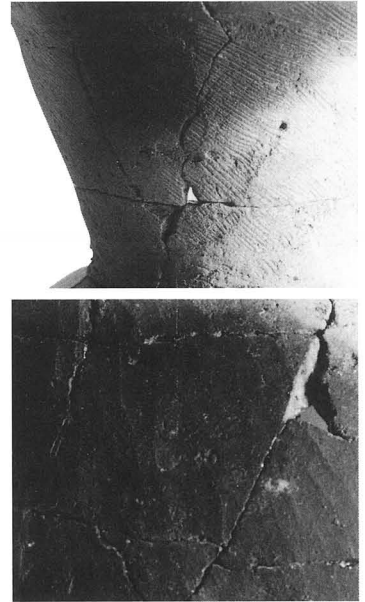


1

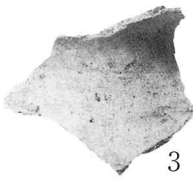


8

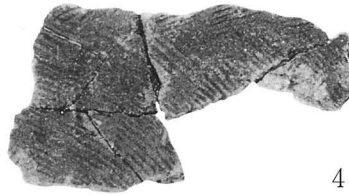
頸部・体部拡大(右)



2



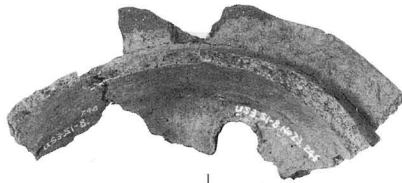
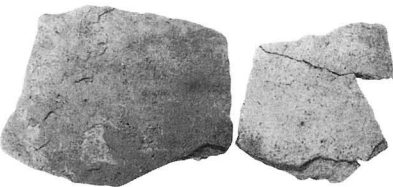
3



4



5



9



10



7

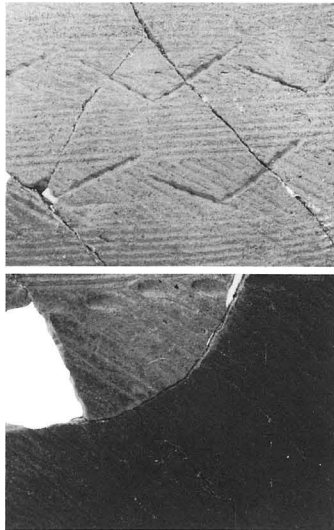


6



11

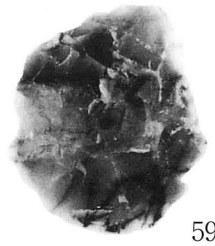
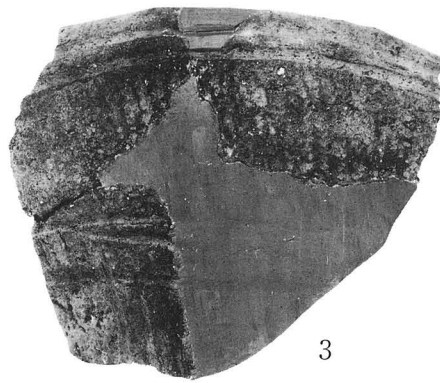
第8号住居跡出土遺物



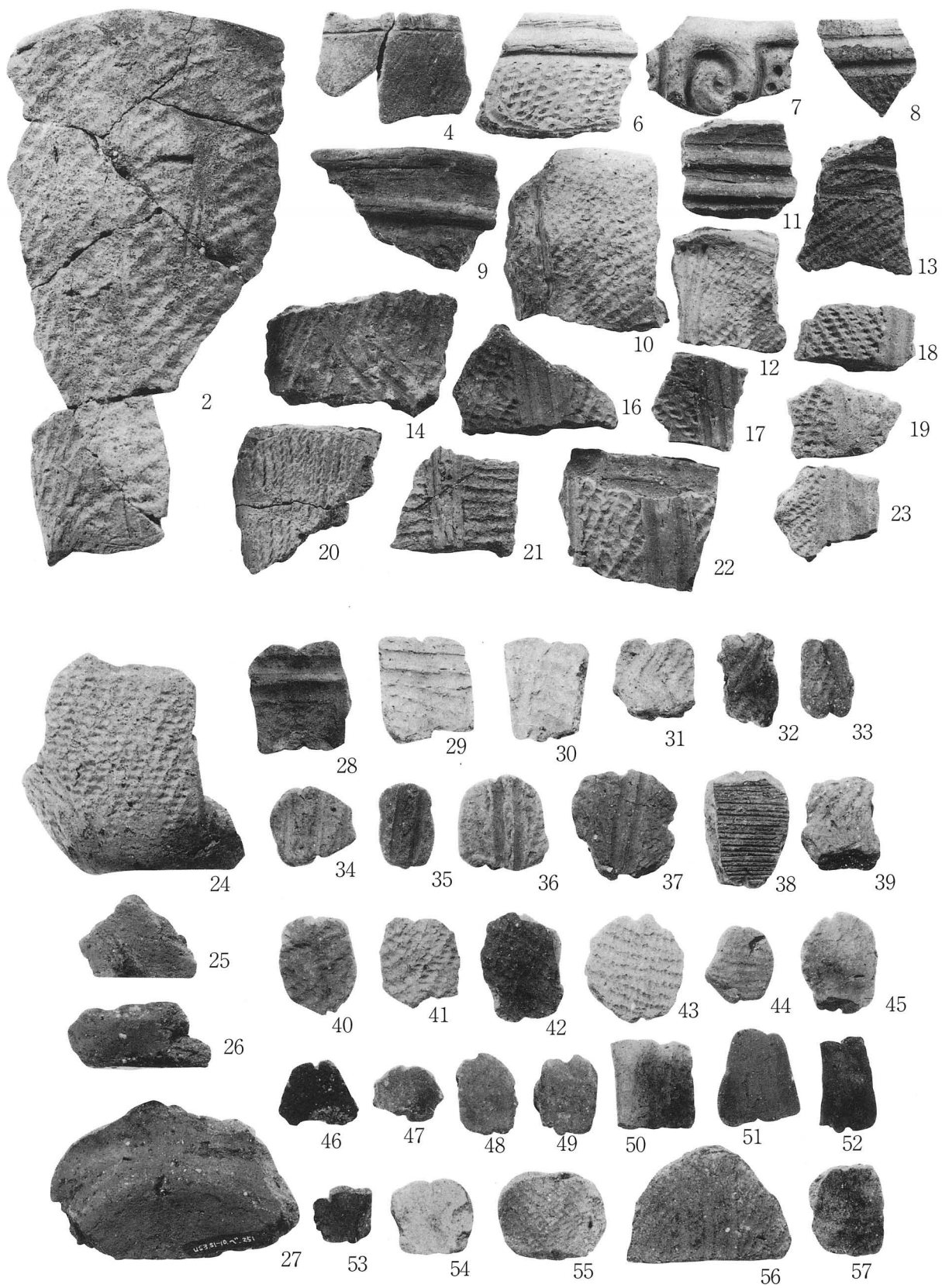
1の肩部拡大 (左上)
1の体部拡大 (左下)



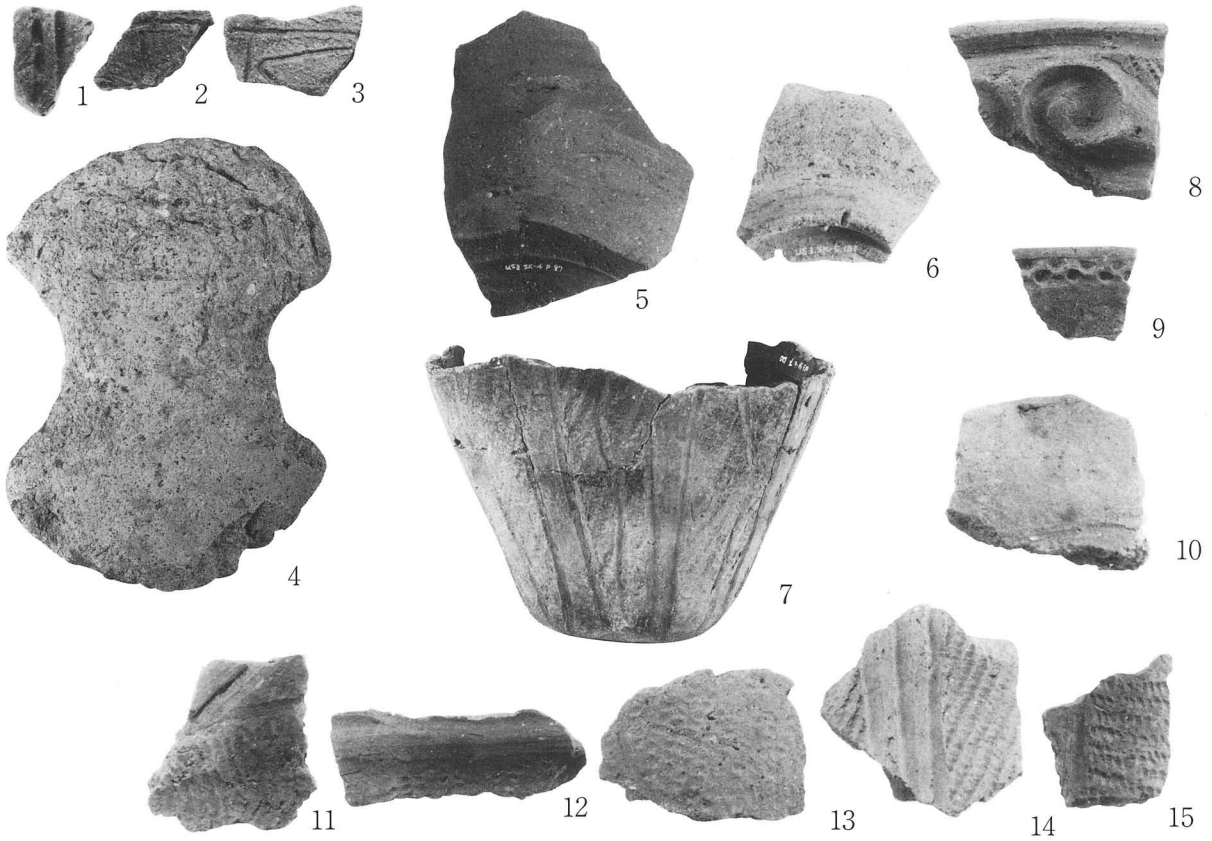
第9号住居跡出土遺物



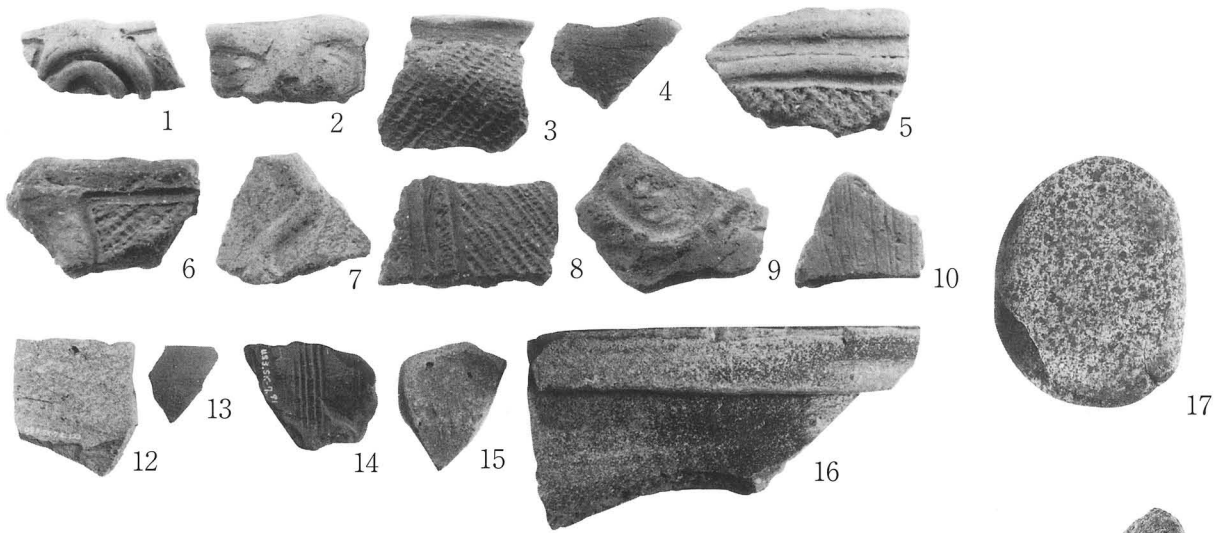
第10号住居跡出土遺物(1)



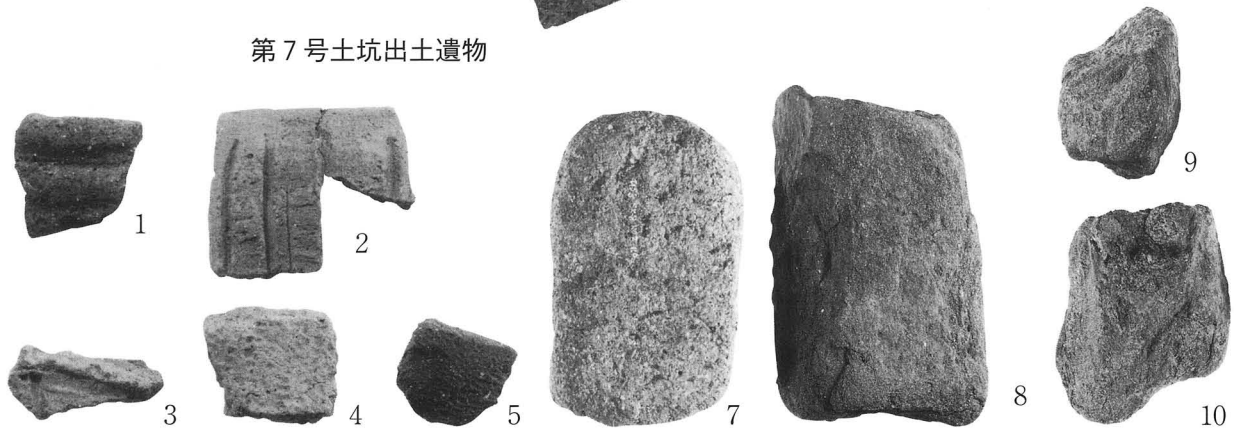
第10号住居跡出土遺物(2)



第2・4・5・6号土坑出土遺物



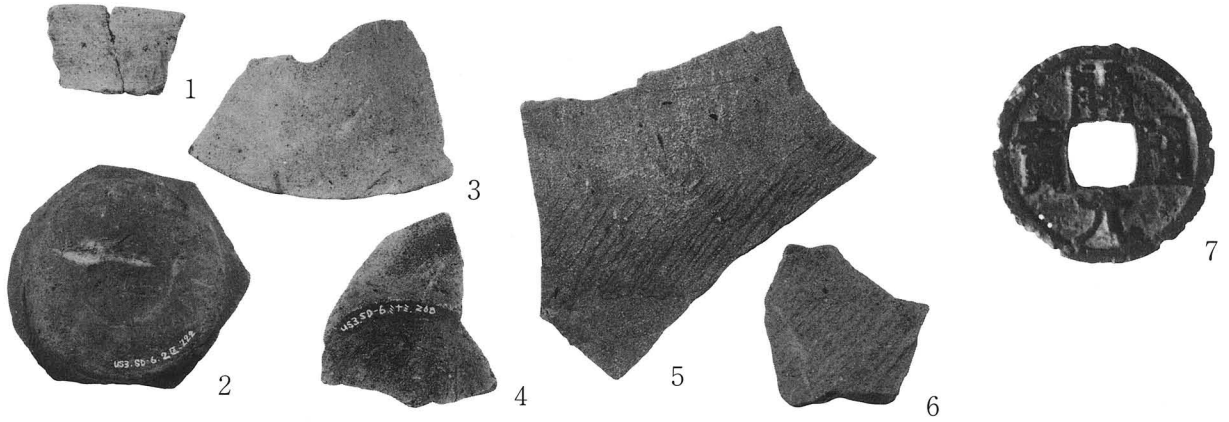
第7号土坑出土遺物



第8・9号土坑出土遺物



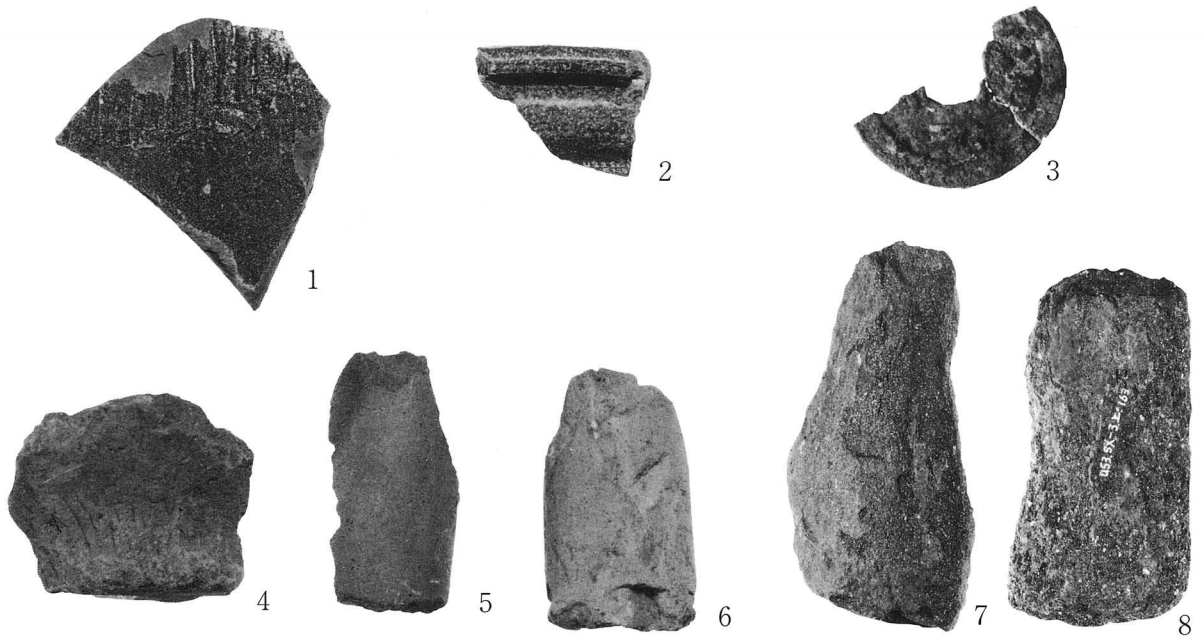
第16号土坑出土遺物



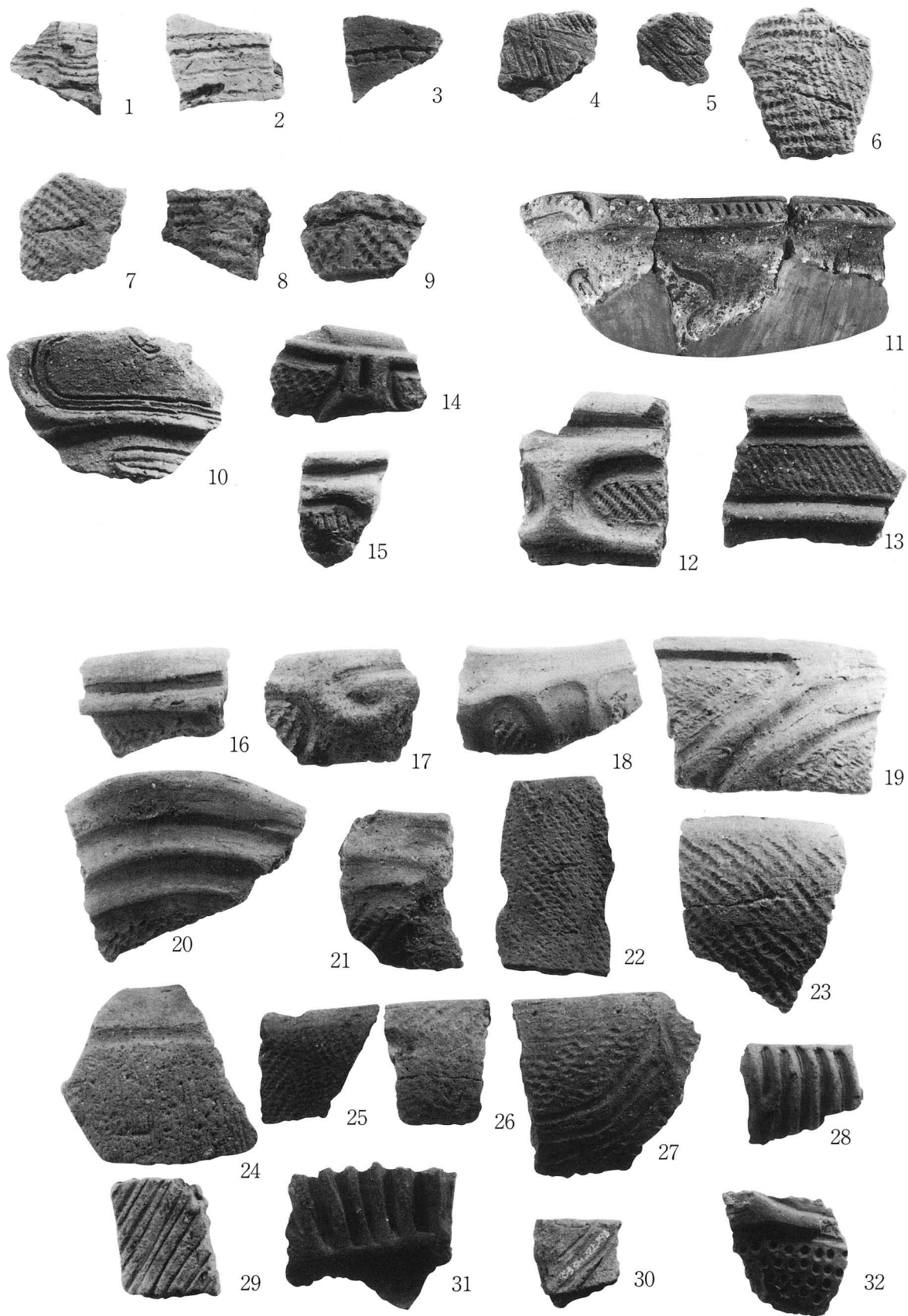
第6号溝出土遺物



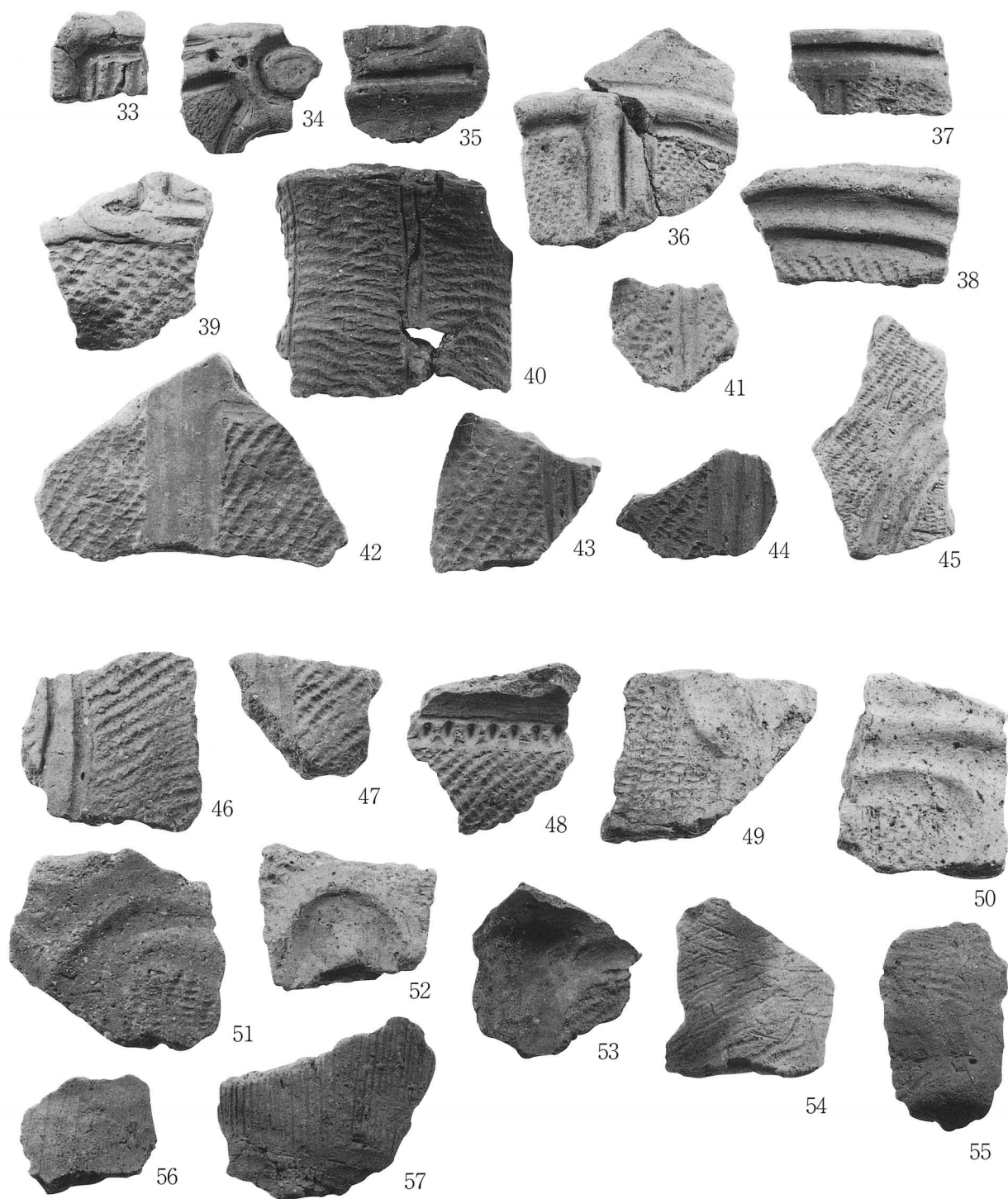
第7号溝出土遺物



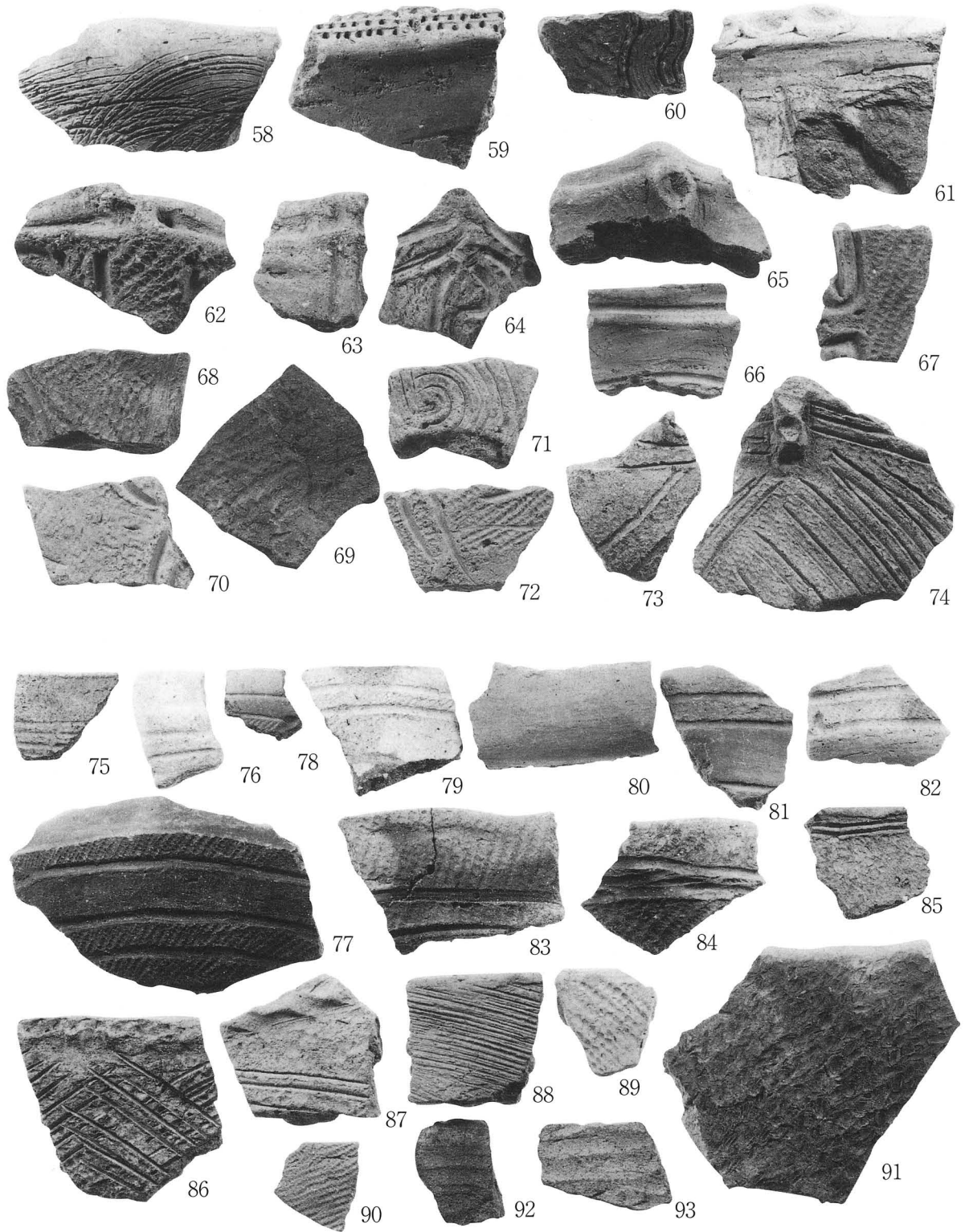
整地遺構 (SX-1) ・ 豎穴状遺構 (SX-3) 出土遺物



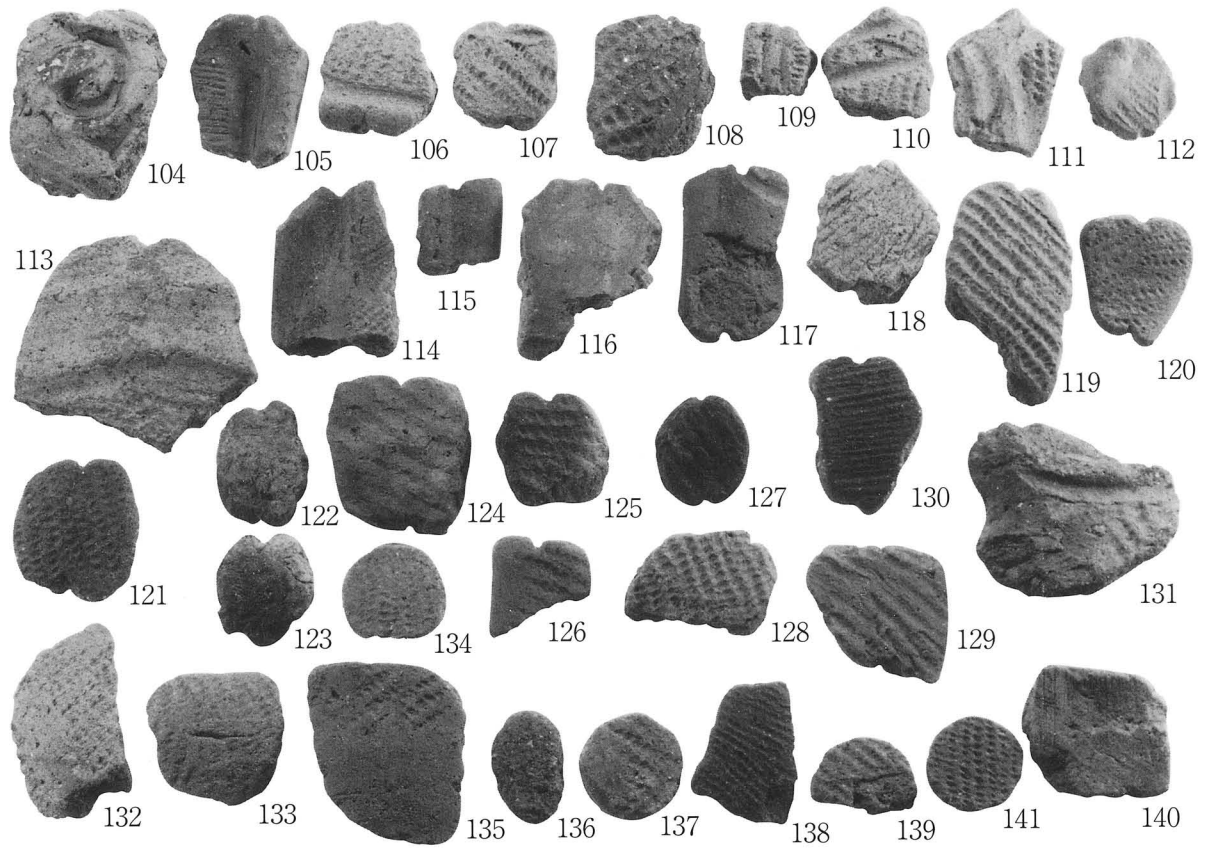
遺構外出土繩文土器(1)



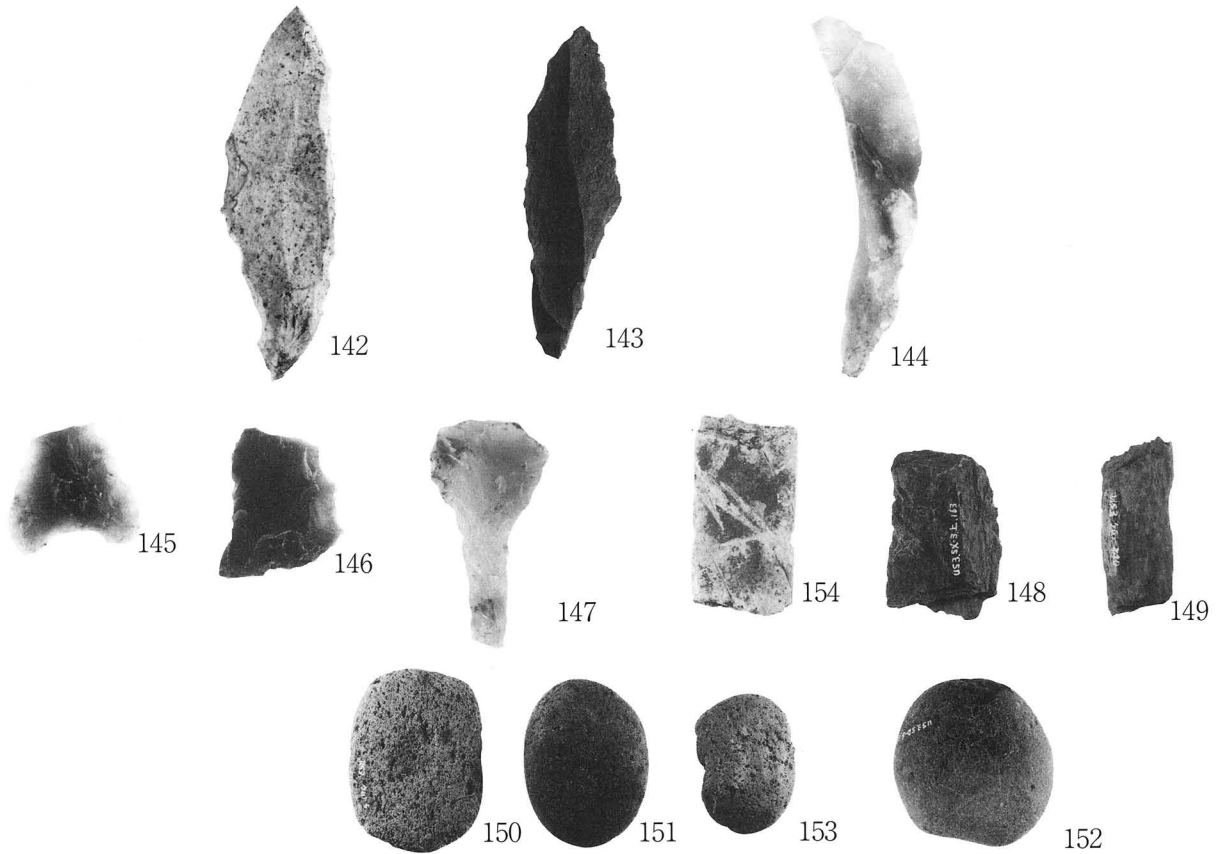
遺構外出土縄文土器(2)



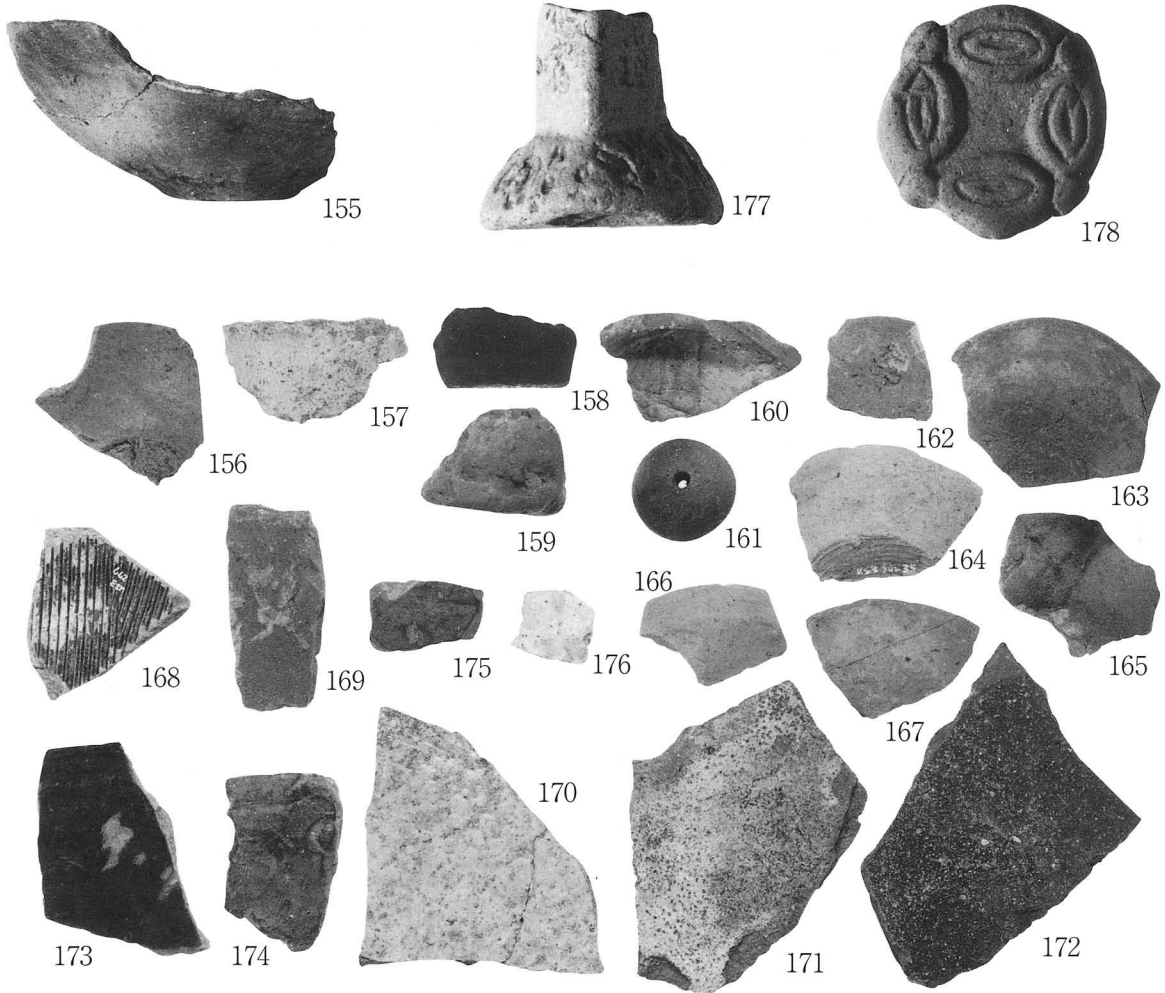
遺構外出土縄文土器(3)



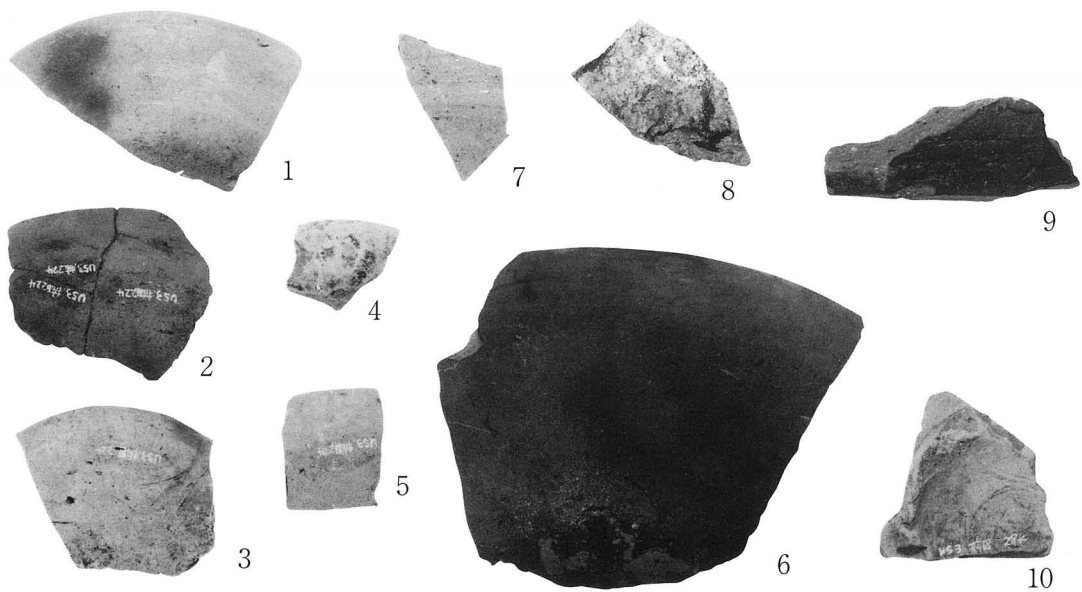
遺構外出土縄文土器(4)



遺構外出土石器



遺構外・表土・グリッド出土遺物



拡張区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	ひたなだいいせきぐんかくにんちょうさ しんめいいせき (だい3じちょうさ)							
書名	常名台遺跡群確認調査・神明遺跡 (第3次調査)							
副書名	土浦市総合運動公園建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
巻次	第6集							
シリーズ名								
シリーズ番号								
編者名	吉澤 悟	著者名	石川 功 小川和博 小野寿美子 窪田恵一 福田礼子 吉澤 悟					
編集機関	常名台遺跡調査会							
所在地	〒300-0811 Tel 0298-26-7111 茨城県土浦市上高津1843 上高津貝塚ふるさと歴史の広場内							
発行機関	土浦市教育委員会							
発行年月日	西暦2002年3月15日							
ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
ひたなだいいせきぐん 常名台遺跡群	つちうらしおおあざひたな 土浦市大字常名					平成13(2001年) 8月7日～ 10月2日	トレンチ総面積 約3117m ²	市運動公園 建設事業
しんめいいせき 神明遺跡	つちうらしおおあざ 土浦市大字 ひたなあざしんめい 常名字神明2760他	08203	237	36° 6' 7"	140° 11' 15"	平成13(2001年) 8月23日～ 10月19日	約4420m ²	市運動公園 建設事業
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項			
常名台遺跡群 確認調査	集落跡 墓域	縄文時代 古墳時代 平安時代 中世	竪穴住居跡 土坑 竪穴住居跡 古墳周溝 竪穴住居跡 建物礎石、溝	縄文土器 (加曾利E主体) 土師器 土師器・須恵器 壺甕類・土師質土器	26地点、39本のトレンチにより多数の遺構の存在を確認。			
神明遺跡 第3次調査	集落跡	縄文時代 古墳時代 中世	竪穴住居跡1軒 土坑 3基以上 竪穴住居跡9軒 溝 1条 掘立柱建物 数棟 土坑 数基	縄文土器 (加曾利E主体) 石器・貝殻 土師器 壺甕類・土師質土器 古銭	土坑に貝殻を投棄した「地点貝塚」や粘土採掘坑。 全て前期の住居跡。 パレススタイルの壺や結合器台など特殊な土師器が出土。 薬研掘に囲まれた大規模な居館跡の一部を確認。			

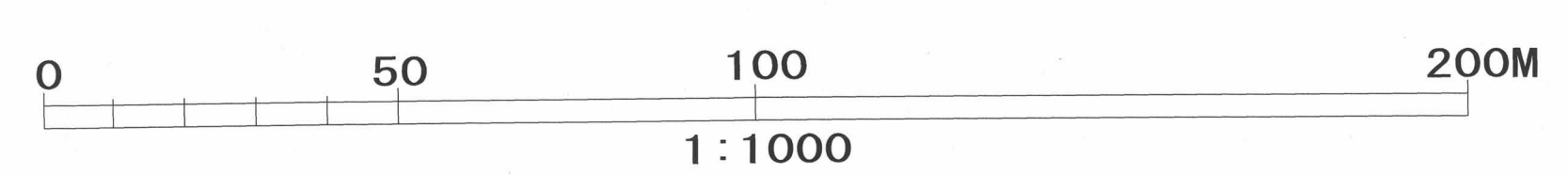
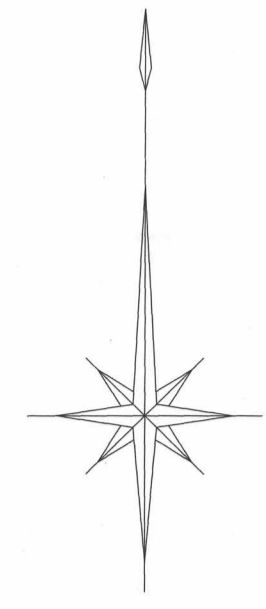
常名台遺跡群確認調査 神明遺跡（第3次調査）

土浦市総合運動公園建設事業に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書 第6集

発行日 2002年3月15日
編集 常名台遺跡調査会
発行 土浦市教育委員会
問い合わせ先 上高津貝塚ふるさと歴史の広場
〒300-0811 茨城県土浦市上高津1843
TEL 0298 (26) 7111
印刷 株式会社 横山印刷

31400.0 31500.0 31600.0 31700.0 31800.0 31900.0 32000.0 32100.0 32200.0 32300.0

11800.0
11700.0
11600.0
11500.0
11400.0
11300.0
11200.0
11100.0



土浦市常名台遺跡群全体図

常名台遺跡調査会 平成十四年三月作成